

豆腐町遺跡

—中播都市計画事業姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ—

(本文編)

2022

姫路市教育委員会

序

姫路市は兵庫県の南西部、播磨国の中心部にあり、古来より交通・文化・経済の要として発展してきました。奈良時代には播磨国府が置かれ、江戸時代には姫路城が築かれるなど、古代から現代に至るまで播磨地域の中心として重要な役割を果たしてきました。姫路の中核にあたる、世界遺産・姫路城を眼前にした姫路駅一帯では、「平成の築城」とも呼ばれる再整備事業が行われ、連続立体交差事業や姫路駅周辺土地区画整理事業などの都市基盤の整備、地域経済や文化の核となる施設の整備が進められてきました。その一環をなす土地区画整理事業は、「播磨の顔づくり」を目標に、JR山陽本線等の高架用地の確保、姫路駅を中心とする南北市街地の一体化を図る交通体系の確保、駅前広場の整備等、“姫路の顔”としてふさわしい街区の形成に取り組んできました。事業地には多くの遺跡があり、開発と文化財保護との両立を計りながら事業を進めて参りました。

本書は、JR姫路駅の構内に所在する豆腐町遺跡の発掘調査報告書です。調査では、奈良時代の工房跡に関連する遺構や遺物が多数発見され、播磨国府の研究に資する重要な成果をあげました。ここに当該成果を報告し、地域の歴史を知る一助としてひろく活用されることを望みます。

最後に事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、兵庫県教育委員会、その他関係者各位に対し厚く御礼申し上げます。

令和4年（2022年）3月31日

姫路市教育委員会

教育長 西田 耕太郎

例 言

1. 本本書は兵庫県姫路市豆腐町・駅前町で実施した豆腐町遺跡第1次から第8次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は姫路駅周辺土地地区画整理事業及び区画整理事業仮換地事業に先立って実施した。
3. 発掘調査は平成14（2002）年1月15日から平成24（2012）年1月31日の期間に、出土品整理作業及び報告書の作成は平成29（2017）年度から令和3（2021）年度にかけて実施した。
4. 発掘調査は姫路駅周辺整備室の依頼を受け、姫路市教育委員会が実施した。
5. 発掘調査および出土品整理作業、発掘調査報告書作成・刊行に係る経費は姫路駅周辺整備室が負担した。
6. 発掘調査報告書の執筆・編集は、姫路市埋蔵文化財センターが行った。附章は古尾谷知浩氏（名古屋大学）、森永速男氏（兵庫県立大学）に玉稿を賜ったほか、姫路市が委託したパリノ・サーヴェイ株式会社と株式会社吉田生物研究所による分析報告書を編集した上で掲載した。
7. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。
8. 818・1273・1274・1325・1495・1676・1696・2296・2541・2924・2926・3002を除く墨書・刻書土器、漆紙文書、木簡は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所写真室の中村一郎氏が撮影した。
9. 発掘調査・出土品整理および報告書作成においては、下記の方々・機関より御協力・御教示を賜った。深く感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所史料研究室・同写真室、姫路市史編集室、兵庫県教育委員会、兵庫県立考古博物館、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター、青木敬、青木哲哉、浅野啓介、市川創、今里幾次（故人）、池田征弘、岡本一秀、小田裕樹、尾野善裕、加藤史郎（故人）、金田明大、工藤茂博、鐵英記、黒坂貴裕、桑田訓也、佐藤隆、篠宮正、神野恵、鈴木敬二、須山貴史、田中義文、多賀茂二、中川渉、長濱誠司、中村一郎、馬場基、菱田哲郎、菱田純子、深江英憲、深澤芳樹、古尾谷知浩、藤田秀臣、本庄聡子、松本正信（故人）、松元美由紀、三角菜緒、水口富夫（故人）、森浩一（故人）、森暢郎、森永速男、山中敏史、山田清朝、山本三郎、山本崇、山本祥隆、吉川真司、渡辺晃宏（五十音順、敬称略）

凡 例

1. 遺構名の表記は、文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』記載の略号を使用した。ただし、略号については調査時の見解のままであるため本来の遺構の分類と異なっているものもある。また、遺構番号は調査区ごとに1番から番号を付したが、調査の進捗に合わせて採番したため順序等は整然としていない。報告書上では、遺構の性格が明らかな場合は溝、建物、井戸等と適宜明示している。遺構番号については調査時に遺構の性格毎に採番しているため、報告書作成時に番号を変更したものはない。報告書作成にあたって、掘立柱建物跡については新たに調査区毎に番号を付したが、構成する柱穴の遺構番号には変更がないため、調査段階との齟齬は生じていない。
2. 発掘調査平面図は日本測地系を世界測地系に変換して使用し、方位は全て座標北である。標高は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。
3. 遺構等を記述する単位は1 m以上については、m表記とし、1 m未満はcm表記とした。
4. 遺物実測図の掲載にあたって、須恵器は断面黒塗りとし、瓦質・黒色土器はグレーとした。漆・墨・煤付着部分は遺物番号の下にその旨を示すとともに網掛けで範囲を示したものもある。
5. 遺物の出土状況を示す図には、遺物番号での掲載を基本とし、遺物実測図を掲載したものは縮尺1/8を基本とした。大型のものは1/12もしくは1/16で掲載したものもあるが、煩雑になるため逐一スケールを示していない。遺物図版編を参照されたい。
6. 本書で使用する奈良時代の遺物名については、奈良文化財研究所の分類に準じたが、対応しないものもあるため、第V章第2節にまとめた。その他の時期の時期については以下の文献を参考にした。

弥生時代：大手前大学史学研究所編 2007『弥生土器集成と編年―播磨編―』
平安～中世：姫路市教育委員会 2018『村東遺跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第56集
2020『豆田遺跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第87集
太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第49集
江戸時代：九州近世陶磁学会事務局 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
乗岡 実 2000『備前焼播鉢の編年について』『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

7. 豆腐町遺跡においてはこれまでに姫路市教育委員会が区画整理に伴う調査を、兵庫県教育委員会がJR山陽本線等連続立体交差事業及び姫路駅周辺地区総合整備事業に伴って本発掘調査を実施している。本稿においてこれらに言及する場合、姫路市教育委員会調査分は市（アラビア数字）次と記載し、兵庫県教育委員会調査分は県（ローマ数字）次とする。兵庫県教育委員会の調査は平成12年度から平成25年度にかけて実施され、報告書が刊行されている。煩雑をさけるため本文中で兵庫県教育委員会の成果に言及する場合は、発刊された報告書名に基づき『豆腐町遺跡Ⅰ』もしくは「豆腐町Ⅰ次」のように記載し、逐一出展を明記しない。

県Ⅰ次：兵庫県教育委員会 2007『豆腐町遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第322冊
県Ⅱ次：兵庫県教育委員会 2011『豆腐町遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第403冊
県Ⅲ次：兵庫県教育委員会 2019『豆腐町遺跡Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第507冊

目 次

本文編

序		
例言		
凡例		
目次		
第Ⅰ章	調査に至る経緯と経過	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	2
第3節	調査の体制	4
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	
第1節	遺跡の立地	5
第2節	歴史的環境	9
第3節	播磨国府に関する既往の調査－『本町遺跡』以後	11
第Ⅲ章	調査の成果	
第1節	調査の概要	18
第2節	西部地区の遺構と遺物	21
第3節	東部地区の遺構と遺物	115
第Ⅳ章	検出遺構のまとめ	
第1節	道路遺構と区画溝	225
第2節	建物跡	226
第3節	井戸跡	229
第Ⅴ章	出土遺物のまとめ	
第1節	出土土器の分類	231
第2節	出土土器の位置づけ	238
第3節	墨書土器	255
第4節	手工業関連遺物	260
第Ⅵ章	総括	
第1節	豆腐町遺跡の動態	263
第2節	豆腐町遺跡の位置づけ	264
附 章		
第1節	豆腐町遺跡内で検出された遺構の被熱に関する磁氣的検討	271
第2節	豆腐町遺跡出土品分析	275
第3節	姫路市豆腐町遺跡出土木製品の樹種調査結果	301
第4節	姫路市豆腐町遺跡出土漆紙文書について	—

図版編

遺物図版	
遺物観察表	
写真図版	

挿図目次

図1	豆腐町遺跡の位置	1	図43	5次1区SE01・SE02・SE03平・断面図	69
図2	姫路駅周辺土地区画整理事業計画地	1	図44	5次1区SE05・SE06平・断面図	70
図3	豆腐町遺跡年次調査範囲	3	図45	5次1区東部遺構平面図、SK03・SK06・SK11・SK14・SK15・SK17断面図	71
図4	姫路平野旧河道図	5	図46	5次1区SK24、SP14・SP18・SP172・SP180平・断面図	74
図5	試掘調査断面柱状図	6	図47	5次1区SK30平・断面図	75
図6	豆腐町遺跡東西方向断面図	8	図48	5次1区第2面平面図	77
図7	周辺の主要遺跡	9	図49	5次1区SK52平・断面図	78
図8	本町遺跡周辺調査地点	12	図50	5次1区2-SK01・2-SK02・2-SK04・2-SK05平・断面図	79
図9	姫路城城下町跡 下層遺構検出地点	13	図51	5次2区土層断面図	80
図10	姫路城城下町跡 主要下層遺構平面図	15	図52	5次2区第1面平面図、SD01、SK03・SK06・SK09・SK10・SK16・SK19断面図	81
図11	播磨国総社周辺検出遺構	16	図53	5次2区第2面平面図、2-SD01、2-SX01・2-SX02・2-SK01断面図、2-SA01平・断面図	84
図12	豆腐町遺跡調査平面図	19・20	図54	5次1区・2区第3面平面図	85
図13	西部地区調査平面図	22	図55	5次3区平・土層断面図	87
図14	1次1区・2区土層断面図	24	図56	5次3区SR01遺物出土分布図	88
図15	1次1区・2区第1面平面図	25	図57	6次2区平面図、土層断面図、SR01、下層SD01、SK01・SK03断面図	90
図16	1次1区SX01、SK01・SK04・SK05・SK06・SK07・SK09・SK10平・断面図	27	図58	6次3区西壁土層断面図	91
図17	1次1区・2区第2面平面図	29	図59	6次3区第1面平面図、SD01・SD02・SD03・SD04、SE01断面図	92
図18	1次2区2-SD01、2-SK01、3-SD02平・断面図	31	図60	6次3区第2面平面図、2-SD03、2-SK04、2-SP03・2-SP18・2-SP17・2-SP24・2-SP27・2-SP33・2-SP39・2-SP43断面図、2-SP18・2-SP41平・断面図	94
図19	1次1区・2区第3面・第4面平面図	32	図61	6次3区2-SD01・2-SD02平・断面図	95
図20	2次3区第1面平面図	34	図62	6次3区平面図、3-SP01・3-SP02・3-SP04・3-SP05・3-SP06・3-SP07・3-SP08、3-SK01断面図	98
図21	2次3区北壁土層断面図、SF01・SF02、SE03、SK15・SK16・SK19平・断面図	35	図63	6次4区東壁土層断面図	99
図22	2次3区第2面平面図	37	図64	6次4区第1面平面図、SE01、SK08・SK10・SK19断面図、SK07平・断面図	100
図23	2次3区第3面平面図	39	図65	6次4区第1面SB01、SA01、SA02、SA03、第2面2-SB01平・断面図	101
図24	3次1区・2区平面図、北壁土層断面図	41	図66	6次4区第2面平面図、2-SD05・2-SD06・2-SD07、2-SK02・2-SK04・2-SK05、2-SP13・2-SP14断面図、2-SP15平面図	103
図25	3次1区SE01、下層SX01平・断面図	42	図67	6次4区2-SD01・2-SD02平・断面図	105
図26	3次1区SX01・SX09・SX13断面図	43	図68	6次4区2-SX01平・断面図、三彩小壺周辺遺物出土状況	109
図27	3次3区第1面平面図、西壁土層断面図	45	図69	6次4区第3面平面図、2-SD04・3-SD01、3-SK01・3-SK02、3-SP01・3-SP03・3-SP07・3-SP09断面図	110
図28	3次3区第2面平面図、2-SA01、2-SK15、2-SK46、2-SK48平・断面図	47	図70	8次1区平面図、北壁土層断面図	113
図29	3次3区第3面平面図、3-SD01・3-SD02・3-SD03・3-SD04断面図、3-SB01平・断面図	49	図71	8次1区SR01遺物出土分布図、8次1区SR01、下層SD01・下層SD02、SK02、ピット断面	114
図30	4次平面図、北壁土層断面図	51			
図31	4次煉瓦遺構平・見通し図	52			
図32	4次北部遺構平面図、SX01、SK03・SK04・SK09・SK11・SK22断面図	55			
図33	4次SE01平・断面図	56			
図34	4次SE01遺物出土状況図	57			
図35	4次SE02平・断面図	58			
図36	4次SE02遺物出土状況図	59			
図37	4次SK52平・断面図	61			
図38	4次SR01、SK90、下層SD01・下層SD02・下層SD03平・断面図	62			
図39	4次SR01遺物出土状況図	63			
図40	4次SD03・SD04・SD05・SD06平・断面図	65			
図41	5次1区土層断面図	66			
図42	5次1区第1面平面図	67			

図72	東部地区平面図	116	図109	6次1区整地層断面図	177
図73	5次4区・5区平面図、北壁土層断面図	117	図110	6次1区墨書土器出土分布図	179
図74	5次4区SE01平・断面図、遺物出土状況図	119	図111	6次5区平面図、土層断面図	181
図75	5次4区SE02平・断面図、遺物出土状況図	121	図112	6次5区東部北壁土層断面図、SK01・SK04・SK05・SK18・SK20・SK21・SK37・SK38断面図	182
図76	5次4区SK01・SK03・SK07・SK08・SK14・SK16平・断面図	123	図113	7次1区・2区・3区平面図	184
図77	5次4区SK23・SK24・SK24下集石1・集石3・SK28・SK31平・断面図	124	図114	7次1区平面図、土層断面図	185
図78	5次4区SK41・SK43・SK44・SK59・SK61・SK67・SK75、SB01平・断面図	125	図115	7次1区SB16・SA01平・断面図	187
図79	5次4区SK62・SK63平・断面図	127	図116	7次1区SB17平・断面図	188
図80	5次4区SP99、SK100、SX01平・断面図	129	図117	7次1区SB18平・断面図	189
図81	5次5区平面図、西壁土層断面図、SK01・SK02・SK03・SK07断面図、SE01平・断面図	131	図118	7次1区・8次2区SB19平・断面図	190
図82	5次5区SE01遺物出土状況図	132	図119	7次1区SA02、SP18・SP19・SP217・SP239、SK01・SK07・SK08・SK269平・断面図	191
図83	6次1区平面図、土層断面図	135・136	図120	7次1区SK10平・断面図	193
図84	6次1区SB01平・断面図	137	図121	7次1区SK11平・断面図	194
図85	6次1区SB02平・断面図	138	図122	7次1区SD01・SD02・SD07・SR02平・断面図、SR01断面図	196
図86	6次1区SB03平・断面図	139	図123	7次1区SD05平・断面図	197
図87	6次1区SB04平・断面図	141	図124	7次2区平面図、北壁土層断面図	199
図88	6次1区SB05平・断面図	142	図125	7次2区SE01平・断面図	200
図89	6次1区SB06平・断面図	143	図126	7次2区SD01、SX02、SX03平・断面図、SX03遺物出土状況図	201
図90	6次1区SB07平・断面図	145	図127	7次3区平・断面図	203
図91	6次1区SB08平・断面図、柱根実測図	146	図128	7次3区SB11平・断面図	204
図92	6次1区SB09平・断面図	147	図129	7次3区SB12平・断面図	205
図93	6次1区SB10平・断面図	148	図130	7次3区SB13平・断面図	206
図94	6次1区SA01・SA02平・断面図	149	図131	7次1区・3区SB14平・断面図	207
図95	6次1区SE01平・断面図	151	図132	7次1区・3区SB15平・断面図	209
図96	6次1区SE01遺物出土状況図	152	図133	7次3区SA01、SE01、SP47・SP48・SP108平・断面図、SD03・SD06・SD07断面図	210
図97	6次1区SE02・SE04平・断面図	154	図134	7次3区SD02平・断面図	212
図98	6次1区SE03平・断面図	155	図135	7次3区SD02北半遺物出土状況図	213
図99	6次1区SR01平・断面図	157	図136	7次3区SD02南半遺物出土状況図	214
図100	6次1区道路遺構平・断面図	159	図137	7次3区道路遺構・橋脚平面図、側溝断面図	215
図101	6次1区SD03・SD04平面図、杭断面図、SD06断面図	160	図138	7次3区橋脚平・断面図	217
図102	6次1区SD75・SD78・SD81・SD171・SD178・SD187・SD188・SD189・SD193・SD194・SD249・SD250・SD260平・断面図	162	図139	7次1区・3区墨書土器出土分布図	218
図103	6次1区SK07・SK08・SK09平・断面図、SK04・SK26・SK36・SK48断面図	165	図140	8次2区平面図、北壁土層断面図	220
図104	6次1区SK29・SK50・SK76・SK77・SK79・SK80・SK90平・断面図	167	図141	8次2区SB20、SK02平・断面図、SK01、SD01断面図	221
図105	6次1区SK176・SK179・SK191・SK200・SK203・SK208・SK210平・断面図	169	図142	8次3区平面図、北壁土層断面図	223
図106	6次1区SK240・SK243・SK244・SK251・SK253・SK285・SK288・SK302平・断面図	171	図143	8次3区SD04遺物出土状況図、SD04、SD04内SK01・SK02・SK03断面図、SP01・SP02・SP11平・断面図	224
図107	6次1区SP181・SP202・SP235・SP236・SP241・SP242・SP269・SP271・SP290・SP297・SP308・SP333平・断面図	173	図144	豆腐町遺跡東部地区主要遺構平面図	227
図108	6次1区整地層平面図、礫集中部平・断面図	176	図145	豆腐町遺跡出土土師器分類図	233
			図146	豆腐町遺跡出土須恵器分類図、三採小壺、製塩土器、軒瓦	235
			図147	5次5区SE01出土遺物	239
			図148	7次3区SD02出土土師器	240
			図149	7次3区SD02出土須恵器	241

図150	6次3区・4区2-SD01出土遺物	244
図151	6次3区・4区2-SD02出土遺物	245
図152	6次4区2-SX01出土遺物	246
図153	供膳具分類図	251
図154	播磨地域における供膳具変遷図	253
図155	墨書時「HT」「IT」筆順	258
図156	豆腐町遺跡東部地区文字資料出土分布図	259
図157	豆腐町遺跡東部地区手工業関連遺物出土分布図	261
図158	アンデスにおける糸織り	262
図159	豆腐町遺跡遺構変遷概要図	265
図160	採取した土壌試料の磁気的性質 帯磁率と残留磁化強度	273
図161	採取した焼土試料1～5の段階交流消磁結果	274
図162	採取した土壌試料6・7・15・23の段階交流消磁結果	274
図163	木材顕微鏡写真	276
図164	暦年校正結果	276
図165	No.1 (2363) の蛍光X線定性スペクトル	283
図166	No.1 (2363) のSEM-EDS分析結果	284
図167	No.2 (2767) のX線解析図	285
図168	No.3 (502) のX線解析図	285
図169	炭化材顕微鏡写真(1)	290
図170	炭化材顕微鏡写真(2)	291
図171	墨痕電子顕微鏡観察(1)	292
図172	墨痕電子顕微鏡観察(2)	293
図173	漆付着土器(1)	294
図174	漆付着土器(2)	295
図175	漆付着布	296
図176	赤色顔料・墨痕試料採取位置	297
図177	赤色顔料顕微鏡写真	298
図178	胎土薄片	299
図179	種実遺体	300
図180	樹種同定(1)	303
図181	樹種同定(2)	304
図182	樹種同定(3)	305
図183	樹種同定(4)	306
図184	樹種同定(5)	307

挿表目次

表1	豆腐町遺跡調査一覧	2
表2	6次3区2-SD01出土遺物数量表	93
表3	6次3区2-SD02出土遺物数量表	96
表4	6次4区2-SD01出土遺物数量表	104
表5	6次4区2-SD02出土遺物数量表	106
表6	6次4区2-SX01出土遺物数量表	108
表7	5次5区SE01出土遺物数量表	133
表8	7次3区SD02出土遺物数量表	211
表9	豆腐町遺跡掘立柱建物跡一覧	226
表10	豆腐町遺跡井戸跡一覧	229
表11	須恵器杯B法量比較	248
表12	土師器杯A法量比較	249
表13	播磨地域の土器様相	252
表14	豆腐町遺跡出土墨書・刻書土器一覧	255
表15	豆腐町遺跡出土墨書・刻書土器総括表	258
表16	豆腐町遺跡出土漆付着土器数量表	260
表17	採取した土壌試料の帯磁率及び残留磁化測定結果のまとめ	273
表18	樹種同定・放射性炭素年代測定結果	276
表19	炭化材同定結果	277
表20	赤色顔料付着土器の分析項目	281
表21	X線回析測定条件	281
表22	種実同定結果	287
表23	豆腐町遺跡出土木製品同定表	301

(図版編)

遺物図版目次

遺物図版 1	1次1区SK01 (1~21)	遺物図版47	5次3区SR01 (836~845)
遺物図版 2	1次1区SK01 (22~43)	遺物図版48	6次2区SR01他 (846~866)
遺物図版 3	1次1区SK01 (44~56)	遺物図版49	6次3区SE01他 (867~880)
遺物図版 4	1次1区SK01 (57~65)	遺物図版50	6次3区2-SP24他 (881~891)
遺物図版 5	1次1区SK01 (66~73)	遺物図版51	6次3区2-SD01 (892~943)
遺物図版 6	1次1区SK03他 (74~95)	遺物図版52	6次3区2-SD01 (944~959)
遺物図版 7	1次1区SK08 (96~111)	遺物図版53	6次3区2-SD01 (960~967)
遺物図版 8	1次1区SK09他 (112~138)	遺物図版54	6次3区2-SD02 (968~992)
遺物図版 9	1次2区SP05他 (139~163)	遺物図版55	6次3区2-SD02 (993~1009)
遺物図版10	1次2区SK17 (164~186)	遺物図版56	6次4区SE01他 (1011~1030)
遺物図版11	1次2区SK38 (187~198)	遺物図版57	6次4区2-SB01他 (1031~1049)
遺物図版12	1次2区SK38 (199~213)	遺物図版58	6次4区2-SD01 (1051~1079)
遺物図版13	1次2区SK23他 (214~249)	遺物図版59	6次4区2-SD02 (1080~1094)
遺物図版14	2次3区SE01他 (250~270)	遺物図版60	6次4区2-SD02 (1095~1121)
遺物図版15	2次3区SF01他 (271~286)	遺物図版61	6次4区2-SD02 (1122~1139)
遺物図版16	2次3区SK05他 (287~301)	遺物図版62	6次4区2-SX01 (1140~1183)
遺物図版17	2次3区SP12他 (302~314)	遺物図版63	6次4区2-SX01 (1184~1220)
遺物図版18	2次3区2-SP01他 (315~337)	遺物図版64	6次4区2-SX01 (1221~1253)
遺物図版19	3次1区SX01他 (338~359)	遺物図版65	6次4区遺構に伴わない遺物 (1254~1268)
遺物図版20	3次3区SK01他 (360~382)	遺物図版66	8次1区SR01 (1269~1291)
遺物図版21	3次3区2-SK48他 (383~416)	遺物図版67	8次1区SR01 (1292~1314)
遺物図版22	4次煉瓦構造物他 (417~425)	遺物図版68	8次1区SD02 (1315~1325)
遺物図版23	4次SK03 (426~441)	遺物図版69	5次4区SE01 (1326~1340)
遺物図版24	4次SK04他 (442~460)	遺物図版70	5次4区SE01 (1341~1350)
遺物図版25	4次SE01 (461~483)	遺物図版71	5次4区SE02他 (1351~1363)
遺物図版26	4次SE01 (484~495)	遺物図版72	5次4区SK01他 (1364~1384)
遺物図版27	4次SE02 (496~520)	遺物図版73	5次4区SK24他 (1385~1403)
遺物図版28	4次SE02 (521~535)	遺物図版74	5次4区SK62 (1404~1429)
遺物図版29	4次SK52 (536~561)	遺物図版75	5次4区SK63 (1430~1454)
遺物図版30	4次SK52 (562~564)	遺物図版76	5次4区SK75 (1455~1474)
遺物図版31	4次SR01 (565~588)	遺物図版77	5次5区SE01 (1475~1493)
遺物図版32	4次下層SD01 (589~606)	遺物図版78	5次5区SE01 (1494~1507)
遺物図版33	4次下層SD01 (607~623)	遺物図版79	5次5区SE01 (1508~1518)
遺物図版34	5次1区SK06 (624~639)	遺物図版80	5次5区SE01 (1519~1533)
遺物図版35	5次1区SK14 (640~650)	遺物図版81	5次5区SE01 (1534~1543)
遺物図版36	5次1区SE03 (651~662)	遺物図版82	5次5区SE01 (1544)
遺物図版37	5次1区SE05 (663~681)	遺物図版83	6次1区SB03他 (1545~1569)
遺物図版38	5次1区SK24他 (682~705)	遺物図版84	6次1区SB07他 (1570~1595)
遺物図版39	5次1区SK30 (706~715)	遺物図版85	6次1区SE01 (1596~1622)
遺物図版40	5次1区SE06他 (716~739)	遺物図版86	6次1区SE01 (1623~1637)
遺物図版41	5次1区SK52 (740~762)	遺物図版87	6次1区SE02 (1638~1663)
遺物図版42	5次1区2-SK01 (763~772)	遺物図版88	6次1区SE03 (1664~1681)
遺物図版43	5次2区SD01他 (773~789)	遺物図版89	6次1区SE04 (1682~1697)
遺物図版44	5次2区SP100他 (790~806)	遺物図版90	6次1区SR01 (1698~1711)
遺物図版45	5次3区SK01 (807~816)	遺物図版91	6次1区SD03 (1712~1739)
遺物図版46	5次3区SK02 (817~835)	遺物図版92	6次1区SD04 (1740~1766)
		遺物図版93	6次1区SD04 (1767~1807)
		遺物図版94	6次1区SD04 (1808~1822)
		遺物図版95	6次1区SD04 (1823~1836)
		遺物図版96	6次1区SD04他 (1837~1861)

遺物図版97	6次1区SD75他 (1862~1883)	遺物図版147	7次3区SD02 (2899・2900)
遺物図版98	6次1区SD81 (1884~1898)	遺物図版148	7次3区SD02 (2901・2902)
遺物図版99	6次1区SD171他 (1899~1917)	遺物図版149	7次3区SD02 (2903~2915)
遺物図版100	6次1区SD188他 (1918~1945)	遺物図版150	7次3区遺構に伴わない遺物 (2916~2942)
遺物図版101	6次1区SK04他 (1946~1973)	遺物図版151	7次3区遺構に伴わない遺物 (2943~2954)
遺物図版102	6次1区SK76他 (1974~2000)	遺物図版152	8次2区SK01他 (2957~2977)
遺物図版103	6次1区SK90他 (2001~2026)	遺物図版153	8次3区SP01他 (2978~2990)
遺物図版104	6次1区SK208他 (2027~2046)	遺物図版154	8次3区SD04他 (2991~3008)
遺物図版105	6次1区SK244他 (2047~2065)		
遺物図版106	6次1区SP65他 (2066~2087)		
遺物図版107	6次1区SP232他 (2088~2115)		
遺物図版108	6次1区SP272他 (2116~2145)		
遺物図版109	6次1区整地層 (2146~2173)		
遺物図版110	6次1区整地層 (2174~2191)		
遺物図版111	6次1区整地層 (2192)		
遺物図版112	6次1区整地層 (2193~2208)		
遺物図版113	6次1区SE04北整地層 (2209~2223)		
遺物図版114	6次1区炭層1他 (2224~2253)		
遺物図版115	6次1区炭層4他 (2254~2274)		
遺物図版116	6次1区遺構に伴わない遺物 (2275~2295)		
遺物図版117	6次1区遺構に伴わない遺物 (2296~2328)		
遺物図版118	6次1区遺構に伴わない遺物 (2329~2349)		
遺物図版119	6次1区遺構に伴わない遺物 (2350~2376)		
遺物図版120	6次1区遺構に伴わない遺物 (2377~2403)		
遺物図版121	6次1区遺構に伴わない遺物 (2404~2414)		
遺物図版122	6次1区遺構に伴わない遺物 (2415~2432)		
遺物図版123	6次5区SK38他 (2435~2452)		
遺物図版124	7次1区SB16他 (2453~2464)		
遺物図版125	7次1区SD05 (2465~2492)		
遺物図版126	7次1区SD05 (2493~2510)		
遺物図版127	7次1区SK01他 (2511~2532)		
遺物図版128	7次1区SK11 (2533~2558)		
遺物図版129	7次1区遺構に伴わない遺物 (2559~2573)		
遺物図版130	7次1区遺構に伴わない遺物 (2574~2584)		
遺物図版131	7次2区SE01 (2585~2597)		
遺物図版132	7次2区SP16他 (2598~2617)		
遺物図版133	7次2区SX03 (2618~2641)		
遺物図版134	7次2区SX03 (2642~2665)		
遺物図版135	7次2区遺構に伴わない遺物 (2666~2697)		
遺物図版136	7次3区SB13他 (2698~2712)		
遺物図版137	7次3区SD02 (2713~2729)		
遺物図版138	7次3区SD02 (2730~2750)		
遺物図版139	7次3区SD02 (2751~2779)		
遺物図版140	7次3区SD02 (2780~2804)		
遺物図版141	7次3区SD02 (2805~2826)		
遺物図版142	7次3区SD02 (2827~2837)		
遺物図版143	7次3区SD02 (2838~2857)		
遺物図版144	7次3区SD02 (2858~2872)		
遺物図版145	7次3区SD02 (2873~2885)		
遺物図版146	7次3区SD02 (2886~2898)		

写真図版目次

写真図版 1

1. 調査地より姫路城を望む
2. 姫路城北方より調査地を望む

写真図版 2

1. 姫路市街地遠景（北東から）
2. 姫路駅周辺遠景（北から）

写真図版 3

1. 姫路駅遠景（東から）
2. 姫路駅近景（西から）

写真図版 4

1. 姫路駅近景（上から）平成20年撮影
2. 姫路駅近景（東から）平成21年撮影

写真図版 5

1. 調査地周辺（南から）平成21年撮影
2. 調査地周辺（上から）平成21年撮影

写真図版 6 1次1区・2区

1. 1区全景（西から）
2. 1区SX01護岸石組み（西から）
3. 1区SX01護岸石組み（北から）
4. 1区SK06・SK07（北から）
5. 1区SX01護岸石組み下胴木（西から）
6. 2区北壁（南から）
7. 2区北端第1面（南から）

写真図版 7 1次2区

1. 第1面全景（北から）
2. 第1面北部遺構群（北から）
3. 第2面全景（北から）
4. 調査区北端第2面（南から）
5. 基礎間第2面（北から）

写真図版 8 1次2区

1. 第3面全景（北から）
2. 調査区北部基礎間第3面（北から）
3. 第4面全景（北から）
4. 調査区南端第1面（西から）
5. 調査区南端第2面（西から）
6. 調査区南端第3面（西から）
7. 調査区南端第4面（西から）

写真図版 9 2次3区

1. 調査区北部第1面全景（東から）
2. 調査区北部北壁（南から）

写真図版10 2次3区

1. SE01（北から）
2. SE03（南から）
3. SE04（第4面 北から）
4. SK01（北から）
5. SF01・SF02（北から）
6. SF03（北から）
7. SK09（北から）

8. 調査区北端第2面（東から）

写真図版11 2次3区

1. 調査区南部第1面全景（北から）
2. 調査区北部南端第2面（東から）
3. 調査区南部第2面（北から）
4. 調査区南部第3面（北から）
5. 調査区北部第3面（東から）

写真図版12 3次1区・2区

1. 調査区近景（北から）
2. 調査区全景（北から）

写真図版13 3次1区・2区

1. 1区・2区全景（上から）
2. 2区全景（南から）
3. 2区砂礫上面全景（南から）
4. 1区全景（東から）
5. 1区全景（西から）

写真図版14 3次1区

1. SE01（南から）
2. SX13断面（東から）
3. SX09（西から）
4. SX09（東から）
5. 下層SX01（西から）
6. 下層SX01断割り（西から）

写真図版15 3次3区

1. 第2面全景（北から）
2. 第3面全景（北から）
3. 第3面北部遺構（北から）
4. 調査区北部西壁（東から）
5. 2-SK46・2-SK48（北から）
6. 2-SK46・2-SK48（東から）
7. 4-SD04（第4面 北から）

写真図版16 4次

1. 調査区全景（西から）

写真図版17 4次

1. 調査区オルソ
2. 調査区全景（東から）

写真図版18 4次

1. 上層煉瓦遺構（東から）
2. 上層煉瓦遺構（南から）
3. 煉瓦遺構A上面（西から）
4. 煉瓦遺構A細部（北から）
5. 煉瓦遺構A側面（西から）

写真図版19 4次

1. 調査区北壁（南東から）
2. 調査区東壁（西から）
3. 調査区南壁（北東から）
4. SK03（東から）
5. SD06上面間知石（南から）
6. SK09（東から）
7. SK11（南から）

写真図版20 4次

1. SE01遺物出土状況(北から)
2. SE01三彩小壺出土状況(南から)
3. SE01最下層遺物出土状況(北から)
4. SE01井側(東から)
5. SE01縦板残存状況(南から)
6. SE01井桁北東隅柄穴(南から)
7. SE01完掘(西から)

写真図版21 4次

1. SE02上層遺物出土状況(東から)
2. SE02完掘(西から)
3. SE02断面(北から)
4. SE02上層遺物出土状況細部(東から)
5. SE02上層遺物出土状況細部(北から)
6. SE02上層遺物出土状況細部(東から)
7. SE02南東隅支柱木質(北西から)

写真図版22 4次

1. SK52遺物出土状況(西から)
2. SK52遺物出土状況(東から)
3. SK52土層断面(南東から)
4. SK52遺物出土状況細部(西から)
5. SK52完掘(東から)
6. SK52遺物出土状況細部(西から)

写真図版23 4次

1. SR01 B断面(南西から)
2. SR01遺物出土状況(北西から)
3. SR01下層SD01・SD02(南から)
4. 下層SD01 A断面(南から)
5. 下層SD02断面(南から)

写真図版24 4次

1. SR01、下層SD01・SD02・SD03完掘(南から)
2. 下層SD01遺物出土状況(北から)
3. SK90(西から)

写真図版25 4次

1. SX01(北から)
2. SX01断面(西から)
3. SD03・SD04・SD05(南から)
4. SD03・SD04・SD05 A断面(南から)
5. SD06南壁(北から)
6. SD06(北から)

写真図版26 5次1区・2区

1. 調査区全景(北から)
2. 第1面全景(上から)

写真図版27 5次1区・2区

1. 第2面全景(上から)
2. 第3面全景(上から)

写真図版28 5次1区

1. 調査区西部第1面全景(南から)
2. 調査区西部第1面全景(北から)
3. 調査区東部全景(西から)

4. 調査区東部全景(東から)

5. 調査区東部完掘(北から)

写真図版29 5次1区

1. SE01(南から)
2. SE02(西から)
3. SE03(南から)
4. SE05(東から)
5. SE06(東から)
6. SE05断面(南から)
7. SE03断面(北から)
8. SE04断面(南から)

写真図版30 5次1区

1. SK36断面(南から)
2. SK19断面(南から)
3. SK14(北から)
4. 調査区東部南壁(北西から)
5. 調査区東部(北から)
6. SK03石組み(南から)
7. SK06内石組み(西から)
8. 調査区東部北壁(南西から)

写真図版31 5次1区

1. SK24遺物出土状況(東から)
2. SK24遺物出土状況(北から)
3. SK30断面(南から)
4. SK30上面(西から)
5. SK30上面(東から)
6. SK30下層(西から)

写真図版32 5次1区

1. SK52(東から)
2. SK52東部遺物出土状況(南から)
3. SK06遺物出土状況(南から)
4. SP118(北から)
5. SP172(南から)
6. SP180(南東から)
7. SP14(南から)

写真図版33 5次1区

1. 第2面全景(北から)
2. 第2面全景(南から)
3. 2-SK01(東から)
4. 2-SK02(北から)
5. 2-SK05(北から)

写真図版34 5次1区

1. 第3面全景(南から)
2. 第3面全景(北から)
3. 北壁(南から)

写真図版35 5次2区

1. 第1面全景(南から)
2. 第1面全景(北から)
3. 第2面全景(南から)
4. 第2面全景(北から)

写真図版36 5次2区

1. 2-SA01 (北西から)
2. 調査区東壁 (南西から)
3. 第3面全景 (南から)
4. 第3面全景 (北から)

写真図版37 5次3区

1. 調査区全景 (上から)
2. 調査区全景 (北から)
3. 下水道部分先行 (西から)
4. 全景 (西から)

写真図版38 6次2区

1. 調査区全景 (東から)
2. 調査区全景 (南から)
3. 調査区東壁 (南西から)
4. SK01断面 (南から)
5. SR01・下層SD01 (南から)

写真図版39 6次3区・4区

1. 調査区全景 (西から)
2. 第1面全景 (上から)

写真図版40 6次3区・4区

1. 第2面全景 (上から)
2. 第3面全景 (上から)

写真図版41 6次3区

1. 第1面全景 (南から)
2. 第1面全景 (北から)
3. SE01 (東から)
4. SD01・SD02 (東から)
5. SD02断面 (西から)
6. SD02軒丸瓦 (1010) 出土状況

写真図版42 6次3区

1. 調査区から姫路城を望む (南から)
2. 第2面全景 (南から)
3. 2-SP18 (西から)
4. 2-SP41 (西から)
5. 2-SD02断面 (西から)
6. 2-SD01断面 (西から)

写真図版43 6次3区

1. 2-SD01・2-SD02 (東から)
2. 2-SD01・2-SD02完掘 (東から)
3. 2-SD01遺物出土状況 (西から)
4. 2-SD02遺物出土状況 (西から)

写真図版44 6次3区

1. 2-SD01東端遺物出土状況 (西から)
2. 2-SD01東端遺物出土状況 (北から)
3. 2-SD02西端遺物出土状況 (南から)
4. 第3面全景 (北から)
5. 調査区西壁 (南東から)

写真図版45 6次4区

1. 調査区全景 (西から)
2. 第1面全景 (南から)

3. 第1面全景 (北から)

写真図版46 6次4区

1. SD01・SD02 (西から)
2. SB01北端柱列根石 (西から)
3. SE01 (南から)
4. 第1面出土軒丸瓦 (上:1267、下:1268)
5. SK07 (東から)
6. SK19断面 (南東から)

写真図版47 6次4区

1. 第2面全景 (南から)
2. 第2面全景 (北から)
3. 調査区東壁 (北西から)

写真図版48 6次4区

1. 2-SD01・2-SD02 (西から)
2. 2-SD02断面 (東から)
3. 2-SD01断面 (東から)
4. 2-SD02遺物出土状況 (西から)
5. 2-SD02遺物出土状況 (東から)

写真図版49 6次4区

1. 2-SX01 (南西から)
2. 2-SX01三彩小壺出土状況 (南から)
3. 2-SX01遺物出土状況 (西から)
4. 2-SX01遺物出土状況 (東から)

写真図版50 6次4区

1. 2-SX01遺物出土状況 (北から)
2. 2-SX01遺物出土状況 (西から)
3. 2-SP15遺物出土状況 (北から)
4. 第3面全景 (南から)
5. 第3面全景 (北から)

写真図版51 8次1区

1. 調査区全景 (西から)
2. 調査区オルソ

写真図版52 8次1区

1. SK02断面 (東から)
2. SR01断面 (北東から)
3. SR01全景 (南西から)
4. SR01弥生土器出土状況 (西から)
5. 北壁断割り (南西から)
6. 北壁断割り (南西から)

写真図版53 8次1区

1. 南東部全景 (西から)
2. 北東部全景 (西から)
3. 南東部全景 (西から)
4. SR01北壁 (南から)

写真図版54 5次4区

1. 調査区全景 (東から)
2. 調査区全景 (上から)

写真図版55 5次4区

1. 調査区全景 (西から)

写真図版56 5次4区

1. SE01 (南から)
2. SE01井側 (南から)
3. SE01机天板出土状況 (南から)
4. SE01遺物出土状況 (南から)
5. SE01遺物出土状況 (南から)

写真図版57 5次4区

1. SE01遺物出土状況 (南から)
2. SE01和同開珎出土状況 (南から)
3. SE01万年通宝出土状況 (南から)
4. SE02 (東から)

写真図版58 5次4区

1. SE02断割り (東から)
2. SE02遺物出土状況 (東から)
3. SE02下部曲物検出状況 (東から)
4. SE02遺物出土状況 (東から)
5. SE02遺物出土状況 (東から)

写真図版59 5次4区

1. SB01 (北から)
2. SB01-SP81 (西から)
3. SB01-SP80 (南から)
4. SP84 (南から)
5. SP99 (南から)

写真図版60 5次4区

1. SK62炭化物・焼土層 (西から)
2. SK62炭化物・焼土層 (東から)
3. SK62断割り (西から)
4. SK62下層炭化物層 (西から)
5. SK62下層炭化物層断割り (南から)

写真図版61 5次4区

1. SK62完掘 (西から)
2. SK63炭化物層 (西から)
3. SK63完掘 (西から)
4. SK62・SK63 (北から)
5. SK62南遺構群 (北から)
6. SK63断面 (西から)

写真図版62 5次4区

1. SK01・SK03断面 (南から)
2. SK24下層集石 (南から)
3. SK59周辺土坑群 (南から)
4. SK75 (南から)
5. SX01全景 (東から)
6. SX01護岸 (南東から)

写真図版63 5次5区

1. 調査区全景 (東から)
2. SK03断面 (北から)
3. SE01上面検出状況 (南から)
4. 調査区全景 (南から)

写真図版64 5次5区

1. SE01断面 (南から)

2. SE01遺物出土状況 (南から)
3. SE01遺物出土状況 (上から)
4. SE01遺物出土状況 (南から)
5. SE01最下層 (1515) 出土状況 (南から)

写真図版65 6次1区

1. 調査区オルソ

写真図版66 6次1区

1. 調査区東部全景 (東から)
2. 調査区東部全景 (南から)

写真図版67 6次1区

1. 調査区東部全景 (東から)
2. 調査区南東部全景 (東から)
3. 調査区北東部全景 (東から)

写真図版68 6次1区

1. 調査区北東部全景 (西から)
2. 調査区南東部全景 (西から)
3. 調査区北壁 (南東から)
4. 調査区東壁 (西から)

写真図版69 6次1区

1. SE01検出状況 (南から)
2. SE01全景 (南から)
3. SE01遺物出土状況 (上から)
4. SE01遺物出土状況 (上から)
5. SE01斎串出土状況
6. SE01斎串出土状況

写真図版70 6次1区

1. SE01断割り (南から)
2. SE01井側外面 (南から)
3. SE01井側内 (南から)
4. SE01井側下段細部 (南から)
5. SE01井側下部状況 (南東から)

写真図版71 6次1区

1. SD02 (西から)
2. SD02遺物出土状況 (北から)
3. SD02勾玉出土状況 (北から)
4. SK09 (西から)
5. SB01 (南から)

写真図版72 6次1区

1. 調査区西部全景 (西から)
2. 調査区西部全景 (東から)

写真図版73 6次1区

1. 調査区西部全景 (西から)
2. 調査区西部 (北から)

写真図版74 6次1区

1. 調査区南西部全景 (東から)
2. 調査区北西部全景 (東から)
3. 建物群 (西から)

写真図版75 6次1区

1. SR01上部整地層 (北西から)
2. 整地層 B断面 (北西から)

3. 整地層 C断面 (南西から)
4. 整地層下炭層検出状況 (南東から)
5. 整地層 C-D断面交差部 (南から)
6. 炭層3部分 (南から)

写真図版76 6次1区

1. 整地層 A断面 (南西から)
2. 整地層内礫 (南から)
3. 整地層内礫 (西から)
4. 整地層 (SK177) 遺物出土状況 (北から)
5. 整地層 (SK177) 遺物出土状況 (北から)
6. 整地層 (SK177) 遺物出土状況 (北東から)
7. 整地層遺物2432出土状況 (南から)

写真図版77 6次1区

1. 調査区北壁 (南から)
2. SR01 A断面 (南西から)
3. SR01 B断面 (南西から)

写真図版78 6次1区

1. 道路遺構 (西から)

写真図版79 6次1区

1. 道路遺構 (西から)
2. 道路遺構と建物群 (南西から)

写真図版80 6次1区

1. SD02・SD03 (東から)
2. SD02底面 (東から)
3. SD03 (西から)
4. SD03 K断面 (東から)
5. SD03内木材出土状況 (北西から)
6. SD04 (西から)

写真図版81 6次1区

1. 調査区西壁道路遺構断面 (東から)
2. SD04 H断面 (東から)
3. SD04 E断面 (東から)
4. SD04 F断面 (東から)
5. SD04遺物出土状況 (北から)
6. SD04遺物出土状況 (東から)

写真図版82 6次1区

1. SB02 (南から)
2. SA01 (南から)
3. SB03 (北から)
4. SB06 (北から)
5. SB07 (北から)
6. SB09 (南から)

写真図版83 6次1区

1. SB08 (西から)
2. SB08 (南から)
3. SB08完掘 (南から)
4. SB08-SP274 (南から)
5. SB08-SP280 (南から)

写真図版84 6次1区

1. SB08-SP279 (南から)

2. SB08-SP279 (西から)
3. SB08-SP279下部状況 (北東から)
4. SB08-SP282 (南から)
5. SB08-SP282礎板 (南から)
6. SB08-SP279礎板 (南から)

写真図版85 6次1区

1. SB04 (南から)
2. SB04・SB05 (東から)

写真図版86 6次1区

1. SB04 (北から)
2. SB04-SP233・SP236 (南から)
3. SB04西端柱通り (南から)

写真図版87 6次1区

1. SB04-SP230 (東から)
2. SB04-SP230 (南から)
3. SB04-SP230 (南から)
4. SB04-SP229 (南から)
5. SB04-SP267 (南から)
6. SB04-SP226 (南から)
7. SB07-SP88遺物出土状況 (南から)

写真図版88 6次1区

1. SB05 (北から)
2. SB05東端柱通り (南から)
3. SB05-SP218礎板 (西から)
4. SB05-SP215礎板 (北から)
5. SB05-SP271礎板 (北から)
6. SB05-SP271礎板下 (南から)

写真図版89 6次1区

1. SE02断面 (南から)
2. SE03断面 (西から)
3. SE03遺物出土状況 (北から)
4. SE03曲物 (北西から)
5. SE04断面 (南から)
6. SE04遺物出土状況 (南から)
7. SE04完掘 (南から)

写真図版90 6次1区

1. SD06 (北から)
2. SD81遺物出土状況 (北から)
3. SD78 (北から)
4. SK77断面 (北東から)
5. SK77 (北から)
6. SK50 (北から)
7. SK50断面 (北から)

写真図版91 6次1区

1. 調査区西壁 (南東から)
2. SK208 (北から)
3. SK76漆付着布出土状況 (南から)
4. SP297 (西から)
5. SP202 (南から)
6. SP333 (南から)

写真図版92 6次5区

1. 調査区西部全景（東から）
2. 調査区東部全景（北東から）
3. 調査区オルソ

写真図版93 6次5区

1. 調査区西部北側全景（南西から）
2. 調査区西部全景（北から）
3. 調査区西部北側全景（北から）
4. SK37・SK18・SK20 a断面（北西から）
5. SK38 b断面（南から）

写真図版94 6次5区

1. 西部南全景（南西から）
2. SK03・SK05 C断面（西から）
3. 東部全景（北東から）
4. SK42（南東から）
5. SK42下層 E-F断面（南西から）

写真図版95 7次1区・3区

1. 調査区オルソ

写真図版96 7次1区

1. 調査区東部全景（北東から）
2. 調査区東部全景（西から）

写真図版97 7次1区

1. 調査区東部全景（北から）

写真図版98 7次1区

1. 調査区東部全景（南から）
2. 調査区北壁（南から）
3. 調査区東壁（西から）
4. 調査区南部遺構群（東から）

写真図版99 7次1区

1. SB14・SB15検出状況（東から）
2. SB14・SB15西半（西から）
3. SB16・SA01（西から）
4. SB17（西から）
5. SB19南半（北から）
6. SB17-SP67（東から）

写真図版100 7次1区

1. SB19南半断割り（南西から）
2. SB17断割り（南東から）
3. SB15断割り（南西から）
4. SB17-SP64（南から）
5. SB17-SP62 SB15-SP30切り合い（西から）
6. SB16-SP71（南から）

写真図版101 7次1区

1. SD05東壁（西から）
2. SD05 D断面（東から）
3. SD05 E断面（東から）
4. SD01（西から）
5. SD03（北から）
6. 包含層遺物出土状況（北東から）

写真図版102 7次1区

1. SK01上層遺物出土状況（東から）
2. SK01下層炭化物検出状況（東から）
3. SK45炭化物検出状況（上から）
4. SP19遺物出土状況（北から）
5. SD02断面（南から）
6. SK07遺物出土状況（上から）
7. SK07断面（西から）

写真図版103 7次1区

1. 調査区西部全景（西から）
2. 調査区西部全景（北東から）

写真図版104 7次1区

1. 調査区西部全景（南から）

写真図版105 7次1区

1. 調査区西部全景（北から）
2. SB18（北から）

写真図版106 7次1区

1. 調査区南部遺構群（東から）
2. SD05（東から）
3. SR01断面（南東から）
4. SR02断面（南から）

写真図版107 7次1区

1. SD05（東から）
2. 調査区南部西壁（東から）
3. SD05 C断面（東から）
4. SD05西壁 A断面（東から）
5. SD05-3遺物出土状況（西から）
6. SD05-3遺物出土状況（西から）

写真図版108 7次1区

1. SK10炭化物検出状況（西から）
2. SK10完掘（東から）
3. SK10断面（南西から）
4. SD05内SK01（南から）
5. SP297断面（南から）
6. SD05内SK01 B断面（南から）

写真図版109 7次1区

1. 調査区北壁（南から）
2. SK11 A断面（南から）
3. SK11炭化物検出状況（西から）
4. SK11完掘（南東から）

写真図版110 7次2区

1. 調査区全景（西から）
2. 調査区オルソ

写真図版111 7次2区

1. SD01・SX02・SX03検出状況（南西から）
2. SX02・SX03北壁（南東から）
3. SX03遺物出土状況（南から）
4. SX03北壁（南から）
5. SX03墨書土器（2620）出土状況（北から）

写真図版112 7次2区

1. SE01 (南から)
2. SE01遺物出土状況 (東から)
3. SE01断割り (南から)
4. SE01最下層遺物出土状況 (南から)
5. 調査区東部土取り痕 (南東から)

写真図版113 7次2区・3区

1. 7次3区全景 (北東から)
2. 7次2区全景 (西から)

写真図版114 7次3区

1. 調査区全景 (東から)
2. 調査区全景 (東から)

写真図版115 7次3区

1. SB11・SB12 (東から)
2. SB14・SB15・SA01 (西から)

写真図版116 7次3区

1. SB13・SE01 (西から)
2. SB13・SB14・SB15 (北から)

写真図版117 7次3区

1. SB13-SP60 (東から)
2. SB14-SP32 (南から)
3. SB14-SP33 (南から)
4. SB15-SP37 SB14-SP33切り合い (南から)
5. SE01完掘 (南から)
6. SE01断割り (南から)

写真図版118 7次3区

1. 調査区北壁 (南から)
2. 調査区南壁 (北西から)

写真図版119 7次3区

1. 道路遺構 (東から)

写真図版120 7次3区

1. 道路遺構 (西から)
2. SD02内橋脚 (東から)

写真図版121 7次3区

1. SD02内橋脚上層埋土 (東から)
2. 道路遺構断割り (東から)
3. SD05 G断面 (東から)
4. SD05 H断面 (西から)
5. SD05 I断面 (西から)
6. SD04柁 (2704) 出土状況 (東から)

写真図版122 7次3区

1. 橋脚 (西から)
2. 橋脚 (北から)
3. 橋脚断割り (南東から)
4. 橋脚 (2955)・杭1 (東から)
5. 橋脚 (2956)・杭3 (東から)

写真図版123 7次3区

1. SD02 (南から)

写真図版124 7次3区

1. SD02完掘 (北から)

2. SD02南部 (北西から)

3. SD02滞水状況 (北から)

4. SD02 B断面 (南から)

5. SD02 D断面 (南から)

写真図版125 7次3区

1. SD02遺物出土状況 (南から)

2. SD02遺物出土状況 (北から)

3. SD02遺物出土状況部分 (南から)

4. SD02遺物出土状況部分 (北から)

写真図版126 7次3区

1. SD02遺物出土状況部分 (南から)

2. SD02遺物出土状況部分 (南から)

3. SD02遺物出土状況部分 (南から)

4. SD02漆付着石材 (2913) 出土状況 (南から)

5. SD02遺物出土状況部分 (南東から)

写真図版127 8次2区

1. 調査区西部全景 (西から)

2. 調査区東部全景 (東から)

3. 調査区オルソ

写真図版128 8次2区

1. 調査区西部 (西から)

2. SK02 (南から)

3. SB19北半 (南から)

4. SB20 (西から)

5. SB20 (南から)

6. SB20-SP23 (南から)

写真図版129 8次2区

1. SD02 (東から)

2. SD02北壁 (南から)

3. SD02遺物出土状況 (南西から)

4. SD02北西隅遺物出土状況 (南西から)

写真図版130 8次3区

1. 調査区全景 (東から)

2. 調査区全景 (西から)

3. 調査区全景 (北東から)

写真図版131 8次3区

1. 調査区オルソ

2. SD04 (西から)

3. SD04 (東から)

4. SD04 B断面 (東から)

5. SD04 A断面 (東から)

写真図版132 8次3区

1. SD04遺物出土状況 (東から)

2. SD04遺物出土状況 (西から)

3. SD04遺物出土状況 (南から)

4. SD04遺物出土状況詳細 (南東から)

5. SD04以南遺構群 (北から)

6. SP11遺物出土状況 (北東から)

写真図版133 三彩小壺

写真図版134 漆紙文書 (1)

写真図版135	漆紙文書(2)	写真図版185	7次1区包含層・7次2区SE01・SX03
写真図版136	漆付着土器・漆付着布・移動式竈・鞆羽口	写真図版186	7次1区・2区漆付着土器
写真図版137	砥石・紡錘車・土錘・赤色顔料付着土器・飯蛸壺	写真図版187	7次3区SD02
写真図版138	漆付着土器	写真図版188	7次3区SD02
写真図版139	漆付着土器	写真図版189	7次3区SD02
写真図版140	転用硯・墨付着土器	写真図版190	7次3区SD02
写真図版141	油煙付着土器	写真図版191	7次3区SD02
写真図版142	黒色土器・軽石・勾玉・ガラス玉他	写真図版192	7次3区SD02
写真図版143	軒丸瓦・軒平瓦	写真図版193	7次1区・2区・3区墨・漆付着土器他
写真図版144	瓦搏・丸瓦・平瓦	写真図版194	8次1区SR01・2区SK02・SD02
写真図版145	1次1区・2区	写真図版195	8次2区SK01・SK02・8次3区SP02・SD04・SX01
写真図版146	1次2区	写真図版196	墨書土器
写真図版147	1次3区	写真図版197	墨書土器
写真図版148	4次SE01	写真図版198	墨書土器
写真図版149	4次SE01	写真図版199	墨書土器
写真図版150	4次SE02	写真図版200	墨書土器
写真図版151	4次SE02	写真図版201	墨書土器
写真図版152	4次SK52	写真図版202	墨書土器
写真図版153	4次SK52・下層SD01・SD05	写真図版203	墨書土器
写真図版154	5次1区SE03・SE05・SK24・SK30	写真図版204	墨書土器
写真図版155	6次3区2-SD01	写真図版205	墨書土器
写真図版156	6次3区2-SD01	写真図版206	墨書土器
写真図版157	6次3区2-SD02	写真図版207	墨書土器
写真図版158	6次4区2-SD01	写真図版208	墨書土器
写真図版159	6次4区2-SD02	写真図版209	墨書土器
写真図版160	6次4区2-SD02	写真図版210	墨書土器
写真図版161	6次4区2-SX01	写真図版211	6次3区SK08・8次1区SR01・4次SE01木製品
写真図版162	5次4区SE01	写真図版212	5次4区SE01・SE02木製品
写真図版163	5次4区SE02・SK03	写真図版213	5次5区SE01木製品
写真図版164	5次4区SK62	写真図版214	6次1区SE01木製品
写真図版165	5次4区SK63	写真図版215	6次1区SB08・SE01木製品
写真図版166	5次5区SE01	写真図版216	6次1区SD03・7次3区橋脚
写真図版167	5次5区SE01	写真図版217	金属製品
写真図版168	5次5区SE01		
写真図版169	5次5区SE01		
写真図版170	5次5区SE01		
写真図版171	5次5区SE01		
写真図版172	6次1区SE01		
写真図版173	6次1区SE01		
写真図版174	6次1区SB08・SE02・SE03・SE04		
写真図版175	6次1区SD02・SD03・SD04		
写真図版176	6次1区SD04		
写真図版177	6次1区SD04		
写真図版178	6次1区SD05・SD06・SD75・SD81		
写真図版179	6次1区SK04・SK50・SK77・SK208・SK288		
写真図版180	6次1区SP181・SP202・整地層		
写真図版181	6次1区整地層・包含層		
写真図版182	6次1区整地層		
写真図版183	7次1区SP239・SD05・SD06		
写真図版184	7次1区SD05・SK01・SK07・SK08・SK10・SK11		

第I章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

姫路市は兵庫県の南西部に位置し、播磨地域の中核都市である。その核となるのが、JR 姫路駅を中心とする地域である。本書で取り扱う発掘調査は、姫路駅周辺地区の発展・活性化を促進するために実施される、中播都市計画事業姫路駅周辺土地区画整理事業に伴うものである。同事業は鉄道により南北に分断された姫路駅周辺を一体化することを目的とした鉄道高架事業に関連して行われた。

鉄道高架化の事業（山陽本線等連続立体交差事業、以下「連続立体交差事業」と呼ぶ）は、昭和48年に国鉄高架化基本構想を策定したことに始まる。連続立体交差事業は、関連道路及び姫路駅周辺土地区画整理事業とともに昭和62年2月に都市計画決定を受け、平成元年に連続立体交差及び交差道路2路線の事業認可を得た。平成3年から貨物基地、車両基地の移転工事に着手し、JR山陽本線高架工事等を経て平成23年3月に完了した。これらの事業に伴い発生する広大な貨物ヤード跡地等の活用を図るため、平行して進められたのが、姫路駅周辺土地区画整理事業である。姫路駅周辺土地区画整理事業の施行区域面積は45.45haで、整備される公共施設は、幹線道路（大日線、内環状東線、内々環状東線、内々環状西線、東駅前線、十二所前線、下寺町線、阿保線、市之郷線）、駅前広場、区画道路、特殊道路等があり、道路延長は8,242m、他に公園（1号公園、2号公園、神屋公園）、河川（外堀川、北条川、安田川）がある。

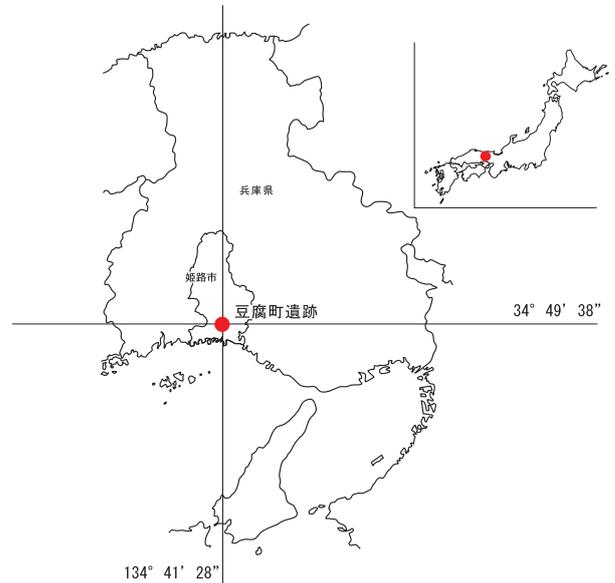


図1 豆腐町遺跡の位置

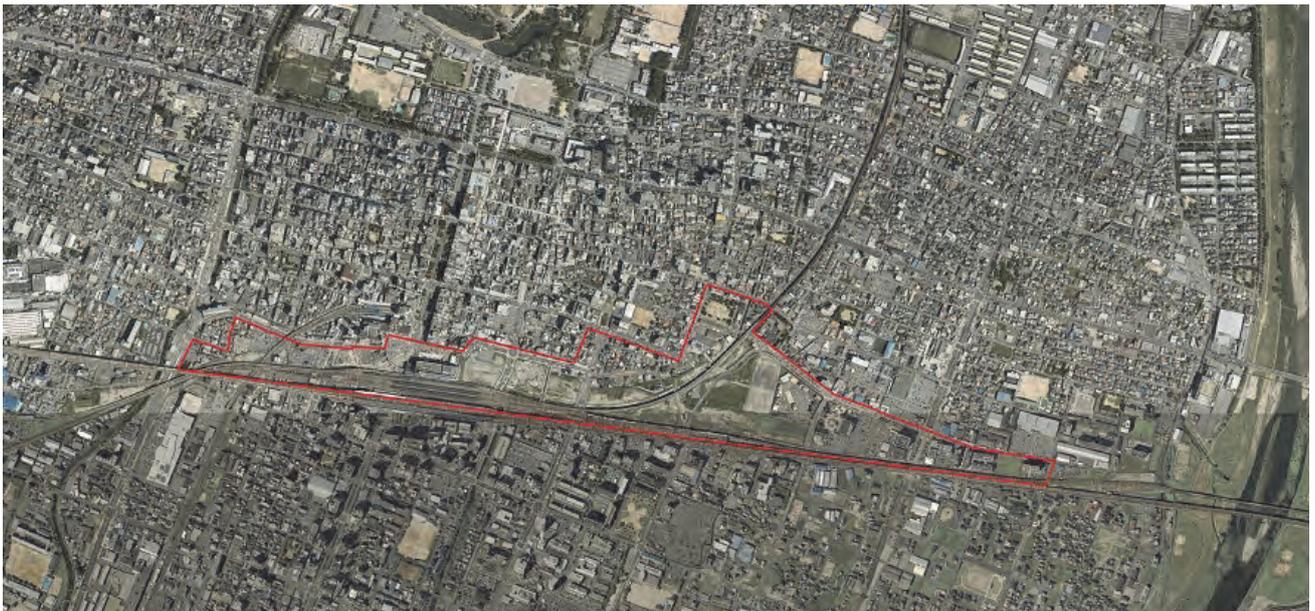


図2 姫路駅周辺土地区画整理事業 計画地（H25年度撮影 姫路市 HP より）

第1章 調査に至る経緯と経過

事業予定地には、周知の埋蔵文化財包蔵地として市之郷遺跡、市之郷廃寺、姫路城城下町跡が知られていた。しかし、事業予定範囲は早くに国鉄用地となり、広大な貨物ヤードとして利用されていたため、埋蔵文化財の把握は困難であった。そのため、平成5年度から平成8年度にかけて、線路の撤去された地区から順次試掘調査を進め、埋蔵文化財の有無の把握を行った。なお、山陽本線軌道敷の試掘調査は兵庫県教育委員会が行い、区画整理事業地内を姫路市教育委員会が実施した。試掘調査の結果、仮称姫路駅周辺第1地点遺跡（朝日町遺跡）、仮称姫路駅周辺第2地点遺跡（神屋町遺跡）、仮称姫路駅周辺第3地点遺跡（市之郷遺跡）、仮称姫路駅周辺第4地点遺跡（駅前町遺跡）、南畝町遺跡、仮称西延末遺跡（山崎遺跡）を確認した。なお、当初は一部の遺跡を仮称としていたが、平成22年5月26日をもって、（ ）内の遺跡名を正式名称とした。

豆腐町遺跡は平成7年度と平成10年度に兵庫県教育委員会がJR姫路駅構内で実施した試掘調査によって発見された。遺跡の範囲は東西約700m、南北約160mである。遺跡の調査は鉄道高架事業の進捗に合わせて兵庫県教育委員会が先行し、区画整理道路部分及び換地部分を姫路市教育委員会が実施した。

第2節 調査の経過

姫路市教育委員会の調査は平成13年度から開始した。第1次調査は、豆腐町の通称「開かずの踏切」の南側の区画整理道路部分（1区）と飾磨街道の拡幅部分（2区）で実施した。第2次調査は第1次調査の下層（2区）及び道路拡幅部分（3区）で実施した。第3次調査は第1次調査の西側（1区・2区）と第2次調査の南側（3区）で行った。第4次調査は第2次調査の東側に延びる区画整理道路部分である。第4次調査と並行して、姫路駅構内の軌道敷及びホーム部分の確認調査を行った。調査の結果、3次1区の西側と4次調査区の東側から旧姫路駅地下連絡通路の間は攪乱もしくは遺構が希薄であることが判明したため、当該部分は全面調査の対象としていない。第5次調査は西部地区と東部地区に分かれ、西部地区では、飾磨街道の拡幅部分（1区・2区）と4次調査の西側部分（3区）を、東部地区では鉄道高架に並行する区画整理道路部分（4区・5区）の調査を行った。第6次調査は、東部地区で区画整理事業に伴う駅ビル（現ピオレ姫路）の換地範囲（1区）と姫路駅東側連絡通路の延長部分（5区）を対象とした。西部地区では、4次調査区の北側にあたる区画整理道路部分（2区）と飾磨街道の拡幅部分（3区・4区）の調査を行った。第7次調査は駅ビル予定部分にあたり、当該部分は調査時には姫路駅構内の連絡通路であったことから、通路の切り替えを行いながら1～3区に分けて調査を行った。第8次調査では区画整理事業の換地予定部分（1区）と駅ビル予定地の未調査部分（2区・3区）を調査し、平成23年度に一連の調査を完了した。本調査面積の合計は11,751㎡である。

表1 豆腐町遺跡調査一覧

次数	調査区	調査面積	調査期間	調査担当	概要
1次	1・2区	925㎡	2002.1.15～3.29	秋枝	弥生時代から近代までの遺構を確認、飾磨街道沿いの町屋に関連する遺構を確認
2次	2・3区	320㎡	2002.7.4～12.13	秋枝	弥生時代から近代までの遺構を確認。飾磨街道沿いの町屋に伴う井戸を確認
3次	1～3区	900㎡	2006.10.5～2007.3.19	堀本・中川	平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物跡、土坑、溝等を確認
4次	-	1548㎡	2007.6.21～2008.2.21	中川・青木	奈良時代の井戸跡、流路跡、姫路駅関連の煉瓦遺構を確認、三彩小壺出土
5次	1～5区	1364㎡	2008.4.24～11.27	中川	飾磨街道沿いの町屋に伴う井戸、奈良時代の井戸、漆紙文書を確認
6次	1～5区	3568㎡	2008.2.5～2010.3.5	中川	奈良時代の道路跡、建物跡、井戸跡等多数の遺構・遺物を確認
7次	1～3区	1545㎡	2010.5.20～12.28	中川	奈良時代の道路跡、建物跡、井戸跡、橋脚、区画溝等多数の遺構・遺物を確認
8次	1～3区	1581㎡	2011.4.30～2012.1.31	小柴・中川	流路跡、奈良時代の建物跡、道路側溝等を確認

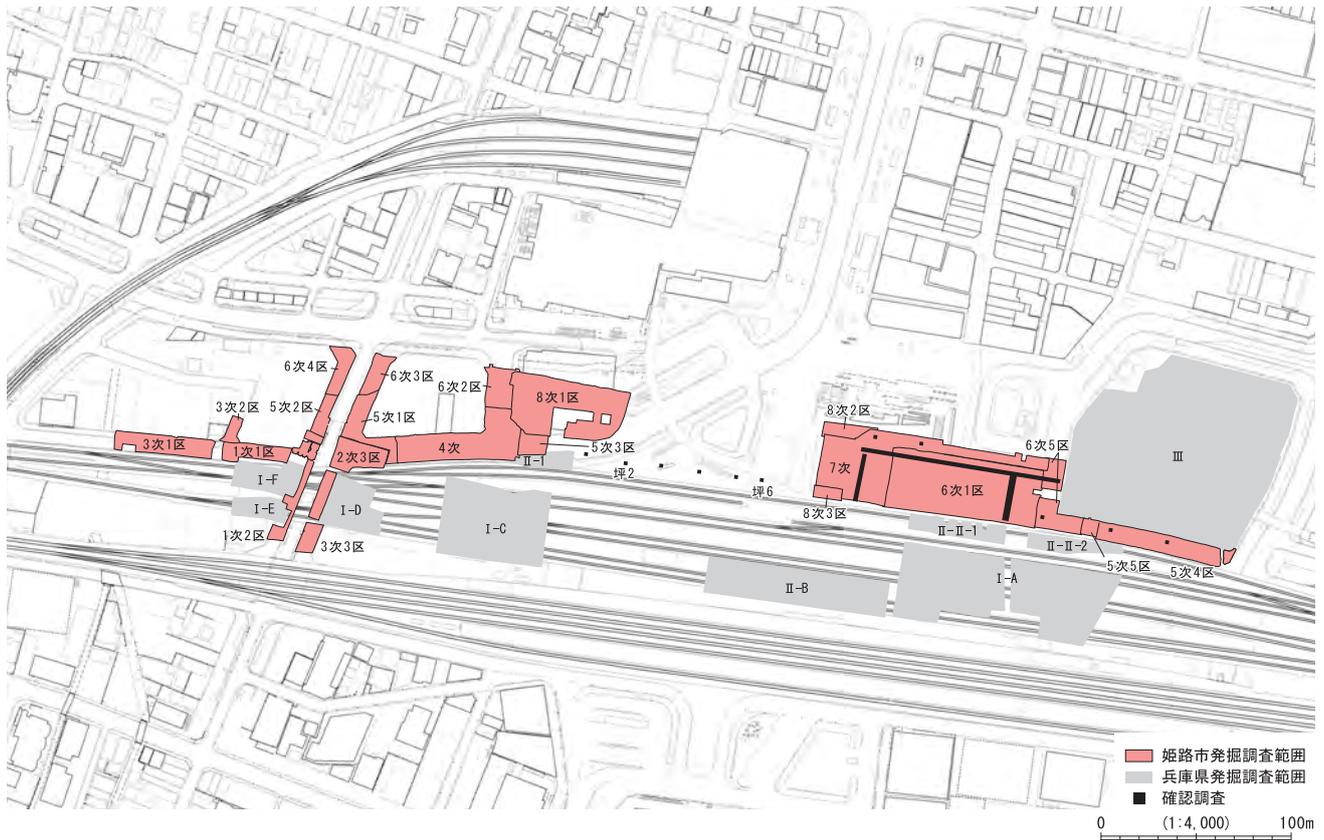


図3 豆腐町遺跡年次調査範囲

調査にあたってはバックホウで盛土・造成土・攪乱土を除去した。その後、遺構検出面まで人力で掘削し、遺構検出及び検出した遺構の発掘調査を行った。調査の進展に伴い、記録写真撮影、遺構実測を適宜行った。4次調査中の2007年8月7日には、兵庫県教育委員会の柏原正民氏に現地指導を受けた。2008年6月5日には姫路市内の中学2年生のトライやるウィークの受け入れを行い、発掘調査の体験作業を行った。6次調査中の2009年8月28日には、奈良文化財研究所 深澤芳樹氏、黒坂貴裕氏、兵庫県教育委員会 鐵英記氏に検出遺構についての現地指導を受けた。7次調査中の2010年12月10日には姫路市史編集室の松本正信氏、加藤史郎氏、12月16日には奈良文化財研究所 青木敬氏、小田裕樹氏、山本崇氏による現地指導を受けた。2011年1月12日は出土した墨書土器を奈良文化財研究所史料研究室に持参し、釈読等の協力を得た。合わせて写真室の中村一郎氏に墨書土器の写真を撮影していただいた。調査はJR姫路駅の高架事業や旧駅ビルの解体等の様々な事業が密接に絡むタイトなスケジュールの中で行った。常時何らかの工事ヤードと近接していたため、現地説明会の開催が困難であったが、鉄道高架事業等が一定の落ち着きを見せた2010年12月12日に7次3区において、関係機関の協力を得て現地説明会を開催した。

調査終了後、平成29年度から令和3年度にかけて豆腐町遺跡を含む姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う出土品整理を実施した。豆腐町遺跡出土の遺物量はコンテナP18 (L590mm×W386mm×H106mm) 換算で約1800箱である。接合・復元及び実測の一部を兵庫県教育委員会に依頼し実施した。その後、実測、トレース、遺物写真撮影等は株式会社アコード、株式会社イビソク、株式会社クリアチオ、株式会社島田組にそれぞれ委託し実施した。木製品保存処理を株式会社吉田生物研究所に、金属器保存処理を株式会社イビソクに、理化学分析を株式会社パリノ・サーヴェイにそれぞれ委託し実施した。令和3年度に姫路市埋蔵文化財センターで執筆、編集を行い、本報告書の刊行をもって豆腐町遺跡1次から8次調査の全ての作業を完了した。

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 3 節 調査の体制

発掘調査と整理作業の体制は以下のとおりである。同一人物については期間内の最終職名のみ記載した。

発掘調査体制（平成 13 年度から平成 23 年度）

姫路市教育委員会（平成 13 年度から平成 23 年度までに在籍した職員）

教 育 長 中杉隆夫、松本健太郎、高岡保宏
教 育 次 長 後藤純二、林 尚秀、石塚勝行、大前信也

文化部

部 長 南都 彰、山田吉則

生涯学習部

部 長 小林直樹

文化課

課 長 福永明彦、芝原政博、玉岡路三郎、牛尾 誠
課 長 補 佐 山本博利
係 長 大谷輝彦

埋蔵文化財センター（平成 17 年 7 月 1 日～）

館 長 秋枝 芳、大橋 勉
係 長 森 恒裕、岸本幸男、大西幸雄、小林利夫
技 術 主 任 南 憲和、福井 優、中川 猛、小柴治子、多田暢久
技 師 堀本裕二
技 師 補 黒田祐介
嘱 託 青木美香、岩満 聡

整理体制（平成 29 年度から令和 3 年度）

姫路市教育委員会（平成 29 年度から令和 3 年度までに在籍した職員）

教 育 長 西田耕太郎、松田克彦、中杉隆夫
教 育 次 長 岡本 裕、坂田基秀、名村哲哉

生涯学習部

部 長 福永安洋、沖塩宏明、岡田俊勝

文化財課

課 長 村田 泉、花幡和宏
技 術 主 任 中川 猛

埋蔵文化財センター

館 長 大谷輝彦、松本 智、前田光則
課 長 補 佐 多田暢久、森 恒裕、岡崎政俊
主 事 岡本武平
再 任 用 竹井宏文
技 術 主 任 小柴治子、福井 優、南 憲和、関 梓
技 師 奥山 貴、三好愛美、山下大輝、黒田祐介
技 師 補 河本愛輝
会計年度任用職員 韋 美紗、黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、田中章子、野村知子、松田聡子、三輪悠代、玉越綾子、寺本祐子、長谷川鈴代、藤村由紀、宅見春美、鈴木千枝美、山下哲司

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

豆腐町遺跡は兵庫県姫路市豆腐町・駅前町に所在する。姫路市は兵庫県の南西部、旧国では播磨国にあたる。市域の北側には中国山地から続く播但山地、西播山地があり、それらを開析して揖保川、夢前川、市川が南の播磨灘へと流れ込む。これらの河川の堆積作用により下流域には沖積平野（姫路平野）が形成された。遺跡は姫路平野中央付近の市川西岸、江戸時代の海岸線より約5km内陸に位置する。現地表面の標高は11m前後である。遺跡の東を流れる市川は朝来市に発し、播磨灘にそそぐ二級河川である。幹線流路延長75.8km、流域面積527.6km²を測る（姫路市1998）。

豆腐町遺跡を含む市川下流域の遺跡を語る上で市川、船場川、夢前川の旧河道を把握することは重要である。これら旧河道については、地理学や地質学の成果に基づき姫路市史において詳述されている（姫路市1998）。また、流路の時期については、市川と夢前川はともに中世末から近世にかけての付け替え伝承を持っていることから、これまではそうした伝承等に基づき様々に言及されてきた。しかし、両者の旧流路を空中写真で観察すれば、その様相差は明らかである。市川流域には旧河道の痕跡が明瞭に観察できるのに対して、夢前川流域では御立付近に現河川に沿って旧河道が観察できるものの、国道2号以南では条里地割が明確に観察でき、旧流路の痕跡は不明確となる。このことから旧流路の埋積にあつ

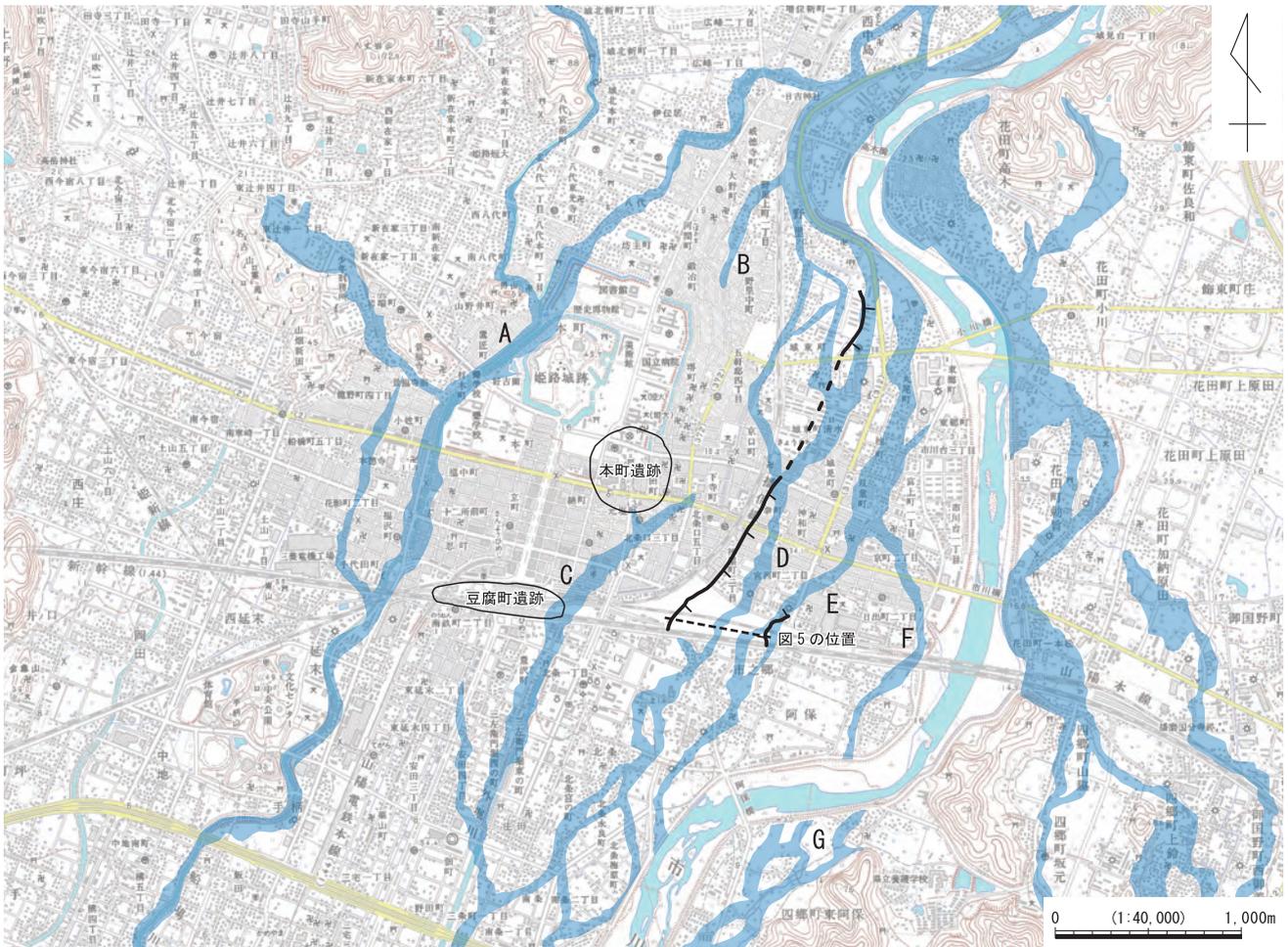


図4 姫路平野旧河道（姫路市史第7巻下付図を再トレース・加筆）

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

てはそれぞれに時期差が存在するといえる。こうした旧流路の時期を考古学的に確認できる遺構や遺物から位置づける作業は今里幾次氏によって早くに行われている（今里 1980）。姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う調査、及び近年姫路平野において実施した発掘調査地点は、点的、あるいは面的にこうした旧河道上に該当するものもあり、考古学的により詳細に言及できるようになってきている。

市川の旧河道については、これまでも先学により江戸時代の地誌等に基づき様々に言及されてきている。地形学的に明らかとなる旧流路については、『姫路市史』第7巻付図に示されている（姫路市 1998）。図4はこれを再トレースしたものである。市街化した平野部に市川の旧流路が幾筋も示されている。この旧流路を仮に西からA～Gとし、考古学的な知見をふまえ市川の旧流路を検証してみたい。なお、図4に記載された以外にも旧流路が存在する可能性は否定できないが、市街化された中においてその詳細な追求は困難である。

流路Aは、現在の船場川に該当する。この船場川を『播磨国風土記』に記載された「大川」と「小川」のうち、「大川」にあてる説もある（秋本校注 1958）。こうした説については、今里氏によって地質図と船場川沿いの遺跡の分布を基に、疑義が呈されている（今里 1980）。加えて、近年に行われた船場川流域に所在する竹ノ前遺跡や畑田遺跡の発掘調査でも、船場川の川幅は現在と大きく変わっていないことが判明している（姫路市教委 2015）。今里氏が指摘したように、流域の遺跡の分布からも弥生時代以降に市川の本流となるような大きな流れを船場川に比定することはできない。

流路Bは、野里の北から姫路城の方へ流入する流れである。市川の近くでは現在も微凹地として一部確認できるが、この流路の延長部分にあたる姫路城下町付近には条里地割が認められる。江戸時代の地誌等には姫路城下町のできる前には「青見川」や「白井川」といった流れがあったことが記されている（八木 1988）。流路Bの名残がそうした流れにあたるのかもしれない。しかし、現在、姫路城下町において450次を超える発掘調査が実施されているが、そうした流れの痕跡は明確には確認できない。今後発見される可能性は否定できないが、存在したとしても大きな流れではないだろう。

次に流路Cであるが、今里が「旧野田川から条里地割の線に沿って北方へ延伸すると、後世の三左衛門堀あたりを通過して、播磨国庁跡に比定される姫路総社に至る」と想定した流れに該当するものであろう（今里 1980）。この流路上にあたる駅前町遺跡や姫路城城下町跡の調査地では、弥生時代や古墳時代の溝や流路は確認できるが、それ以降の流路は確認できていない。流路Cについては、今里が想定したような播磨国府が存在した時期のものではなく、それ以前の流路である。以上から流路B・Cについては、

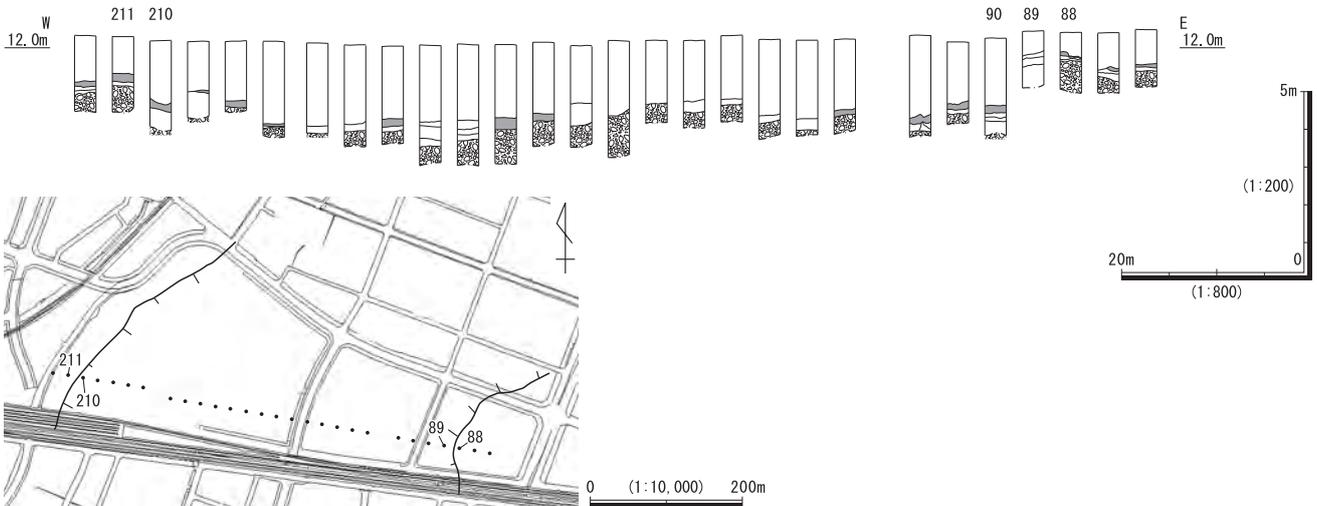


図5 試掘調査断面柱状図

市川の流れが固定化する以前に現在の市街地にあたる範囲を網目状に流れていた流路の痕跡と思われる。今後、幅の狭い流路等が明らかになる可能性は残るが、現時点での考古学的知見に基づく限り、姫路城の総構の内側には、奈良時代まで残る大きな流路は存在しなかったと考えられる。

次に流路DとEについて見る。この流れは江戸時代の『播陽里翁説』や『播磨鑑』が記す、大日一神屋一阿保を流れる旧市川の流れにあたる（橋本1973）。姫路駅周辺土地区画整理事業に先行して平成6年度に行った試掘調査はこの流路上を横断している。図5にその横断面を示した。概ね20m間隔で東西

方向に試掘坪を配置し、砂礫層を確認している。西側の試掘坪211と210の間と東側の試掘坪88と90の間では砂礫層の検出レベルに差があり、この間に段丘が存在している。このうち東側の段丘面上に市之郷遺跡、西側の段丘面上に神屋町遺跡が存在する。図4では流路DとEが分かれて図示されているが、土層断面ではそれぞれに対応する流れを確認することはできない。そのため、ここでは流路D・Eと一括しておく。この流路D・Eによって形成されたと見られる西側の段丘崖については、現在も市街地にわずかな痕跡を残している。段丘崖の高低差は神屋町二丁目で約60cm、幸町で約80cm、野里で約1mを測る。JR京口駅周辺はかつて紡績工場や川西航空機の工場があったため、どの程度地形が改変されたのかは不明であるが、野里付近から神屋町にかけて一連の段丘崖と思われる。東側の段丘崖については図5の坪88と坪90の間にあり、兵庫県の実施した市之郷遺跡の発掘調査報告書でもその存在が指摘されている（兵庫県教委2005・2011）。姫路市の実施した市之郷遺跡8次調査でもこの段丘崖を調査している（姫路市教委2021）。調査では、弥生時代中期の遺構との関係から、段丘崖の形成時期が弥生時代中期以降であることをおさえている。また、埋積土の上部からは中世前半期の遺物が出土した。南に位置する阿保遺跡第1地点でも流路D・Eにあたる旧河道の上部で同じ状況を確認していることから、段丘崖は弥生時代中期以降に形成され、中世前半には既に埋積していたことが考古学的に判明する。この時期には全国的にも段丘化が進むことが明らかとなっており、流路D・Eについても同様に考えることができる（高橋1994）。調査によって判明した流路D・Eの幅は、約400mを測る。現在の市川の川幅（堤防間）が約250～500mであることから流路D・Eがかつての市川本流である蓋然性は極めて高く、前述した江戸時代の地誌に記された旧市川の流れを考古学的にも裏付けることができる。流路D・Eは仁豊野・砥堀から南流してきた市川がほぼ直線状に流れこむ形となる。『播磨国風土記』に記された砥堀の名の由来に「造大川岸道」とあることから、砥堀を流れる市川が「大川」と呼ばれていたことがわかる。これまでの旧流路の検討を踏まえると砥堀から直線的に伸びる流路D・Eが風土記に記された「大川」の流れである可能性が高い。なお、風土記には「大川」とは別に「小川」も見られる。姫路市花田町小川がその遺称地とされ、現在の市川が「小川」に比定されている（秋本校注1958）。その是非を判断する根拠は持ち合わせていないが、現在の市川の流れから派生したと見られる流路Fと流路Gも存在することから現市川も別の流れとして古くから存在していたと思われる。近年研究の進んでいる高精度の古気候復元に基づく成果を参考にすれば（笹生2020）、市川の流れは弥生時代中期頃までは平野部を網目状に流れていたものが、弥生時代後期から古墳時代前期の湿潤傾向の中で段丘面化が進み、現流路と旧流路に固定化されていった可能性が高い。それ以降、古墳時代から奈良時代にかけては、大きく2条の流路が維持された。旧流路については、中世前半までに埋積しており、その要因として平安時代中・後期の気候変動を考慮することができる。このように考古学的に判明する事実と気候復元の成果は矛盾なく整合している。

なお、『飾磨郡誌』等は池田輝政による市川付替え説を記すが、この点については既に疑義が呈されている（八木1988・1991）。前述のように発掘調査成果からも江戸時代初頭の市川付替えが成立する余地はなさそうである。ただ、江戸時代の正保3年（1646）の検知帳には旧流路D・Eを村域に含む野里村、市之郷村、神屋村等にはいずれも新田有との記載がある（姫路市1996）。こうした新田が旧流路上の開発を示している可能性は高い。姫路城築城以前の様子を記した地誌等には城の東に「窪手川」や「恩（忍）熊川」があったことが記されている（村翁夜話集刊行会2015）。こうした記録を参考にすれば、旧流路D・

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

Eは平安時代以前には埋積し市川本流ではなくなったものの、現氾濫原面にあたることから、その後も細い流れが旧流路D・E上に存在していたと推測される。また、旧流路上に条里地割が施行されていないことも中世を通じて不安定な土地であったことを示唆する。そうした土地を江戸時代初頭に開発に耐えうるようにしたことが、市川付替え説に結びついているのかもしれない。

こうした発掘調査成果を踏まえた検討から、豆腐町遺跡の中心時期となる奈良時代の姫路平野の中心部は、旧流路A（船場川）から旧流路D・E（旧市川）に沿う段丘崖までの範囲と考えられる。この範囲は、江戸時代の姫路城下町が広がる範囲とほぼ重なっている。外堀で囲まれた城下町の内部では、これまでに小規模な調査を含めて450次に及ぶ調査が行われており、これらの成果からも『姫路市史』や『本町遺跡』等で述べられてきた奈良時代まで残る流路の存在を現状では確認できない。今後、流路が確認される可能性は完全に否定できないものの、奈良時代の遺跡の立地に影響を与えるような規模ではなく、小規模な小川のような流れと想定される。

船場川と旧市川の間は約1.7kmを測り、その間は比較的安定した沖積平野が広がる。平野のほぼ中心に本町遺跡が、その南約800mに豆腐町遺跡が存在している。平野部の現地表面の標高は、本町遺跡の北で14m前後、豆腐町遺跡の南で11m前後を測り、北から南にかけて緩やかに傾斜している。平野内における地山（弥生時代以降の遺構検出面となる黄褐色土もしくは砂礫層）の検出レベルは、現地表から概ね50～80cmで、深いところで1.0m～1.5mである。各所に小規模な谷地形等は認められるものの、旧地形の高低差は1m程度の範囲におさまり、微地形を考慮しても総体としては平坦な地形といえる。

豆腐町遺跡における東西方向の土層断面のうち、現地表・旧地表・地山を図6に示した。これに基づけば、現地表は概ね11m前後で一定している。盛土や鉄道敷設に伴う造成土を除去した旧地表の標高は、調査地西端の3次1区を除き10.0～10.5mの範囲におさまり、鉄道敷設段階では、比較的平坦な地形となっていたことがわかる。地山の標高は、調査地東端の5次4区東端で10.5mと最も高く、東端から20m西へ進んだ付近で地形がやや落ち込んでいく。その付近から調査地西部の1次1区にかけては、基本的に10.0m前後が地山検出レベルとなる。調査地西端の3次1区では9.2m前後まで大きく地山検出レベルが下がり、深い谷地形に該当しているとみられる。調査地全体として見れば、標高10m前後の比較的安定した地形上に立地することがわかる。このうち、7次2区～8次2区（約80m）、8次1区～4次東端（約50m）、2次3区～5次2区（約40m）の3か所について、（）内の範囲が凹地となっている。凹地は、地形形成の過程で谷地形となったもので、凹地内は土砂の堆積作用により、複数時期の土壌層が確認できる。結果として微高地部分は後世の削平が進み、凹地部分は複数時期の遺構が良好に残されている。

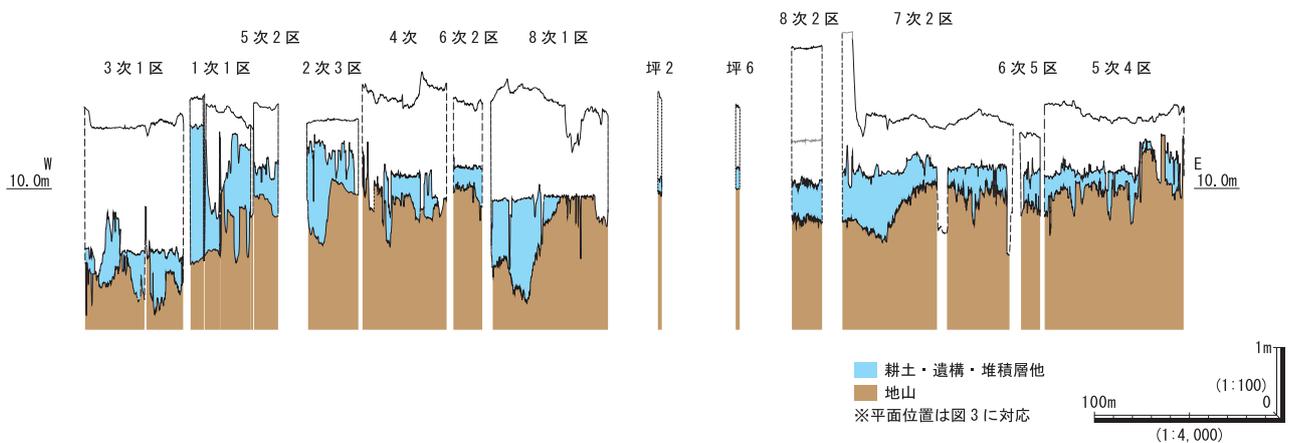


図6 豆腐町遺跡東西方向断面図

第2節 歴史的環境

豆腐町遺跡は、前節で述べたように立地的にも播磨国の中心部に位置している。そのため、遺跡の周辺には市域でも著名な遺跡が点在している。遺跡の北西約3kmには縄文時代前期の山吹遺跡、縄文時代中期から晩期にかけての辻井遺跡がある。西方約2kmの今宿丁田遺跡では縄文時代後期から晩期の遺構・遺物が見つかっており、豆腐町遺跡の西方に縄文時代の集落跡が存在している。対して豆腐町遺跡や市之郷遺跡では遺構検出面を形成する土層中から、縄文時代晩期の土器や後期の木材（第V章参照）が出土している。このことから姫路駅周辺土地区画整理事業地一帯の地形形成は縄文時代後期から晩期にかけてであり、縄文時代における遺跡立地には、当時の地形環境が大きく影響していることがわかる。その後、弥生時代になると姫路平野の遺跡数は増加していき、広い範囲で遺跡が確認できるようになる。市川東岸には国分寺台地遺跡や小婦方遺跡があり、船場川流域には北から千代田遺跡、橋詰遺跡、黒表遺跡、小山遺跡、竹の前遺跡、畑田遺跡等がある。豆腐町遺跡の南約300mに位置する豊沢遺跡では近年、金属加工を行う集落の一端が判明しつつある（姫路市教委2013）。姫路城城下町跡の下層でも、遺構の密集度は高くないものの、弥生時代前期の流路や古墳時代の竪穴建物跡が確認されている。

遺跡の南約800m南にある手柄山丘陵には弥生時代から古墳時代にかけての墳墓が築かれる。遺跡の南約1.2kmにある姫路市役所近辺にあった安田古墳からは三角縁神獣鏡が出土している（姫路市史2010）。

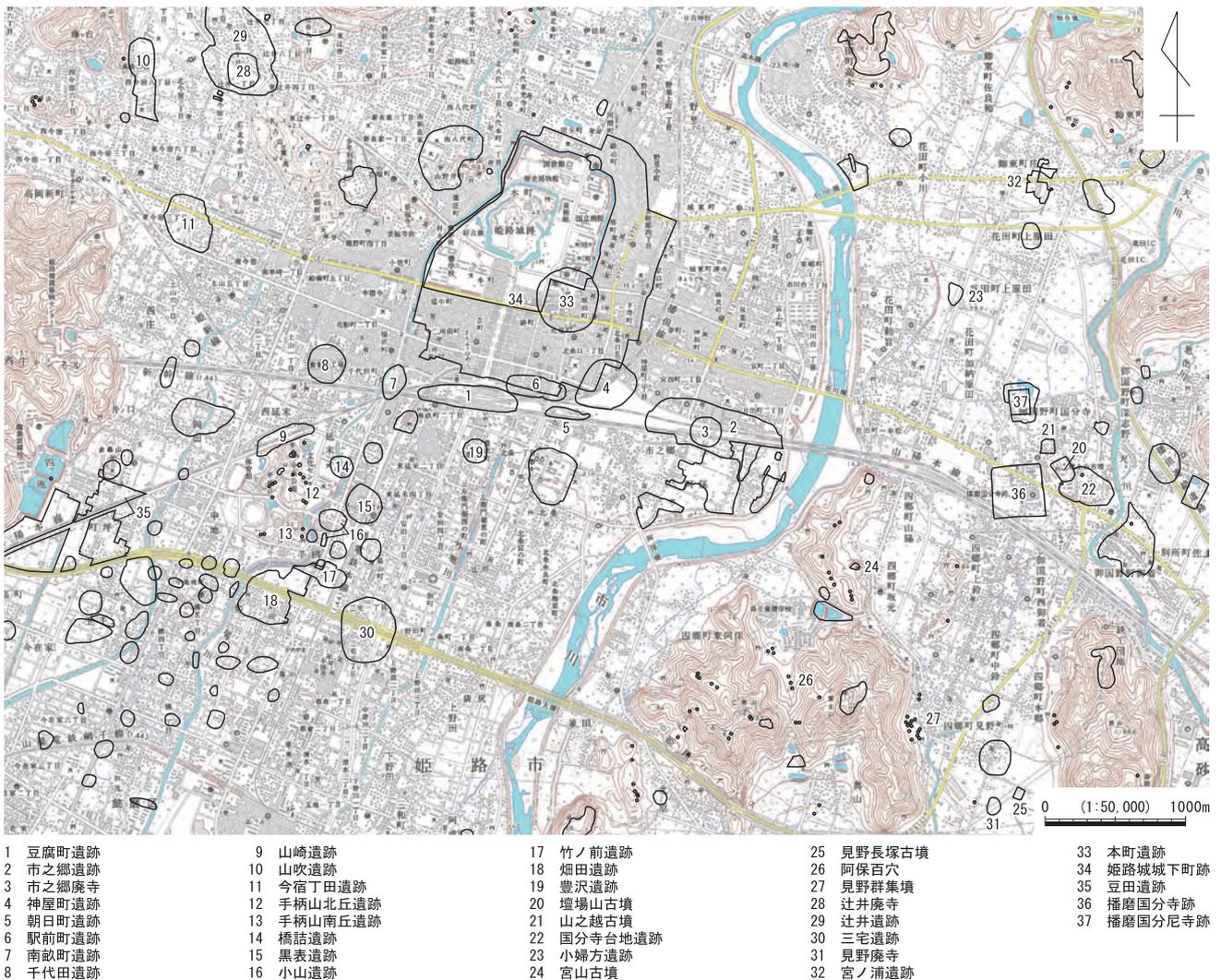


図7 周辺の主要遺跡

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

古墳時代中期になると市川東岸に墳丘長 142.8 m の前方後円墳である壇場山古墳、一辺約 60 m の方墳である山之越古墳、渡来系文物が大量に出土した宮山古墳等の墳墓が築かれる。これらの墳墓に近接して国分寺台地遺跡や小婦方遺跡があり、初期須恵器や韓式系土器が出土している。市川西岸でも市之郷遺跡や船場川流域の畑田遺跡、三宅遺跡でも同様の遺物が出土している。三宅遺跡は未だ部分的な調査に留まり、その実態は明らかではないが、古墳時代中期の井戸などが確認され、初期須恵器の表採資料を含めると付近一帯に古墳時代の集落の存在が想定される（姫路市教委 2014）。遺跡の所在する姫路市飾磨区三宅は播磨国風土記の「飭磨御宅」の遺称地とされている（秋吉校註 1958）。古墳時代後期には、手柄山丘陵に古墳群が築かれるが、都市開発が先行したため、実態は不明である。同様に姫路城の所在する姫山にも古墳群が存在した可能性もあるが、姫路城が築城されたため、実態は不明である。市川東岸には、全長約 34 m の前方後円墳である見野長塚古墳が築造され、後期末にかけて「美濃里」の奥津城と見られる見野群集墳、火山古墳群、「英保里」の奥津城と見られる阿保百穴群集墳が築造されている。

後期末になると市之郷廃寺、辻井廃寺、見野廃寺、近年存在が明らかとなった三宅遺跡を含めると 4 つの白鳳寺院が建立される（姫路市教委 2014）。これらの寺院出土瓦の瓦当文様は各々共通するものがあり、その需給関係とともに飾磨郡域の寺院には強い関連がうかがえる。これらの古代寺院は、旧流路を復元するといずれも河川近くに立地していることがわかる。市之郷廃寺と三宅遺跡は市川、見野廃寺は八家川、辻井廃寺については夢前川から派生した支流と見られる旧流路が存在している。

こうした遺跡の存在を背景とし、古代飾磨郡は成立した。飾磨郡衙の所在は、なお不明であるものの、これまでの先学の研究によれば、三宅説、辻井遺跡北方説、平野説、本町遺跡説等がある（吉本 1983、山中 1984）。その他郡衙関連遺跡として、長舎建物を検出した宮ノ浦遺跡の存在が近年明らかになった。宮ノ浦遺跡は丹波方面へ抜ける街道沿いに位置し、その所在位置は飾磨郡の東部、後世の飾東郡にある点から、飾東郡に該当する範囲を管轄する飾磨郡衙の出先機関と目されている（姫路市教委 2020）。

奈良時代になると、近世の姫路城下町と重なる本町遺跡や豆腐町遺跡において遺構・遺物が見つかり、学史的にもこの付近に播磨国府が所在したと考えられている。播磨国分寺と播磨国分尼寺は播磨国府のある市川西岸ではなく、東岸に置かれた。その場所は播磨国風土記に記載された「継潮」の遺称地である姫路市継の集落から真っすぐ北上した位置にあたる。また、近世には播磨国分寺の南を山陽道が通過し、播磨国分尼寺跡を有馬道が通過している。古代においても同様に東西交通路が想定される位置に所在している。播磨国分尼寺跡から北へ 1.5km の位置には、前述の宮ノ浦遺跡が所在している。姫路平野では、官衙関連や寺院跡の遺構・遺物は顕著に認められるが、奈良時代から平安時代にかけての集落跡はほとんど見つかっておらず、集落動態は全く不明である。平安時代の遺構・遺物については、近年点的に確認されるようになってきたが、奈良時代に比べると遺構・遺物とも少ないのが実状である。姫路平野の集落は 11 世紀後半頃から徐々に増加し、12 世紀末から 13 世紀前半にかけて各所で調査が行われている。これらは荘園等の成立と無関係ではなく、平野部にはいわゆる散村的景観が広がっていく。豆田遺跡の調査成果から 13 世紀後半以降、平野部の水路が整備されはじめ、14 世紀を通じて集落と耕地の再編が進み、14 世紀後半から 15 世紀にかけて、現在の集落景観に近い集村へと変化している。13 世紀後半から 14 世紀にかけての集落遺跡は未だ少なく、その実態は判然としないが、15 世紀になると市内でも集落が増加することから、姫路平野においては、15 世紀に現在に継続する村落景観が出現したと考える（姫路市教委 2020）。

この時期から城郭遺構が確認されるようになり、赤松氏に関連する坂本城跡や置城城跡をはじめ、御着城跡、加茂構居跡、町坪構居跡で調査が行われている。その他、姫路城に先行する「福中村」や「宿村」が想定される範囲で、遺構が見つかるとともに、水路跡や旧耕作土を広い範囲で確認し、近世の姫路城下町と重なる広い範囲が耕作地であったことが判明しつつある（姫路市教委 2018）。

その後、江戸時代には池田輝政によって姫路城が築城され、城下町も整備された。豆腐町遺跡一帯は

姫路城外堀の外側にあたり、町場化した飾磨街道沿いを除き耕作地が広がっていた。なお、「豆腐町」は江戸時代には「片豆腐町」と「外豆腐町」があった。飾磨門を出てすぐに位置するが、いずれも姫路七八町には含まれず、飾磨津町二十町の一つに数えられている（姫路市史1996）。他藩の事例では、江戸時代後半にかけて町場が新たに広がる例もあるが、姫路藩の場合は、町場は基本的に江戸時代を通じその規模を維持し続けている。池田家52万石から始まり、譜代大名の度重なる異動によって石高は徐々に減少し、最終的に酒井家15万石となったこともその一つの要因であろう。

明治21年に山陽鉄道の敷設に伴い、姫路駅は姫路城の外堀の南側に広がる田園の中に建設された。それに伴い城内と城外を区切っていた南部外堀は埋め立てられ、姫路駅と城下町が一体となった現在見る景観へと変貌した。以後は、姫路市の中心として、交通の起点となった。豆腐町遺跡における兵庫県教育委員会による発掘調査では、初代転車台と二代目転車台が明らかにされている。

第3節 播磨国府に関する既往の調査－『本町遺跡』以後－

前節において、豆腐町遺跡を含む姫路平野の遺跡に基づき通史的な記載を行ったが、豆腐町遺跡と密接に関わる播磨国府をめぐる状況についてここで概略を記載しておきたい。播磨国府の研究については、姫路郵便局での姫路城跡第23次調査、及びその報告書である『本町遺跡』（以下、報告書そのものと第23次調査を指す場合の両方に使用する）の以前と以後で大きく異なっている。以前の状況については、『本町遺跡』において調査担当者である秋枝芳氏・山本博利氏や木下良氏、山中敏史氏によってまとめられている。江戸時代の地名考証から始まり、明治時代以後も歴史地理学的な観点でその所在を解明しようと様々に考証されてきた。本町遺跡＝播磨国府跡説は昭和46年発刊の遺跡台帳に「639 本町遺跡 国府址 本町総社附近・・・」として記載されたことに端を発する（今里1963）。記載にあたった今里幾次氏は「①播磨国府系瓦が出土するということ。②飾磨郡の条坊地割における左条、右条の界線上にあるということ。③正明寺文書等による中世の播磨国衙とも一致するということ。④まだ深く掘り下げてはいませんが、いわゆる国府の津（飾磨津）から飾磨川＝風土記にいう大川によって通ずる水路との関係ということ等」をその根拠として挙げたもの」としている（今里1984）。その時点では未だ発掘調査は行われておらず、今里氏の知見と直感によるものであった。

『本町遺跡』の意義は、そうした中で奈良時代の遺構・遺物が考古学的な実態を伴って姫山の東南方で見つかったことに尽きる。『本町遺跡』の調査では、古代から江戸時代に至る遺構・遺物が検出され、江戸時代に先行する時期として4時期が設定された。Ⅰ・Ⅱ期は古代であり、Ⅲ期は平安時代、Ⅳ期は平安時代末から鎌倉時代である。（報告書ではⅤ期を安土・桃山時代として江戸時代以前としているが、現在の見解ではⅤ期は江戸時代初頭となるため除外した）。Ⅰ・Ⅱ期の成果は、Ⅰ期が飾磨郡条里と一致する方位の遺構群で、Ⅱ期が正方位の遺構群としている。検出した遺構の検討を行った山中敏史氏は「今回検出した掘立柱建物群は、この政庁の背後に営まれた某曹司の施設、あるいは、国司の館にあたるものであろう」としている。また、本町遺跡については「播磨国衙跡とみられ、可能性としてはこの国衙とともに草上駅家または飾磨郡衙が併置されていたこともありうる」とし、様々な可能性があることを指摘している（山中1984）。また、Ⅰ期とⅡ期の解釈は遺構方位に基づくもので、条里方向から正方位への変化は半ば定説化した感もあるが、調査担当者が報告書中で言及しているように「(建物1)北側柱の西第2柱穴と堀2の東西柱列西第1柱穴との切り合い関係の観察は、砂礫を包含した土質に災いされて困難を極めた。最終的に後者が前者を切っていると判断したが、今後の調査で追加検証が望まれる」としたように直接の切り合い関係は一つだけで、かつ、確証がもてない状況であった。加えて、Ⅰ期とする7世紀末から8世紀前半に位置づけられる遺物は極めて少ない。そのため、報告書では遺構方位としてⅠ・Ⅱ期としており、時期の明確な区分は避けている点に留意しておきたい。しかし、その後『姫路市史』

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

等では、明確にⅠ期、Ⅱ期と区分して記述されるようになるが、これは資料の再調査に基づくものではなく、解釈が優先した結果であろう。その後の周辺の調査でも当該時期の遺構・遺物の広がりには明らかとなっておらず、Ⅰ期・Ⅱ期については、追検証が為されていないのが実状である。『本町遺跡』で既に指摘されているように遺構主軸の変遷の解明については周辺での調査が進むのを待つほかない。

次に、『本町遺跡』刊行後から『姫路市史』刊行までの状況を整理しておきたい。刊行後、播磨国府について積極的に言及したのは、秋枝芳氏と山本博利氏である。両者はともに本町遺跡の調査担当者であり、それぞれがその後追求を行っている。秋枝氏は特別史跡地内で行われた出土遺物の整理を行い、奈良・平安時代の遺構・遺物を抽出し、本町遺跡のみではなく、更に広い範囲に当該時期の遺構・遺物が広がることを示した（秋枝 1991・2010）。山本氏は木下説等に基づき、更に踏み込んで国庁域、国衙域、国府域の設定を行った（山本 1999・2010）。これに古瓦の研究を進めた今里氏を加え、3氏の見解を踏まえた形で編纂された『姫路市史』が『本町遺跡』以後の一つの到達点を示すものである。図8は市史掲載の主要遺構・遺物検出地点と推定国衙域・山陽道を示したものである。ただ、『姫路市史』の編集方針として平成13年度以降の調査は含まないとしていたため、刊行時期と前後して進捗していた豆腐町遺跡や姫路城城下町跡の下層の成果を汲む形にはなっていない。そのため『市史』では必然的に特別史跡地内で過去に行った成果を主として扱うこととなっており、総体として『本町遺跡』の見解を超えるものとはなっていない。その他、大橋泰夫氏や平田博幸氏により本町遺跡への言及が行われているが、上記、『本町遺跡』や『姫路市史』の理解を超えるものではない（大橋 2018、平田 2018）。

『本町遺跡』以後、市史編纂と並行して姫路城の外曲輪を中心に発掘調査が各所で行われてきた。江戸時代の下層から奈良時代の遺構・遺物が発見されることもあり、当該時期の資料の蓄積が着実に進んでいる。未だ点的であるものの、『本町遺跡』と同時期の遺構の存在・広がりが明らかになりつつある。ここで、図9に示す調査地点において明らかとなった姫路城城下町跡の下層遺構の成果を概観し、豆腐町遺跡の位置づけを考えるうえで重要となる『本町遺跡』以後の状況を簡単に整理しておきたい。

姫路城跡第166・168・173次（以下、第166次他と表記する）（姫路市教委 2002）

本町遺跡内において『本町遺跡』後に行われたまとまった調査である。この成果は『姫路市史』に含まれているが、調査内容についての記載は希薄である。『本町遺跡』調査区とこれらの調査区の位置関係は図10のとおりである。『本町遺跡』で検出した遺構は西側に広がるものであり、本調査区においても関連する遺構の検出が予想された。調査の結果は、報告書に示されたように奈良時代の遺構は少なく、『本町遺跡』で判明した遺構が西側には大きく展開していないことが明らかとなった。遺構が少ないことは、江戸時代の遺構の下層であることも理由の一つであるが、『本町遺跡』の遺構検出面の標高が13.7～8mであるのに対して、本調査区は12.4～5mと1m近い差が存在することも要因の一つかもしれない。報



図8 本町遺跡周辺調査地点（『姫路市史』第7巻下より転載）

告書では、調査区東部で検出された湿地状の落ち込みの存在などから、当初から空閑地的な様相であったと指摘されている。総じて、奈良時代に位置づけられる遺物量は少ないが、陶硯や石帯といった官衙的な様相の遺物が出土している。軒瓦については79点が出土しているがほとんどが小片か細片である。調査区内で建物跡は確認できないが、調査区西端で検出した溝2-25は、正方方位を志向し、国府に関連をもつ区画遺構と考えられる。その他溝3-01も正方方位を志向する。土坑14からは漆付着土器が出土している。その他、本調査区からは「三合」の線刻のある枅も出土している（姫路市2010）。前述した湿地状の堆積は周辺の調査でもそこから延びる溝が確認されており、「池」である可能性も報告書で言及されている。播磨国総社の東には「血の池」跡があり、あるいはこうした「池」が広がる空間であった可能性もある。「血の池」には平安時代中期の藤原保昌に関わる伝承と室町時代の赤松氏に関わる伝承が残る（射楯兵主神社1996）。いずれも伝承の域を出るものではないが、登場人物らの格は播磨国の中枢に相応しく、周辺の小規模な調査成果を含めて改めて検討していく必要がある。

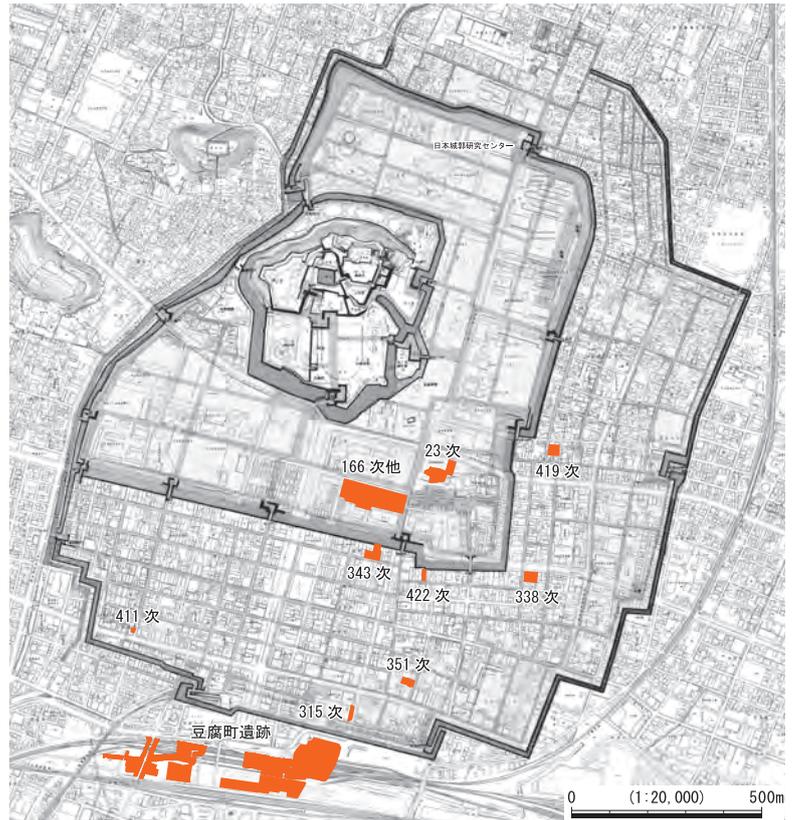


図9 姫路城城下町跡下層遺構検出地点

姫路城跡第315次 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第72集

姫路市東駅前町で行った調査である。豆腐町遺跡と距離的に近く、「豆腐町Ⅲ次」の北端から北へ約70mしか離れていない。検出した遺構は奈良時代の溝、柵、柱穴等である。溝の主軸はN 9° Wに直交する。柵は建物の一部を構成する可能性があり、主軸はN 2° Eである。柱穴からは漆付着土器も出土している。豆腐町遺跡から連続する遺構か、あるいは別の性格の遺構かは不明であるが、当該時期の遺構の広がり確認できる。

姫路城跡第338次 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第43集

姫路市平野町で行った調査である。15世紀後半頃の溝SD101と古代の溝SD104、建物跡SB01を検出した。特筆すべきは、遺構に伴う古代の瓦を検出したことである。播磨国府内の瓦については、これまで今里氏により詳細な検討が行われてきたが、これらは遺構に伴わないものがほとんどで、伴っても新しい時代の遺構であり、考古学的にはこれらの瓦が本来その場所にあったかどうかの情報が欠落した状態であった。後述する姫路城跡第343次や第419次で判明したように、古代の瓦は中世段階や城下町建設時に2次・3次的に動いている。そのため、瓦の出土から付近に瓦葺建物の存在を予想できても、実質は遊離した状態であり、資料的には参考の域を出ない。そうした中で、第338次調査では古代の溝SD104から瓦が出土した。SD104の主軸は東西正方方位をとり延長26m、幅約4mを測る。瓦は溝の中層から出土した。瓦の依存状態は良好で、完形に近いものが含まれていた。出土瓦の総重量は1,342kgで、その

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

うち平瓦が1,262kg、総量の94%を占める。この組成から建物からの落下瓦そのものではないことは明らかである。報告者は瓦の葺き替えもしくは建物の造営に際して、不要・不適合な瓦を選別し廃棄した可能性を指摘している。SD104の中層及び下層からは瓦とともにわずかながら奈良時代の土器が出土している。上層からは10世紀頃の土師器杯や須恵器椀が出土していることから、最終的な埋没は平安時代中期に位置づけられる。ただ、上層には瓦を含まないことから、瓦の廃棄後時間を経て埋没したもので、瓦の廃棄自体は8世紀におさまるものと考えられる。また、SD104に関連するとみられる建物跡もしくは塀とみられるSB101の柱穴の掘方は一辺1mを超える隅丸長方形を呈す。調査範囲の関係でSB01の性格は明らかではないが、本町遺跡の範囲を超えて古代の遺構が広がることを如実に示している。第338次出土瓦は、播磨国府域における二次的な動きの少ないものとして現状では、唯一の良好な資料である。

姫路城跡第343次 姫路市埋蔵文化財センター調査報告44集

姫路市綿町で行った調査である。調査地は『本町遺跡』から南へ約200mの位置にあるが、奈良時代の明確な遺構は確認できず、室町時代に廃棄された瓦溜りを検出した。瓦溜りからは、播磨国府系瓦である本町式、古大内式の軒瓦をはじめ、平安時代後半の軒瓦など23点が出土している。その中には、豆腐町遺跡で出土した古大内式系軒丸瓦を3点含んでいる。これらの瓦は廃棄に伴うもので原位置ではないものの、まとまった量が出土している。国道2号をはさんで北側の図8の④にあたる姫路城の南部土塁でも同様に瓦が出土していることを踏まえると、2次的に動いている可能性は高いものの、近辺に瓦葺きの建物が存在していたと想定できる。

姫路城跡第351次 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第46集

姫路市北条口二丁目で行った調査である。主軸をN2°Eにとる柵SA01と建物跡SB01を検出した。SA01は延長約20m、柱穴掘方は隅丸長方形で、一辺0.7～1.4mを測る。SB01はSA01の南側で検出した2間×3間以上の総柱建物跡で、柱穴の形状・規模はSA01と共通する。SA01とSB01から同一個体の遺物が出土していることから同時並存の遺構である。建物跡は1棟にとどまったが、調査区端でも同じ規模の柱穴を検出したことから、柵SA01に囲まれた中に倉庫が並んでいたと推測できる。出土遺物から明確な時期をおさえることは難しく、報告書では6世紀後半以降とするが、須恵器杯身の型式等からは7世紀代まで下げられると思われる。調査区の制約により想像の域を出ない部分が多いが、8世紀を遡る区画施設とその内部に倉庫が存在することが明らかになった点は、播磨国府前史あるいは播磨国府を考えていくうえで極めて重要である。また、時期的にも遺構の主軸が『本町遺跡』I期とは異なっている点も重要な事実である。

姫路城跡第411次 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第86集

姫路市十二所前町で行った調査である。ここでは7世紀頃の主軸N35°Wの溝を検出した。調査範囲は狭く溝の性格は明らかでないが、城下町の西側にも国府以前の遺構が広がっていることが判明した。

姫路城跡第422次 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第100集

姫路市元塩町で行った調査である。江戸時代の下層遺構として中世後期を中心とする遺構が見つかった。この調査では中世後期が主体であり、古代の遺構は2-溝66と2-溝72だけである。中世後期の2-溝65と2-溝68は図10に示すように2条が平行し、心々間距離は約3mを測る。溝間の遺構検出状況と溝の外側の検出状況は全く異なっている。このうち、2-溝68を東へ延ばした位置に前述した第338次SD101がある。その間には第254次で検出した溝も存在し、これらが一連となる可能性が指摘できる。第422次以前に周辺の調査をまとめた段階では、15世紀後半の区画遺構が点々と存在すると認識してい

23次・166次

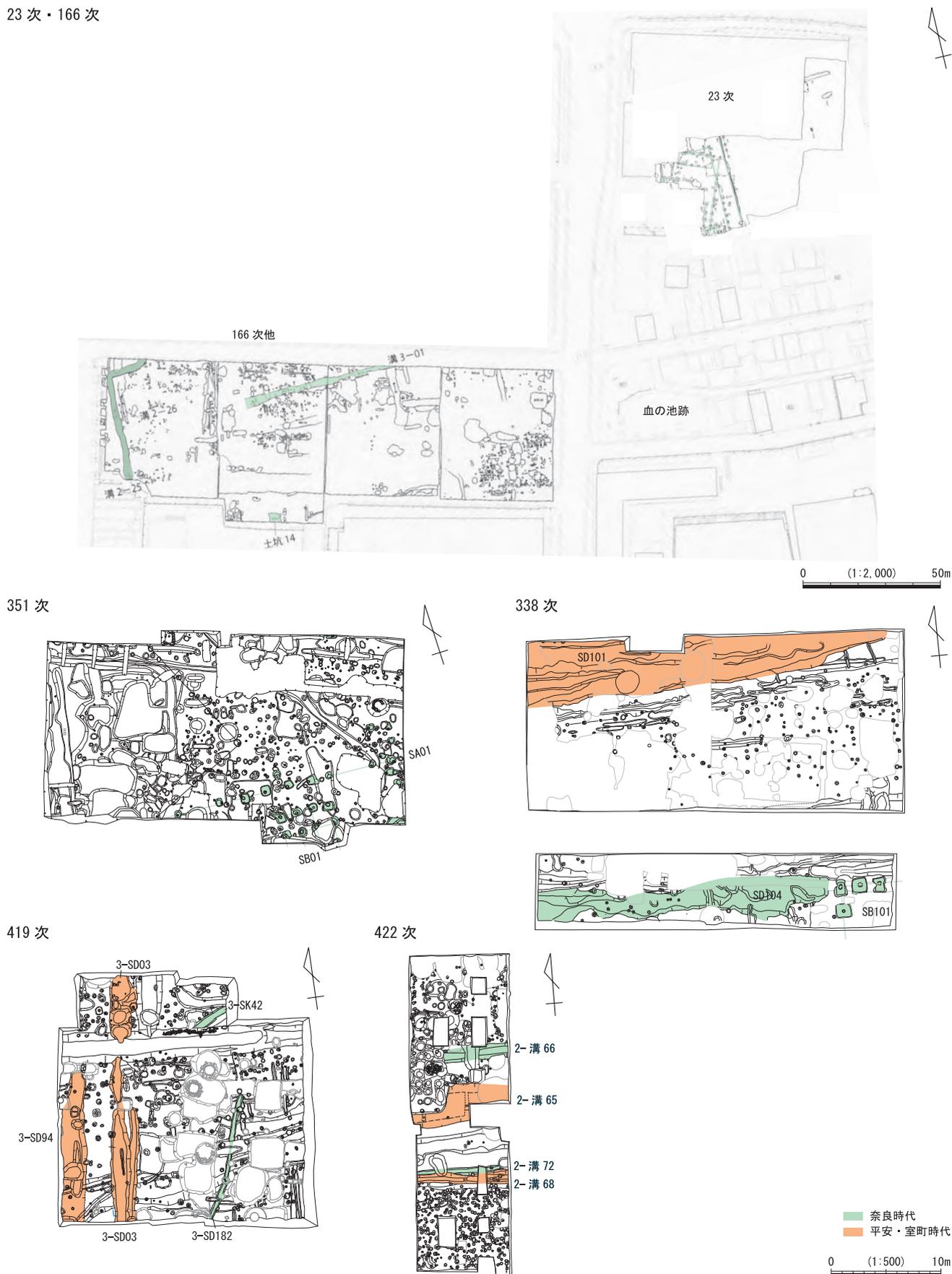


図10 姫路城城下町跡 主要下層遺構平面図

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

た（姫路市埋蔵 2018）。しかし、第422次の調査成果からは、中世後期の溝は単なる区画遺構ではなく、3m程度の幅をもつ道の可能性も指摘できる。これを図示したものが、図10である。延長線の主軸は概ねN2°Wである。第422次では中世後期の溝とほぼ同じ位置で前述の古代の溝を検出しているが、現状では、他の調査区で古代に遡る溝が確認できていないため、古代まで遡りうるかどうかは全く確証が得られない。ただ、第338次では、この溝の延長線上にあたるSD101の南側で方位をほぼ同じくする奈良時代のSD104とSB01を検出している。また、図11から明らかなように播磨国総社から延びる参道はN1°Wでこの溝とほぼ直交している。図11の上部に示した『本町遺跡』の正方位を志向する遺構群も、正確には1°程西偏している。『本町遺跡』ではⅢ～Ⅳ期の遺構にもわずかに西偏したものが継続して確認されている。その方位は現在総社周辺で確認できるN5°～8°Eの町割とは異なっている。前述した中世後期の一連の遺構を古代まで遡らせる直接的証拠は未だないが、少なくとも15世紀後半には現在の地割と異なる主軸を持つ遺構が存在していたことが明らかとなってきた。図8に示した『姫路市史』掲載の図に描かれた第2次山陽道ラインと図11に示した東西方向に延びる一連の遺構とはわずかに位置がズレるものの、その方位が一致している点は今後追及していく必要がある。



図11 播磨国総社周辺検出遺構

姫路城跡第419次 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第106集

姫路市大黒壺丁町で行った調査である。多くの古代瓦が出土したが、その多くは江戸時代の造成に伴い、他所から運ばれた土砂に含まれるものであることが判明した。江戸時代を含め3面の調査を行い、最下層にあたる第3面で奈良時代の溝と土坑、平安時代中期の溝を検出した。奈良時代の溝は幅50cmで蛇行し明確な主軸をもたない。平安時代中期の溝は2条平行し、その心々間の距離は約4.5mである。また、主軸はN8°Eと調査地周辺の町割りと整合する。この溝も道路側溝の可能性が考えられる。溝内からは緑釉陶器等がまとまって出土した。奈良時代の遺構が明確な主軸をもたないのに対し、平安時代中頃に明確な主軸を持つ遺構が新たに出現したことが判明した。この調査によって、これまで『本町遺跡』の南側で広がり確認されていた古代の遺構が東側にも広がることが明らかとなった。

以上、『本町遺跡』以後に行われた報告書の公刊された古代に関わる発掘調査成果を列記した。これらの成果から本町遺跡の範囲を超えて奈良時代の遺構が存在していることが確認できる。現在までに明らかとなった古代の遺構の広がりには姫路城の北にある日本城郭研究センターから豆腐町遺跡までの南北約1.9km、東西方向は十二所前町から平野町までの約1.1kmである。また、姫路城内における瓦の分布は、『姫路市史』に報告されているが、多くは遊離したものである。これらの瓦は秋枝氏が指摘するように姫路城築城時の大規模普請により土砂とともに動いた可能性が高い(秋枝1991)。第419次の成果からも土砂の移動が確認でき、343次では2次的に動いた瓦の実態が明らかとなっている。こうした点から姫路城周辺から単体で出土する瓦については、現時点では検証のしようがなく、その扱いは保留しておきたい。現状で瓦がまとまって確認できる範囲は、『本町遺跡』南側の綿町(343次)から平野町(338次)にかけての東西約550m、『本町遺跡』から平野町(338次)までの南北約400mの範囲である。この範囲は図11に示した総社周辺のN1°~2°Wの遺構が広がる範囲と概ね重なっている。このことは、発掘調査が進展した現在においてもなお、国府の中樞が本町遺跡を中心とする範囲にあるとする先学の指摘が有効であることを示している。他方、瓦を伴わない同時期の遺構は、本町遺跡の範囲を遥かに越えて広がり、播磨国府の広がりには本町遺跡にのみ限定されるものではないことが明らかである。近年の国府の研究では、かつて提唱されていたような方八町の都城のミニチュアではなく、点在する官衙・曹司を道路が結ぶ景観として復元されている(金田1999)。奈良時代のみならず、それ以降にも国衙機構の充実などに対応して、道路や溝などによる区画が付加・改変されていったことが各地の調査で明らかになりつつある(山中2004)。図11に示した遺構や第419次で確認された平安時代中期の溝はそうした可能性を含んでいる。

『本町遺跡』以後の現状を再度まとめると、奈良時代の遺構の広がりには南北1.9km、東西1.1kmである。この範囲で見つかる遺構の主軸は正方位を志向するものが多く、飾磨郡の条里地割とは異なっている。本町遺跡から豆腐町遺跡の間には、現状ではまだ点的ではあるものの、大きく途切れることなく古代の遺構が検出されている。このことから両遺跡は無関係に存在するのではなく、「播磨国府域」といった一連の広がりの中で理解できる。また、第419次の調査成果から遺構は更に北東方向へも広がる可能性もあり、播磨国府と旧市川との関係も今後の課題となる。『本町遺跡』でI期・II期と区分された主軸の異なる遺構の在り方は、その後の調査においても未だ追検証できていない。同時に、奈良時代前期に位置づけることのできる遺物は少なく、前半期の国府の実態は未だ明らかとなっていない。ただ、第351次や第411次のように国府域内において先行する時期の遺構群も見つかりつつあり、奈良時代前半の遺構の追求は今後の課題といえる。瓦についても、従来その分布を主眼に検討されてきたが、姫路城下町建設時の造成事業等に伴って古代瓦を含む土砂が動いている事実も明らかとなってきた。上記のように発掘調査の進展によって近世姫路城下町と重なる範囲に、古代の国府が存在していたことが判明しつつある。こうした状況を踏まえ次章以降、豆腐町遺跡の調査成果を報告したい。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

豆腐町遺跡は、東西約700mと広く、遺構の分布から大きく西部地区と東部地区に分けることができる。

西部地区は、飾磨街道沿いに最も遺構が集中する。調査区は1次1区・2区、2次3区、3次1区・2区・3区、4次、5次1区・2区・3区、6次2区・3区・4区、8次1区が該当する。飾磨街道沿いは地山の検出レベルが低く、複数の堆積層が確認でき、遺構面を最大4面調査した。飾磨街道の両側は地山が再び高くなり、遺構検出面は地山となる。8次1区の調査成果からこれらの遺構を検出したいわゆる地山の形成時期は、出土した木材の放射性炭素年代から縄文時代後期に一つの定点を見出すことができる。西部地区で検出した遺構は近代の姫路駅に伴う煉瓦構造物、近世の町屋に伴う井戸12基、土坑、柱穴、中世の建物跡1棟、土坑、柱穴、古代の建物跡1棟、柵1条、井戸2基、溝、土坑、弥生時代のピット、溝、弥生時代から古代にかけての旧流路1条である。兵庫県の実施した豆腐町Ⅰ次では、中世段階の池跡も検出されている。遺物は多く出土しているが、特に鉄道開通の明治21年を上限とする4次SK05、江戸時代の1次1区SK01、中世の3次3区2-SK46・2-SK48、5次1区SK24・SK30、古代の三彩小壺を含む4次SE01や4次・5次1区SK52、6次3区2-SD01・2-SD02、6次4区2-SD01・2-SD02・2-SX01などが特筆される。西部地区で検出した遺構の主軸は飾磨郡条里の方角に一致するものが多い。

東部地区は、旧JR姫路駅ホーム下から市道城南148号線（内々環状東線）までであり、確認調査によって道路以东には遺構は広がっていないことが明らかとなっている。兵庫県が実施した豆腐町Ⅲ次の成果から地山の高まる東部東側は井戸等の深い遺構のみ確認されたが、本来は地形の高い当該場所に豆腐町遺跡の中核部が存在した可能性が高い。第Ⅱ章第3節で述べた内々環状東線に伴う第315次調査では奈良時代の遺構を検出しており、遺構は北側へ広がっている可能性もある。東部地区では奈良時代の道路跡、橋脚跡、建物跡21棟、井戸7基、土坑、柱穴等を確認した。遺物量は、西部地区よりも多いが、時期は奈良時代のものが圧倒的に多い。特に漆紙文書を共伴した5次5区SE01一括資料、7次3区SD02一括資料は組成、量とも充実し、播磨地域における当該時期の良好な一括資料と考えられる。古代の遺構は西部地区と異なり、飾磨郡条里ではなく概ね正方位を志向する点に特徴がある。近世は姫路城外堀の外側に広がる耕作地に該当するため、建物等の遺構はなく、埋桶や溜池等の耕作に伴う遺構が中心となる。一面耕作地が広がる景観を復原できるが、耕土下には江戸時代初頭以来の土取痕が随所で検出され、城下における活動の一端が明らかとなった。

豆腐町遺跡では、西部地区において各時期にまたがる遺構が検出されているものの、中心時期は奈良時代である。西部地区・東部地区とも墨書土器、漆附着土器、製塩土器等が出土し、生業は大きく変わらないと考えられる。また、第Ⅳ章第4節で述べる出土遺物の検討から、遺構の中心となる時期は東部地区が8世紀中～後半に、西部地区が8世紀後半～9世紀初頭に位置づけられる。また、両地区は遺構の主軸が異なる。先行する東部地区では正方位で、時期が遅れる西部地区では飾磨郡条里に沿う。これは、『本町遺跡』で提示されたⅠ期の条里地割からⅡ期の正方位へと遺構主軸が変化するという在り方とは異なる成果が得られている。

本報告では、遺跡の実態に即し、西部地区と東部地区に分けて記述する。それぞれ調査回数、区が多岐に分かれるため、煩雑ではあるが、ひとまず調査区毎に遺構・遺物を記述し、調査区を越える遺構については、改めて報告する。調査区毎に遺構面が複数ある場合は、時代を遡る形で第1面から順に報告する。

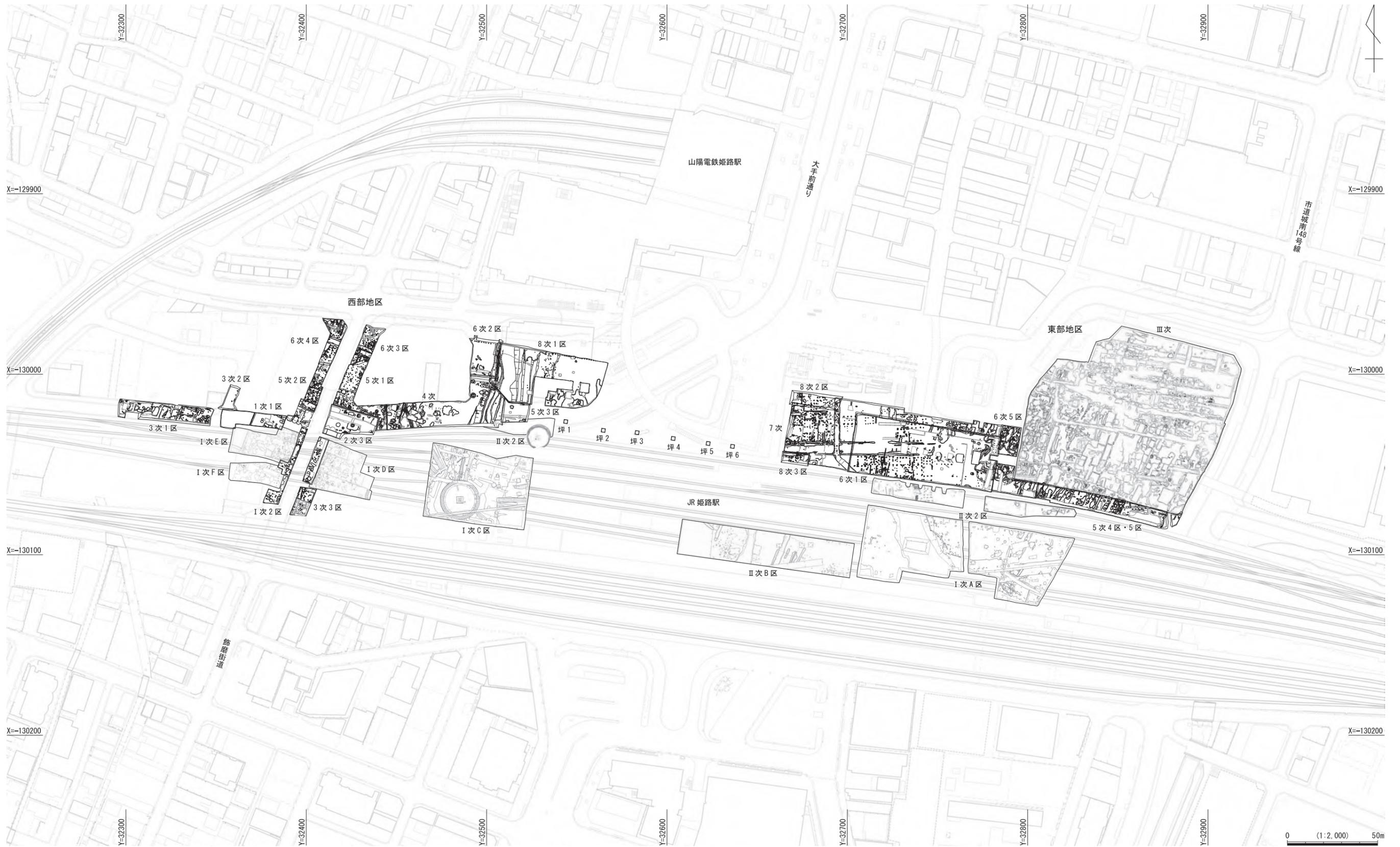


図12 豆腐町遺跡調査平面図

第2節 西部地区の遺構と遺物

かつての姫路駅構内の西に位置する調査区で、飾磨街道の西側まで広がる。調査回数等でいえば、1～4次、5次1区・2区・3区、6次2～4区、8次1区が該当する。西部の遺構は大きく旧流路（4次、5次3区、6次2区、8次1区）、飾磨街道沿いに江戸時代から弥生時代までの複数の遺構面、建物跡（3次3区、5次2区、6次4区）、井戸（4次、5次、6次）、溝（6次3・4区）、落ち込み（6次4区）等があげられる。これらの遺構は、基本的に飾磨街道に沿っており、飾磨郡条里の方向と合致する。

西部調査区の地形は、図6に見るように、飾磨街道沿いの幅30mほどが凹地となっている。遺構が集中するのは、飾磨街道沿いの凹地であり、堆積状況から複数面の遺構が確認できる。それ以外の地形の高まった部分は地山面が遺構検出面となっている。確認調査の結果、東部と西部の間には遺構の希薄な部分が存在することから、100mほどは本調査対象範囲から除外している。地形が高まっているため、遺構面が削平された可能性もあるが、古代以前を対象として見た場合、やはり、8次1区、6次2区、5次3区、4次にまたがるSR01の存在が西部地区と東部地区の境にあたっていると考えられる。SR01の規模は上幅で最大35m、全長は兵庫県調査分も含めて約100mを検出している。8次1区で実施した断ち割り調査で出土した木材の放射性炭素年代を参考にすれば、付近の地形は縄文時代後期以降に形成されている。SR01は弥生時代には凹地となっていたようで、SR01の底面には弥生時代の溝（水路）が3条確認できる。その後、奈良時代に最終的に埋没している。SR01の肩は緩やかで、明確な掘り込みをもたないが、その主軸は概ね飾磨郡条里に沿っている。SR01は自然地形であることから、周辺の地形自体も飾磨郡の条里方向と整合的であることが指摘できる。

井戸は江戸時代と中世、奈良時代の各時期のものを検出している。奈良時代の井戸は木組みで、中世以降、石組みに変化している。江戸時代の井戸は、最終的な廃絶は明治時代になってからであり、姫路駅の建設により、その機能を失い、町屋の立ち退き等が行われた結果と推測できる。これらの井戸から出土する遺物は、幕末から明治21年までにおさまるもので、良好な一括資料である。江戸時代の井戸を検出した位置は、飾磨街道から7～10m離れており、姫路城下町跡の町屋の基本構造である、ミセー水場ーウラの空間構成が飾磨津町に含まれる「外豆腐町」においても共通していることを示している。

建物跡は3次3区で中世の建物跡1棟、5次2区で中世の建物跡1棟、柵3条、古代の建物跡1棟、柵1条を検出した。周辺で実施した「豆腐町I次」調査では古代に位置づけられる3棟の建物跡が確認されている。これらの建物跡は6次4区で検出した建物跡と共通しており、2間×3間程度の建物が主軸を揃えて広がっていた様相が復元できる。これらの建物跡はいずれも飾磨郡条里の方向に沿っている。5次2区第2面で検出した柵跡についても、同様の規模の建物跡と考えられる。

溝は多数確認されているが、特に6次3・4区の2-SD01・SD02からは大量の遺物が出土した。この2条の溝は平行しており、主軸も飾磨郡条里に直交している。性格は断定できないが、当初から計画的に造られた可能性が高く、道路の可能性も視野にいれておきたい。この遺構から出土した遺物は良好な一括資料である。

土坑や柱穴は多数検出した。柱穴は、上記の建物跡を除き、復元できるものはない。しかし、その量から調査区外に広がる建物跡の一部を構成するものも存在していると思われる。土坑は3次3区SK46・SK48、5次1区SK24・SK30から中世のまとまった遺物が出土している。古代の土坑では、4次SK52と5次1区SK52が一連の遺構であり、鉄製鋤先を含む遺物がまとまって出土した。6次4区の北端で検出したSX01からは奈良三彩小壺を含む遺物が大量に出土した。土師器の多い組成であり、先の古代の溝と同様の時期に位置づけられるものである。

その他に4次では、鉄道関連の煉瓦遺構を検出した。兵庫県の調査により姫路駅構内に設けられた初代と2代目の転車台が確認されており、4次で検出した遺構もそれに関連するものと想定できる。



Y=32500

Y=32500

Y=32400

Y=32400

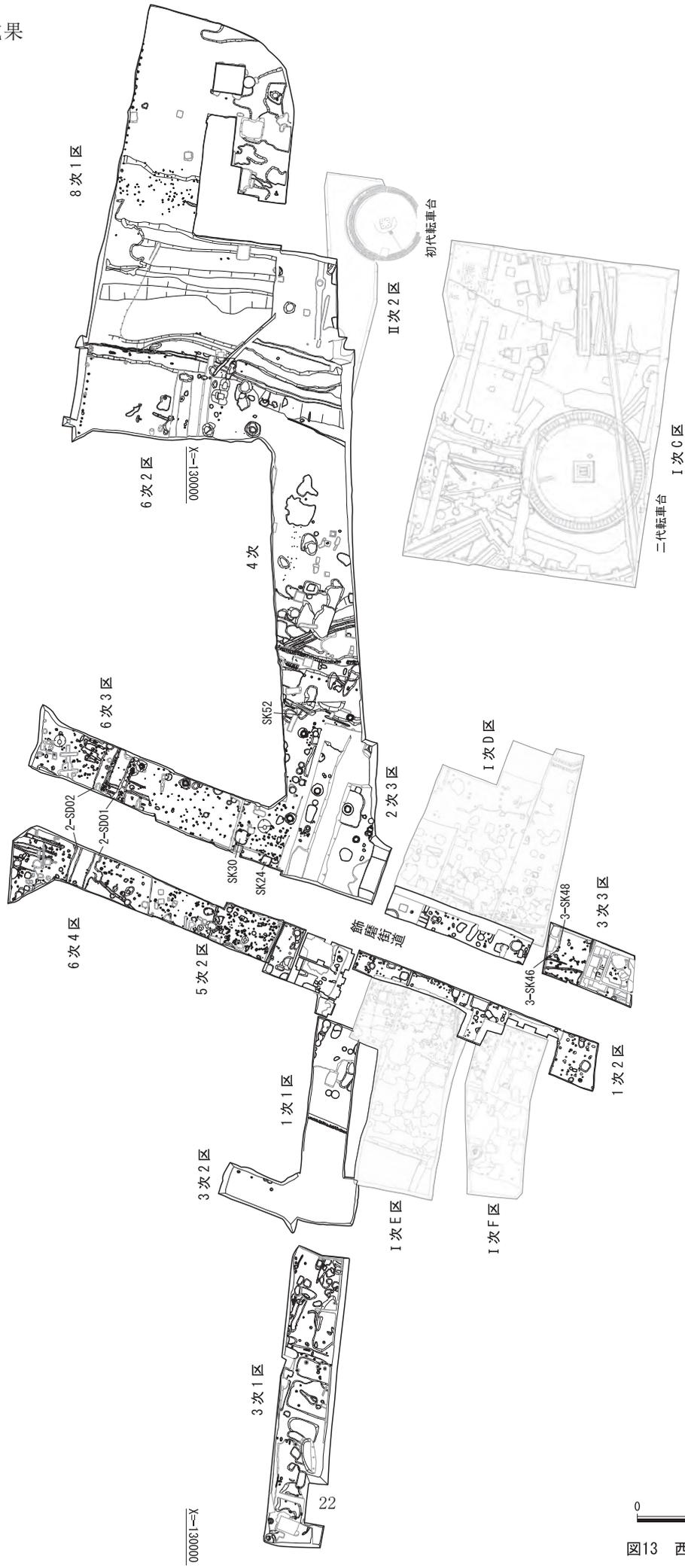


図13 西部地区調査平面図

1次

市道飾磨194号線(飾磨街道)の拡幅に伴う調査を平成13年度と14年度の2ヶ年にわたって実施した。飾磨街道の西側を1区と2区、東側を3区とした。平成13年度に1区と2区の調査、平成14年度に2区下層と3区の調査を実施している。2区については、本来複数の回数にまたがるが、煩雑になるため2区については全て1次とし、2次調査は3区として調査区ごとに記載する。なお、調査区に近接して、兵庫県教育委員会がJR高架事業に伴い発掘調査を実施している。

調査地は姫路城下町から飾磨へとつながる飾磨街道沿いに当たる。飾磨街道の主軸は概ねN21°Eであり、飾磨郡の条里地割の方向と合致している。飾磨街道の起点は飾磨(口)門であり、飾磨港まで延びる。調査地一帯は、江戸時代には飾磨津町の一つで、「外豆腐町」と呼ばれていた。

飾磨街道沿いは、第II章第1節で述べたように4次調査区に比べて落ち込んでおり、飾磨街道を中心に複数時期の堆積が確認できる。そのため2区と3区は4面の遺構面を調査した。遺構面は基本的に江戸時代、中世、古代、弥生時代であるが、既存建物の攪乱等で検出レベルに高低差が生じ、認識した遺構面と検出遺構の時期が対応していない部分もある。1区は2区よりも遺構検出レベルは低いが、耕土直下に地山が確認できることから、遺構検出は地山面で行った。江戸時代の景観に基づけば、2区と3区が町屋の建物部分にあたり、1区が町屋の裏手に該当する。そのうち、遺物がまとまって出土した遺構を中心に報告する。

1区

(写真図版6)

調査区の基本層序は、盛土、近世整地層(3層)、中世耕土(4・5層)、堆積層(6層・7層)を経て黄褐色の地山に至る。調査時の地表面は標高11.0m、中世耕土の上面の標高は10.6m、地山上面は9.8～10.0mである。調査区壁面では基本層序が確認できるものの、調査区の大半が攪乱を受けていたため、地山上面を遺構検出面として1面で実施した。検出した遺構は埋桶、漆喰遺構、土坑、間知石組遺構、ピット等である。時期は近代から江戸時代に限定され、それより遡る時期の遺構は確認できなかった。

SK01

(遺物図版1-5)
(写真図版6-1145)

1区の東部、南壁沿いで検出した土坑である。検出規模で東西5.2m、南北3.2mを測る。深さは遺構検出面から最大で70cmを測る。土坑底は東側が一段下がっている。埋土からは大量の遺物が出土した。遺物は肥前系磁器碗1・2、外青磁碗3～5、広東碗6～8、丸碗9・10、碗蓋11・12、猪口13・14、徳利15～21、土師器皿22、柿釉皿23～25、紅皿26、灯明具27・29、織部向付28、肥前系磁器碗30、陶胎染付鉢31・32、京・信楽系陶器碗33～37、陶器片口鉢38、陶器瓶39、両手鍋40、陶器壺41、陶器甕42・43、土師器焙烙44～56、不明土製品57、瓦質土器鉢58、土師器火鉢59～61、火消壺62・64、土師器壺63、施釉陶器甕65、堺・明石系播鉢66・67、硯68、砥石69・70、軒丸瓦71、軒棧瓦72、寛永通宝73等が出土した。28のように時代が遡る遺物を含むが、広東碗、土師器焙烙、瀬戸内系焙烙、堺・明石系播鉢の様相から18世紀後半から19世紀前半に位置づけられる。

SK02

(遺物図版6)
(写真図版6-1)

SK01の北0.6mで検出した。平面形は長円形を呈し、検出規模は長辺1.2m、短辺0.65mを測る。深さは遺構検出面から18cmを測る。遺物は埋土から土師器灯明皿93、火消壺94が出土した。

SK03

(遺物図版6)
(写真図版6-1)

調査区南壁沿い、SK09と近接した位置で検出した。平面形は調査区外に広がるため不明である。検出規模で東西2.0m、南北0.45m、深さは遺構検出面から78cmを測る。遺物は紅皿74、肥前系磁器碗75・76、京・信楽系陶器碗77～79、土師器焙烙80、軒平瓦81、丹波焼甕82等が出土した。

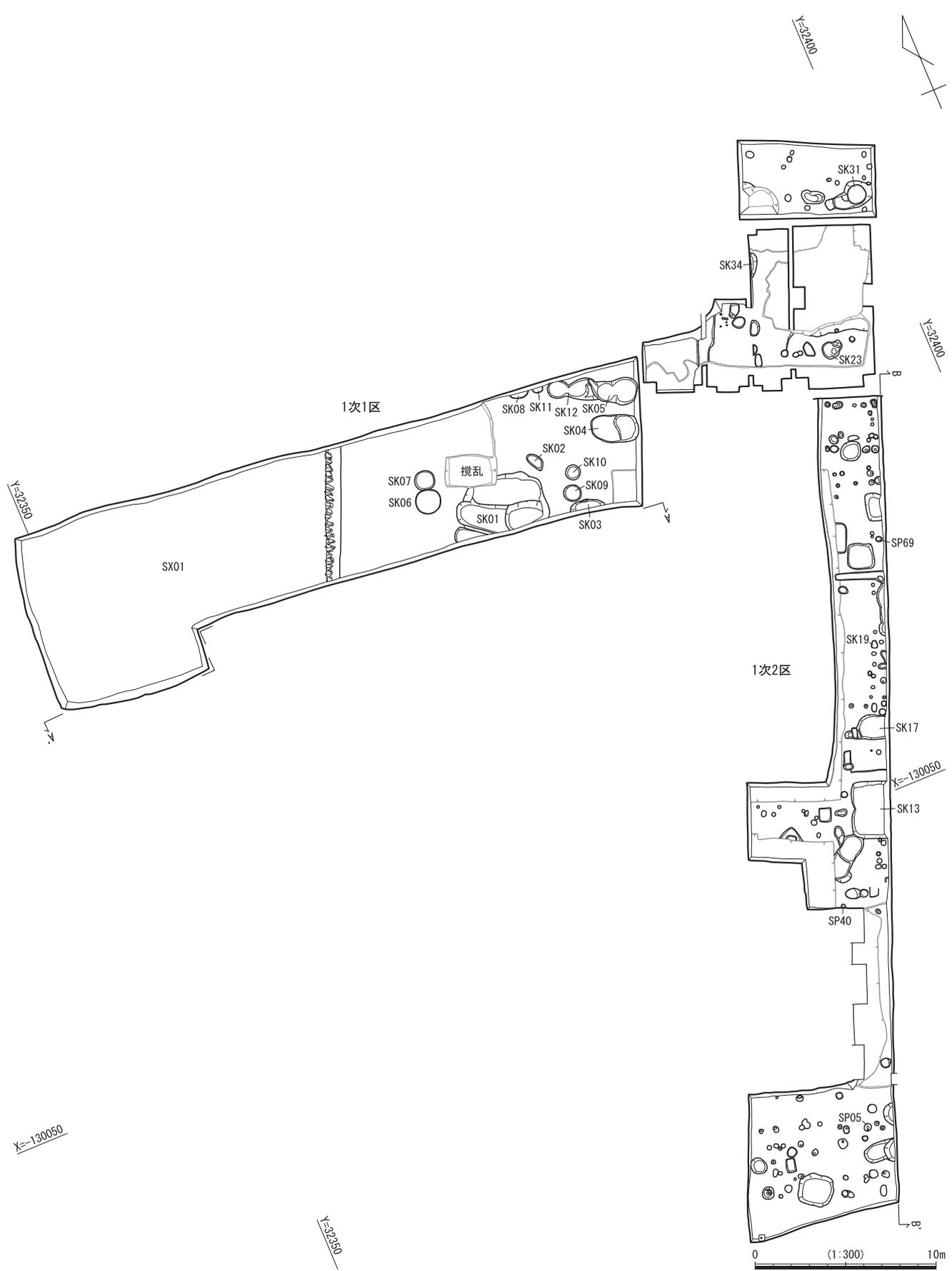


图15 1次1区·2区第1面平面图

第三章 調査の成果

SK04

(遺物図版6)
(写真図版6-1)

調査区東端で検出した。SK02の北東3.1mに位置する。平面形は東西に長い円形を呈し、検出規模は長辺2.62m、短辺1.52mを測る。深さは遺構検出面から0.4mである。遺物は肥前系磁器碗83、染付蓋84、土師器焙烙86～88、丹波焼甕89、大谷焼鉢90・91、施釉陶器蓋85、大谷焼甕92等が出土した。

SK05

(遺物図版6)
(写真図版6-1)

SK04の北0.4mで検出した。平面形は中央部がややくびれ、円形が2つ接合した形状を呈す。西で検出したSK12も同様の平面プランである。検出規模は東西2.8m、円形部の直径は西側が1.12m、東側が1.5mである。深さはいずれも同じで、遺構検出面から0.38cmを測る。遺物は堺・明石系播鉢95を図示した。

SK06・SK07

(写真図版6-5)

SK01の西約1mの位置で検出した。2基の漆喰遺構が南北に並ぶ。SK06は直径1.48m、深さは遺構検出面から約20cmである。SK07は直径1.01m、深さ88cmである。漆喰の厚さは1.5～2.0cmで、全面に認められる。遺物が出土していないため、時期等は不明である。

SK08

(遺物図版7)
(写真図版6-1145)

調査区北壁沿いで検出した。調査初期段階では一部の検出に留まったが、北側に調査区を拡張した際に円形プランを確認した。直径は0.9～1.1mを測る。深さは遺構検出面から38cmである。埋桶等の可能性もあるが、木質等は確認できなかった。遺物は、端反碗96・97、染付碗98、端反碗蓋99、合子蓋100・101、染付瓶102、陶器德利103、ままごと道具104、布袋德利105、金属製把手106、陶器鉢107、骨角製のヘラ108、瓦質製品109、堺・明石系播鉢110、瀬戸植木鉢111等が出土した。109は瓦を面取りしたもので、一見砥石状に見える。

SK09・SK10

(遺物図版8)
(写真図版6-1)

SK03の北側で検出した。平面形は円形を呈し、直径は約0.95mを測る。深さは遺構検出面から最大で0.86cmである。検出時には木質等を確認できなかったが、本来は埋桶遺構である可能性が高い。北0.15mの位置で検出したSK10と一連の遺構と考えられる。SK10は円形を呈す漆喰遺構で、直径は0.86mを測る。深さは遺構検出面から0.68mである。漆喰の厚さは1.5～2.0cmで、土坑内の全面に漆喰が認められる。遺物はSK09の埋土から備前焼蓋112、陶器蓋113・114、土瓶115・116等が出土した。

SK39

(遺物図版8)

第3面調査時に北側へ調査区を拡張した際に検出した遺構である。調査区外に広がるため、平面形は判然としないが、検出規模で東西5.2m、南北2.15mを測る。SK40を切っている。遺物は陶器落とし蓋117等が出土した。

SK40

(遺物図版8)

SK39に切られる遺構である。SK39と同様、調査区外に広がるため、平面形は判然としない。検出規模で東西8.8m、南北1.2mを測る。遺物は備前焼灯明皿118、陶器碗119、広東碗120・122、丸碗121、堺・明石系播鉢123、水差し124、備前焼甕125、土師器火消し壺126等が出土した。

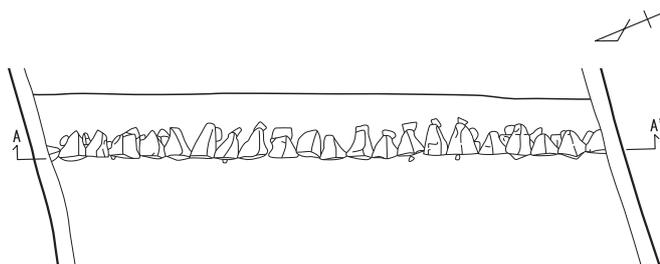
SX01

(遺物図版8)
(写真図版6-1-4)

調査区の西部で検出した間知石組みを伴う遺構である。石組みを東端として調査区西端を越えて広がる。埋土は最下層に砂、その上層に木質を含む粘土層であり、その上部は礫を含む土砂で埋められている。下層の堆積状況から機能時には滞水状態であり池の可能性が高い。検出規模は南北約10m、東西17mを測る。深さは遺構検出面から概ね40cmであるが、断面に残る石組みから本来は1.7m程の深さがあった。兵庫県が実施した「豆腐町I次」調査で、間知石組みの南側への延長部と西側へ屈曲するラインが見つかっている。後述する3次2区の全域も同遺構内に含まれると思われる。しかし、3次1区では延長部と想定される遺構は確認できないことから、3次1区までは広がっていないと推測できる。こうした周辺の検出状況を勘案すればSX01は南北30m以上、東西18m以上の規模と考えられる。

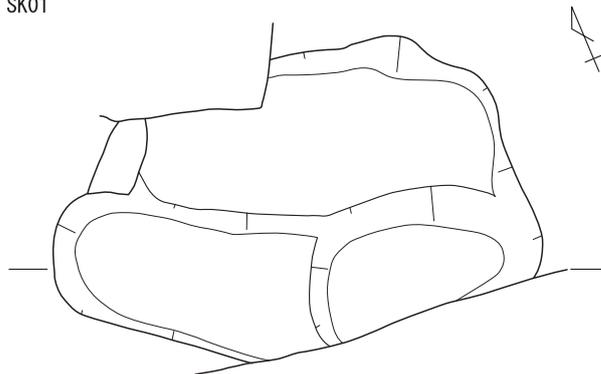
遺物は磁器碗127、印判手の磁器碗128、碁笥底の染付鉢129・130、陶器杯131、陶器杯

SX01



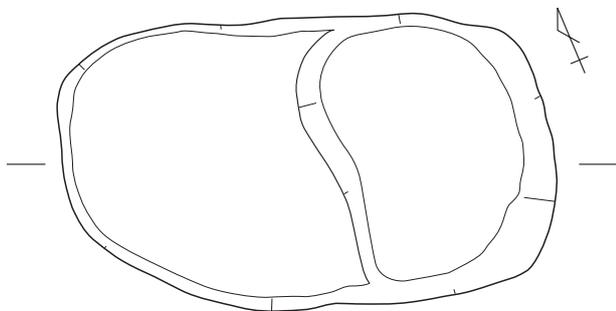
0 (1:100) 2m

SK01

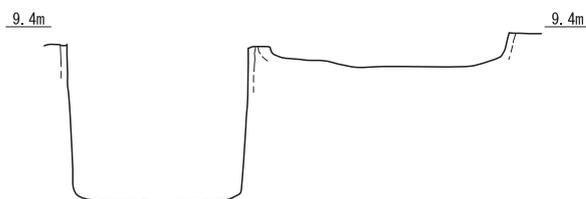
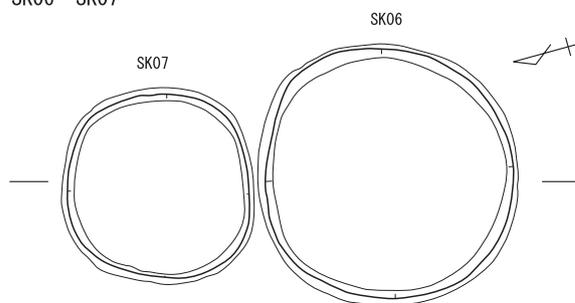


0 (1:80) 1m

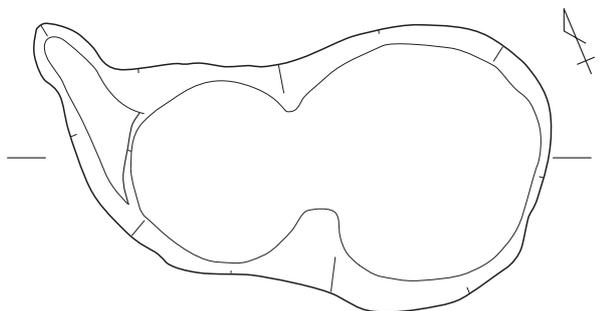
SK04



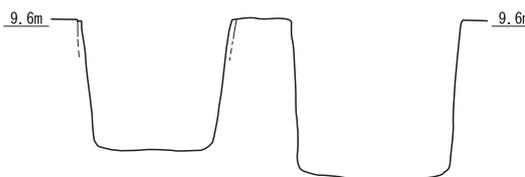
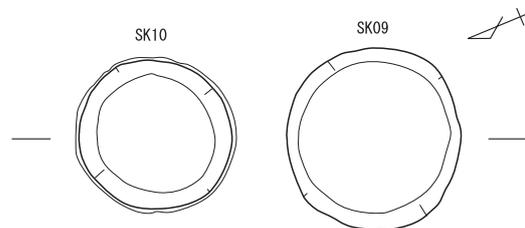
SK06 · SK07



SK05



SK09 · SK10



0 (1:40) 1m

图16 1次1区SX01、SK01 · SK04 · SK05 · SK06 · SK07 · SK09 · SK10平 · 断面图

第三章 調査の成果

132、灯明具 133、三彩鉢 134、陶器瓶 135、土人形 136、焜炉蓋 137、丹波焼播鉢 138 等が出土した。時期は総体として近代に位置づけられる。遺構が所在する場所は、飾磨街道沿いの町屋の裏手に当たるが、規模から観賞用の池ではなく、貯水等の実用的な機能を想定したい。姫路市内においては、間知石が一般に用材として使用されるのは明治時代以降であることから、出土遺物の時期とも矛盾しない。あるいは、規模を考えると鉄道関連の施設である可能性も十分考えられる。

2 区

(写真図版6-8)

市道飾磨 194 号線（飾磨街道）の拡幅に伴う調査区で、南北延長約 61.5 m、幅約 8 m を測る。兵庫県教育委員会の高架基礎部分の調査が先行しているため、調査区の形状は歪になっている。調査区の基本層序は盛土、近世整地層（1～3層）、中世耕土（4・5層）、灰黄褐色土（6層）、暗褐色土（7・8層）を経て黄褐色土の地山に至る。調査時点の地表面の標高は 10.7 m、中世耕土の標高は 10.1～10.0 m である。地山の標高は 9.7 m である。遺構面は 4 面で、中世耕土上面を第 1 面、灰黄褐色土上面を第 2 面、暗褐色土上面を第 3 面とし、地山を第 4 面とした。第 1 面は既存建物基礎の影響を受けているが、近世から近代にかけての柱穴、土坑等を検出した。第 2 面では中世に位置づけられる柱穴、土坑、溝等を検出した。第 3 面では古代と考えられる柱穴、土坑、溝等を検出したが、遺物の出土量は少なく、時期を特定する根拠に乏しい。第 4 面は地山を検出面とした。遺構は少なくピット、落ち込み等を検出した。

第 1 面

SP05

(遺物図版9)
(写真図版8-4)

調査区南部で検出した。平面形は円形を呈し、直径は約 40cm、深さは遺構検出面から 24 cm を測る。埋土は黄灰色で、周辺のピットも同様である。遺物は埋土から肥前系陶器碗 139 が出土した。

SP40

(遺物図版9)

SP05 の北約 12 m の位置で検出した。遺構の一部は調査区外にあるが、平面形は直径約 20cm の円形と推測される。深さは遺構検出面から 16cm を測る。埋土は SP05 と同様黄灰色を主体とする。遺物は丹波焼播鉢 140 が出土した。

SP69

(遺物図版9)
(写真図版8-2)

SP40 の北約 21 m の位置で検出した柱穴である。円形を呈し、直径は 15cm を測る。埋土から結晶片岩 141 が出土した。石棒の可能性もあるが、明確な製作痕跡が認められないことから意図的なものであるか不明である。いずれにせよ在地で産出する石材ではないため、何らかの目的があって搬入されたものと思われる。姫路市内の遺跡からは時代を問わず、こうした結晶片岩の出土例が確認できる。

SK13

(遺物図版9)
(写真図版8-1)

SP40 の北約 4 m で検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出状況から方形を呈すと考えられる。検出規模で南北 3.2 m、東西 1.75 m、深さは遺構検出面から 54 cm を測る。埋土から寛永通宝 142、染付小杯 143 が出土した。

SK17

(遺物図版10)
(写真図版8-1-145、
146)

SK13 の北約 2.4 m で検出した。調査区外に広がるため全容は不明である。検出規模で南北約 1.4 m、東西約 1.5 m を測る。深さは遺構検出面から 18cm である。土師器皿 164・165、瀬戸美濃焼折縁皿 166、肥前系陶器皿 167、肥前系陶器碗 169・170・173、瀬戸美濃焼灰釉皿 168・172、志野皿 171、志野向付 174、土師器鉢 175、肥前德利 176、土師器播鉢 177、備前焼甕 178、土師器焙烙 179、瓦質土器茶釜 180、茶臼の上臼 181、砥石 182～184、硯 185・186 等がまとめて出土した。遺物組成は、手づくね成形の土師器皿＋瀬戸美濃焼陶器＋肥前系陶器＋外面格子タタキの焙烙で構成される。肥前系磁器を含まない段階と考えられ、17世紀初頭に位置づけられる。本遺構は、姫路城外曲輪の外側にあたる当該地にお

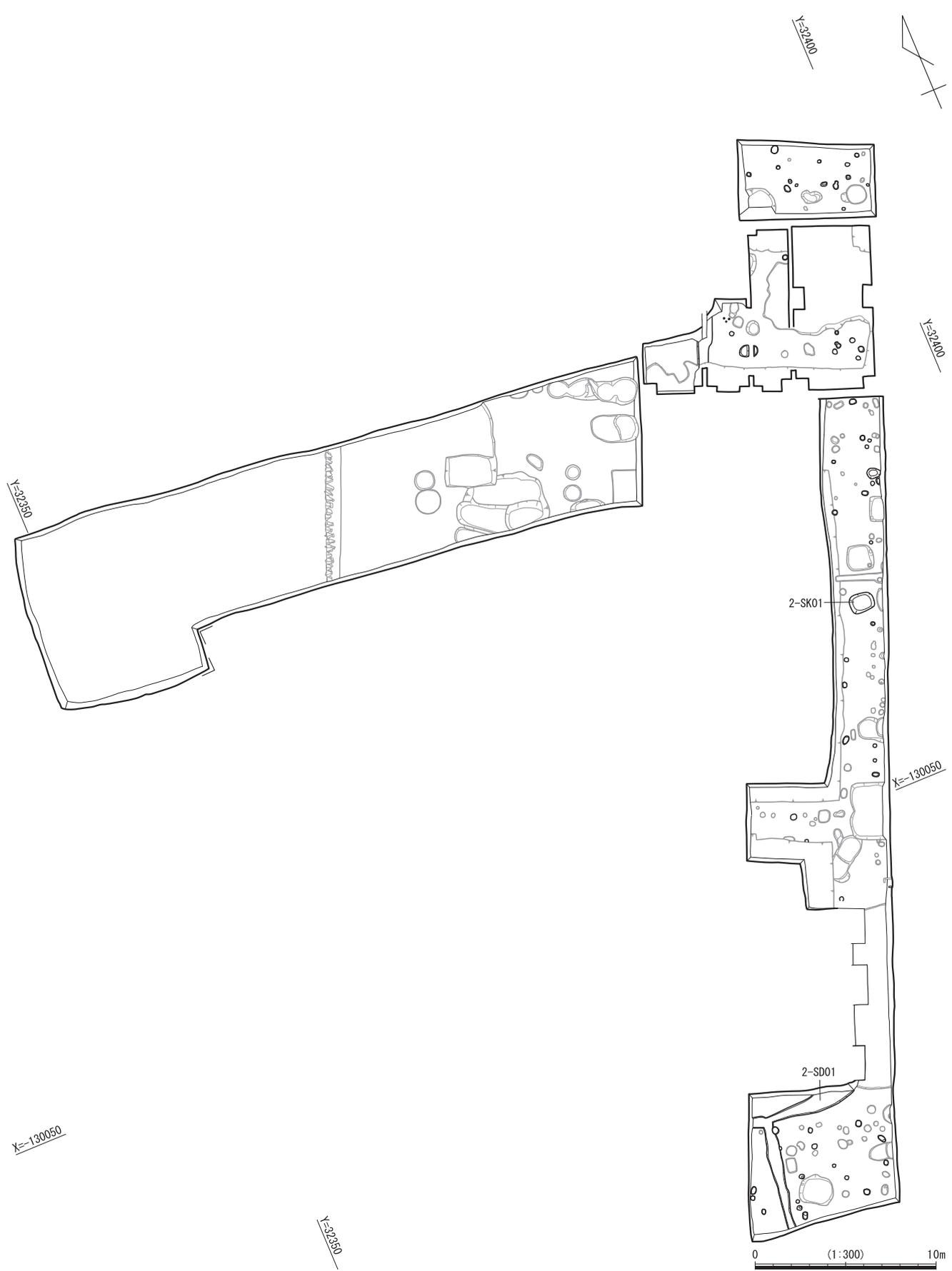


图17 1次1区·2区第2面平面图

第三章 調査の成果

いて当該時期に既に遺構が形成されていることを示し、飾磨街道沿いの町屋の形成時期を知るうえで重要な成果といえる。

SK19

(遺物図版9)
(写真図版7-1-146)

SK17の北約4mで検出した。平面形はやや歪な円形を呈し、長軸40cm、短軸34cmである。深さは遺構検出面から23cmを測る。遺物は埋土から瓶盥の底部と思われる144が出土した。SK17からSK19にかけてピットが直線状に並び、柵等を構成する可能性もある。

SK23

(遺物図版13)
(写真図版7-1)

SK19の北約16mの位置で検出した。SK23周辺は既存建物基礎の攪乱を受けており、全体的に遺構の残りは良くない。平面形はやや歪な円形を呈す。検出規模で東西約1.15m、南北約97cmを測る。深さは遺構検出面から37cmを測る。須恵器椀214、白磁碗215が出土した。第1面として調査した遺構であるが、実際には第2面に相当する面に帰属する。

SK31

(遺物図版9)
(写真図版6-7)

SK23の北約7.5mで検出した。平面形は円形を呈し直径は1.05m、深さは遺構検出面から47cmを測る。掘方はほぼ垂直であることから、本来は桶等を埋設していたのかもしれない。埋土から軒丸瓦149が出土している。

SK34

(遺物図版9)

SK23の北東約5mの位置で検出した。全容は第3面での拡張時に明らかにした。平面形は南北に長く南北1.6m、東西1.0mで北側が攪乱を受けている。端反碗蓋145、染付碗146、染付小碗147、陶器蓋148が出土した。

SK35

(遺物図版9)

第3面の調査時に拡張した範囲で検出した。調査面は第3面であるが、本来は第1面の遺構である。調査区西壁沿いで検出した。平面形は隅丸長方形を半裁したような形状を呈すが、調査区外に広がるため全容は不明である。検出規模で南北3.2m、東西0.9mを測る。深さは遺構検出面から59cmを測る。遺物はまとまって出土した。肥前系染付碗150～156、陶器椀157～159、土師器壺160、堺・明石系播鉢161・162、土師器焙烙163等がある。

SK37

(遺物図版13)
(写真図版146)

SK35の北約4mの位置で検出した。平面形は南北に長い円形を呈し、南側を攪乱に切られる。検出規模で長軸1.6m、短軸1.0m、深さは遺構検出面から43cmを測る。埋土から土師器小皿216・217、土師器皿218、土師器杯219、白磁碗220、青磁碗221等が出土した。第3面で検出したが、本来は第2面の遺構である。

SK38

(遺物図版11-12)
(写真図版146)

SK37の北0.4mの位置で検出した。調査区外に広がるため全容は不明である。検出規模で南北1.1m、東西1.6mを測り、深さは遺構検出面から30cmである。埋土から紅皿187、陶胎染付碗188、染付碗189～191・193、白磁小杯192、染付碗194、染付鉢195、染付蓋196・197、染付皿198、柿釉皿199、陶器椀200～203・205・206、青磁鉢204、陶器蓋207、白磁碗底部208、土師器焙烙209・210、四耳壺211、陶器壺212、軒平瓦213等が出土した。208は混入遺物であろう。遺物には時期幅があるが、広東碗189や端反碗蓋197、土師器焙烙210の様相から遺構の時期は19世紀前半頃に位置づけられる。

第2面

2-SK01

(遺物図版13)
(写真図版7-3-146)

調査区のほぼ中央で検出した隅丸方形を呈す土坑である。検出規模で長軸1.37m、短軸1.04mを測り、深さは遺構検出面から概ね15cmである。埋土から土師器小皿222～227、土師器托皿228、須恵器小皿229、須恵器椀230・238、白磁碗231・232、白磁皿233、鞆羽口234、土師器杯A235、須恵器鉢236・237、須恵器杯A239等が出土した。235と239は混入したもので、土師器小皿、須恵器椀の様相から村東遺跡Ⅳ期に該当する。

2-SD01

(遺物図版13)
(写真図版8-5)

調査区南端で検出した。北東から西へ延びる溝で、延長約6mを検出した。西端から0.6m東の位置で南へ分岐し、延長約5.8mを検出した。幅は最大で1.0m、最小で0.37mである。溝の断面は浅い皿状を呈し、深さは遺構検出面から8～10cmである。埋土から土師器杯240、須恵器椀241、土師器羽釜242等が出土した。

第3面

3-SD02

(遺物図版13)
(写真図版8-1)

第3面の調査時に調査区のほぼ中央で検出した。南北に延びる溝で延長約3.0m、幅約0.5mである。遺構の主軸はN 21° Eで飾磨街道に沿っている。溝の断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から概ね10cmである。本遺構の南側に第1面で検出したSK17の掘方があり、その南にも同じような溝が延びている。わずかにズレるため一連となる確証はないが、SK13の掘方の南側にも延びていることから、これらが一連の遺構であるならば延長13.2mとなる。遺物は土師器杯243、須恵器杯A 244が出土した。

第4面

地山を検出面とするが、平面図は第3面に追加する形で作成されているため、図18を使用する。遺構は点的な検出に留まり、面的には広がらない。

4-SP01

(遺物図版13)
(写真図版8-7-146)

調査区南端は地山面で4-SX01とした半円形に広がる暗褐色土の落ち込みを検出した。調査段階では竖穴建物の可能性も追求したが、柱穴等は確認できなかった。4-SP01は4-SX01内で検出したピットである。便宜上、第3面の平面図に図示しているが、検出レベルが異なっている。平面は円形を呈し、直径は18cmである。埋土からサヌカイト製の剥片245、打製石庖丁の刃部とみられる246が出土した。

4-SP04

(遺物図版13)
(写真図版146)

4-SP01の北約25mの位置で検出した。平面は南北に長く、長軸90cm、短軸50cmである。深さは遺構検出面から4cmと浅い。埋土からサヌカイト製の凹基式石鏃247、砥石248が出土した。

4-SP13

(遺物図版13)
(写真図版146)

調査区北端で検出した。平面は円形を呈し、直径8cm、深さは遺構検出面から10cmを測る。埋土からサヌカイト製の剥片249が出土した。2次加工が認められ、打製石庖丁の可能性はある。

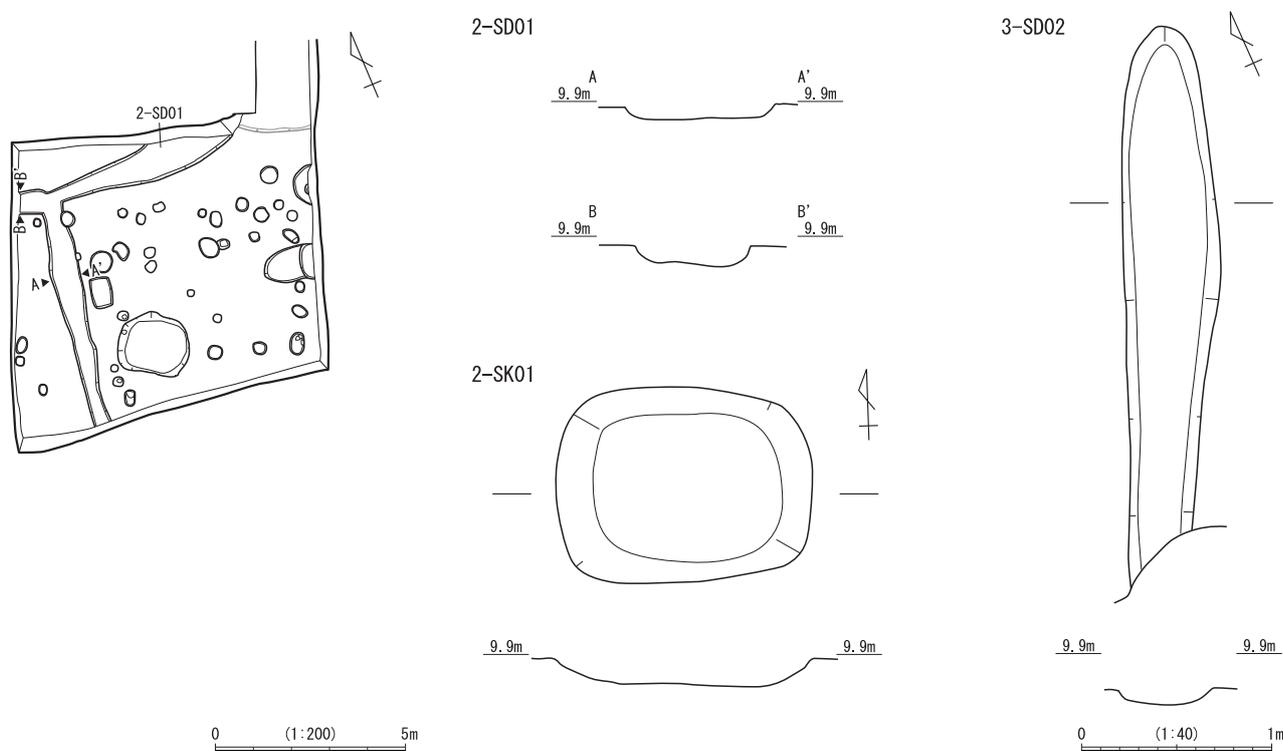


図18 1次2区2-SD01、2-SK01、3-SD02平・断面図

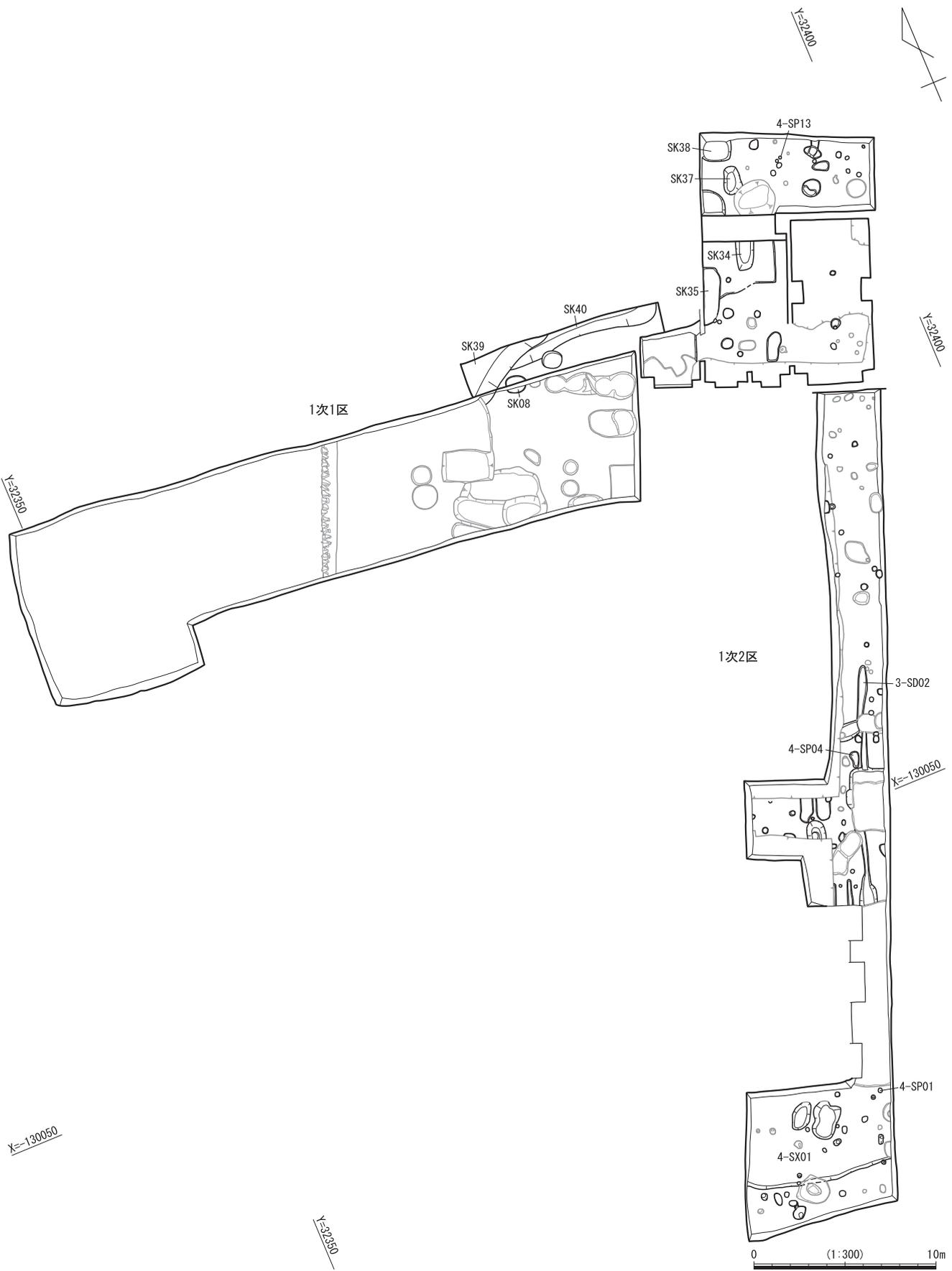


図19 1次1区・2区第3面・第4面平面図

2次3区

(写真図版9-11)

2区と道路を挟んで東に位置する。市道飾磨194号線（飾磨街道）の拡幅部分と東へ延びる市道156号線に該当し、調査区は便宜上北部と南部に分かれているが、遺構名は連番としている。南部調査区の東壁沿いは兵庫県教育委員会の豆腐町I次調査と重なっている。北部調査区は東西27m、南北17m、南部調査区は南北27m、東西6mを測る。北部調査区の基本層序は、盛土、近世整地層（1～4層）、中世耕土（5・6層）、灰色～灰黄褐色土（7・8層）、暗褐色土（9～12層）を経て黄褐色土もしくは砂礫の地山に至る。調査時の地表面は標高10.9m、中世耕土は10.2～10.35m、地山は9.3～10.0mである。調査区の東側は地山が高く、遺構検出は1面で行った。飾磨街道沿いの西側は地山の検出レベルが低く、遺構検出を4面行った。南部調査区も飾磨街道に沿っていることから基本的に同じである。遺構検出面は若干の起伏はあるものの、中世耕土上面を第1面、灰黄褐色土上面を第2面、暗褐色土上面を第3面とし、第4面は地山を検出面としている。第1面では井戸、石組み遺構、漆喰遺構、土坑、ピット等を検出した。第2面、第3面では溝、土坑、ピットを検出した。第4面ではピット等を検出している。

第1面

SE01

(遺物図版14)
(写真図版9-110-1)

調査区北端で検出した。攪乱の北に位置し、掘方は円形を呈し直径2.1m、井側は石組みで、河原石を使用し、円形に組んでいる。直径は約80cm、深さは遺構検出面から1.4mまで調査したが、安全のためそれ以上は掘り下げていない。遺物は井側内埋土から染付碗250、堺・明石系播鉢251、軒棧瓦252、丸瓦253・254、煉瓦255が出土した。253と254の丸瓦には幕末以降瓦生産が盛んになった姫路市船津町の「仁色瓦」の刻印が認められる。煉瓦255には「K」と「O」の刻印が認められる。類例は、加古川市西神吉町岸において報告されている（旧道倶楽部活動報告書・関西地方煉瓦刻印分布：<http://www.kyudou.org/KDC/brick/brick.html>）。現物を確認していないため、同一のものであるかどうかは判断できないが、播磨地域で製作された可能性もある。この煉瓦が混入でなければ、井戸の最終的な廃絶は近代もしくは現代と考えられる。

SE02

(遺物図版14)

SE01の南約4.5m、攪乱部の南側で検出した。掘方は円形を呈し直径約2.4m、井側は石組みで河原石を使用し、円形に組んでいる。石組みの内径は約0.9m、深さ2.15mまで掘り下げた。井側内埋土から染付碗256・257、軒平瓦258が出土した。

SE03

(遺物図版14)
(写真図版10-2)

SE02の西約6.0mの位置で検出した。遺構検出面から1.3m下で円形の石組みを確認した。掘方は円形を呈し、直径は2.0m、深さは遺構検出面から約2.3mである。石組みの内径は0.6mで、石組みは0.7m残存していた。井側内埋土から染付碗259・260、染付皿261、丹波焼播鉢262が出土した。

SE04

(遺物図版14)
(写真図版10-3)

SE03の東1.5mで検出した。掘方は円形を呈し、直径は1.3m、井側は河原石を円形に組み、内径は0.7mである。石組みと掘方径はほぼ同じである。深さ1.37mまで確認した。井側内埋土から染付碗263、染付蓋264、陶器小杉形椀265、陶器筒形椀266、堺・明石系播鉢267、陶器甕268、土師器焙烙269・270が出土した。焙烙269と270の様相から18世紀後半頃に位置づけられる。

SF01・SF02

(遺物図版15)
(写真図版10-5)

SE04の南東約1.0mで検出した、石組み遺構である。石組みは2基あり、西側をSF01、東側をSF02とした。SF01の北西側は攪乱を受け残存していないが、両遺構は当初から対になるように構築されている。SF02の平面形は長方形を呈し、南北方向に長く70cm、東西方向は50cmを測る。SF01は残存部で東西1.0m、南北90cmを測り、SF01よりも規模が大きい。SF01の埋土内から染付碗の蓋271、染付碗272が出土した。SF02からは遺物は出土しなかった。

第三章 調査の成果

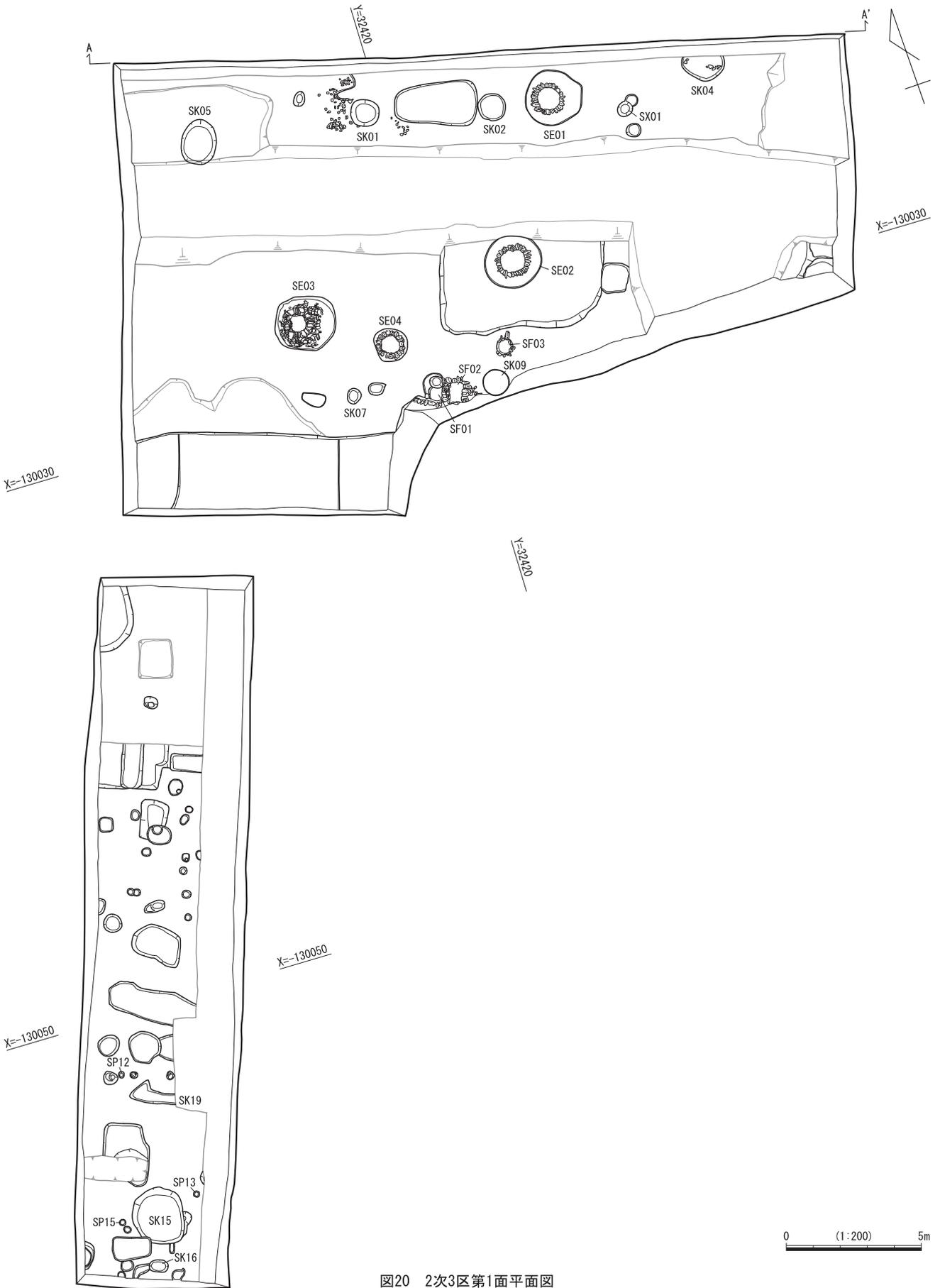
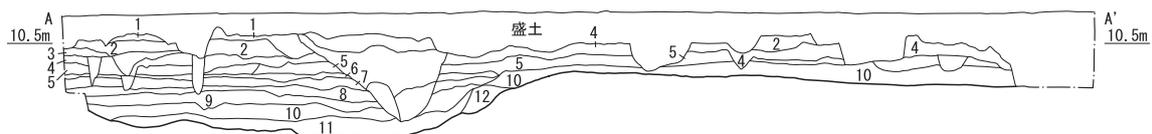
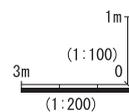


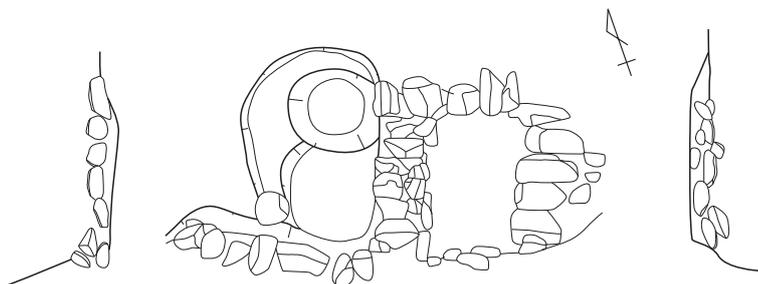
図20 2次3区第1面平面図



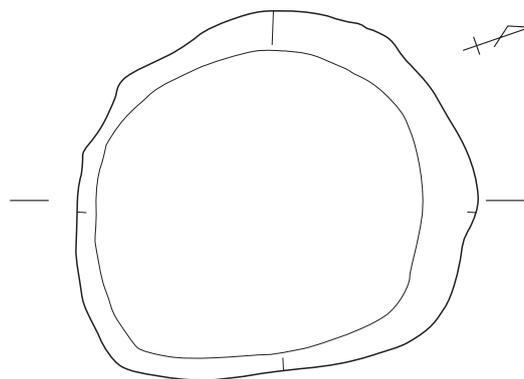
- | | |
|----------------|----------|
| 1. 暗灰黄色土 (整地層) | 7. 灰色土 |
| 2. 暗灰黄色土 (整地層) | 8. 灰黄褐色土 |
| 3. 暗褐色土 (整地層) | 9. 暗褐色土 |
| 4. 黄褐色土 (整地層) | 10. 褐灰色土 |
| 5. 灰色土 (中世耕土) | 11. 暗褐色土 |
| 6. 黄色土 (床土) | 12. 褐灰色土 |



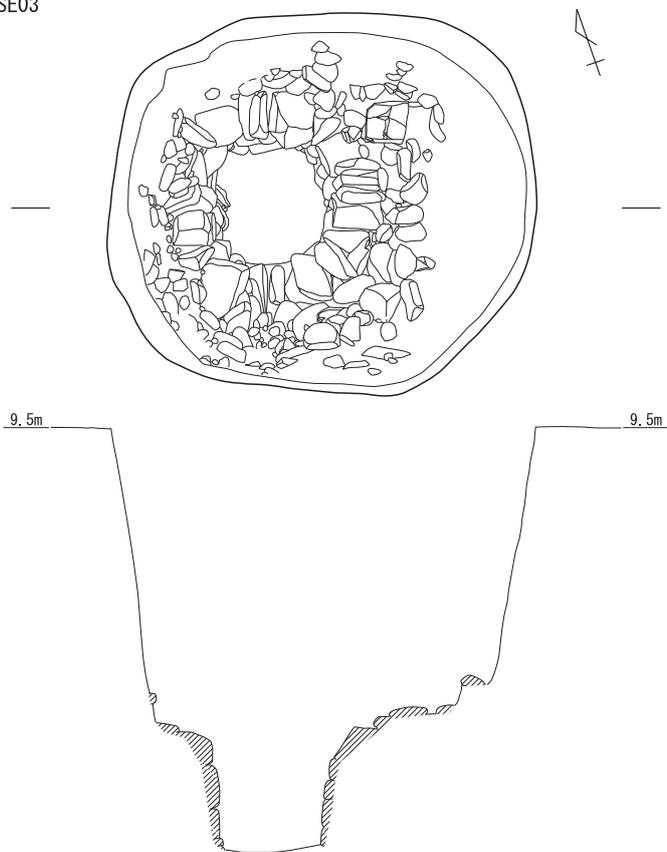
SF01 · SF02



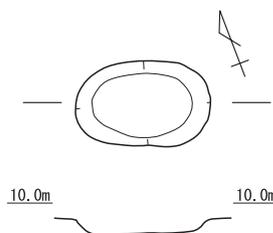
SK15



SE03



SK16



SK19

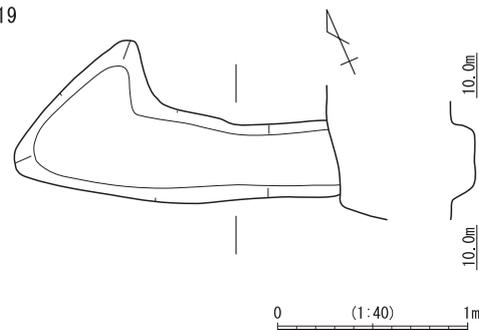


图21 2次3区北壁土层断面图、SF01 · SF02、SE03、SK15 · SK16 · SK19平 · 断面图

第三章 調査の成果

- SF03**
(遺物図版15)
(写真図版10-6)
SE02の南2.0mの位置で検出した。河原石を円形に組んだ遺構である。掘方は検出できていない。内径60cm、石組みの外径は80cmを測る。深さは遺構検出面から17cmである。石組み内の埋土から赤絵碗273、染付燭台274が出土した。274の底部外面には朱書きが認められる。
- SK01**
(遺物図版15)
(写真図版10-4)
SE01の西5.5mの位置で検出した漆喰塗り土坑である。掘方は円形を呈し、直径は約1.1mである。深さは遺構検出面から45cmを測る。土坑内は厚さ1cm程の漆喰が全面に認められる。染付碗275、青花碗276、丸瓦277が出土した。277は凹面に布目が残る。
- SK02**
(遺物図版15)
(写真図版9-1)
SE01の西80cmの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径1.03m、深さは遺構検出面から48cmを測る。埋土から土師器小皿278、染付皿279、陶器筆立280、土師器壺281、陶器282、陶器皿283が出土した。
- SK04**
(遺物図版15)
(写真図版9-1)
SE01の東約4.0mの位置で検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出規模で南北95cm、東西1.6m、深さは遺構検出面から12cmを測る。埋土から青花碗284、瀬戸美濃焼陶器碗285、焙烙286が出土した。286は外面格子タタキを施す。遺物が少なく明確に時期は決め難いが、江戸時代初頭もしくは16世紀末に位置づけられる。
- SK05**
(遺物図版16)
(写真図版9-1)
SK01の西約5mで検出した。平面形は南北に長い円形を呈し、南北1.7m、東西1.3m、深さは遺構検出面から17cmを測る。埋土から丹波焼甕287が出土した。
- SK07**
(遺物図版16)
(写真図版9-1)
SF01の西約2mで検出した。平面形は南北にわずかに長い円形を呈し、南北0.6m、東西0.5m、深さは遺構検出面から8cmを測る。埋土から肥前陶器皿288、硯289が出土した。288の底部には積読できないが墨書が見られる。
- SK09**
(遺物図版16)
(写真図版10-7)
SF02の東0.4mで検出した漆喰塗り土坑である。円形を呈し、直径1.0m、深さは14cm残存していた。漆喰の厚さは1.5～2.0cmである。埋土からは漆喰片に混じって京・信楽系陶器碗290、備前焼鉢291、備前焼播鉢292・293、土師器炮烙294が出土した。294は外面格子タタキを有し、17世紀初頭前後に位置づけられるが、他は概ね18世紀後半の様相を示している。
- SK15**
(遺物図版16)
(写真図版11-1)
南側の調査区南端で検出した。平面形は円形を呈し、南北2.13m、東西1.9mを測る。深さは遺構検出面から38cmである。遺物はまとまった出土ではないが、埋土から肥前系陶器皿295、肥前系陶器碗296・297、備前焼壺298、備前焼播鉢299が出土した。
- SK16**
(遺物図版16)
(写真図版11-1)
SK15の南50cmの位置で検出した。東西に長い楕円形を呈す。長軸72cm、短軸45cm、深さは遺構検出面から8～10cmを測る。埋土から土師器皿300が出土した。
- SK19**
(遺物図版16)
(写真図版11-1)
SK15の北約3mで検出した。東西に長いL字形を呈し、調査区外に広がる。延長1.72m、幅は最大で82cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは遺構検出面から概ね10cmである。埋土から出土した碁石301を図示した。
- SP12**
(遺物図版17)
(写真図版11-1)
SK19の西50cmの位置で検出した。円形を呈し、直径は20cmを測る。深さは遺構検出面から15cmである。埋土から染付碗302が出土した。
- SP13**
(遺物図版17)
(写真図版11-1)
SK15の東50cmの位置で検出した。円形を呈し、直径は22cm、深さは遺構検出面から14cmを測る。埋土から土師器小皿303が出土した。
- SP15**
(遺物図版17)
(写真図版11-1)
SK15の西で検出した。円形を呈し、直径は22cm、深さは遺構検出面から16cmを測る。埋土から土師器焙烙304が出土した。外面に右上がりの平行タタキを施し、遺物の時期は17世紀前半におさまる。
- SX01**
(遺物図版17)
(写真図版9-1-147)
SE01とSK04の間で検出した埋甕遺構である。掘方は円形を呈し、直径55cm、深さは遺構検出面から17cmを測る。掘方内に土師器鉢305を配していた。内面には炭酸カルシウムと見られる付着物が見られることから便所甕もしくは肥溜めに類する機能が想定できる。

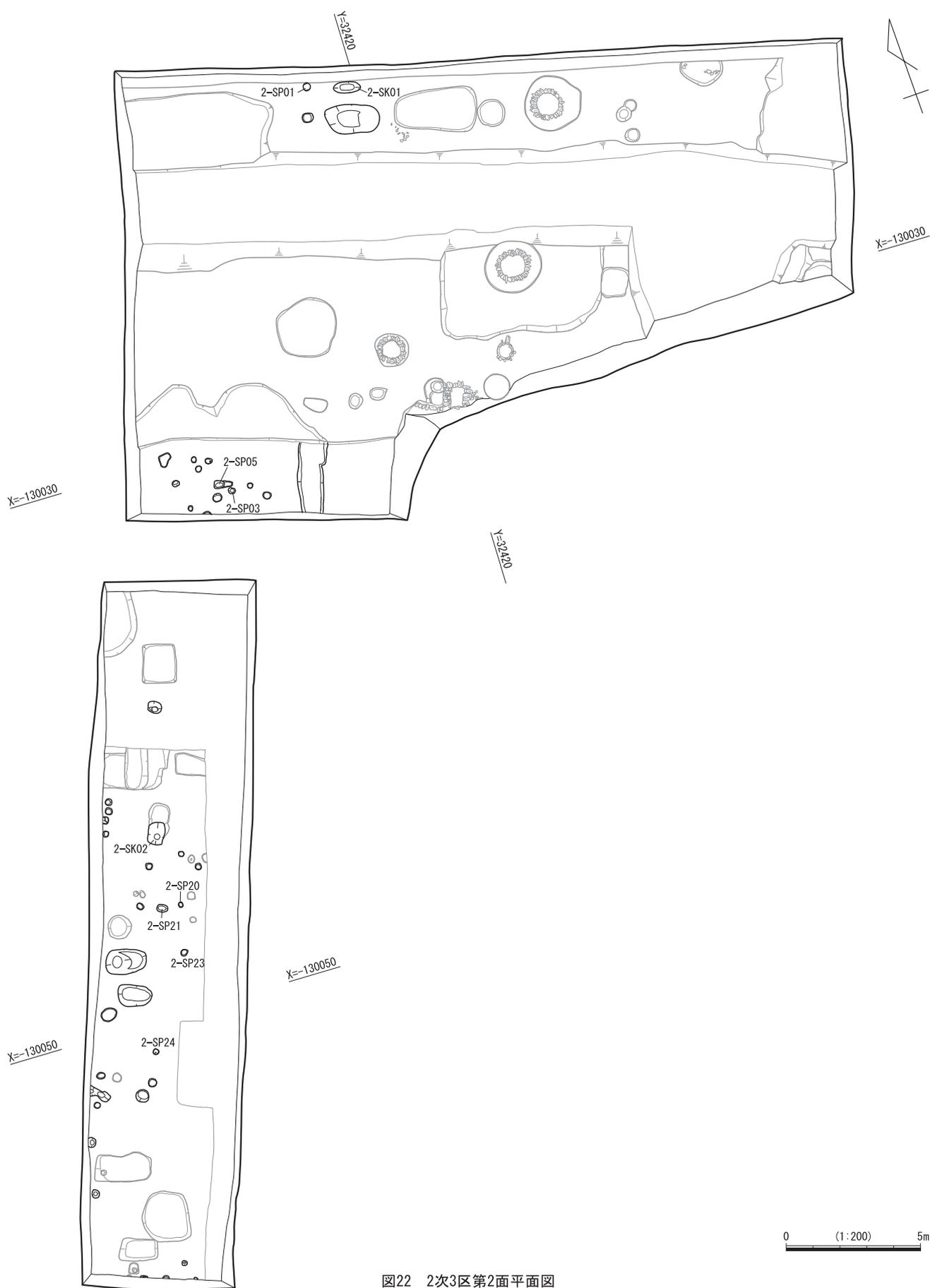


图22 2次3区第2面平面图

第三章 調査の成果

第2面

2-SK01

(遺物図版17)
(写真図版10-8)

北側の調査区西端で検出した。平面は不整形を呈し、長軸 1.0 m、短軸 42cm、深さは遺構検出面から 80cm を測る。遺物はまとまった状態ではなかったが、埋土から土師器小皿 306・307、肥前系陶器椀 308、土師器甕 309・310、備前焼播鉢 311、須恵器甕 312 が出土した。308 は胎土目の唐津焼であるが、その他は概ね 13 世紀前半に位置づけられる。

2-SK02

(遺物図版17)
(写真図版11-3)

南側の調査区北部で検出した。平面は隅丸方形を呈し、長軸 85cm、短軸 60cm と南北方向に長い。深さは遺構検出面から 1.0 m を測る。断面は播鉢状を呈す。埋土から土師器小皿 313、土師器皿 314 が出土した。

2-SP01

(遺物図版18)
(写真図版10-8)

2-SK01 の西 85cm の位置で検出した。円形を呈し、直径は 28cm を測る。深さは遺構検出面から 20cm である。埋土から須恵器杯 B 315 が出土した。

2-SP03

(遺物図版18)
(写真図版11-2)

2-SP01 の南約 15 m の位置で検出した。円形を呈し、直径は 25cm を測る。深さは遺構検出面から 34cm である。遺物は埋土から須恵器椀 316 が出土した。

2-SP05

(遺物図版18)
(写真図版11-2)

2-SP03 の北に接した位置で検出した。掘方は東西に長く、柱痕跡を掘方の西部で検出した。長軸約 71cm、短軸 30cm、深さは遺構検出面から 32cm を測る。柱痕跡の埋土から土師器長胴甕の口縁部 317 が出土した。

2-SP20

(遺物図版18)
(写真図版11-3)

2-SK02 の南東 2.3 m の位置で検出した。円形を呈し、直径は 18cm を測る。深さは遺構検出面から 17.5cm である。埋土から瀬戸灰釉丸皿 318 が出土した。

2-SP21

(遺物図版18)
(写真図版11-3)

2-SP20 の西 45cm の位置で検出した。東西に長い円形を呈し、長軸 45cm、短軸 30cm を測る。深さは遺構検出面から 24cm である。埋土から須恵器甕 319 が出土した。

2-SP23

(遺物図版18)
(写真図版11-3)

2-SP20 の南 1.5 m で検出した。円形を呈し、直径は 25cm を測る。深さは遺構検出面から 31cm である。遺物は埋土から土師器小皿 320 が出土した。

2-SP24

(遺物図版18)
(写真図版11-3)

2-SP23 の南西 3.6 m で検出した。円形を呈し、直径は 22cm を測る。深さは遺構検出面から 16cm である。遺物は埋土から土師器小皿 321 が出土した。

第3面・第4面

3-SP05

(遺物図版18)

北部調査区の北端で検出した。円形を呈し、直径は 20cm を測る。深さは遺構検出面から 12cm である。埋土から須恵器甕を再加工した円盤状土製品 324 が出土した。

3-SP73

(遺物図版18)
(写真図版11-4-147)

南部調査区のほぼ中央で検出した。円形を呈し、直径は 23cm を測る。深さは遺構検出面から 15cm である。埋土は黄灰褐色で第2面と共通する。埋土から縄文土器深鉢の口縁部とみられる 322 が出土した。細片であるが、波状口縁の一部であろう。

3-SP100

(遺物図版18)
(写真図版11-4-147)

3-SP73 の北約 9 m の位置で検出した。当該部分は攪乱を受けているため、第4面にあたる地山面のみ残存していた。本来第4面に帰属する遺構であるが、ここで報告する。隅丸方形を呈し、一辺約 50cm を測る。断面は播鉢状となり、深さは遺構検出面から 15cm である。埋土から外面格子タタキを施す韓式系軟質土器 323 が出土した。

遺構に
伴わない遺物(遺物図版18)
(写真図版147)

遺構検出中あるいは包含層から遺物 325～335 が出土した。328～330、333 は2区から、残りは3区からの出土である。石製印 325、堺・明石系播鉢 326 は第1面検出中に出土した。325 は印面が2面ある。土師器椀 327、須恵器椀 328～331、330 は西播系である。331 の体部外面には「二」の墨書が見られる。須恵器杯 B 蓋 332、須恵器壺底部 333、弥生土器高杯脚部 334、弥生土器壺底部 335 が出土した。弥生土器ミニチュア壺 336 と椀形高杯 337 については1次もしくは2次調査において出土したものであるが、区名等の情報が欠落しているため出土場所等は特定できない。そのため、遺構に伴わない遺物として報告する。いずれも器表の残りは良い。

2次3区

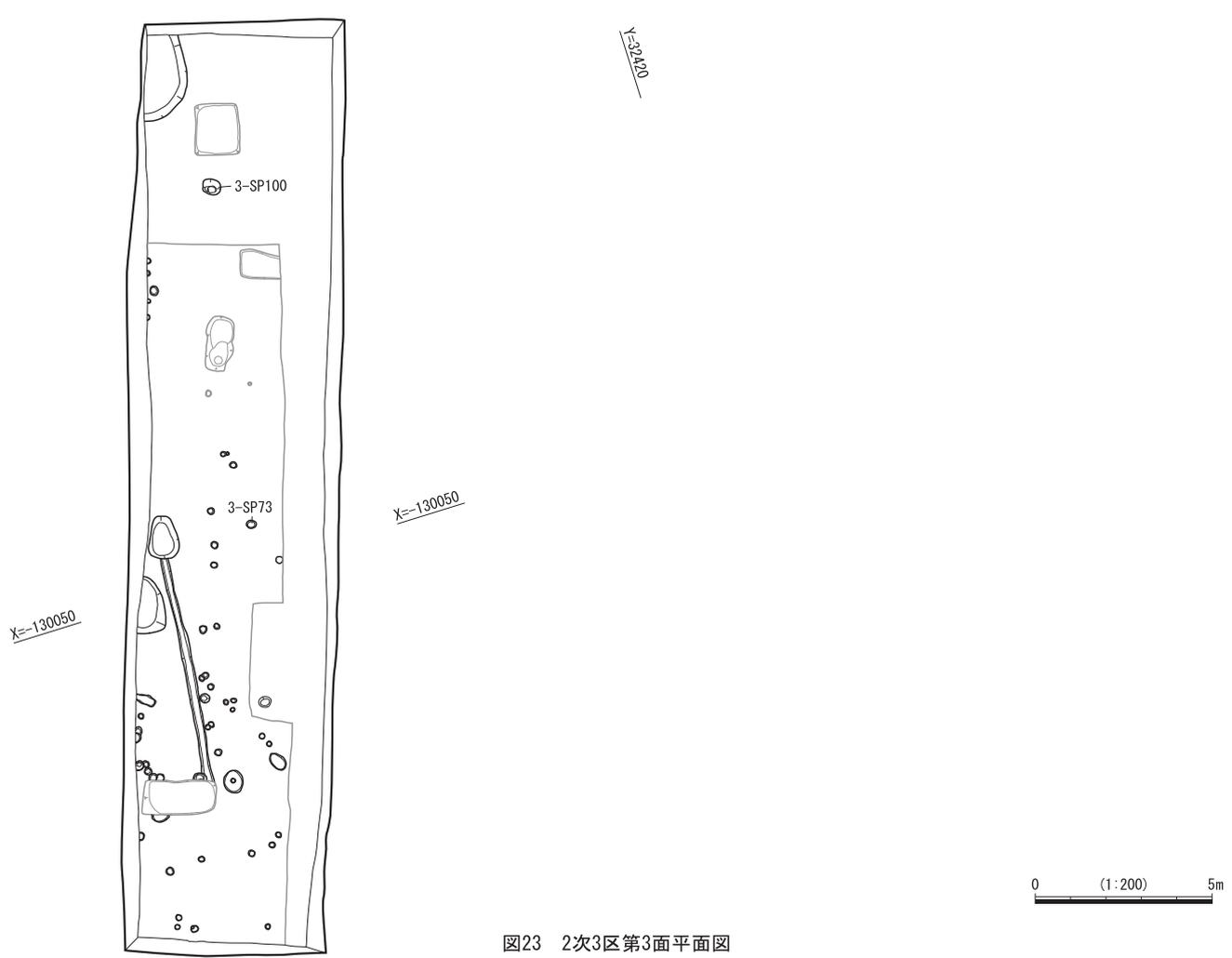
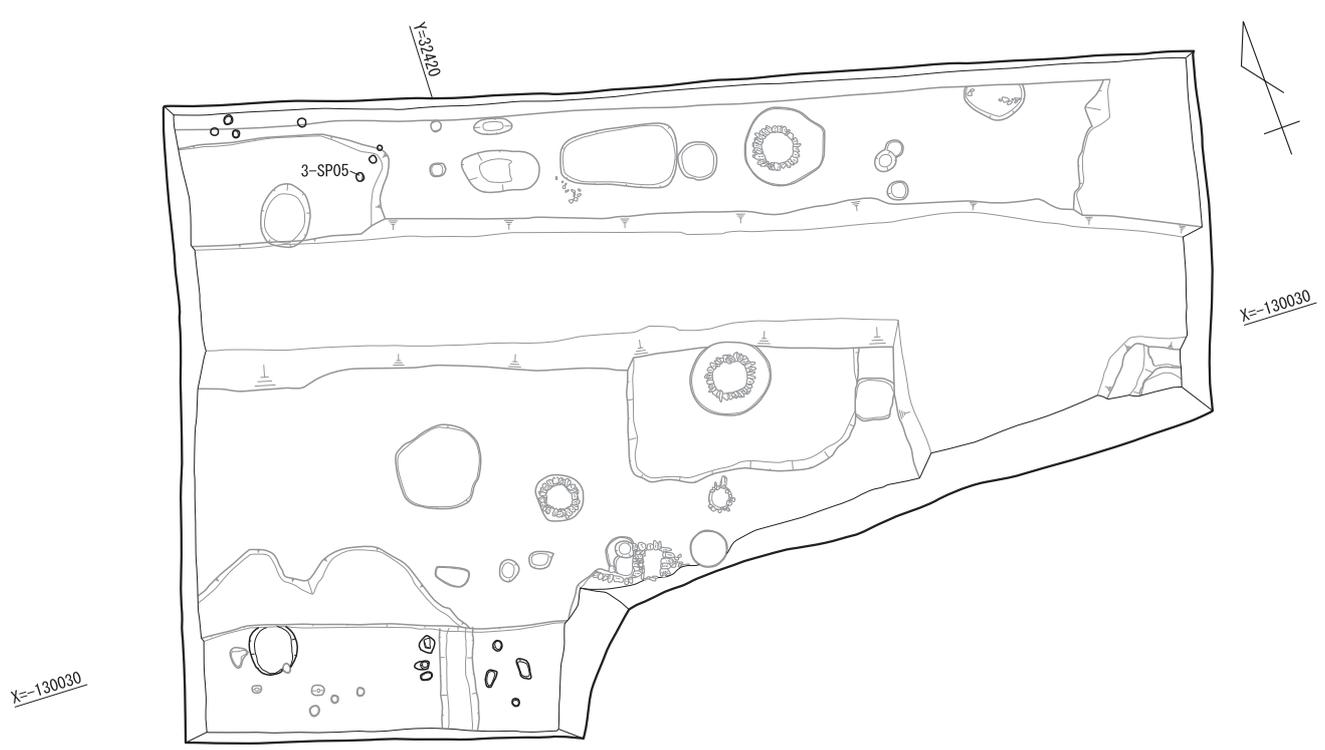


图23 2次3区第3面平面图

第三章 調査の成果

3 次

1次1区の西に延びる市道城南158号線を1区とし、北へ延びる支線を2区とした。2次3区の南に位置し、飾磨街道の拡幅部分を3区とした。1区と2区は地山を遺構検出面とし、3区は2次3区と同様に4面を調査した。

1 区

(写真図版12-14)

東西約52m、幅10mの調査区である。調査区東端から土坑が全域に広がり、1次1区で検出したSX01の延長は確認できていない。調査区の基本層序は、盛土、耕土(1・2層)、床土(3層)を経て褐色砂の地山に至る。調査時の現地表の標高は10.8m、地山の標高は8.9～9.2mである。1次1区で検出した地山レベルとは大きく異なり、地形が下がっていることを確認した。地山上層にある耕土層は盛土されるまで耕作されていたもので、1次2区や2次3区で確認されたような地形の凹みに堆積した土は確認できない。遺構検出は地山直上で行った。

SX01

(遺物図版19)
(写真図版13-5)

調査区西部で検出した。不整形な平面プランで長軸4.6m、短軸2.4mを測る。土坑の東端は直線になっており、東で検出したSX02との間が幅0.4mほど直線的に延びる。この部分は畦畔とみられる。土坑の東肩は急角度で掘り込まれるが、それ以外は緩やかな掘り込みで、深さは遺構検出面から概ね20cmである。埋土から染付碗338が出土した。

SE01

(写真図版14-1)

調査区北壁沿いで検出した。SX10を切る。掘方は円形を呈し直径は1.4mである。井側は河原石を円形に組み、その内径は0.7m、深さは遺構検出面から50cmである。石組みは最大で3石、40cm程残存しているが、下位には続かない。調査段階では井戸としたが、浅いことから1・2次3区SF03と同様の石組み遺構の可能性もある。埋土の上層は石組みが崩落したと思われる河原石が充填されていたが、下層は礫を含まない砂で埋没していた。遺物が出土していないため時期は不明である。

SX09

(遺物図版19)
(写真図版14-3-4)

調査区のほぼ中央で検出した。平面形は西肩が直線的に延び、北側でほぼ直角に曲がるが、東肩は蛇行し整然としない。遺構の中央部には高まりが残るなど、土坑とするには不自然な様相である。調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出規模で南北7.2m、東西6.0mである。深さは遺構検出面から10～65cmと一定しない。埋土から近世陶磁器の細片が出土したが、図示に耐えうるものは少なく、丹波焼甕の底部339のみ図示した。江戸時代に属する遺構である。

SX10

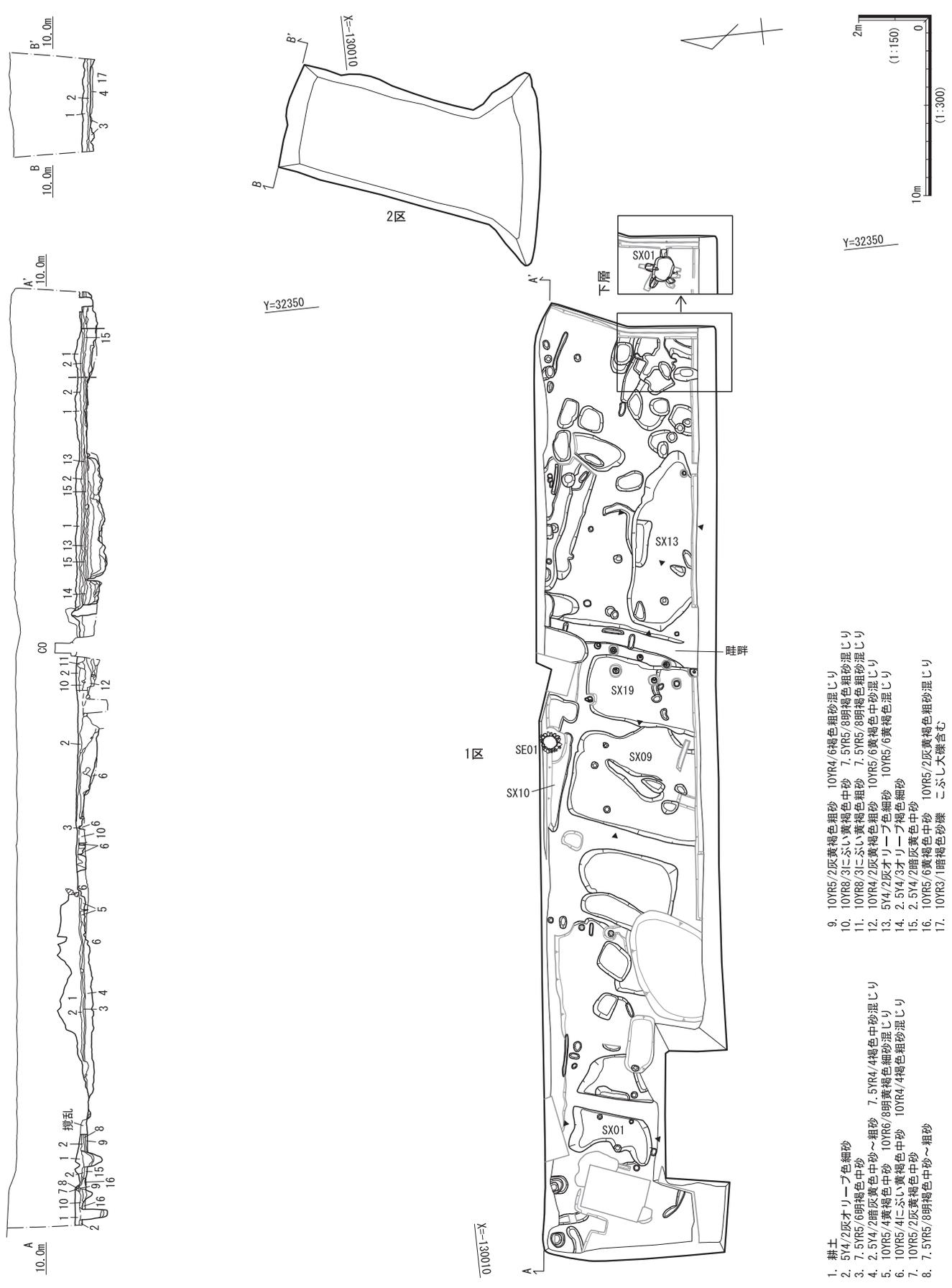
(遺物図版19)
(写真図版13-4-5)

SX09の北で検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが、SX09と同様の性格であると考えられる。検出規模で東西5.3m、南北0.8mである。深さは遺構検出面から48cmである。埋土はほぼ単層で、古代から近世にかけての遺物が出土した。古代の遺物として須恵器稜椀343や土師器高杯342、須恵器杯B344、須恵器壺345・346等が出土した。江戸時代の遺物は陶器椀340・341と軒平瓦347を図化した。出土遺物は古代のものが中心であるが、340・341・347の存在から江戸時代の遺構である。

SX13

(遺物図版19)
(写真図版14-2-147)

SX09の東5.4mの位置で検出した。調査区外に広がるため全容は判然としないが、東西に大きく広がる遺構である。検出規模で東西約10m、南北3.6mである。深さは遺構検出面から30～50cmを測る。埋土は砂質で、大きく上下2層に分離できる。下層では南北方向に斜め方向の埋没単位が、上層ではブロック状の埋没単位が認められる。埋土はほぼ単層で、古代の遺物を多く含む。土師器杯A349、土師器皿350、土師器高杯351・352、須恵器稜



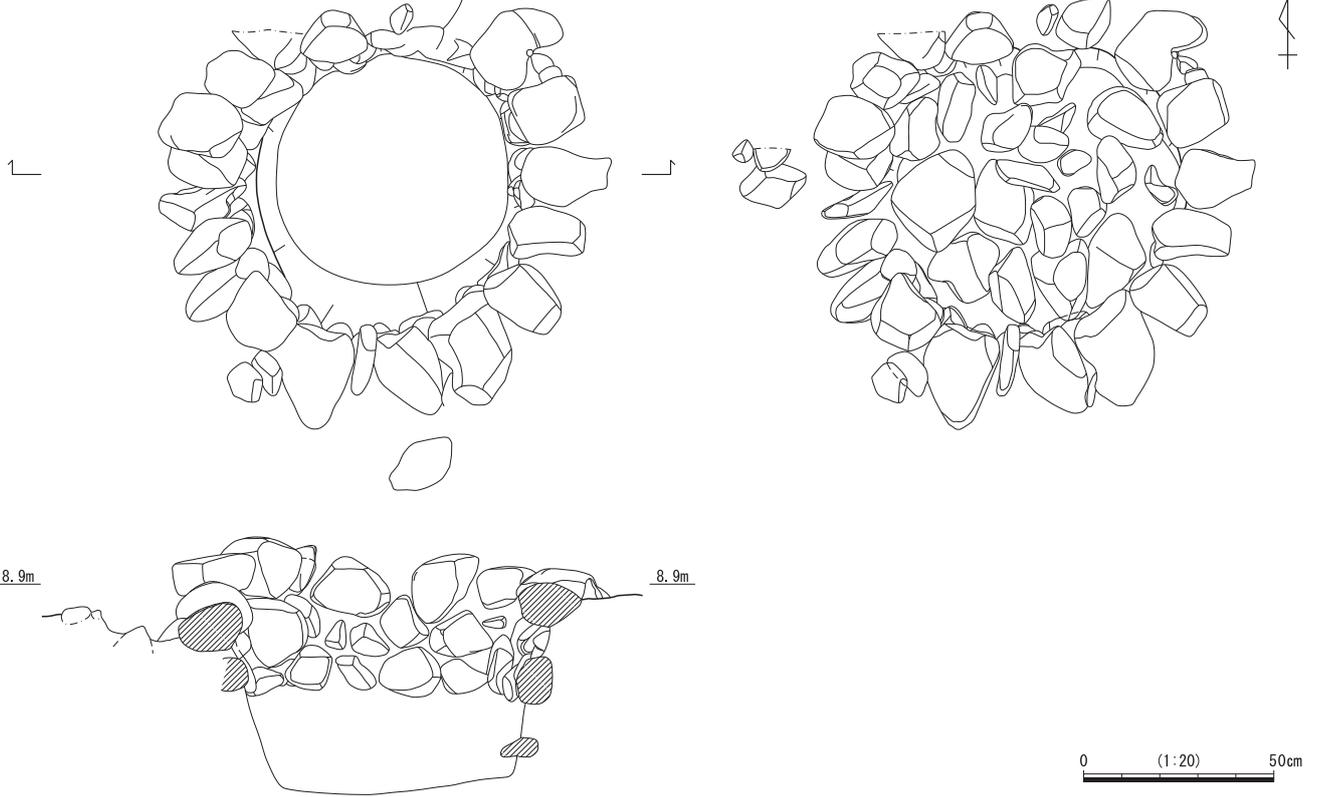
1. 耕土
 2. 5Y4/2灰オリーブ色細砂
 3. 7. 5YR5/6明褐色中砂
 4. 2. 5Y4/2暗灰黄色中砂 ~ 粗砂
 5. 10YR5/4暗褐色中砂 ~ 粗砂
 6. 10YR5/4暗褐色中砂 ~ 粗砂
 7. 5YR5/6明褐色中砂
 8. 7. 5YR5/8明褐色中砂 ~ 粗砂
9. 10YR5/2灰黄褐色粗砂
 10. 10YR5/2灰黄褐色粗砂
 11. 10YR5/3にふい黄褐色中砂
 12. 10YR4/2灰黄褐色粗砂
 13. 5Y4/2灰オリーブ色細砂
 14. 2. 5Y4/3オリーブ褐色中砂
 15. 2. 5Y4/2暗灰黄色中砂
 16. 10YR5/6暗褐色中砂
 17. 10YR3/1暗褐色粗砂
10. 10YR5/2灰黄褐色粗砂
 11. 10YR5/3にふい黄褐色中砂
 12. 10YR4/2灰黄褐色粗砂
 13. 5Y4/2灰オリーブ色細砂
 14. 2. 5Y4/3オリーブ褐色中砂
 15. 2. 5Y4/2暗灰黄色中砂
 16. 10YR5/6暗褐色中砂
 17. 10YR3/1暗褐色粗砂

図24 3次1区・2区平面図、北壁土層断面図

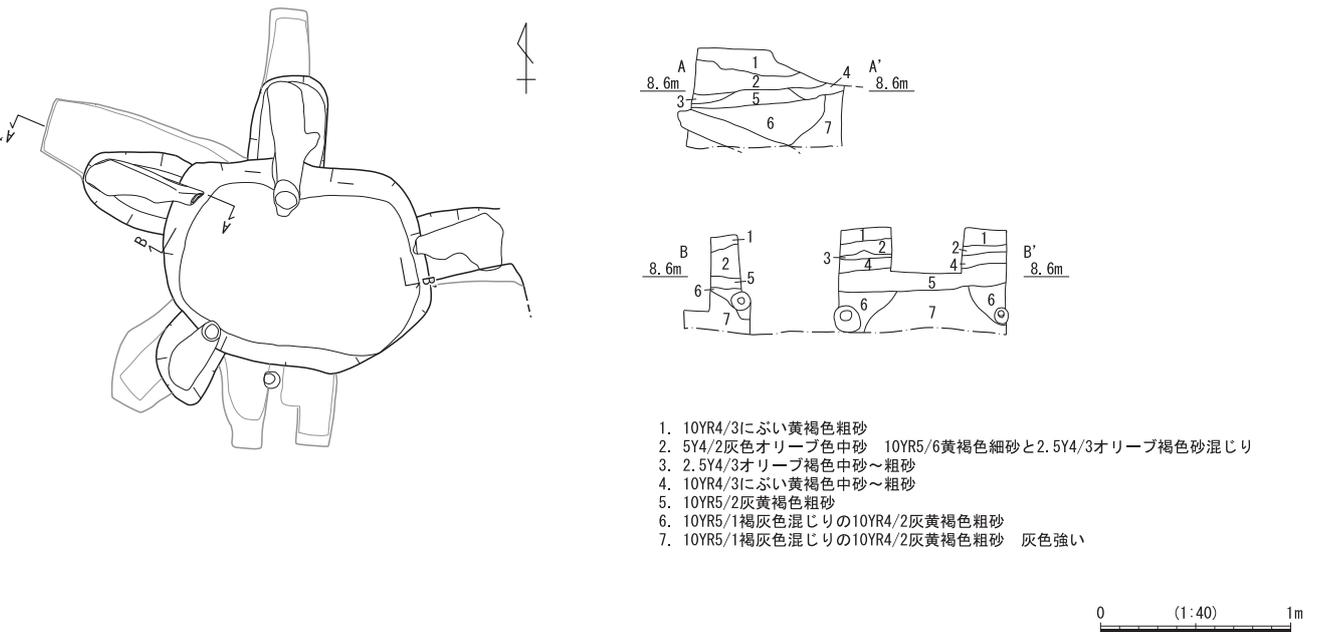
第三章 調査の成果

SE01

SE01 上層



下層 SX01



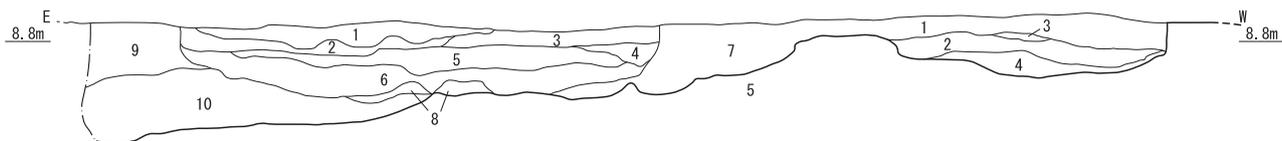
1. 10YR4/3にふい黄褐色粗砂
2. 5Y4/2灰色オリーブ色中砂 10YR5/6黄褐色細砂と2. 5Y4/3オリーブ褐色砂混じり
3. 2. 5Y4/3オリーブ褐色中砂～粗砂
4. 10YR4/3にふい黄褐色中砂～粗砂
5. 10YR5/2灰黄褐色粗砂
6. 10YR5/1褐灰色混じりの10YR4/2灰黄褐色粗砂
7. 10YR5/1褐灰色混じりの10YR4/2灰黄褐色粗砂 灰色強い

図25 3次1区SE01、下層SX01平・断面図

SX01

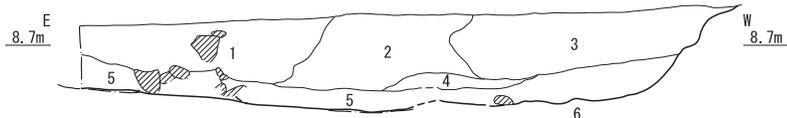


SX09



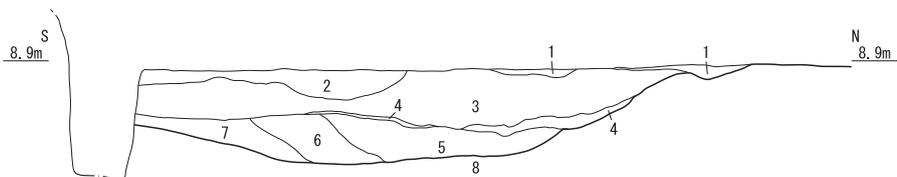
- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4/1褐色中砂混じりの10YR4/3にぶい黄褐色中砂 2. 2. 5Y4/2暗灰黄色粗砂 3. 2. 5Y4/2暗灰黄色中砂混じりの10YR4/4褐色粗砂 4. 10YR4/2灰黄褐色粗砂 5. 10YR4/6褐色粗砂 | <ol style="list-style-type: none"> 6. 10YR4/6褐色粗砂 砂礫層 7. 10YR4/2灰黄褐色粗砂混じりの10YR4/1褐色粗砂 8. 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 9. 10YR5/6黄褐色中砂粗砂混じり 10. 10YR4/2灰黄褐色粗砂 |
|--|--|

SX13



1. 2. 5Y4/2暗灰黄色混じりの10YR4/4褐色中砂 こぶし大の礫含む
2. 2. 5Y4/2暗灰黄色混じりの10YR4/4褐色中砂
3. 7. 5YR4/1褐色混じりの7. 5YR4/3褐色粗砂
4. 10YR4/6褐色中砂
5. 10YR4/2灰黄褐色中砂～細砂
6. 7. 5YR5/6明褐色混じりの2. 5Y4/3オリーブ褐色粗砂

SX13



1. 10YR3/4暗褐色中砂～粗砂 小礫含む
2. 2. 5Y3/3暗オリーブ褐色中砂～粗砂 小礫含む
3. 10YR5/8黄褐色粘質粗砂と10YR4/1褐色粘質中砂混じりの10YR4/4褐色 粘質 細砂
4. 10YR4/1褐色中砂～粗砂
5. 10YR4/3にぶい黄褐色中砂～粗砂
6. 10YR4/3にぶい黄褐色中砂～粗砂 マンガン多く含む
7. 10YR5/6黄褐色粘質中砂と10YR4/6褐色粘質中砂混じりの10YR4/1褐色 粘質細砂
8. 2. 5Y4/3オリーブ褐色粗砂

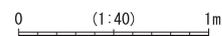


図26 3次1区SX01・SX09・SX13断面図

第三章 調査の成果

椀蓋 353、須恵器杯 B 354、土師器甕 355、土師器竈 356、須恵器甕 358、平瓦 359 を図化した。遺物の大半は古代の遺物であるが、これらに混じって青磁碗 348 と青銅製の目貫金具 357 が出土した。目貫金具の時期は不明であるが、青磁碗から 15 世紀代を含む時期と考えられる。江戸時代の遺物は皆無であることから、中世の遺構と考えられる。

下層SX01
(写真図版14-5-6)

調査区西端に分布する土坑の完掘後に確認した遺構である。東西に長い円形を呈し、長軸 1.48 m、短軸 1.07 m を測る。埋土の掘り下げに伴って、土坑底面で筒状の開口部を 5 か所確認した。土坑から外側に延びる掘方（変色の可能性もある）が認められたことから断割りを行い性格把握に努めた。パイプ状に最大で 70cm 程確認できたが、外部とつながる痕跡はない。その内部は鉄分の沈着により鉄製品のように見えるものもあったが、金属部分を明確には確認できなかった。写真図版 14-6 に見るように基本的に横位になっている。類例を検索したが、管見の範囲では確認できない。高師小僧の可能性も高いが、管状の痕跡が放射状に均等に広がることから、何らかの下部構造である可能性も完全には否定できないため、報告した。遺物は出土していない。

2 区

(写真図版13-2-3)

2 区は 1 区の東端から北へ延びる延長 15 m、幅 6 m の調査区である。基本層序は 3 次 1 区と同じである。遺構検出面は砂層上面で行った。遺構はなく、遺物も確認できなかった。当該地は前述した 1 次 1 区 SX01 の範囲に含まれる可能性が高いが、石組み等は確認できなかった。地山検出レベルは 9.0 m で、SX01 底面と合致するが、地山の上層は耕作土で SX01 の埋土は確認できない。このため、3 次 1 区と様相は異なることから、1 次 1 区 SX01 の範囲に含まれる可能性はあるが、積極的に裏付ける根拠は得られていない。遺構検出を行った砂層上面は変色範囲が広がっていたことから、記録作成後、砂礫層まで下げて遺構検出を行ったが、砂礫層上面でも遺構・遺物とも確認できなかった。

3 区

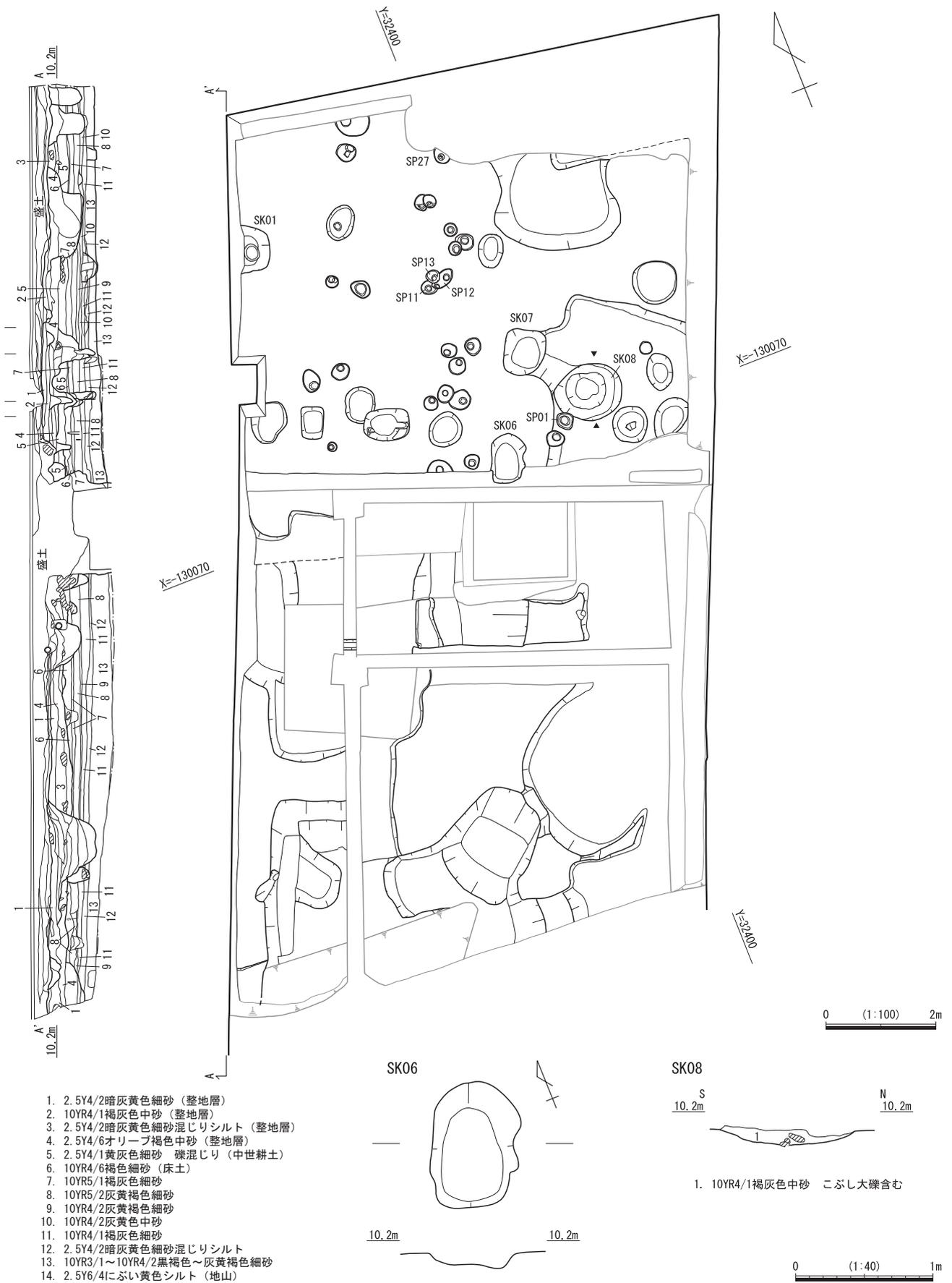
(写真図版15)

延長 16 m、幅 8.7 m の調査区で、飾磨街道の拡幅部分を調査した。北側は 2 次 3 区、豆腐町 I 次 D 区と接続する。調査区の南側は既存建物の基礎等により攪乱を受けていたが、北半分は攪乱を受けておらず 4 面の遺構面を調査した。調査区の基本層序は、盛土、近世整地層（1～4 層）、中世耕土（5・6 層）、褐灰色～灰黄褐色～灰黄色細砂（7～10 層）、褐灰色～黒褐色細砂（11～13 層）を経てにぶい黄色シルトの地山に至る。調査時の地表面の標高は 10.7 m、中世耕土上面の標高は 10.2～10.35 m、地山の標高は 9.25～9.55 m である。第 1 面は中世耕土、第 2 面は灰黄褐色土、第 3 面は褐灰色細砂の 11 層上面付近とし、第 4 面は地山である。第 1 面は近世の遺構で、土坑、柱穴等を検出した。第 2 面は中世で土坑、柱穴等を検出した。第 3 面は中世から古代にかけての遺構で、掘立柱建物跡、柱穴、溝等を検出した。第 3 面の柱穴については、第 2 面の掘り残しと見られるものも含まれるが、遺物が出土していないため、第 3 面に帰属するものとの区別は明確ではない。なお、第 4 面では溝とピット等を検出したが、いずれも第 3 面に帰属する遺構の残存と見られ、それ以前に遡る遺構は確認できなかった。

第 1 面

SK01
(遺物図版20)

調査区の西壁沿いで検出した。平面形は方形を呈すと想定するが、調査区外に広がるため全容は不明である。検出規模で南北 87cm、東西 50cm を測る。深さは遺構検出面から 60 cm である。断面はコの字状を呈し、角度をもって掘り込まれる。埋土の大半は砂礫である。



1. 2.5Y4/2暗灰黄色細砂 (整地層)
2. 10YR4/1褐灰色中砂 (整地層)
3. 2.5Y4/2暗灰黄色細砂混じりシルト (整地層)
4. 2.5Y4/6オリーブ褐色中砂 (整地層)
5. 2.5Y4/1黄灰色細砂 礫混じり (中世耕土)
6. 10YR4/6褐色細砂 (床土)
7. 10YR5/1褐灰色細砂
8. 10YR5/2灰黄褐色細砂
9. 10YR4/2灰黄褐色細砂
10. 10YR4/2灰黄色中砂
11. 10YR4/1褐灰色細砂
12. 2.5Y4/2暗灰黄色細砂混じりシルト
13. 10YR3/1~10YR4/2黒褐色~灰黄褐色細砂
14. 2.5Y6/4にぶい黄色シルト (地山)

図27 3次3区第1面平面図、西壁土層断面図

第三章 調査の成果

埋土から土師器小皿 360、土師器炮烙 361 等が出土した。361 は外面に格子タタキを有す A1 類である。

SK06
(遺物図版20)

既存建物基礎により一部攪乱を受けているが、長軸 93cm、短軸 64cmの南北に長い土坑である。深さは遺構検出面から概ね 10cmを測る。埋土から瀬戸美濃焼鉄釉陶器皿 362 が出土した。

SK08
(遺物図版20)

SK06 の北東 90cmの位置で検出した。円形を呈す土坑で、南北 1.0 m、東西 1.25 mで東西にやや長い。断面形は浅い皿状を呈し、深さは遺構検出面から概ね 10cmである。埋土は褐灰色中砂のほぼ単層で、肥前系陶器碗の底部 363 が出土した。

SP01
(遺物図版20)

SK08 を切る。掘方は円形を呈し、直径 30cm、深さは遺構検出面から 16cmを測る。埋土の一段下げ時に陶器甕底部 364 が出土した。

SP12
(遺物図版20)

SK06 の北西 2.9 mで検出した柱穴である。SP13 に切られ、SP11 を切る。掘方は楕円形を呈し、長軸 45cm、短軸 25cm、深さは遺構検出面から 10cmを測る。柱痕跡埋土から外面格子タタキの土師器炮烙 365 が出土した。SK01 と同時期のものであろう。

SP27
(遺物図版20)

SP12 の北約 2 mで検出した。北側は大きく攪乱を受けている。本来は直径 35cm程の規模と推測する。深さは遺構検出面から 23cmである。埋土中から肥前系陶器皿 366 が出土した。第 1 面で検出した柱穴には柱筋が通るように見える部分もあるが、明確な柵や建物としては復元できない。

第 2 面

2-SA01
(写真図版15-1)

調査区北西隅で検出した。3 基の柱穴で構成される。調査区外に広がる建物跡の一部である可能性が高い。検出規模で延長 2.1 m、主軸は N 22° E で飾磨郡条里地割と合致する。柱間隔は北から 1.0 m、1.1 mである。遺物は出土していないが、柱穴の埋土は後述する 2-SK46・2-SK48 と類似する褐灰色細砂で、同時期の可能性を考えておきたい。

2-SK15
(遺物図版20)
(写真図版15-1)

2-SA01 の南東 2.8 mの位置で検出した。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、長軸 63cm、短軸 43cmを測る。断面形はコの字状を呈し、深さは遺構検出面から 18cmである。埋土から斜めスリ目を持つ備前焼播鉢 367 が出土した。本遺構は第 2 面で検出したが、367 の型式に基づけば、本来の帰属時期は第 1 面で検出した遺構群と同様と考えられる。

2-SK22
(遺物図版20)
(写真図版15-1)

調査区の南側、西壁沿いで検出した。攪乱を受け、また調査区外に広がることから全容は不明であるが、検出規模は南北 1.15 m、東西 65cm、断面は逆台形を呈し、深さは遺構検出面から最大で 65cmを測る。埋土から備前焼播鉢 368、備前焼甕 369 が出土した。

2-SK46
(遺物図版20)
(写真図版15-5-6-147-217)

2-SA01 の東 2.7 mで、2-SK48 と 2 基の土坑が並んだ状態で検出した。平面形は東西にやや長い円形を呈し、長軸 86cm、短軸 65cmを測る。断面は深い皿状を呈し、深さは遺構検出面から最大で 25cmである。遺物は土坑底よりやや上層から肩に沿って土師器小皿 370～373、皿 374・375 が出土した。完形の個体が多い。鉄釘 376～381、鉄製鎖 382 は土師器皿と同じ図示した場所ではなく、掘り下げ中に出土している。

2-SK48
(遺物図版21)
(写真図版15-5-6-147-217)

2-SK46 の東 30cmの位置で検出した。土坑の北側は一部攪乱を受けている。2-SK46 と同じく円形を呈すとみられ、検出規模で東西 67cm、南北 50cmを測る。断面形は 2-SK46 よりも深い皿状を呈し、深さは遺構検出面から 28cmである。遺物は埋土下位から土坑底まで礫とともにまとまった状態で出土した。完形に復元できる土師器皿が多く出土している点の特徴である。手づくね成形の土師器小皿 383～391 と皿 392～396、底部ヘラ切りの杯 397、須恵器碗 398、青磁碗 399、鉄製釘 400 を図化した。埋土から須恵器碗 398 や青磁碗 399 が出土したが、これらは土師器皿とは異なり破片資料である。本土坑は土師器皿

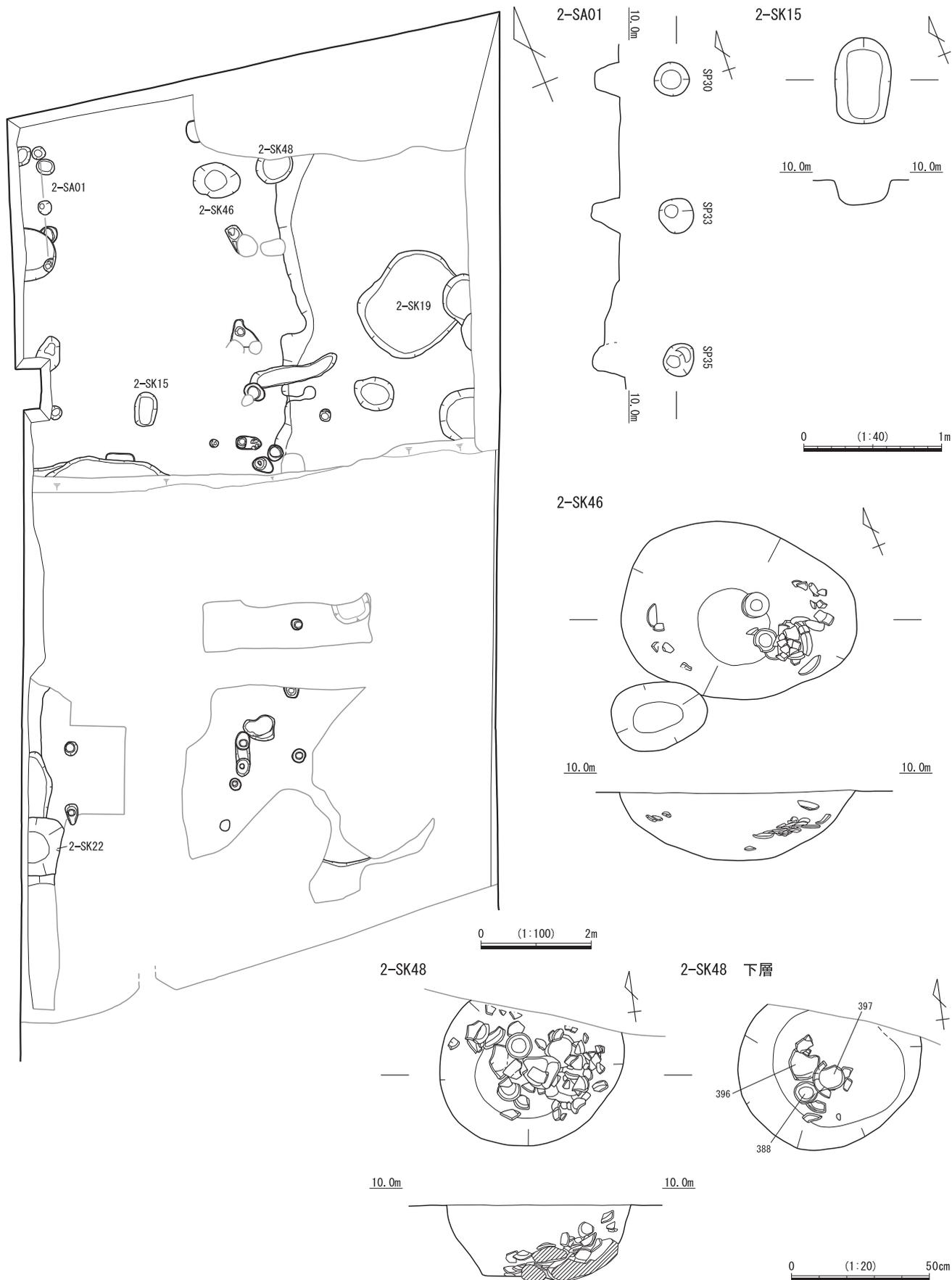


图28 3次3区第2面平面图、2-SA01、2-SK15·2-SK46·2-SK48平·断面图

第三章 調査の成果

を何らかの意図でもって埋めたもので、一括資料といえる。鉄釘が出土している点も2-SK46と共通している。皿は底部から体部にかけて丸みをおび、底部内面の立ち上がりも丸く、屈曲していない。豆田遺跡で整理した様相に従えば、12世紀後半頃に位置づけられる。2-SK46出土遺物も同様で、これら2つの土坑は有機的に関連する遺構である。鉄製釘が伴うことから埋葬に伴う遺構の可能性もあるが、当該時期の土坑墓としては異質である。類例の増加を待って検討したい。

第3面

3-SB01

(遺物図版21)
(写真図版15-3)

調査区北部で検出した建物跡である。周辺の柱穴についても同様であるが、第3面まで掘り下げて初めて明確に認識することができた。本来は第2面に帰属する遺構である。攪乱を受けるとともに調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出規模で南北3間6.7m、東西2間5.0mを測る。柱間隔は3-SP66～3-SP81で北から2.2m、2.1m、2.4m、3-SP86～3-SP53で西から2.2m、2.8mと不揃いである。柱穴は概ね円形を呈し、直径は24～48cmである。SP53のみ東西に長く長軸78cmを測る。3-SP66～3-SP81を基準とした建物の主軸はN5°Eで、飾磨郡条里に比べて大きく西偏する。兵庫県の調査を含めても西部地区でこの主軸方向の建物は検出されていない。

遺物は建物を構成する3-SP53と3-SP86から出土した。3-SP53の埋土から土師器小皿404、皿405・406が出土した。3-SP86からは青白磁合子蓋407が出土した。土師器皿の様相は2-SK46・SK48と類似している。

3-SD01

(遺物図版21)
(写真図版15-2-3)

3-SB01の西1.3mで検出した。南北方向に延びる溝で各柱穴に先行する遺構である。検出規模で延長6.8m、幅は最大で35cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは遺構検出面から概ね5cmである。埋土からロクロ成形の土師器小皿401・402、須恵器椀403が出土した。

その他、3-SD02、3-SD03を検出した。SD02はSD01の1.2m東で検出し、延長3.8m、幅は最大で40cmを測る。3-SB01を構成する柱穴3-SP66に切られる。SD03は既存建物による攪乱下で検出した。攪乱により全容は不明であるが、検出規模で延長1.5m、幅0.6mを測る。これらの溝からは遺物が出土していないため、時期は不明である。

第4面

4-SD04

(写真図版15-7)

地山上面で、調査区東端に沿って検出した。延長約6m、幅は最大で0.5m、溝の底面は丸みを帯び、深さは遺構検出面から概ね20cmを測る。第4面で検出したが、第3面で検出した溝と埋土の様相が類似することから、本来は第3面に帰属する可能性もある。遺物が出土していないため、時期は不明であるが、その他、写真図版15-7に見るように第4面でピット等を検出しているが、記録がないため、詳細は不明である。

遺構に
伴わない遺物
(遺物図版21)

3次1区からは遺構検出中に遺構から遊離した状態で土師器高杯408、須恵器杯B409、須恵器円面硯の脚部410、須恵器甕を転用した円盤加工品411、江戸時代の土師器十能412、時期不明であるが、磨石413が出土した。3次1区においては奈良時代の遺構を検出していないが、410は豆腐町遺跡で唯一出土した円面硯である。豆腐町遺跡において定形硯の出土は、7次3区SD02の円形硯2833のみである。

3次3区からは第2面から第3面への掘り下げ時に須恵器杯B蓋414、須恵器杯B415、須恵器壺底部416等が出土した。3次3区においては奈良時代の明確な遺構を検出していないが、こうした遺物の出土から周辺に当該期の遺構が存在していた可能性が高い。

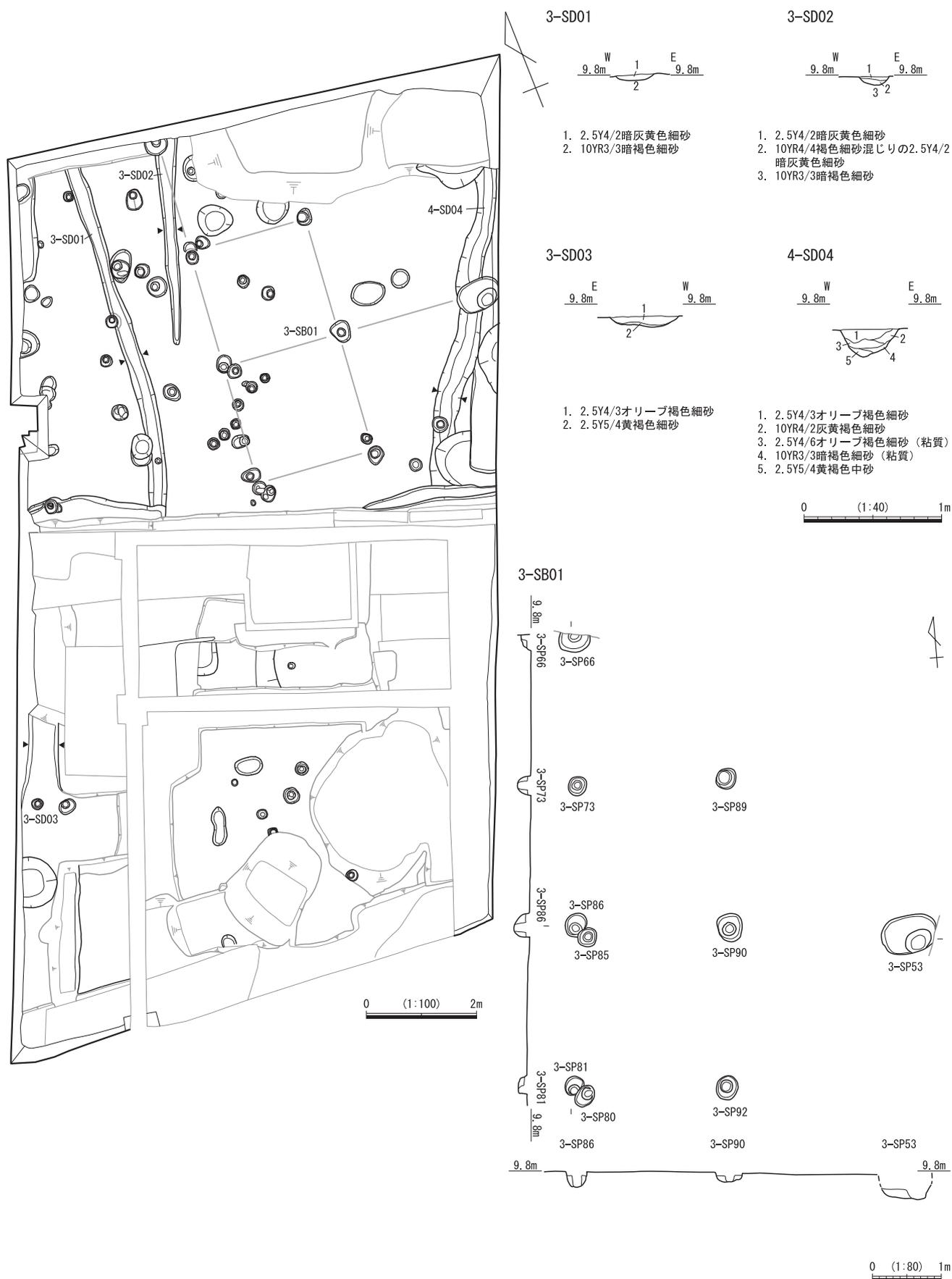


図29 3次3区第3面平面図、3-SD01・3-SD02・3-SD03・3-SD04断面図、3-SB01平・断面図

第Ⅲ章 調査の成果

4 次

(写真図版16-25)

調査地は市道城南156号線にあたり、2次3区の東側に位置する。本調査区は明治時代の地図を見る限り、明治21年の鉄道開通以後、鉄道敷地となっているようである。このことから鉄道関連遺構を除き、本調査区で検出した遺構の上限は明治21年頃と考えることができる。

調査区の基本層序は、盛土、耕土(1層)、旧耕土(2～5層)を経て、黄褐色土もしくは砂礫の地山に至る。調査時の地表面の標高は概ね11.0mで、地山は西端で10.2m、東部のSR01肩で9.7mを測る。鉄道敷設以前の耕土層とその下位の旧耕土層のみであり、いわゆる遺物包含層は存在しない。遺構検出面は地山上面で、検出した遺構は旧河道、溝、井戸、土坑、柱穴、近代石組み遺構等である。

煉瓦構造物

(遺物図版22)
(写真図版18)

調査区東部の機械掘削時に検出した一連の煉瓦構造物である。豆腐町Ⅰ次調査で、調査区の南30mで姫路駅第1次転車台が、豆腐町Ⅱ次調査で調査区東端に接した位置で第2次転車台が検出されており、今回検出した遺構も姫路駅関連の遺構と想定できることから煉瓦構造物として記録を作成した。煉瓦構造物Aは検出規模で延長27m、幅2.3m、高さは60cmを測る。煉瓦構造物Aの北1.6m離れた位置に並行して煉瓦構造物Bを検出した。Bは調査区外に延びるが、Aと同様の規模と推測される。煉瓦構造物は土台を土砂とコンクリートで構築したのち、中央部分には煉瓦をドーム状に敷いている。その左右は幅0.7m程水平にコンクリート基礎が広がる。目地には煉瓦痕跡が残り、当初は煉瓦敷きであったことがわかる。煉瓦構造物Aの東端は破壊されており、東側への延びは不明であるが、西端はA断面に見るようにドーム状の煉瓦の下に煉瓦積みを確認できるが、表面のみに留まる。西側に面を持つことから本来は何かの構造物があり、更に西側へ延びていたとみられる。

煉瓦構造物Aの西3mの位置で煉瓦構造物Dを検出した。大半が調査区外に広がり全容は不明であるが、土管が組み込まれていることから方形の会所であろう。半切した「羊羹」の使用も認められ、イギリス積みによって構築されている。

煉瓦構造物Cは煉瓦構造物Dの南9.4mで検出した会所である。側面はイギリス積みで、底面は「羊羹」を縦位に敷いている。平面は方形を呈し、一辺86～88cmを測る。煉瓦積みの高さは22cm分が残っていた。

煉瓦構造物A・B・Dには共通する刻印を持つ煉瓦が使用されている。駅構内の施設の改修や改変は頻繁に行われた可能性はあるが、共通する刻印が認められることからこれらの構造物は同時期に存在していたと考える。確認できた刻印は417の星形のもの、418の五角形のもの2種類である。図示した煉瓦はサンプルで採取したものであるが、その他にも煉瓦構造物A・Bにはモルタルにインプリントされた上記2種の刻印が複数認められた。それ以外の刻印は確認できなかった。417は『豆腐町遺跡Ⅰ』でⅦ類とされたもの。418・419は『豆腐町遺跡Ⅱ』でB45と分類されたもので、堺煉瓦株式会社の刻印に近い。いずれも手抜成形とみられ、幅11～11.3cm、長さ23.3cm、厚さ6.2～6.4cmを測り、東京形の寸法に近い。山陽鉄道で東京形を使用している箇所は英賀保～はりま勝原間の下河原開梁、相生～有年間の山の下第1拱渠・第2拱渠、有年～上郡間の下山川橋梁の4ヶ所である。その使用時期は山陽電気鉄道が買収された明治39年以降とされる(鈴木2018)。このことから、検出した一連の煉瓦構造物は第一次転車台に伴うものではなく、第二次転車台稼働時期以降と推測できる。煉瓦構造物AとBに共通するドーム状の煉瓦積みは、朝来駅機関車庫の点検坑で認められるものに類似している。検出した構造物が機関庫に伴うものであるという確証はないが、姫路駅に関連する近代遺構であることは間違いない。

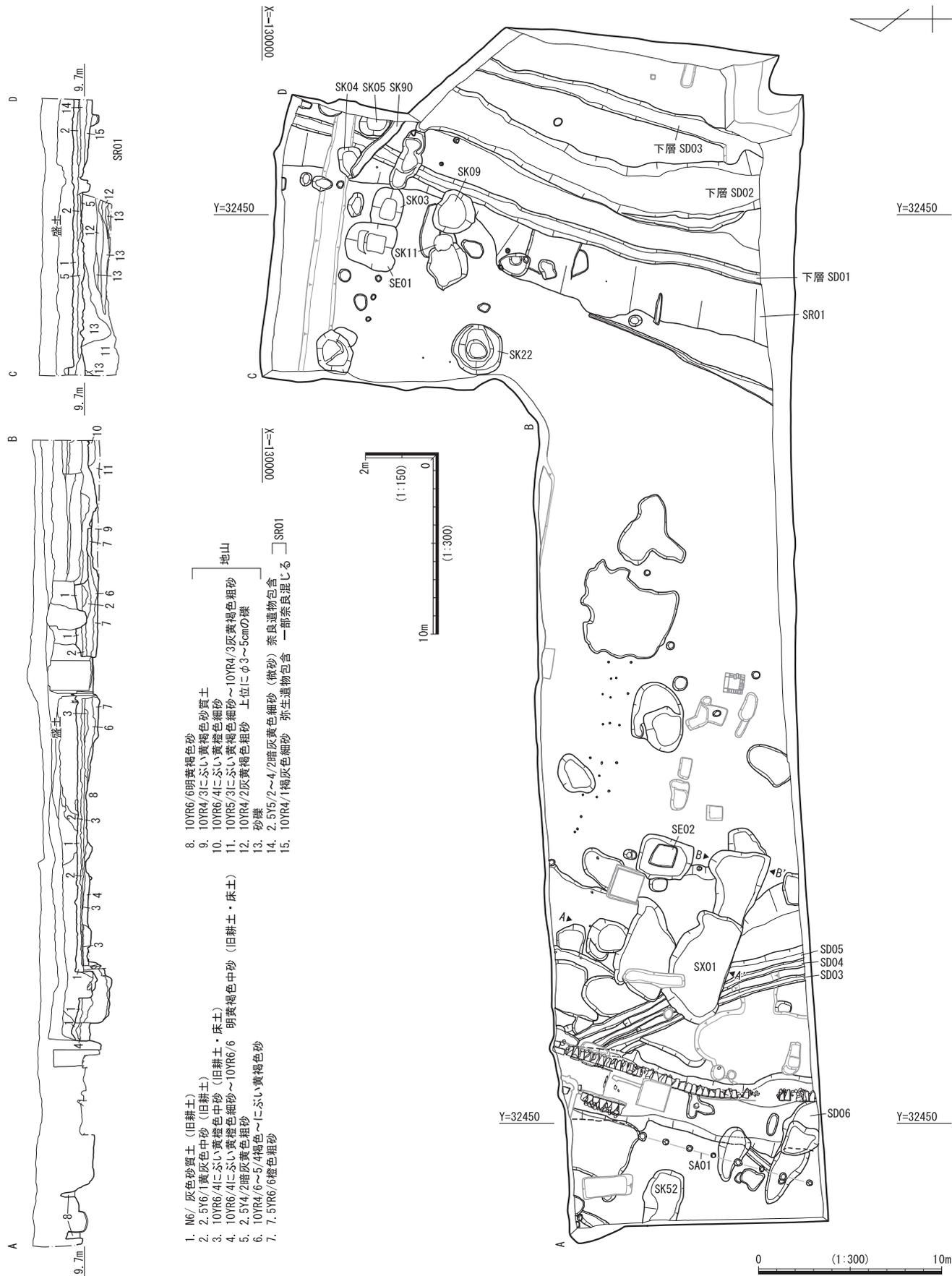
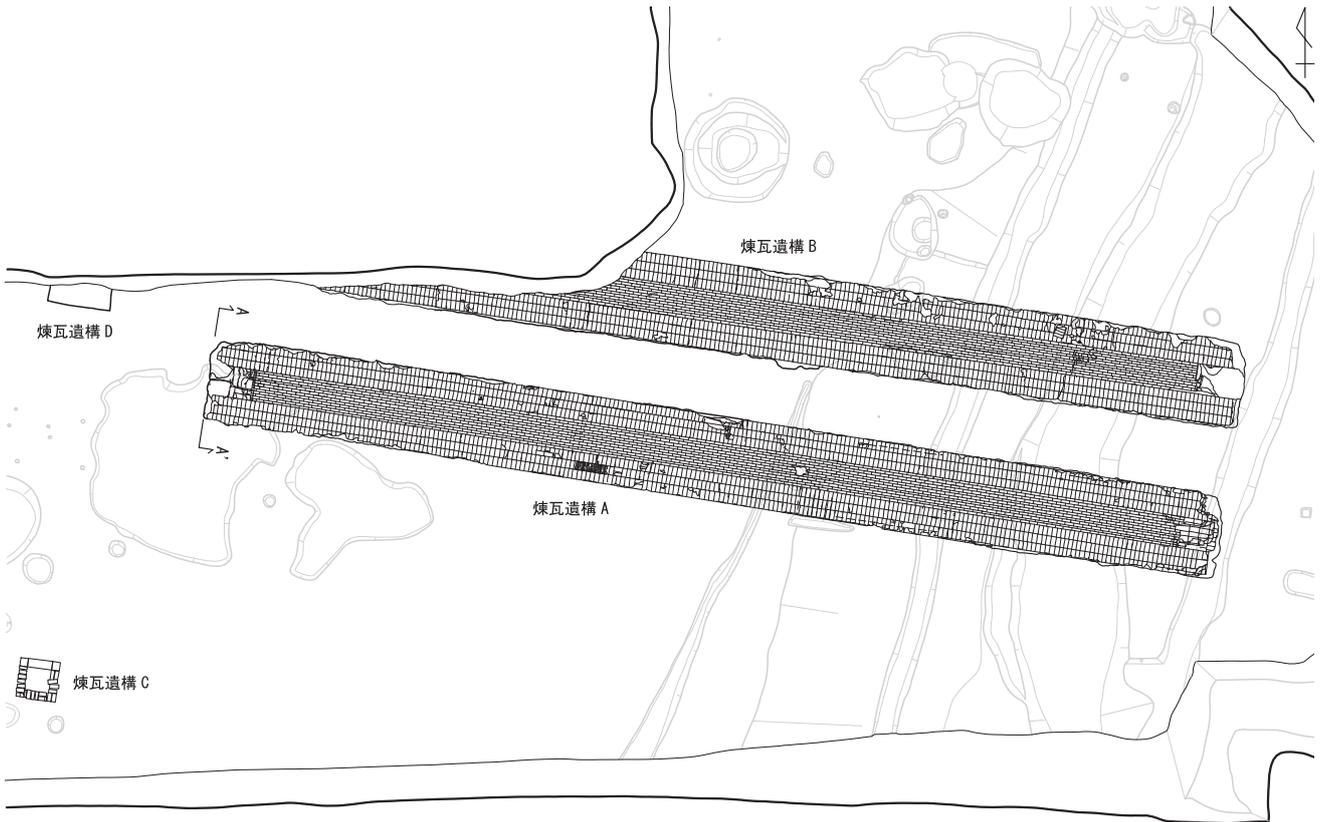
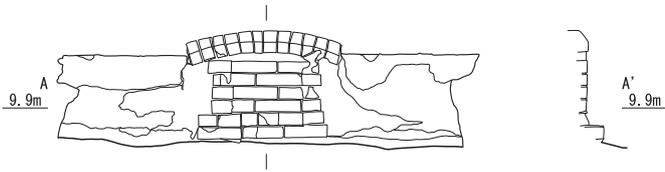


图30 4次平面図、北壁土層断面図

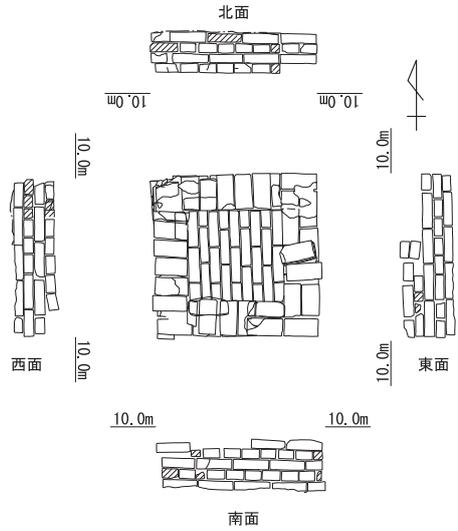
第三章 調査の成果



煉瓦遺構 A



煉瓦遺構 C



煉瓦遺構 D

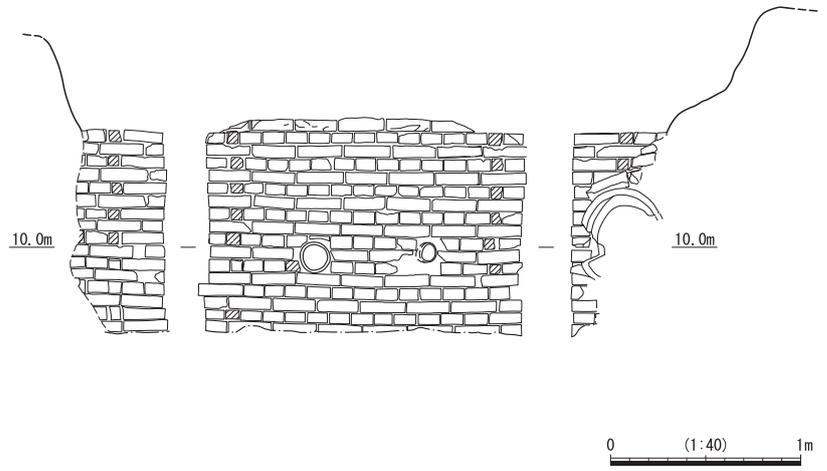


図31 4次煉瓦遺構平・見通し図

SX01

(遺物図版22)
(写真図版25-1・2)

調査区西部で検出した。後述する SE02 の上面を一部かすめる形で広がる不整形の巨大な遺構である。SE02、SD03～SD05 を切る。東西に長く最長 10 m、南北 6 m の範囲に広がる。深さは遺構検出面から最大で 82cm を測る。土取りの可能性もあるが、土取り跡と想定した他の遺構に比べて深さが深く、様相が異なっている。平面プランの検出では明確な切り合い関係は確認できなかったが、最終的な掘りあがりの状態では複数の掘り込みが認められた。断面からも明らかなように本来は複数の切り合いが存在し、最終的に SX01 と認識した範囲が埋没したものと考えられる。西側の掘り込みの埋土はシルトと砂礫の互層で、砂礫は固く叩きしめられている。対して、東側は地山起源の土砂が混じった砂質の土砂で埋まっており、各掘り込みには差が認められる。規模の割には遺物は少なく、古代の遺物とともに近代磁器 420 と 421 等が出土した。明治時代以降に位置づけられる。

SK11

(遺物図版22)
(写真図版19-7)

調査区東部、SK21 と重なる位置で検出した埋桶である。掘方の直径は 1.1 m で、その内部に内径 68cm の桶を埋設する。桶は約 60cm 残存している。検出状況から上部は削平されている可能性が高く、本来は更に深かったと推測できる。遺物は内部から銅製のキセル 422 が出土した。キセルの形状から江戸時代後半以降に位置づけられる。

SK03

(遺物図版23)
(写真図版19-4・148)

SE01 の東で検出した土坑である。検出時点では、SE01 の掘方との区別が曖昧で、SE01 の掘方を含む範囲を SK03 と認識し調査した。図 30 では、SK03 を SE01 が切るように図示しているが、これは最終段階の形状であり、本来の切り合いは図 32 のとおりである。SK03 を掘り下げる過程で古代の遺物が出土し、形状を比較的保つものもあることから、近世の遺構に古代の遺物が混じった感じではなく、古代の遺構である可能性を考え、検出面から約 50cm 下げたところで再度精査を行い、SK03 と SE01 の切り合いを確認した。SK03 は東西に長く、2 基の土坑が連結した形状を呈す。長軸 4.6 m、短軸 1.8 m、深さは遺構検出面から概ね 60cm である。遺物は灯明痕のある土師器小皿 426、染付仏飯具 427、染付碗 428・429、染付壺 430、土師器焙烙 431～435、陶器大皿 436、堺・明石系播鉢 437、弥七焔炉 438、玉砥石 439・440、砥石 441 が出土した。438 を除けば 18 世紀中～後半に位置づけられるが、438 の弥七焔炉は、幕末に池田屋弥七により始まったものである。刻印「弥」の上に「請合」とあることから、明治時代に入って類似品が生産されるようになって以降の製品である。なお、439・440 の玉砥石は粘板岩で SK03 の掘り下げ時に出土したものである。下層の SE01 に伴う可能性もあるが、確証がないため SK03 として報告する。

SK04

(遺物図版24)
(写真図版17)

SK03 の北東 1.3 m の位置で検出した。SK99 と SR01 を切る。不整な円形を呈し、長軸 2.15 m、短軸 1.5 m を測る。深さは遺構検出面から概ね 45cm である。遺物は染付碗 442、陶器灯明具 443、陶器蓋 444・445、土師器焙烙 446・447、瓦質土器羽釜 448、寛永通宝 449、明治 10 年の一銭銅貨 450、煙管吸口 451 等が出土した。その他図示していないが、革靴の底など有機質の製品が出土している。

SK05

(遺物図版24)
(写真図版17)

調査区東壁沿いで検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出形状から SK04 に類似した形状を呈すと考える。検出規模で南北 1.6 m、東西 0.95 m を測る。深さは遺構検出面から 80cm を測る。埋土から遺物が一括して出土した。染付皿 452、染付蓋 453、陶器灯明具 454、丹波焼甕 455、明治 15 年の一銭銅貨 456、軒丸瓦 457、鳥袞瓦 458、軒平瓦 459・460 等が出土した。軒平瓦には 459 「瓦工市左衛門」、460 は「姫路瓦工市左衛門」の刻印が認められる。この刻印は、姫路城の御城瓦師である大古瀬市左衛門のものである。刻印の使用は文化年間以降とされることからそれ以後のものである（有本 1984）。SK04 と SK05 からはそれぞれ明治 10 年と 15 年の銭貨が出土している。これらの遺構は明治 10 年から明治 21 年の鉄道敷設までに廃絶したものとみられ、時期の限定できる資料である。

第三章 調査の成果

SK09

(遺物図版22)
(写真図版19-6)

SK03の南1.1 mで検出した。形状はSK04に類似する。東西1.6 m、南北1.5 mを測る。深さは遺構検出面から80cm前後である。埋土は大きく1層で、下層から加工木材が出土した。何かの部材と考えられるが判然としない。土器等の出土は少なく、明治9年の半銭銅貨423を図示した。SK09もまた、鉄道開通直前に廃絶した遺構と考える。

SK22

(遺物図版22)
(写真図版17)

調査区が屈曲する付近で検出した。平面形は円形を呈し、直径は2.7 mを測る。深さは遺構検出面から1 m前後で、段掘りされている。井戸の可能性もあるが、石組みや木組みの痕跡は認められない。遺物は一重網目文染付碗424と堺・明石系播鉢425を図示した。18世紀中頃までに位置づけられる。

SE01

(遺物図版25-26)
(写真図版20-133-148-
149-211)

上面をSK03が切っている。検出状況については、SK03で記述したように当初はSK03と同一の遺構として調査した。検出面から約50cm掘り下げたところで一辺約70cmの方形のプランを検出した。それより20cm掘り下げた時点で方形に遺存する木質を確認した。木質の内側は礫とシルトで埋まっており、適宜記録を取りながら掘り下げた。井側は一辺70cmの縦板組で、最下段の棧が良好に遺存していた。棧の四隅には柄穴を設け、そこに支柱を据えている。支柱は辛うじて基部が25cm程残存していた。縦板は表層のみ残存し、木質はほとんど残っていなかった。最下部の井戸棧のうち、西側の棧についてはヒノキを用いている。他の棧の樹種同定は行っていないが、目視による限りおそらく同材とみられる。掘方は隅丸方形を呈し、長軸1.8 m、短軸1.7 mを測る。井戸底は遺構検出面から97cmで、標高は8.75 mである。

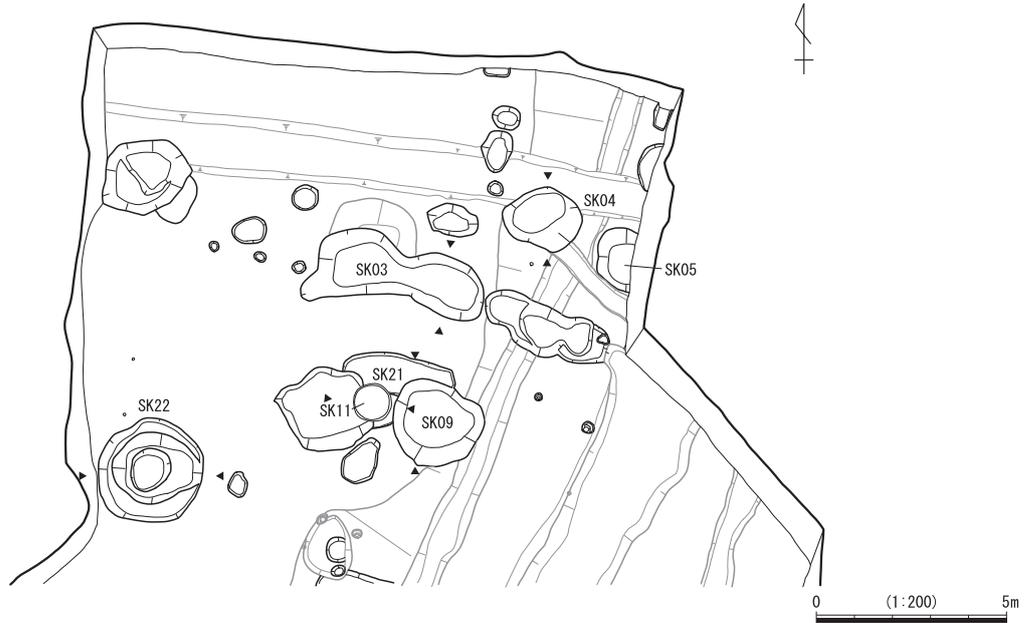
遺物は奈良三彩小壺461、土師器杯462～465、土師器杯A466～471・473、土師器皿A472、墨痕のある土師器杯か皿474、土師器甕475・476、長胴甕477～480、土師器鍋481、製塩土器482・483、須恵器杯B484・485、須恵器杯A486、須恵器皿A487、須恵器壺488～491、須恵器甕492～494、竈495等が出土した。このうち、須恵器壺488には内面に漆が付着するが、490とともにSK03の埋土から出土したものである。その他は、SE01井側の木質を確認して内部を掘り下げる際に出土した。これらの遺物は井側内に残る30cm程の厚さの埋土中から全て出土したもので、良好な一括資料といえる。それらの出土状況を図34に上層、下層、最下層と分けて示した。出土状況には供膳具、煮炊具による差異はなく、上層・下層とも礫とともに投棄された状況を示す。最下層は木質が多く認められたが、木製品は確認できない。井戸下層から奈良三彩小壺461が出土している点は特筆される。ただ、こうした三彩小壺は祭祀等に伴う可能性が指摘されているが、本遺構の出土状況からは特殊な状況は読み取れず、共伴遺物も祭祀的なものはない。井戸に入れること自体に意味があるのかもしれない。最下層からは有機質の出土が目立ったが、木製品の出土はなかった。

SE02

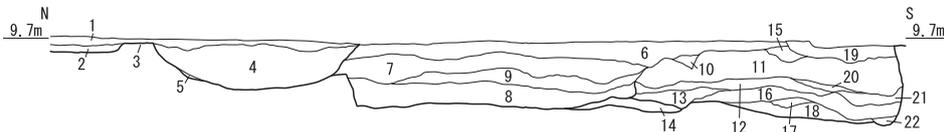
(遺物図版27-28)
(写真図版21-150-151)

SX01の東側で検出した。検出状況は南東隅が直角に近い形状を呈すが、全体的にやや不整であることから、当初は土坑と認識していた。上層は礫を多く含む埋土で、平面を段下げた時点で多くの遺物が出土した。その後、掘り下げていく途中でも遺物は散見されたが、上層ほどのまとまりはなかった。遺構検出面から1.1 m下げた位置で腐食した木質の方形プランを検出したことから井戸と認識した。木質の残りは悪いが、SE01と同様の横棧支柱型と想定でき、井側は一辺約1 mに復元できる。残存状況が悪いため、支柱と横棧の緊結構造は不明であるが、横棧の外側で縦板を設置するSE01と類似した構造であったと推測する。掘方は南北に長い隅丸長方形を呈し、長軸3.1 m、短軸2.3 mを測る。遺構検出面から井戸底まで1.4 mで、標高は8.0 mである。

遺物は土師器皿A496、土師器杯B497・498、土師器杯A499～504、土師器杯505・506、土師器高杯507～512、須恵器杯513・514、須恵器皿515～518、須恵器杯B蓋

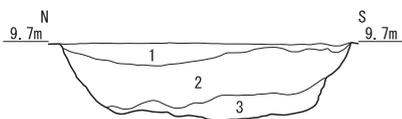


SX01-A断面 (図30に対応)



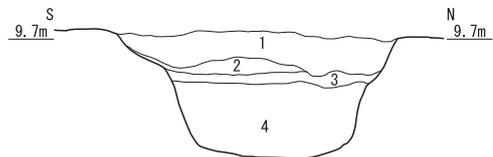
- | | | |
|------------------------------|--|------------------------------|
| 1. 10YR5/6黄褐色細砂 φ7cmの礫やや多く含む | 8. 10YR5/1褐灰色礫混じり細砂 φ7cmの礫多く含む | 15. 10YR6/3にぶい黄橙色細砂 φ7cmの礫含む |
| 2. 2.5Y4/4オリーブ褐色細砂 | 9. 7.5YR5/1褐灰色細砂 | 16. 7.5YR5/2灰褐色シルト |
| 3. 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 | 10. 10YR6/2灰黄褐色細砂 | 17. 10YR6/6明黄褐色細砂 |
| 4. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト φ6cmの礫含む | 11. 10YR6/2灰黄褐色礫混じり細砂 φ4~10cmの礫非常に多く含む | 18. 10YR6/6明黄褐色シルト |
| 5. 7.5YR4/4褐色シルト | 12. 7.5YR5/6明褐色シルト | 19. 10YR5/2灰黄褐色細砂 φ2~4cmの礫含む |
| 6. 7.5YR5/2灰褐色細砂 φ2~4cmの礫含む | 13. 7.5YR5/4にぶい褐色細砂 | 20. 2.5Y6/4にぶい黄色細砂 |
| 7. 7.5YR6/2灰褐色シルト φ7cmの礫含む | 14. 7.5YR5/2灰褐色細砂 | 21. 10YR6/4にぶい黄橙色細砂 φ7cmの礫含む |
| | | 22. 2.5Y5/1黄灰色シルト |

SX01-B断面 (図30に対応)



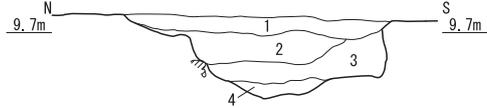
- 7.5YR6/6橙色礫混じり細砂 φ3~7cmの礫含む
- 10YR5/8黄褐色シルト混じり細砂 φ6cmの礫含む
- 10YR5/8黄褐色シルト

SK03



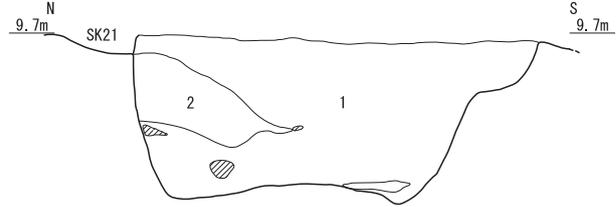
- 2.5Y5/1黄灰色砂礫 φ2~3cmこぶし大の礫含む
- 10YR5/1褐灰色細砂
- 10YR5/3にぶい黄褐色砂
- 10YR5/1褐灰色砂礫 シルト混じり

SK04



- 2.5Y5/2暗黄灰色砂礫
- 10YR4/1褐灰色細砂
- 10YR5/1褐灰色砂
- 7.5Y5/1灰色砂

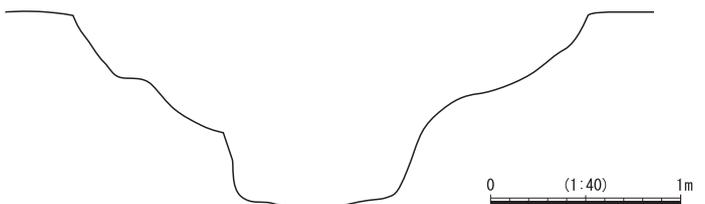
SK09



- 10Y5/2オリーブ灰色砂 5Y3/1オリーブ黒色粘土混じり
- 5Y3/1オリーブ黒色粘土 10Y5/2オリーブ灰色粘土混じり

SK22

W 9.7m E



- 2.5Y6/4にぶい黄色細砂
- N4/ 灰色シルト
- 7.5GY5/1緑灰色シルト
- 10GY5/1緑灰色シルト

SK11

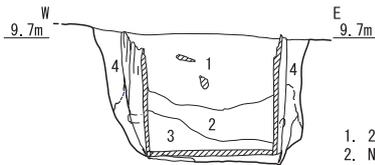


図32 4次北部遺構平面図、SX01、SK03・SK04・SK09・SK11・SK22断面図

第三章 調査の成果

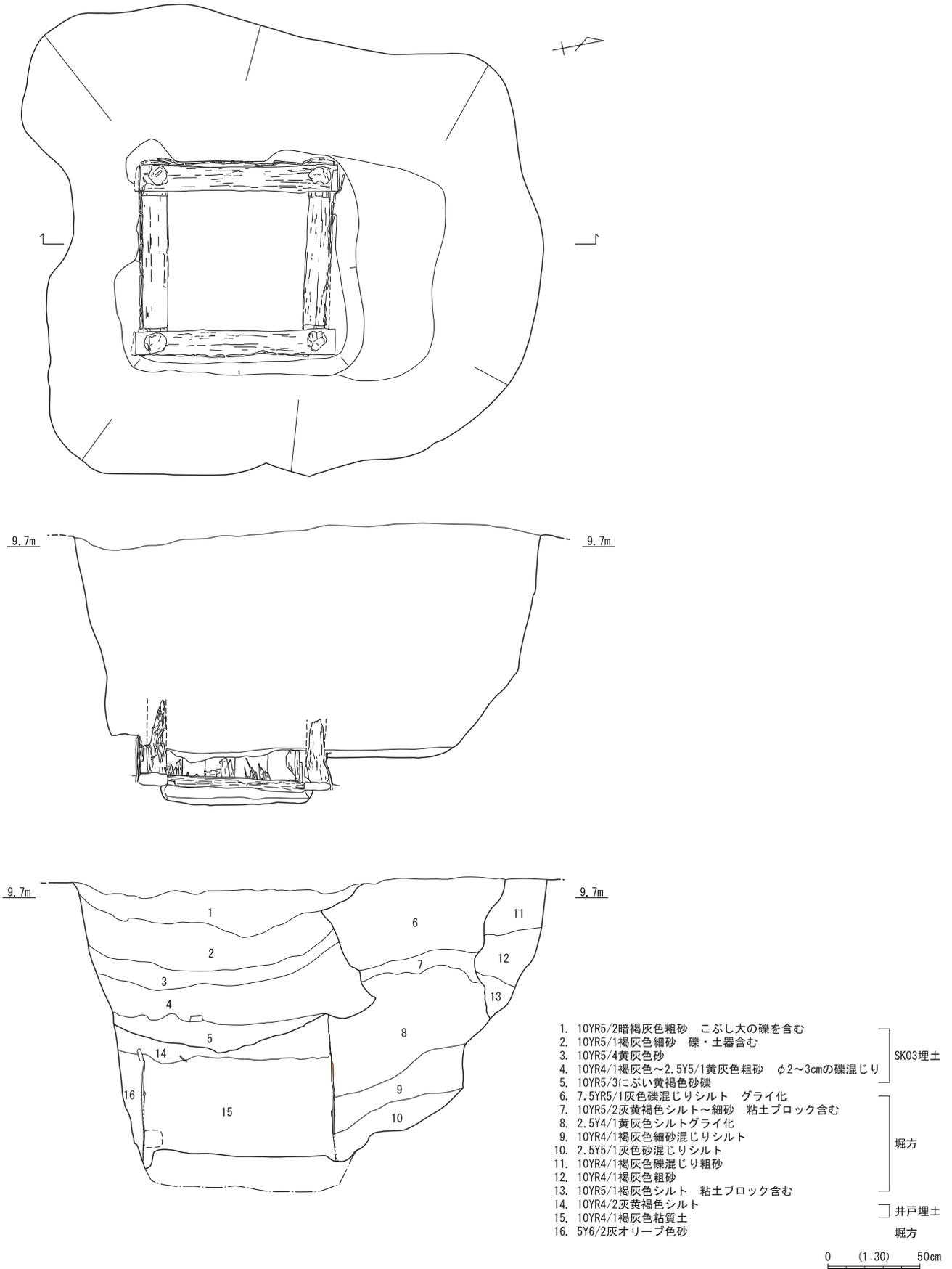
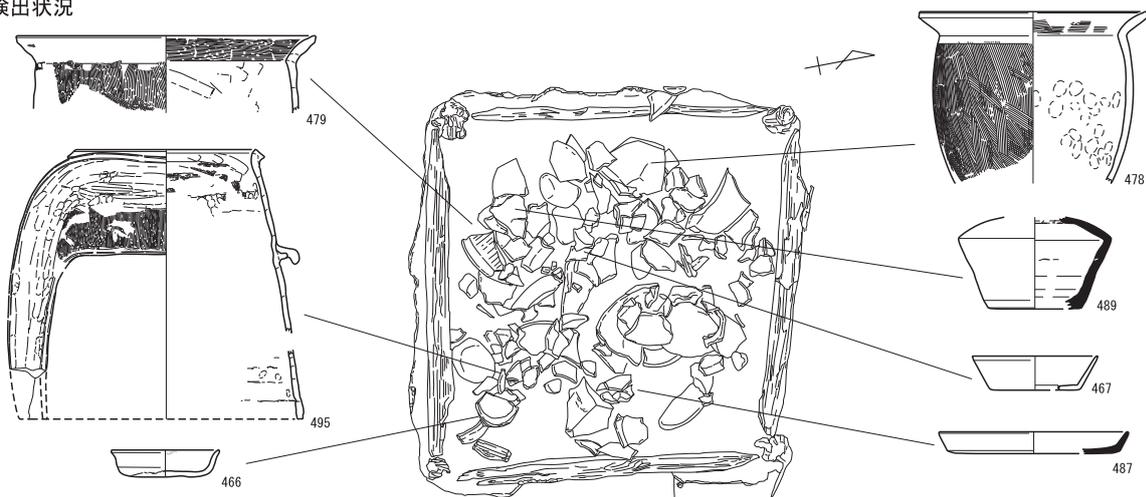
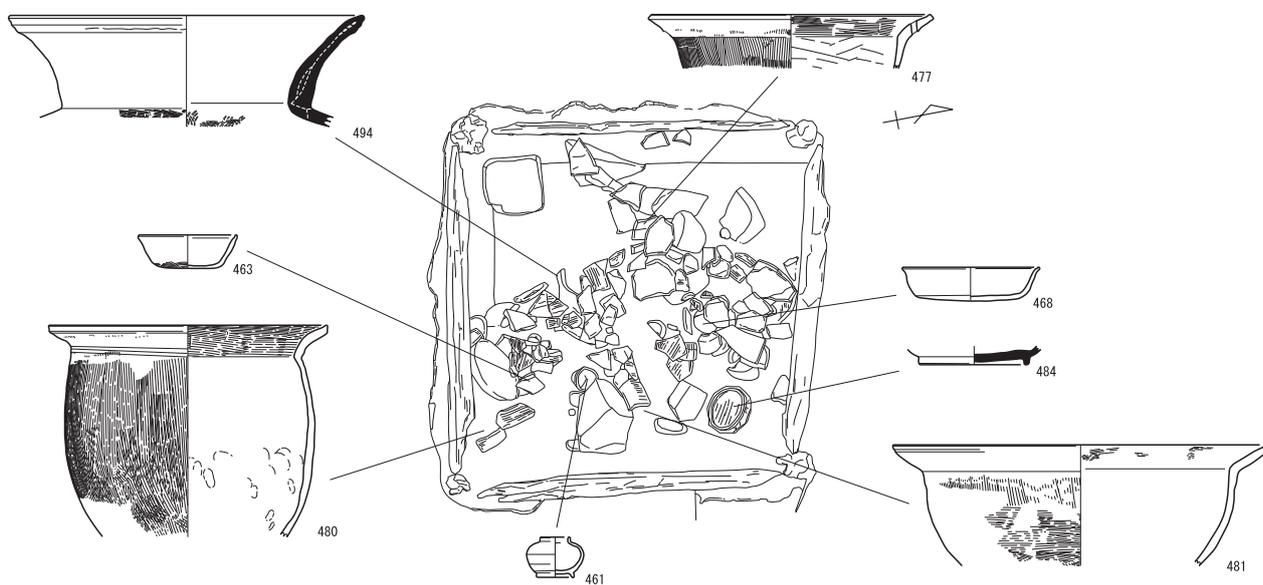


図33 4次SE01平・断面図

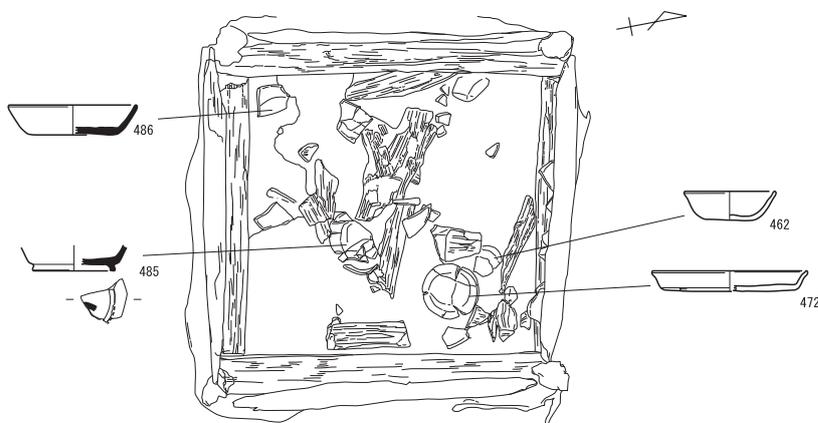
上層検出状況



下層検出状況



最下層検出状況



0 (1:20) 50cm

图34 4次SE01遺物出土状況图

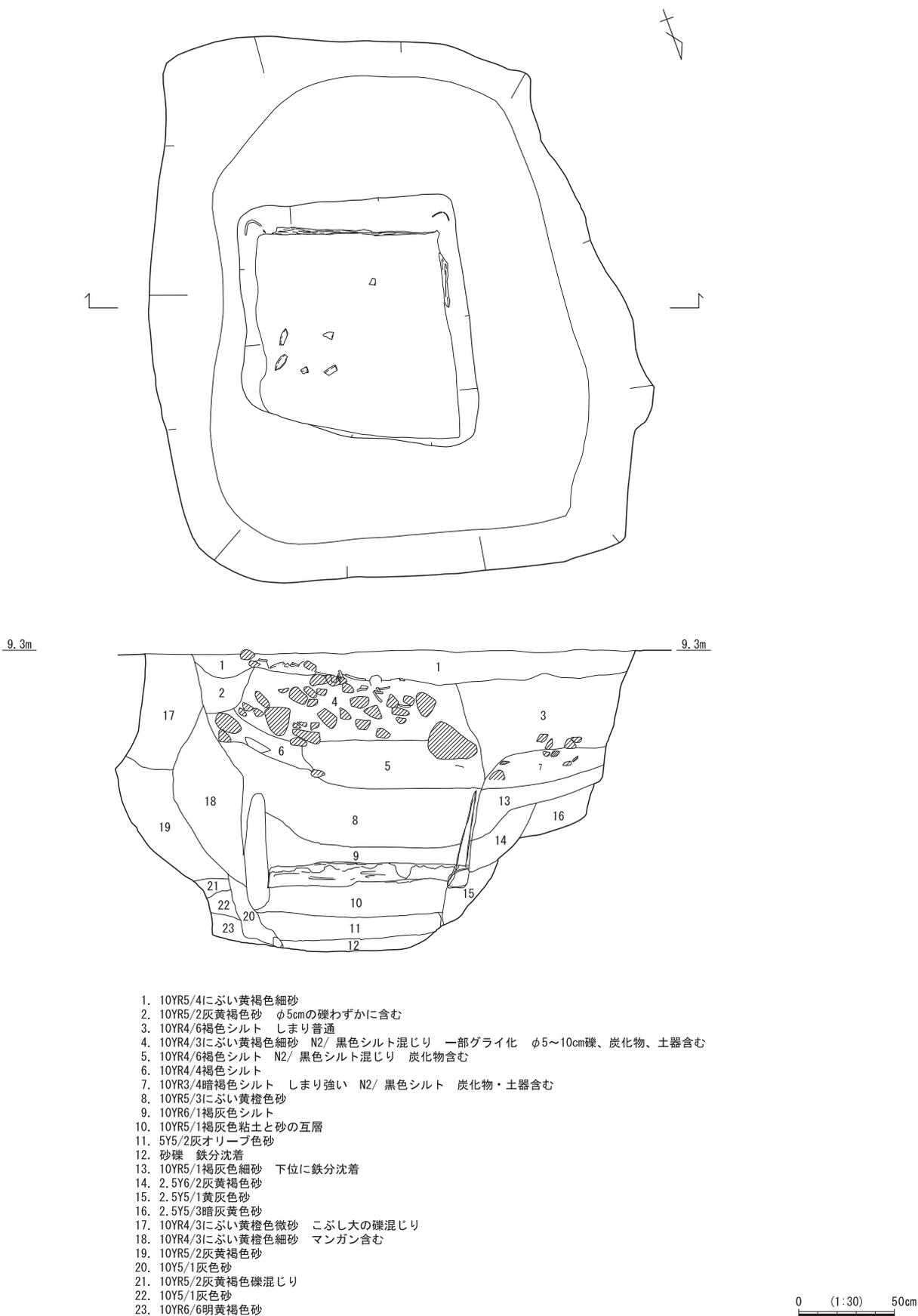
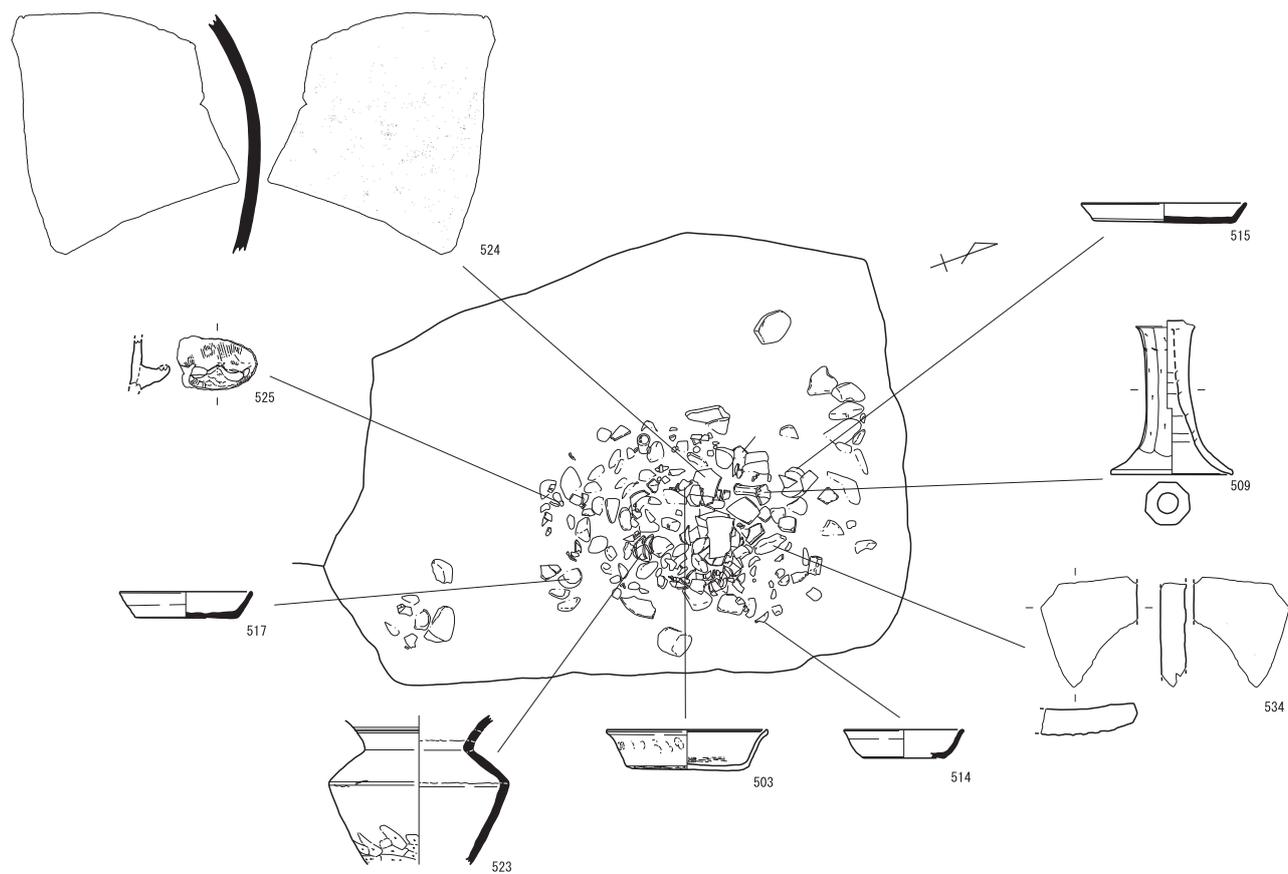
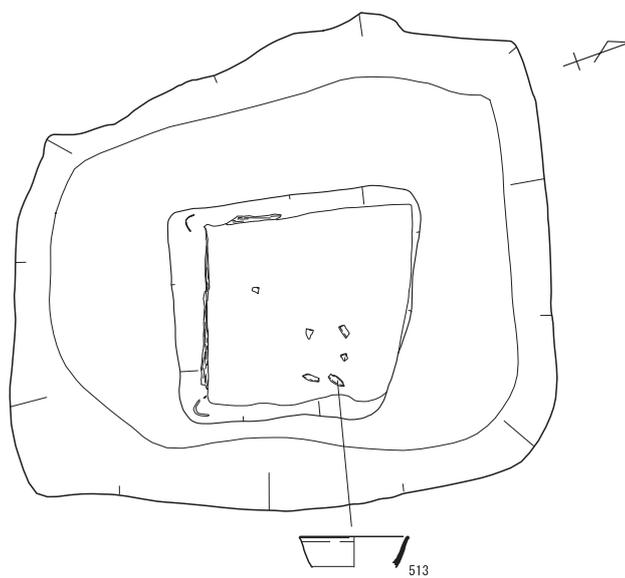


図35 4次SE02平・断面図

4層上面遺物出土狀況



最下層遺物出土狀況



0 (1:40) 1m

图36 4次SE02遺物出土狀況图

第三章 調査の成果

519、須恵器杯 B 520、須恵器壺 521～523、須恵器甕 524、土師器甕把手 525・526、製塩土器 527・528、土師器甕 529～533、平瓦 534、権 535 等が出土した。権 535 は黒雲母流紋岩で重量は 43 g である。黒雲母流紋岩は姫路周辺において採取されたものである（第 VI 章第 2 節参照）。504 と 506 は内面に黒漆がベツタリ付着している。井戸最下層からは土師器・須恵器細片が出土し、そのうち須恵器杯 513 を図示した。その他の遺物は、井戸埋没後の最上層にあたる 4 層上面からまとまって出土したものである。SE01 と SE02 の出土遺物には大きな時期差はないが、その廃絶の状況は投棄された土器や礫を多く包含する SE01 とほとんど含まない SE02 とで、大きく異なっている。

SK52

(遺物図版29-30)
(写真図版22-152-153-
217)

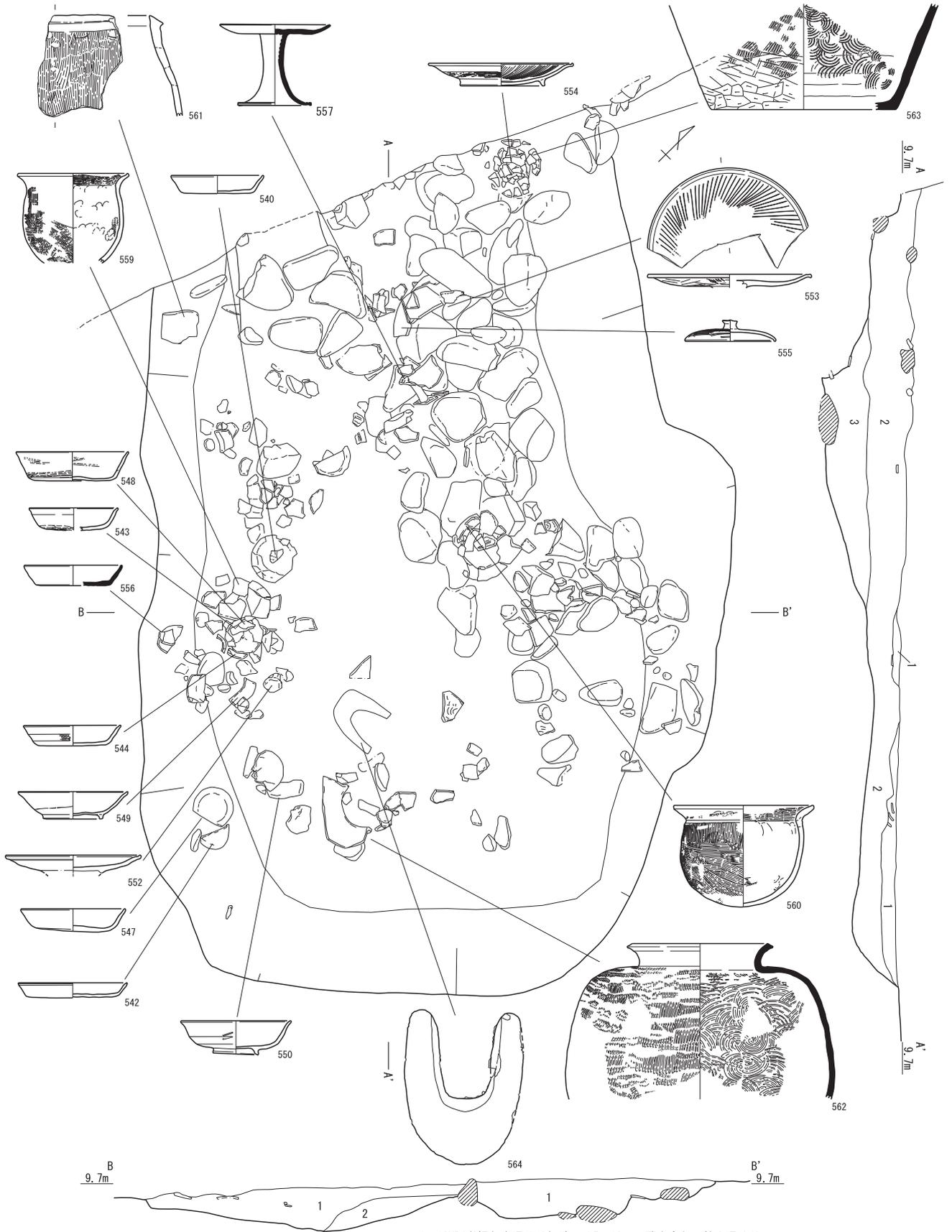
調査区の西端で検出した。調査区外に延びるが、後述する 5 次 1 区で西側の広がりをおさえることができた。4 次調査区での検出規模は東西 3.25 m、南北 2.2 m を測る。深さは遺構検出面から最大で 35cm である。埋土は炭化物を多く含み、土坑内の北半分には 20cm 程の礫が大量に認められるが、南半分にはほとんどない。遺物はこれらの礫とともに投棄されたものと見られ、土坑底からわずかに浮いた状態で出土した。埋土や礫の状況から一気に埋められたもので、出土遺物の一括性は高い。土坑底面は一定ではなく、東西断面と南北断面の交わる付近が高く、その周囲が凹んでいる。遺物は土師器杯 536～539、土師器杯 A 540・541・543～548、土師器皿 A 542、土師器台付皿 549・551・554、土師器椀 B 550、土師器高杯 552・553、土師器蓋 555、須恵器杯 A 556、須恵器高杯 557、土師器甕 558～560、竈 561、須恵器甕 562・563、鋤先 564 等が出土した。

SR01

(遺物図版31)
(写真図版23-143-153)

調査区東端で検出した流路である。南北方向に流れ、豆腐町 I 次の SX01、豆腐町 5 次 3 区の全域と 6 次 2 区 SR01、8 次 1 区 SR01 が一連となる。これらを含めた溝の規模は、幅が最大で 35 m、延長 100 m 以上となる。

調査区東端から西へ 14.5 m で西肩を検出した。肩は直線的ではなくやや出入りがあり、蛇行している。肩から溝底へは緩やかに落ち込んでいる。検出規模で東西 14.5 m、延長 27 m を測る。深さは最も深い調査区西端で標高 8.2 m である。SR01 の底面には黒褐色の溝が 3 条確認でき、西から下層 SD01、下層 SD02、下層 SD03 とした。これについては、別に記載する。SR01 の埋土は灰黄色細砂もしくは灰黄色粗砂（1～5 層）、褐灰色シルト（6 層）に分かれ、前者が上層、後者が下層の堆積である。調査では 1 m グリッドを設定し、遺物の取り上げを行った。遺物は主として上層から出土した。上層から出土した遺物は、土師器杯 A 565、土師器椀 B 566、須恵器杯 A 567～569、須恵器皿 A 570、須恵器杯 B 571～574・576、須恵器皿 B 575、須恵器杯 B 蓋 577～579、須恵器稜椀 580・581、須恵器杯 582、須恵器壺 583～585、須恵器甕 586・587、軒丸瓦 588 が出土した。588 は上原田式軒丸瓦で北へ約 15 m 離れた 6 次 2 区出土品と接合している。遺物図版 32 に下層 SD01 として掲載している弥生土器 591・598・603・604、石器 608・609 は厳密には SR01 の下層から出土している。全て下層 SD01 と平面的に重なる範囲からの出土であり、本来の帰属は明確には分けられないため、下層 SD01 において報告している。図 39 の出土状況から SR01 の西肩寄りに遺物の出土が認められる。これらの遺物は摩滅しているものが少なく、近辺にあったものと考えられるが、出土状況からは西肩寄りに遺物の出土は認められるものの、中央付近からも出土していることから、SR01 の西肩から投棄されたというよりも、流路の埋積に伴い、西肩沿いもしくは北側から流されたものと考えられる。出土遺物には漆付着土器を含むなど、SE01・SE02・SK52 と同じであること、また後世の遺物を含まないことから、流路の埋積は西部地区の遺構の存続中あるいは存続直後と見られる。このことは逆に奈良時代には SR01 は凹地となっており、活動の場所とはなっていなかったと考えられる。



- 1. 10YR4/6褐色炭混じり細砂 φ5~10cmの礫を含む 粘土混じり
- 2. 10YR6/6明黄褐色細砂
- 3. 10YR5/4こぶい黄褐色炭混じり細砂 φ3cmの礫含む

図37 4次SK52平・断面図

第三章 調査の成果

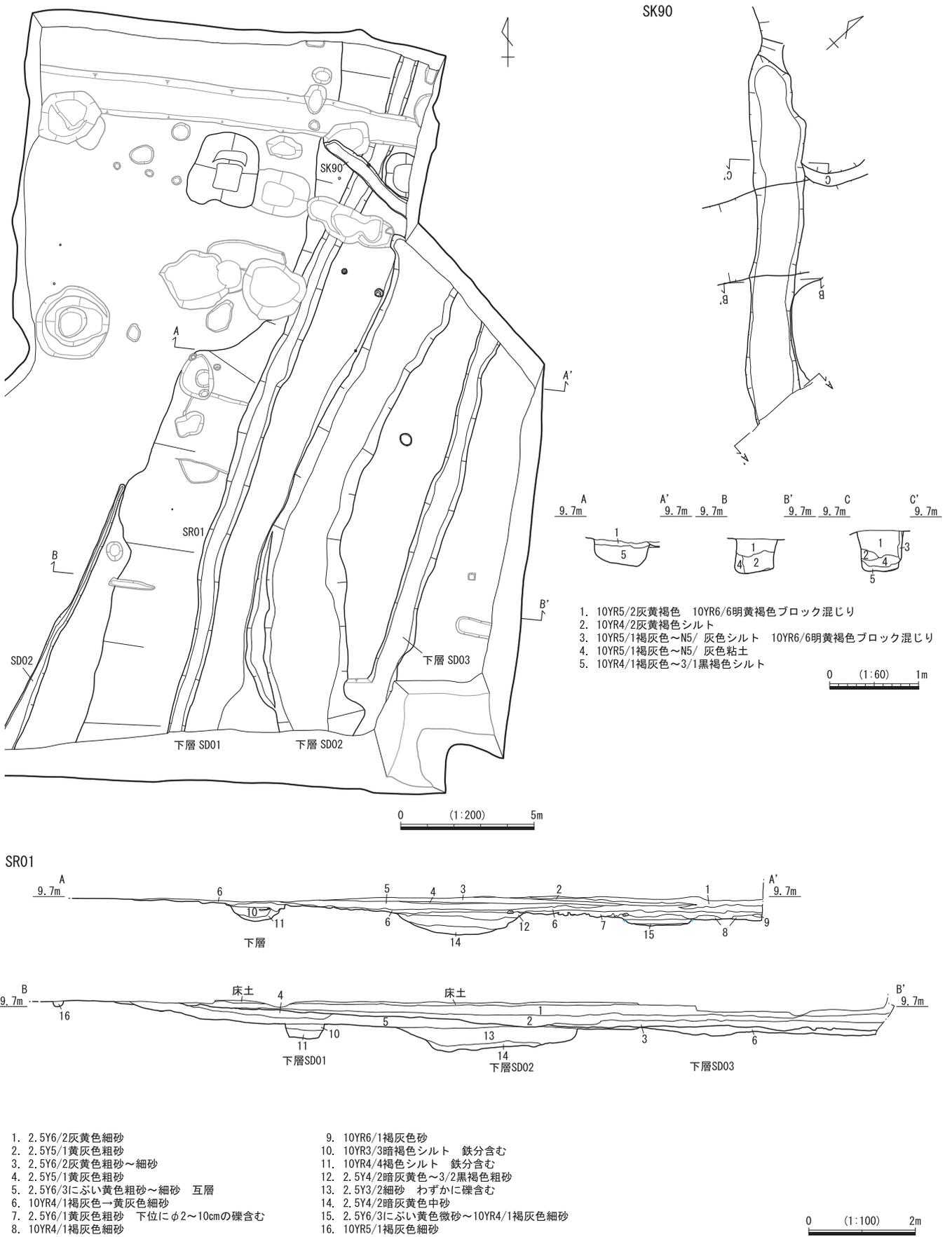


図38 4次SR01、SK90、下層SD01・下層SD02・下層SD03平・断面図



图39 4次SR01遺物出土狀況图

第三章 調査の成果

下層SD01

(遺物図版32-33)
(写真図版23-3-4、
24-1-2、153)

SR01の西肩に並行するように検出した幅約1mの溝である。断面は逆台形から皿状を呈し、延長約27mを検出した。SK90を切っている。埋土は暗褐色シルトを主体とする。遺物のうち下層SD01とSR01下層との区別が明確でないものは前述したとおりであるが、その他の遺物は全て溝内埋土の上層から出土している。弥生土器広口壺589～593、短頸壺594、甕595～606、砥石607、石鏃608、石錐609等が出土した。603と604が弥生時代後期のタタキ甕である他は、弥生時代中期初頭に位置づけられる。

下層SD02

(遺物図版33)
(写真図版23-5)

下層SD01の東1.5mで検出した。断面は皿状を呈し、下層SD01同様、明確に掘り込まれている。幅は最大で3.6mを測り、延長約18.5mを検出した。弥生土器短頸壺610、壺611・612・616・617、甕613～615等が出土した。このうち610と614は下層から出土し、他は上層から出土している。

下層SD03

(遺物図版33)
(写真図版24-1-153)

SD02の東1.0～2.5mで検出した。断面は浅い皿状を呈し、南側ではSR01の下層埋土との区別は明確ではない。幅は最大で1.4mを測り、延長約15.7mを検出した。遺物は少なく、弥生土器甕618を図示した。これら3条の溝は平行し、SR01の凹地を利用した水路の可能性が考えられる。

SD03

(遺物図版33)
(写真図版25-3-4)

調査区西部で検出した3条の溝のうち、西端の溝である。溝の最終形状は3条の溝が平行するものとなったが、SD03とSD05が先行して存在し、その埋没後にSD04が新たに掘り込まれている。溝の北端をSD06に、中央部分をSX01に切られている。延長約11.5mで、幅は70cm以上を測る。断面は上面が大きく広がり、下部はコの字状に深く掘り込まれている。深さは遺構検出面から最大で40cmである。遺物は弥生土器甕619、高杯620・621が出土した。

SD04

(写真図版25-3-4)

SD03の東で検出した溝である。3条の溝のうち、最後に掘られたものである。延長は約12.2m、幅は最大で0.45mを測る。溝の上面はわずかに広がるが、コの字状に深く掘り込まれ、深さは遺構検出面から概ね60cmである。遺物が出土していないため、時期は不明であるが、SD03とSD05の機能を引き継ぐ目的で新たに掘られた溝と考えられる。

SD05

(遺物図版33)
(写真図版25-3-4)

SD03の東約1mで検出した。SD04に切られる溝である。大きく湾曲しながら調査区を南北に縦断し、北端でSD06に切られる。延長13.5mで、幅は最大で0.8m以上あるが、両肩が検出できた箇所が存在しないため、本来の規模は不明である。断面はコの字状を呈し、深さは遺構検出面から最大で50cmである。遺物は有稜高杯622が出土した。

SD06

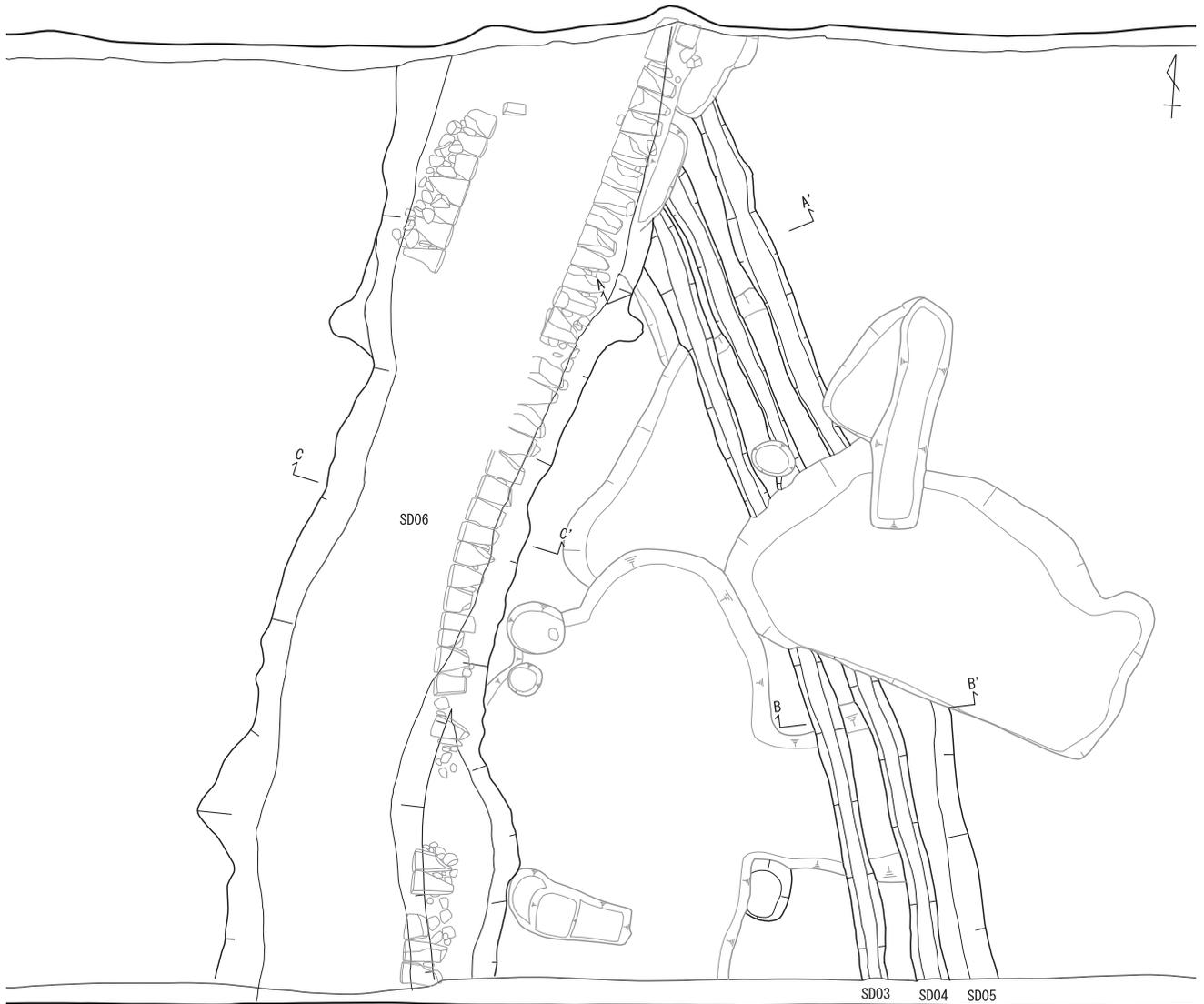
(遺物図版33)
(写真図版25-5-6)

SD06は調査区西端で検出した。上位に幅1.8mの間知石組みの溝があり、その下位で検出した。間知石組みは近代に位置づけられ、溝の西肩は下層で検出したSD06の西肩の位置と同じである。延長約14.3m、幅は3～4mを測る。断面はコの字状を呈し、深さは遺構検出面から1m前後である。遺物はほとんどなく弥生土器壺623を図示したが、本来の遺構の時期ではないと考える。埋土の様相から一気に埋められたと考えられ、新しい時期の遺物の出土が皆無であるため、断言はできないが、上面の間知石組溝が同じカーブを描くことから、間知石溝に先行する溝の可能性を指摘しておきたい。

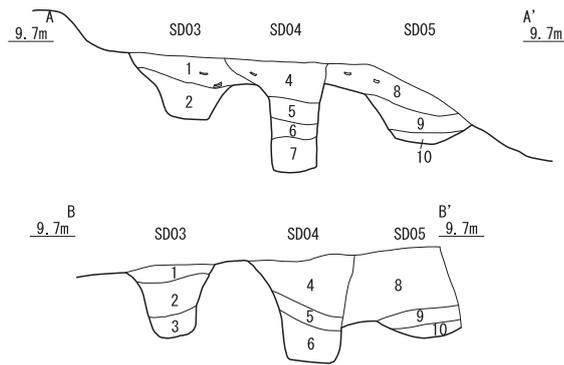
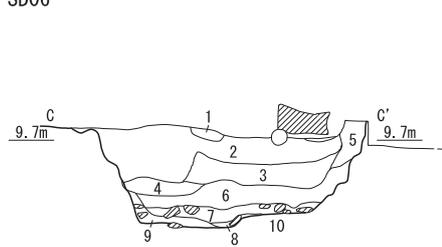
SK90

(写真図版24-3)

北西から南東に細長い土坑で、下層SD01に切られている。調査区外に延びるため全容は不明であるが、検出規模で延長4.2m、幅0.45～0.55mを測る。遺物が出土していないため時期は不明であるが、下層SD01より弥生時代中期初頭以前の遺構と考えられる。埋土は灰黄褐色から暗褐色土で、遺構の肩はほぼ垂直に掘り込まれ、断面はコの字状を呈している。中期初頭以前で、細長い形状を呈する類似の遺構としては、弥生時代前期の墓と想定した豆田遺跡3次11-2区下層SK01、8次40区SK01が挙げられる(姫路市教委2020)。



SD06



1. 5PB4/1暗青灰色粘土
2. 2.5Y6/3にぶい黄色細砂
3. 2.5Y6/1黄灰色中砂
4. 2.5Y4/2暗灰黄色中砂 φ2~3cmの礫含む
5. 2.5Y6/4にぶい黄色細砂 鉄分含む
6. 2.5Y6/4にぶい黄色中砂
7. 2.5Y6/3にぶい黄色中砂
8. 2.5Y4/2暗灰黄色中砂 鉄分含む
9. 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
10. 10YR4/6褐色中砂~5YR5/6明黄褐色中砂~細砂 鉄分多い(地山)

1. 10YR5/3にぶい黄褐色中砂 土器含む
2. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
4. 10YR3/4暗褐色砂質中砂
5. 10YR3/3暗褐色細砂
6. 10YR4/4褐色細砂 粘土ブロック含む
7. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
8. 10YR5/1褐灰色中砂 土器含む
9. 10YR6/4にぶい黄褐色中砂 土器含む
10. 10YR3/3暗褐色シルト

図40 4次SD03・SD04・SD05・SD06平・断面図

第三章 調査の成果

5次1区

(写真図版26-34)

飾磨街道に沿った調査区で2次3区の北、4次調査区の西に位置する。飾磨街道の拡幅部分と駅方面に延びる市道城南156号線にあたり南北約35m、東西約33.5mを測る。

調査区の基本層序は盛土、整地層、中世耕土(1・2層)、暗灰黄色細砂(3層)、にぶい黄褐色～灰黄褐色細砂(4・5層)、暗褐色シルト(6～8層)を経て黄褐色土もしくは砂礫の地山に至る。調査時の地表面の標高は11.1～11.3mで、中世耕土上面は10.3～10.5m、地山は調査区西端で9.3m、東端で10.2mである。調査区の東部は砂礫が高まり遺構面は4次調査区と同様、1面である。対して第1面SK19付近から西側は地形が落ち込み、堆積状況が良好である。3面の調査を行った。1次～3次までは中世耕土上面を含めた4面の調査を行っていたが、中世耕土上面を掘り下げても井戸や土坑等の掘方の大きなものは調査可能であることから中世遺物の包含層である3層直下、4層上面を第1面とした。1～3次調査の第2面と概ね対応する。第2面は暗褐色シルトの6層上面とし、1～3次の第3面と対応する。第3面は地山とした。第1面は近世から平安時代にかけての遺構を検出した。第2面は奈良時代の遺構を検出した。第3面は弥生時代に位置づけられるが、遺構・遺物は少ない。

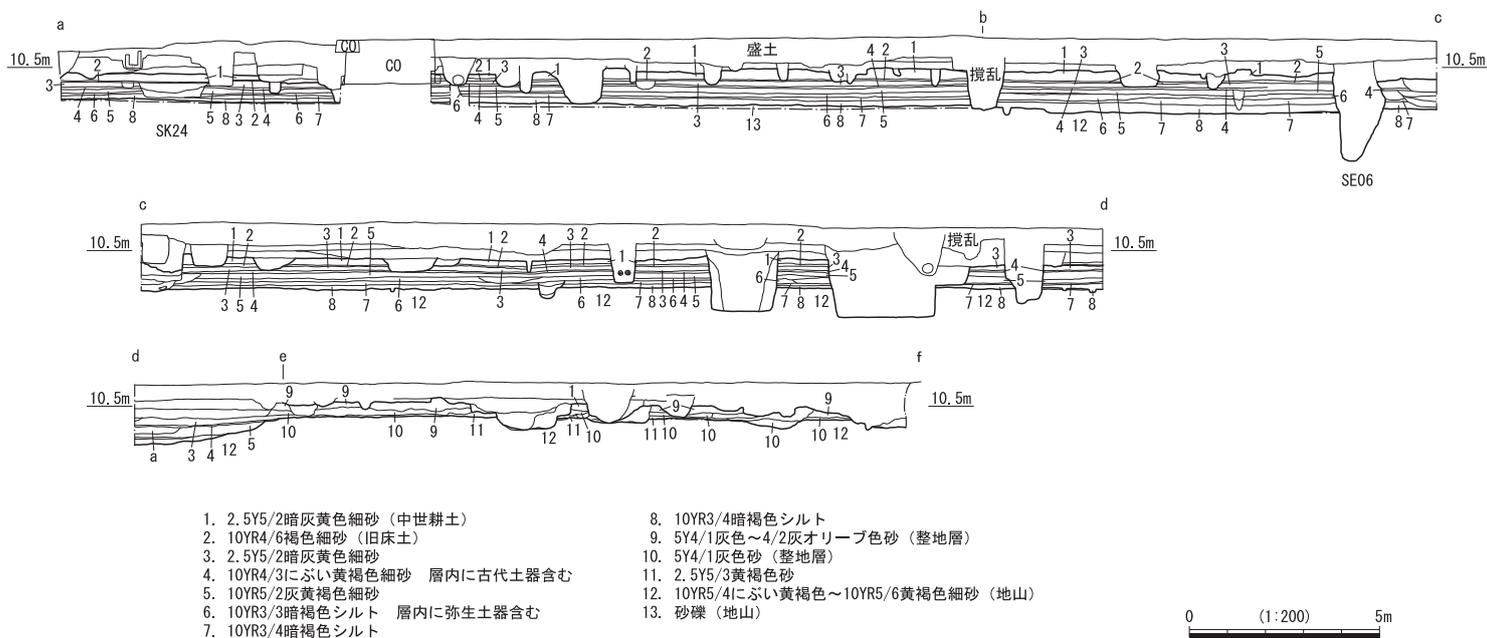


図41 5次1区土層断面図

第1面

4層の上面を検出面とした。検出した遺構は井戸、土坑、溝、柱穴、石組み等である。前述したように江戸時代整地層を掘り下げた時点で検出を行ったため、飾磨街道沿いについては、江戸時代の遺構は掘り込みの深いものに限られる。調査区東部では、耕土直下に地山である砂礫層が確認でき、主として江戸時代の井戸や土坑、漆喰遺構を検出した。明確に中世と位置づけられる遺構はない。

SE01

(写真図版29-1)

調査区東部南端で検出した。掘方は円形を呈し、直径1.3mで、その内部に河原石を円形に組んでいる。石組みの内径は約70cmで、深さは遺構検出面から70cmである。底面の標高は9.2mで他の井戸に比べて浅い。3次1区SE01と類似しており、井戸ではない遺構の可能性もある。遺物は出土していないが、近世から近代にかけての遺構と想定する。

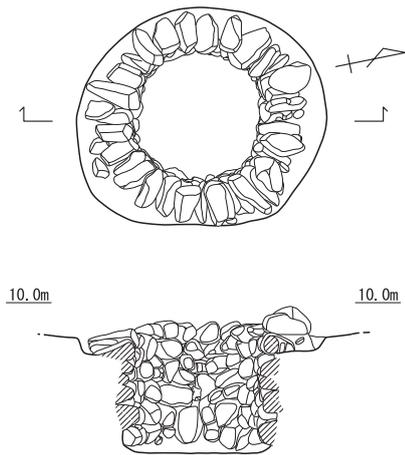


图42 5次1区第1面平面图

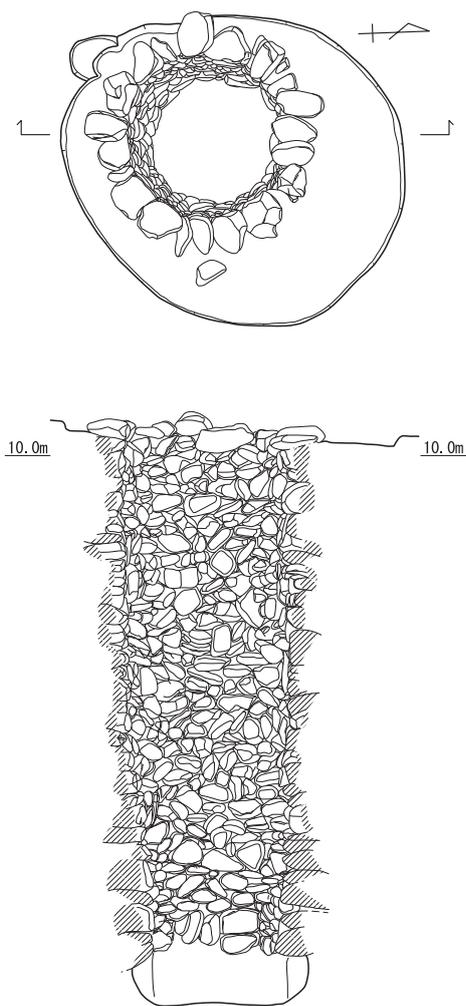
第三章 調査の成果

- SE02**
(写真図版29-2) SE01の北西約7mの位置で検出した。掘方は円形を呈し、長軸で1.86mを測る。掘方の南寄りに河原石で石組みの井側を構築している。内径は85cmを測る。深さは遺構検出面から3.1mで、底面の標高は7.1mである。石組みは海砂で一気に埋められている。遺物は出土していないが、埋土から井戸の廃絶は近現代であると考えられる。
- SE03**
(遺物図版36)
(写真図版29-3・7・154) 調査区南端で検出した。掘方は直径約2mの円形で、底面の深さは遺構検出面から3.18mである。遺構検出面から約1.4m下で掘方中央に石組みを確認した。石組みは河原石を用い、その内径は80cmで、井戸底の標高は6.82mである。遺物は土師器小皿651、染付小杯652、初期伊万里皿653、染付蓋654、肥前系陶器皿655、土師器焙烙656～660、備前焼甕661、軒平瓦662等が出土した。廃絶の時期は18世紀前半に位置づけられる。
- SE04**
(写真図版29-8) SE03の北東2.5mの位置でSE04を検出した。掘方直径2.3mで深さは遺構検出面から2.64mである。石組みや木組み等は確認できないものの、掘方の規模と比較的垂直に掘られることから井戸の可能性を想定した。遺物は出土していない。
- SE05**
(遺物図版37)
(写真図版29-4・6・154) 調査区北部で検出した。掘方はやや歪で長軸2.14m、短軸1.8mである。内部に石組みを伴う。石組みは遺構検出面から約1m下で検出した。正円を意識して組んだのであろうが、やや変形している。内径は約75cm、井戸底の標高は7.4mである。石組みは約1.3m組まれているが、その下部は確認できない。木質は確認できなかったが、当初は石組み下部に何らかの構造物が存在していたのかもしれない。井側埋土から土師器小皿663～665、土師器皿666・667、肥前系磁器皿668・669、肥前系陶器椀670・671、陶器鉢672・丹波焼鉢673、白磁小杯674、染付小徳利675、土師器焙烙676・677、丹波焼播鉢678、備前焼播鉢679、寛永通宝680、砥石681等が出土した。SE04と同様、18世紀前半と考えられる。
- SE06**
(遺物図版40)
(写真図版29-5) 調査区北端で検出した。掘方の一部が調査区外に広がるが、井側は調査区内でおさまっているため、完掘した。掘方は円形を呈し、直径1.93m、遺構検出面から1.6m下げた時点で石組みを検出した。石組みの内径は約60cmで、約55cmが残存していた。遺物は土師器皿A716～719、土師器杯720、土師器椀B721、土師器甕722・723等が出土した。出土遺物は全て古代のものであるが、井戸を検出した位置が6次3区2-SD01に重なることからこれらの遺物は混じり込みと考えられる。本来の時期を示す遺物は出土していない。SE06、SE05、SE03を検出した位置は、飾磨街道から東へ8.5mの位置で揃っている。地下水脈の関係もあるのだろうが、道路に対して井戸の配置が共通する点が指摘できる。
- SK03**
(写真図版30-6) 調査区東端で検出した土坑である。西肩部分で延長1.86m、高さ約25cmの石組みの残存部分を検出した。最大3石を積み東側に面を持っている。4次調査ではSK03の東側への延びを検出できていない。石組みは直線的でSK03の平面プランとは合致しないようにも見える。むしろ、後述するSK06や周辺の遺構の配置方向とは合致し、また、4次調査区で検出したSA01とも揃うことから飾磨街道沿いの町屋の裏手を区画する施設の一部である可能性を考えておきたい。
- SK06**
(遺物図版34)
(写真図版30-7・32-3) 調査区東端で検出した。SK52を切る遺構である。南北に長い溝状を呈す。検出規模で延長4.8m、幅は最大で1.1mを測る。SK52と重なる位置で幅0.6mの河原石を用いた石組みを検出した。北側に面を持ち、28cm程残存しているが、対になる石組み等もなく、その性格は判然としない。遺物は染付碗624～627、刷毛目椀628、外面に梅文を描く陶器椀629、土師器焙烙630等が出土した。
- SK11**
(遺物図版34) SE02の南0.9mの位置で検出した、漆喰塗り遺構である。SK47の埋没後に掘られたものである。円形を呈し直径1.1m、深さは遺構検出面から50cmを測る。底面まで漆喰塗りで、厚さは概ね10cmである。遺物は瀬戸内系焙烙631と在地の炮烙H類632が出土した。

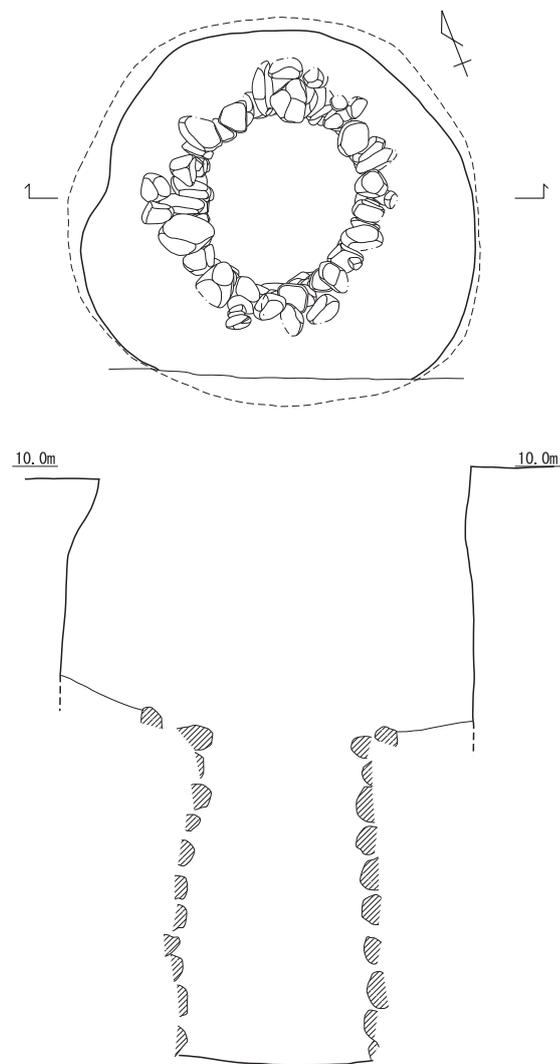
SE01



SE02



SE03

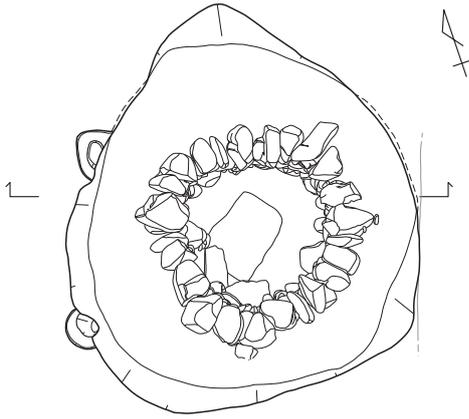


0 (1:40) 1m

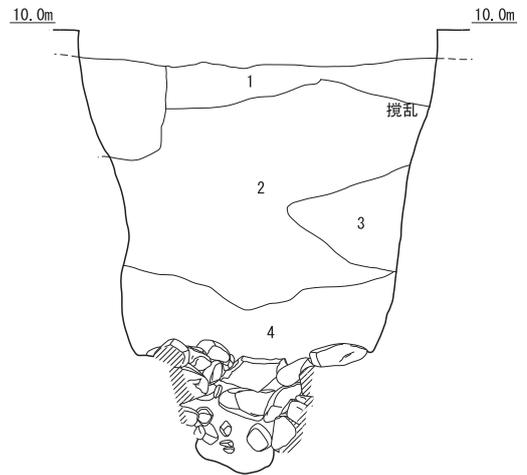
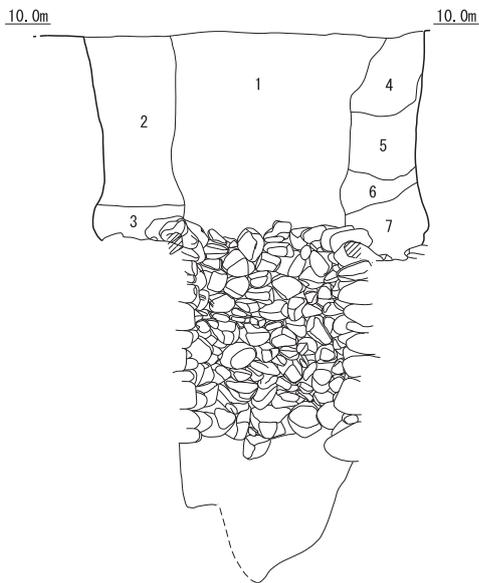
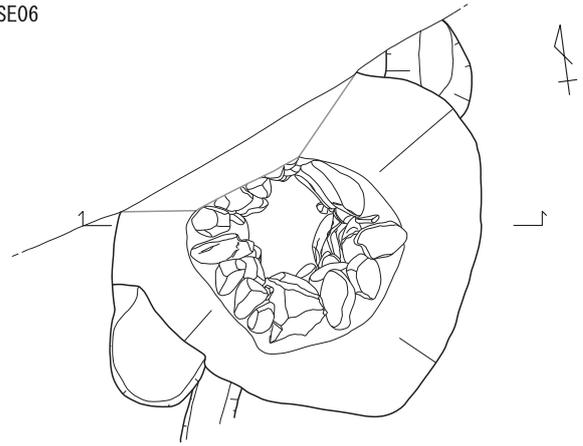
图43 5次1区SE01·SE02·SE03平·断面图

第三章 調査の成果

SE05



SE06



1. 2.5Y4/1黄灰色細砂 黄色土混じり
2. 10YR5/4にぶい黄褐色砂
3. 10YR4/1褐灰色砂礫
4. 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫
5. 2.5Y4/1黄灰色粗砂
6. 2.5Y5/3黄褐色砂
7. 10YR4/1褐灰色砂礫

1. 10YR5/2灰黄褐色砂礫
2. 10YR5/1褐灰色シルト 10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック混じり
3. 2.5Y5/1黄灰色砂 10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック混じり
4. 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫

0 (1:40) 1m

図44 5次1区SE05・SE06平・断面図

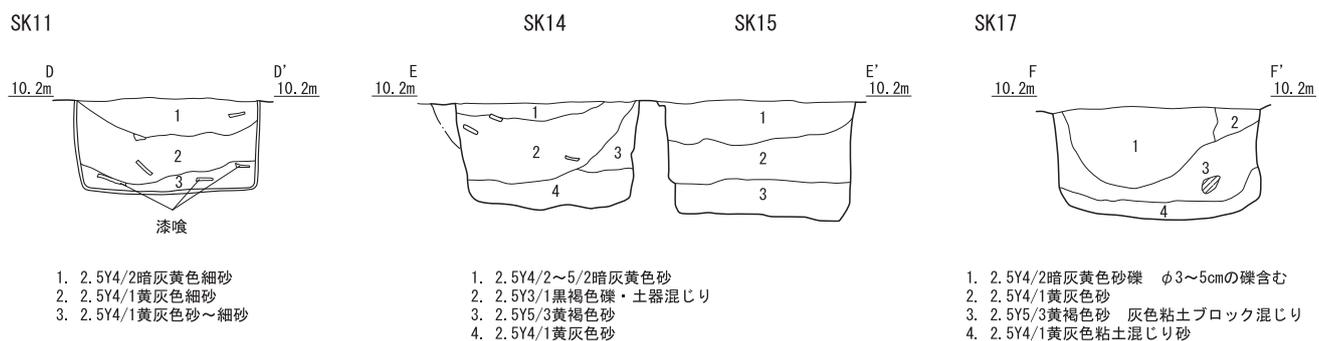
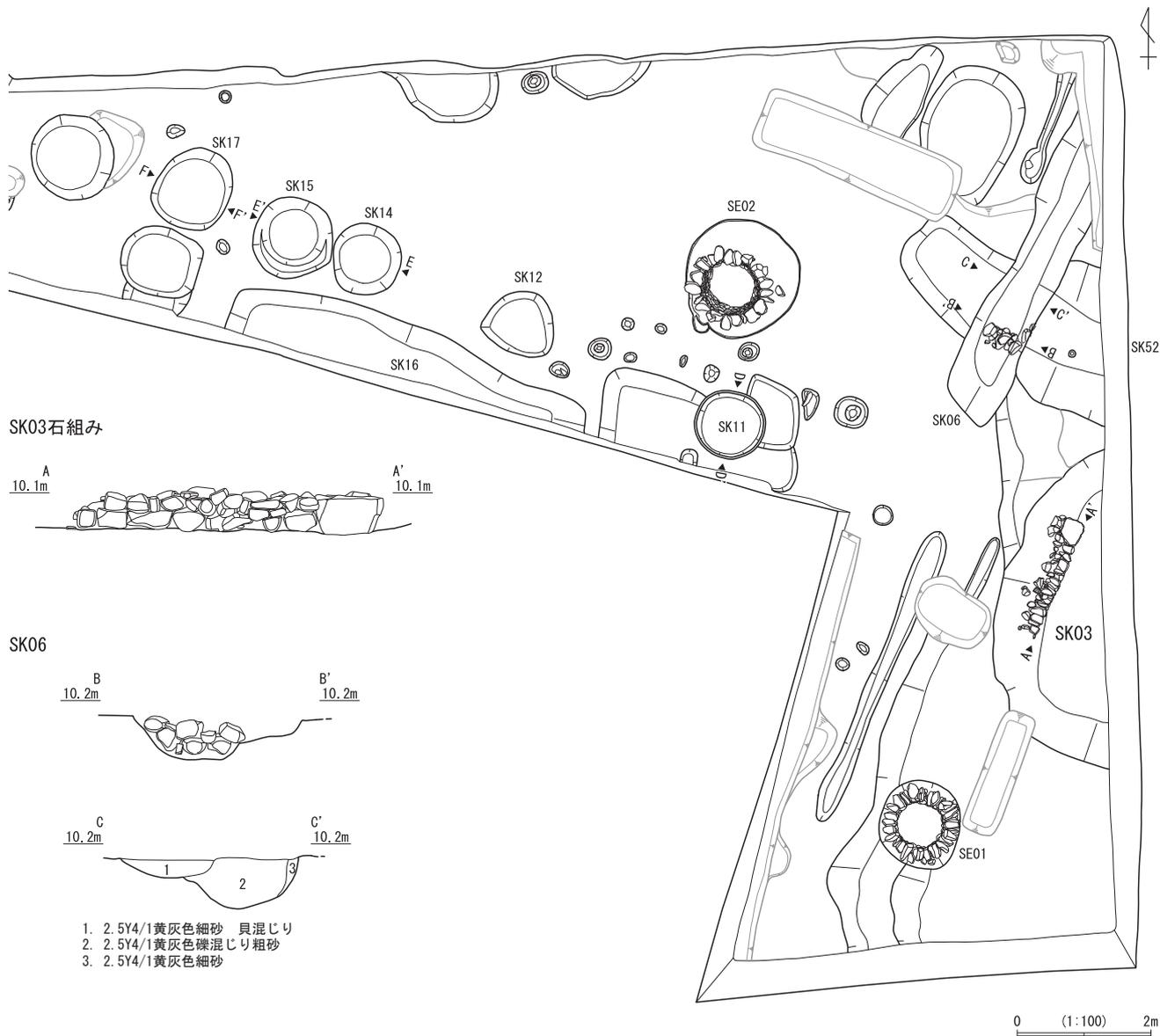


図45 5次1区東部遺構平面図、SK03・SK06・SK11・SK14・SK15・SK17断面図

第三章 調査の成果

SK14

(遺物図版35)
(写真図版30-3)

SK11の西約5mの位置で検出した円形の土坑である。直径は96cm、深さは遺構検出面から58cmを測る。西に隣接するSK15は、直径1.04m、深さ60cmと形状・規模とも類似する。SK14とSK15は2基が一体となる構造と推測する。土坑の掘方は垂直であることから、木質の遺存は確認できないが、本来は曲物や桶等を埋設していた可能性が高い。遺物は染付碗640、陶器碗641、陶器碗642、陶器鉢643・644・647、堺・明石系播鉢645・646、軒丸瓦648、煙管649、砥石650等が出土した。647は備前焼鉢であるが、本来は窯道具であろう。648は珠文部分が凹むタイプの軒丸瓦である。

SK17

(遺物図版34)

SK15の西50cmの位置で検出した円形の土坑である。直径は1.1m、深さは遺構検出面から60cmを測る。形状・規模等は前述のSK14・SK15と類似するが、これらの遺構とは通りがやズレている。むしろ、南で検出したSK18と南北に連なる可能性を指摘しておきたい。本遺構も掘方は垂直で木質等の残存はないものの、本来は桶や曲物が埋設していたかもしれない。遺物は埋土から染付碗633、陶器碗634、土師器焙烙635、土師器壺636、瓦質土器火鉢637が出土した。

SK19

(遺物図版34)
(写真図版30-2)

SK17の西60cmの位置で検出した。掘方は直径1.3mを測り、深さは遺構検出面から74cmである。遺物は柿釉皿638、火消壺の蓋639が出土した。

SK24

(遺物図版38)
(写真図版31-1・2・154)

調査区西端で検出した。調査区外に広がるが、検出状況から正方形もしくは長方形の遺構と推測できる。検出規模で南北1.8m、東西1.6mを測る。深さは遺構検出面から概ね25cmであるが、西壁断面から本来の深さは約40cmである。底面は平坦であり、肩は比較的急角度で掘り込まれている。土坑埋没後に上面から柱穴が掘られている。土坑内には礫が散見し、これらに混じって遺物が出土する。埋土には炭化物が含まれるが、SK30のように面を為すまでには至らない。遺物は土坑底面に近い場所から比較的多く出土した。意図的なまとまりは見出しがたいが、完形に復元できるものが多い。土師器小皿682～686、土師器杯687～689、須恵器碗690・691、白磁皿692、白磁碗693を図示した。

SK30

(遺物図版38)
(写真図版31-3・6・154)

SK24の3.5m北の位置で検出した。北側の一部を鉄道用に敷設された水道管により攪乱を受けるが、全体的に良好に残っていた。平面形は円形に近い隅丸方形を呈している。南北2.33m、東西2.55m、深さは遺構検出面から概ね30cmを測る。土坑底面より5～10cm上位に厚さ3～9cmの炭化物の単純層が広がっている。埋土はこの炭層をはさんで上下に分けられる。炭層を被覆する埋土からの出土遺物は少なく、炭層とその下部から出土した。特に炭層の下位からは形状を保った遺物の出土が目立つ。炭層は土坑内に一定の広がりを持つことから廃棄に伴うものというよりは、何らかの意味を持って形成された可能性がある。ただ、焼土等は含まないことから炭化物はSK30で発生したものではなく、他所から持ち込まれたものと推測できる。土師器小皿694～698、土師器小杯699、土師器杯700～705、土師器皿706、土師器碗707、須恵器碗708、白磁皿709・712、白磁碗710・711、土師器高杯713、須恵器甕714、丸瓦715を図示した。このうち、炭層及び上層から出土したのは、698～702、704、706、710で、その他は下層からの出土である。遺物には大きな時期差は認められないことから、比較的短い時間でおさまる一括資料といえる。出土遺物には須恵器や磁器も認められるが、これらは細片で、完形に近い土師器皿の在り方とは異なっている。土坑中央分には土師器皿はなく、周縁部で完形に近い土師器皿が出土していることは、人為的な様相であるのかもしれない。

SK47

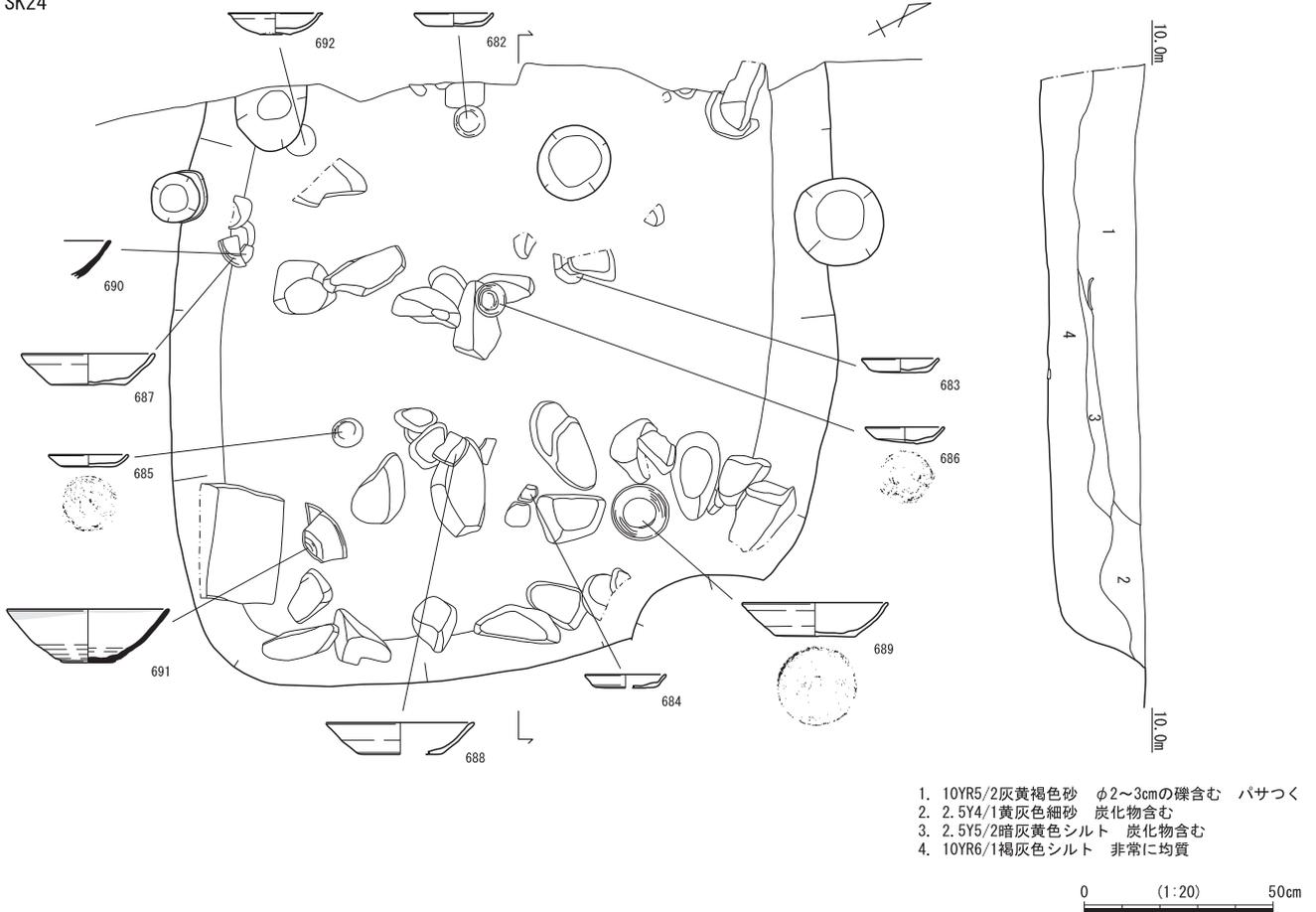
(遺物図版40)

SK11に切られる遺構である。調査区外に広がるため、全容は判然としない。検出規模で東西約3m、南北1.3m、深さは遺構検出面から31cmである。埋土から土師器托皿724が出土した。

- 柱穴** 200基以上の柱穴・ピットを検出した。柱通りが揃うように見受けられるものもあるが、明確に建物や列を構成するものはない。これらのピットの埋土は基本的に灰色を呈し、中世段階と考える。ピットの多くは全く遺物が出土しないか、出土しても細片がほとんどで時期は判断できない。わずかながら図示に耐えうる遺物が出土した柱穴について、以下に報告する。
- SP06** (遺物図版40) SE02に切られる柱穴である。円形を呈し、直径25cmを測る。SE02に切られるため、柱痕跡の存在は不明確である。掘方とみられる埋土から土師器小皿725が出土した。
- SP11** (遺物図版40) SE03の北1mの位置で検出した。円形を呈し、直径30cm、深さは遺構検出面から15cmである。埋土から土師器皿726が出土した。
- SP13** (遺物図版40) SE03の北1.4mの位置で検出した。円形を呈し、直径24cm、深さは遺構検出面から24cmである。埋土から土師器小皿727が出土した。
- SP14** (遺物図版40) (写真図版32-7) SP13の北90cmの位置で検出した。平面は東西に長い円形を呈し、長軸40cm、短軸30cmを測る。深さは遺構検出面から17cmである。柱痕跡から底部ヘラ切りの土師器杯728が出土した。
- SP18** (遺物図版40) SE03の西1.5mの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は30cm、深さは遺構検出面から22cmを測る。掘方から東播系須恵器椀729が出土した。
- SP24** (遺物図版40) SP18の西70cmの位置で検出した。掘方は東西に長い隅丸長方形を呈す。長軸40cm、短軸20cm、深さは遺構検出面から16cmを測る。埋土から須恵器皿A730が出土した。埋土は灰色を呈すことから、出土した730は混じり込みであろう。
- SP25** (遺物図版40) SP18の西1.6mの位置で検出した。掘方は東西に長い円形を呈し、長軸50cm、短軸30cm、深さは遺構検出面から19cmを測る。埋土から東播系須恵器椀731が出土した。
- SP62** (遺物図版40) SP25の北70cmの位置で検出した。SP61に切られ、SK23を切る。掘方は円形を呈し、直径30cmを測る。深さは遺構検出面から25cmで、掘方から東播系須恵器椀732が出土した。
- SP69** (遺物図版40) SE04に接した位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は28cmを測る。深さは遺構検出面から15cmで、埋土から東播系須恵器椀733が出土した。
- SP72** (遺物図版40) SE04の西1mの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は30cmを測る。深さは遺構検出面から9cmである。掘方から東播系須恵器椀734が出土した。
- SP118** (遺物図版40) (写真図版32-4) SE05の南5.5mで検出した。掘方は円形を呈し、直径26cmを測る。深さは遺構検出面から25cmで、柱痕跡から底部ヘラ切りの土師器杯735が出土した。
- SP172** (遺物図版40) (写真図版32-5) SE05の北1.5m、調査区東壁沿いで検出した。掘方は円形を呈し、直径は25cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。深さは遺構検出面から18cmで、柱痕跡の最下部から須恵器杯B蓋736が出土した。埋土は灰色基調で、本来の帰属時期はSP24と同様、中世であろう。736は沈みこみを防ぐ目的で使用されたのかもしれない。
- SP174** (遺物図版40) SK24の北1.4mの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径20cmを測る。深さは遺構検出面から13cmで、掘方埋土から須恵器杯A737が出土した。本来の帰属時期はSP172と同様、中世であろう。
- SP180** (遺物図版40) (写真図版32-6) SE03の北にある攪乱に切られた状態で検出した。東西にやや長い円形を呈し、柱痕跡は掘方の西側に寄った位置で検出した。長軸40cm、短軸28cm、深さは遺構検出面から40cmを測る。柱痕跡の埋土から底部ヘラ切りの土師器杯738が出土した。
- SP199** (遺物図版40) SK19の南50cmで検出した。攪乱を受けているが、本来の掘方は直径25cm程の円形と想定する。深さは遺構検出面から19cmを測る。遺物はⅡ類の白磁碗739が出土した。口縁の玉縁の小さいⅡ類碗である。

第三章 調査の成果

SK24



SP14

SP118

SP172

SP180

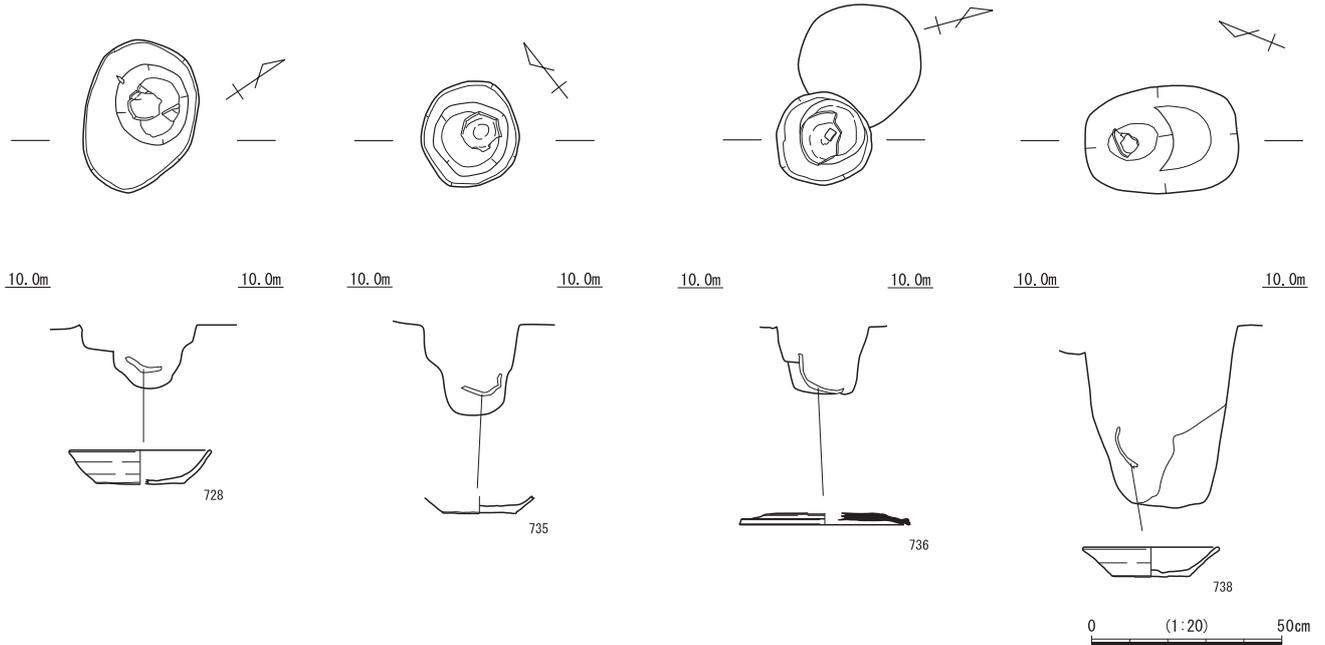
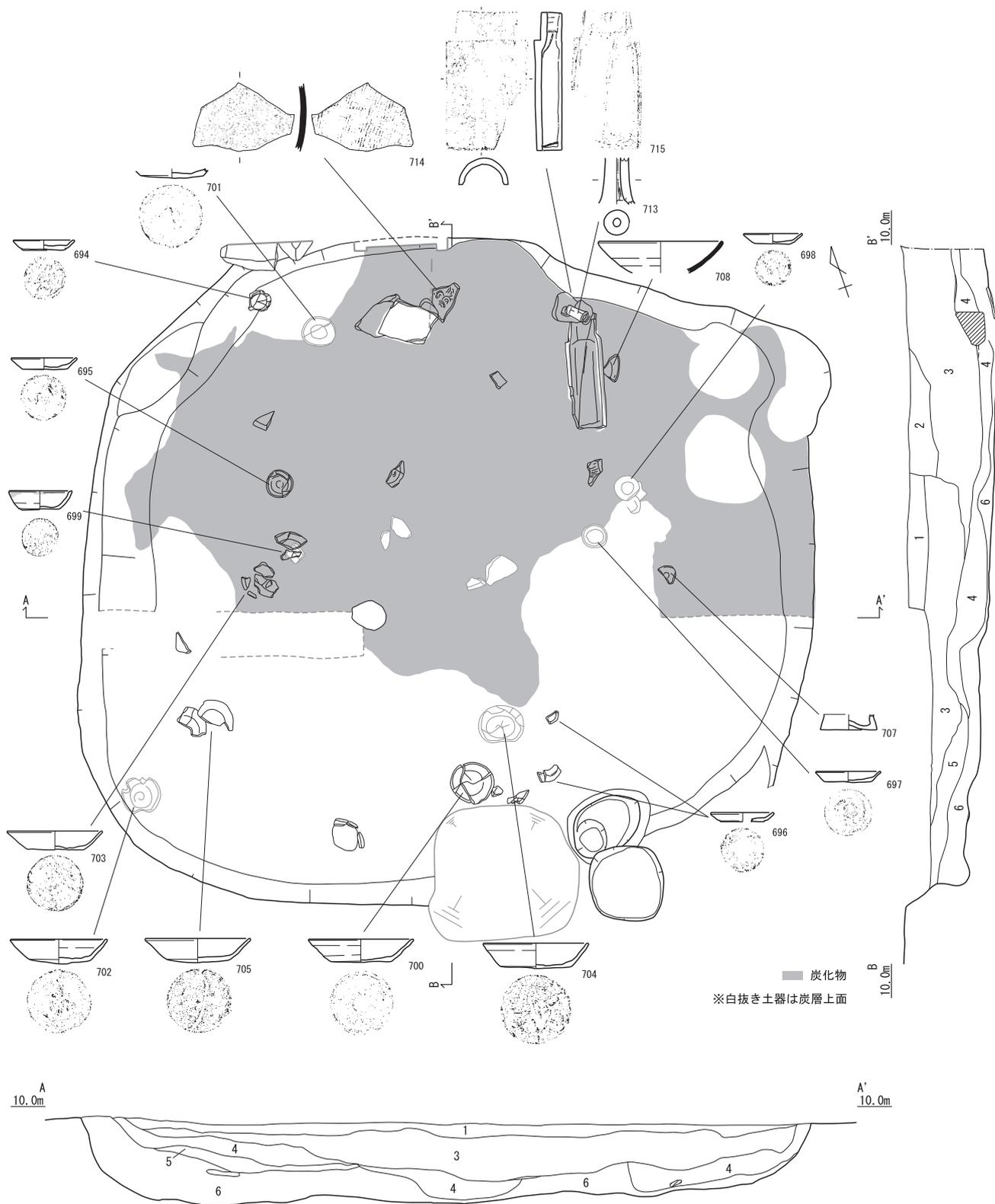


図46 5次1区SK24、SP14・SP18・SP172・SP180平・断面図



1. 10YR4/1 褐灰色細砂 炭化物・土器含む
2. 10YR5/3にふい黄褐色細砂
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色～6/2 灰黄色細砂 わずかに炭化物含む
4. 炭化物層
5. 2.5Y6/3にふい黄色細砂
6. 2.5Y5/1 黄灰色細砂

図47 5次1区SK30平・断面図

第三章 調査の成果

第2面

6層の上面を遺構検出面とした。土坑、柱穴を検出した。第2面は奈良時代の遺構検出面にあたるが、第1面に比べて遺構数は少ない。調査区東部では更に遺構数が少なくなり、当該時代の遺構はSK52のみである。第2面で検出した土坑は、いずれも同程度の掘り込みで、遺物の出土状況からみても、上部は削平を受けている可能性が高く、本来の生活面は更に上であったと考えられる。

SK52

(遺物図版41)
(写真図版32-1・2)

調査区東端で検出したSK06に切られる土坑である。本遺構は4次調査で検出したSK52の続きであることから調査段階で同じ遺構番号を採番した。本調査区で検出した遺構の規模は東西3.8m、南北1.98mである。4区SK52を含めた規模は東西6.24m、南北は最大で2.16mとなる。土坑の掘込みは比較的緩やかで、断面形は皿状を呈し、深さはSK06以西で15cm前後、SK06以東で55cm前後である。遺物は大量に投げ込まれた円礫とともに出土した。4次調査区では、比較的形状を保った状態で出土した個体が多かったが、本調査区では、そうした遺物は少ない印象を受ける。SK06以西の範囲からの出土量は多くはないが、いずれも底面からわずかに浮いた状態で出土している。SK06以東の範囲は作業上、上層と下層に分けて取り上げた。ただ、礫の状況から一気に埋められたことは明らかで、上層と下層に時期差は存在しない。4次調査区分を含めて、廃棄に伴う一括資料と考えられる。

土師器杯740～744、土師器皿A745、土師器杯A746～749、土師器椀B750・751、須恵器杯B蓋752、土師器甕753～759、土師器長胴甕760・761、平瓦762等が出土した。749・750は漆附着土器である。4次調査区SK52側では漆附着土器が出土しておらず、全出土遺物量に対する漆附着土器の比率は低い。漆附着土器は、4次SE01やSE02からも出土しているものの、西部地区における量は総体的に少ない。

2-SK01

(遺物図版42)
(写真図版33-3)

調査区北側で検出した。北側が一部攪乱を受けるが、平面形は南北に長い隅丸方形を呈す。長軸1.78m、短軸75cmで、深さは遺構検出面から15cmを測る。土坑底に貼り付いた状態で土師器杯763と土師器甕765が出土した。764は埋土から出土した土師器杯で、内面に灯明痕が認められる。

2-SK02

(遺物図版42)
(写真図版33-4)

調査区西側で検出した。平面形は東西に長く、東端は直線的で、西側は円形を呈する。長軸1.78m、短軸1.0mを測る。深さは遺構検出面から概ね15cmである。断面は緩やかに掘り込まれ、全体的に浅い皿状を呈す。土坑の西端で須恵器壺766が押しつぶされたような状態で出土した。口縁部を除き、完形に復元できる。

2-SK04

(遺物図版42)

第1面で検出したSE05に切られる土坑である。調査区外に広がるため全容は不明である。断面は皿状を呈す。残存範囲で東西1.8m、南北1.06m、深さは遺構検出面から最大で17cmを測る。遺物は底部ヘラ切りの土師器杯767が出土した。767は第1面SK30出土の杯と同一のものである。本遺構は第2面で検出したが、本来は第1面の遺構である。

2-SK05

(遺物図版42)
(写真図版33-5)

第1面でSK30を切っている鉄道用水路の北側で検出した。全容は不明であるが、平面は円形もしくは隅丸方形を呈すと見られ、検出規模で南北84cm、東西1.36mを測る。深さは遺構検出面から最大で21cmを測る。遺物は土坑底に貼り付いた状態で土師器甕768・769が出土した。

遺構に
伴わない遺物
(遺物図版42)

包含層もしくは遺構検出時に遺構に伴わない状態で遺物が出土した。770と771は第1面検出中に出土した。770は底部ヘラ切りの土師器小皿である。771は土師器壺である。焼成は陶器質に近く、江戸時代の火消し壺である。772は第2面から第3面の掘り下げ時に出土した石錘である。扁平な河原石の両端に打ち欠きが認められる。



Y=32430



X=-130020

X=-130020

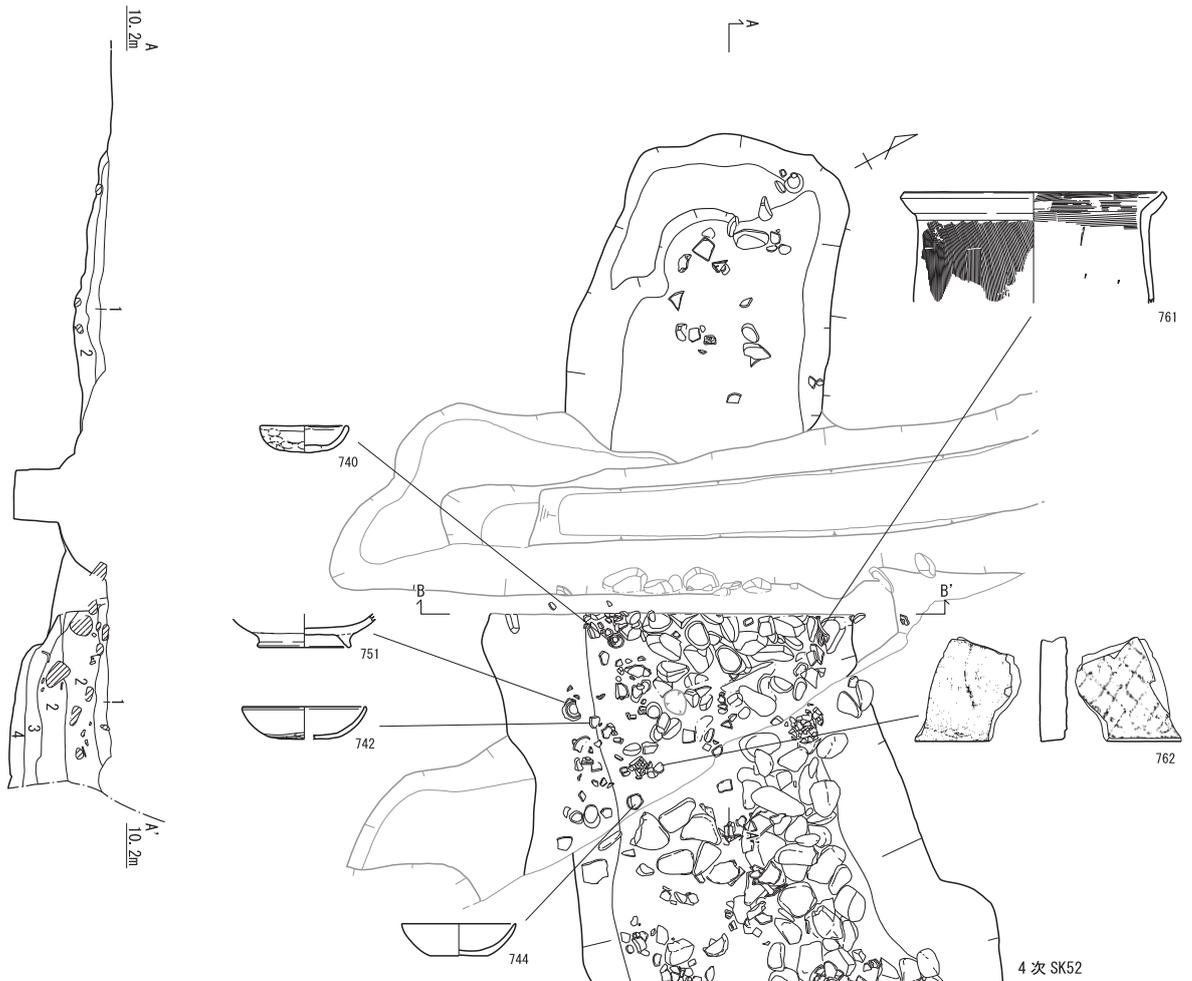
Y=32430

0 (1:200) 5m

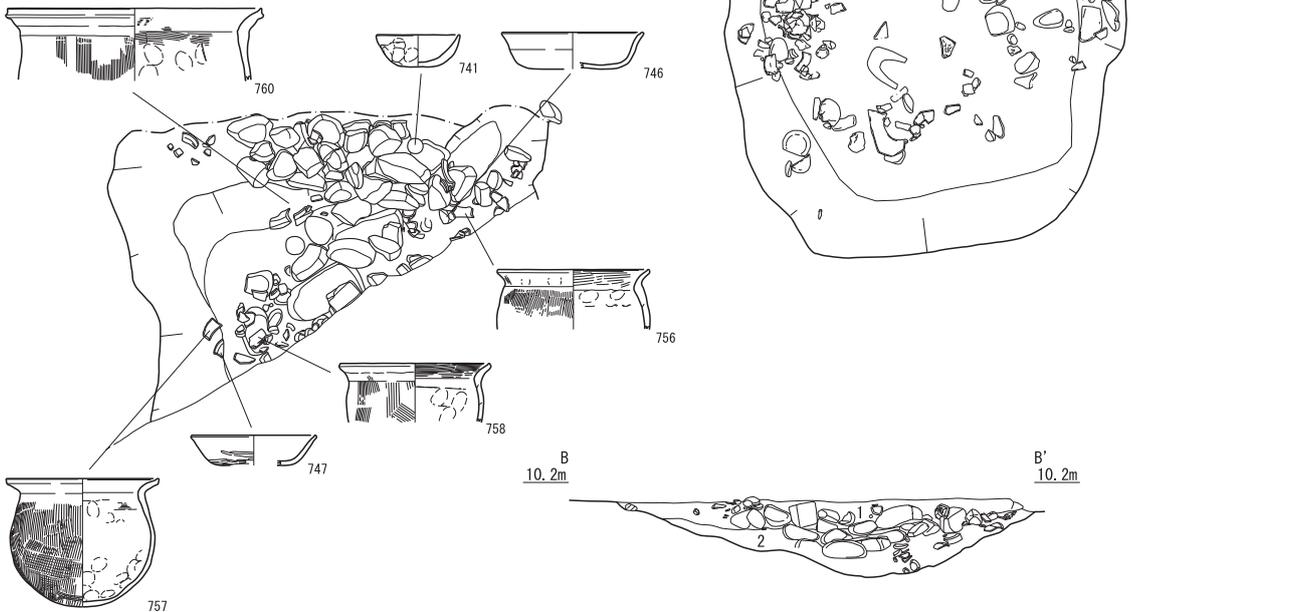
图48 5次1区第2面平面图

第三章 調査の成果

上層



下層



- 1. 10YR5/3にぶい黄褐色砂 炭化物・土器含む
- 2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂
- 3. 10YR5/2灰黄褐色砂 4層に比べややしまる
- 4. 10YR5/2灰黄褐色砂

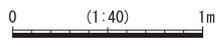


図49 5次1区SK52平・断面図

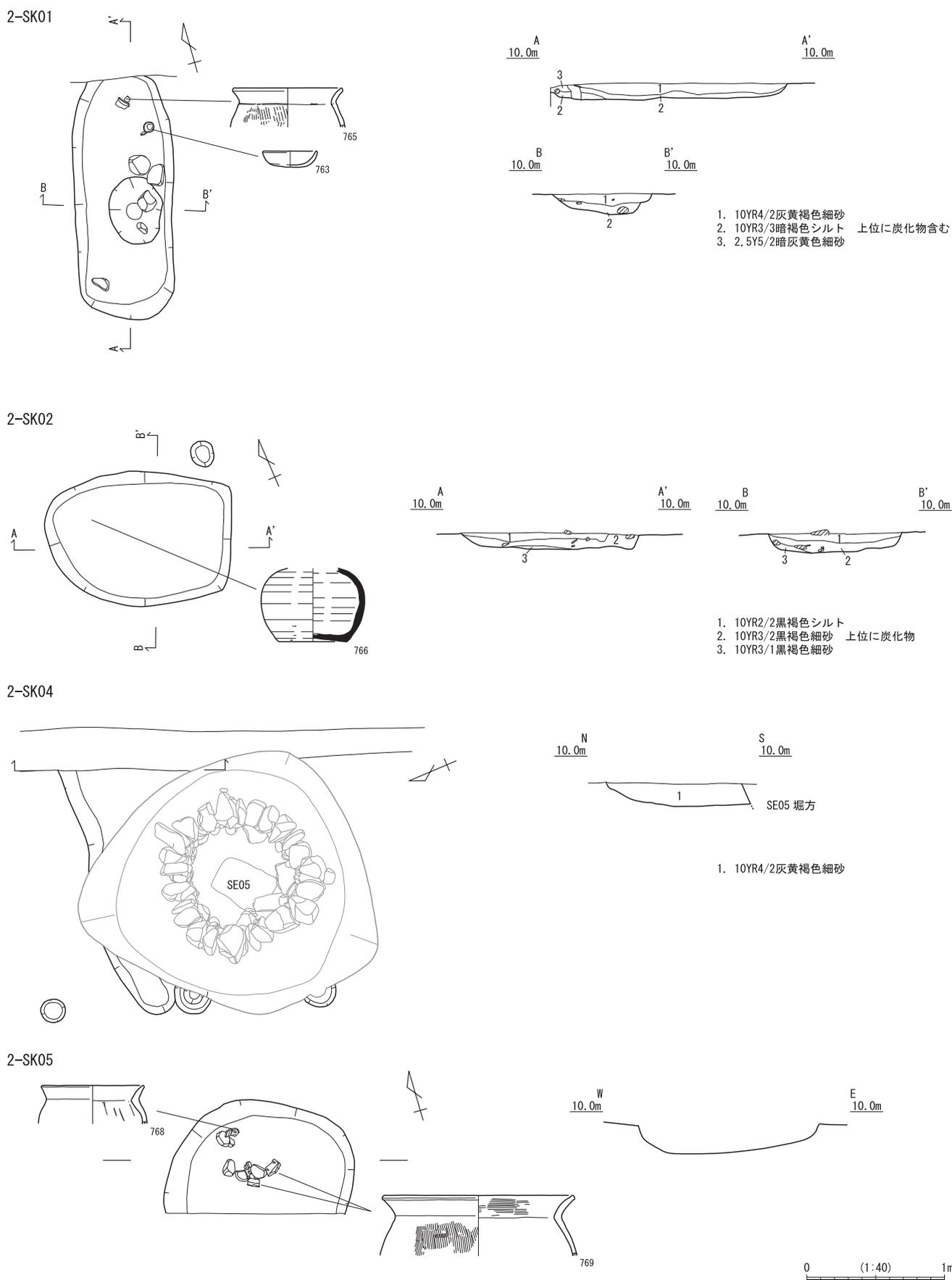


図50 5次1区2-SK01・2-SK02・2-SK04・2-SK05平・断面図

第三章 調査の成果

5次2区

(写真図版35-36)

飾磨街道を挟んで5次1区の西側に位置する。調査区の南端は1次2区と接続する。調査区は南北に長く延長約25m、幅約7.5mを測る。本調査区でも5次1区と同様に3面の遺構面を調査した。5次1区に比べてそれぞれの堆積層の厚さは薄く、飾磨街道側（調査区東側）がわずかに深くなっている。基本層序は5次1区と基本的に対応することから、遺構検出面は5次1区と同じである。調査時の地表面の標高は概ね10.8m、中世耕土上面が10.4～10.5m、地山は西端で10.2m、東端で10.05mを測る。飾磨街道沿いがわずかに深くなっている。そのため、調査区西端では、層の厚さが薄く遺構検出面の検出レベルの差が小さくなっている。土層断面上は、江戸時代の町屋に伴う整地層を確認できるが、調査区全体は整地層まで随所に攪乱を受けており、面的に把握することが困難であった、そのため、5次1区と同様に第1面は江戸時代の整地層を全て掘り下げた4層上面とし、第2面は6層上面、第3面は黄褐色の地山を遺構検出面とした。

第1面では、江戸時代から中世にかけての溝、土坑、柱穴を検出した。第2面では古代に位置づけられる溝、土坑、柵等を検出した。第3面では溝及びピットを検出した。本来の掘常時込み面は地山上位の暗褐色土であると思われるが、遺構埋土と同層の色調が近似しているため、地山まで掘り下げて初めて検出可能である。5次2区は5次1区に比べて、遺物量も総じて少ない。

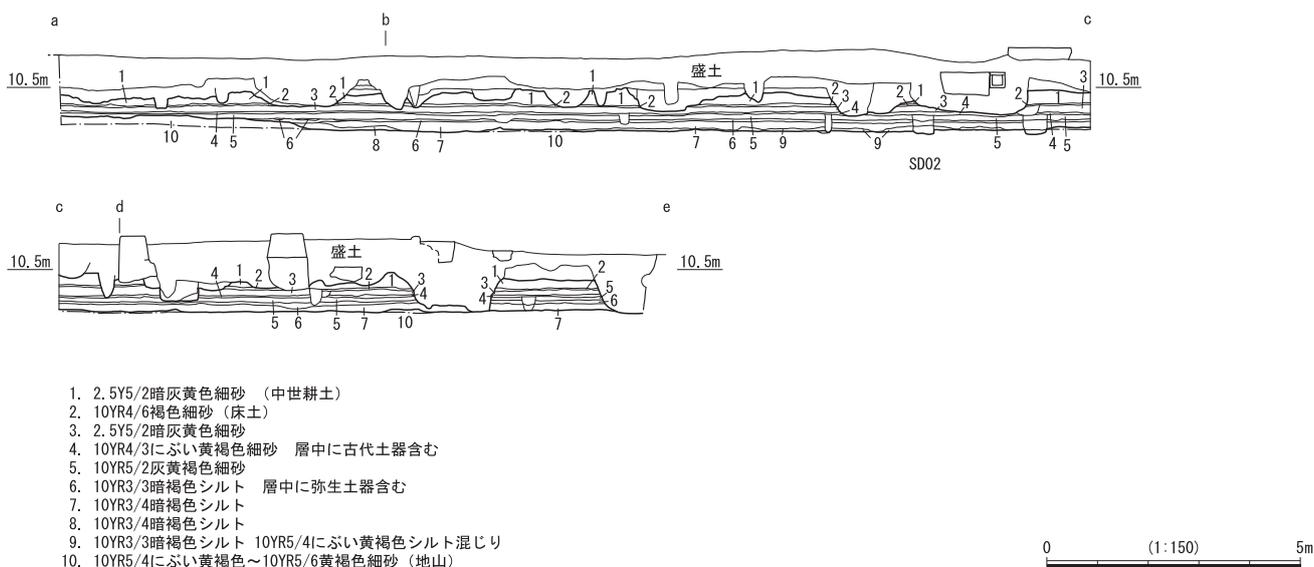


図51 5次2区土層断面図

第1面

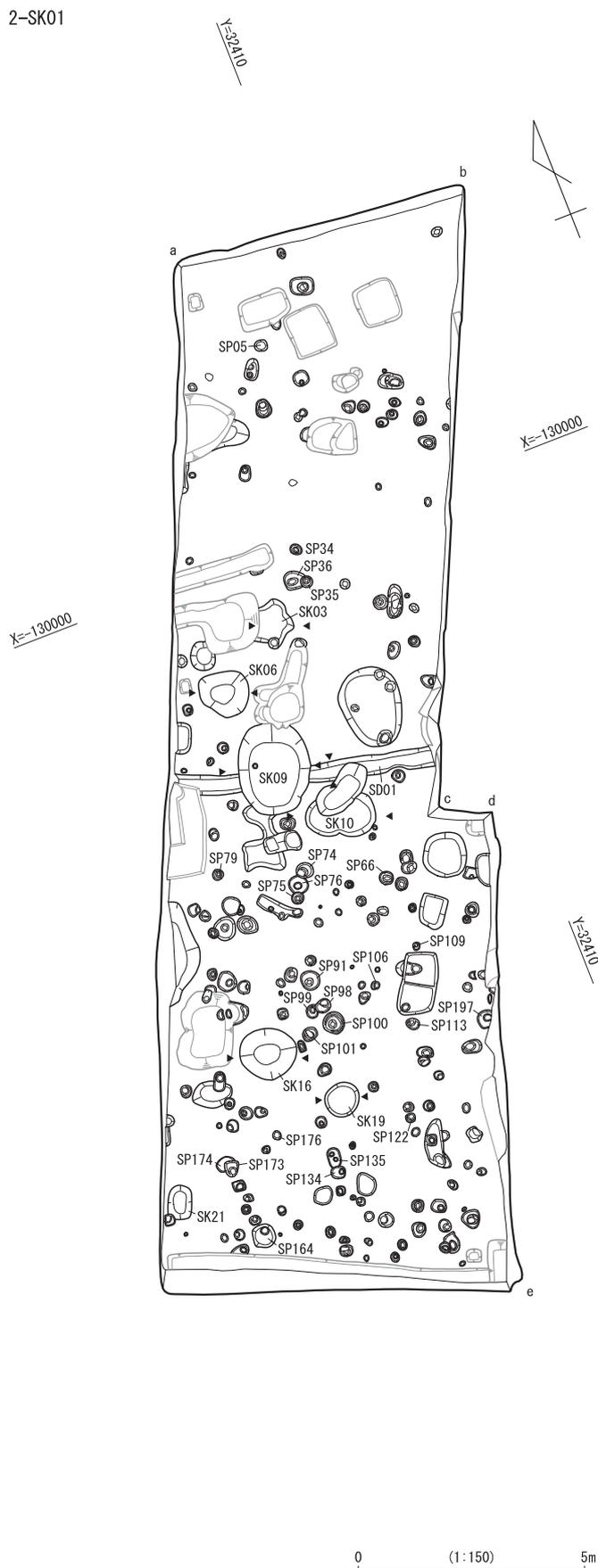
検出した遺構は溝、土坑、柱穴等である。柱穴等は飾磨街道に沿って並ぶものも確認できるが、明確に建物跡に復元できるものは確認できなかった。飾磨街道の東側にあたる5次1区と異なり、江戸時代の井戸は確認できなかった。

SD01

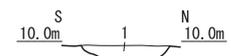
(遺物図版43)

調査区のほぼ中央を東西に横断する形で検出した。SK09に切られている。調査区外に延びるため全容は不明であるが、検出規模で延長5.9m、幅は最大で46cmを測る。溝の断面は皿状を呈している。溝底の標高は西側が9.94m、東側が9.88mとわずかに東側が低い。埋土は褐灰色砂である。遺物は細片が多く、須恵器壺773のみ図示した。

2-SK01

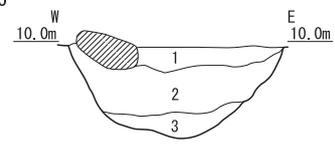


SD01



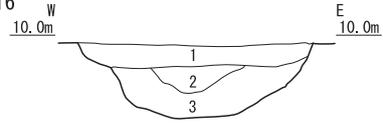
- 1. 10YR4/1褐灰色砂

SK06



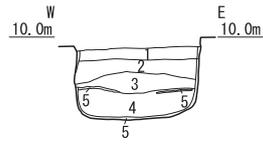
- 1. 10YR4/1褐灰色~5/1褐灰色細砂 5/2灰黄褐色砂混じり
- 2. 10YR5/6黄褐色シルト
- 3. 10YR5/6黄褐色シルト

SK16



- 1. 10YR4/1褐灰色砂 炭化物・土器含む
- 2. 10YR6/1褐灰色砂
- 3. 10YR4/2灰黄褐色砂

SK19



- 1. 10YR5/4にぶい黄褐色砂
- 2. 10YR5/2灰黄褐色砂
- 3. 2.5Y5/1黄灰色砂
- 4. 10YR4/2灰黄褐色粗砂
- 5. 漆喰

SK03



SK09



SK10

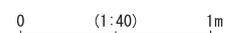


図52 5次2区第1面平面図、SD01、SK03・SK06・SK09・SK10・SK16・SK19断面図

第三章 調査の成果

- SK03
(遺物図版43) SD01の北2.5mの位置で検出した。土坑の西部が攪乱されており、全容は不明である。検出規模で南北1.0m、東西74cmを測る。深さは遺構検出面から概ね17cmである。埋土から須恵器壺774が出土した。
- SK06
(遺物図版43) SD01の北1.3mの位置で検出した。やや歪な円形を呈し、南北1.0m、東西1.2mを測る。断面は鉢状を呈し、深さは遺構検出面から50cm前後である。埋土から土師器小皿775、須恵器壺底部776が出土した。
- SK09
(遺物図版43) SD01を掘り込む土坑である。北側の一部が攪乱を受けているが、平面形は南北に長い円形を呈す。南北2.0m、東西1.6mで、深さは遺構検出面から概ね50cmである。埋土中から江戸時代の磁器の細片が出土した。
- SK10
(遺物図版43) SK09の東で検出した。北側の一部に攪乱が及ぶ。東西に長い楕円形を呈し、南北1.0m、東西1.6mを測る。深さは遺構検出面から最大で38cmである。埋土から土師器小皿777・778が出土した。
- SK16
(遺物図版43) SK09の南4.7mの位置で検出した。東西にやや長い円形を呈し、東西1.24m、南北1.15mを測る。断面形は鉢状を呈し、最も深いところで遺構検出面から40cmを測る。埋土から須恵器椀底部779、須恵器小杯780が出土した。779は意図的に円盤状に加工している。
- SK19
(遺物図版43) SK16の南東1.0mの位置で検出した漆喰塗り遺構である。直径67cmの円形を呈し、掘方の壁に沿って厚さ10～15cmの漆喰を塗っている。深さは40cmを測り、埋土内にも崩落した漆喰片が確認できるが、図示に耐えうる遺物は出土していない。
- SK21
(遺物図版43) 調査区南端で検出した。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、長軸75cm、短軸50cmで、深さは遺構検出面から15cmを測る。埋土から須恵器壺の頸部781が出土した。
- SP05
(遺物図版43) 調査区北端付近で検出した。円形を呈し、直径30cm、深さは遺構検出面から5cmを測る。掘方から須恵器甕782が出土した。
- SP34
(遺物図版43) SP05の南4.4mの位置で検出した。平面は円形を呈し、直径30cm、深さは遺構検出面から9cmを測る。掘方から備前焼甕783が出土した。外面に線刻が認められる。
- SP36
(遺物図版43) SP34の南35cmで検出した。SP35に切られる。円形を呈し、直径約50cmを測る。深さは遺構検出面から16cmである。埋土から須恵器杯784が出土した。
- SP66
(遺物図版43) SD01の南2.2mの位置で検出した。円形を呈し、直径は約30cmを測る。深さは遺構検出面から15cmである。埋土から土師器小皿785が出土した。
- SP76
(遺物図版43) SP66の西1.6mの位置で検出した。SP74とSP75に切られる。円形を呈し、直径は45cmを測る。掘方のほぼ中央で柱痕跡を検出した。埋土から褐釉陶器壺の底部786が出土した。
- SP79
(遺物図版43) SP76の西1.5mの位置で検出した。円形を呈し、直径は25cmを測る。深さは遺構検出面から22cmである。掘方から土師器杯787が出土した。
- SP91
(遺物図版43) SK16の北1.1mの位置で検出した。円形を呈し直径は45cmを測る。深さは遺構検出面から20cmである。埋土から須恵器椀788が出土した。
- SP98
(遺物図版43) SP91の南で検出した。SP99を切る。円形を呈し直径は30cmを測る。深さは遺構検出面から16cmである。埋土から土師器皿789が出土した。
- SP100
(遺物図版44) SP98の南で検出した。円形を呈し、直径は50cmで、深さは遺構検出面から25cmを測る。埋土から東播系須恵器椀790が出土した。
- SP113
(遺物図版44) SP100の東1.4mの位置で検出した。円形を呈し、直径は30cmを測る。深さは遺構検出面から23cmである。掘方から東播系須恵器椀791が出土した。
- SP122
(遺物図版44) SP113の南1.9mの位置で検出した。円形を呈し、直径は21cmを測る。深さは遺構検出面から24cmである。埋土から東播系須恵器椀792が出土した。

- SP135
(遺物図版44) SK19の南70cmの位置で出土した。南北にやや長い円形を呈し、南北45cm、東西30cmを測る。掘方内の2個所で柱痕跡を確認したが、北側のものは後からの掘り込みである可能性が高い。深さは遺構検出面から13cmである。掘方から白磁皿793が出土した。
- SP164
(遺物図版44) SP135の南西2.0mの位置、調査区の南端で検出した。掘方は円形を呈し、直径は50cm、深さは遺構検出面から20cmを測る。埋土から土師器小皿794が出土した。口縁部に煤が付着することから灯明皿として使用されたものである。
- SP173
(遺物図版44) SP164の北1.2mの位置で検出した。SP174を切る。掘方はやや不整な円形し、直径は約30cmである。深さは遺構検出面から25cmを測る。掘方から須恵器小皿795が出土した。
- SP176
(遺物図版44) SK16の南約2.2mの位置で検出した。円形を呈し、直径は20cmを測る。深さは遺構検出面から22cmである。埋土から土師器小皿796が出土した。
- SP197
(遺物図版44) SP113の東1.3m、調査区東壁沿いで検出した。一部は調査区外に広がっている。直径40cmの円形を呈すとみられ、深さは遺構検出面から14cmを測る。埋土から土師器小皿797・798、土師器杯799が出土した。
- 遺構に
伴わない遺物
(遺物図版44) 第1面を被覆する土層中から緑釉陶器碗の底部800、須恵器小皿801が出土した。また、第1面検出中に須恵器碗802と803が出土した。802は西播磨産の可能性がある。第1面から第2面に掘り下げる際に平基式石鏃804、須恵器高杯805、須恵器甕806が出土した。その他にも遺物の細片が出土しているが、図示に耐えうる遺物は少ない。

第2面

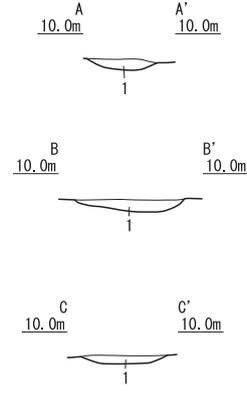
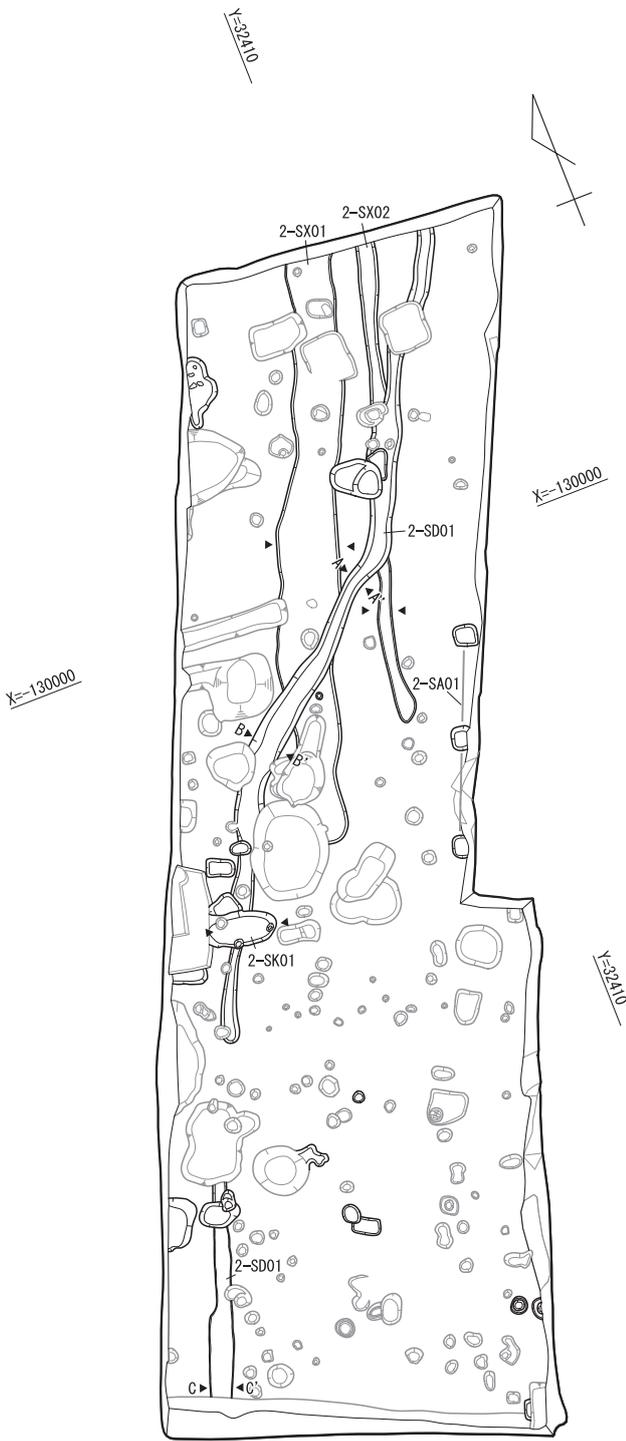
調査区北側から南側にかけて縦断する溝2条を検出した他、その周辺で掘方が明確でない部分を2-SX01とした。土坑の他、建物を構成すると思われる柱列を検出した。これらの遺構からは図示に耐えうる遺物の出土がなく、詳細な時期は不明である。遺構を検出した層序から平安時代から奈良時代に位置づけられるものと想定する。

- 2-SA01
(写真図版36-1) 調査区東壁に沿って検出した3基の柱穴で構成される。構成する柱穴は隅丸方形を呈している。調査区内では南北2間分を検出したのみであるが、豆腐町I次で見つかっている建物跡と規模、掘方形状等が類似することから、本来は調査区外に広がる建物の一部と考えられる。柱間隔は北から2.0m、2.2mである。柱穴は一辺46～52cm、深さは10～18cmを測る。主軸はN21°Eで飾磨郡の条里方向に沿っている。遺物が出土していないため、厳密な時期は不明である。豆腐町I次の建物跡も同様に遺物が出土していないが、掘方形状等から奈良時代に位置づけられている。本遺構も同時期と考えておきたい。
- 2-SD01
(写真図版35-4) 調査区を南北に縦断する溝である。一部途切れる部分もあるが、本来は一連であろう。調査区外に延びるため全容は明らかでないが、検出規模で延長21.5m、幅は最大で56cmを測る。断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から10cm前後である。
- 2-SK01
(写真図版35-3) 調査区のほぼ中央付近で2-SD01を切る形で検出した。東西に長い楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸70cmを測る。断面は皿状を呈し深さは遺構検出面から10cmである。遺物は出土していない。
- 2-SX01・02
(写真図版35-4) 2-SD01周辺で検出した。規模は2-SD01と大きく変わらないが、2-SD01が明確に平面プランを検出できるのに対して、2-SX01と2-SX02の輪郭は明確ではなく、平面プランは確定できない。図53には便宜上外形を示しているが、地形の凹みに由来するものと考ええる。本来遺構ではないが、後述する6次1区や7次2区でも同様のものが検出されているため、参考に報告した。遺物は出土していない。

第三章 調査の成果

2-SK01

2-SD01

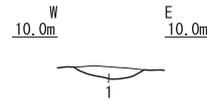


1. 10YR4/1褐色細砂

2-SX01



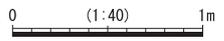
2-SX02



2-SK01



1. 10YR4/1褐色細砂



2-SA01

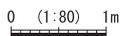
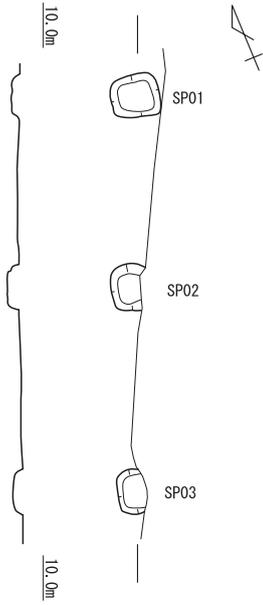


図53 5次2区第2面平面図、2-SD01、2-SX01・2-SX02、2-SK01断面図、2-SA01平・断面図

第3面

黄褐色の地山上面で検出した遺構である。5次1区、5次2区とも遺構は少ないことから、合わせて報告する。遺構検出面の上位にある暗褐色土（6～8層）から弥生土器の細片がわずかに出土していることから第3面の遺構は弥生時代頃と推測できる。これまでの1次から4次までの成果から、当該期の遺構は、大きく飾磨街道沿いと4次SR01付近に限られる。地形の凹む範囲で検出されていることから、本来は5次1区東部や4次調査区の西部にも広がっていたことが想定されるが、削平された可能性も高い。凹地にあたる飾磨街道沿いの状況を確認しておく、5次1区東部の標高が10.2 m、西壁沿いの標高が9.3 m、5次2区西壁沿いの標高は10.2 mとなり、飾磨街道沿いが凹地となっている。

第3面で検出した遺構は、5次2区3-SD01を除けば、直径10～30cmのピットのみである。これらのピットは調査区全域に分布するわけではなく、5次1区南東部、5次2区中央部で比較的まとまって検出している。埋土は黒褐色シルトを基本とし、上層の堆積層と類似する土質である。埋土中から弥生土器とみられる細片の出土は認められるが、部位を特定できるほどの資料は出土していない。前述したように飾磨街道沿いは凹地となっていたことから、堆積により後世の削平を免れたものを検出していると考えられ、本来は微高地部分にも遺構が広がっていたと思われる。



図54 5次1区・2区第3面平面図

第三章 調査の成果

5次3区

(写真図版37)

4次調査区の東側に位置する東西約15m、南北約14mの調査区である。調査区全域が4次調査区で西肩を検出したSR01に該当する。調査は下水道を先行して敷設する都合から、下水道部分と道路部分の2回に分けて実施した。基本層序は鉄道敷設以前の耕土(1層)、床土(2層)の直下でSR01埋土を検出した。調査時の地表面の標高は11.0m、地山の検出レベルは東端で9.3mである。調査区中央は暗褐色土が堆積し、更に下層まで続くが、遺物が出土しなかったため、未掘とした。SR01の上面では埋没後に掘られた近世のSK01～SK03を検出した。本調査区の東端は、調査時点では仮設通路があり、仮設通路の東側で実施した確認調査区からは遺構・遺物が確認できなかった。そのため、区画整理道路部分の調査範囲は、本調査区が東端となる。

SK01

(遺物図版45)

調査区の南東端で検出した土坑である。調査区外に広がるため全容は不明である。検出規模で南北4.5m、東西1.9mを測る。耕土直下から掘り込まれ、最も深い部分で65cmを測る。埋土は褐灰色の粗砂と砂で埋まっている。肥前系磁器碗807～809、染付鉢810、陶器灯明具811、丹波焼壺812、堺・明石系播鉢813、瀬戸灰釉鉢814、瀬戸内系焙烙815、磁器四耳壺816を図化した。

SK02

(遺物図版46)
(写真図版196)

調査区北部の西寄りで検出した土坑である。円形を志向するよう見え、直径は概ね2.0mである。埋土は灰色粘土に砂と礫を含み、一気に埋められている。深さは遺構検出面から1.3mである。遺物は須恵器杯A817、墨書土器818、須恵器甕819が出土したが、これらはSR01からの混入であろう。埋土から近世の掘り込みと考える。

SK03

調査区の北壁沿いで検出した。検出状況では円形を呈するよう見えるが、調査区外に広がるため全容は不明である。南北50cm、東西1.5m分を検出した。断面では、盛土直下に位置するが、本来はSK01と同様、耕土の下から掘り込まれたものであろう。埋土はSK02と類似し、近世の掘り込みと考えられる。遺物は出土していない。

SR01

(遺物図版46-47)
(写真図版196)

調査区全域がSR01に該当している。調査にあたっては、1m毎にグリッドを設定し、グリッド毎に調査を行った。流路の堆積は4次調査区で明らかになったように大きく上層と下層に分けられる。上層は細砂-砂混じりシルト-砂が互層となり、流水による堆積である。下層は黒褐色シルト層で概ね弥生時代に位置づけられる。

遺物は主に上層から出土した。土師器杯820、土師器高杯821・822、墨書土器823・834、須恵器杯B蓋824～826、須恵器杯A827、須恵器杯B828・829・830・833、須恵器稜椀蓋831、須恵器稜椀832・835、須恵器長頸壺836・837、須恵器柘838、須恵器壺839・840・841、須恵器甕842・843、熨斗瓦844、砥石845を図示した。820は内外面に煤が付着し、灯明皿と使用されたものであろう。833は高台内に墨が付着し、転用硯であろう。825・835・838は漆が付着する。838は投松6号窯で柘と称される器形と同じものであろう(兵庫県2001)。内面に漆が付着することから漆を計量したのであろうか。図示していないが、SR01からはこの他に16点の漆付着土器が出土している。遺物は調査区内に1mグリッドを設定し取り上げた。図56はグリッドに基づいて出土分布を示したものである。遺物はSK02周辺に集中し、調査区東壁沿いからは図化に耐えうる遺物は出土していない。SK02付近が、SR01の最深部にあたり、4次調査区の成果を踏まえれば、流路の中央より西側に遺物の出土が偏っている傾向を指摘できる。図示していない遺物を含めても出土傾向は同様である。出土遺物の器表は摩滅が少なく、近辺にあったものがSR01内に流れ込んだものと想定できる。

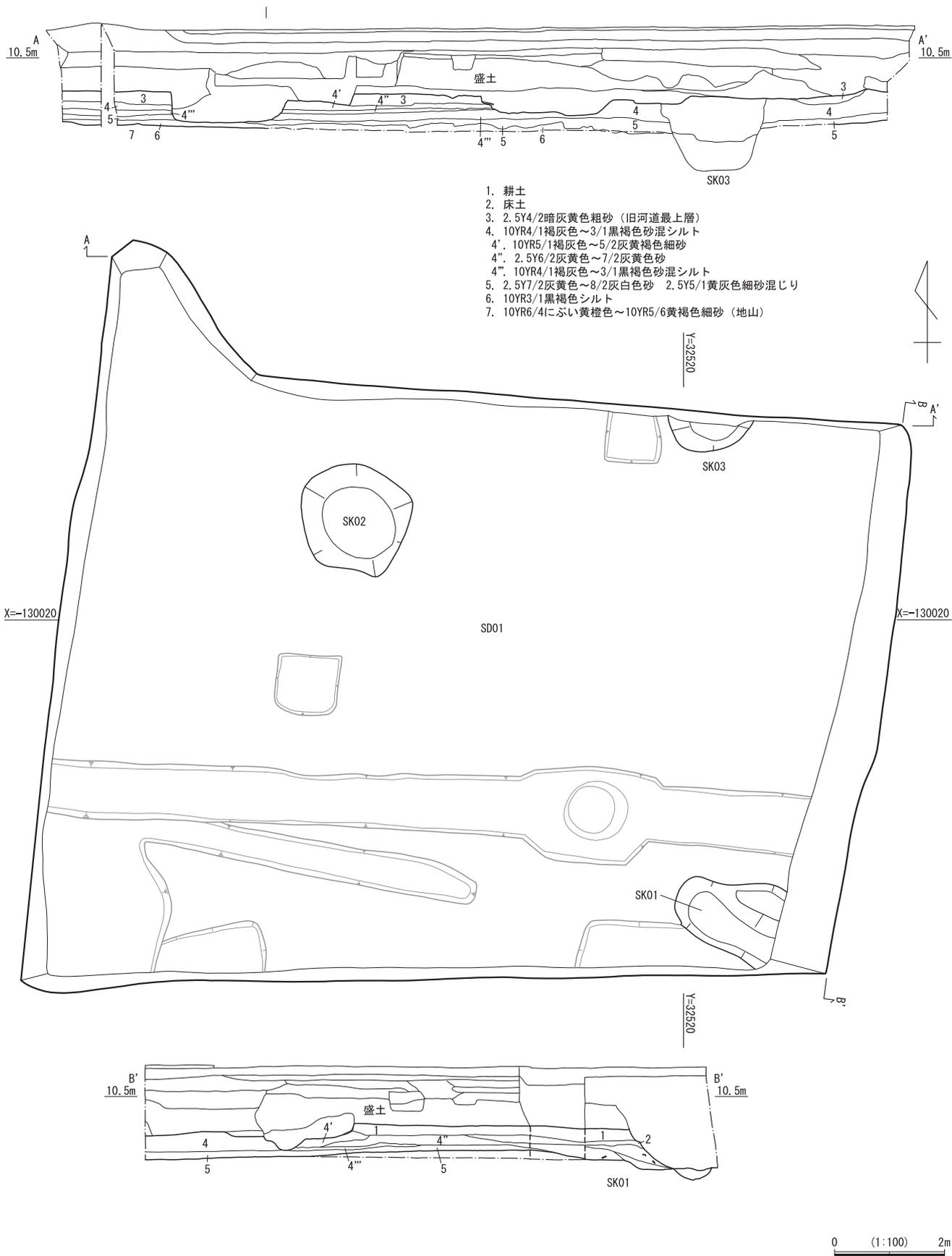


図55 5次3区平・土層断面図

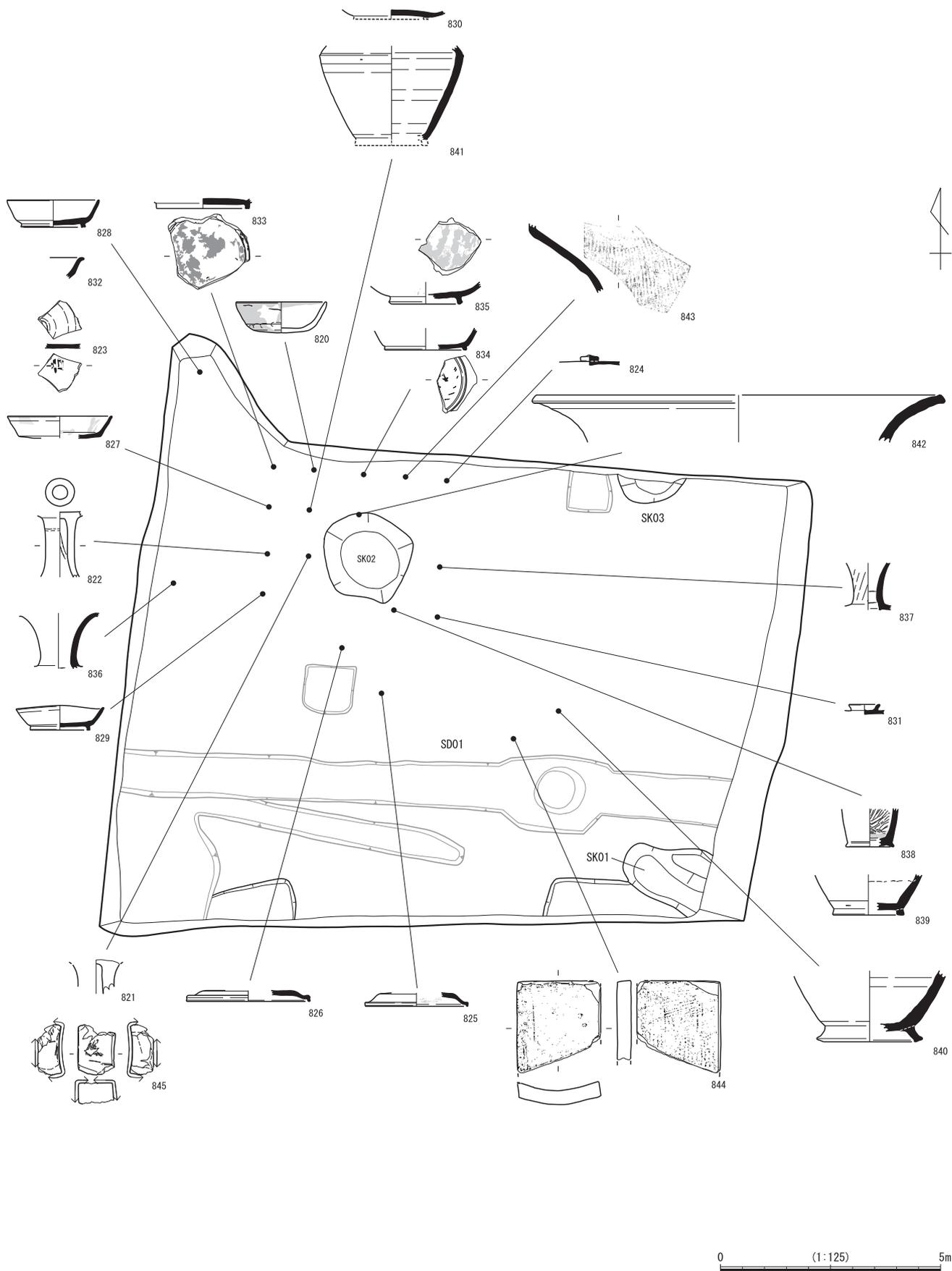


图56 5次3区SR01遺物出土分布图

6次2区

(写真図版38)

市道城南157号線にあたる4次調査区の北側に位置する延長約21m、幅約16mの調査区である。調査区の基本層序は盛土、耕土(1層)を経て砂礫層(2層)に至る。調査時の地表面の標高は10.8mで、砂礫層の標高は概ね9.9mである。遺構は砂礫層上面で検出した。総じて遺構密度は薄い。調査区の東端でSR01の西肩と下層SD01を検出した。調査区南側では埋土の様相から近世頃と考えられる土坑を7基確認した。調査区北端では鉄道用地の境界に沿って、近現代の柵跡を検出した。

SR01

(遺物図版48)
(写真図版38-2・5-196)

調査区の東端を南北に縦断するように流路の西肩を検出した。南端は4次調査区から延びる流路の肩と接続する。検出した肩は調査区とわずかに斜行しつつ直線的に延びる。検出規模で延長約19m、幅は北端で2.4m、南端で4.3mである。深さは最も深いところで遺構検出面から40cmである。遺物量は4次調査区に比べて少ないが、特に偏った出土傾向は見いだせず、概ね全域から出土している。須恵器壺861は6か所のグリッドから出土した破片が接合した。

土師器杯A 846・847、土師器杯B 848、須恵器杯A 849・851、須恵器皿A 850・855、須恵器杯B 852・853・854が出土した。853・854は高台外面に「□家」、「井」の墨書が認められる。855は須恵器皿で、底部外面に「×」の線刻がある。856は須恵器壺底部、857は須恵器甕口縁部である。製塩土器858、軒丸瓦588は4次SR01出土遺物と接合する。須恵器高杯859、須恵器壺860～862は古墳時代に位置づけられるが、出土層位や位置は奈良時代の遺物と明確な差はない。

下層SD01

(遺物図版48)
(写真図版38-2・5)

調査区東壁沿いで検出した。4次調査から延びる溝で、SR01の下位で検出した。検出規模は延長約20m、幅は最大で0.7mを測る。溝の肩はほぼ垂直に掘り込まれ、断面形はコの字状を呈している。遺物は溝内から出土したもの、まとまった出土状態ではなく、埋土にまばらに含まれる状態であった。863は外反口縁の弥生土器甕で、多条沈線がめぐる。864も外反口縁甕であるが、器厚は863に比べて厚い。865は壺の底部である。866はサヌカイトの剥片である。縁辺に使用痕が認められる。

SK01

(写真図版38-4)

調査区の南端で検出した土坑である。平面形は南北に長い楕円形を呈し、検出規模で南北2.5m、東西1.5mを測る。埋土から奈良時代の土器片が出土しているが、図示に耐えるものはない。埋土は4次調査区で近世から近代と位置づけた遺構と類似することから、本遺構も当該時期の遺構と考える。

SK03

SR01の西肩から西へ4.6mの位置で検出した。平面形は不整形で、南北2.2m、東西2.7m、深さは遺構検出面から15cmを測る。SK01と同様に遺物は出土していないが、埋土が4区SK4やSK05に類似することから近世から近代の遺構であろう。SK03に西接して鋤溝を検出した。1条しか図示していないが、検出時には2条確認できた。鋤溝の方位はN25°Eであり、飾磨郡の条里方向に近い。外豆腐町の町屋裏手の耕作地に伴うものと推測できる。

SA01

調査区北端で東西方向に12基のピットが並ぶ。近代から現代にかけての遺構と推測する。SR01の上面でも1基のピットを検出している。調査区外に延びるもので、後述する8次1区においてこの延長部分と思われるピット列を検出している。検出規模で延長13.5mを測る。SA01の北側で調査区を一部拡張した部分があるが、この北端が区画整理事業前のJR(旧国鉄)と道路との境界に概ね合致することから、SA01は鉄道用地を区画した施設である可能性が高い。遺物が出土していないため、想像の域を出ないが、上記のような理由から姫路駅に関係する遺構として報告しておきたい。

第三章 調査の成果

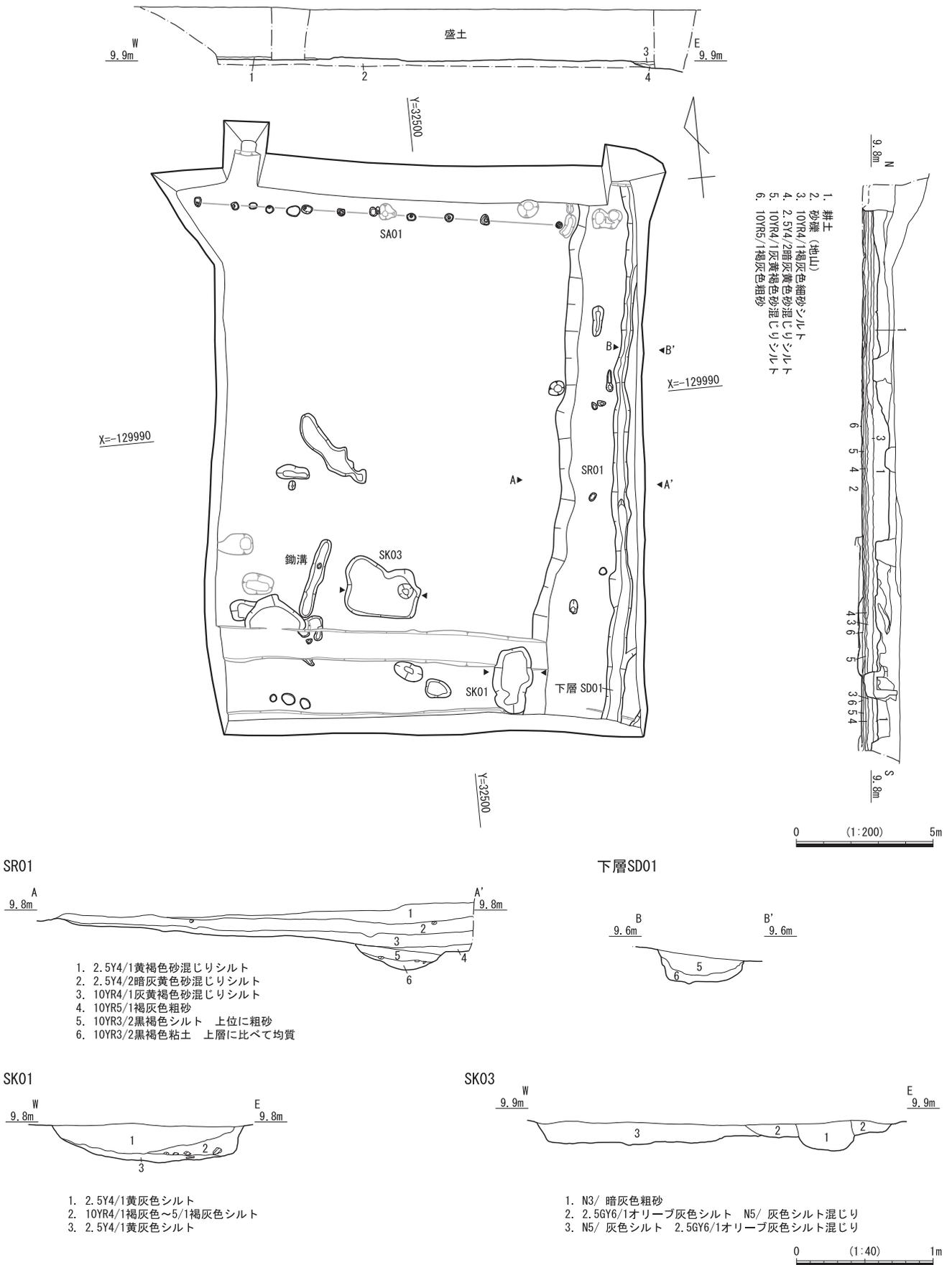


図57 6次2区平面図、土層断面図、SR01、下層SD01、SK01・SK03断面図

6次3区

(写真図版39-44)

飾磨街道に面した調査区で、5次1区の北側に位置する。延長約25m、幅8.8mの南北に長い調査区である。5次1区と同様に3面の遺構面を調査した。5次1区の検出面とは対応している。第1面は4層上面、第2面は6層上面、第3面は地山とした。調査時の地表面の標高は約11.1m、中世耕土層が10.3m、西端の地山の標高は9.15mで、東端で9.5mである。第1面で検出した遺構は、井戸1基、溝4条、土坑、柱穴である。調査区の北部は攪乱が目立つが、基本的に遺構の残存状況は良好である。第2面で検出した遺構は、溝5条、土坑、柱穴である。調査区南部では溝、北部では柱穴と土坑を主に検出した。第3面では、ピット8基、土坑1基を検出した。

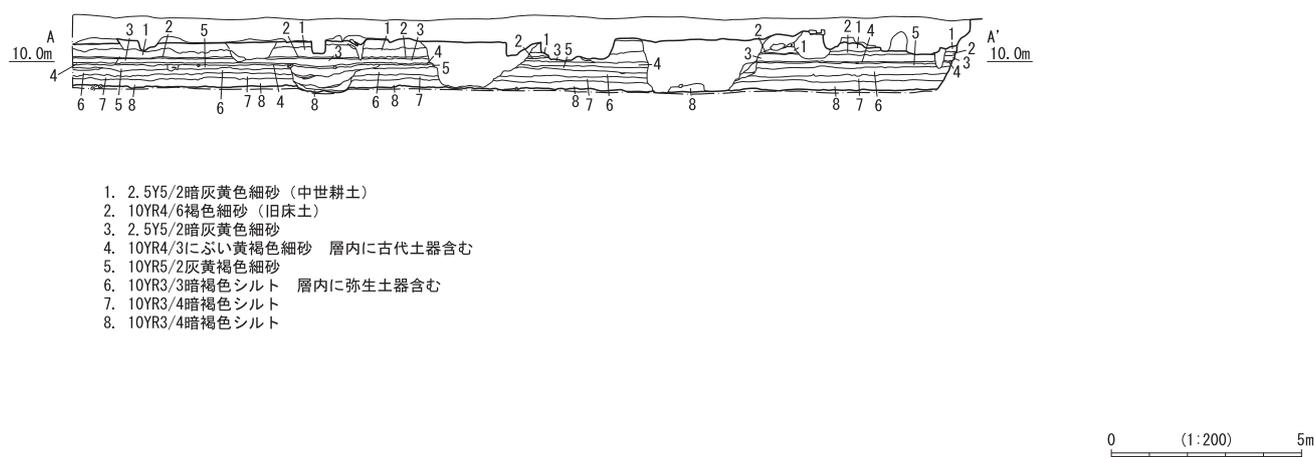


図58 6次3区西壁土層断面図

第1面

SE01

(遺物図版49)
(写真図版41-3)

調査区北端で検出した井戸である。掘方は円形で、直径約2mを測る。遺構検出面から約80cm掘り下げた深さで円形の石組みを確認した。石組みの内径は90cm、深さは1.4mである。石組みは河原石を主体とし、一部に割石が認められる。石組み内埋土の上層から備前焼徳利867、備前焼播鉢868が出土した。出土遺物は少なく、時期は明確には決め難いが、出土遺物から判断すれば江戸時代初頭頃に位置づけられる。検出した位置は、飾磨街道から6m東側で、2次1区SE04、5次1区SE04も街道からの距離はほぼ同じで、町屋内における井戸の位置に共通性を見出すことができる。

SK08

(遺物図版49)
(写真図版211)

調査区西壁沿いで検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出した範囲では方形を呈する。検出規模で南北約2.45m、東西約1.8mを測り、深さは遺構検出面から65cmである。上部は攪乱を受けているが、下層にはシルト質の埋土が残存しており、この部分から木製品、木片等が出土した。掘方は垂直に掘り込まれており、壁面に木質等の構造は見当たらなかったが水溜めのような機能がかったものと推測する。下層から出土した漆椀869、下駄870・871を図示した。下駄はいずれも歯を欠損している。いずれも使用による足型の圧痕と紐連れの痕跡が明瞭に残っている。870はクリ材を用いて製作されている(附章参照)。その他、図示していないが、陶磁器類も出土している。幕末から近代にかけての遺構である。

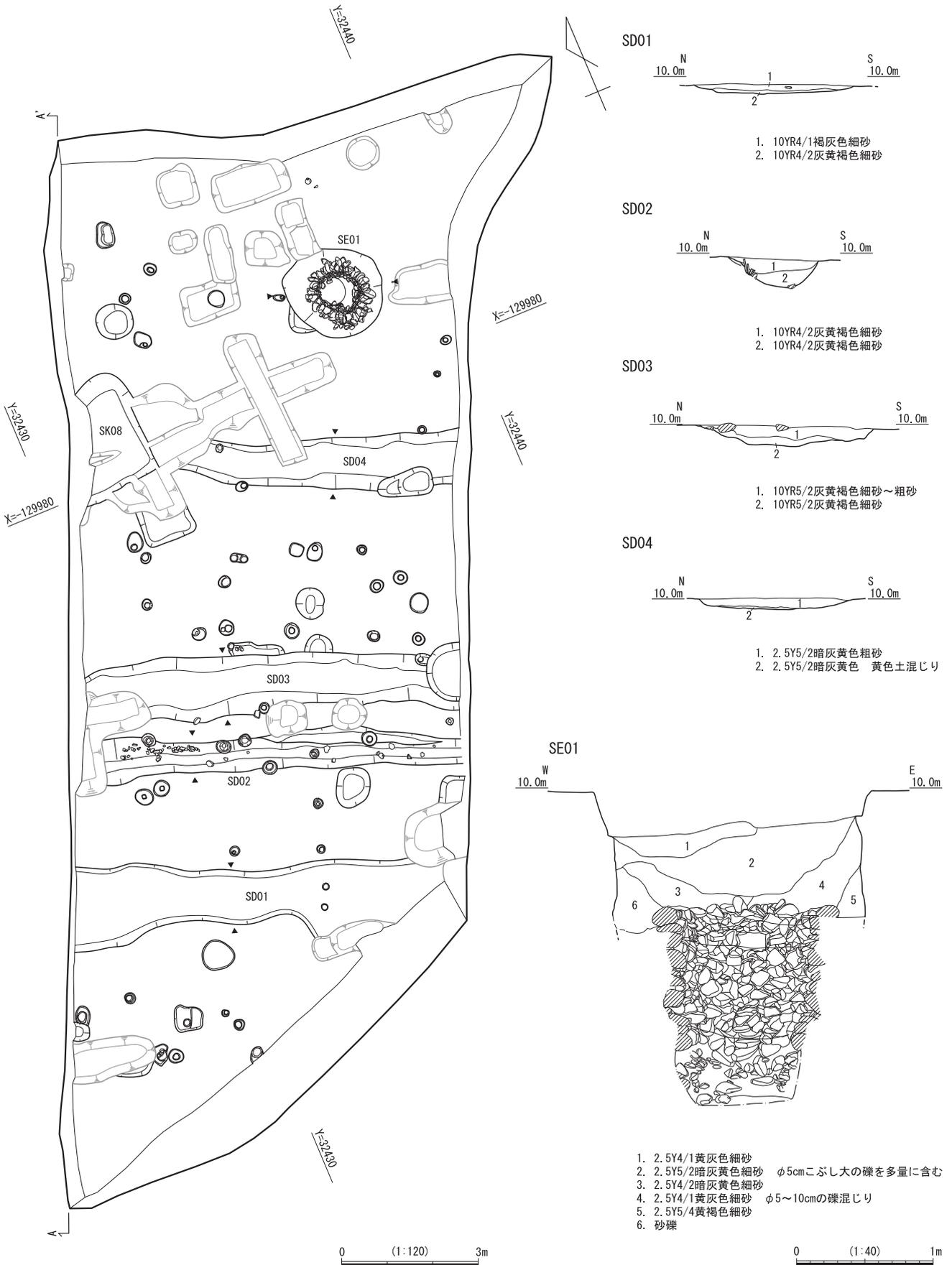


図59 6次3区第1面平面図、SD01・SD02・SD03・SD04、SE01断面図

SD01・SD02 調査区南部で検出した東西方向に延びる溝である。検出規模はSD01が延長約8.2m、幅は最大で1.8m、深さ10cm前後、SD02が延長約8.2m、幅は最大で1.0m、深さは20cmである。第1面調査時点では、個別遺構として認識していたが、最終的に第2面の2-SD01と2-SD02の埋没に伴う凹み部分の色調変化を溝と誤認したものと判断した。SD01からは図示に耐える遺物の出土はなかった。SD02からは溝の西部を中心に比較的まとまって古代の遺物が出土した。遺物図版で2-SD02として呈示した土師器椀B 976、土師器高杯980、須恵器甕1000、1002～1004、古大内式系の軒丸瓦1010等が出土している。

SD03 SD02の北0.5mの位置で検出した東西方向に延びる溝である。検出規模で延長約8.2m、幅は最大で1.45mを測る。深さは遺構検出面から概ね15cmである。遺物は図化に耐えうるものは出土していない。埋土は灰黄褐色土で、SD01・SD02と共通するが、第2面でSD03の下位に溝はないことから第1面に帰属する遺構と考える。

SD04 SD03の北約3.6mの位置で検出した。SD03と並行して東西に延び、西側が攪乱を受けている。検出規模で延長6.2m、幅は最大で1.2m、深さは遺構検出面から概ね10cmを測る。遺物は出土していないが、埋土はSD03に類似することから同時並存の遺構と考える。

第2面

2-SD01

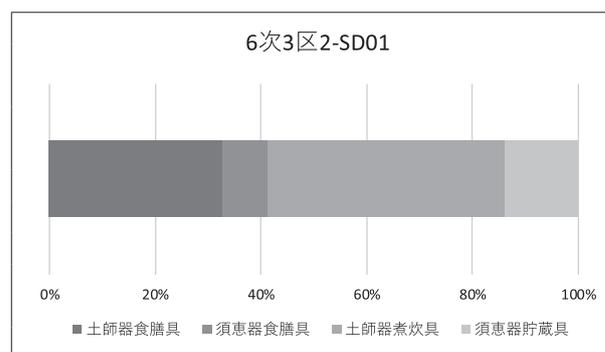
(遺物図版51-53)
(写真図版42-6-43-1-3-44-1-2-155-156-196)

調査区南部で検出した東西方向に延びる溝である。第1面で検出したSD01の下位に位置する。延長約8m分を検出した。溝の北肩は直線的であるが、南方は出入りが激しい。調査区東端で大きく南へ広がっている。幅は最大2.4m、最小で1.1mである。溝の主軸は北肩を基準にすれば、N 21° Eに直交する。溝底は一定ではなく、2-SD03と交差する付近から西側が一段深く掘り込まれている。溝底の標高は西端で9.24m、東端で9.4mである。断面は幅の広いU字状を呈し、埋土は大きく2層に分けることができる。遺物は上・下層とも出土したが、下層からはこぶし大の礫とともに保存状態が良好な多くの土器が出土した。土器の出土状況は図61に示すとおりで、溝底から肩にかけて貼り付くようなものが多い。器種毎の偏りや人為的な出土状況を示すものは確認できなかった。礫と共に出土することから、溝の廃絶時に一括して廃棄したものとみられる。

土師器皿A 892～897、墨書土器898・899、土師器杯B 900、土師器杯901～906、土師器杯A 907～924、土師器高杯925～927、須恵器杯A 928～934、須恵器杯B 935・936、須恵器皿A 937・938、須恵器稜椀939、須恵器短頸壺940、須恵器甕941・942、円盤状土製品943、土師器甕944～954、土師器長胴甕955～958、土師器鍋959、土師器甌960・961、竈962～964、平瓦965～967等が出土した。下表は図示したのものも含め、器種同定できない細片を除いた1149点の内訳を示したものである。供膳具が41%、煮炊具が45%、貯蔵具が約14%を占める。供膳具の比率は土師器79%、須恵器21%で土師器の比率が高い。

表2 6次3区2-SD01出土遺物数量表

種別	器種	数量	種別	器種	数量
土師器	杯	49	須恵器	杯	22
	皿	14		皿	2
	高杯	5		高杯	0
	蓋	0		蓋	0
	杯・皿	306		杯・皿	73
	甕	206		甕	132
	竈	34		壺	1
	甕・竈	271		甕・壺	25
製塩土器	1	瓦	8		
合計			合計		1149



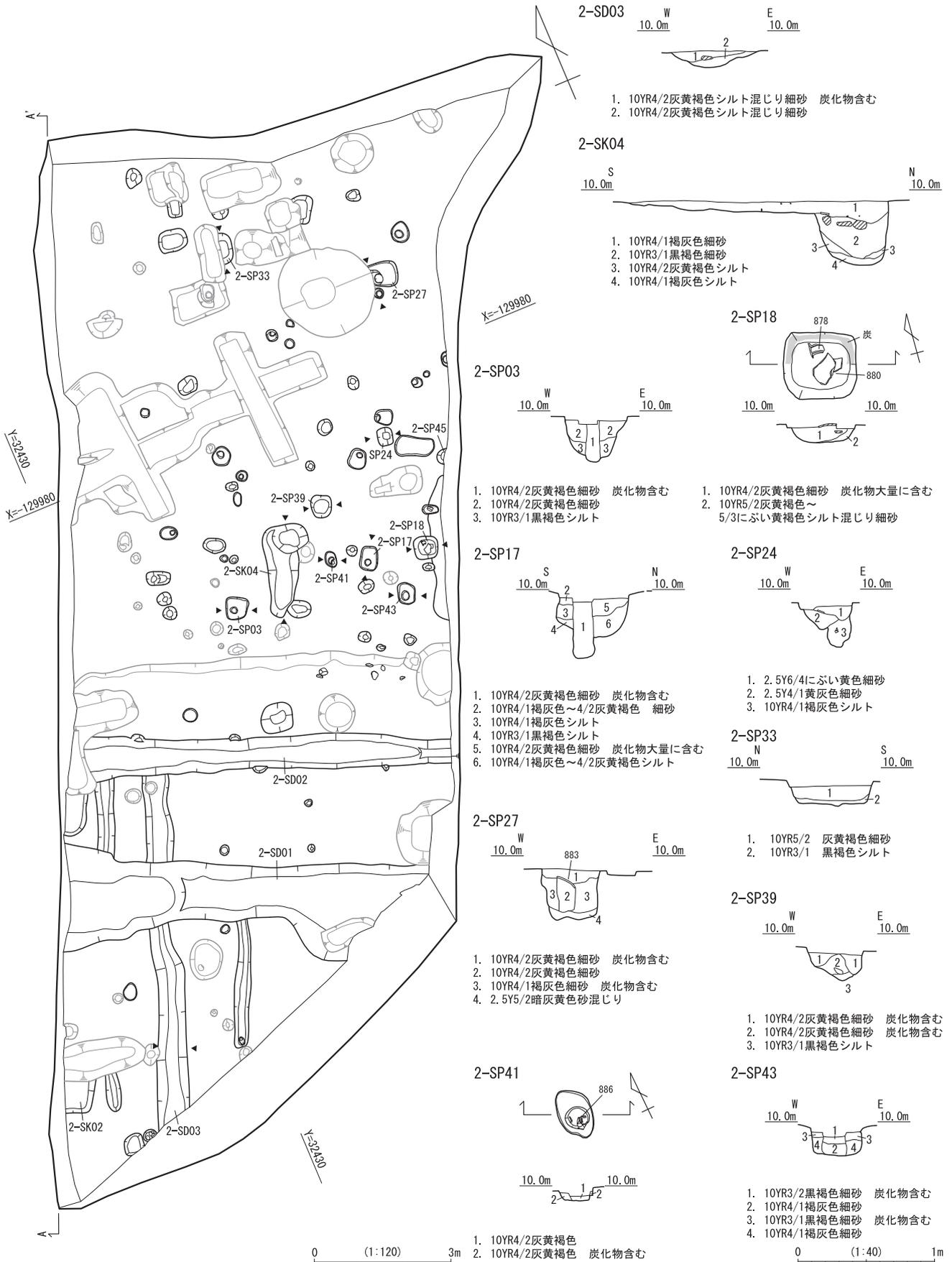
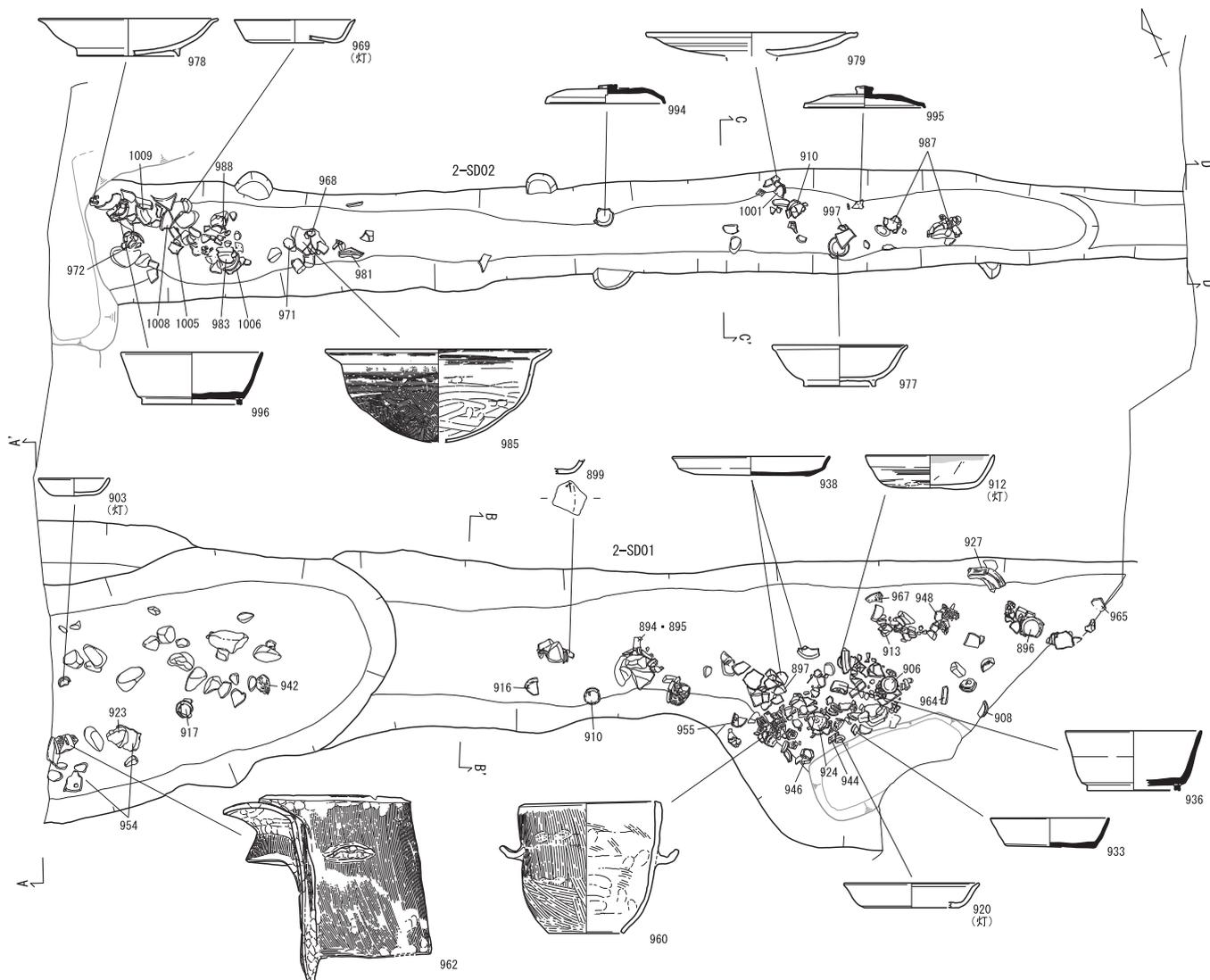
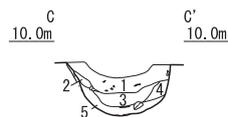
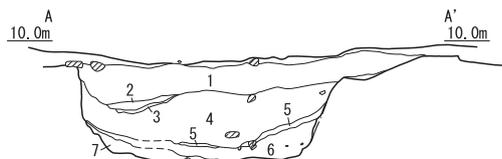


図60 6次3区第2面平面図、2-SD03、2-SK04、2-SP03・2-SP18・2-SP17・2-SP24・2-SP27・2-SP33・2-SP39・2-SP43断面図、2-SP18・2-SP41平・断面図



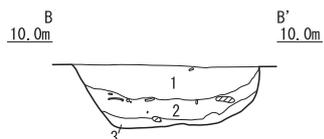
2-SD01

2-SD02



1. 10YR4/2灰黄褐色細砂 炭化物・土器含む
2. 10YR5/4にぶい黄褐色砂
3. 10YR3/1黒褐色シルト 炭化物含む
4. 10YR4/2灰黄褐色シルト
5. 10YR4/2灰黄褐色シルト炭化物混じり
6. 10YR4/1褐灰色～4/2灰黄褐色細砂 炭化物・土器含む
7. 10YR2/2黒褐色シルト 鉄沈着 φ1～2cmの礫混じる

1. 10YR4/2灰黄褐色細砂 炭化物・土器多量含む
2. 10YR4/2灰黄褐色細砂
3. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 10YR4/2灰黄褐色混じり
4. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
5. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト



1. 10YR4/2灰黄褐色細砂
2. 10YR4/2～3/1黒褐色シルト 炭化物含む
3. 10YR3/2黒褐色～4/3にぶい黄褐色シルト

1. 10YR4/2灰黄褐色細砂 炭化物・土器含む
2. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂

0 (1:50) 1m

図61 6次3区2-SD01・2-SD02平・断面図

第Ⅲ章 調査の成果

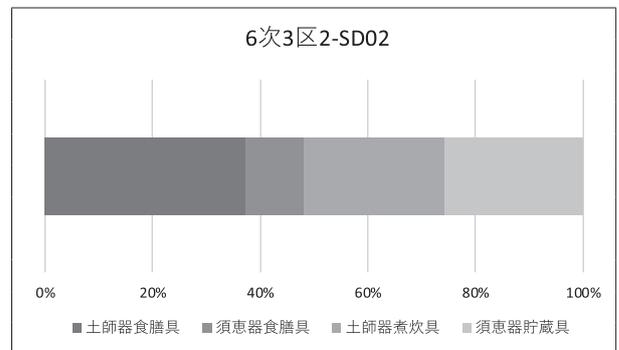
2-SD02

(遺物図版54-55)
(写真図版43-124-
44-3-143-157)

2-SD01の北2.2mで検出した東西方向に直線的に延びる溝である。検出規模で延長8.1m、幅は西端で80cm、東端で50cmを測る。溝の肩は南北とも直線的で2-SD01とは様相が異なる。溝底の標高は西端で9.5m、東端で9.73mと概ね一定である。遺構検出面からの深さは30～35cmである。溝の主軸は飾磨郡条里であるN21°Eと直交する。断面はU字状を呈し、埋土は灰黄褐色の細砂が主体で炭化物を含んでいる。遺物は西端と中央より東側からまとまって出土した。2-SD01と同様、礫とともに溝底に貼り付いた状態で出土したものが多く、溝廃絶時に一気に廃棄されたものとみられる。形状を保つものが比較的多い点も2-SD01と共通する。土師器杯A 968～972、土師器杯973・974、土師器碗B 975～977、台付皿978、土師器高杯979・980、竈981、土師器把手982、土師器鍋983～985、土師器甕986～990、長胴甕991・992、須恵器稜椀蓋993、須恵器杯B蓋994・995、須恵器杯B 996、須恵器壺997～1001、須恵器甕1002～1009、軒丸瓦1010を図示した。このうち、第1面SD02から出土したものは前述したとおりである。図示したものも含めて出土総数は473点である。内訳は供膳具が48%、煮炊具26%、貯蔵具26%である。供膳具の内訳は土師器76%、須恵器27%と土師器の比率が高い。

表3 6次3区2-SD02出土遺物数量表

種別	器種	数量	種別	器種	数量
土師器	杯	14	須恵器	杯	1
	皿	4		皿	0
	高杯	0		高杯	0
	蓋	1		蓋	3
	杯・皿	152		杯・皿	49
	甕	13		甕	94
	竈	17		壺	4
	甕・竈	90		甕・壺	20
	製塩土器	0		瓦	11
合計			473		



2-SD03

(遺物図版50)
(写真図版137)

2-SD01と2-SD02に切られる南北方向に延びる溝である。2-SD02を超えて北には延びていない。検出規模で延長は7.8m、幅は60cm、深さは遺構検出面から10cm前後である。断面は皿状を呈す。遺物は少なく、溝南端から瓦質土器の紡錘車890が出土した。

2-SK02

(遺物図版49)

2-SD03の西1.3mの位置で検出した。攪乱を受け調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出規模で南北76cm、東西70cmを測る。深さは遺構検出面から5cmである。埋土から須恵器杯B蓋872が出土した。

2-SK04

(遺物図版49)

調査区のほぼ中央、2-SD02の北2.6mの位置で検出した。検出時には南北2.05m、東西1mの不整形な土坑と認識したが、土層断面では北側の円形部分が先行し、南北方向に延びる1層部分が後行しており、2基に遺構の切り合いとみられる。北側の円形土坑が先行する。遺物は円形土坑にあたる2～4層からは出土していない。1層から須恵器杯B蓋873、製塩土器874が出土した。

柱穴

柱穴は隅丸方形を呈するものと円形を呈するものがある。隅丸方形の柱穴からは図示に耐える遺物が出土しているが、円形のものからは少ない。多くの柱穴を検出したが、建物を構成するものはなく、その性格は不明である。調査区中央の溝2-SD01・2-SD02の間には目立った柱穴がないことから、溝が何らかの区画を示している可能性が考えられる。

2-SP03

(遺物図版49)

2-SD02の北2.6mで検出した。平面は隅丸方形を呈し一辺約50cmを測る。深さは遺構検出面から35cmである。遺物は柱痕跡から須恵器杯875が、掘方から須恵器杯B蓋876が出土した。

- 2-SP17 (遺物図版49) 2-SK04の東1.3mの位置で検出した。平面は隅丸方形を呈し、南北方向にやや長い。南北50cm、東西40cm、深さは遺構検出面から46cmを測る。埋土から須恵器杯B 877が出土した。
- 2-SP18 (遺物図版49) (写真図版42-3) 2-SP17の東約80cmの位置で検出した。隅丸方形を呈し、一辺50～54cmを測る。深さは遺構検出面から13cmで、柱痕跡は確認できなかった。検出面から段下げした時点で須恵器長頸壺878、須恵器杯B 879、須恵器甕880が面的に出土した。また、878の外側には薄く炭化物層が広がっていた。878下位の埋土には大量の炭化物が含まれていた。
- 2-SP24 (遺物図版50) 2-SP17の北1.7mの位置で検出した。隅丸方形を呈し、一辺40～45cmを測る。深さは遺構検出面から約30cmを測る。埋土から土師器甕881が出土した。
- 2-SP27 (遺物図版50) 第1面で検出したSE01に切られる柱穴である。平面形は隅丸方形を呈し、検出規模で一辺60cm、深さは遺構検出面から38cmを測る。埋土には炭化物が多く含まれている。遺物は埋土から製塩土器882、柱痕跡上層から須恵器甕883が出土した。
- 2-SP33 (遺物図版50) 2-SP27の西約3mの位置で検出した。第1面の遺構に切れ、かろうじて半分だけ残存している。検出規模で南北60cm、東西30cmである。深さは遺構検出面から概ね20cmである。埋土から須恵器杯A 884が出土した。
- 2-SP39 (遺物図版50) 2-SK04の北東30cmで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺約50cm、深さは遺構検出面から23cmを測る。柱痕跡は確認できなかったが、埋土から須恵器杯885が出土した。
- 2-SP41 (遺物図版50) (写真図版42-4・137) 2-SP39の南0.7mの位置で検出した。南北に長い円形を呈し、長軸45cm、短軸25cmを測る。深さは遺構検出面から8cmである。段下げ中に柱痕跡から飯蛸壺886が出土した。本遺跡ではこれ一点のみの出土であり、本来の用途として用いられたものかは不明である。あるいは製塩土器とともに運ばれてきたのかもしれない。
- 2-SP43 (遺物図版50) 2-SP18の南60cmの位置で検出した。隅丸方形を呈し、一辺40～45cmを測る。深さは遺構検出面から20cmである。掘方から須恵器稜椀887が出土した。
- 2-SP45 (遺物図版50) 2-SP24の東約1mの位置で検出した。調査区外に広がるが、本来は円形を呈していたと考える。検出規模から直径35cm程度と想定する。深さは遺構検出面から23cmである。埋土から須恵器壺の口縁部888、土師器把手付盤889が出土した。

第3面

第3面で検出した遺構は少なく、図示に耐える遺物が出土したのは、土坑のみである。

- 3-SK01 (遺物図版50) 調査区北部、第1面SE01に切られる位置で検出した。南部は残存しておらず、東西1.2m、南北60cmの範囲のみ検出した。土坑の肩は緩やかに掘り込まれ、深さは遺構検出面から最大で15cmを測る。埋土は褐灰色と黒褐色の粗砂で、外反口縁の弥生土器甕891が出土した。
- ピット 8基検出したが、直径20～40cmで、埋土はSP07を除き、黒褐色で共通する。検出面は地山であるが、これらの遺構は本来その上面にある黒褐色シルト層から掘り込まれたものと考えられる。黒褐色シルト層においても部分的に遺構検出を試みたが、埋土との区別がつかない。5次1区・2区でも同様であるが、総じて第3面の遺物量は少なく、遺構も性格が特定できるものは確認できていない。これらのピットから遺物の出土はないが、3-SK01と類似する埋土であることから弥生時代と考える。

第三章 調査の成果

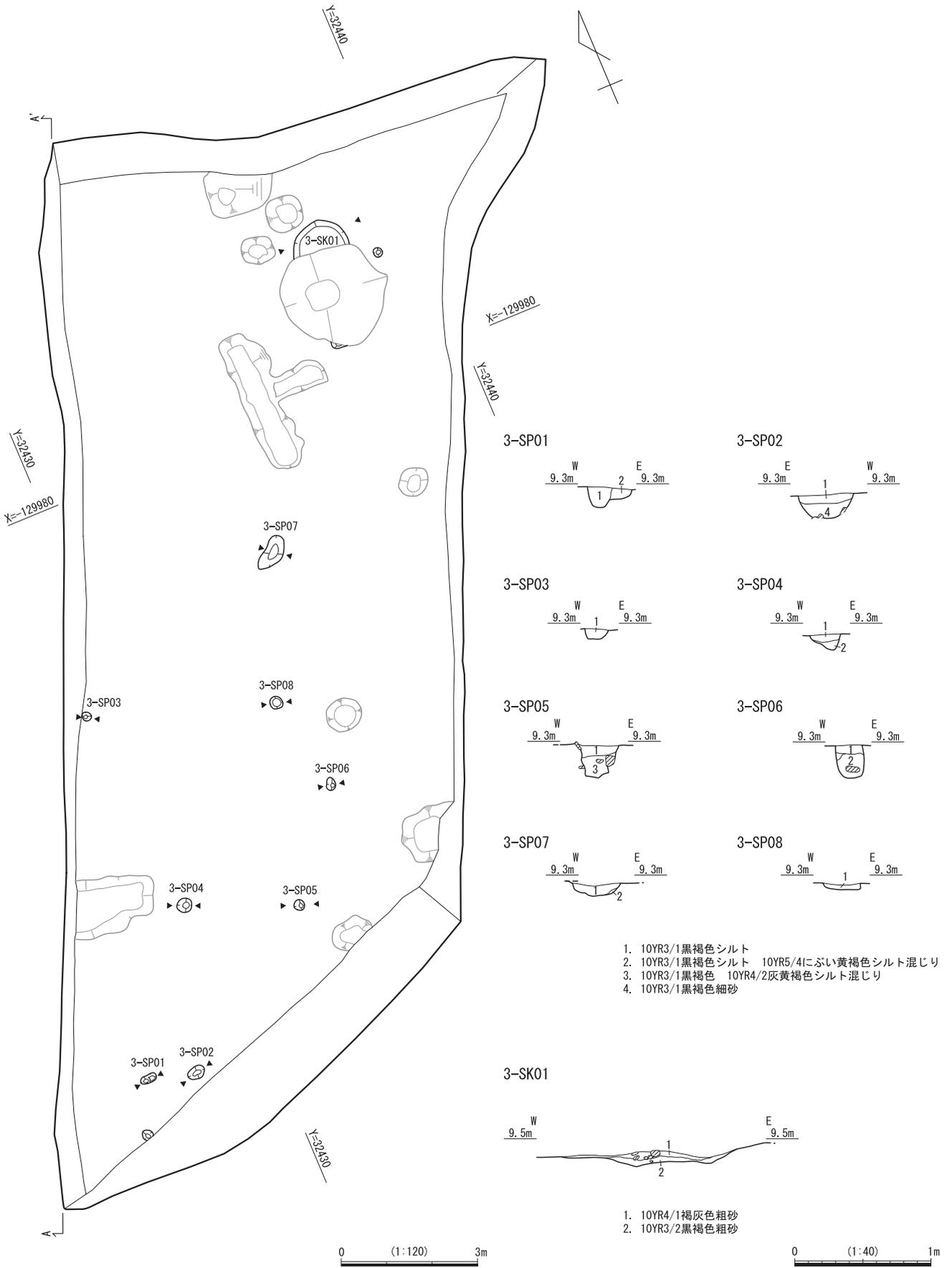


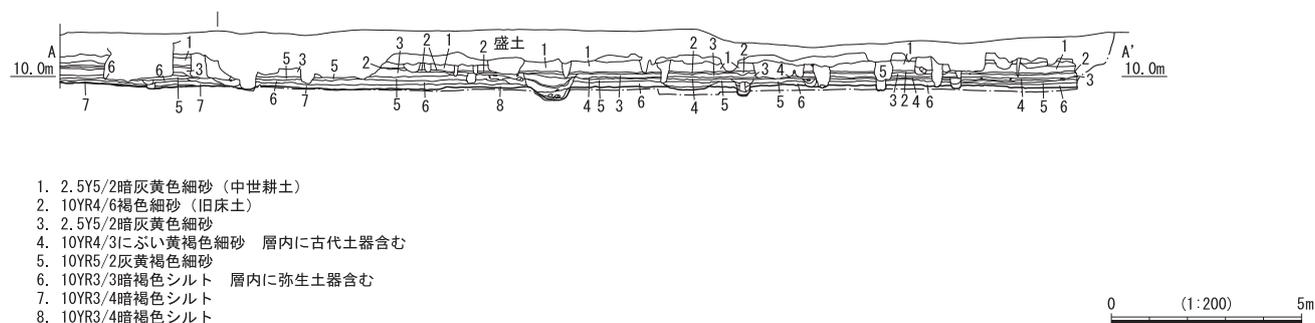
図62 6次3区平面図、3-SP01・3-SP02・3-SP04・3-SP05・3-SP06・3-SP07・3-SP08、3-SK01断面図

6次4区

(写真図版45-50)

飾磨街道をはさんで6次3区の西に位置する調査区である。5次2区の北端と接続する。延長約27m、幅約7mで、北西部が西へ拡張する。5次2区と同じく3面の調査を行い、それぞれの遺構検出面は合致している。第1面が4層上面、第2面が6層上面、第3面が地山である。調査時の地表面の標高は11.2mで、中世耕土層が10.3m、調査区西側の地山の標高は10.6m、東側で9.6mである。西側は東側に比べて地山が高まるため、第2面と第3面の検出レベルの差は、東壁沿いは26cmあるが、西壁では6cmとほとんど差がない。

第1面で検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、柵3条、井戸1基、溝2条、土坑、柱穴である。調査区の北部は攪乱が目立つが、基本的に遺構の残存状況は良好である。溝2条(SD01とSD02)は、6次3区と同様に第2面の溝に影響されたものである。第2面で検出した遺構は掘立柱建物跡1棟、溝6条、落ち込み、土坑、柱穴等である。このうち溝(2-SD01・2-SD02)と土器溜り(2-SX01)からはまともに遺物が出土した。第3面で検出した遺構は、第2面で検出した2-SD04に接続する溝1条と土坑、ピット等である。



1. 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 (中世耕土)
2. 10YR4/6褐色細砂 (旧床土)
3. 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
4. 10YR4/3いぶい黄褐色細砂 層内に古代土器含む
5. 10YR5/2灰黄褐色細砂
6. 10YR3/3暗褐色シルト 層内に弥生土器含む
7. 10YR3/4暗褐色シルト
8. 10YR3/4暗褐色シルト

図63 6次4区東壁土層断面図

第1面

SB01

(写真図版45-246-2)

調査区南部で検出した建物跡である。東西2間、南北3間分を検出したが、調査区外に広がるため全容は不明である。5次2区では、対応する柱穴を検出していない。建物の主軸はN21°Eで、飾磨郡条里に沿っている。検出規模は南北5.4m、東西4.8mである。柱間隔はSP04-SP18で南から2.5m、3.0m、SP18-SP23で西から2.4mの等間である。柱穴は基本的に円形を呈し、直径は38～45cm、深さは遺構検出面から15～30cmである。柱穴埋土は灰色～黄灰色で、柱痕跡は10～15cmである。SP04とSP23を除き掘方底面に根石を確認した。図示に耐える遺物は出土していない。

SA01

(写真図版45-2)

SB01と平面的に重なる位置で検出した。北端で検出したSP19がSB01の柱筋におさまることからSB01を構成する柱筋である可能性も考えたが、対になる柱列が伴わないことから単独の遺構と判断した。遺構の主軸はN21°Eである。5次2区で延長部にあたる柱穴を検出していないことから延長は7.5mである。柱間隔は北から1.7m、2.0m、1.9m、2.0mである。遺構を構成する柱穴は円形を呈し、直径26～32cmを測る。深さは遺構検出面から20cm前後で概ね揃っている。SP19にはSB01と同様に根石を配している。遺物は出土していないが、埋土はSB01と共通する。直接の切り合いがないため、SB01との前後関係は判断できない。

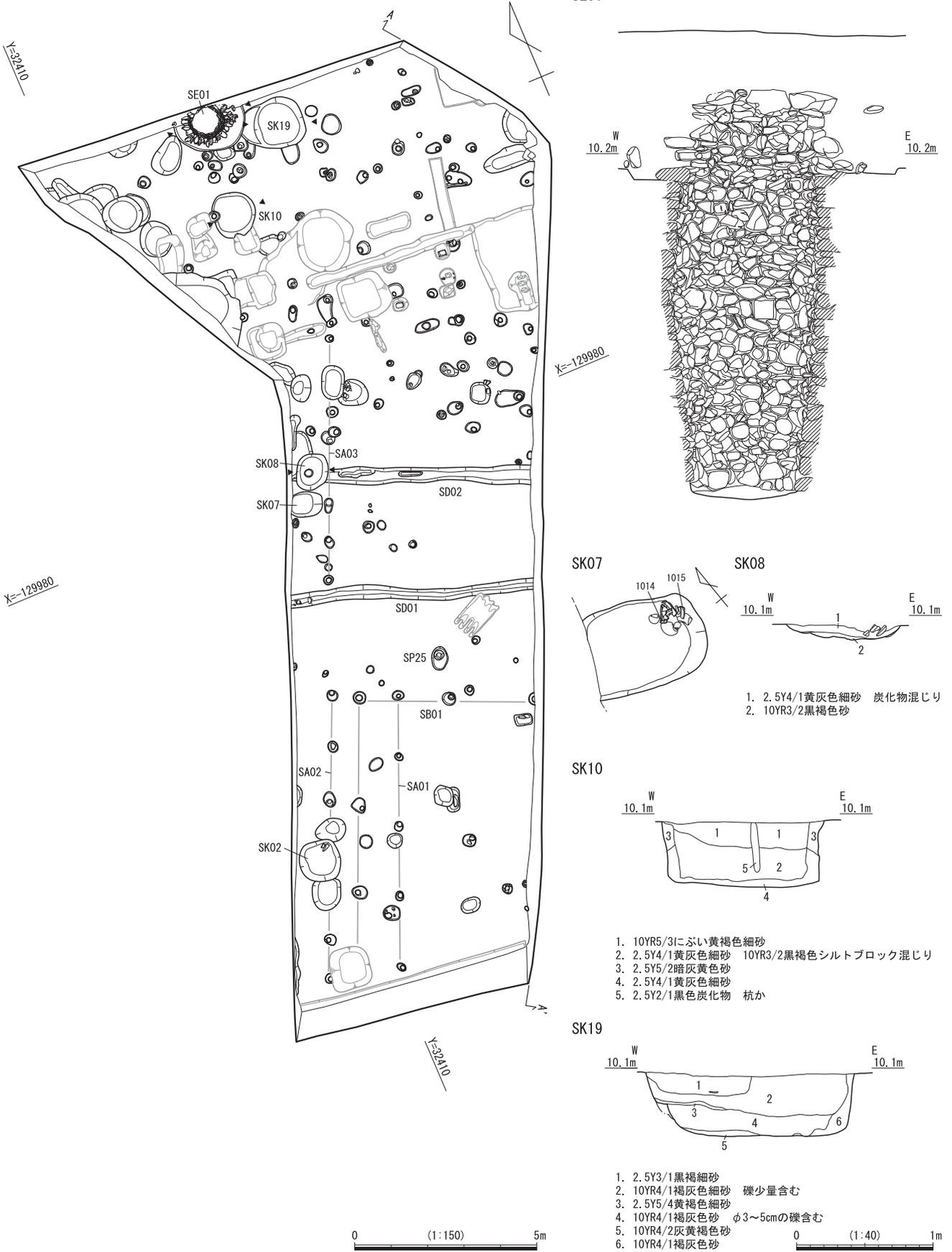


図64 6次4区第1面平面図、SE01、SK08・SK10・SK19断面図、SK07平・断面図

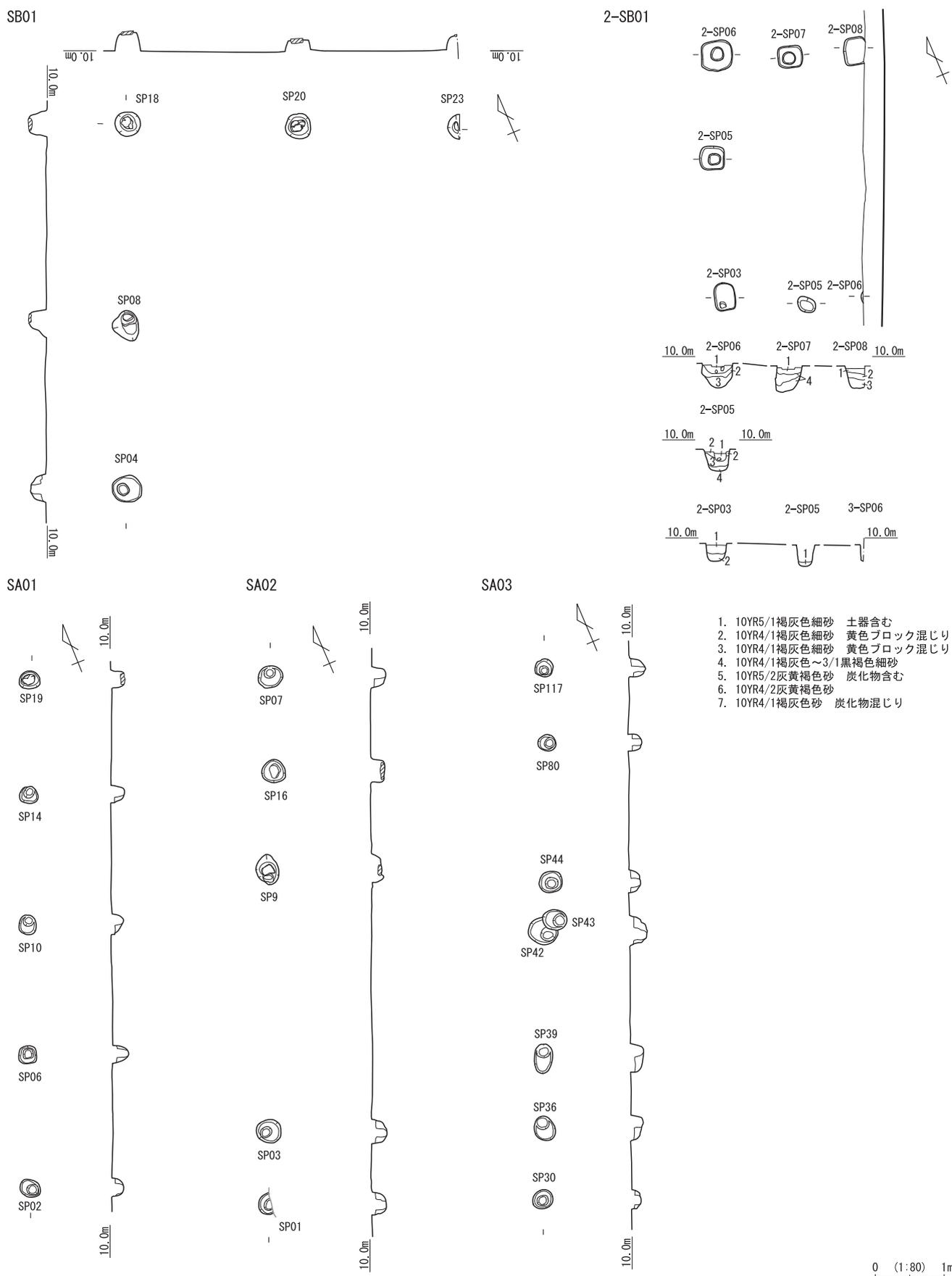


図65 6次4区第1面SB01、SA01・SA02・SA03、第2面2-SB01平・断面図

第三章 調査の成果

SA02

(写真図版45-2)

SB01の西40cmで検出した柱穴5基で構成される遺構である。調査区外に広がる建物を構成する柱列の可能性は否定できないが、現状では判断できないことから柵として記載する。遺構の主軸はN21°Eである。検出規模で延長7.8mを測り、柱間隔は北から1.4m、1.5m、3.8m、1.1mである。SP03とSP09間には柱穴を確認できない。SK02等に切られる部分にも本来、柱穴が存在していたと思われ、均等に割れば1.6mで大きな矛盾はない。遺構を構成する柱穴は円形を呈し、直径は30～42cmを測り、深さは遺構検出面から20cm前後で揃っている。SP09とSP16は掘方底の根石を配す。遺構の北端がSB01と揃うことから、SB01と関連する遺構と考える。遺物は出土していない。

SA03

(写真図版45-3)

SA02の北約3mで検出した柱穴5基で構成される遺構である。柱穴の並びはSA02の延長にあたり、本来は一連であった可能性もあるが、間を埋める柱穴が検出できないため別の遺構とした。延長は7.8mで、柱間隔は北から1.1m、2.0m、0.8m、1.7m、1.0m、1.2mとバラつく。遺構の主軸はN21°Eである。構成する柱穴は円形を呈し、直径28～40cmを測り、深さは遺構検出面から15～28cmである。遺物は出土していない。SB01からSA03はいずれも遺物が出土していないため、時期を押しやることはできないが、埋土は黄灰色の細砂で共通し、大きな時期差はないと思われる。5次1区SK24やSK30とも共通することから中世の遺構と考える。

SE01

(遺物図版56)
(写真図版46-3)

調査区北端で検出した。掘方は調査区外に広がるが、円形を呈し、直径2m以上と想定できる。掘方中央に円形石組みの井側を配す。石組みの内径は90cmを測る。調査区北壁には天端と見られる石材も残存しており、深さは天端から約3.0mである。遺物は井側内埋土から汽車土瓶に付属する陶器杯1011と肥前陶器皿1012が出土した。井戸の廃絶にあたっては、海砂に近い粗砂で埋めており、5次1区SE02と類似している。SK19との切り合い関係からもSE01はSK19より後出することから、1012は混入したものである。

SK07

(遺物図版56)
(写真図版46-5)

SA03に接した位置で検出した土坑である。西側が調査区外に広がるが、検出規模で南北65cm、東西80cmを測る。断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から17cmである。土坑の東肩で土師器焙烙1014と1015が出土した。

SK08

(遺物図版56)

SK07の北で検出した。南北にやや長い円形を呈し、南北1.0m、東西70cmを測る。断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から概ね10cmである。埋土から土師器壺1013が出土している。

SK10

SE01の南1.2mで検出した。円形を呈し、直径は1.2mを測る。掘方は垂直に掘り込まれ、埋土の状況から掘方に沿って何らかの構造物が存在したとみられる。本遺構からは木質等の痕跡は確認できなかったが、姫路城城下町跡の調査事例から推測すれば、埋桶遺構の可能性が高い。

SK19

(遺物図版56)
(写真図版46-6)

調査区北端でSE01の掘方に切られた状態で検出した。東西にやや長い円形を呈し、検出規模で南北1.4m、東西1.5mを測る。西側は小段状に掘り込まれている。深さは遺構検出面から最大で45cmを測る。埋土から土師器焙烙1016と軒平瓦1017が出土した。遺物が少なく明確に時期を決めたいが、1016の様相から18世紀前半頃と考えられる。SE01との切り合い関係から18世紀前半以降に位置づけることができる。

第2面

2-SB01

(遺物図版57)
(写真図版47-2-3)

調査区東端で検出した。検出した位置から調査区外に広がる建物跡である。検出規模で南北2間3.6m、東西2間2m、建物の主軸は、2-SP03～2-SP06を基準とすればN22°Eで飾磨郡条里に概ね沿っている。柱間隔は南北方向が北から1.6m、2.0m、東西方向は2

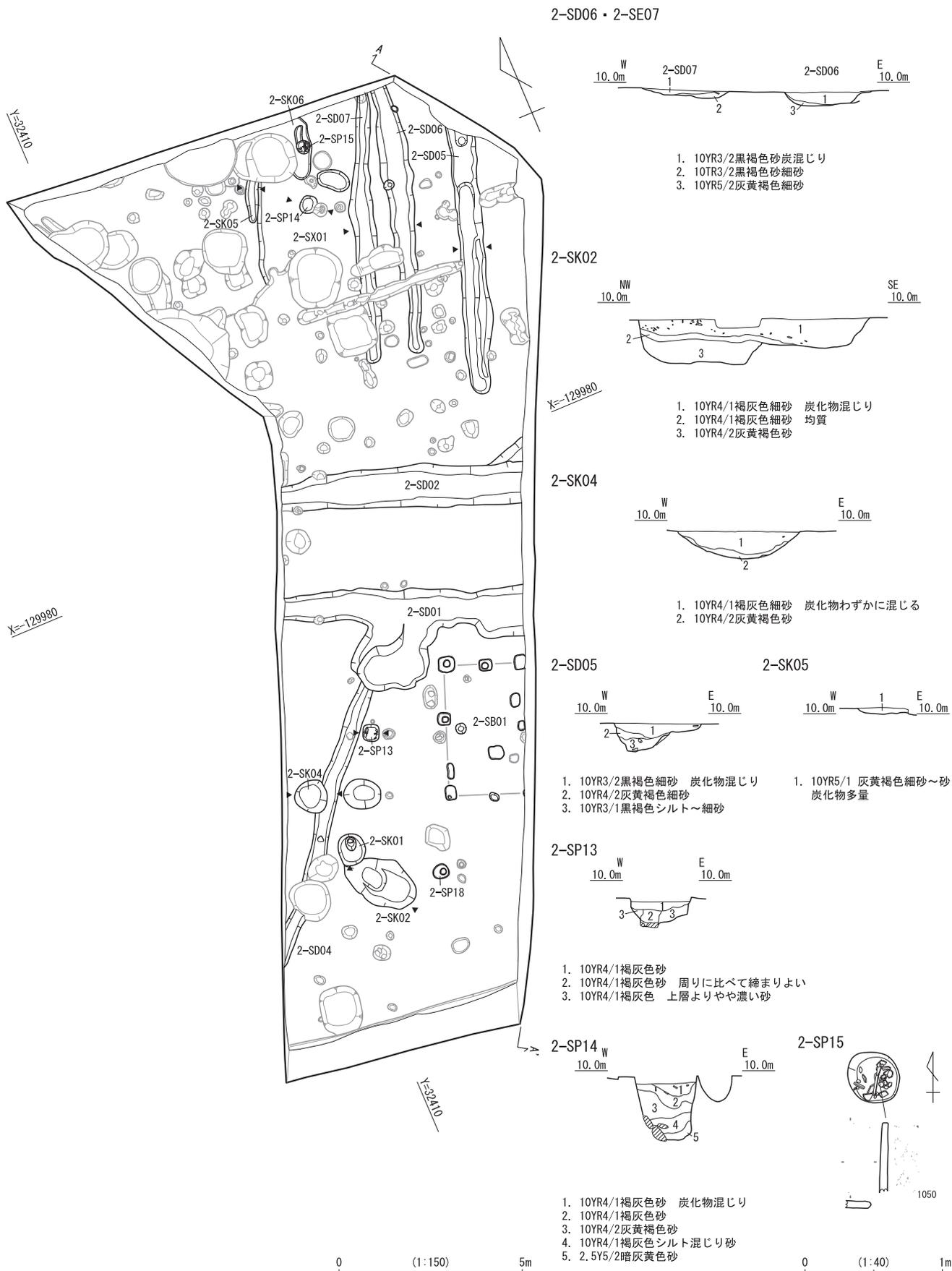


図66 6次4区第2面平面図、2-SD05・2-SD06・2-SD07、2-SK02・2-SK04・2-SK05、2-SP13・2-SP14断面図、2-SP15平面図

第三章 調査の成果

—SP06～2—SP08で西から1.0mの等間である。柱穴は2—SP07を除いて隅丸方形を呈する。一辺40～48cm、深さは遺構検出面から30cm前後で揃っている。遺物は2—SP07から土師器杯A 1031が出土した。5次2区で検出したSA01と柱穴の規模、埋土等は類似し、遺構の主軸も揃っている。一連の遺構の可能性が高い。

2-SD01

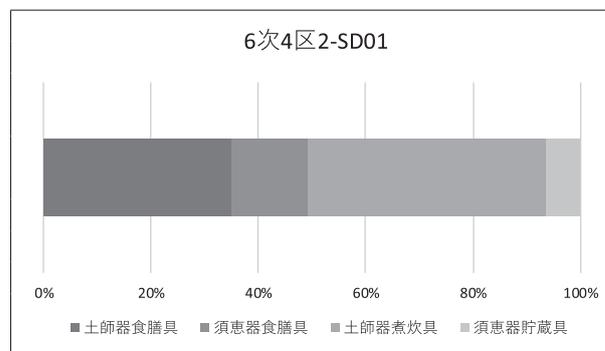
(遺物図版58)
(写真図版48-13-158)

調査区のはほぼ中央、2—SB01の北50cmで検出した東西方向に延びる溝である。検出した位置から6次3区2—SD01の延長部分にあたると思われる。両者を含めた延長は約25mである。溝の北肩は直線的であるが、南肩は出入りが激しい。調査区中央付近は土坑状に南へ広がり、調査時には切り合いの可能性も考慮に入れてその有無を追及したが、確認できなかったため、一連の遺構と判断した。溝の主軸は北肩を基準にすれば、N21°Eに直交する。検出規模で延長6.54m、断面は西端では浅い皿状を呈すが、東端は6次3区2—SD01と同じU字状を呈する。深さは遺構検出面から最大で17cmを測り、溝底の標高は西端で9.93m、東端で9.73mである。図67は遺物出土状況である。遺物は礫とともに埋土中に多く含まれていたが、特に溝底から肩にかけて形を保った状態で出土するものが目立つ。

遺物は溝内からまとまって出土した。そのうち、土師器杯1051、土師器杯A 1052～1060、土師器高杯1061・1062、須恵器皿A 1063、須恵器杯A 1064・1065、須恵器杯B 1066～1067、須恵器稜椀1068・1069、須恵器高杯1070、製塩土器1071、土師器甕1072・1073、須恵器壺1074・1076、須恵器甕1075・1077・1078、土師器竈1079を図示した。これらは基本的に下層にあたる溝底に近い位置から出土している。遺物の出土状況は南へ広がる部分でも同じであり、一連の遺構であることがうかがえる。出土量は426点で、その内訳は器種が判明するもので、以下の表のとおりである。比率は供膳具49.3%、煮炊具44.4%、貯蔵具6.3%である。供膳具のうち土師器約71%、須恵器約29%と土師器の比率が高い。

表4 6次4区2-SD01出土遺物数量表

種別	器種	数量	種別	器種	数量
土師器	杯	17	須恵器	杯	11
	皿	2		皿	3
	高杯	0		高杯	1
	蓋	0		蓋	0
	杯・皿	124		杯・皿	44
	甕	32		甕	20
	竈	29		壺	3
	甕・竈	121		甕・壺	3
	製塩土器	11		瓦	5
合計			合計		426



2-SD02

(遺物図版59-61)
(写真図版48-12-4-5-159-160-196)

2—SD01の北で検出した東西に延びる溝である。2—SD01との間隔は溝肩間で2.3m、心々間で約3.5mである。調査区外に延びるが、検出規模で延長6.54mを検出した。検出した位置から6次3区2—SD02の延長部分と考えられる。両者を合わせた総延長は約25mである。溝の主軸は北肩を基準にすればN21°Eに直交している。溝の両肩は直線的で、幅は東端1.3m、西端で0.62mである。溝の断面はU字状を呈し、深さは遺構検出面から35cm前後で、西端底面の標高は9.8m、東端は9.43mである。遺物は図67に示すように2—SD01と同じく礫とともに出土し、一気に投棄された状態である。溝底から肩にかけて形を保った遺物が目立つ。出土遺物のうち、土師器台付皿1080～1085・1117、土師器高杯1086～1094、土師器杯1095・1111～1114・1118、土師器皿A 1096～1100、土師器杯A 1101～1108、墨書土器1109・1110、土師器杯B 1115・1116、土師器杯B蓋1119・1120、土師器

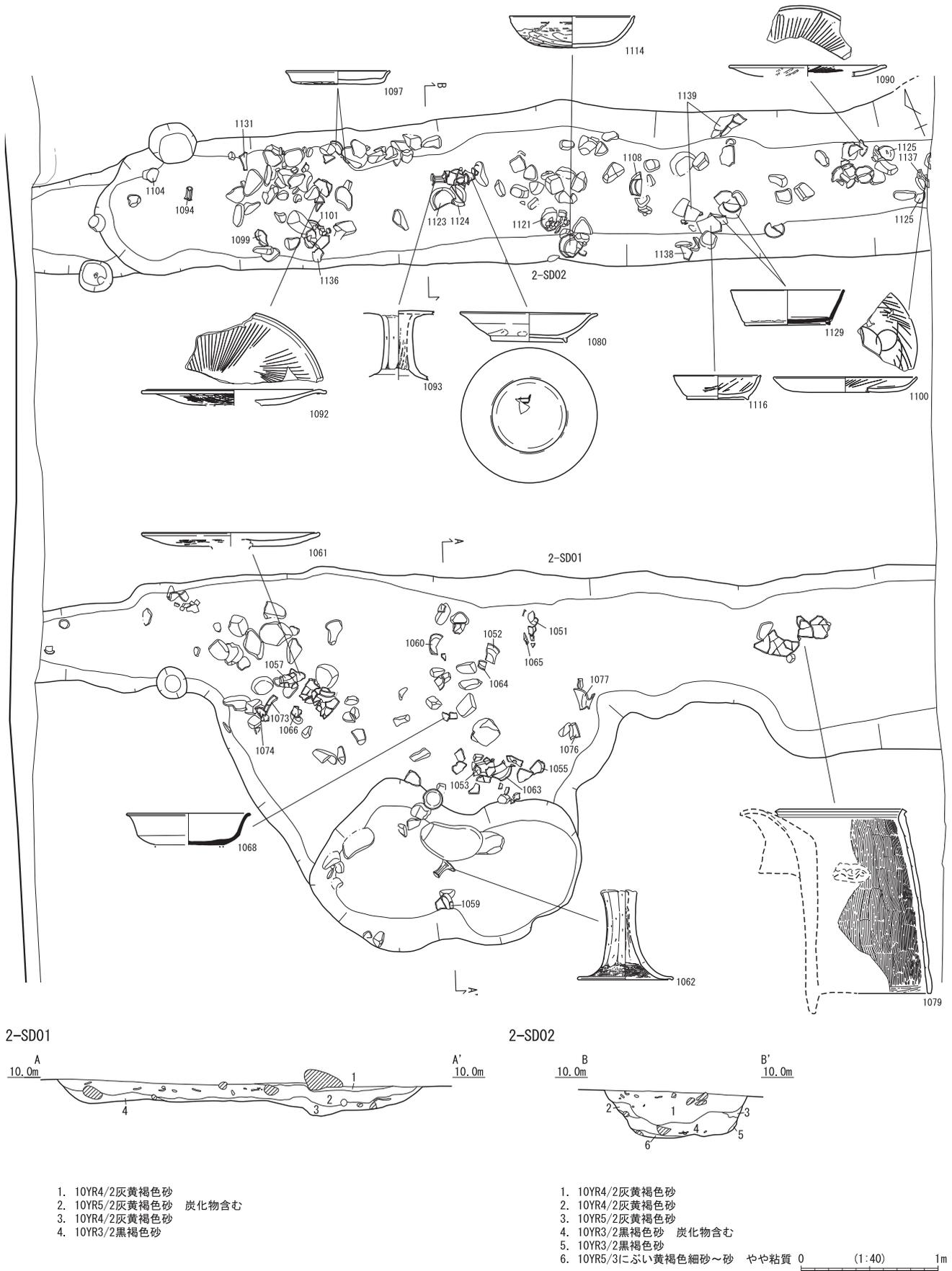


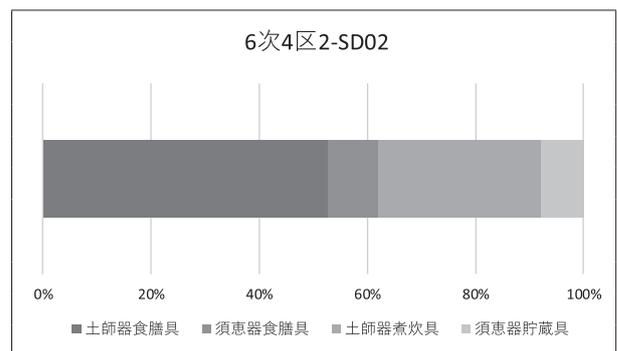
图67 6次4区2-SD01・2-SD02平・断面图

第三章 調査の成果

甕 1121、須恵器皿 A 1122～1124、須恵器杯 A 1125～1128、須恵器杯 B 1129・1130、須恵器稜椀 1131、須恵器杯 B 蓋 1132～1135、須恵器壺 1136、須恵器甕 1137～1139 を図示した。土師器台付皿 1080 と 1081 は底部外面に墨書が認められる。1081～1083・1085 は暗文が施される。1087 は土師器高杯としているが、台付皿の可能性もある。高杯と台付皿の口縁部の形態は類似し、暗文の施文状況も共通している。1093 と 1094 は高杯脚部で面取りを施す。墨書土器 1109・1110 は杯か皿か判断できないが、いずれも底部外面に墨書が認められる。土師器杯 B 蓋 1120 は 4 分割のミガキを施し、更に 45° ずらした状態でもミガキを加えている。器種分類可能な遺物の総量は 1001 点で、その内訳は器種の判明するもので下表のとおりである。比率は供膳具 62%、煮炊具 30%、貯蔵具 8% である。供膳具は、土師器約 85%、須恵器 15% と土師器の比率が圧倒的に高い。

表 5 6次4区 2-SD02 出土遺物数量表

種別	器種	数量	種別	器種	数量
土師器	杯	54	須恵器	杯	11
	皿	16		皿	3
	高杯	11		高杯	0
	蓋	9		蓋	7
	杯・皿	434		杯・皿	72
	甕	15		甕	51
	竈	59		壺	4
	甕・竈	224		甕・壺	25
	製塩土器	0		瓦	6
合計			1001		



2-SD05

(遺物図版56)
(写真図版47-2)

2-SD02 の北 2 m で検出した、南北に延びる溝である。2-SX01 の遺物取り上げ後に検出した。北側は調査区外に延びるため全容は不明である。検出規模で延長 7.2 m、幅は最大で 80cm を測る。溝の断面は北端では皿状を呈すが、南側は 2 段に掘られている。深さは遺構検出面から概ね 20cm である。埋土から土師器椀 B 1018 が出土した。

2-SD06

(遺物図版56)
(写真図版47-2)

2-SD05 の西 1.1 m で検出した。2-SD05 と同様に 2-SX01 の下位で検出した。調査区外に延びるため全容は不明であるが、検出規模で延長 7.4 m、幅は最大で 0.9 m を測る。断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から 10cm 前後である。遺物は埋土から土師器皿 A 1019、製塩土器 1020、土師器甕 1021 が出土した。遺物量が少なく確定的なことは言えないが、2-SX01 出土遺物と大きな時期差は認めがたい。

2-SD07

(遺物図版56)
(写真図版47-2137)

2-SD06 の西で検出した南北溝である。調査区外に延びるが検出規模で延長 7.4 m、幅 0.65 m、浅い皿状を呈し、深さは遺構検出面から 5cm を測る。溝の様相は 2-SD06 と共通している。また、両者の南端は揃っていることから、相互に関連する遺構と考えられるが、性格は判然としない。いずれも 2-SX01 出土遺物の取り上げ後に検出した溝である。遺物は少なく、製塩土器の底部 1022 と紡錘車 1023 を図示した。

2-SK02

(遺物図版56)

2-SB01 の南西約 2 m の位置で検出した土坑である。2-SK01 に切られる。東西に長い楕円形を呈し、長軸 2.15 m、短軸 1.35 m を測る。土坑底は東側が浅く、西側が一段深く掘り込まれている。深さは遺構検出面から最大で 32cm である。土層は大きく 3 層に分けられ、上層は炭化物を多く含み、遺物が出土した。竈 1024 と土師器皿 B 1025 は上層から出土した。中層は均質な細砂で、下層は砂層であるが、両層からは遺物の出土はない。

2-SK04

(遺物図版56)

2-SK02 の北西 1.8 m の位置で検出した。2-SD04 を切る。円形を呈し、直径約 90cm、深さは遺構検出面から 20cm を測る。埋土上層はわずかに炭化物を含んでいる。遺物の出土量は少なく、上層から出土した製塩土器 1026 を図示した。

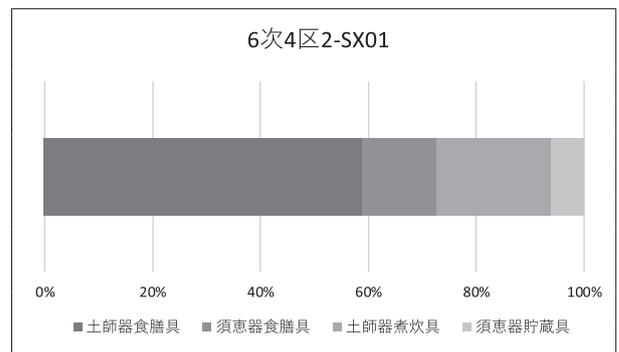
- 2-SK05
(遺物図版56) 1-SK19に切られる南北に長い土坑である。検出規模で南北1.15m、東西3.6mを測る。深さは遺構検出面から5cm前後と浅い。土坑の東肩は2-SX01の肩によって切られ、2-SX01に先行する遺構であることがわかる。埋土から土師器杯1027、脚部に面取りを施さない土師器高杯1028、製塩土器1029等が出土した。1029は内面に布目を有し、類似資料は市内家島町西オドモ遺跡で採取されている(姫路市埋蔵文化財センター2017)。
- 2-SK06
(遺物図版56) 1-SK19の北から東にかけて広がる土坑である。平面形は1-SK19の影響と調査区外に広がるため不明である。検出規模で南北1.7m、東西2.0mを測る。深さは最大で3cmと極めて浅い。土坑として調査したが、地形のたわみに堆積したものかもしれない。本遺構の底で2-SP15を検出した。遺物は須恵器杯1030が出土した。
- 2-SP13
(遺物図版57) SB01の西約1.5mで検出した隅丸方形を呈す柱穴である。一辺45cmを測り、深さは遺構検出面から22cmを測る。柱痕跡から土師器杯A1032が出土した。
- 2-SP14
(遺物図版57) 2-SD07の西85cmに位置し、2-SX01の下位で検出した。円形を呈し、直径は50cmで、深さは遺構検出面から50cmを測る。埋土は炭化物を含み、比較的まとまって遺物が出土した。土師器杯A1034・1035、土師器杯1036、須恵器杯B1037、製塩土器1038～1040を図示した。いずれも破片であり、人為的な出土状態等は確認できなかった。
- 2-SP15
(遺物図版57)
(写真図版50-3) 2-SK06の下位で検出した。円形を呈し、直径は38cmで、深さは遺構検出面から16cmを測る。柱痕跡は確認できなかったが、段下げ時点から遺物が比較的まとまって出土した。1050の平瓦が遺構中央に縦向きで出土し、その東西から破片が多数出土した。遺物の出土は上層に限られ、下層からはほぼ出土していない。土師器皿A1041、土師器杯A1042、須恵器杯A1043、製塩土器1044～1047、土師器甕1048、土師器鍋1049を図示した。1044は1029と同じく内面に布目が認められる。
- 2-SP18
(遺物図版57) 2-SB01の南1.4mの位置で検出した。円形を呈し直径は約30cm、深さは遺構検出面から25cmを測る。埋土は黄灰色土である。埋土から土師器甕1033が出土した。
- 2-SX01
(遺物図版62-64)
(写真図版49-50-1-2、
133-161-196) 2-SD05・SD06・SD07と平面的に重なる位置で検出した。調査区東壁から西へ5.7mの位置で土層の変化が認められ、そこから東側で灰黄褐色の細砂が広がっていることから、その範囲を2-SX01と呼称した。土の様相は6次3区の西壁で確認できる4層に類似しており、包含層の可能性もあるが、遺物の広がりには図68に示した範囲に限定されることから、土器溜りと認識した。西側ではSK19に切られる肩を検出したが、南側は攪乱を受けているため判然としない。しかし、攪乱以南に当該土層は確認できなかったことから北壁より約4.2mまでの範囲と考えられる。西肩を基準とした遺構検出面からの深さは5～8cmである。遺物は広い範囲から出土したが、特に2-SD06・SD07の上面付近の東西1.8m、南北3.3mの範囲から密集して出土した。調査段階では2-SD01や2-SD02に比べて形のわかる遺物が少ない印象を受けたが、整理作業により、復元できるものが多く含まれていることが判明した。遺物は2-SX01の底面に貼り付いた状態で出土し、検出レベルはほとんど同一である。奈良三彩小壺1184が図示した位置から出土したが、周辺の遺物の出土状況に人為的なものは認められない。遺構の性格は判然としないが、遺物は原位置を大きく動いていないものと考えられ、良好な一括資料といえる。土師器皿A1140～1150、黒色土器1151、土師器杯1152～1154、1165～1169、土師器杯A1155～1164、1170～1183、三彩小壺1184、墨書土器1185～1188、土師器台付皿1189、土師器杯B1190、土師器高杯1191～1193、須恵器皿A1194、須恵器杯A1195～1202、須恵器杯B1203～1210・1216、須恵器杯B蓋1211～1214、須恵器柀か1215、須恵器稜椀1217・1218、須恵器鉢1219、須恵器高杯1220、製塩土器1221～1240、土師器甕1241～1251、竈1252、甌1253を図示した。

第三章 調査の成果

出土遺物の総量は1727点で、そのうち器種のわかるものの内訳は下表のとおりである。比率は供膳具73%、煮炊具21%、貯蔵具6%である。供膳具は、土師器81%、須恵器19%と土師器の比率が圧倒的に高い。ここまで西部地区の5遺構についてその組成比率を確認してきたが、6次3区2-SD01・2-SD02、6次4区2-SD01は供膳具と煮炊具の比率が近く、6次4区2-SD02と2-SX01は供膳具の比率が高い。須恵器貯蔵具は大型であり、一般には破片数を比較した場合、実数以上に増加する傾向にあるが、いずれも比率は低い。供膳具については、宮原氏が詳細に検討しているように播磨地域では土師器に比べ須恵器の比率が高い（多可町2006）。西部地区では土師器が71～85%を占め、平城宮の比率に近い。西部地区で明らかとなった比率は、播磨地域において極めて例外的な組成といえる。

表6 6次4区2-SX01 出土遺物数量表

種別	器種	数量	種別	器種	数量
土師器	杯	34	須恵器	杯	17
	皿	49		皿	4
	高杯	3		高杯	4
	蓋	0		蓋	4
	杯・皿	901		杯・皿	200
	甕	20		甕	65
	甗	33		壺	3
	甕・甗	305		甕・壺	33
	製塩土器	48		瓦	4
合計		1727			



第3面

第3面で検出した遺構は遺物を伴うものがほとんどないが、埋土は褐灰色から黒褐色シルトであることから、これまでの5次1区・2区、6次3区第3面で検出した遺構の時期と同じ弥生時代を中心とする時期と考える。検出したピットのうち、3-SP09は埋土が灰黄色砂であり、第1面もしくは第2面の掘り残しの可能性がある。

3-SD01

(写真図版50-5)

2-SD06の下位にあたる位置で検出した。第2面で検出した2-SD04につながるように湾曲して南に延びる。調査区西部は地山の検出レベルが高く、第2面と第3面の差は6cmしかなく、埋土が共通することからもこれらは一連の遺構と考えられる。検出規模で延長9.8m、幅は最大で1.3mを測る。深さは遺構検出面から11～18cmを測る。遺物が出土していないため、厳密な時期は不明であるが、溝の様相は4次下層SD01と類似している。

遺構に
伴わない遺物

(遺物図版65)

(写真図版137-142-143)

第1面から第2面を掘り上げる過程で多くの遺物が出土した。土師器杯1254、須恵器杯A1255～1257、須恵器杯B蓋1258、須恵器杯B1259・1260、須恵器高杯1261、土師器甗1262、土錘1263、土師器高杯1264、土師器甕1265、須恵器甕1266等が出土した。これらの遺物も2-SD01、2-SD02、2-SX01と同時期に位置づけられる。1267と1268は古大内式系の単弁十四葉蓮華文軒丸瓦で、子葉先端に切り込みがあるのを特徴とする。この2点は、第1面検出時に1267は2-SX01の上部、1268は2-SD02の上部にあたる場所から出土した。層位的には異なるが、本来はこれらの遺構に伴うものかもしれない。6次3区2-SD01の上層(第1面)から出土した1010も同じ古大内式系の軒丸瓦であり、出土位置が重なっていることからその蓋然性は高い。しかし、これらの遺構内から瓦片の出土はわずかながらあるものの、軒瓦類が一切出土していないことから、確証はもてない。

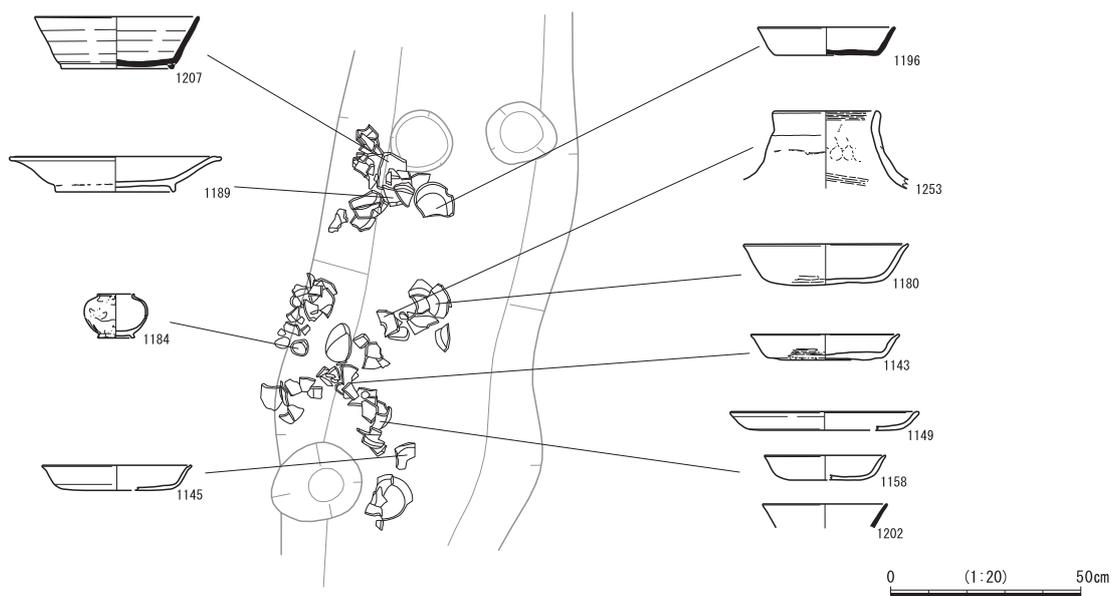


图68 6次4区2-SX01平・断面図、三彩小壺周辺遺物出土状況

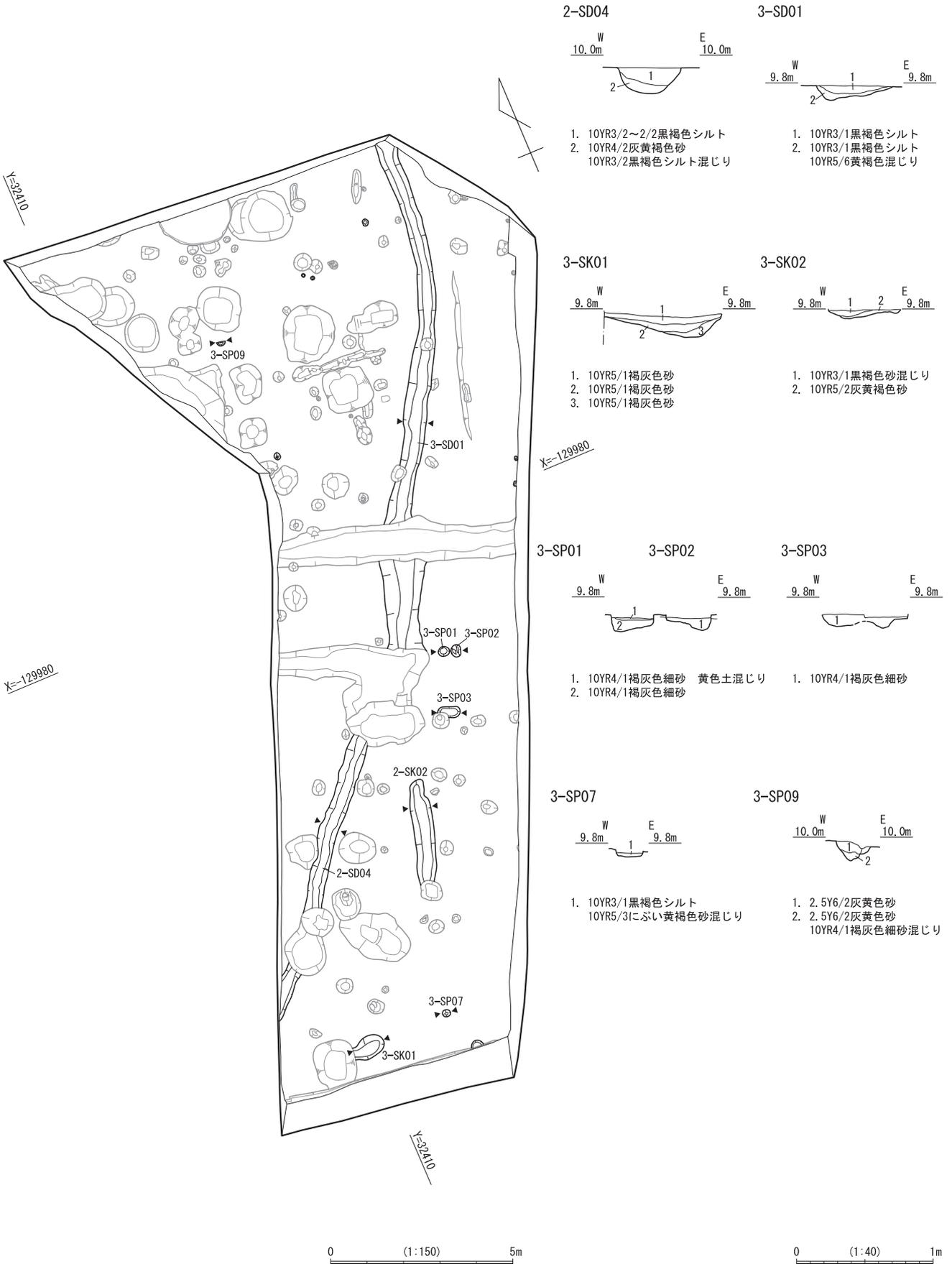


図69 6次4区第3面平面図、2-SD04・3-SD01、3-SK01・3-SK02、3-SP01・3-SP03・3-SP07・3-SP09断面図

8次1区

(写真図版51-53)

5次3区の北側、6次2区の東側にあたる調査区である。区画整理道路内の換地にあたる部分で、南北約32m、東西約63mを調査した。調査区の基本層序は盛土、耕土(1層)、旧耕土(2層)を経て黄灰色シルトもしくは砂礫の地山に至る。調査時の地表面の標高は11.0～11.2m、地山の標高は9.6mである。調査区西部は旧耕土直下で流路SR01の埋土となる。これは4次、5次3区、6次2区で検出したSR01の延長部分にあたる。SR01以東は遺構が希薄となり、土取り痕と見られる不整形な掘り込みを確認した他、弥生土器を伴う土坑1基を検出した。調査区北壁沿いでは6次2区の続きと見られる柵跡を検出した。

SR01

(遺物図版66-68)
(写真図版52-2-4-194-196-211)

南北方向に走行する流路で、調査区の西部全域が該当する。検出規模で延長約30m、幅は最大で36m、深さは遺構検出面から最大で1mを測る。流路の西肩、東肩とも緩やかに落ち込み、調査区西端から東へ約15m付近が最も深い。最深部の標高は北端で7.69m、南端で7.39mである。東肩は幅8m程が深さ10cm程と浅く、埋土下位から杭の痕を多数検出した。西肩ではそうした状況はうかがえず、流路の東西で様相が異なっている。西肩付近では流路底で溝を検出した。調査区北端から3m程は輪郭が不明瞭であるが、それ以南で2条の溝(下層SD02)が確認できる。4次下層SD02の延長部にあたる。SR01の埋土は大きく上層(1～8層)と下層(9～12層)に分けることができる。上層はシルト及び砂・粗砂の互層で流水による堆積である。下層はシルト又は粘土である。

遺物は主として上層から出土した。陶器蓋1269、土師器皿A1270、須恵器皿A1271、須恵器杯A1272、墨書土器1273・1274、須恵器杯B1278～1283、須恵器杯B蓋1277、須恵器稜椀1275、須恵器稜椀蓋1276、須恵器壺1284～1286、須恵器壺1287、須恵器甕1288、土師器甕1289・1290、須恵器杯身1292、弥生土器壺1291・1293～1297、弥生土器高杯1298、弥生土器甕1299、土師器高杯1300～1302、弥生土器壺・甕の底部1303～1314等を図示した。また、流路埋没後の上面から木簡1325が出土した。1325の表面には「姫路たうふ町 あ古や惣兵衛様行 大坂より 大急ギ物」と墨書され、荷札木簡であることがわかる。側面脇に穿孔があり、これにより荷物に緊結されていたのであろう。調査地は木簡の宛先である豆腐町であり、「あ古や惣兵衛」の居住地は不明であるが、調査地付近に居住していた人物であろう。裏面にも墨書が認められるが、釈読不明である。時期は不明であるが、調査地点は明治21年以降に鉄道敷地となることからそれ以前のものと考えられる。

SR01の下層で、下層SD02や4次下層SD01・SD03の存在からSR01の全域は、弥生時代には凹地となっていたと見られる。その後、凹地が最終的に埋没したのが古代と考えられる。調査終盤に更に下層の状態を確認するために断割調査を実施し、立命館大学の青木哲哉氏の指導を受けた。調査区東部で検出した砂礫層(24層)が、姫路平野が形成される段階の扇状地を形成する砂礫である。砂礫の上面には河川堆積によって埋まっていく過程が明瞭に確認でき、豆腐町遺跡が形成される以前の状況を確認した。なお、図70の11層から出土した木材の放射性炭素による年代測定を実施し、 $3470 \pm 20BP$ の年代値が得られている(詳細は附章参照)。この年代値は縄文時代後期中葉に相当する(工藤2012)。分析対象とした試料は1点のみであるため、今後、複数の試料により検討していく必要はあるものの、豆腐町遺跡で地山と認識している堆積層の形成時期の一つの定点をおさえることができた。姫路駅周辺土地区画整理事業でこれまでに調査した市之郷遺跡でも「地山」内から縄文時代晩期の土器が出土している(姫路市教委2021)。こうした点から姫路駅から市

第三章 調査の成果

川に至る JR 線路沿いの平野部の最終的な形成時期は縄文時代後期から晩期にかけてであり、弥生時代以降その上面が生活の舞台となったことがわかる。

SR01 は 4 次調査区、5 次 3 区、6 次 2 区で検出した遺構と接続し、県教委が調査した豆腐町 I でも確認できる。それらを含めた総延長は 102 m で、幅は最大 36 m である。流路の走行方向は概ね N 20° E 前後であり、飾磨郡条里に近い。自然流路であることから飾磨郡条里との関連は不明であるが、この流路より西側の調査区では条里方向に沿った遺構が多く、後述する東部地区の様相とは異なっている。このように本流路は東部地区と西部地区を物理的に分断する可能性を有す。これまでの調査では橋脚等の痕跡は確認しておらず、4 次調査区で述べたように古代には流路というよりもむしろ凹地になっていたと思われる。流路の東側は遺構が希薄である。削平された可能性もあるが、遺物もほとんど出土しないことから、当初から遺構が希薄であった可能性が高い。図示の対象とした遺物は図 70 に示すように SR01 の西側から中央までで、東側からの出土はない。このことから遺物の供給源が西側にあることが確認できる。また、流路方向に沿っては、流路の北から南へかけて万遍なく遺物の出土が確認できる。流路の走行方向に沿って遺物が分散した状態で確認できることは、調査を行った 4 次や 6 次 2 区のみだけでなく、その北側にあたる流路西肩の上流にあった遺物が流されてきた可能性が高い。遺物が基本的に単体で見つかることも、周辺からまとめて投棄されたものではないことを示す。ただ、遺物には摩滅が少ないことから近接した位置に供給源が想定できる。むしろ遺物に大きな時期差が認められないことから一気に埋没したと考えられる。SR01 の遺物出土状況から調査区北側に遺跡が広がっていた可能性を指摘できる。

下層SD02
(遺物図版68)

SR01 の下層で検出した南北方向に延びる溝である。4 次調査区下層 SD02 の延長部分である。検出規模で延長 22 m、幅は最大で 2 m を測る。断面は皿状を呈し、深さは 10cm 前後である。下層 SD02 からは弥生土器壺 1315 ~ 1320 等が出土した。1315 は口縁端部内面に突帯を有し、1316 は内面に突帯により加飾する。1317 は頸部に削り出しの三角突帯が 6 条確認できる。これらの遺物は弥生時代中期初頭に位置づけられる。下層 SD02 の南側の続きとみられる 4 次下層 SD02 では弥生時代後期の遺物が主に出土した。これらが一連の遺構であるとすれば、やや時期幅を持っている。下層 SD01 の続きにあたる 4 次下層 SD01 は弥生時代前期～中期初頭の遺物が出土し、後期のものを若干含んでいる。4 次調査区では、これらの溝はそれぞれ独立したものと認識し、個別の時期を想定していたが、8 次 1 区の調査成果から判断すれば、SR01 下層で検出した溝は同時併存していた可能性が高い。

SK02
(遺物図版68)
(写真図版52-1)

調査区東部で検出した土坑である。円形を呈し、直径は 1.4 m、深さは遺構検出面から 60cm を測る。埋土は大きく 2 層に分かれ、上層、下層とも遺物が出土した。そのうち下層から出土した弥生土器壺 1321・1322、弥生土器甕 1323・1324 を図示した。1323 は右上がりの平行タタキを胴部外面に施すタタキ甕である。弥生時代後期に位置づけられる。

本遺構の周辺には不整形な掘り込みが確認されたが、いずれも埋土が SK02 とは異なる。遺物が出土していないため、断定はできないが、江戸時代頃の土取り痕と想定する。

SA01

調査区北壁に沿って東西方向に 17 基のピットが並ぶ。埋土は新しく、近代から現代に位置づけられる。6 次 2 区でもこの延長と見られる柵を検出している。検出規模で延長 21.7 m を測る。6 次 2 区で述べたように、駅構内と外部との敷地境界に近いことから、姫路駅に關係する可能性のある遺構として報告しておく。

杭跡
(写真図版51-1)

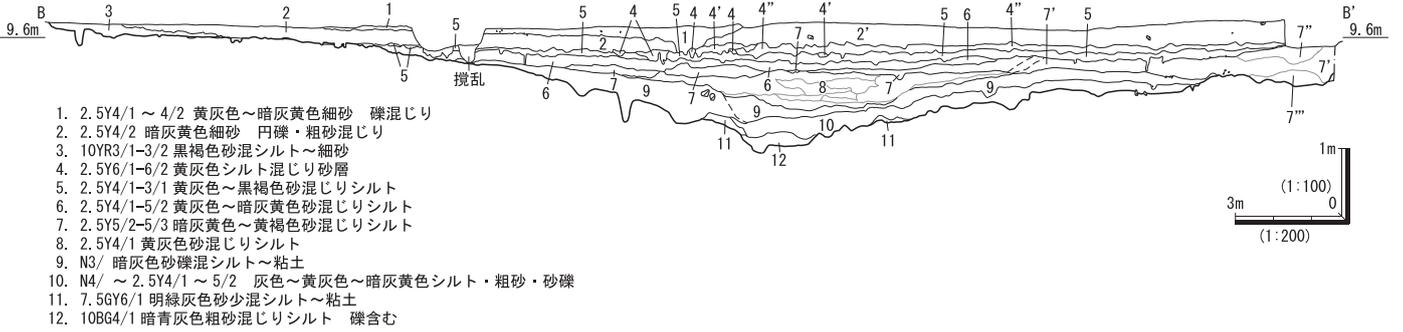
SR01 の東肩の一段浅くなった位置から多く杭跡を検出した。杭跡は直径 10 ~ 15cm で、深さは 12 ~ 22cm である。ランダムに配置され、性格は不明である。遺物は出土していない。



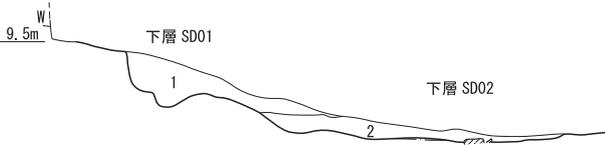
図70 8次1区平面図、北壁土層断面図

第三章 調査の成果

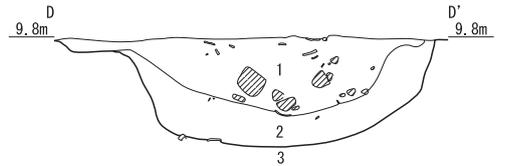
SR01



下層SD01・SD02



SK02



0 (1:40) 1m



1. 2.5Y4/1 黄灰色細砂
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂

0 (1:300) 10m

図71 8次1区SR01遺物出土分布図、8次1区SR01、下層SD01・下層SD02、SK02、ピット断面

第3節 東部地区の遺構と遺物

5次4区・5区、6次1区・5区、7次1区・2区・3区、8次2区・3区が該当する。このうち、5次4区・5区、6次5区は区画整理道路に伴う調査で、6次1区、7次1区・2区・3区、8次2区・3区が駅ビル部分（現ピオレ姫路）の調査である。区画整理道路部分は幅10mで、高架基礎の影響を受けていない範囲では遺構が確認できる。駅ビル部分は幅約31mで、遺構の広がりや明確に把握することができる。

検出した遺構は、道路跡、建物跡、井戸跡、土坑、柱穴等である。東部地区で検出した遺構の最大の特徴は正方位を志向する点である。正東西方向に延びる道路を基軸に、道路両側に計画的に配置された建物群が存在する。道路遺構は姫路市の調査範囲でしか検出していないが、兵庫県が調査した「豆腐町Ⅲ次」においても検出した井戸の配置から当該部に道路が延びていた可能性が指摘されている。道路遺構は7次3区で区画溝SD02によって分断される。道路と区画溝とは直交し、区画溝は道路の南側で角度を変える。このことから道路と区画溝も計画的に配置されたものであることがわかる。道路と溝との交点では橋脚が確認できる。建物跡は道路を挟んで南北両側で検出され、空地を挟みながら連続して続く。井戸は建物群とセットで構築され、建物の背後にあたる位置で検出されるものが多い。東部地区で検出した建物跡は21棟で、井戸は9基である。単純に遺構数で比較しても建物跡に比べて井戸が多いことがわかる。また、井戸の構造は井籠型、縦板組、横板組、曲物組等様々で、井戸構築にあたって明確な規範は存在しない。個別の建物跡と井戸の共存関係については断定できないが、複数の建物が一単位となり、そこに井戸が付属する景観を復元できる。こうした遺構の配置の必然性は不明であるが、遺跡における活動と密接に関わっているものと想定できる。

東部地区のうち、最大の調査区である「豆腐町Ⅲ次」では道路遺構や建物跡は確認できていない。これは江戸時代の土取り痕による影響もあるが、根本的な要因は、調査地の東部の地形が西部に比べて高いため、建物跡の柱穴等が後世の耕作等により削平されやすいためである。微高地にあたることから調査区東部の方が、本来の立地環境は良好である。これに対して西側は微凹地にあたる。遺構が集中して検出されたものの、本来は東側よりも立地環境は悪い。特に6次1区で検出したSR01は弥生時代から古墳時代にかけての旧流路で、埋没後も不安定な地盤であった。この旧流路上面では、そうした環境を克服し、活動の場に変換させようとするために施工された整地層を確認している。このように東部地区では、地形的に条件の良い微高地上だけではなく、微凹地部分を改良し、積極的に開発しようとしたことがわかる。

遺物の大半は微凹地側から出土した。出土状況から整地層に含まれるものと微凹地における活動に伴うものの2者が本来は存在する。ただ、両者の様相は酷似していることから厳密には区別できない。遺物の大半は、土師器食膳具、須恵器食膳具、土師器調理具で、製塩土器、須恵器貯蔵具がこれに次ぐ。奈良三彩小壺が2点出土している点は特筆される。また、漆附着土器、墨書土器も多く出土している。これらに比べて量は少ないものの転用硯、煤や油煙の附着した土器、鞆羽口、紡錘車等も出土し、豆腐町遺跡が生業に関わる遺跡であることを示している。その他、一括資料も多数得られるとともに、年代を押さえることのできる資料にも恵まれた。5次4区SE01では井戸底から天平宝字4年（760年）初鑄の萬年通宝が出土した。5次5区SE01からは天平勝宝九歳（757年）以降に書かれた漆紙文書とともにまとまった量の遺物が出土している。

遺跡のピークは奈良時代中頃から後半にかけてで、その後は顕著な活動痕跡は認められない。耕土層が確認できることから耕作地として利用されていたと推測できる。次に活動痕跡が残されるのは江戸時代になってからである。当該時期には、調査地一帯は姫路城の郊外に広がる耕作地であり、耕作土の下位には不整形の土坑が連続して掘られ、広い範囲で土取が行われていたことが判明した。

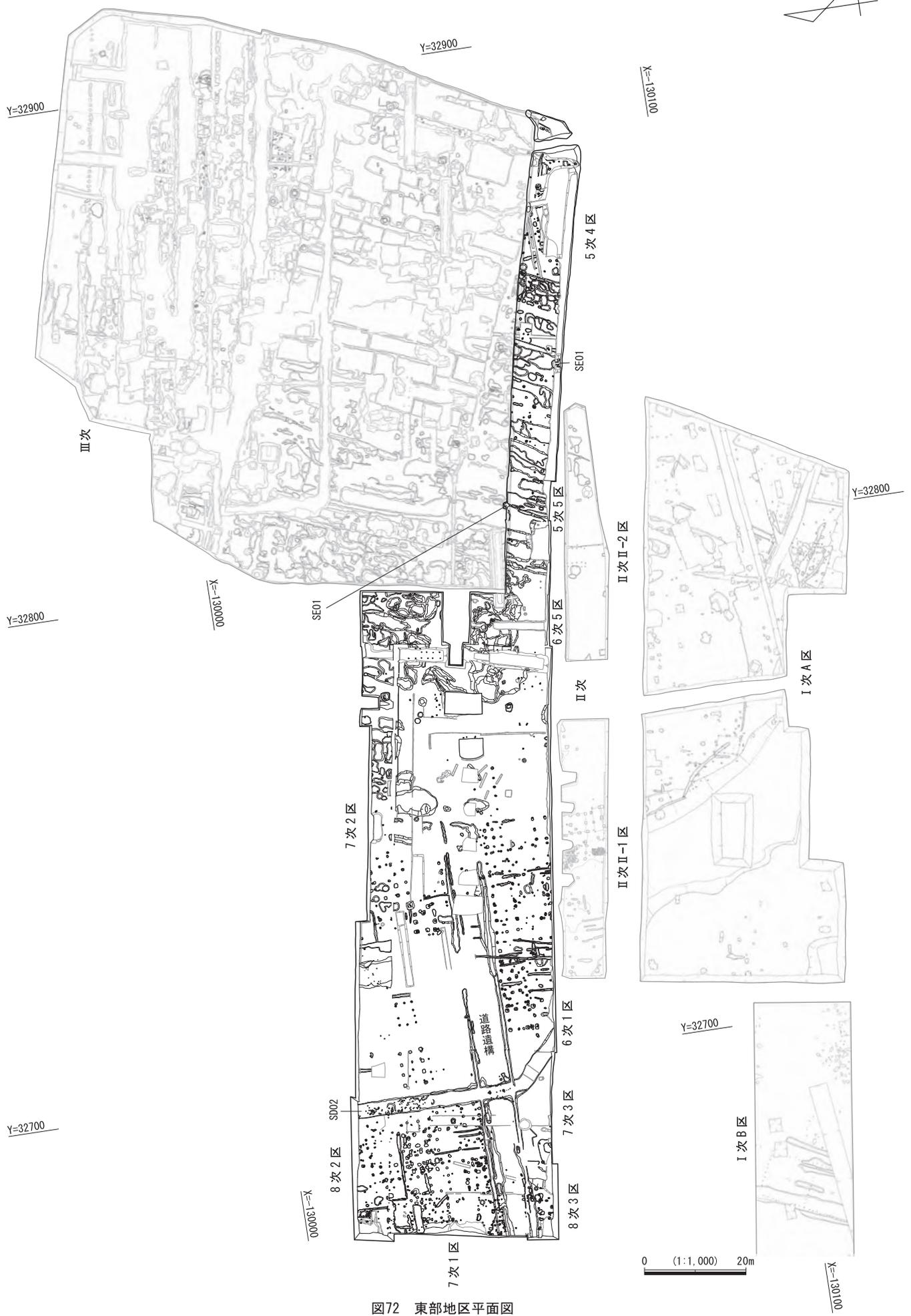


图72 東部地区平面图

5次4区

(写真図版54-62)

市道城南159号線の整備に先立ち調査した。東西に長い調査区で延長73.5m、幅員10mを調査した。5次4区と5区とは一連であるが、工事用車両の出入口の関係で個別に調査した。第4次調査に伴い実施した確認調査により遺構を確認したことから調査対象範囲とした。調査区の南端は在来線の高架工事により攪乱を受けていたが、井戸等の深い遺構は残存していた。調査区の基本層序は、盛土、耕土(1層)、旧耕土(2層)を経て地山に至る。調査時の地表面の標高は概ね11.1mと一定であるが、地山の検出レベルには凸凹が認められる。SB01を検出した付近の地山が最も高く、標高約10.6mである。SK63付近から西側は地山が約60cm下がり、標高は概ね10mとなる。地山の高い場所では、削平を免れた古代の遺構が良好に確認できた。対して、標高10m前後の地点では耕作地であったためか土坑、井戸を除くと古代の遺構は確認できていない。このように地形の凸凹により遺構の検出状況に差が認められる。姫路城下町跡では、基本的に現地表面の50cm下で江戸時代の整地層あるいは生活面が確認され、0.8~1m下に厚さ10~20cmの中世耕土があり、その下が黄褐色土もしくは砂礫の地山となる。この状況はSK63以西の状況と類似することから、地形によって後世の活動の影響度が異なり、古代以前の遺構が検出されやすい条件が存在することが判明する。第Ⅲ章で述べたように、城下町下層に古代の遺構の広がり確認されつつあるが、調査件数に比べて確認される遺構数は少ないように思われる。当初から遺構の粗密は存在するのであろうが、5次4区における遺構検出状況は、こうした微地形に遺構の残存状況が影響されることを如実に示している。

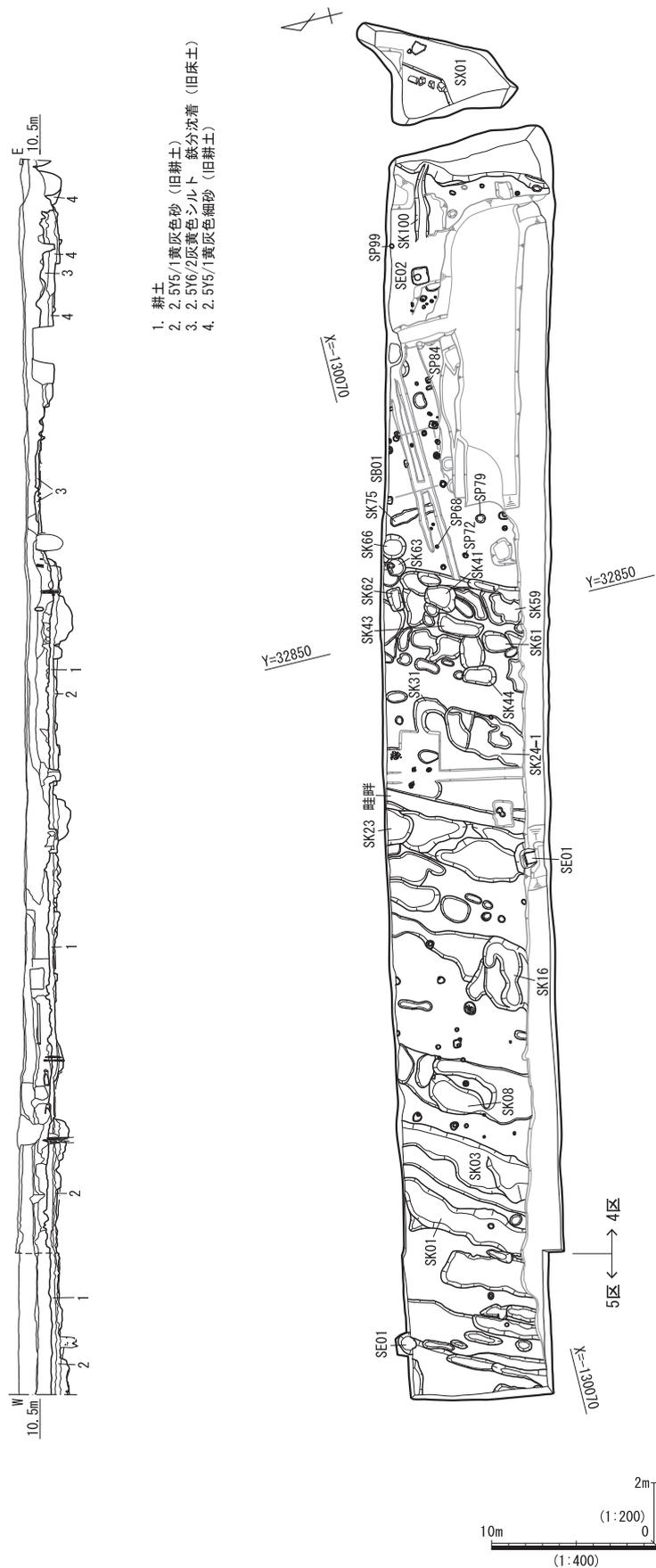


図73 5次4区・5区平面図、北壁土層断面図

調査区では多くの遺構を検出したが、SB01、SE01、SE02、SK62、SK63を除くとその他は全て江戸時代の遺構である。しかし、出土する遺物の大半は奈良時代のものであり、本来の帰属時期を示す近世陶磁器の出土は極めて少ない。古代の遺物については一見すると原位置を保っているように見える遺構も存在する。この状況は、調査地が江戸時代には耕作地であったため、生活に必要な陶磁器類が持ち込まれることは少なく、逆に古代の遺物は耕作の邪魔になることからまとめて埋められたものと考えられる。このように見ると、古代の遺構に不整形のものはほとんどなく、不整形な遺構は後世の遺構と認識できる。当該地が耕作地であったことを裏付ける根拠は、調査区断面で検出できる耕土層とSE01の東とSK63の東にある畦畔、調査区東端の溜池の存在である。SE01東側の畦畔は地山の東西を掘り込んだもので、畦畔部分のみ高く残されている。

SE01

(遺物図版69-70)
(写真図版56-57-1-3、
138-162-197-212-217)

調査区西寄りの南壁沿いで検出した。遺構の南半分は鉄道高架事業により攪乱を受けていたが、北半分及び底面は遺存していた。掘方は隅丸方形を呈し、残存範囲は上面で一辺約1.6m、下面で1.15mである。深さは遺構検出面から1.7mで、底面の標高は8.4mである。掘方中央に井籠組の井側を設置する。井側の内寸は一辺0.65mである。井側の上部は土壌化のため確認できなかったが、下層では6段分の部材が確認できた。部材は長さ82～101cm、幅14～16.5cmのスギ材を用い、両端の上下に組み合わせるための柄穴を設けている（写真図版212、第Ⅶ章参照）。井側の下3段分の部材の裏込めには机の天板1350を噛ませている。攪乱のため井側内上部の埋土は残っていなかったが、井側下層の埋土は残存しており、内部から良好な状態で遺物が出土した。

遺物は調査の過程で3段階に分けて取り上げを行った。一段目は須恵器甕1340の破片が井側内全域に敷き詰められた状態であった。1340は胴部の破片のみで口縁部の破片は見つかっておらず、攪乱を受けた上層に含まれていたのかもしれない。1340を取上げた後、磔と土師器甕を検出したレベルを2段目とした。こぶし大の磔に混じって土師器甕1331・1337が出土した。3段目は井戸底の直上にあたる。井桁に沿ってこぶし大の磔を検出し、その内側で土師器甕1334・1335・1336等の破片を平面的に検出した。2段目までは廃絶に伴い、井戸内に廃棄された遺物と考えられるが、3段目の検出状況は、破片を井戸底に敷いたようにも見え、上層とは出土状況が異なっている。3段目の埋土は全量篩にかけ、土師器杯1327、土師器甕1332、土錘1345等が出土した。3段目の下が井戸底となるが、底面は自然堆積の砂で、砂に沈みこむ形で土錘1346、その傍から和同開珎1348が出土した。1348から約35cm南で砂に突き刺さった状態で萬年通寶1349が出土した。

遺物は、「福万」の墨書のある須恵器杯か皿の底部1326、土師器杯1327、土師器甕1328～1337、土師器把手1338、須恵器甕1339・1340、製塩土器1341～1344、土錘1345～1347、銭貨1348・1349、机天板1350等が出土した。1350の机天板はヒノキ製で、長手の片側は割かれ、小口側の一端は削られている。表裏とも刀子等の痕跡が明瞭に残る。脚部分は残存していないが、柄で接合し、さらに柄穴間を釘で固定していたと推測する。自然遺物としてモモ核5点が出土している（第Ⅶ章第2節参照）。最下層で萬年通寶（初鑄760年）が出土したことから、760年以降にも井戸が機能していたことがわかる。その後、廃絶に伴い一気に埋められたことから上限をおさえることのできる一括資料である。図示に耐える遺物はほぼ掲載した。上層を欠くことから当初の組成をそのまま示しているかどうかは不明であるが、食膳具に比べて煮炊具が多いのが本遺構の特徴である。本遺構からは図示したものを含めて5点の漆附着土器が出土しているが、内4点は土師器甕であり、漆工工程の「くろめる」作業が遺構近辺で行われていた可能性も考えられる。

完掘平面図（最下層）

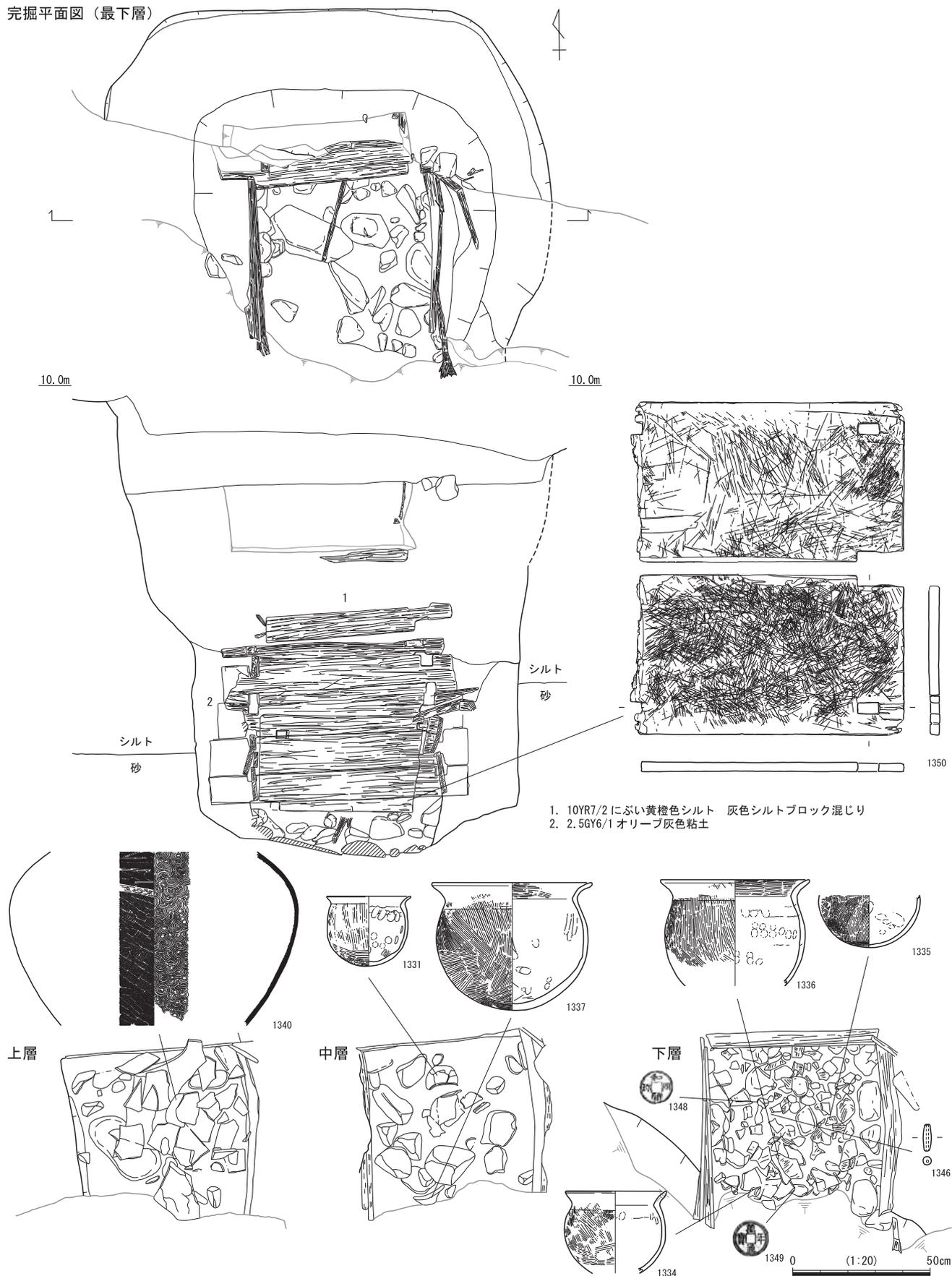


図74 5次4区SE01平・断面図、遺物出土状況図

SE02

(遺物図版71)
(写真図版57-4・58-163・212)

調査区東部で検出した井戸である。掘方は隅丸方形を呈し、一辺約1mを測る。遺構上面は攪乱を受けていたため、本来の遺構検出面よりも約50cm下がった状態で検出した。深さは遺構検出面から1.55mで、底面の標高は8.6mである。検出時点では柱穴の可能性を考えていたが、平面の段下げを行い、35cm程掘り下げた時点で、掘方中央やや北寄りに直径約40cmの円形プランを確認した。内側を掘り下げた段階で土師器杯A 1351と周囲に円形に巡る木質を確認したところから、柱穴ではなく、井戸と判断した。木質は土壌化しつつあり、内部を更に掘り下げたが、物理的に内部の調査が限界に達したため、半裁に切り替えた。曲物の残存を意識しながら掘方内を掘り下げた。曲物は遺構検出面から深さ75cm以下は良好に残存していた。断ち割りとは並行して内部も掘り下げ、杯A 1351の下から須恵器杯B 1353、更に下位から須恵器杯A 1352が、その直下から土師器甕 1358が出土した。曲物の直径は概ね35cmで、3段分残存しており、その外側に添え板と円礫を噛ますことで曲物が重なるように調整していた。再下段の曲物はアスナロを用い、内面に斜格子状に切れ目を入れ円形に加工し、桜樹皮により緊結していた(第七章第3節参照)。上段の2つの曲物については樹種同定を行っていないが、肉眼観察では最下段の曲物と明確な差は認められないことから、同じ材を使用したものと推測する。曲物の高さはいずれも25cmで、掘方内に残る痕跡を勘案すれば、本来曲物を7段程度積んでいたとみられる。最下層から土師器甕 1359と1360が割れた状態で出土した。

遺物は、土師器杯A 1351、須恵器杯A 1352、須恵器杯B 1353、製塩土器 1354、土師器甕 1355～1360等が出土した。1352は底部外面に「九」の墨書がある。

SB01

(遺物図版71)
(写真図版59-1・3)

SE02の西8mの位置で検出した。調査区外に広がることから全容は不明であるが、検出規模で2間×2間、南北3.4m、東西3.6mを測る。SP77-SP80を基準とすると建物の主軸は真北と合致する。柱穴は基本的に隅丸方形を呈し、一辺44～50cmである。深さは24～68cmとばらつく。SP77とSP82は柱穴底に石を配している。柱間隔は東西方向SP80-SP82で西から1.8mの等間、南北方向SP77-SP80は3.4mで、攪乱のため本来あるべき間の柱穴を確認できていないが、2間分とすれば1間1.7mである。SP81は段下げ時に遺物の細片が出土したが、図示に耐えうるのはなかった。SP77の柱痕跡から製塩土器 1361・1362、SP86埋土から土師器甕 1363が出土した。

SK01

(遺物図版72)
(写真図版62-1)

調査区西端で検出した不整形の土坑である。調査区外に広がるが、検出規模で延長7.8m、幅2.25mを測る。土坑は緩やかに掘り込まれ、明確な肩をもたない。深さは20cm前後で凸凹がある。検出状況では北と南で2基の土坑の切り合いと捉えたが、最終的には切り合いではなく、埋戻す際の工程単位の差と判断した。北壁付近から奈良時代の遺物がまとまって出土しており、ここでは須恵器皿A 1364、製塩土器 1365を図示した。出土遺物からは、一見古代の遺構と思われるが、遺物内に江戸時代の磁器片を含むことから当該時期の遺構と判断した。以下に報告する遺構も同じ状況である。

SK03

(遺物図版72)
(写真図版62-1)

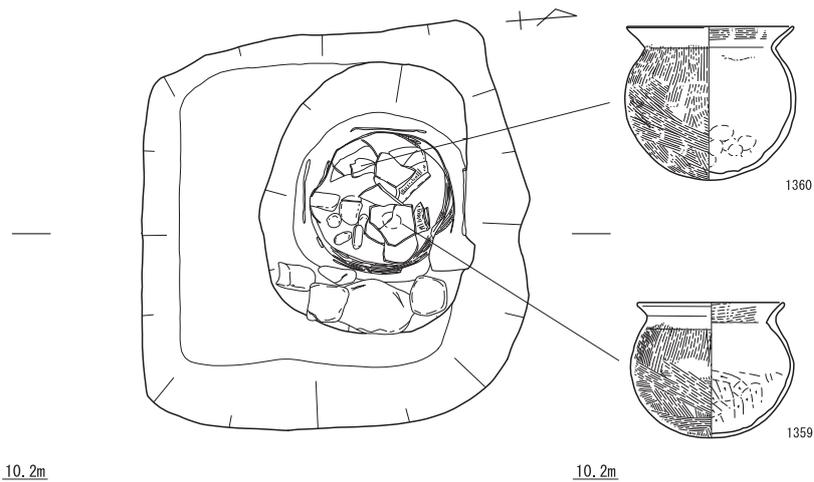
SK01の東で検出した不整形の土坑である。調査区外に広がるが、検出規模で延長7.9m、幅2.5mである。土坑の東肩は角度をもって掘り込まれるが、西側の掘方は緩やかである。土坑底では杭を検出したが、土坑の主軸とは合致しないことから時期が異なる可能性もある。埋土から奈良時代の遺物が出土した。須恵器杯B蓋 1366・1367、須恵器杯B 1368、須恵器短頸壺 1369を図示した。1367は蓋内面に墨痕が残り、転用硯である。

SK08

(遺物図版72)

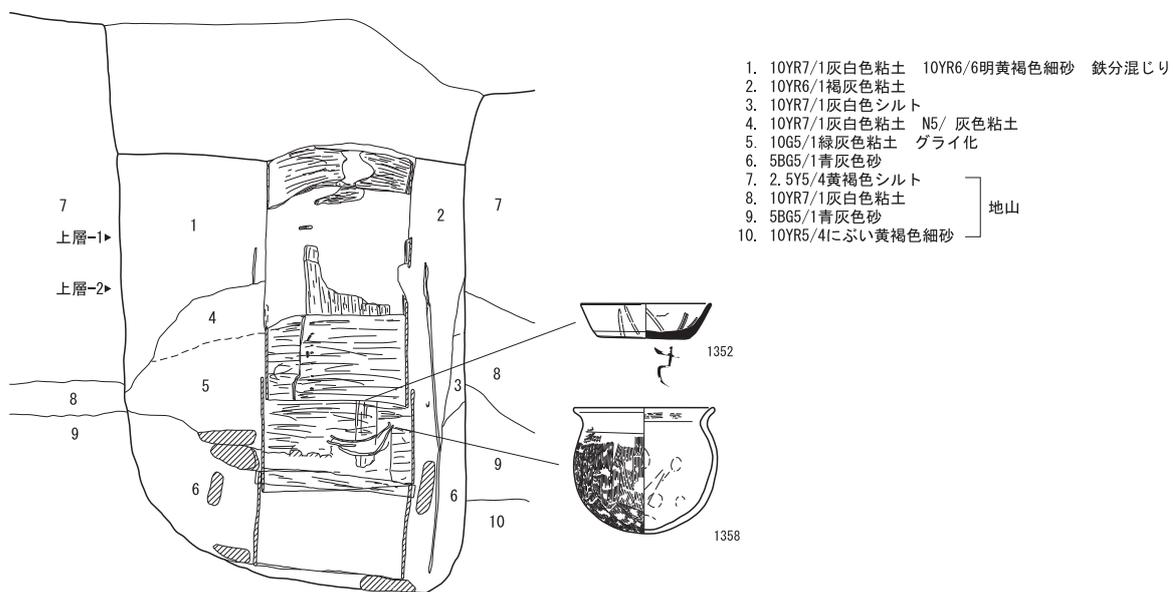
SK03の東1.1mで検出した不整形の土坑である。南北3.5m、東西1.8mを測り、深さは遺構検出面から22cmである。前述のSK01・SK03等、周辺の土坑と一連の作業で掘られた可能性が高い。ここでSK08とした範囲も個別の土坑として掘られたものではなく、全体

完掘（最下層）

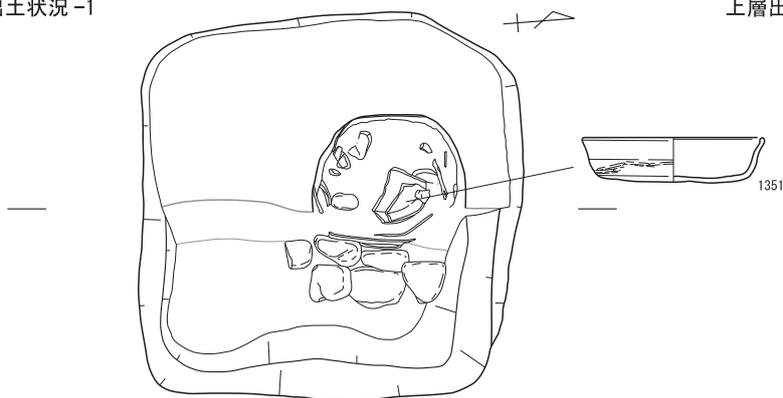


10.2m

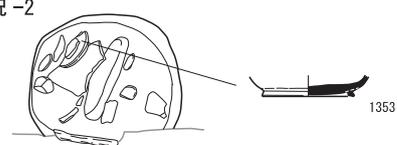
10.2m



上層出土状況-1



上層出土状況-2



0 (1:20) 50cm

図75 5次4区SE02平・断面図、遺物出土状況図

で大きな土取り痕と見る方が実態に近いのであろう。埋土から土師器杯 1370、須恵器皿 B 1371、平瓦 1372・1373 である。本遺構も出土遺物で図示に耐えうるものは奈良時代のものであるが、江戸時代の遺構である。

SK14

(遺物図版72)

SK08 の東約 5 m の位置で検出した南北に長い土坑である。南側を SK16 に切られている。調査区外に広がるが、検出規模で南北 5.6 m、東西 2.8 m を測る。深さは遺構検出面から 30 cm 前後で底面は凸凹がある。埋土から土師器杯 1374・1375、須恵器杯 B 蓋 1376、製塩土器 1377、土師器長胴甕 1378 等が出土した。残りの良い奈良時代の遺物を図示したが、遺構の時期は江戸時代である。

SK23

(遺物図版72)

SE01 の北の掘り込み全域が該当する。検出時点では、SE01 の上面を含め全域が同じ土砂で埋まり、南北に長い土坑として SK23 の番号を付した。埋土の掘り下げを行い最終的に 5 ヶ所の掘り込み単位に分かれた。検出規模は全域で南北 8.5 m、東西 3.35 m、深さは最も深い部分で遺構検出面から 50cm を測る。遺物は主として南側の SK23-1 と北側の SK23-3 から出土した。SK23-3 からは須恵器杯 B 1379、上層から須恵器壺 1382 が出土した。SK23-1 からは須恵器稜椀 1380、須恵器壺 1381、須恵器甕 1383、竈 1384 が出土した。1380 は漆が付着し、その他図示していないが 5 点の漆付着土器が出土している。SK23 の東には 90cm 程の幅で地山が直線的に掘り残された部分が存在する。畦畔と推測する。畦畔の方位は N 25° E である。

SK24

(遺物図版73)
(写真図版62-2)

畦畔をはさんで SK23 の東側で検出した南北方向の掘り込みである。調査区外に延びるため全容は不明であるが、検出規模で南北 8.4 m、東西 5.8 m を測る。深さは遺構検出面から 10cm 前後と浅く、SK24 下から集石遺構、SK31 などを検出した。集石は 3 か所で検出した。掘方は確認できず、性格等は不明である。集石はいずれも円形を呈し、直径 50 ~ 60cm を測る。遺物は集石中から土師器杯 1385、土師器杯 A 1386 が、南部の SK24-1 とした範囲から須恵器高杯 1387、須恵器壺 Q 1388 等が出土した。組成上は古代に位置づけられるものの、図示していないが近世陶磁器の細片が出土している。

SK28

SK23 の西 1.8 m で検出した埋桶遺構である。掘方は円形を呈し、長軸 55cm、短軸 48cm を測る。掘方内に直径 35cm、高さ 23cm の曲物を据えている。遺物は出土していないが、耕作に伴う遺構と考えられる。

SK31

(遺物図版73)

SK24 の下層で検出した。SK24 の作業単位の可能性もあるが、中央部が高まり、周囲が溝状を呈する。埋土は炭化物を含み、周辺の土取り痕の埋土と異なることから個別の遺構と判断した。西側は攪乱に、南側は SK36 に切られている。概ね延長 3 m で、幅は最大で 1 m、深さは遺構検出面から 15cm である。須恵器杯 B 1389、須恵器稜椀 1390、竈 1391 等が出土した。

SK41

(遺物図版73)
(写真図版61-4-5-62-3)

SK31 から東へ 1.6 m の位置で検出した土坑群の一つである。土坑群は南北 8.4 m、東西 6.0 m の範囲に掘られ、土坑はそれぞれ明確な掘方を持ち、個別に掘られたものと見られる。SK41 はその中の一つで、東端で検出した。南北 1.8 m、東西 1.5 m を測り、断面は鉢状を呈す。深さは遺構検出面から最大で 60cm である。埋土から四ツ目土錘 1392 が出土した。

SK43

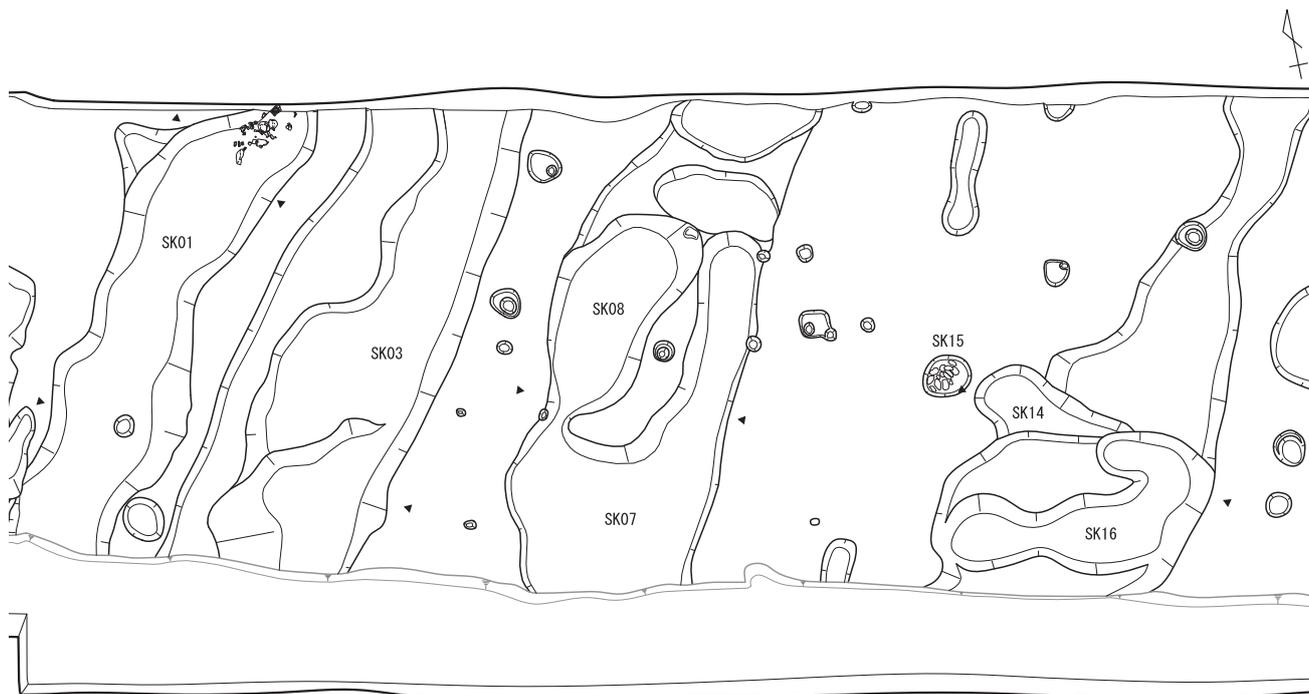
(遺物図版73)
(写真図版61-4-5-62-3)

SK41 の西で検出した南北に長い土坑である。南北 2.7 m、東西 1.1 m を測り、断面はやや深い皿状を呈する。深さは遺構検出面から 50cm である。土坑中央付近から礫と土器が集積して出土した。土器は破片が多く、土師器杯か椀の底部 1393 を図示した。

SK44

(遺物図版73)
(写真図版61-4-5-62-3)

SK41 の西 1.7 m で検出した。南北 1.9 m、東西 1.2 m、深さは遺構検出面から 22cm を測る。西肩は緩やかに掘り込まれ、東肩は急角度で立ち上がる。埋土から土師器皿 A 1394・1395、須恵器皿 A 1396 等が出土した。



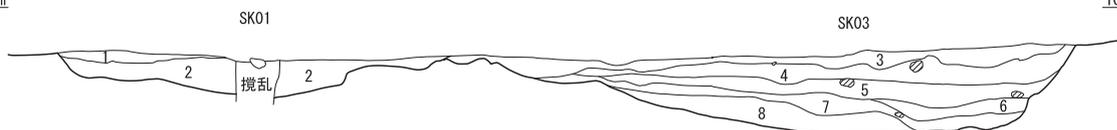
SK01

N 10.2m S 10.2m



SK01・SK03

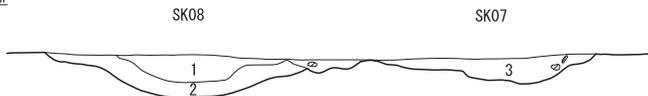
W 10.2m E 10.2m



- 1. N5/ 灰色細砂
- 2. 10YR5/6シルト細砂 N5/ 灰色細砂混じり
- 3. N5/ 灰色黄色細砂混じり
- 4. 2. 5Y6/6明黄褐色シルト N5/ 灰色細砂混じり
- 5. N5/ 灰色粗砂
- 6. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
- 7. N5/ 灰色土 地山互層
- 8. 10YR5/2灰黄褐色砂

SK07・SK08

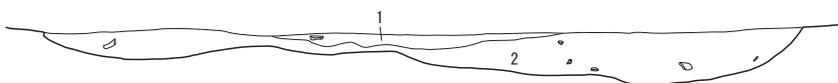
W 10.3m E 10.3m



- 1. 2. 5Y5/1黄灰色細砂 地山混じり SK08
- 2. 2. 5Y4/1黄灰色細砂 地山混じり SK08
- 3. 2. 5Y5/1黄灰色細砂 地山混じり SK07

SK14・SK16

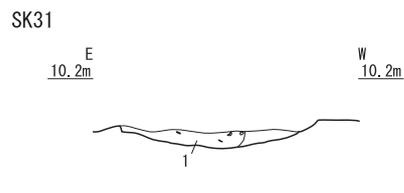
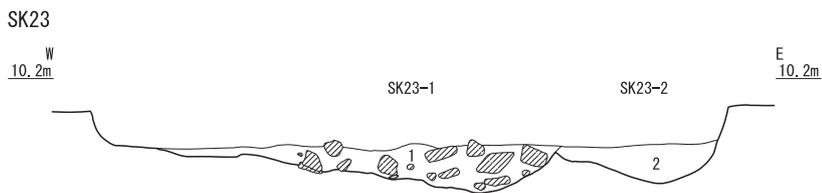
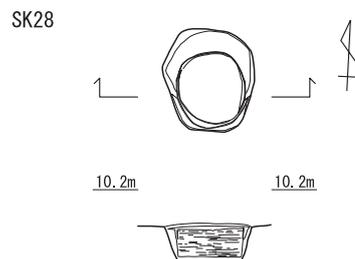
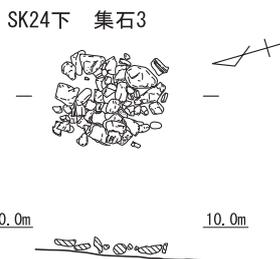
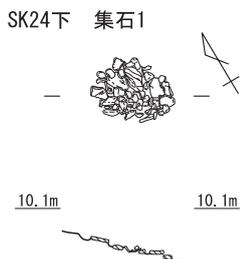
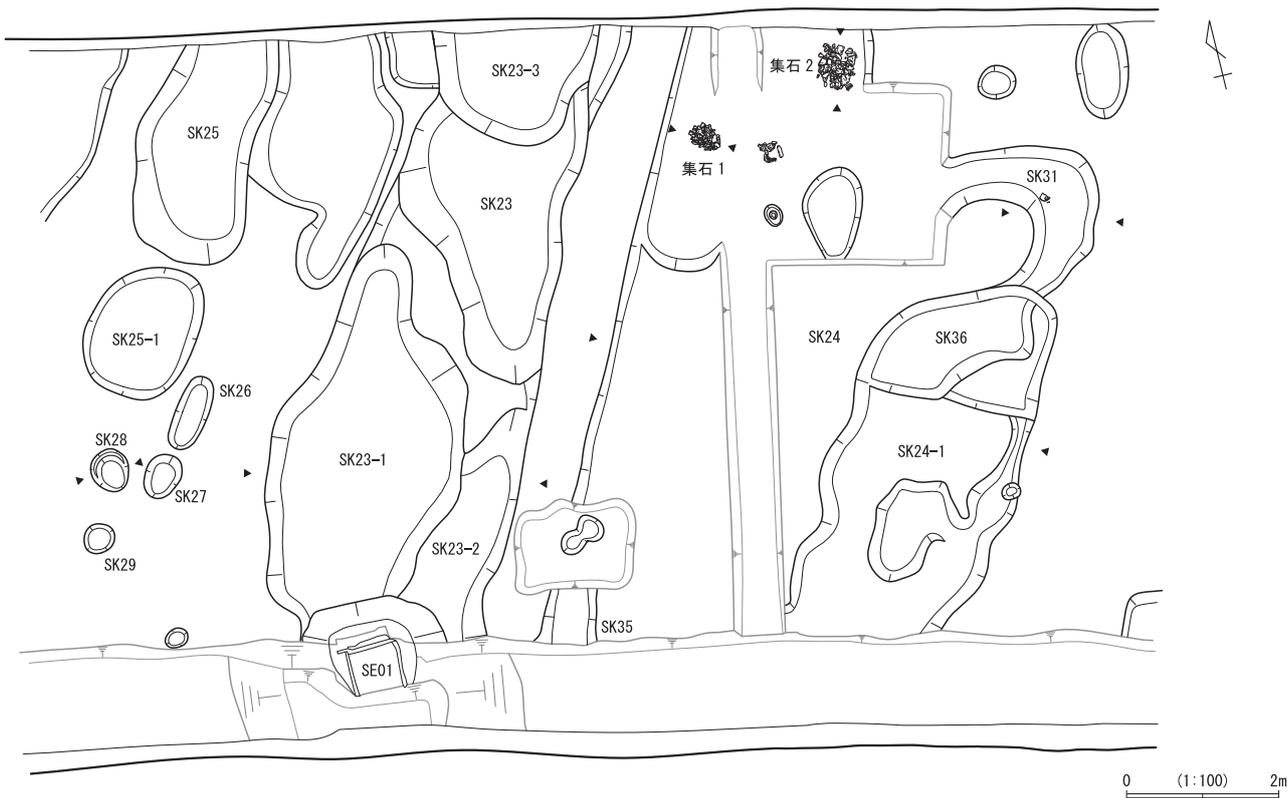
W 10.2m E 10.2m



- 1. 2. 5Y5/1黄灰色細砂
- 2. 2. 5Y5/1黄灰色細砂 地山混じり

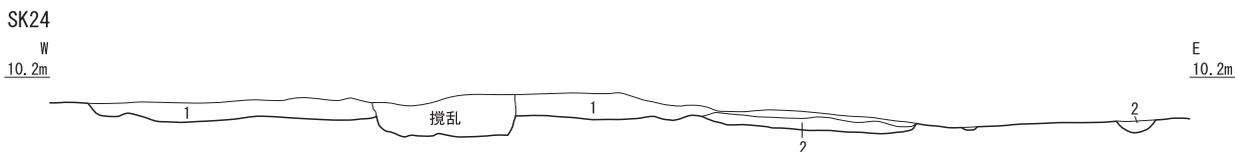
0 (1:40) 1m

図76 5次4区SK01・SK03・SK07・SK08・SK14・SK16平・断面図



- 1. 2.5Y4/1黄灰色砂 地山混じり
- 2. 2.5Y4/1黄灰色シルト 地山混じり

- 1. 10YR2/1黑色粘質土 地山混じり



- 1. 2.5Y5/1~4/1黄灰色砂 (耕土)
- 2. 2.5Y6/6明黄褐色細砂 地山・炭化物混じり

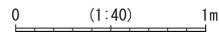


図77 5次4区SK23・SK24・SK24下集石1・集石3・SK28・SK31平・断面図

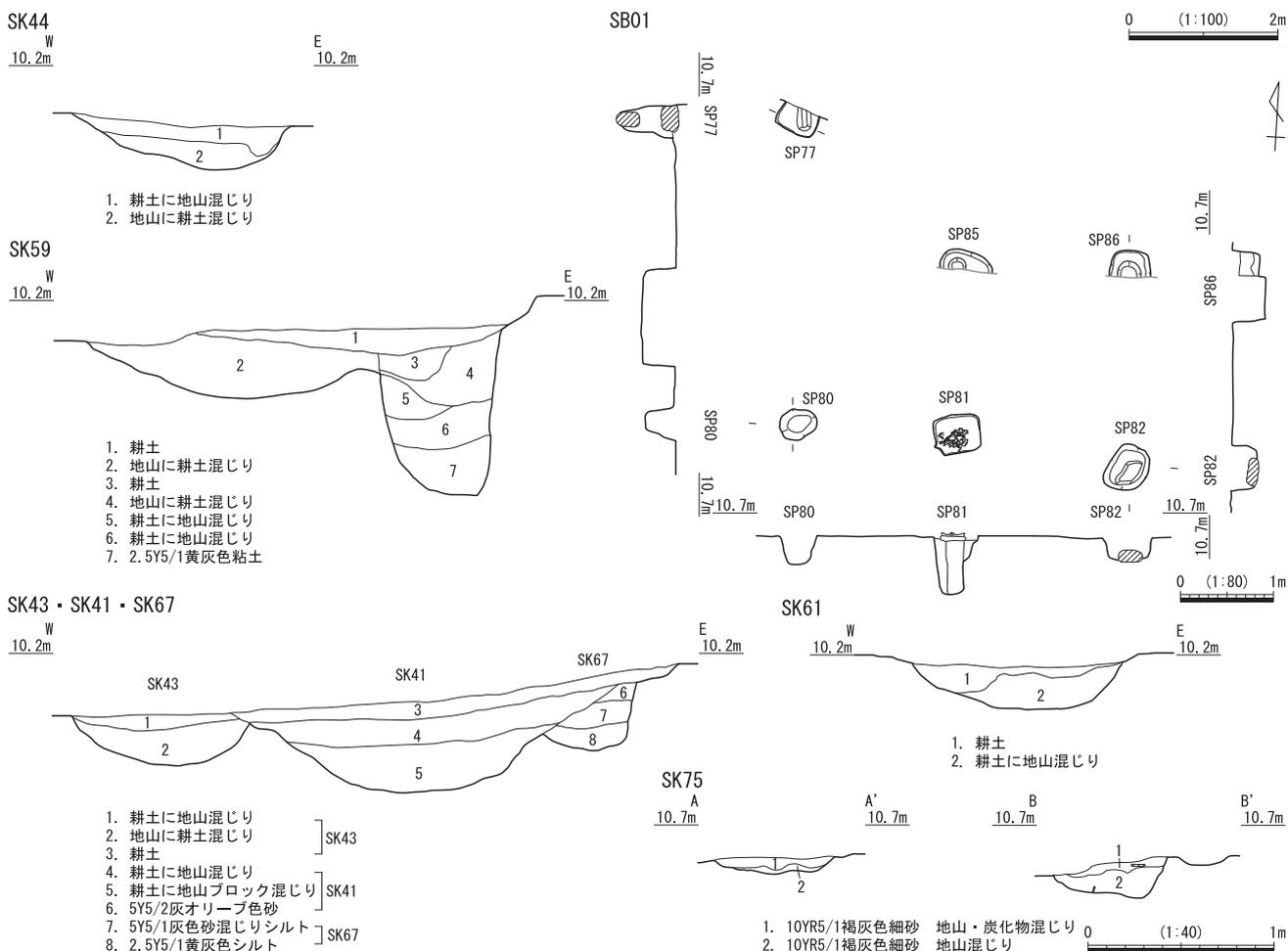
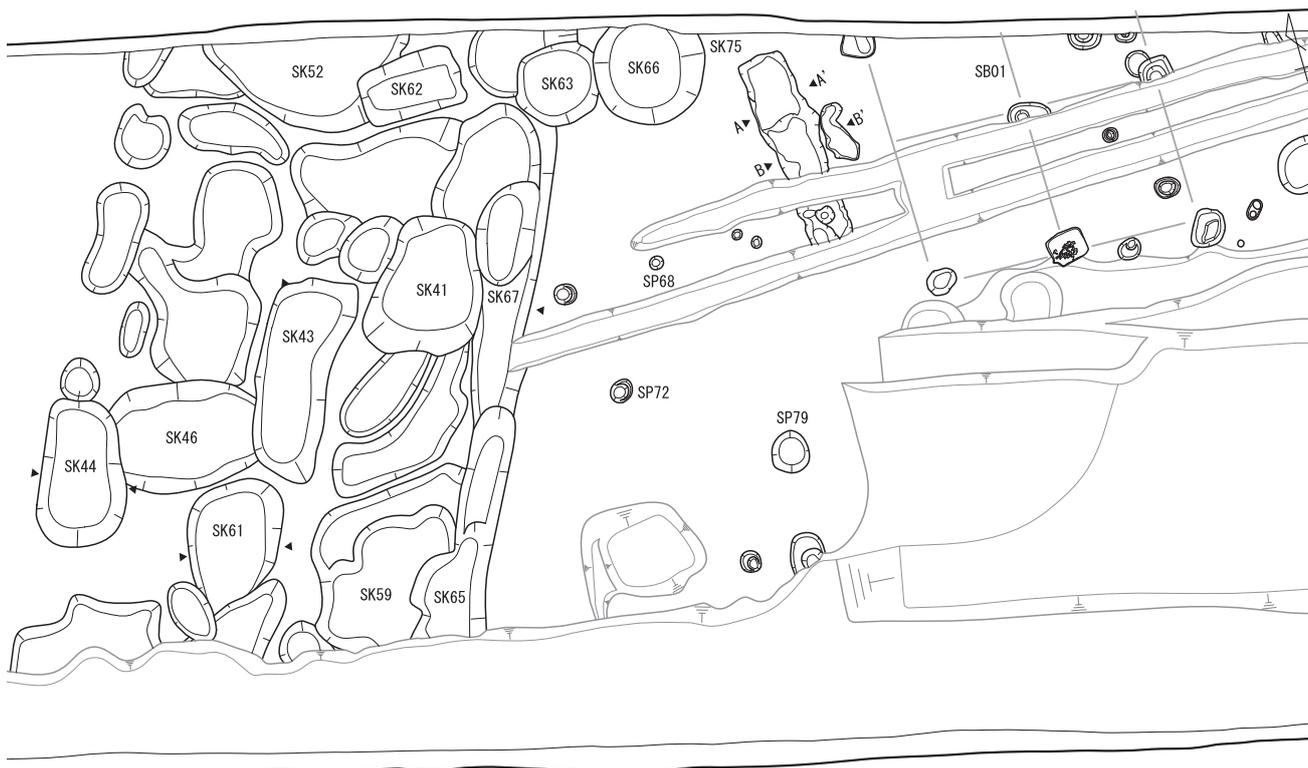


図78 5次4区SK41・SK43・SK44・SK59・SK61・SK67・SK75、SB01平・断面図

SK59

(遺物図版73)
(写真図版61-4-5-62-3)

SK41の南1.5mで検出した。検出規模で南北2.3m、東西2.4mを測る。検出時にはSK65を含む全域をSK59と認識したが、本来SK65とは切り合っている。埋土はほぼ耕土で、須恵器杯A 1397、須恵器稜椀 1398・1399、須恵器皿B 1400、須恵器高杯 1401等が出土した。

SK61

(遺物図版73)
(写真図版61-4-5-62-3)

SK59の西40cmで検出した南北に長軸をもつ土坑である。南北1.8m、東西1.25m、深さは遺構検出面から30cmを測り、断面は皿状を呈す。埋土から須恵器稜椀蓋 1402、土師器甕 1403等が出土した。SK41～61は切り合い関係から個別に掘られたことは確かであるが、全体としては、西はSK41、東はSK59及び下層のSK65を越えない幅6mの範囲におさまっている。このことからこれらの土坑群は一連のものであり、計画的に掘削されたものと考えられる。土坑内からは近世陶磁器片が出土していることから、これら一連の土坑群も江戸時代の土取りに伴うものとする。

SK62

(遺物図版74)
(写真図版61-61-14-135-164)

SK41の北約1.3mの位置で検出した隅丸長方形の土坑である。東西に長く、南北90cm、東西1.45m、深さは遺構検出面から概ね50cmを測る。遺構の主軸は正方位に直交する。検出した位置から当初はSK41をはじめとする近世の土坑群の一つと考えたが、埋土の様相が大きく異なっている。検出時点では土坑の縁に沿って炭化物が周回し、掘方の外周は白色に変色していた。炭化物のラインに沿って埋土を掘り下げ、炭化物及び焼土で構成される面を確認した。焼土層については土師器の焼成土坑等の可能性を考え、兵庫県立大学の森永速男氏に被熱温度の測定を依頼した。測定の結果、土坑内で800度程度の燃焼があったことが確認できた(附章参照)。また、土坑下部まで炭化物の単純層が複数存在することから、これらが意図的に構築された可能性が高い。ただ、土坑内で燃焼があったことは確実であるものの、当初想定した土師器の焼成遺構とするには、焼土中から須恵器等が出土する点、土師器の出土量が少なく、下層の埋土に製塩土器や須恵器等の様々な器種等を含んでいる点が矛盾する。出土遺物からは本土坑の機能を推測できるような傾向は認められず、目的は不明である。ただ、炭化物単純層は本土坑で生成されたものでないことから、別の供給源から本土坑内に持ち込まれ、敷き均されたことを意味し、周辺で火を使用した活動があったことをうかがわせる。

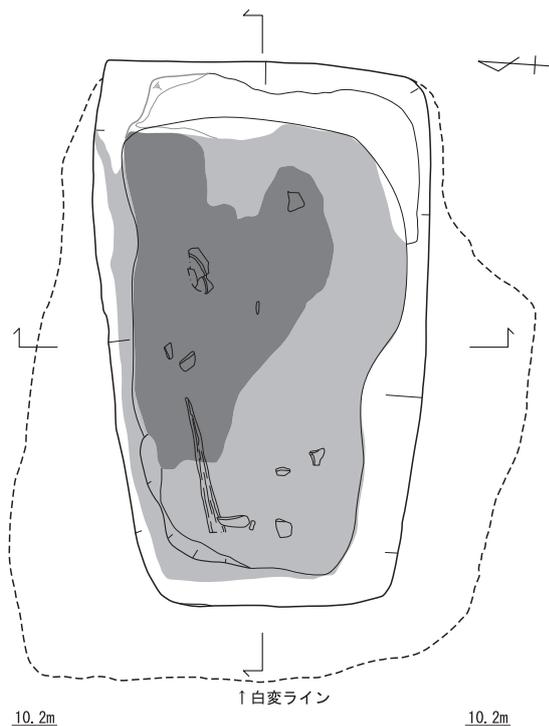
遺物は土師器皿A 1404、土師器杯A 1405～1407、土師器台付皿 1408、須恵器杯A 1409、須恵器杯B蓋 1410～1412、須恵器杯B 1413、須恵器稜椀 1414・1415、須恵器壺 1416、土師器甕 1417、土師器把手 1418、竈 1419、製塩土器 1420～1429等が出土した。埋土下層にあたる15～17層からモモ核が1点出土している(附章参照)。炭化物の篩選別により、漆紙文書2(写真図版135)が1点出土している。図示していないが漆付着土器も2点出土している。

SK63

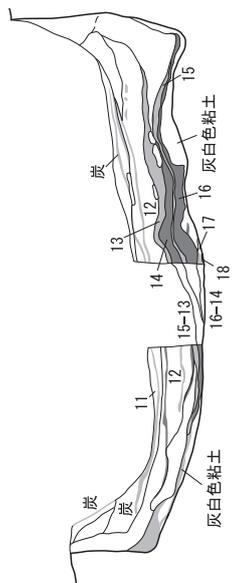
(遺物図版75)
(写真図版61-2-3-6-165)

SK62の東70cmの位置で検出した円形の土坑である。直径は1.1mを測り、遺構の西側がSK66に切られている。本遺構も検出時点でSK62と類似する炭化物を多く含む埋土である点から近世の土取り痕とは異なる性格が想定された。上層埋土には炭化物を多く含むが、遺構検出面から55cm掘り下げた時点で薄い炭化物の単純層を確認した。断ち割りにより、その下位に炭化物と白色シルトの互層を確認した。SK62に比べ炭化物層が薄い点が異なるが、土坑内に炭化物を敷き均し、下位が白色シルトと互層を為す点は共通している。炭化材にはマツ属とシイが確認できる(附章参照)。本遺構も掘方周辺の地山が白色に変色している。埋土から多くの遺物が出土した。炭化物層より上位の埋土から土師器杯 1431、須恵器甕 1438、製塩土器 1440～1443・1445・1447、土師器甕 1451、土師器長胴甕 1453、土師器把手 1452・1453、砥石 1454等が出土した。炭化物層より下層からは土師器杯 1430、土師器杯A 1434、須恵器杯B 1437、製塩土器 1444、竈 1448、土師器甕 1450等が出土した。

SK62

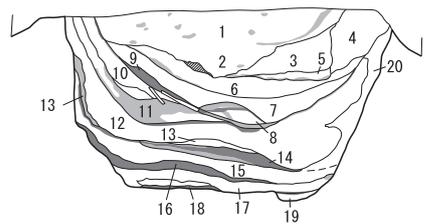


10.2m
10.2m

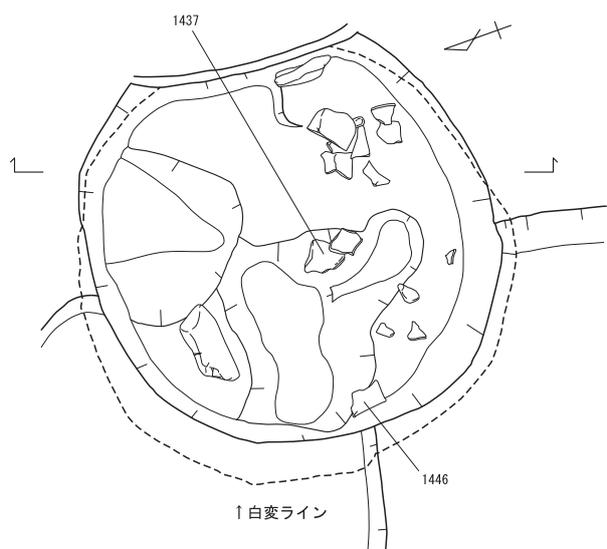


■ 焼土
■ 炭化物

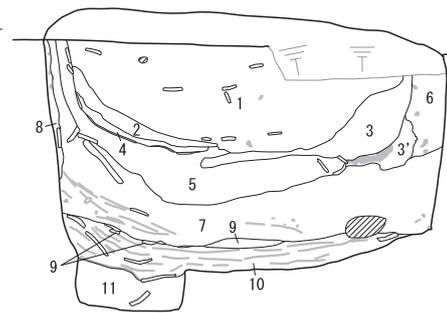
1. 10YR4/1褐灰色砂混じりシルト
2. 10YR4/1褐灰色シルト 炭化物含む
3. 2.5Y4/4オリーブ褐色~10YR4/4褐色砂ブロック混じり
4. 10YR4/1褐灰色シルト 炭粒・土器含む
5. 10YR5/2~4/2灰黄褐色シルト (均質)
6. 10YR4/1褐灰色シルト黄色粘土
7. 10YR4/1褐灰色砂混じりシルト
8. 2.5Y7/1灰白色粘土
9. 焼土赤化面
10. 2.5Y7/1灰白色粘土
11. 炭化物層 内側に焼土ブロック含む
12. 2.5Y7/1灰白色粘土 炭化物・黄色土ブロック混じり
13. 灰層
14. 5YR5/2灰褐色粘土
15. 灰層
16. 有機質
17. 炭化物層 下に白色粘土
18. 有機質
19. 10YR4/1褐灰色粘土
20. 10YR4/1褐灰色粘土



SK63



10.3m



■ 炭化物

1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂 炭化物含む
2. 10YR4/6褐色シルト 地山混じり
3. 10YR4/6に10YR4/1褐灰色シルト
- 3'. 10YR4/6褐色砂
4. 10YR5/1褐灰色シルト
5. 10YR5/2灰黄褐色シルト 10YR4/1褐灰色シルトが網目状に混じる
6. 10YR4/1褐灰色細砂 炭化物混じる以外はほぼ均質
7. 10YR4/1褐灰色シルト 炭化物・粘土ブロック混じり
8. 10YR4/1褐灰色シルト
9. 2.5Y4/1黄灰色シルト
10. 10YR4/1褐灰色シルト 炭化物 互層
11. 2.5Y4/1黄灰色シルト 10YR7/2シルト (地山)

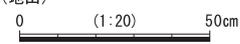


図79 5次4区SK62・SK63平・断面図

土師器皿A 1432、土師器杯A 1433・1435、須恵器杯B蓋 1436、製塩土器 1439・1446、土師器高杯 1449 はその間から出土した。図示していないが、本遺構から漆附着土器が2点出土している。遺物の組成はSK62と類似し、相互に関連する遺構と想定する。類例として平城京左京三条四坊七坪等で検出されている焼土ピットがあり、炉の基底部（湿気抜き）の可能性が指摘されている（奈良国立文化財研究所1980）。SK62・SK63に含まれる焼土が少ない点は異なるが、炭化物を面的に含む点は共通しており、防湿構造のような機能を持つものと考えられる。

SK75

(遺物図版76)
(写真図版62-4)

SB01の西で検出した南北に細長い土坑である。鉄道に伴う備前焼の土管を埋設するための掘方により攪乱を受けているため、南端は不明であるが、検出規模で南北2.7m、東西80cmを測る。遺構の両肩は垂直に掘られ、断面はコの字状を呈す。深さは遺構検出面から最大で32cmで、北端の標高は10.43m、南端の標高は10.21mで北から南にかけて傾斜している。主軸はN1°Wでわずかに西へ偏向している。埋土は炭化物を含まない細砂である。埋土から土師器杯A 1455、製塩土器 1456、土師器長胴甕 1457・1458等が出土した。

SK100

(遺物図版76)

SE02の東40cmで検出した東西に長く溝状に伸びる遺構である。攪乱を受けているため全容は不明であるが、検出規模で延長4.6m、幅は最大で85cm、深さは遺構検出面から最大で50cmを測る。両肩は急角度に掘り込まれ、断面はコの字状を呈する。埋土は黄灰色土で、SK75等の奈良時代の遺構とは異なっている。埋土から土師器椀 1459、東播系須恵器椀 1460が出土した。1460の様相から12世紀後半に位置づけられる。

SP68

(遺物図版76)

SK75の西1.9mの位置で検出した。円形を呈し、直径は20cmである。深さは遺構検出面から11cmを測る。埋土から土師器長胴甕 1461が出土した。

SP72

(遺物図版76)

SB01の南端の柱通を西へ約4m延ばした位置で検出した。位置的にはSB01に延長にあたるが、関連は不明である。対になる柱穴も検出していない。円形を呈し、直径は30cm、深さは遺構検出面から17cmである。埋土から須恵器杯B 1462が出土した。

SP79

(遺物図版76)

SP72の南東2mの位置で検出した。やや歪な円形を呈し直径38cm、深さは遺構検出面から66cmを測る。段下げ時に遺物がまとまって面的に出土した。そのうち、土師器杯 1463、土師器杯 1464、土師器長胴甕 1465、竈 1466・1467を図示した。

SP84

(遺物図版76)
(写真図版59-4)

SB01の東2.5mの位置で検出した。全体の半分程度が残存していた。隅丸方形を呈すとみられ、一辺35cm、深さは遺構検出面から15cmを測る。SP79と同様、柱穴の段下げ時に平面的に遺物が出土した。細片が多く、図示に耐えたのは製塩土器 1468に留まる。

SP99

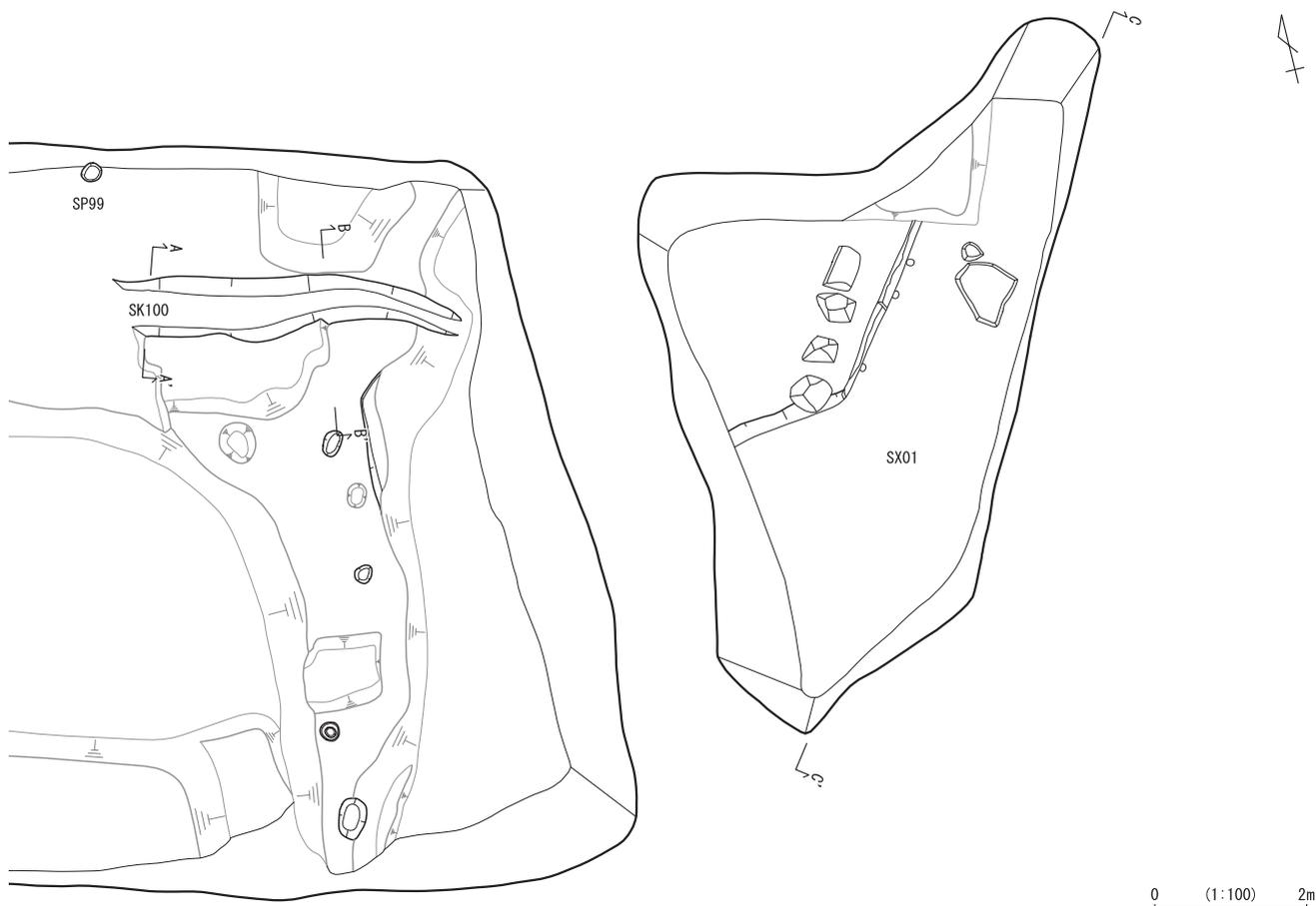
(遺物図版76)
(写真図版59-5)

調査区東部、北壁沿いで検出した。SK100の北1.3mに位置する。調査区外に広がるが、平面形は円形とみられ直径35cmである。深さは遺構検出面から21cmを測り、柱痕跡上層から土師器皿A 1469が出土した。SP68～SP99はいずれも遺構検出面が高い位置で検出したもので、埋土の様相と出土遺物に矛盾はなく、奈良時代の遺構である。

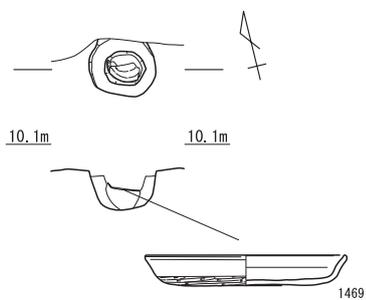
SX01

(遺物図版76)
(写真図版62-5-6)

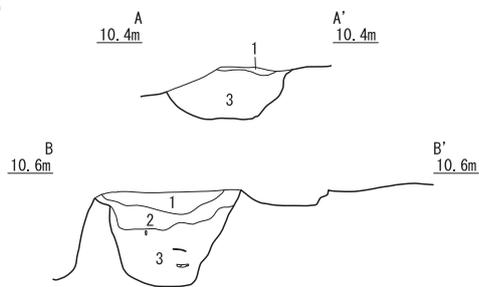
調査区東端のほぼ全域が該当する。西端には一部、板材を杭により固定した護岸状の施設を検出した。埋土は半ばヘドロ化した状態であることから、本遺構は水が溜まっていたものと推測できる。周辺は、近世には耕作地であることを勘案すると、本遺構は耕作に伴う水溜の可能性が高い。全容は調査区外に広がるため不明であるが、検出規模で南北8.6m、東西幅2.0mを測り、深さは盛土直下から70cmである。護岸する板材の掘方には凝灰岩の割石が配され、石の間にも杭が打ち込まれている。板から東側のヘドロに近い埋土からは、陶器椀 1470、陶器平灰 1471、栓と見られる木製品 1472等が出土した。これらは江戸時代のもので、SX01の機能時に廃棄されたものと考えられる。SX01の廃絶年代は明らかでないが、鉄道の開通に伴い一気に埋められたものと推測する。



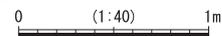
SP99



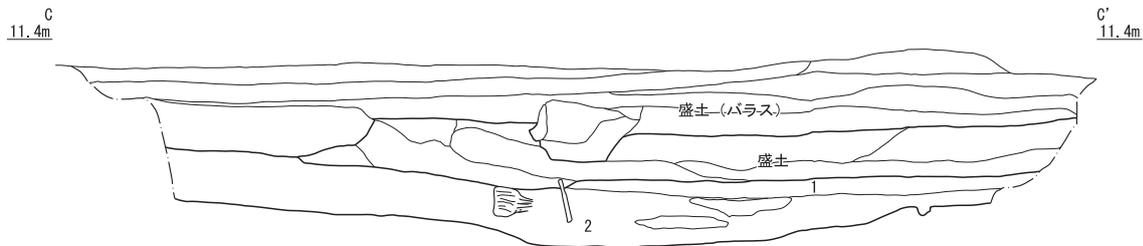
SK100



- 1. 2.5Y5/1 黄灰色細砂
- 2. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト 2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり
- 3. 2.5Y5/1 黄灰色シルト 2.5Y にぶい黄色シルト混じり



SX01



- 1. 耕土
- 2. 2.5GY6/1 オリーブ灰色礫混じり粘土



図80 5次4区SP99、SK100、SX01平・断面図

5次5区

(写真図版63-64)

5次4区の西端から西へ8.5m延び、幅員8.5mの調査区である。JR高架事業に伴う工事車両の出入口確保のため、5次4区とは時期をずらして調査した。調査区の基本層序は5次4区と同一である。5次4区とは本来一連の調査区であるが、遺構名を個別に採番したため、別に報告する。検出した遺構は、調査区全域に広がる土坑と調査区北壁沿いで検出した井戸1基である。

SK03

(遺物図版76)
(写真図版63-1-2-4)

調査区東端で検出した南北5.6m、東西2.2mの土坑である。緩やかに掘り込まれ、埋土上部はSK02・SK07の上面まで及ぶ。最終的にSK03として図示したのは、断面4層の範囲である。深さは遺構検出面から15cmである。調査区内で検出したSK01、西に隣接するSK02・SK07等とともに5次4区で検出したSK01等と同じ土取り痕であろう。埋土から寛永通宝1473・1474が出土した。

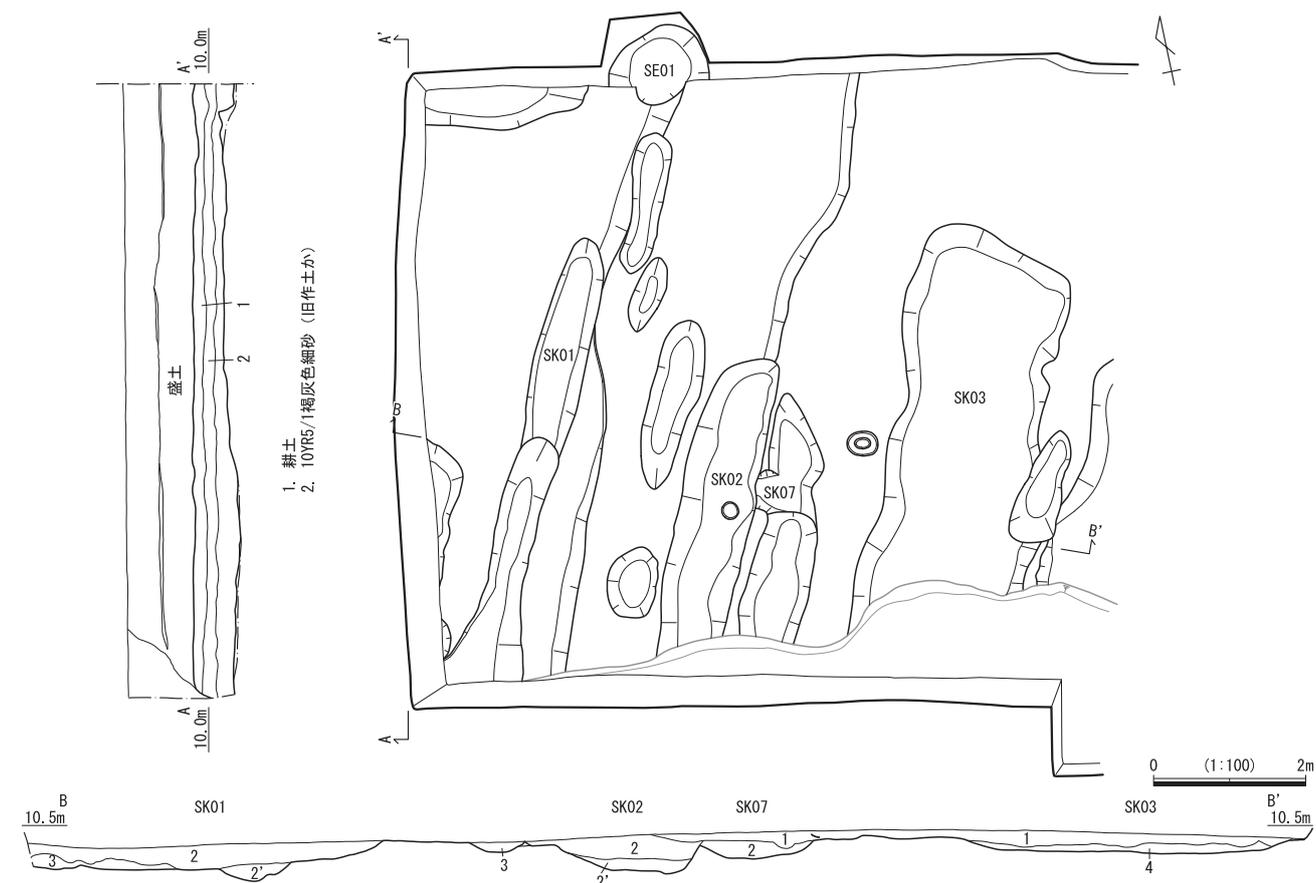
SE01

(遺物図版77-82)
(写真図版63-3-64-134-166-171-213)

調査区北壁沿いで検出した素掘りの井戸である。掘方は円形を呈し、直径は約1.3m、深さは遺構検出面から1.25mを測り、底面の標高は8.66mである。井側を構成する部材等は全く遺存していなかったが、垂直に掘り込まれ、底面の標高が5次4区SE01、SE02と近似することから井戸と判断した。本来の掘方上層の埋土は一部を除いて地山とほとんど同質であり、平面的には全く認識できなかった。このため、当初は東西68cm、南北27cmの半円形の土坑(SK05)として調査を進めた。完形に近い遺物が出土したこと、下層で炭化物層が確認できたことから断割り調査を行った結果、当初の想定よりも大型の遺構と判明したものである。

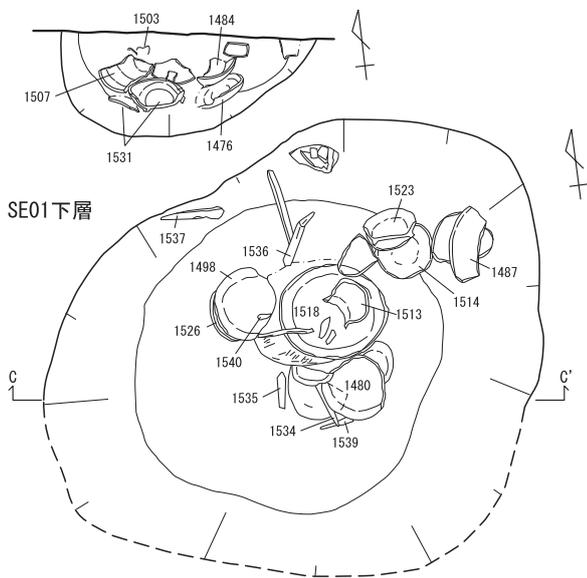
遺物は、土師器杯1475、土師器杯A1476～1481、1484～1486、1491～1498、土師器皿A1482・1483・1489・1490、1499・1500、杯か皿の底部1501、鉢1487・1488、製塩土器1502～1507、土師器甕1508・1513～1515、1517、1518、土師器長胴甕1509～1511、土師器甌1512、土師器壺A1516、須恵器杯A1519～1521、須恵器杯B1522～1527、須恵器杯B蓋1528・1529、須恵器鉢1530、須恵器壺1531、須恵器甕1532・1533、斎串1534～1540、木簡1541、加工木製品1542、曲物底板1543、漆紙文書1544を図示した。大半が形を保つもので、埋没後の好条件のため器面も良好に保存されている。

本遺構では完形に近い土器が出土することから、出土位置を記録しながら調査を行った。図82は遺物の出土状況をプロットしたものである。位置の記録については、取り上げ後、その圧痕を頼りに位置を復元したものもあるため、誤差も含んでいるが、遺構内における各遺物の出土位置は図示したとおりである。遺物は、当初SK05と認識していた中央部分を中心に、土坑内全域に分布している。垂直分布では、最下層の1515、それより上層の土師器甕1518を中心とし、斎串がまとまって出土する段階、その上部の写真図版64-2の段階を経て、SK05とした範囲を中心とする段階に分けることができる。出土状況からはこのように区分できるものの、最下層の1515を除けばこれらは大きな時間差を持つものではなく、井戸廃絶に伴う短い時間の中におさまるものとみられる。特に漆紙文書1544の上下、前後に「十」の共通する墨書土器が出土している点は、これらの遺物が一括して廃棄されたものであることを裏付ける。また、土師器甕1518の下から斎串1534～1540がまとまって出土したことから、祭祀を行った後、完形に近い土器を投げ入れた様子が想定できる。1518の下、約30cmで井戸底に達するが、井戸底では土師器甕1515が単体で横向きの状態で出土した。この周囲からは土器が出土しなかったことから、1515については廃絶時ではなく、機能時のものと考えている。写真図版64-5に見るように1515の出土時には頸部に

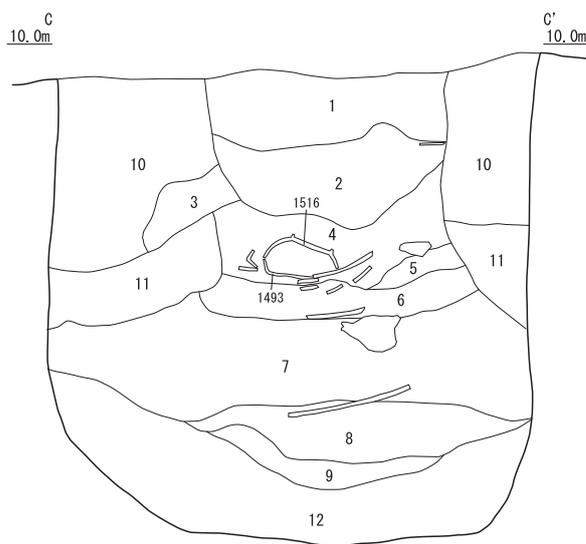


- 1. 5Y4/1灰色シルト
- 2. N/ 灰色シルト
- 2'. N/ 灰色シルト
- 3. 2.5Y6/6明黄褐色シルト N5/ 灰色シルト混じり
- 4. 2.5Y6/6明黄褐色シルト 5Y4/1灰色シルト混じり

SE01検出時 (SK05)



SE01断面



- 1. 2.5Y6/2灰黄色土細砂 10YR4/1褐灰色細砂 炭化物混じり
- 2. 炭化物・灰層
- 3. 炭化物・灰層
- 4. 10YR5/1褐灰色シルト 遺物多量に含む
- 5. 10YR5/1褐灰色シルト 2.5Y5/4黄褐色土シルト ブロック状に混じる
- 6. 5Y5/1灰色砂混じりシルト 木質含む
- 7. N4/ 灰色砂混じり粘土 有機質多く含む
- 8. N4/ 灰色~5GY6/1オリーブ灰色砂の互層
- 9. N4/ 灰色シルト
- 10. 10YR5/6黄褐色細砂 2.5Y6/1黄灰色シルト混じり
- 11. 10YR7/1灰白色砂 下位に鉄分沈着
- 12. 5BG5/1青灰色粘土 有機物含む

0 (1:20) 50cm

図81 5次5区平面図、西壁土層断面図、SK01・SK02・SK03・SK07断面図、SE01平・断面図

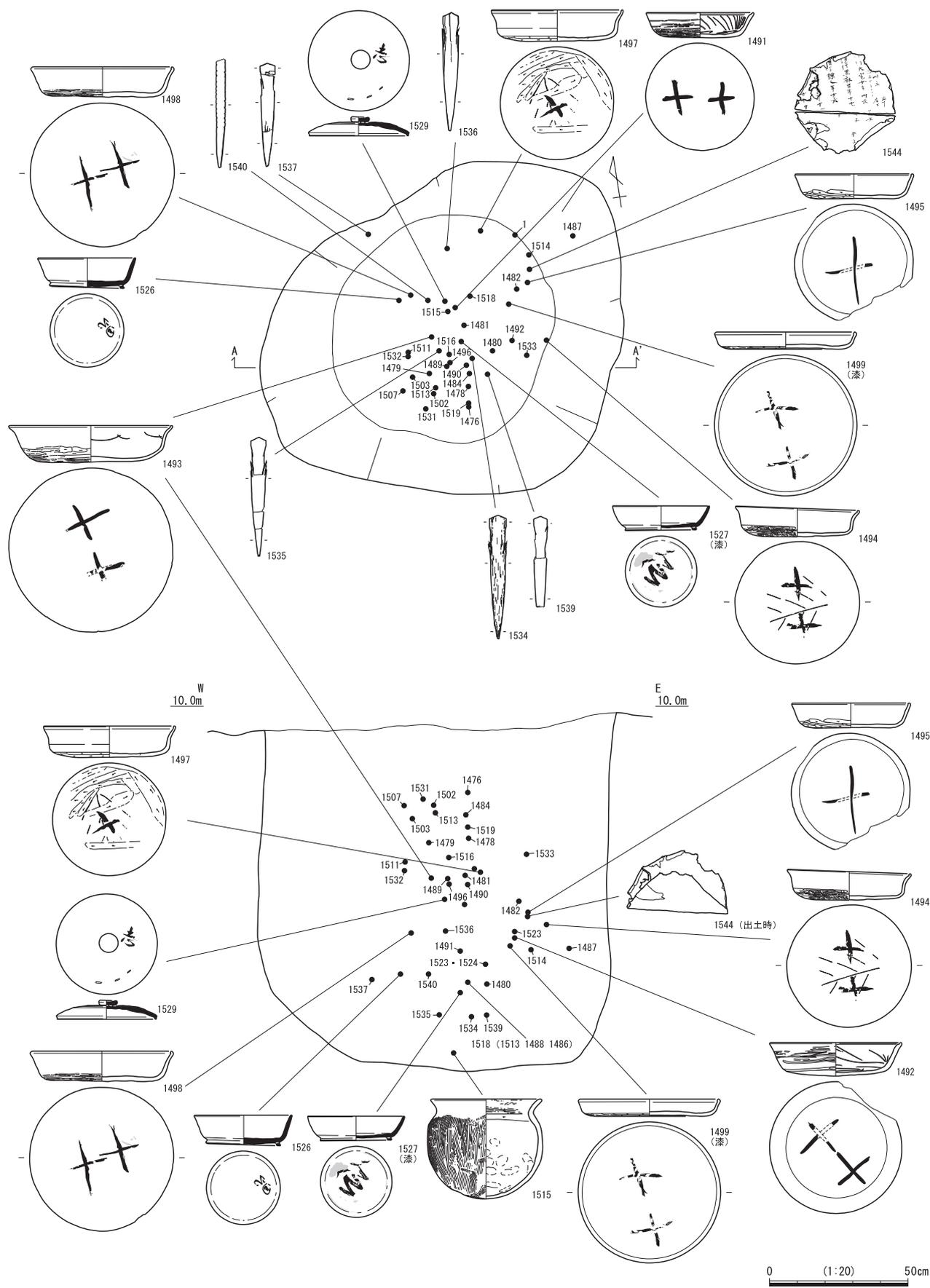


図82 5次5区SE01遺物出土状況図

帯状に土が付着しており、釣瓶として使用されていた可能性も考えられる。漆紙文書 1534 は、二つに折れた状態で出土し、当初は皮製品かと思われた。念のため赤外線で見ると文字らしきものが確認できたため、奈良文化財研究所に協力を依頼した。史料研究室の全面的な協力のもと、研究所において漆紙文書の開封を行い、漆紙文書の撮影、積読が行われた。漆紙文書の積読内容及び解釈については古尾谷知浩氏にご寄稿いただいた（附章参照）。漆紙文書はその内容から天平勝宝九歳（756）以降に作成されたものであることが判明した。上述した出土状況から、本遺構出土遺物は短期間に廃棄された資料で、かつ廃棄年代の上限を 756 年とする良好な一括資料といえる。

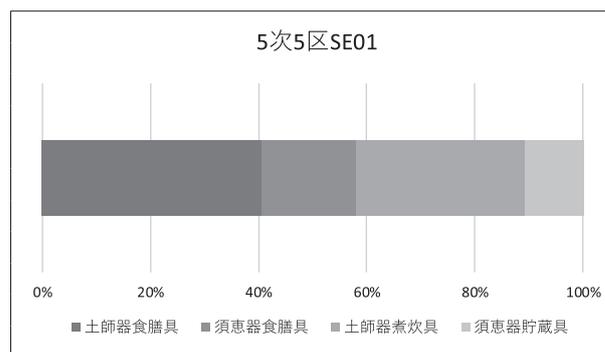
井戸埋土のうち、斎串が出土した付近の埋土には多くの有機質が含まれていたことから全量を篩掛けした。回収した木質のうち大半は自然木であったが、木簡 1541 が含まれていた。1541 の上端は焼けているが、墨書が認められることから、木簡の燃えカスであることがわかる。その他、種子等が出土している。種子はクリ 3 点、モモ核 2 点、ウリ科のつる植物の種子 1 点、瓢箪種子 24 点が出土している。瓢箪果皮も出土しているが、種子も出土していることから、容器ではなく、瓢箪そのものが井戸内に廃棄されたものであろう（第七章第 2 節参照）。

斎串は 7 点出土し、1540 は側面にキザミを施すもので、他は切掛けを施すものである。1533 はヒノキ材を用いている（第七章第 3 節参照）。墨書は須恵器の「志」「田比」を除けば、土師器は「十」もしくは「十十」のみである。

出土遺物の総数は破片を含め 117 点である。そのうち 58 点を図示したが、残り 59 点は図化に耐えない破片である。器種の判明するものの内訳は表のとおりである。製塩土器を除いた内訳は、供膳具 58%、煮炊具 31%、貯蔵具 11% である。供膳具における土師器と須恵器の比率は、約 70% と 30% である。西部地区の遺構と同様、供膳具における土師器の比率が高いことが指摘できる。製塩土器は細片が多いため、出土遺物全体に占める割合は数値上約 37% を占めることとなるが、実態はそれほど多くはないと思われる。5 次 4 区・5 区における製塩土器の出土数は、後述する 6 次 1 区に比べて多くない。

表 7 5次5区 SE01 出土遺物数量表

種別	器種	数量	種別	器種	数量
土師器	杯	25	須恵器	杯	11
	皿	5		皿	0
	高杯	0		高杯	0
	蓋	0		蓋	2
	杯・皿	0		杯・皿	0
	甕	22		甕	4
	甗	1		壺	4
	甕・甗	0		甕・壺	0
	製塩土器	43		瓦	0
合計			合計		117



6次1区

(写真図版65-91)

調査区は姫路駅ビルの換地予定地にあたる。南北約30m、東西約81mの調査区である。残土置場の関係から調査区のほぼ半分で東部と西部に2分割して調査したが、遺構は連続して採番した。東側が微高地にあたり、調査区東端から西へ45m付近から地形が落ち込んでいる。そのため、調査区の基本層序は東側と西側で大きく異なる。東側は盛土、旧耕土(1・2層)の直下で黒褐色シルトの遺構検出面となる。西側は盛土、耕土(1・2層)、旧耕土(3・4・5層)、黄灰色細砂～シルト(6・7層)、奈良時代の遺物包含層である褐灰色細砂(8層)、黒褐色シルト(9層)を経て、灰オリーブ色～灰黄褐色の地山(10・11層)に至る。東端の地山の標高は概ね10.0m、西端の標高は9.5mである。西部地区では中世遺構面を検出しており、東部地区では、6・7層がそれに対応するとみられるが、遺構は確認できず、むしろ水田土壌に近い様相を示す。奈良時代の遺構は本来9層上面から掘り込まれるが、埋土が類似するため9層を掘り下げた地山上面を遺構検出面とした。微高地上で検出した奈良時代の遺構は、建物跡3棟、井戸1基、道路側溝のみで、他は全て江戸時代の遺構である。耕作により削平されたとみられる。いっぽう、低地にあたる西側では建物跡7棟、井戸3基、道路側溝、土坑、柱穴等を多数の遺構を検出した。

SB01

(写真図版71-5)

調査区東部で検出した東西棟の掘立柱建物である。鉄道連絡橋の基礎により未調査部分があるが、桁行4間、梁行1間を確認した。梁行については、間にもう一間分想定できるが柱穴を確認できなかった。SP08-SP10を基準とする建物の主軸はN1°Eである。規模は、桁行総長8.2m、柱間寸法は西から2.7m、1.7m、1.8m、2.0mである。梁行総長3.8mである。柱穴掘方は基本的に円形を呈し、直径30～60cmと大きさにばらつきがみられる。深さは遺構検出面から10～50cmと一定しない。埋土には後述する建物に見られるような炭化物は含まれていない。遺物は出土していない。

SB02

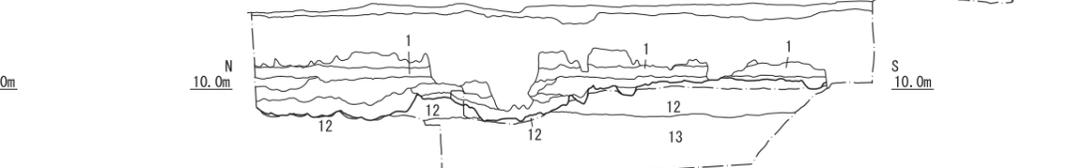
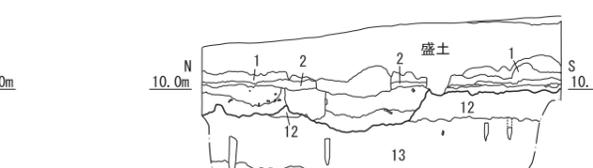
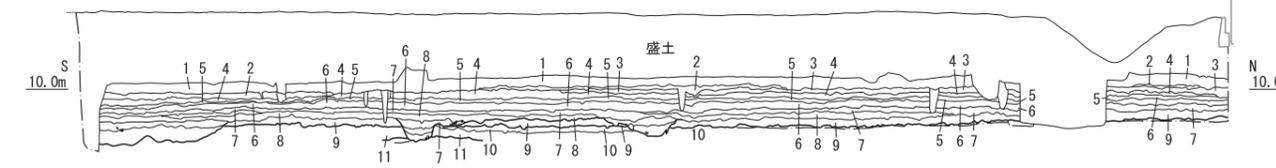
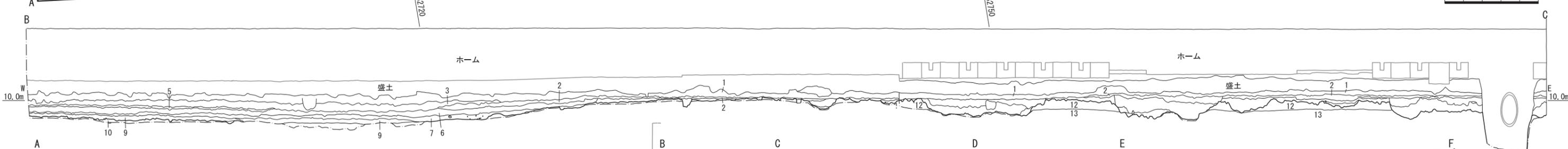
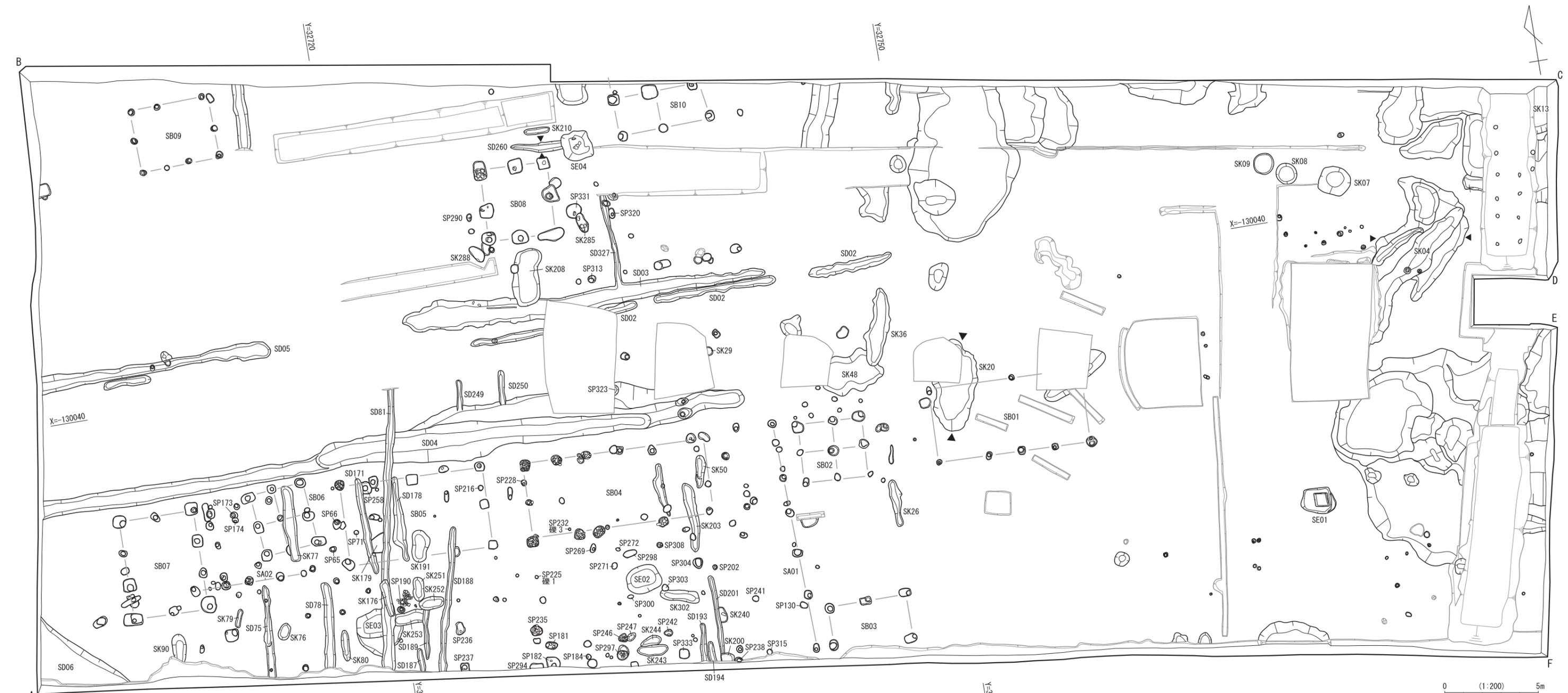
(写真図版82-1)

SB01の西端から3.6mの位置で検出した総柱建物跡である。東西方向にわずかに長いことからこれを桁行とし、南北方向を梁行とする。SB01の南桁行とSB02の南桁行は揃っている。桁行、梁行とも2間で、桁行総長3.6m、柱間寸法はSP150-SP158で西から2.1m、1.5mである。梁行総長3.3m、柱間寸法はSP150-SP152で北から1.6m、1.7mである。これを基準とする建物の主軸はN1°Eである。柱穴掘方は基本的に円形を呈し、直径30～60cmと大きさにばらつきがみられる。深さは遺構検出面から8～30cmと全体的に残りは悪い。平面プランでは柱痕跡を認識したが、残りが悪いいため、断面で検証できないものもある。SP150・SP153・SP154では直径15cmの柱痕跡が確認できた。埋土はSB01と同様、炭化物を含んだものは確認できない。遺物も出土していない。

SB03

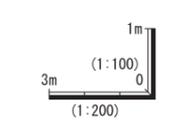
(遺物図版83)
(写真図版82-3)

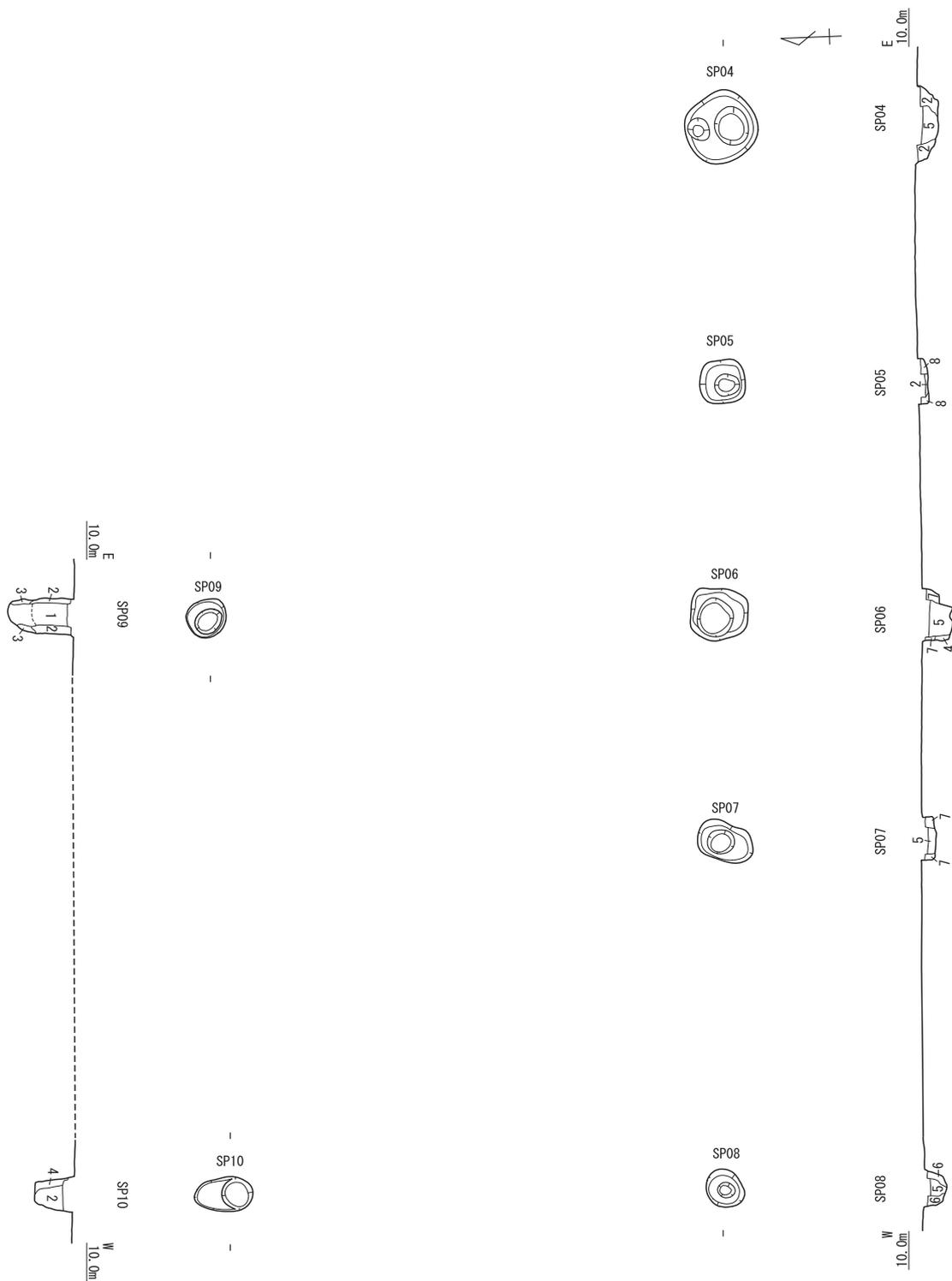
SB02の南端から南6.7mの位置で検出した建物跡である。豆腐町Ⅱ次で検出したSB01と一連となる可能性がある。両者を一連の遺構とした場合、桁行6間、梁行2間の南北棟建物で、桁行総長は10.5m、梁行総長は4.3mとなる。6次1区で検出した範囲に限れば桁行SP11-SP12で2.3m、梁行SP11-SP127で4.3m、東から2.2m、2.1mである。SP11-SP127を基準とする建物の主軸は東西正方位である。柱穴掘方は一辺40～70cmの隅丸長方形もしくは直径54～58cmの円形を呈する。深さは遺構検出面から12～25cmを測る。埋土にはSB01とSB02同様、炭化物を含まない。SP126とSP128から図示に耐えうる遺物が出土した。SP126の柱痕跡から土師器杯A 1545、製塩土器 1546が、掘方から須恵器杯B蓋 1547が出土した。SP128の柱痕跡から土師器皿A 1548、製塩土器 1549が出土した。SB02とSB03の西側の柱筋は通り、これと並行して西側にSA01を検出した。SB02とSB03の西柱から地形が傾斜し、遺構検出面は、最大で60cm程の差が生じている。



1. 耕土 (鉄道敷設直前)
2. 旧耕土
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 (旧耕土)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 (旧耕土) 3層との境は明瞭
5. 2.5Y6/6 明黄褐色砂 (旧床土)
6. 2.5Y4/1 黄灰色細砂
7. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
8. 10YR4/1 褐灰色シルト 土器・炭化物含む
9. 10YR3/1 ~ 4/1 黒褐色~褐灰色シルト
10. 5Y7/2 ~ 6/2 灰オリーブ色砂混じりシルト (遺構検出面)
11. 10YR5/2 灰黄褐色砂混じりシルト (遺構検出面)
12. 10YR3/2 黒褐色シルト (遺構検出面)
13. 2.5Y5/3 黄褐色細砂
14. 砂礫

図83 6次1区平面図、土層断面図





1. 10YR5/1 褐灰色～4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR3/1 黒褐色シルトブロック混じり
2. 10YR4/1 褐灰色シルト
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色～4/4 褐色シルト 10YR4/1 褐灰色シルト混じり
4. 10YR2/1 黒色シルト
5. 10YR3/1 黒褐色～3/2 黒褐色シルト
6. 10YR3/2 黒褐色シルト
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
8. 10YR4/2 灰黄褐色シルト

0 (1:50) 1m

図84 6次1区SB01平・断面図

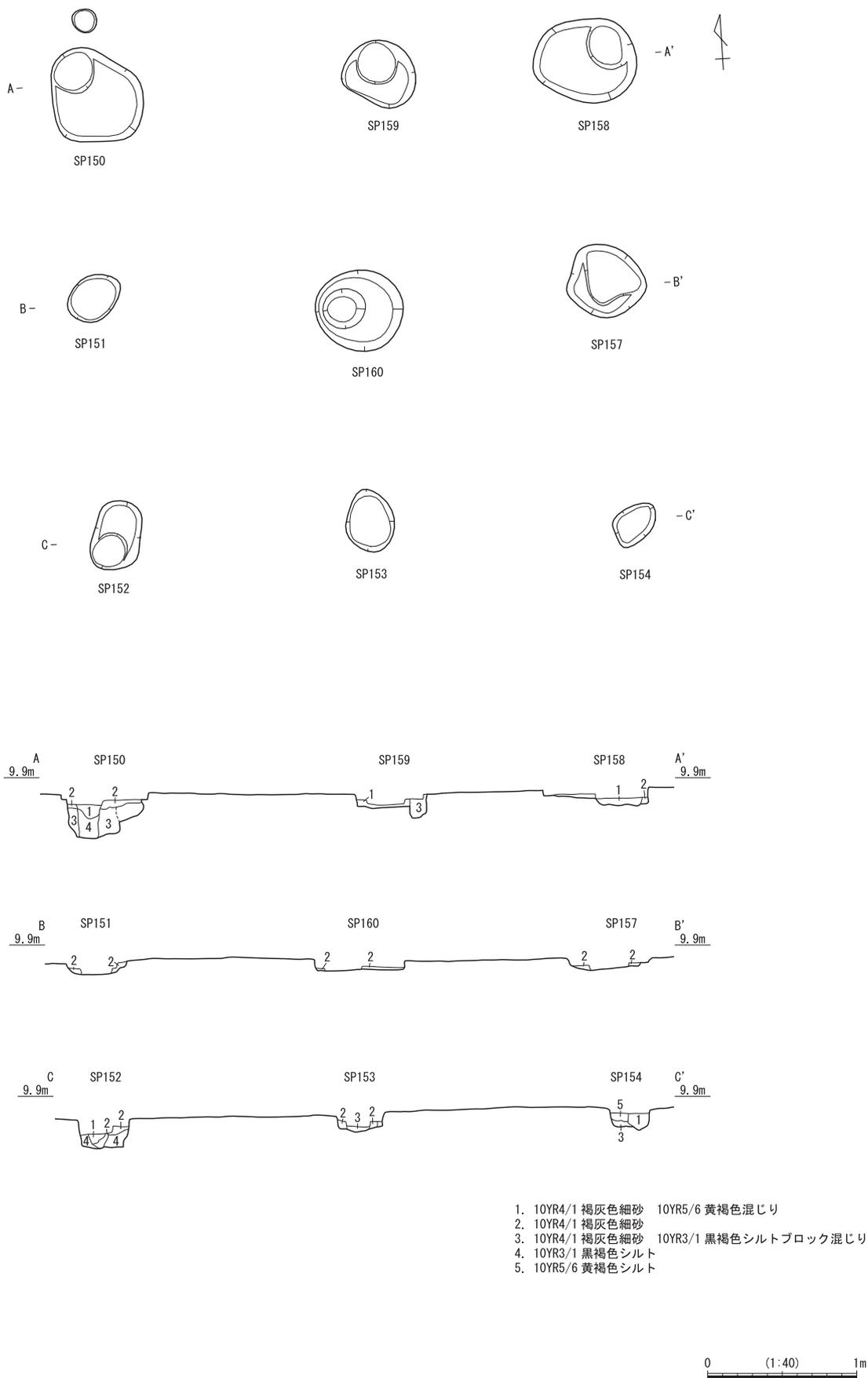


図85 6次1区SB02平・断面図

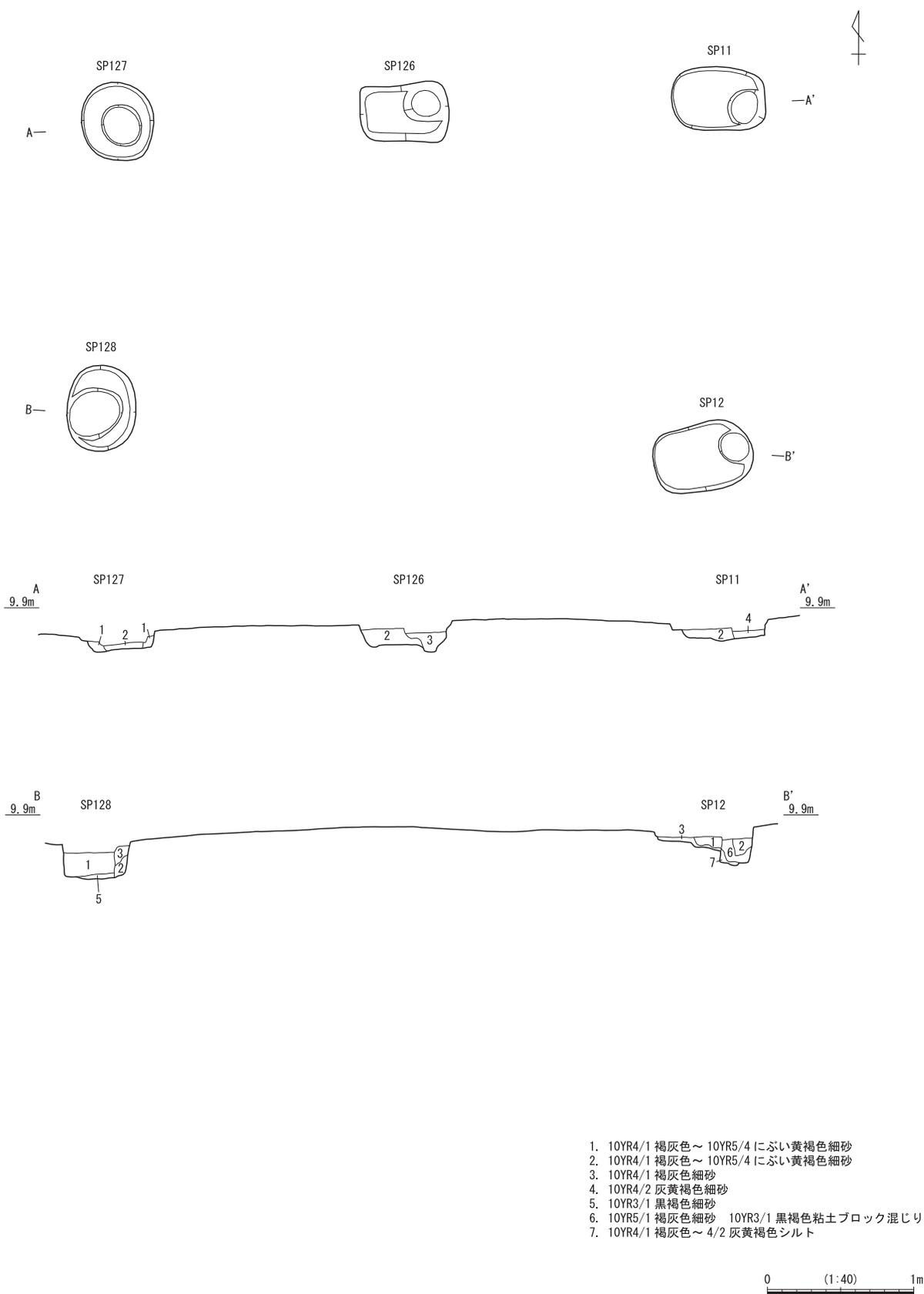


図86 6次1区SB03平・断面図

SB04

(遺物図版83)
(写真図版85-186-
87-1-6)

SB02の西端から約5mの位置で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。柱穴が確認できない部分もあるが、桁行6間、梁行2間とみられる。桁行総長11.5m、柱間寸法はSP142-SP229で東から2.5m、2.0m、1.75m、1.8m、1.7m、1.75mである。梁行総長4.3m、柱間寸法はSP226-SP229で南から2.2m、2.1mで、この柱筋を基準とした建物の主軸はN2°Eである。柱穴掘方は基本的に円形を呈し、直径35～65cmと大きさにばらつきがみられる。深さは遺構検出面から10～35cmで極めて浅い。SP248-SP270を境に西側は地形が落ち込み、柱穴を掘り込んだ地面もSR01の上面であるため軟弱地盤となっている。これに対応するため、以西の柱穴には10～15cmの円礫を用いた根固めあるいは根石が認められる。これら礫を用いた掘方は、総じて礫を伴わない柱穴に比べて掘方が大きい。柱痕跡は概ね直径15cmである。埋土には炭化物が含まれている。遺物はSP226、SP229、SP230、SP233、SP245、SP248、SP270から図示に耐えうるものが出土した。SP226からは礫に混じって須恵器杯B 1550が、SP229の上層から須恵器杯Bの底部1551が、SP230の埋土からは土師器皿A 1552、SP233の埋土から製塩土器1553が出土した。SP245の埋土からは土師器杯B蓋1556、土師器杯1557、須恵器壺1555、製塩土器1558～1560がまとまって出土した。SP248からは暗文のある土師器皿A 1554、SP270からは土師器甕1561、竈1562が出土した。

SB05

(遺物図版83)
(写真図版85-288)

SB04の西端から約3.4mの位置で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。柱穴が抜けている部分もあるが、桁行4間、梁行2間とみられる。SB04とは棟通りが揃っており計画的に配置されたことがうかがえる。桁行総長7.5m、柱間寸法はSP67-SP215で西から1.8m、2.1m、1.7m、1.9mである。梁行総長4.3m、柱間寸法はSP215-SP218で北から2.0m、2.2mで、この柱筋を基準とした建物の主軸はN1°Eである。柱穴掘方は円形と隅丸方形が半々であり、円形のは直径40～50cm、隅丸方形のものは一辺45～60cmと大きさはばらつく。深さは遺構検出面から10～26cmである。建物は西から東にかけて地形が傾斜する場所に立地し、最も低い位置にあたる建物東端の柱筋SP215-SP218では柱の沈下を防ぐための板材を確認している。SP217では板材の下に竈底部1565の破片を敷いている。SP67・SP211・SP220では掘方及び柱痕跡内に小礫が認められるが、SB04で検出した根石の可能性のあるものに比べて柱の沈下を防ぐ目的意識が弱いように思われる。柱穴埋土には炭化物が含まれている。遺物はSP175の掘方から須恵器杯B 1563、SP217から製塩土器1564、竈の底部1565が出土した。

SB06

(遺物図版83)
(写真図版82-4)

SB05の西端から1.5mの位置で検出した総柱建物跡である。SK77がSB06を構成する柱穴を切ることからSK77よりも古い遺構であることがわかる。南北方向にわずかに長いことからこれを桁行とし、東西方向を梁行とする。ともに2間で、桁行総長3.3m、柱間寸法はSP61-SP63で南から1.5m、1.8mである。梁行総長2.9m、柱間寸法はSP57-SP63で西から1.4m、1.5mである。SP55-SP57を基準とする建物の主軸はN7°Wである。柱穴掘方は一部円形を呈すものがあるが、基本的に隅丸方形を志向する。一辺44～80cmと大きさにばらつきがみられる。最も小さいSP69は円形を呈し、直径32cmである。深さは遺構検出面から15～36cmである。埋土は炭化物や焼土を含んでいる。遺物はSP58の掘方から暗文を施す土師器高杯の杯部1566、SP62の段下げ時に須恵器杯蓋1567、埋土から土師器長胴甕1568が出土した。SP69の礫の下層から土師器皿1569が出土した。

SB07

(遺物図版84)
(写真図版82-587-7)

SB06の西端から2.8mの位置で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。SB04、SB05と北端の柱通りは揃っている。規模は桁行3間、梁行2間で、桁行総長5.4m、柱間寸法はSP82-SP88で北から1.7m、1.9m、1.8mである。梁行総長4.2m、柱間寸法はSP88-SP94で2.1mの等間隔である。SP82-SP88を基準とした建物の主軸はN1°Eである。柱

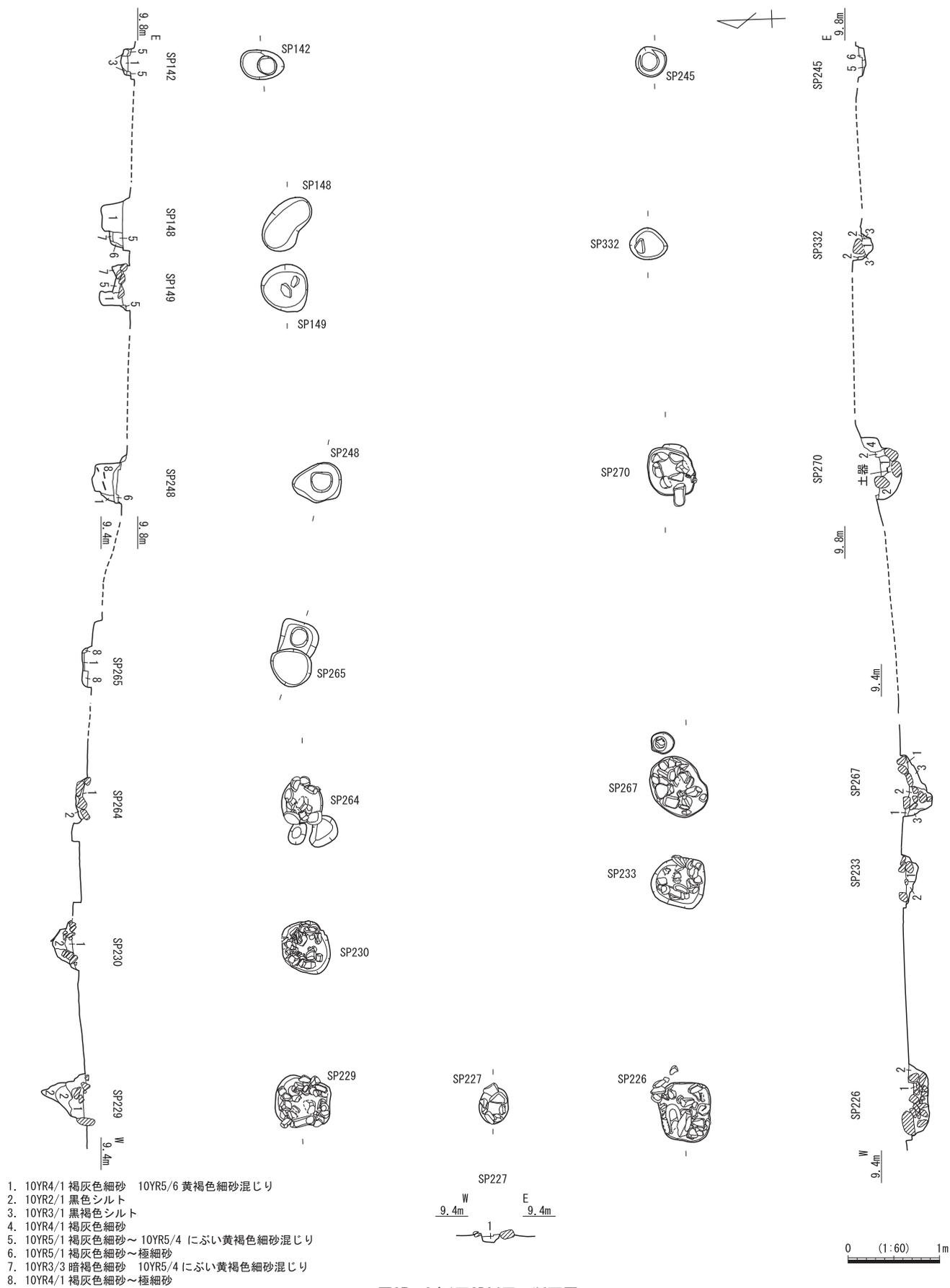


図87 6次1区SB04平・断面図

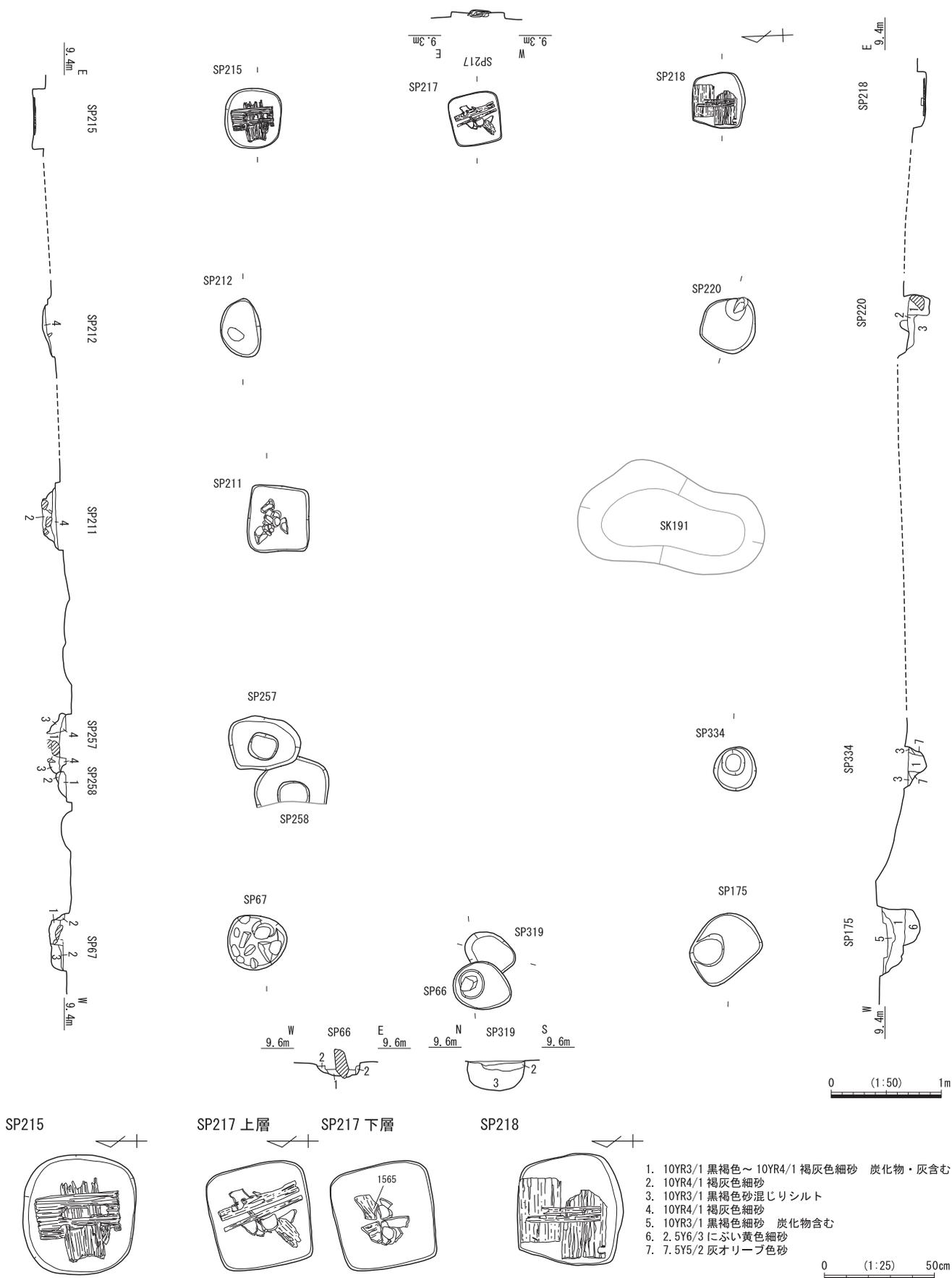
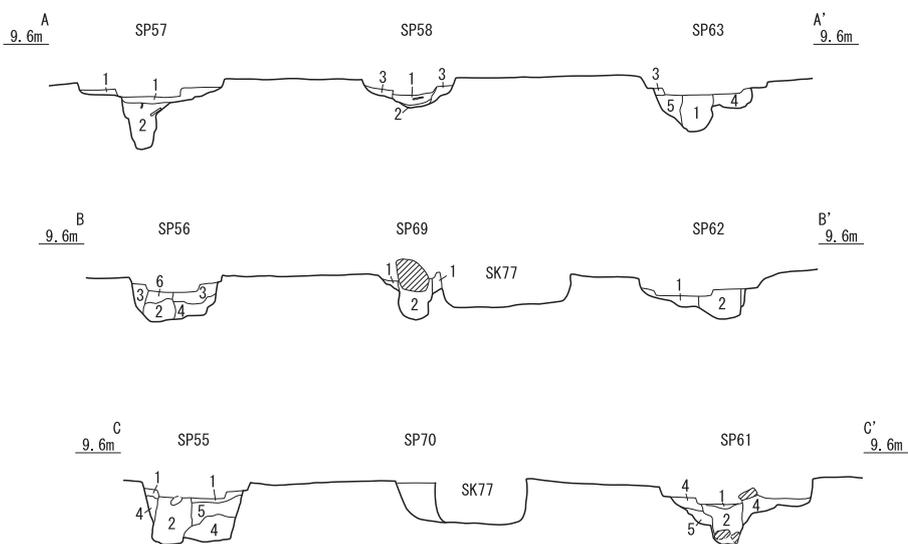
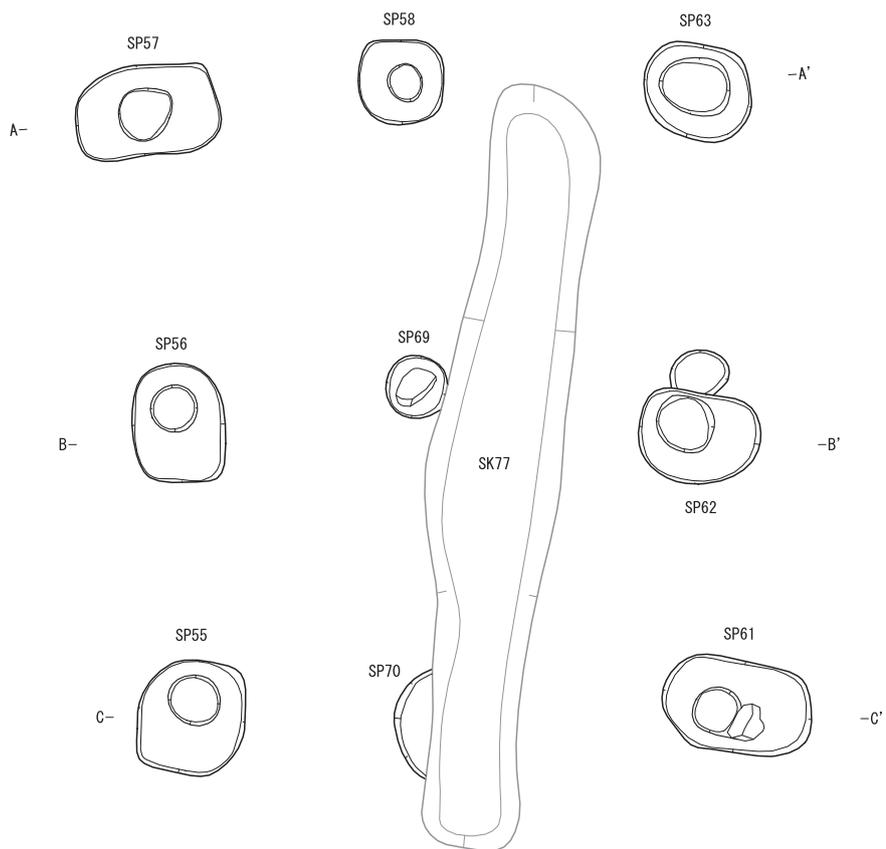


図88 6次1区SB05平・断面図



1. 10YR4/1 褐灰色細砂
2. 10YR2/1 黒色シルト
3. 10YR4/1 褐灰色細砂
4. 10YR3/1 黒褐色シルト 炭化物・焼土混じり
5. 10YR3/1 黒褐色シルト
6. 10YR4/1 褐灰色細砂 黄色ブロック混じり

0 (1:40) 1m

図89 6次1区SB06平・断面図

穴掘方は円形を呈すものと隅丸方形を呈すものがある。円形のものではSP83が最小で直径45cm、隅丸方形のものは一辺60～70cmである。SP88とSP94は検出時点では図示した平面形で一回り大きいプランであったが、最終的には一辺60～70cmと他の柱穴と同サイズとなった。深さは遺構検出面から25～44cmである。柱痕跡は検出時点では30cm近いものも認められたが、実際はSP88やSP91で検出した15～20cmの規模とみられる。掘方埋土は2層程度に分層できるが、版築状になったものではない。また、SB06等とは異なり炭化物を含んでいない。遺物はSP88の柱痕跡から土師器杯A 1570が、上層段下げ中に須恵器杯A 1571が出土した。SP94の埋土から須恵器杯1572が出土した。図示していないが、SP82掘方から須恵器甕片、SP97上層から土師器杯片が出土している。

SB08

(遺物図版84)
(写真図版83-84-174-215)

SB04の北約12mの位置で検出した掘立柱建物跡である。南北方向がわずかに長いことからこれを桁行とし、東西方向を梁行とする。ともに2間で、桁行は西辺で3.7m、東辺で3.9m、柱間寸法はSP274-SP284で北から1.8m、2.1mである。梁行は南北とも3.5mで、柱間寸法はSP274-SP279で東から1.6m、1.9mである。SP274-SP284を基準とする建物の主軸はN1°Eである。平面規模から総柱建物の可能性を考えたが、平面的には検出できず、調査の最終盤で建物中心を断ち割ったが痕跡等は全く確認できなかった。柱穴掘方はSP274・SP280・SP281は隅丸方形を呈すが、他は円形もしくは不整形である。隅丸方形のSP280は一辺75cm前後、円形のSP282で直径90cm前後を測る。深さは遺構検出面から35～60cmである。SP274とSP280にはそれぞれ柱材2433と2434が遺存する。2434は最大径26cm、2433は最大径28cmを測り、柱材は掘方の下まで沈下している。2434はヒノキ材である(附章参照)。SP279とSP282では沈み込みを防ぐための板材と礫が配されている。板材は加工痕があるものもあり、転用品であろう。SP282で検出した板材の一つはスギ材が用いられている。その他、SP283とSP284は埋土に礫を含み、本来は根固めであった可能性がある。そうした構造が認められないSP275とSP281では掘方の底面で柱の沈みこみによる当たりを確認した。埋土は複数に分層できるが、明確に版築構造をとるものはない。埋土中からは比較的多くの遺物が出土した。SP274から須恵器杯B蓋1573、掘方から製塩土器1574、SP275の柱痕跡から土師器杯1575、土師器甕1580が、埋土から土師器杯A 1576、須恵器杯B蓋1577・1578、製塩土器1579が出土した。直接建物に関わらないが、SP275が切るSP276から須恵器杯B蓋1581が出土している。SP279の掘方から土師器皿A 1582、須恵器杯B 1583、製塩土器1584が出土した。SP281の埋土から土師器杯A 1585、須恵器把手1586、SP282の掘方から土師器皿A 1587、SP284の掘方から須恵器杯B蓋1588、須恵器杯身1589が出土した。

SB09

(写真図版82-6)

SB08の西端から約14mの位置で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。柱穴が確認できない部分もあるが、桁行3間、梁行2間である。柱通りは総じて悪いが、桁行総長4.2m、柱間寸法はSP109-SP112で西から1.3m、1.3m、1.6mである。梁行総長3.3m、柱間寸法はSP109-SP118で北から1.5m、1.8mで、この柱筋を基準とした建物の主軸はN2°Wである。柱穴掘方は基本的に円形を呈す。直径は30cm前後で概ね揃っている。深さは遺構検出面から10～36cmである。遺物は全く出土していない。

SB10

(写真図版65)

6次1区と7次2区にまたがって検出した建物跡である。7次2区で検出したものも含めてここで報告する。SB08の東端から4.3m東で検出した。SB10の南端は、SB08北端の柱通りと概ね揃うが、若干ズレている。庇付きの東西棟の掘立柱建物跡である。7次2区で調査区外に広がるため全容は不明であるが、柱構成から身舎の南側に廂を付した建物と考えられる。身舎は3間2間である。桁行総長6.3m、柱間寸法は7次2区SP10-6次1区

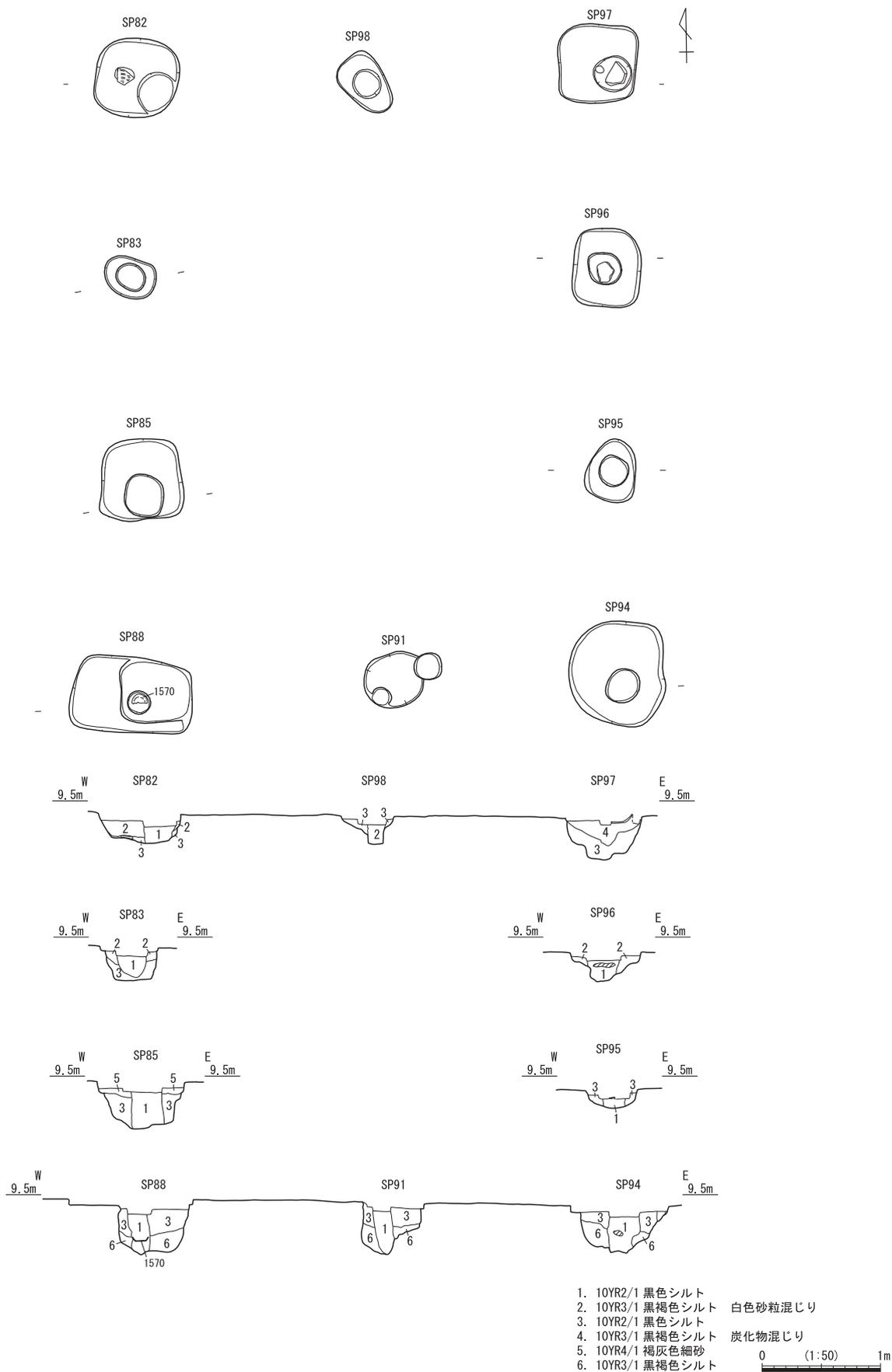


図90 6次1区SB07平・断面図

第三章 調査の成果

東部地区

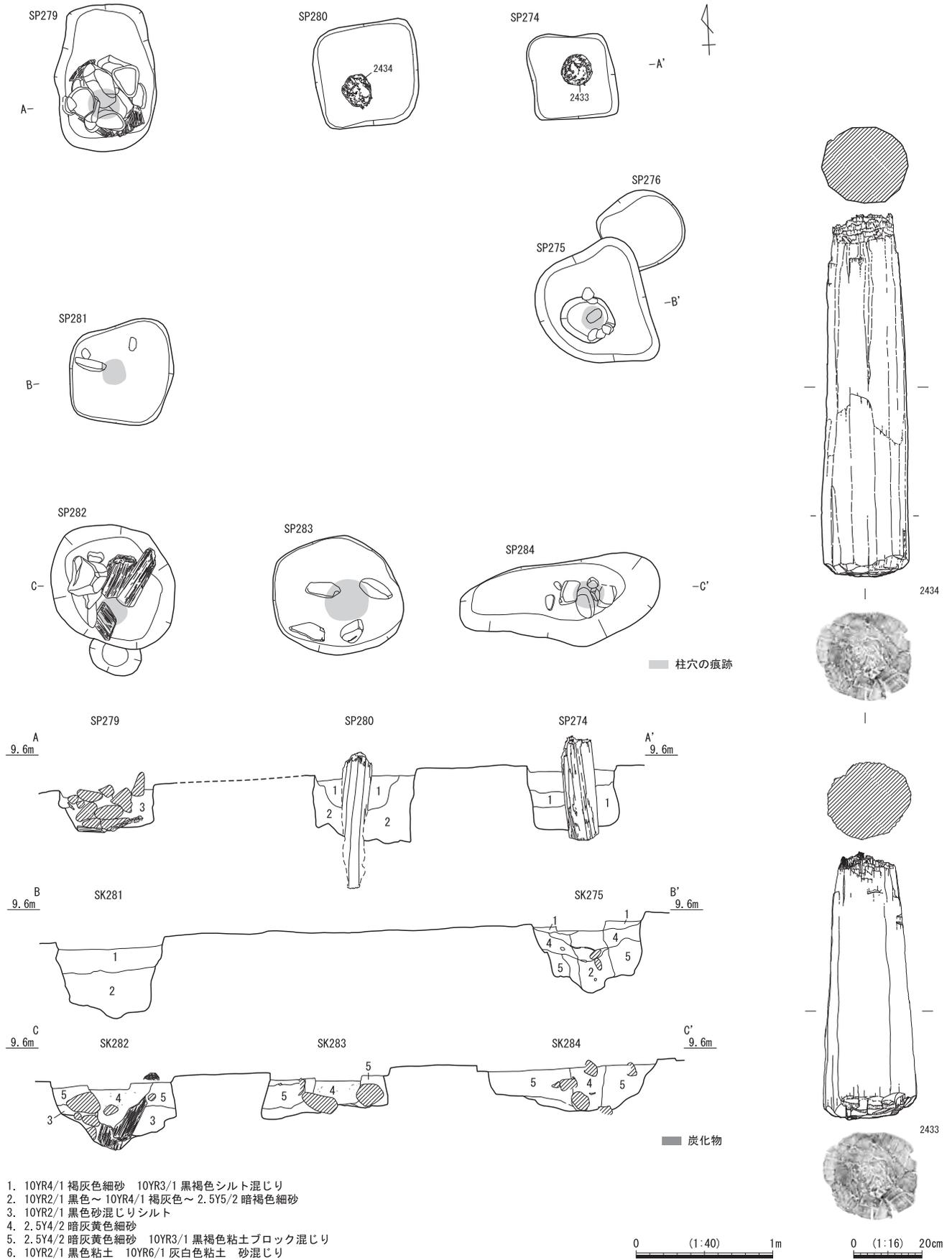


図91 6次1区SB08平・断面図、柱根実測図

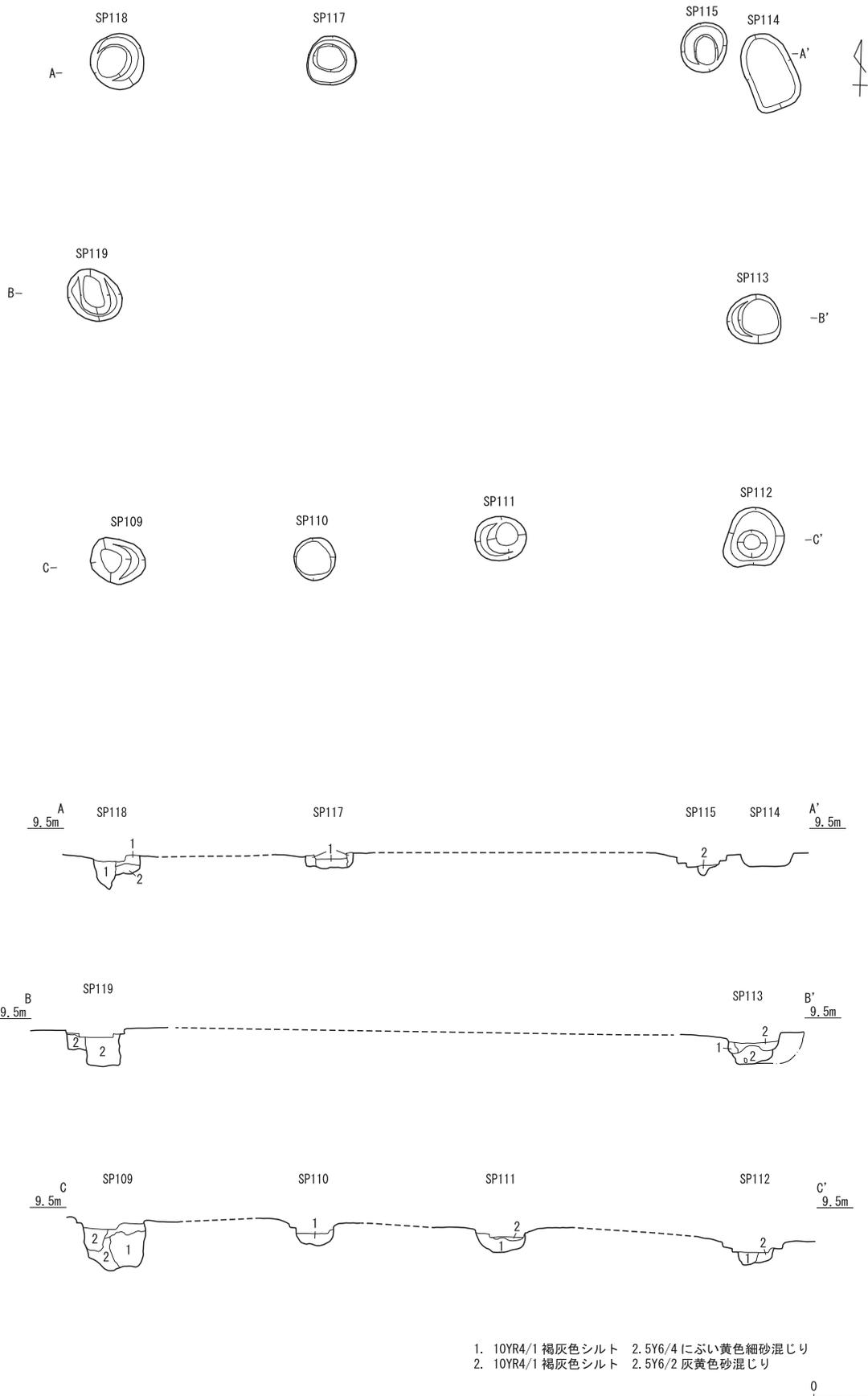


図92 6次1区SB09平・断面図

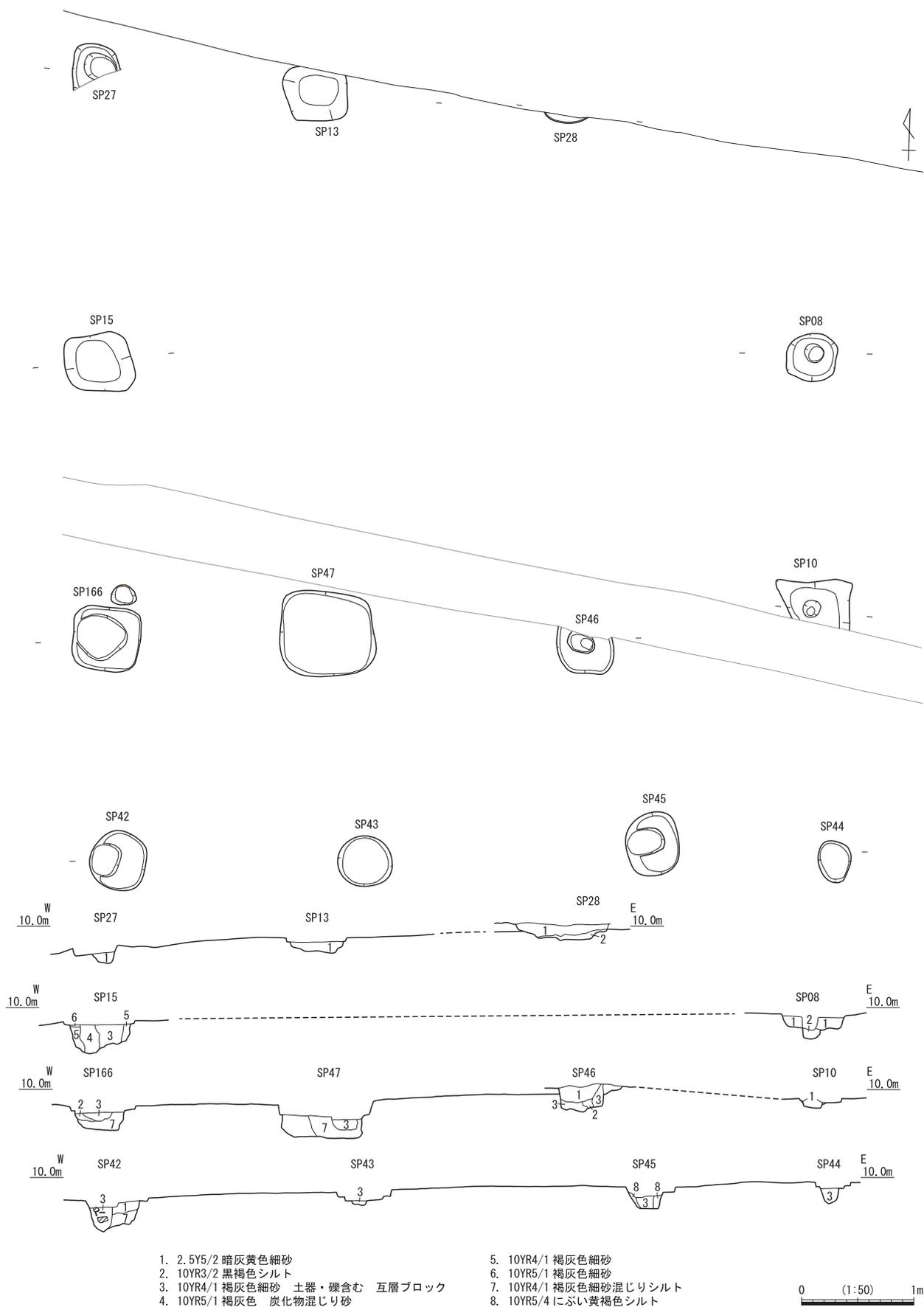


図93 6次1区SB10平・断面図

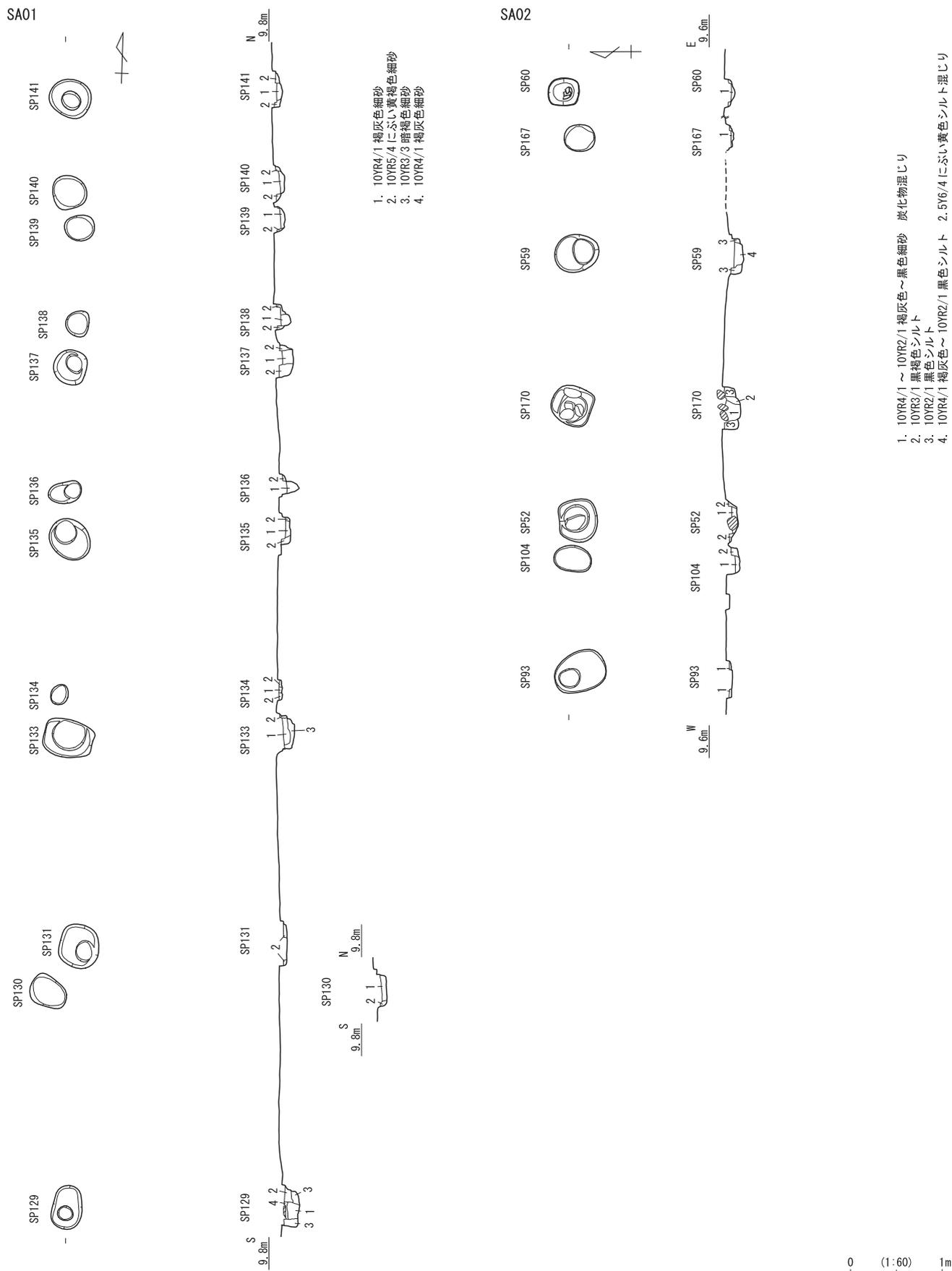


図94 6次1区SA01・SA02平・断面図

SP166で西から2.0m、2.2m、2.1mである。梁行総長5.1m、柱間寸法は7次2区SP27-SP166で北から2.6m、2.5m、SP166と庇を構成するSP42間は2.0mである。この柱筋を基準とした建物の主軸はN2°Wである。柱穴の掘方は円形を呈すものが多いが、隅丸方形を呈すものもある。円形のもの直径30～50cm、隅丸方形のものは一辺50～84cmである。深さは遺構検出面から15～36cmである。図示に耐えうる遺物の出土はなかった。

SA01

(遺物図版84)
(写真図版82-2)

SB02とSB03の西側、SB04の東側にある南北の掘立柱塀である。SB02とSB03との間隔はいずれも1m前後である。7基の柱穴で構成され、南側にさらに伸びる可能性もあるが不明である。延長12.3m、6間分を検出し、柱間寸法は北から1.4m、1.5m、1.85m、2.25m、2.4m、2.9mを測る。SP130、SP134、SP136、SP138、SP140は柵を構成する柱穴とは判断していないが、いずれも柱穴に近接する位置にあり、配置に共通性が認められる。その性格は明らかでないが、作り替えに伴うものか、控えのようなものと想定する。遺構の主軸はN2.5°Wである。柱掘方は円形を呈し、直径28～47cm、8～20cm程度の深さが残存する。残存状況が悪いため明確ではないものの柱痕跡は直径15cm程度である。遺物はSP133から製塩土器1590が出土した。

SA02

(遺物図版84)
(写真図版82-4・5・144)

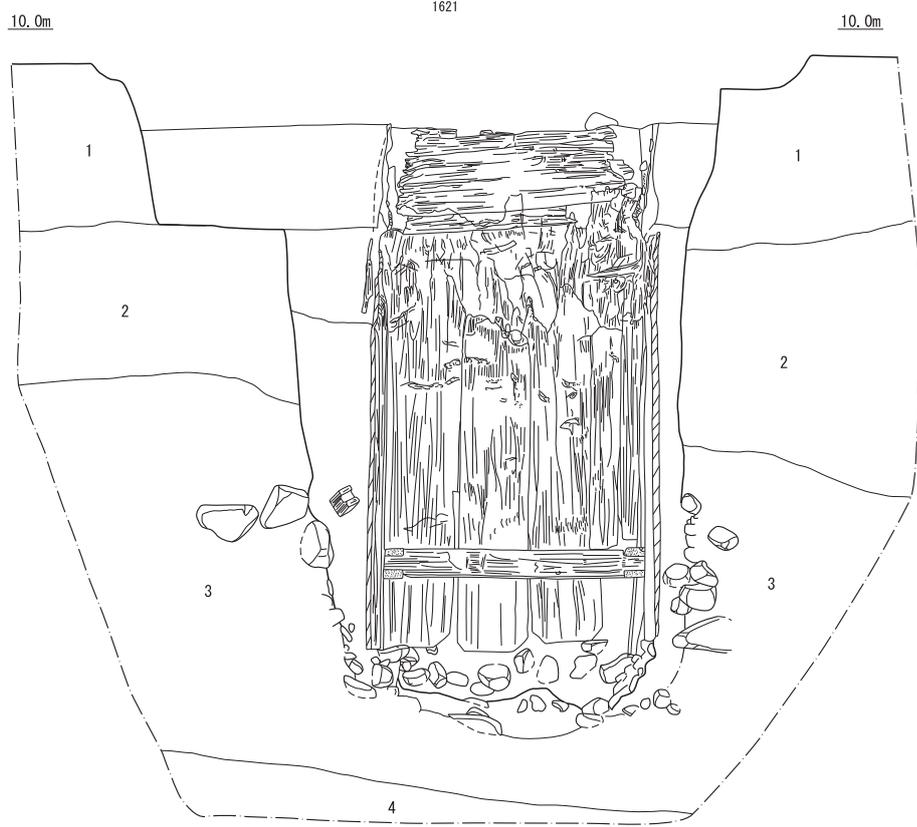
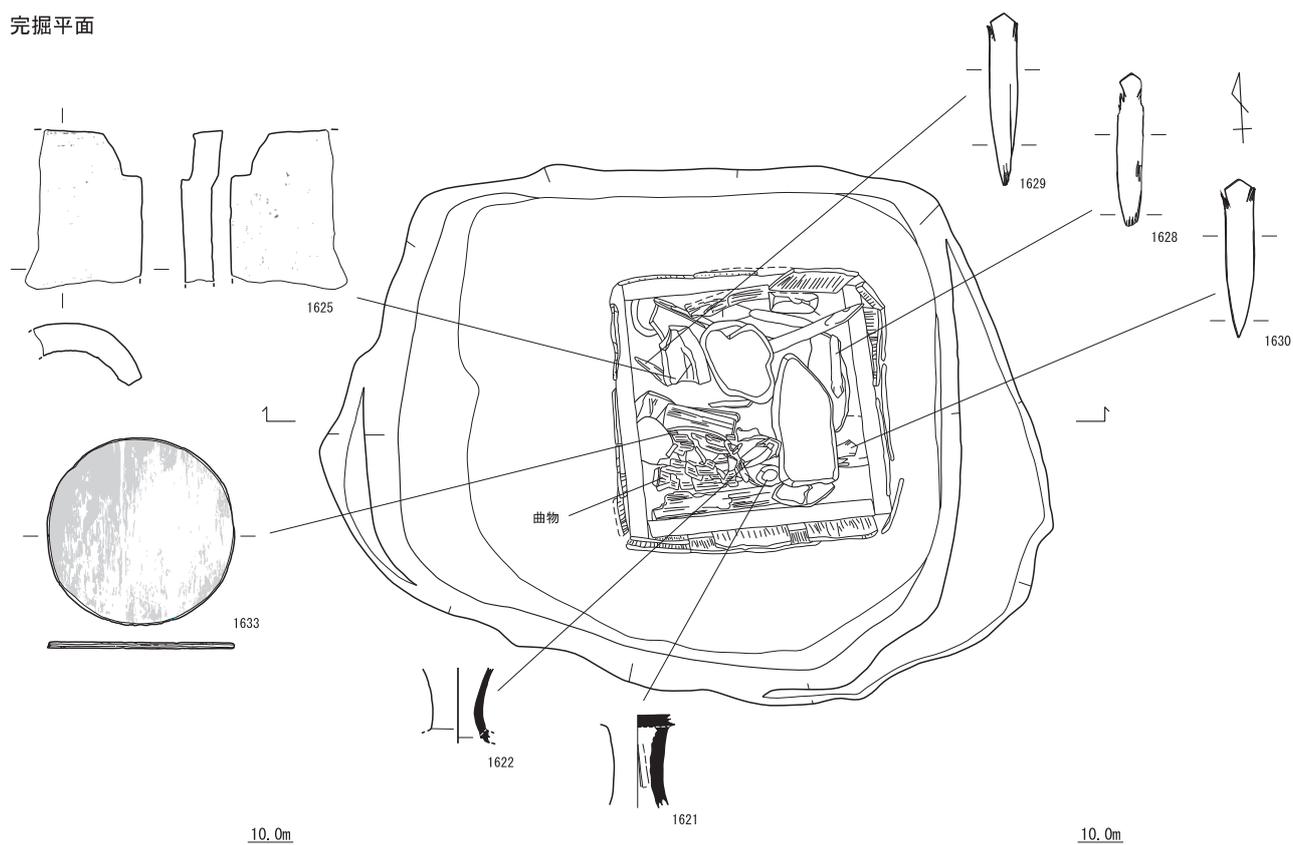
SB07と平面的に切り合う形で検出した東西の掘立柱塀である。5基の柱穴で構成され、対になる柱列が確認できないことから柵とした。SB07とは柱穴の直接の切り合いがないことからその新旧は明らかにできない。延長6.5mで、西から1.3m、1.7m、1.7m、1.8mを測る。柱穴掘方は円形を呈し、直径は30～45cm、深さは遺構検出面から5～20cmである。遺構の主軸はN1°Wに直交する。SP104とSP167は柵を構成する柱穴ではなく、SA01と同様に関連するものと考えている。遺物はSP52の段下げ時に須恵器杯B蓋1591、SP60の底面から須恵器杯B蓋1592、須恵器杯B1593、SP93埋土から埴1594、平瓦1595が出土した。

SE01

(遺物図版85-86)
(写真図版69-70-172-173・214-215)

調査区東部、SB01の東12.5mの位置で検出した。掘方は東西に長い楕円形を呈し、南北1.4m、東西1.9mを測る。深さは遺構検出面から最大で1.83mで、標高は8.2mである。井側は方形縦板組で、支柱は持たず、横棧により固定する。井側は一辺65cm前後、部材は1.4m分残存している。縦板は北面で7枚、東面で5枚、南面で7枚、西面で7枚である。各面はこれらの部材を平行に並べたものではなく、基本的には3～4枚を井戸内側に並べ、3枚程度を背後の押さえとして用いている。西面については、背後に4枚の部材が並び、前面に3枚が間隔を空けた状態で配置されている。押さえとして用いられた部材を除くと、縦板の法量は全長53～93cm、幅は13～25cmである。部材の上部は腐食するため残存長は参考程度にしかならないが、幅は当初の部材の形状を保っている。部材は均一な規格で製作されたものではなく現場合わせで組み合わせられた感が強い。部材の下端を面取りしたものもあり、下端中央を一辺5cm程方形に削り抜いたものもある。写真図版215の井戸枠20には付着物が認められた。保存処理後に確認したため、材質は特定できないが、黒色で表面に光沢が認められる。横棧は一辺68～69cm、幅6.7～9cm、厚さ5cm前後の部材を用い、柄を加工し、組んでいる。井側の上部には横板の痕跡が確認できる。井桁は横板組の可能性はあるが、腐食が著しいため、判然としない。井戸内は円礫及び木片等により充填されており、それらの隙間から土器等が出土した。埋土は明確に分けることはできないが、上部に礫、その下位に礫の少ない土砂、その下位にまた礫があり、再び礫の少ない土砂に至る。調査にあたっては、概ね礫を取り除き、その下の土砂を掘り下げると次の礫が検出されたため、礫の多寡を単位として記録を作成した。断言はできないが、礫と土砂のセットが廃絶時の埋没単位なのかもしれない。遺物は土師器杯1596・1597、土師器杯A1598～1599、土師器皿A1600、土師器甕1601、把手1602、製塩土器1603～1608、須恵器杯B蓋1609・1610、

完掘平面



- 1. 10YR3/2 黒褐色シルト [図 83 12 層]
- 2. 2.5Y5/3 黄褐色細砂 [図 83 13 層]
- 3. 10YR3/1 黒褐色粗砂混じり粘土 礫含む
- 4. 7.5YR5/6 明褐色砂礫 [図 83 14 層]

0 (1:20) 50cm

図95 6次1区SE01平・断面図

第三章 調査の成果

井側検出状況 (A)

東部地区

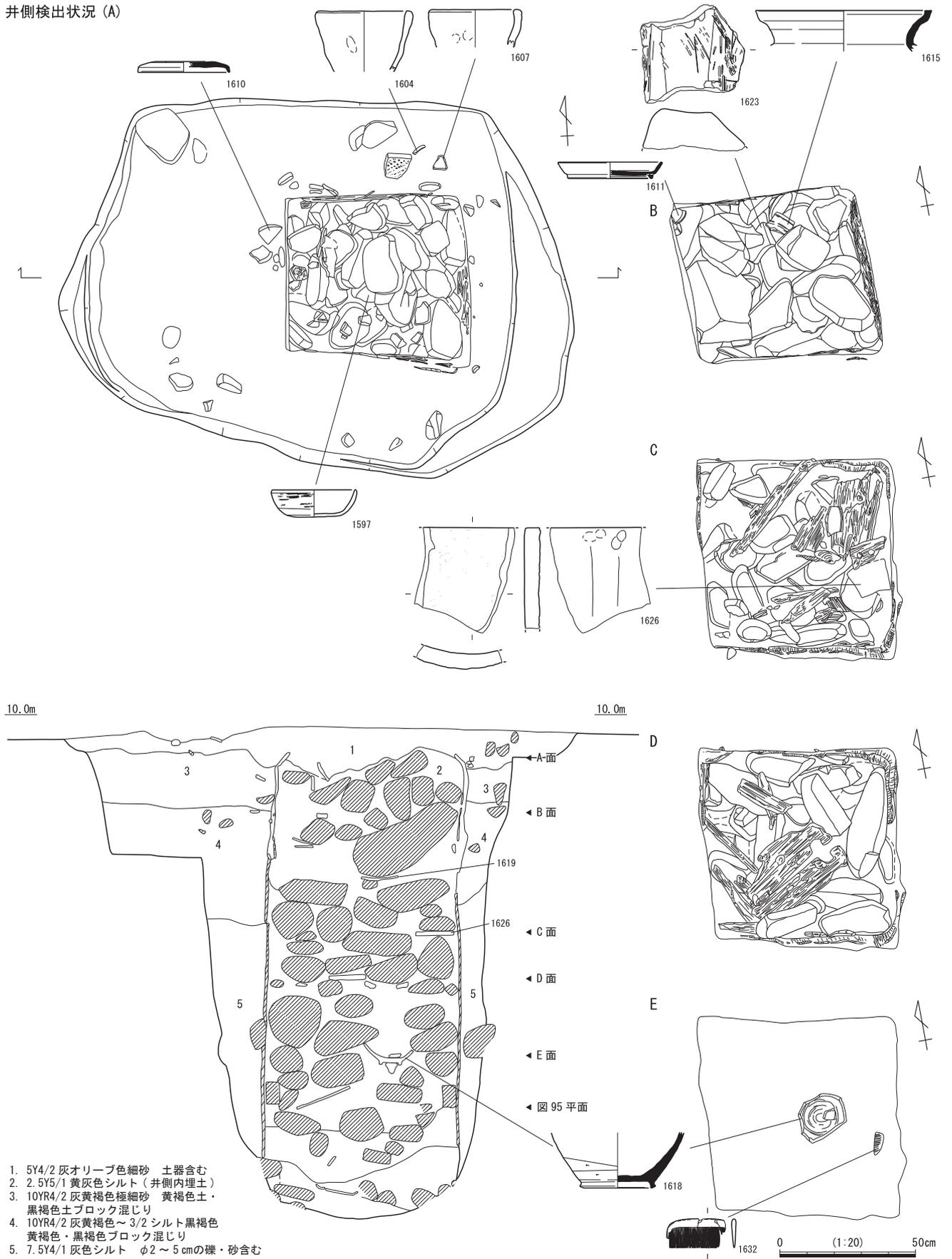


図96 6次1区SE01遺物出土状況図

須恵器皿B 1611、須恵器杯A 1612、須恵器皿A 1613、須恵器壺 1614～1618・1622、須恵器甕 1619・1620、須恵器高杯 1621、砥石 1623、ガラス小玉 1624、丸瓦 1625、平瓦 1626、台石 1627、斎串 1628～1630、横櫛 1631・1632、曲物底板 1633 が、掘方から土師器杯A 1634、土師器甕 1635、製塩土器 1636・1637 が出土した。これらは図 95・96 に示すように各層から出土している。いずれも廃絶時の状況を示すもので、大量の礫とともに木材、土器が投棄されている。E断面から須恵器壺底部 1618 とともに横櫛 1631 が出土している。図 95 に示す平面図は横棧より下の検出状況で、井戸最下層から 30cm 程度上面の位置である。曲物、曲物底板 1633 とともに切掛けのある斎串 1628～1630 が出土した。出土状況から斎串を用いた祭祀は、井戸を埋める途中段階で行われたことがわかる。曲物底板 1633 は表面に漆が薄く付着しており、直径 19.9cm と 5次5区 SE01 出土の漆紙文書よりも一回り大きい、漆容器として使用されたものと推測する。最下層については土砂を全量篩掛けし、土器細片とともにガラス小玉 1624 を検出した。表面は風化し、白色を呈す。その他、オニグルミ核 3点、桃核 9点 が出土している。写真図版 215 の井側 33 はスギ材を用いている。1632 の横櫛はカマツカ製で、1628 の斎串はヒノキ材で作られている（附章参照）。

SE02

(遺物図版87)
(写真図版89-1-137-174)

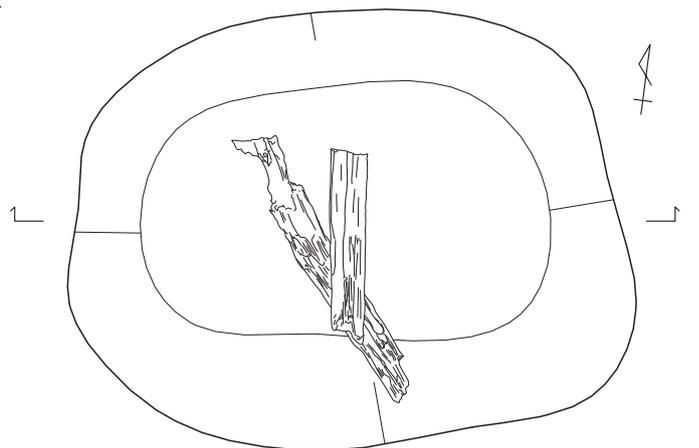
SB04 の南約 2 m の位置で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸 1.6 m、短軸 1.16 m を測る。井側の痕跡は全く確認されなかったが、掘方がほぼ垂直である点、底面の標高が 8.75 m と SE03、SE04 と類似する点、本遺跡では他にこうした形状の土坑が皆無であることから井戸跡と判断した。図 97 の 2 層から板材が出土したが、それ以外は木材は出土していない。遺物は下層の 3 層から土師器杯 1639、土師器杯A 1641、土師器皿A 1642、土師器高杯 1655、砥石 1663 が出土し、最下層の 5 層から製塩土器 1658 が出土した。他は上層にあたる 1 層と 2 層からの出土で、土師器杯 1638、土師器杯A 1640・1643、土師器蓋 1644、土師器高杯 1645、須恵器皿A 1646、須恵器稜椀 1647、須恵器壺 1648、須恵器杯B蓋 1649～1654（1653 は稜椀蓋の可能性もある）、製塩土器 1656・1657、土師器甕 1659、土師器長胴甕 1660、竈 1661、須恵器甕 1662 が出土した。

SE03

(遺物図版88)
(写真図版89-2-4-174-197)

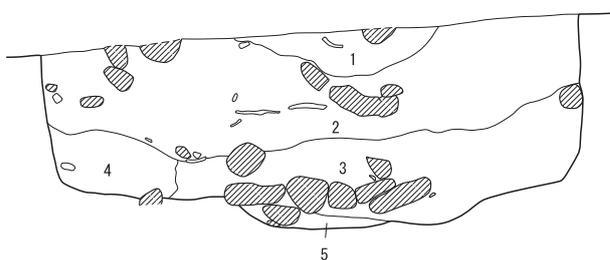
SB05 の南約 3 m の位置で検出した井戸である。検出状況は SD81 に切られ、SD81 の西側に南北 1.2 m、東西 70cm の方形の平面プランを確認した。方形プランの南側には平面的な遺物の広がりを確認した。遺物が広がる範囲は 10cm 程の掘り込みが認められ、これを切り込んで SE03 が構築されている。SE03 掘方北端で直径約 40cm の円形プランを確認した。これらの切り合いを把握するため、SD81 との切り合い部分で断ち割りを行った。円形部分は最下層でわずかに曲物の残存が確認できたことから、5次4区 SE02 と類似する曲物積みの井戸であることが判明した。掘方は最終的に長軸 1.6 m、短軸 1.35 m を測り、深さは遺構検出面から 86cm である。曲物の直径は 35cm で最下層一段だけ残存していた。掘方底面の標高は 8.63 m で、円礫を円形に組んだ上に曲物を設置していた。曲物の上部には曲物を固定するためと見られる板材が散見された。断面からも明らかなようにこれらが一連で SE03 となる。しかしながら、曲物を検出した位置が、掘方の北東寄りに偏る点、南西部の掘方が方形を呈し、そこから何らかの部材とみられる板材が多数出土していることから作り替えがあった可能性も否定できない。遺物は、曲物上層から土師器長胴甕 1680 が、下層から土師器杯 1666、土師器杯A 1668、土師器杯か皿 1673、墨書土器 1676、須恵器皿A 1677、須恵器土錘 1678・1679 が出土した。1668 は曲物内と掘方の破片が接合している。掘方からは土師器皿A 1667、墨書土器 1672、須恵器杯A 1674・1675、須恵器甕 1681 が出土した。上層からは土師器杯 1664・1665、土師器皿A 1669、土師器杯A 1670・1671 が出土した。図示していないが、掘方から漆付着土器が 1 点出土している。

SE02



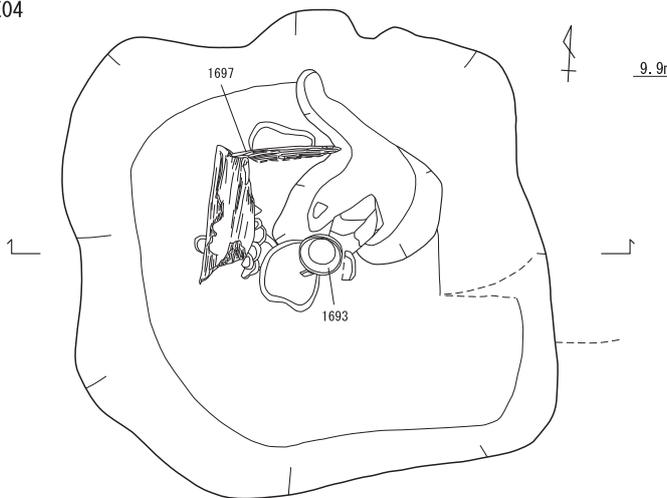
9.4m

9.4m



- 1. 10YR3/1 黒褐色シルト
- 2. 10YR3/1 黒褐色シルト
- 3. 10YR3/1 黒褐色シルト
- 4. 10YR3/1 黒褐色粘土
- 5. 10YR3/1 黒褐色砂

SE04

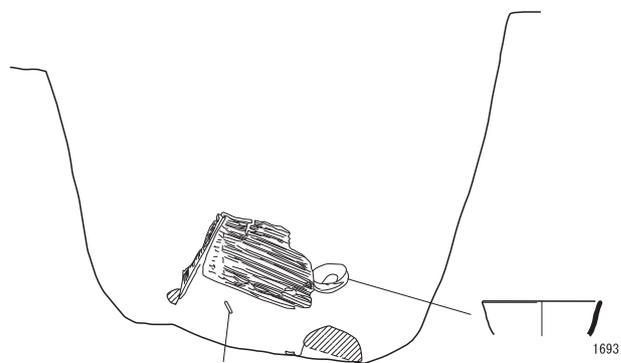


9.9m

9.9m

9.9m

9.9m



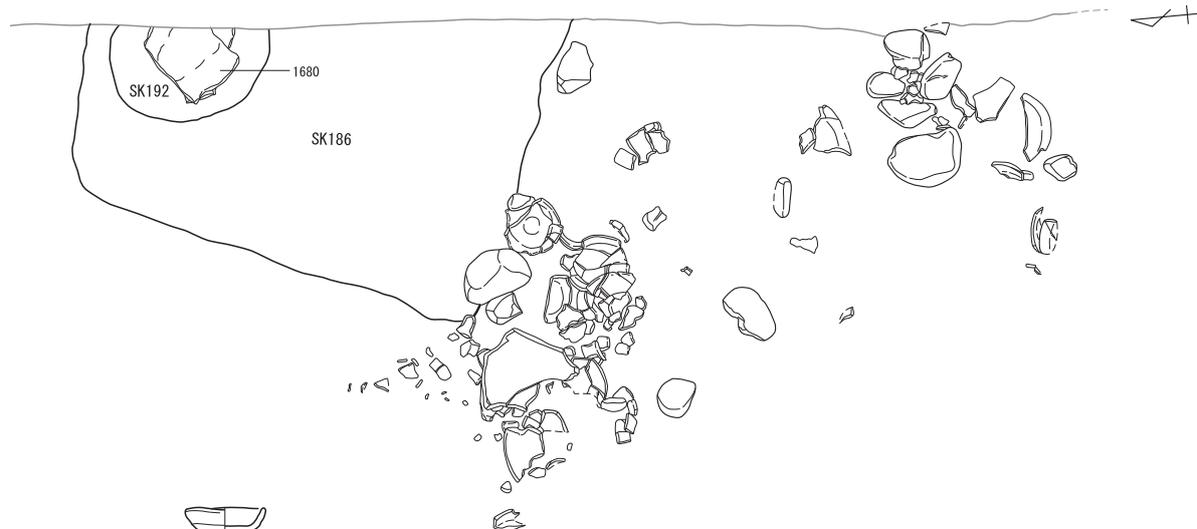
IV層 シルト

- 1. 5Y5/2 灰オリーブ色砂
- 2. 2.5Y5/1 黄灰色シルトブロック
- 3. 2.5Y5/1 黄灰色砂シルト混じり
- 4. 10YR6/8 明黄褐色細砂
- 5. 10YR3/1 黒褐色シルト
- 6. N4/ 灰色シルト
- 7. 2.5GY6/1 オリーブ灰色砂 グライ化

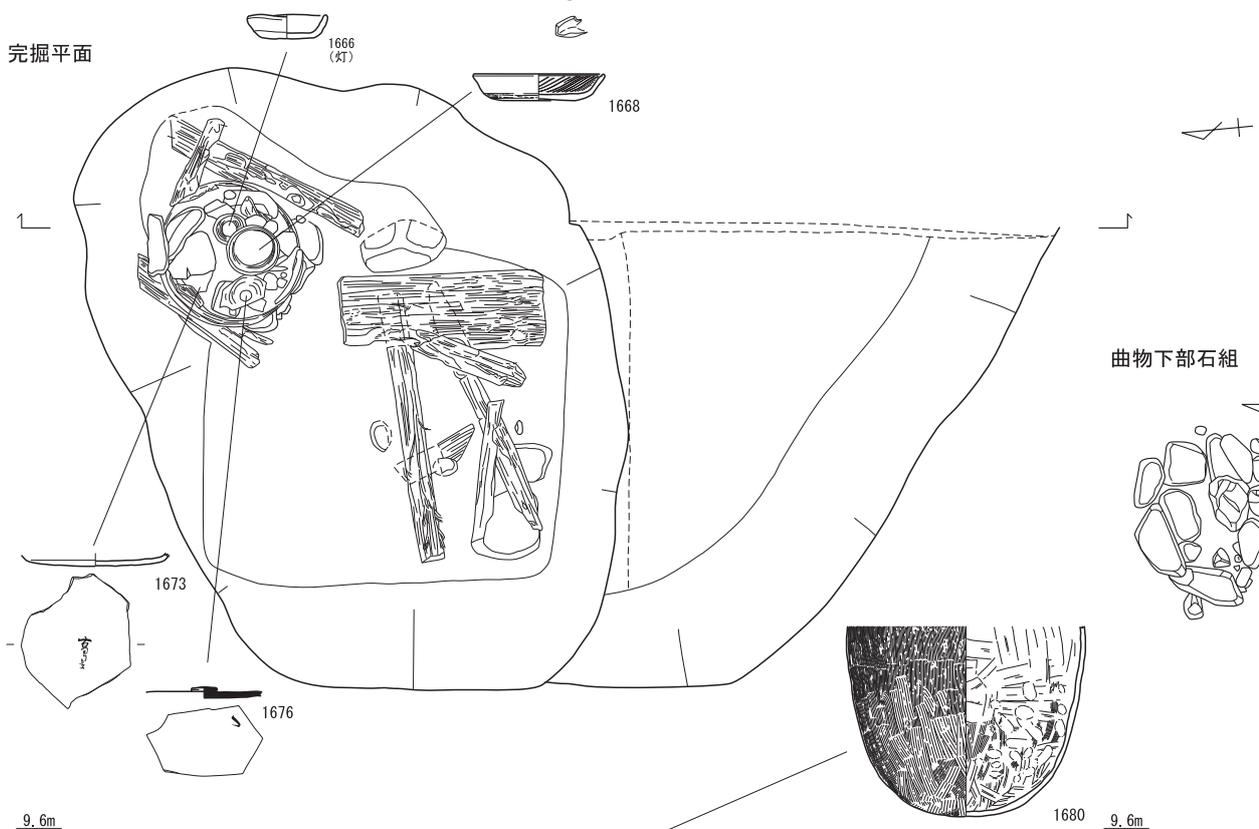
0 (1:25) 50cm

図97 6次1区SE02・SE04平・断面図

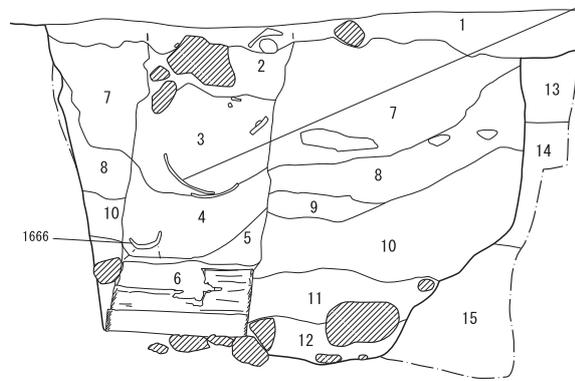
検出状況



完掘平面



曲物下部石組



1. 10YR3/1 褐灰色細砂 黄色砂混じり
2. 10YR4/1 褐灰色細砂
3. 10YR4/1 褐灰色細砂 炭化物多量に含む
4. 10YR3/1 黒褐色粘土
5. 10YR3/1 黒褐色砂混じり粘土
6. 10YR4/1 褐灰色礫混じり砂
7. 10YR3/1 黒褐色～2.5GY6/1 オリーブ灰色砂 φ3.5cmの礫混じり
8. N4/ 灰色～2.5GY オリーブ灰色砂
9. N4/ 灰色シルト
10. 2.5GY オリーブ灰色砂
11. 5Y5/2 灰オリーブ色細砂
12. 5G6/1 緑灰色シルト混じり砂
13. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
14. 2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂
15. 7.5GY7/1 明緑灰色砂

0 (1:20) 50cm

図98 6次1区SE03平・断面図

SE04

(遺物図版89)
(写真図版89-5-7-174-197-217)

SB08の東約1mの位置で検出した井戸である。掘方は隅丸方形を呈し、一辺約1.3mを測る。深さは遺構検出面から85cmで、標高は8.91mである。下層で方形に組んだ横板の残欠を確認した。板の残存状況は悪く、構造を把握することはできなかった。底面に対し、やや斜めになっており、原位置を留めていない可能性もある。この木組みは井側ではなく、湧水層に設置した施設かもしれない。その内部にあたる埋土から土師器杯A 1687、須恵器杯1693、和同開珎1697が出土した。埋土には礫が大量に含まれ、一気に埋められたことがわかる。埋土上層から土師器杯1682・1686、土師器杯A 1683、土師器杯か皿1688、土師器杯B蓋1689、須恵器皿A 1691、須恵器杯B蓋1694・1696が出土した。下層からは土師器杯A 1684・1685、土師器高杯1690、須恵器杯A 1692、須恵器杯B蓋1695が出土している。図示していないが、漆の付着した須恵器杯、須恵器甕、須恵器壺、土師器甕の破片が出土している。

SR01

(遺物図版90)
(写真図版77-2-3)

調査区ほぼ中央を南北に縦断する旧流路である。検出規模で延長31.6m、幅は最大で19mを測る。深さは遺構検出面から最大で2mである。断面から少なくとも2時期に分けられる。下層については、調査区で地山とした堆積層の下位にも及び、断ち割り範囲を超えて広がっている。このことから下層は8次1区と同様に地形形成に伴う堆積と考えられる。ここでSR01とした遺構は、上層を中心とし断面で観察できる範囲に限定している。調査時にはSR01に近接してJRの連絡橋が残存していたことから安全上SR01全域の調査は行わず、2ヶ所の断割調査に留めた。建物部分で記述したように、SR01に該当する範囲は軟弱地盤となっている。このためSR01埋土上層から奈良時代の遺物が沈みこんだ状態あるいは突き刺さった状態で出土している。しかし、SR01自体は奈良時代には完全に埋没していることは明らかである。SR01は兵庫県の実施した「豆腐町I次」と「豆腐町II次」で検出したSR01とつながるが、兵庫県の調査では奈良時代に埋没した流路と位置づけられている。しかし、本調査区での検出状況を見る限り、その位置づけは適切ではない。遺物は弥生土器壺1698・1699、甕1700が出土した。いずれも細片であるが弥生時代中期に位置づけられる。「豆腐町I次」では古墳時代の土器等も報告されていることからSR01上層については弥生時代中期から古墳時代にかけて埋没したと考える。

道路遺構

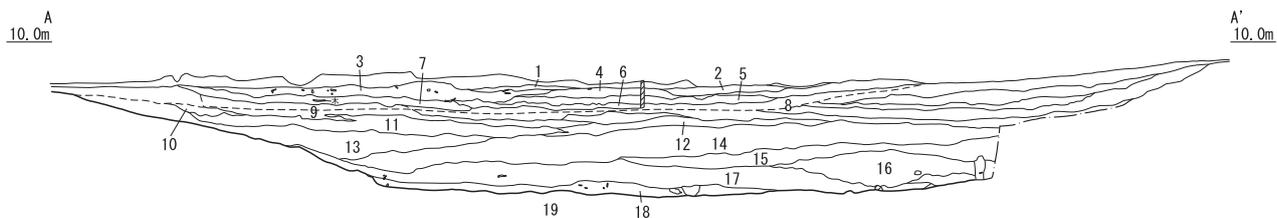
(写真図版78-79)

かつて、姫路駅構内のホーム間を連絡していた高架橋基礎の下位で、平行する溝SD02、SD03、SD04、SD05を検出した。その間隔は調査区西端のSD04とSD05の心々距離で6.6m、SD04の北端とSD03の北端との心々距離で6.5mと一定の間隔となっている。溝と溝の間は基本的に空地となり、同時期の遺構は存在しない。波板状凸凹等の道路特有の構造は全く認められなかったが、一定の間隔を持ち、直線的に延びる状況、周辺の遺構検出状況との差異を勘案し、これら一連の遺構を道路跡と考えた。以下に道路に伴う遺構を個別に報告する。

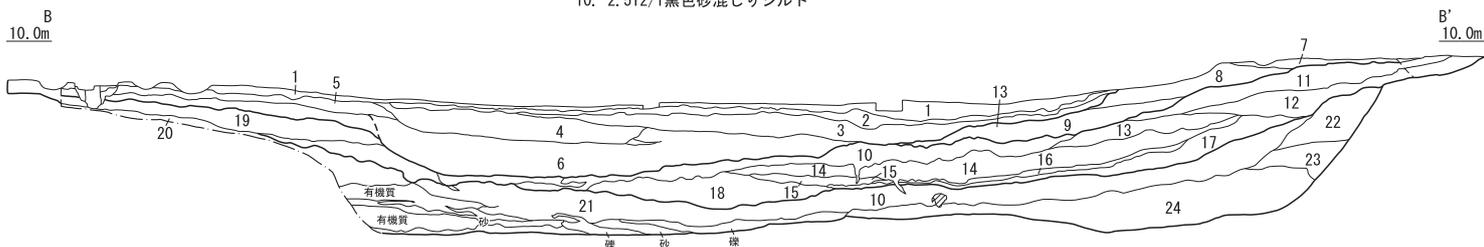
SD02

(遺物図版90)
(写真図版71-1-3-80-1-2-142-175)

道路の北側溝を構成する溝で、SD03の内側に位置する。調査区ほぼ中央部で延長23.1mを検出した。溝は3条に分かれるが、位置的に一連のものと判断した。溝の両肩は直線的でなく、浸食によるものか出入りが認められる。幅は最大で60cmを測り、深さは遺構検出面から概ね7cmでほぼ一定である。溝底の標高は東端で9.85m、西端で9.28mで地形の変化に沿って掘られている。溝底は写真図版80-2にみるように凹凸が顕著に認められる。SD02の出土遺物は細片が多く、特に東端の溝内からまとまって出土した。土師器杯1701～1703、須恵器杯A 1704・1705、須恵器杯B 1706、1708、須恵器杯B蓋1707、須恵器稜椀1709、土師器甕1710、勾玉1711を図示した。このうち1701・1704・1707・1708・1711は東端の溝内から出土した。図示はしていないが、漆付着土器が4点出土している。



- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1. 10YR3/1黒褐色シルト～粘土 (遺構検出面) | 11. 10YR4/1褐灰色細砂 |
| 2. 10YR2/1黒色粘土 | 12. 10YR3/1黒褐色細砂 |
| 3. 10YR3/1黒褐色シルト | 13. 10YR3/1黒褐色砂混じりシルト |
| 4. 10YR3/1黒褐色粘土 | 14. 10YR2/1黒色粘土 |
| 5. 2.5Y3/1黒褐色細砂 | 15. 10YR2/1黒色シルト |
| 6. 2.5Y2/1黒色シルト | 16. N1.5/ 黒色粘土 (有機質) |
| 7. 2.5Y6/4にぶい黄色細砂 | 17. 10YR1.7/1黒色粘土 (有機質) |
| 8. 10YR4/1褐灰色細砂 | 18. 10YR2/1黒色砂混じりシルト |
| 9. 2.5Y2/1黒色中砂 | 19. 10YR2/1黒色シルト |
| 10. 2.5Y2/1黒色砂混じりシルト | |



- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1. 10YR3/1黒褐色シルト～粘土 (遺構検出面) | 13. 10YR3/1黒褐色砂混じりシルト |
| 2. 10YR2/1黒色粘土 | 14. 10YR2/1黒色粘土 |
| 3. 10YR3/1黒褐色シルト | 15. 10YR2/1黒色シルト |
| 4. 10YR3/1黒褐色粘土 | 16. N1.5/ 黒色粘土 (有機質) |
| 5. 2.5Y3/1黒褐色細砂 | 17. 10YR1.7/1黒色粘土 (有機質) |
| 6. 2.5Y2/1黒色シルト | 18. 10YR2/1黒色砂混じりシルト |
| 7. 2.5Y6/4にぶい黄色細砂 | 19. 10YR2/1黒色シルト |
| 8. 10YR4/1褐灰色細砂 | 20. N8/ 灰白色砂 |
| 9. 2.5Y2/1黒色中砂 | 21. 10YR3/2黒褐色粗砂・礫混じり細砂 有機質含む |
| 10. 2.5Y2/1黒色砂混じりシルト | 22. 10YR2/2黒褐色細砂 |
| 11. 10YR4/1褐灰色細砂 | 23. 5Y5/2灰オリーブ色細砂 |
| 12. 10YR3/1黒褐色細砂 | 24. 5Y4/2灰オリーブ色粗砂 |

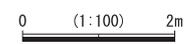


図99 6次1区SR01平・断面図

SD03

(遺物図版91)
(写真図版80-3-5-137-
175-216)

SD02の北で検出した溝である。延長19.6mを検出した。SD02と同様、溝の両肩は直線的ではなく波打っている。幅は最大で1.55m、最小で56cmである。溝底の標高は東端で9.7m、西端で9.21mである。地形が落ち込むSR01の上面にあたる部分では溝の北肩に沿って、板材及び杭が認められた。杭はSD03の底面からSR01埋土に15～35cm程打ち込まれている。杭の平面配置には規則性が認められず、性格について断言はできないが、検出位置が旧流路の上位にあたり、軟弱地盤であることから護岸の可能性が考えられる。地形の高まった部分には北からSD327が合流する。切り合いが確認できないことから一連の遺構と判断できる。SK208についても検出時には切り合いを認めたが、SK208内に杭等も存在することからSD03と一連の遺構の可能性もある。遺物は地形の落ち込む部分から出土したが、明確なまとまりをもつような出土状況ではなかった。土師器皿A 1712～1714、土師器杯A 1715～1718、須恵器壺K 1719・1726、須恵器杯B蓋 1720・1721、須恵器杯A 1722、須恵器杯B 1723～1725、土師器甕 1727～1730、弥生土器二重口縁壺 1731、製塩土器 1732～1738、紡錘車 1739等が出土した。1731は下層のSR01に伴うものかもしれない。図示はしていないが、漆附着土器が7点出土している。

SD04

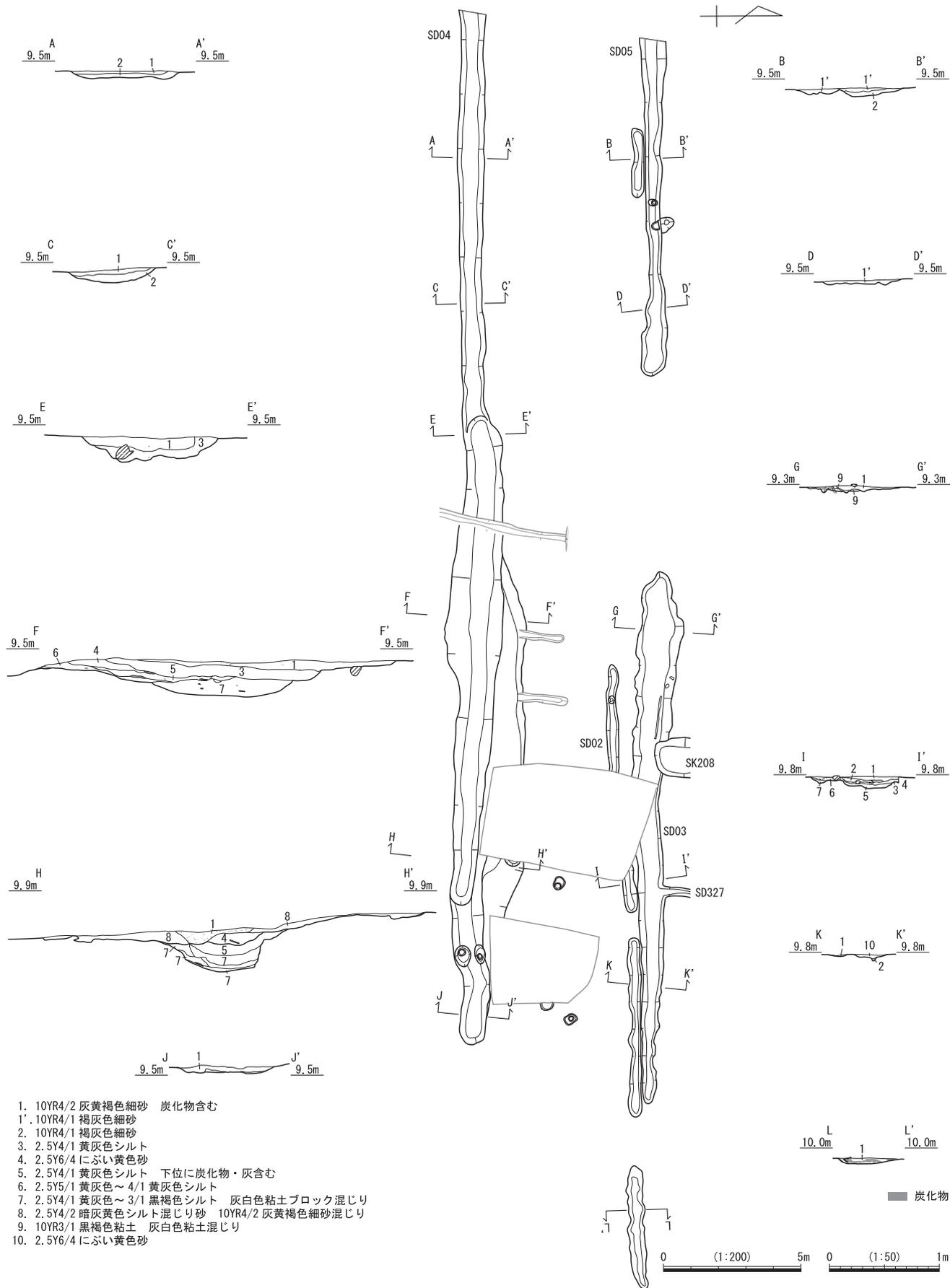
(遺物図版92-96)
(写真図版80-6-81-2-
6-139-141-175-177-197)

JRの高架橋基礎の南で検出した溝である。調査区外に延びるが検出規模で延長38.1m、幅は最大で2.96m、最小で78cmである。両肩は西側では出入りが激しいが、SD05と対応する東側では直線的となる。溝の断面は基本的に皿状を呈し、SR01上面にあたる部分は一段深く掘り下げられている。深さは遺構検出面から最大で47cm、浅い箇所でも12cmである。溝底の標高は東端で9.68m、西端で9.34mである。最深部で9.03mを測る。埋土は基本的に黄灰色から黒褐色のシルトもしくは細砂で、炭化物や土器片を含む。遺物は完形に近いものを含めて溝東側の一段深くなった部分からまとまって出土した。ただ、6次3区や6次4区で検出した2-SD01や2-SD02の出土状況とは異なり、一度に廃棄された様相ではない。出土遺物には大きな時期差はないと思われるが、廃絶に伴って廃棄されたものと機能時に廃棄されたものが混在している。廃絶に伴う一括資料ではなく、ある程度時期幅をもった資料群と考えている。土師器杯 1740～1744・1767、土師器皿A 1745・1746・1754、土師器杯A 1747～1753・1755、墨書土器 1756～1758、線刻のある土器 1759、土師器高杯 1760～1762、製塩土器 1763～1766、須恵器杯A 1768～1775、墨書土器 1776～1779、須恵器稜椀 1780・1781、須恵器杯B 1782～1796、須恵器杯B蓋 1797～1805、須恵器稜椀蓋 1806、須恵器高杯 1807、ミニチュア土器 1808、土師器甕 1809～1819、1821、竈 1820、不明土製品 1822、須恵器壺 1823～1832、須恵器甕 1833～1836、丸瓦 1837・1838等が出土した。図示したもの以外に漆附着土器が10点している。

SD05

(遺物図版96)
(写真図版78-81-1-178-
197)

SD03の西7.3mの位置で検出した溝で、調査区外に延びる。本来SD03と一連の溝と考えられるが、両者の間は溝が存在していない。検出規模で延長12.4m、幅は最大で1mを測り、SD03に比べ、両肩は直線的である。東端から西へ約3.5mの位置で、SD04側に溝状の掘り込みを検出した。SD03に対するSD02のような位置づけで、溝の作り替えを示すのであろう。断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から10cm前後で、溝底の標高は東端で9.32m、西端で9.34mを測り、概ね一定である。埋土は基本的に灰黄褐色の細砂で炭化物をほとんど含んでいない。遺物の出土状況に特筆すべき点はなく、埋土に含まれた状態で出土した。SD04に比べると細片が多い。土師器杯 1839・1840、土師器皿A 1841、土師器杯A 1842・1843、製塩土器 1844、土師器高杯 1845、須恵器杯A 1846、須恵器杯B 1847、須恵器稜椀 1848、須恵器杯B蓋 1849～1851、須恵器壺蓋 1852、須恵器皿A 1853、須恵器高杯 1854、須恵器片口鉢 1855等が出土した。図示はしていないが、漆附着土器が3点出土している。



- 1. 10YR4/2 灰黄褐色細砂 炭化物含む
- 1'. 10YR4/1 褐灰色細砂
- 2. 10YR4/1 褐灰色細砂
- 3. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
- 4. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂
- 5. 2.5Y4/1 黄灰色シルト 下位に炭化物・灰含む
- 6. 2.5Y5/1 黄灰色～4/1 黄灰色シルト
- 7. 2.5Y4/1 黄灰色～3/1 黒褐色シルト 灰白色粘土ブロック混じり
- 8. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり砂 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じり
- 9. 10YR3/1 黒褐色粘土 灰白色粘土混じり
- 10. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂

図100 6次1区道路遺構平・断面図

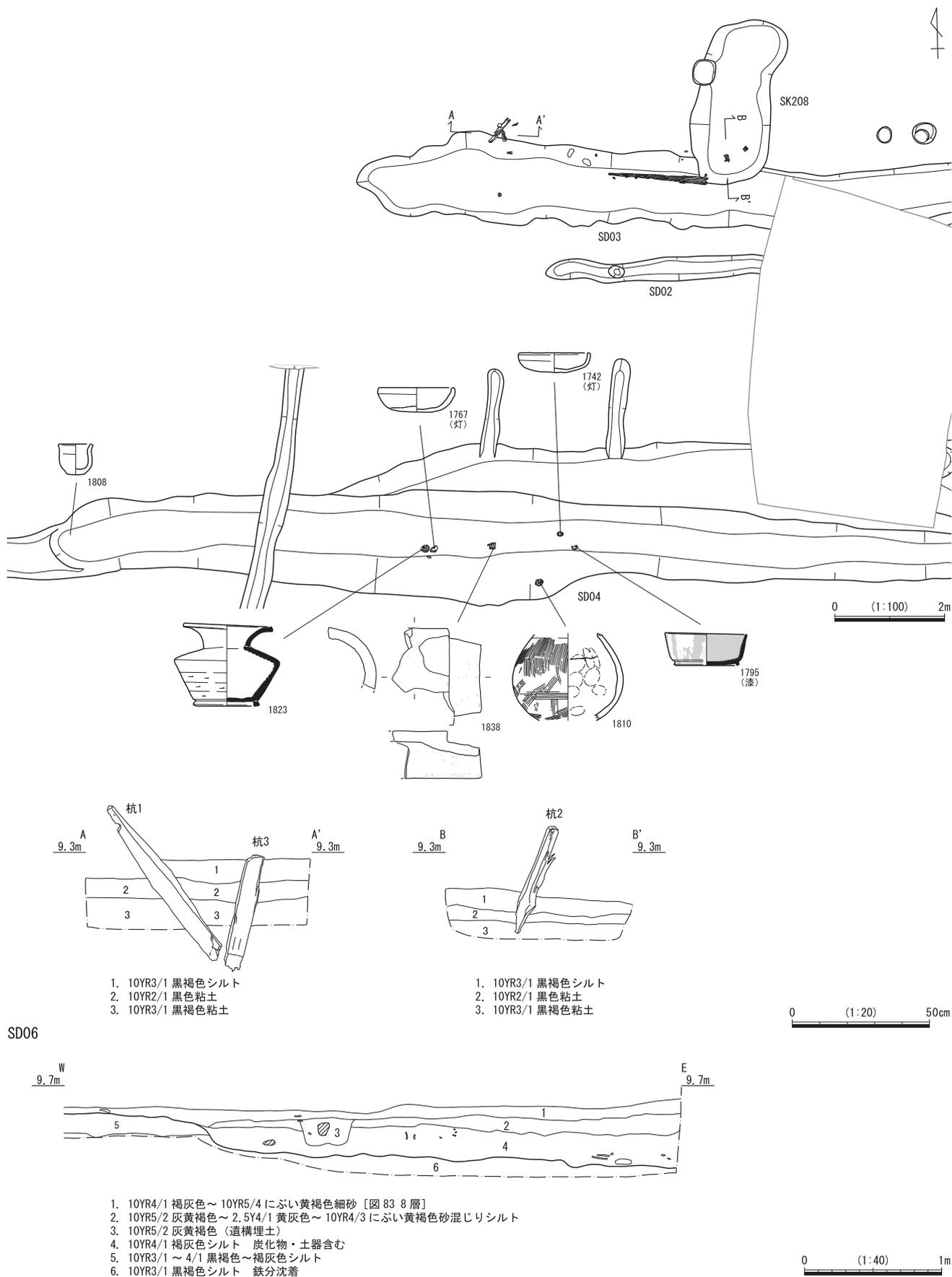


図101 6次1区SD03・SD04平面図、杭断面図、SD06断面図

SD06

(遺物図版96)
(写真図版90-1-178-197)

調査区南西隅で検出した溝である。調査区内では北肩のみの検出に留まったが、豆腐町Ⅱ-1区SK02と7次3区SD02と一連の遺構である。東肩部分の延長5.8m、幅は最大で2.5mである。深さは遺構検出面から35cmを測る。遺物は全体的に残りがよく土師器杯A 1856、須恵器杯B蓋 1857、墨書土器 1858、土師器甕 1859、須恵器平瓶 1860、須恵器甕 1861等が出土した。

SD75

(遺物図版97)
(写真図版178)

SA02の南50cmで検出した南北方向の溝である。調査区外に延びるため全容は不明であるが、検出規模で延長4.94m、幅は最大で50cmを測る。断面は皿状を呈し、南側に比べ北側がやや深く掘り込まれている。深さは遺構検出面から最大で15cm、溝底の標高は北端で9.39m、南端で9.43mである。溝の中軸線で計測した主軸はN 4.5° Eである。埋土は褐灰色の細砂である。遺物は土師器皿A 1862、土師器杯A 1863、製塩土器 1864、土師器甕 1865・1866、熨斗瓦 1867、平瓦 1868が出土した。溝底から1863、1867、1868が出土した。溝底で柱穴を2基検出した。

SD78

(遺物図版97)
(写真図版90-3-178-197)

SD75の東2.8mの位置で検出した溝である。SD75と平行し、北端も概ね揃っており、関連がうかがえる。調査区外に延びるために全容は不明であるが、検出規模で延長4.55m、幅は最大で60cm、深さは遺構検出面から18cmを測る。断面は皿状を呈し、埋土は褐灰色の細砂のほぼ一層である。遺物は溝北部の底面から須恵器杯B蓋 1877、土師器長胴甕 1875・1876等が出土した。埋土中からは土師器杯 1869、土師器杯A 1870、土師器皿A 1871～1874、須恵器杯B蓋 1878・1879、須恵器稜椀 1880、須恵器壺 1881・1882、須恵器甕 1883等が出土した。図示していないが、漆附着土器が1点出土している。

SD81

(遺物図版98)
(写真図版90-2-178-197)

SD04を横断し、道路上まで延びる溝である。検出状況から道路遺構が埋まった後に掘られた遺構である。その他、SB05を構成する柱穴及びSK176(図面表記は逆)、SE03の上面に位置する。北端は整地層掘り下げ時に発掘したため残存していない。南側は調査区外に延びる。検出規模で延長は14.9m、幅は最大で70cmである。溝の断面は皿状を呈し、埋土は褐灰色から灰黄褐色の細砂で炭化物を含む。埋土は他の遺構とは差はないが、遺構検出面が前述した遺構よりも6cm高く、深さは15cm前後である。溝の底面の標高は北端で9.42m、南端で9.44mである。溝は東偏し、SD188と平行するように検出した。遺物は埋土から出土し、溝北部の底面から出土した状況を図示したが本来溝に伴うかどうか不明である。遺物の様相からは、周辺の遺構よりも時期が下るような傾向は何もないが、混入の可能性もある。遺物は、土師器杯 1884・1885、土師器杯A 1886、須恵器稜椀 1887～1889、須恵器皿A 1890、須恵器杯B 1891・1892、須恵器杯B蓋 1893・1894、線刻土器 1895、墨書土器 1896、土師器甕 1897、須恵器甕 1898等である。

SD171

(遺物図版99)

SB05と平面的に重なる位置で検出した。SB05を構成する柱穴SP257に切られるSP258を切るが、SB05との直接の切り合いがないため、その新旧は判断できない。延長5.2m、幅は最大で40cm、深さは遺構検出面から10cm前後である。溝の中軸線で計測した主軸はN 2° Wである。断面は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は褐灰色の細砂で、炭化物・土器片等を含む。遺物は土師器皿A 1899、須恵器杯B蓋 1900・1901、須恵器杯B 1902・1903、平瓦 1904等が出土した。

SD178

(遺物図版99)
(写真図版197)

SD171の東1.5mで検出した溝で、溝の主軸、検出位置、規模等はSD171に類似することから関連がうかがえる。延長は4.55m、幅は溝の南部で広がり最大70cm、最小33cmである。断面は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土も褐灰色細砂で、土器片等を含む。遺物は土師器杯 1905・1906・1908、墨書土器 1907、製塩土器 1912、須恵器杯B 1909、須恵器壺 1910、土師器甕 1911等が出土している。

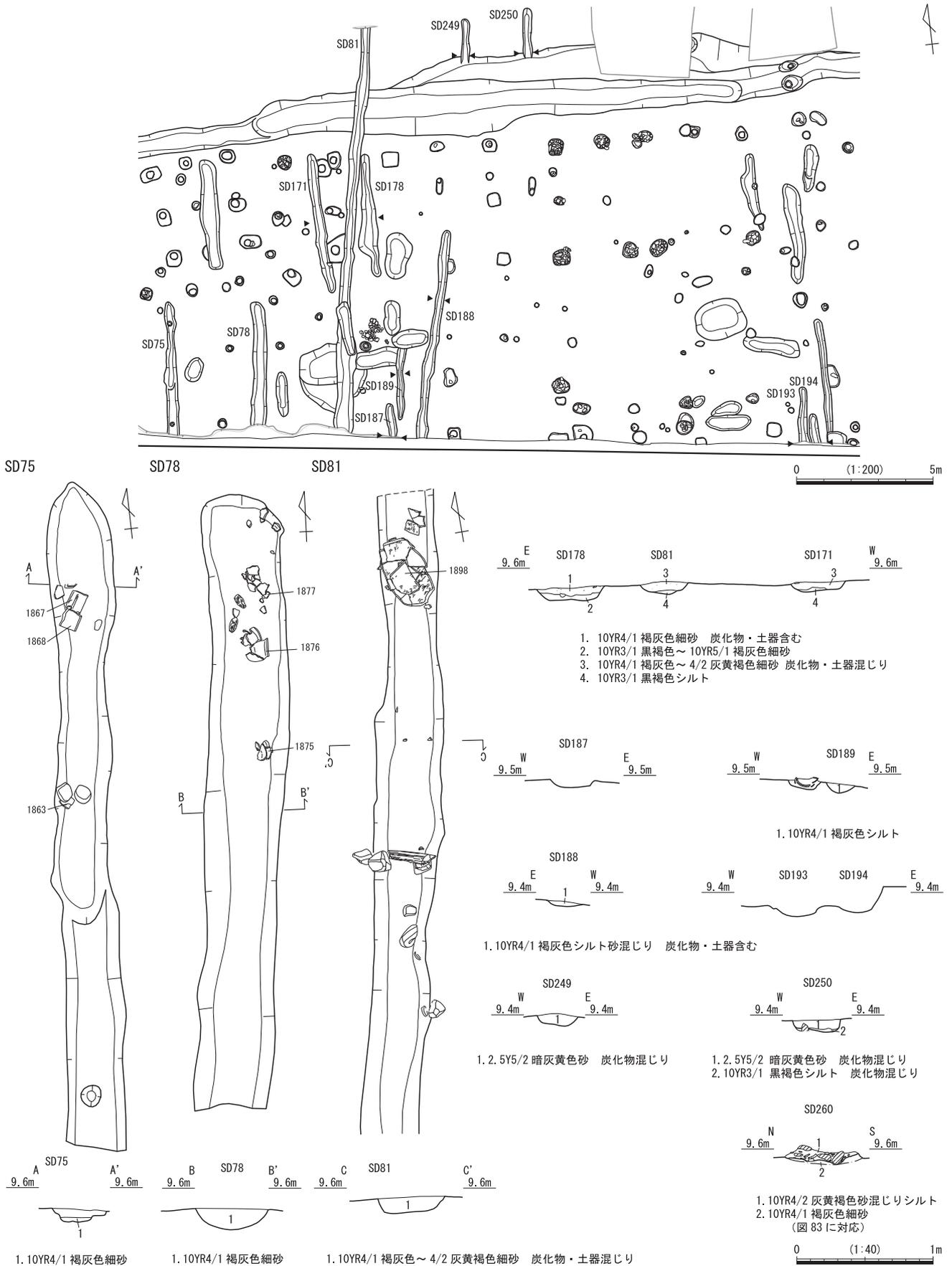


図102 6次1区SD75・SD78・SD81・SD171・SD178・SD187・SD188・SD189・SD193・SD194・SD249・SD250・SD260平・断面図

- SD187**
(遺物図版99) SD81の東1.3mで検出した。南端は調査区外に延びることから土坑の可能性もある。検出規模で延長1.3m、幅は最大で32cm、遺構検出面からの深さは10cm前後である。埋土から細片であるが土師器杯A 1913、須恵器杯B蓋 1914、須恵器甕 1915、竈 1916等が出土した。
- SD188**
(遺物図版100) SD81の東3.4mの位置で検出した溝である。SD81と平行し、調査区外に延びる。SB05を構成するSP220を切ることからSB05より後で掘られたものである。延長7.7m、幅は最大で70cmを測る。断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から5cm前後と極めて浅い。溝底の標高は北端で9.21m、南端で9.33mである。SD188の延長上にSD249があり、直接のつながりはないものの、検出位置から接続する可能性も否定できない。遺物は埋土から製塩土器 1918～1921、須恵器壺 1922等が出土した。図示していないが、漆が付着した土師器杯が出土している。出土遺物から時期差は認められないが、SD81と同様、後出する遺構と考えられる。
- SD189**
(遺物図版99) SD187の東側で検出した。SK253を切り、北端をSK252に切られる。延長2.6m、幅は30cm、深さは遺構検出面から8cmを測る。埋土は褐灰色のシルトである。遺物は少なく、土師器皿 1917を図示した。
- SD193**
(遺物図版100) SB04の南約4.5mの位置で検出した調査区外に延びる溝である。延長2.0m、幅は38cm、断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から10cm前後である。遺物は須恵器杯B 1923、製塩土器 1924を図示した。
- SD194**
(遺物図版100) SD193の東接した位置で検出した。土坑の可能性もあるが、SD193等と類似した様相を示すことから、ここでは溝と考えた。延長1.1m、幅は34cm、深さは遺構検出面から20cmを測る。埋土から土師器皿A 1925・1926、須恵器杯A 1927等が出土した。
- SD249**
(遺物図版100) SD81の東3.3mの位置で検出した。図102ではSD04に切られるように図示しているが、本来はSD04を切っている。検出状況では直接つながらないが、SD188に接続する可能性を有す。検出規模で延長1.6m、幅は28cm、深さは遺構検出面から10cm前後である。遺物は須恵器皿B蓋 1928、須恵器壺 1929、竈の庇 1930等が出土した。
- SD250**
(遺物図版100) SD249の東1.8mの位置で検出した。SD04を切り、SD249と一連の遺構と思われる。検出規模で延長1.9m、幅は35cm、深さは遺構検出面から10cmである。溝の主軸はN4°Eである。埋土から須恵器杯B蓋 1931、須恵器壺 1932、須恵器壺頸部 1933を図示した。SD81、SD249、SD250はSD04のほか周辺の遺構群を切ることからこれらに後続する遺構と考えられるが、出土遺物から時期差を読み取ることはできない。
- SD260**
(遺物図版100)
(写真図版133) SE04から西へ延びる溝である。検出状況ではSE04との切り合いは明確ではなく、本来一連であった可能性が高い。西側への延長は地形の落ちに合わせて自然に消滅しており、本来は更に西へ延びていたと思われる。検出規模で延長2.7m、幅は60cm、深さは12cm以上である。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物や土器片等を含む。遺物は三彩小壺 1934、須恵器椀 1935、土師器皿A 1936、土師器蓋 1937、土師器杯A 1938、須恵器杯B蓋 1939、須恵器皿B蓋 1940、須恵器壺Q 1941等が出土した。1934は埋土上層から出土したが、4次SE01、豆腐町I次SE02では井戸内から三彩小壺が出土していることから、1934も本来はSE04に伴うものであった可能性もある。その他、漆付着土器が2点出土している。
- SD327**
(遺物図版100) SD03から北へ派生する溝である。北端は攪乱のため延長は判然としないが、延長上にSE04が存在する。検出規模で延長5m、幅は40cm、断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から10cm前後を測る。遺物は細片が多く、土師器皿A 1942、須恵器皿A 1943、須恵器杯B蓋 1944・1945等が出土した。

SK04

(遺物図版101)
(写真図版179)

調査区東部で検出した不整形の土坑である。JRの旧陸橋基礎により南側は攪乱を受けている。検出規模で長軸 8.5 m、短軸 4.8 m である。土坑底面は凸凹が激しく、深さは遺構検出面から最大で 20cm を測る。調査段階では平面プランの検出状況から SK04 と一括りにしたが、最終的には複数の掘り込みに分かれるものと判断した。それぞれの掘り込みは、掘削における作業単位と思われる。埋土は大きく 2 層で、いずれも耕土が混じる。遺物は頸部に漆が付着する須恵器長頸壺 1946 を図示したが、近世陶磁器の細片を含むことから、本遺構の帰属時期は江戸時代である。周辺で検出した不整形の土坑群も同様の時期であり、5 次 4 区・5 次 5 区で検出した土取り痕と同じものであろう。

SK07

SK04 の西 2.5 m で検出した埋桶である。掘方はやや崩れた方形であり、そのほぼ中央北寄りに直径 96cm、高さ 40cm の桶を設置している。桶の下部には沈み込みを防ぐためか東西方向に板材を一枚敷いていた。埋土最下部からは漆喰が大量に出土した。本遺構は漆喰を使用していないことから、SK09 と関連するかもしれない。遺物は出土していない。

SK08

(遺物図版101)

SK07 の西 1.2 m の位置で検出した埋桶である。掘方は直径 1.1 m の円形を呈し、その中央に直径 80cm、高さ 39cm の桶を設置する。埋土上層から漆喰が出土したが、本遺構には漆喰は使用されていない。埋土下層からは木質が出土したが、製品は含まれていなかった。遺物は施釉陶器碗 1947、堺・明石系播鉢 1948 を図示した。

SK09

(遺物図版101)
(写真図版71-4)

SK08 の西隣で検出した漆喰遺構である。直径 1.1 m の掘方の内面に漆喰を塗っている。深さは遺構検出面から 25cm である。埋土下層から木質は出土したが、図示に耐えうる遺物は出土していない。SK07 から SK09 は近世から近代にかけての耕作に伴う遺構であろう。

SK13

(遺物図版101)

調査区東端で検出した。調査区外及び攪乱を受けているため、全容は不明である。検出規模で南北 2.5 m、東西 70cm である。土坑の底面は凸凹が激しく、一定ではない。耕土直下から最大で 45cm を測る。遺物は須恵器杯 A 1951 を図示したが、埋土には耕土を含むことから江戸時代に位置づけられる。SK04 と同様、土取りに伴うものと考えられる。

SK20

(遺物図版101)

SB01 と平面が重なる位置で検出した。SB01 の柱穴を切っている。不整な形状で、長軸 4.9 m、短軸 2.4 m である。土坑の底面は凸凹があり平坦ではない。埋土は大きく 2 層に分かれ、SK04 と同様、耕土を含むことから江戸時代の遺構である。埋土からは混入であるが、須恵器皿 B 蓋 1949、須恵器壺の底部 1950 等が出土している。

SK26

(遺物図版101)

SB02 の南で検出した南北に長い不整形の土坑である。長軸 2.6 m、短軸 50cm を測り、断面は皿状を呈する。深さは遺構検出面から 8cm を測る。遺物は須恵器杯 A 1952 等が出土した。1952 は内面に線刻が認められる。

SK29

(遺物図版101)

SD04 の北 1.8 m、JR の旧連絡橋の基礎下で検出した。前述した道路上に位置する。西半分は橋脚基礎があるため未掘である。検出規模で南北 80cm、東西 28cm を測る。深さは耕土直下から 25cm を測る。埋土から須恵器杯 B 蓋 1953 が出土した。本遺構は耕土直下から掘り込まれることから、奈良時代ではなく、それ以後に掘り込まれたもので、後述する SK36 や SK48 と同じであろう。

SK36

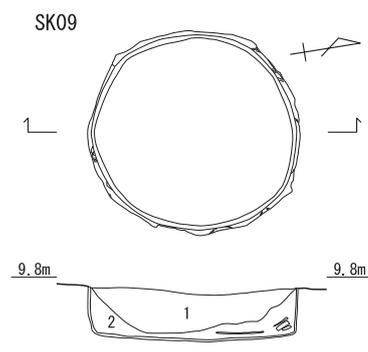
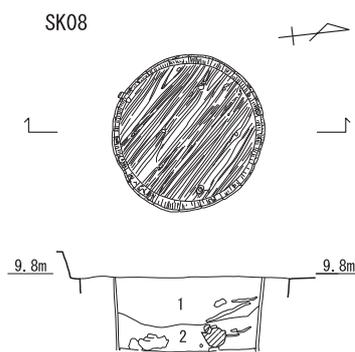
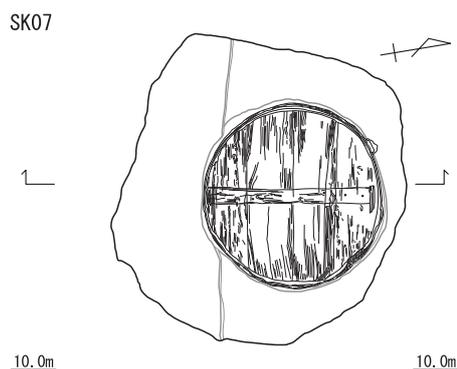
(遺物図版101)

SB02 の北 2.5 m で検出した南北に長い不整形の土坑である。SK48 を切っている。長軸 4.2 m、短軸 1.1 m、深さは遺構検出面から概ね 10cm である。遺物は須恵器杯 B 蓋 1954 が出土した。SK48 を切ることから江戸時代以降に位置づけられる。

SK48

(遺物図版101)

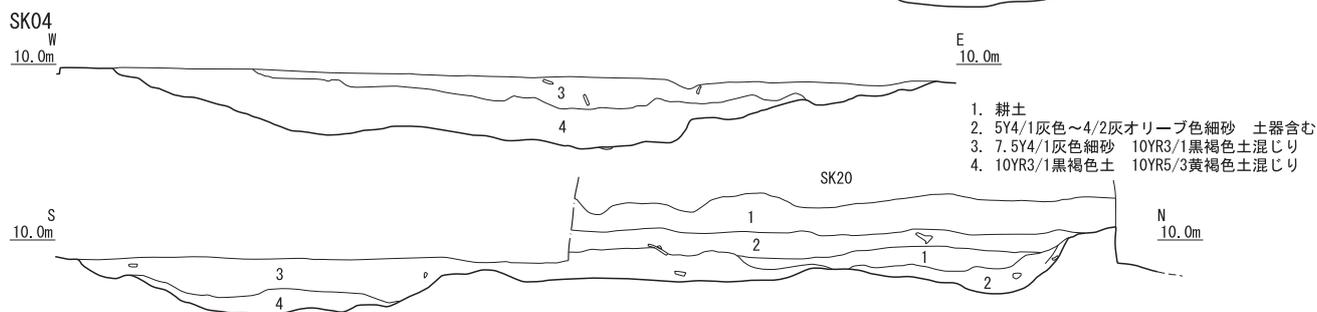
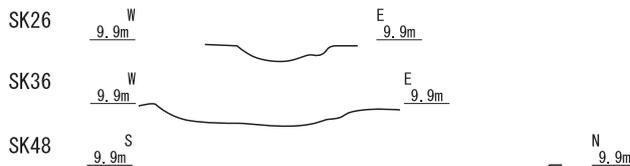
SB02 の北 1 m で検出した。JR の連絡橋により一部攪乱を受けている。不整な形状で東西方向に長い。長軸 2.9 m、短軸 2.06 m を測り、深さは遺構検出面から 20cm である。埋土は耕土を含むことから SK04 や SK20 と同じく江戸時代以降に位置づけられる。埋土から須恵器杯口縁部 1955、製塩土器 1956 等が出土した。



- 1. 5Y4/1 灰色細砂
- 2. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト～細砂

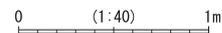
- 1. 5Y4/1 灰色細砂 黄色粒混じり
- 2. 5Y4/1 灰色細砂

- 1. 7. 5Y4/1 灰色細砂 ややグライ化 黄色土・黒褐色土混じり
- 2. 10YR4/1 褐灰色シルト 漆喰は下に集中 漆喰混じり
- 3. 10YR4/1 褐灰色粘土
- 4. 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/1 褐灰色土 2. 5Y5/4 黄褐色混じり
- 5. N4/ 灰色シルト～10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 ブロック混じり
- 6. 10Y4/1 灰色砂



- 1. 耕土
- 2. 5Y4/1 灰色～4/2 灰オリーブ色細砂 土器含む
- 3. 7. 5Y4/1 灰色細砂 10YR3/1 黒褐色土混じり
- 4. 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/3 黄褐色土混じり

図103 6次1区SK07・SK08・SK09平・断面図、SK04・SK26・SK36・SK48断面図



SK50

(遺物図版101)
(写真図版90-6-7-179-198)

SB04 と重なる位置で検出した土坑である。SB04 を構成する柱穴とは直接の切り合いがないため、新旧関係は分からない。平面形は南北方向に長く南端が尖る。長軸 1.76 m、短軸 50cm、深さは遺構検出面から 28cmを測る。埋土は大きく 2層に分かれ、その間に炭化物の単純層をはさむ。炭化物層は土坑の全域に広がり、その様相は 5次 4区 SK62 と共通する。ただし、本遺構には焼土を含んでいない。炭化物層は意図的に敷かれたものであるが、その機能あるいは意味合いは判然としない。遺物は炭化物層、上層・下層から出土した。上層から製塩土器 1968・1970 が出土し、炭化物層から土師器杯 A 1958、土師器皿 A 1959、須恵器杯 B 蓋 1962、製塩土器 1965・1967、土師器長胴甕 1971 が出土した。下層から土師器杯 A 1957、土師器杯 B 1960、土師器台付皿 1961、須恵器杯 B 1963、須恵器皿 A 1964、製塩土器 1966・1969、墨書土器 1972・1973 が出土した。

SK76

(遺物図版102)
(写真図版91-3-136)

SD75 の東約 30cmの位置で検出した南北にやや長い円形の土坑である。長軸 82cm、短軸 60cm、断面はコの字状を呈し、深さは遺構検出面から 20cmである。埋土は灰黄褐色を基本とし、炭化物を含む。炭化物は下層において顕著である。遺物は須恵器杯 B 蓋 1974、土師器甕 1975 と写真図版 136 の漆付着布が出土した。布は土坑北端の底面に貼りついた状態で出土した。幅 1.3cmの絹製と見られ、漆が付着したものである（附章参照）。

SK77

(遺物図版102)
(写真図版90-4-5-179-198)

SB06 と切り合う南北に長い土坑である。SB06 を構成する SP69・SP70 との直接の切り合いから、SB06 に後出する遺構である。長軸 4.1 m、短軸 74cmを測り、断面はコの字状を呈し、深さは遺構検出面から 30cmである。埋土は大きく上層（1～3層）と下層（4～9層）に分けることができ、上層は薄い炭化物層を伴い、土坑中央付近に溝状に広がる。埋土には多くの炭化物を含み、特に 1～3層の上層で顕著に認められる。遺物は下層から土師器甕 1992 が出土し、その他は上層から出土している。土師器杯 1976・1977、土師器皿 A 1978・1979、須恵器稜椀蓋 1980、須恵器杯 B 1981・1983、墨書土器 1982、須恵器杯 A 1984、須恵器皿 A 1985、須恵器高杯 1986、製塩土器 1987・1988、土師器甕 1989～1992 等が出土した。切り合いから SB06 に後行するが、遺物の様相からは大きな時期差は認めがたい。

SK79

(遺物図版102)

SD75 の西 1.1 mで検出した南北方向に延びる土坑である。長軸 1.03 m、短軸 30cm、深さは遺構検出面から 10cm前後である。断面は逆台形に近い。遺物は土師器杯 1993、須恵器杯 B 蓋 1994、土師器甕 1995、製塩土器 1996～1998 等が出土した。

SK80

(遺物図版102)

SD78 の東 30cmの位置で検出した南北方向に長い土坑である。長軸 1.63 m、短軸 40cm、断面は U 字状を呈し、深さは遺構検出面から 18cmを測る。埋土は炭化物を含み、遺物をわずかに含んでいた。須恵器壺の底部 1999、製塩土器 2000 等を図示した。

SK90

(遺物図版103)

SB07 の南約 1 mの位置で検出した土坑である。南側は攪乱を受けているため全容は不明であるが、検出規模で長軸 1.54 m、短軸 74cmを測る。断面は U 字状を呈す。埋土に炭化物を多量に含み、中層付近で顕著である。遺物は須恵器杯 2001、須恵器杯 B 蓋 2002、製塩土器 2003、土師器甕 2004 等が出土した。上層から 2004 が出土し、他は下層から出土した。

SK176

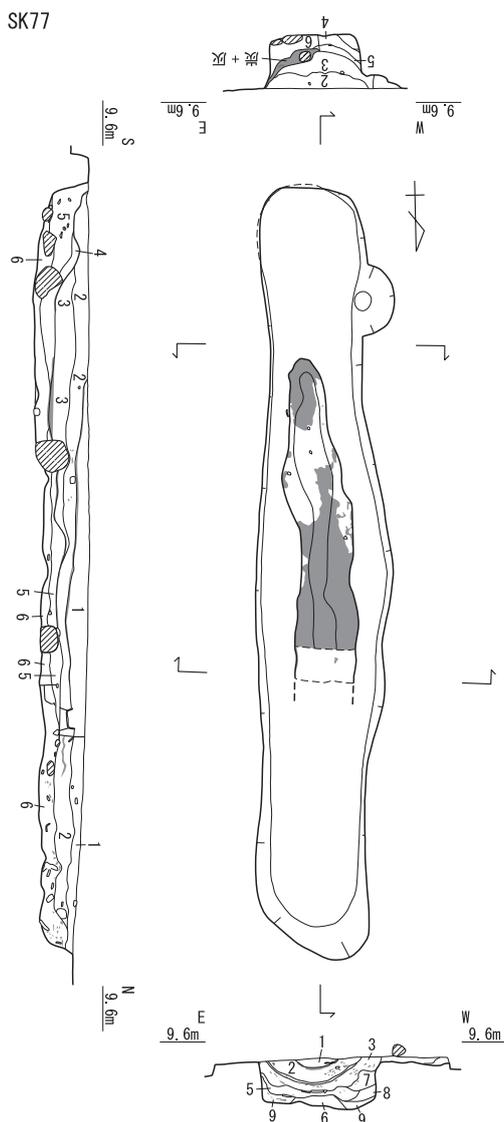
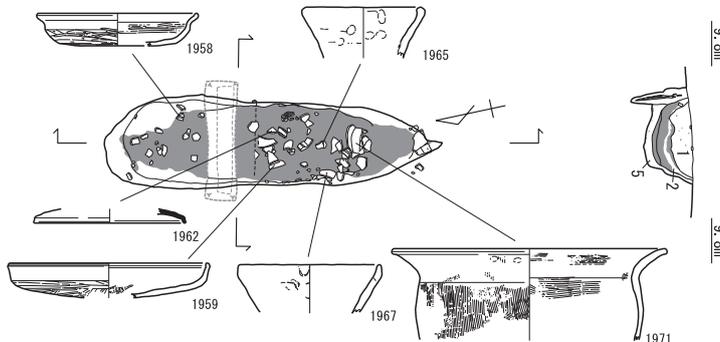
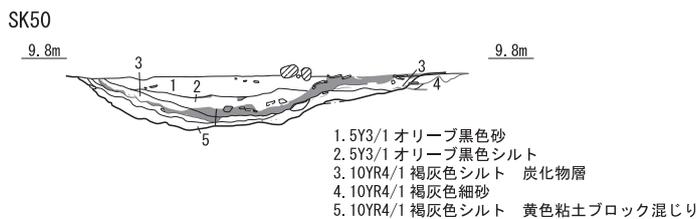
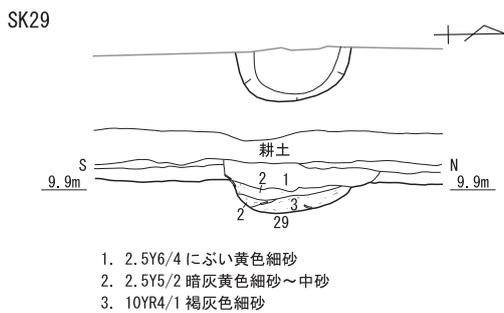
(遺物図版103)
(写真図版198)

SB05 の南約 1 mの位置で検出した南北に長い土坑である。平面図の表現とは異なるが SD81 に切られ、SE03 を切っている。長軸 1.95 m、短軸 50cmを測り、断面は逆台形状を呈す。深さは遺構検出面から最大で 26cmである。遺物は土師器杯 2005、竈把手 2007、墨書土器 2006 等が出土した。

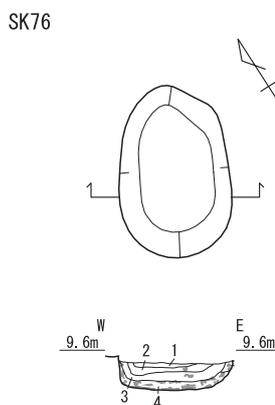
SK179

(遺物図版103)

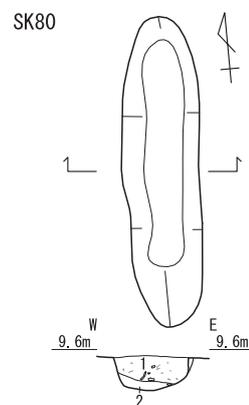
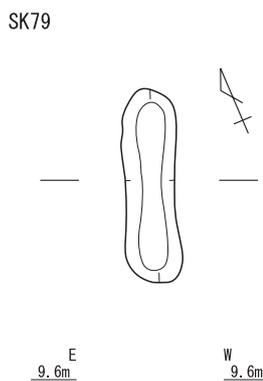
SB05 と平面的に重なる位置で検出した。SB05 を構成する柱穴と直接の切り合いがないため両者の新旧関係は不明である。SD171 と SD81 に切られている。検出規模で南北 1.02 m、東西 70cm、深さは遺構検出面から 8cmと浅い。遺物は土師器皿 2008、須恵器杯 B 蓋 2009、須恵器杯 B 2010 等が出土した。



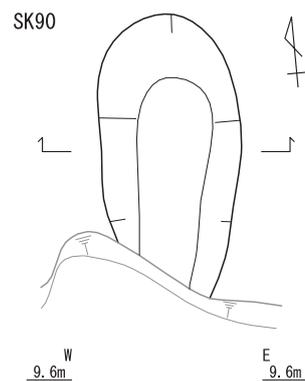
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂 下位に炭化物
2. 10YR4/2 灰黄褐色～10YR5/1 褐灰色シルト
3. 10YR4/1 褐灰色 炭化物含む
4. 炭化物・灰層
5. 10YR4/1 褐灰色シルト 黄色土・炭化物混じり
6. 10YR4/1 褐灰色シルト
7. 10YR4/1 褐灰色シルト
8. 10YR4/1 褐灰色シルト
9. 10YR4/1 褐灰色シルト



1. 10YR4/2 灰黄褐色細砂
2. 10YR6/1 褐灰色シルト
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭化物混じり
4. 10YR5/1 暗灰黄色細砂 炭化物多量に含む



1. 10YR3/1 黒褐色細砂 炭化物含む
2. 10YR3/1 黒褐色シルト



1. 10YR4/1 褐灰色細砂
2. 10YR4/1 褐灰色細砂 上位に炭化物
3. 10YR4/1 褐灰色細砂 上位に炭化物
4. 10YR4/1 褐灰色シルト 炭化物多量
5. 10YR4/1 褐灰色シルト 炭化物含まない

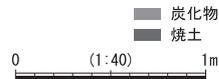
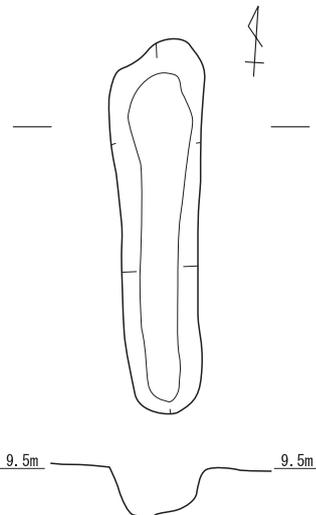


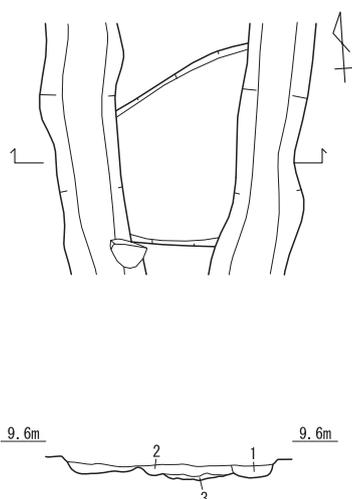
図104 6次1区SK29・SK50・SK76・SK77・SK79・SK80・SK90平・断面図

- 東部地区
- SK191
(遺物図版103) SB05 と平面的に重なる位置で検出した。直接の切り合いは確認できないが、検出位置から SB05 の桁行を構成する柱穴の一つを切っていると想定する。長軸 1.7 m、短軸 93cmを測る。断面はやや深い皿状を呈し、深さは遺構検出面から概ね 20cmである。炭化物を含む埋土で、破片であるものの比較的まとまって遺物が出土した。土師器皿 A 2011～2014、土師器杯 A 2015、須恵器杯 B 2016、製塩土器 2017・2018、竈の把手 2019 を図示した。
- SK200
(遺物図版103) SD194 の東で検出した。調査区南端で検出した土坑で SD201 を切る。調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出規模で南北 43cm、東西 73cmを測る。深さは遺構検出面から 28cmである。埋土から土師器皿 A 2020 が出土した。
- SK203
(遺物図版103) SB04 と平面的に重なる位置で検出した南北方向に長い土坑である。SB04 を構成する柱穴との直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。長軸 3.71 m、短軸 60cmで、断面は浅い皿状を呈し、深さは遺構検出面から 5cm前後と極めて浅い。埋土は炭化物と焼土を含む砂である。須恵器杯 2021 の細片が出土したのみで、他に遺物は認められなかった。
- SK208
(遺物図版104)
(写真図版91-2-179-198) SB08 の南 50cmで検出した南北方向に延びる土坑である。長軸 3 m、短軸 1.5 mを測る。断面はコの字状を呈し、深さは遺構検出面から最大で 30cmである。検出時には SD03 と切り合いがあると認識したが、断面では明確な立ち上がりは確認できなかった。検出面直下とその下位に薄い炭化物層が広がる。下位の炭化物層は土坑の北半分では面的に広がるが、南半分は局所的な広がりには留まる。遺物は下層から土師器杯 A 2028、土師器甕 2034、須恵器杯 B 蓋 2035 が出土し、上層から土師器杯 2027、土師器杯 A 2029・2030、墨書土器 2031、製塩土器 2032・2033、須恵器杯 A 2036、須恵器杯 B 2037、須恵器稜椀 2038、土師器長胴甕 2039～2041、須恵器壺 2042 等が出土した。
- SK210
(遺物図版103) SB08 の北 1.3 mで検出した東西方向に長い土坑である。南に近接して SD260 が存在する。長軸 1.4 m、短軸 38cm、深さは遺構検出面から 10cmを測る。埋土から土師器皿 A 2022・2023、弥生土器甕 2025・2026 が出土し、土坑底面に貼り付いた状態で土師器杯 A 2024 が出土した。2025 と 2026 は本来 SK210 の下に位置する SR01 ののものであろう。
- SK240
(遺物図版104) SD201 に切られる土坑である。形状から隅丸方形の柱穴の可能性もあるが、柱痕跡が確認できないことから土坑とした。SD201 の下位部分は残存しており、南北 83cm、東西 54cm、深さは遺構検出面から 15cmである。遺物は須恵器壺 2043・2044 が出土した。
- SK243
(遺物図版104)
(写真図版179) SE02 の南 2.8 mで検出した東西方向に長い土坑である。長軸 1.65 m、短軸 57cmを測る。断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から 10cmである。遺物は須恵器杯 B 蓋 2045、須恵器甕 2046 等が出土した。
- SK244
(遺物図版105) SK243 の北に接して検出した東西方向に長い土坑である。長軸 1.13 m、短軸 53cm、深さは遺構検出面から 7cmと浅い。遺物は少なく、製塩土器 2047 を図示した。
- SK251
(遺物図版105) SD188 の西 1.2 mの位置で検出した南北方向に長い土坑である。長軸 1.28 m、短軸 60cm、深さは遺構検出面から 20cmを測る。埋土は炭化物と土器片を含む。土師器杯 2048、須恵器稜椀蓋 2049、須恵器杯 A 2050・2051、製塩土器 2052 等が出土した。
- SK253
(遺物図版105) SK251 の南 40cmで検出した東西方向に長い土坑である。SD81 と SD189 に切られる。検出規模で南北 71cm、東西 1.52 mで、深さは遺構検出面から 15cmを測る。遺物は土師器皿 A 2053、製塩土器 2054、土師器甕 2055、竈 2056 が出土した。
- SK285
(遺物図版105)
(写真図版137) SB08 の東 1.2 mで検出した南北方向に長い土坑である。SK331 を切っている。長軸 1.05 m、短軸 54cmを測り、埋土内に多くの円礫を含む。深さは遺構検出面から最大で 58cmで、掘方は急角度で掘り込まれている。埋土から須恵器稜椀 2057、須恵器杯 B 蓋 2058・2059、土錘 2060・2061 等が出土した。

SK176

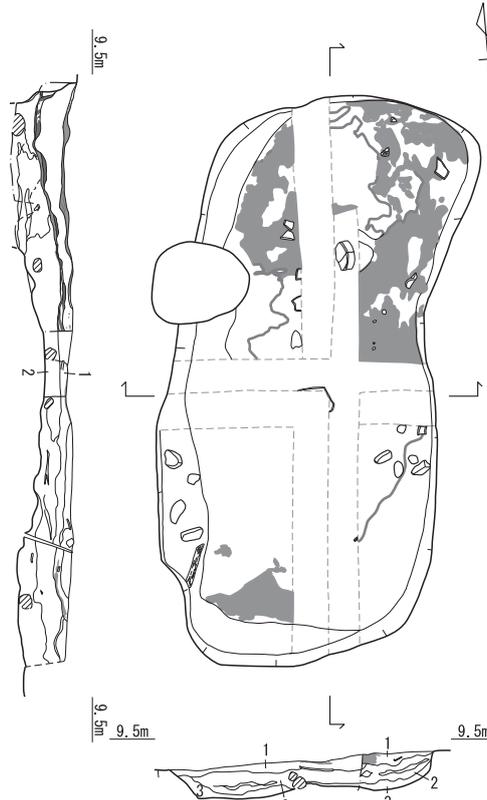


SK179



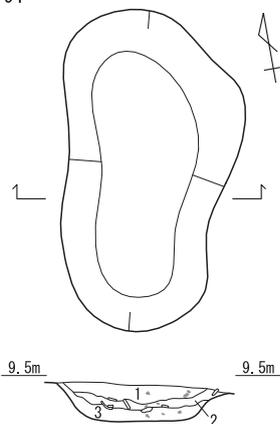
- 1. 10YR4/2 灰黄褐色細砂
- 2. 10YR4/2 灰黄褐色細砂 炭化物と焼土混じり
- 3. 10YR4/1 褐灰色シルト

SK208



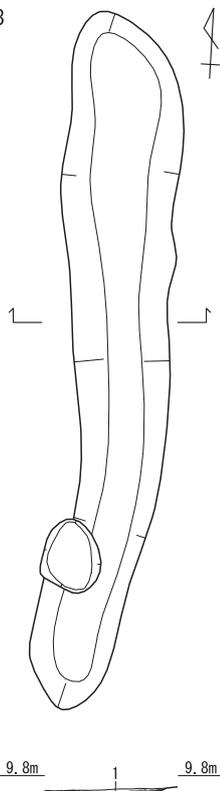
- 1. 10YR4/1 褐灰色細砂 炭化物・土器含む
- 2. 2.5Y5/1 黄灰色～5/2 暗黄灰色砂 ラミナ
- 3. 2.5Y5/1 黄灰色～5/2 暗黄灰色シルト混じり砂

SK191



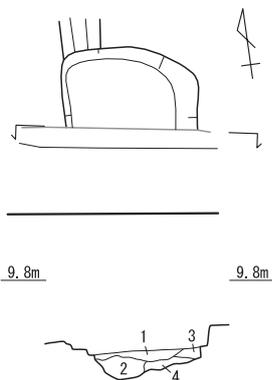
- 1. 2.5Y5/3 黄褐色細砂 土器含む
- 2. 2.5Y5/2 暗黄灰色細砂 炭化物混じり・土器含む
- 3. 2.5Y5/2 暗黄灰色細砂 炭化物・土器含む

SK203



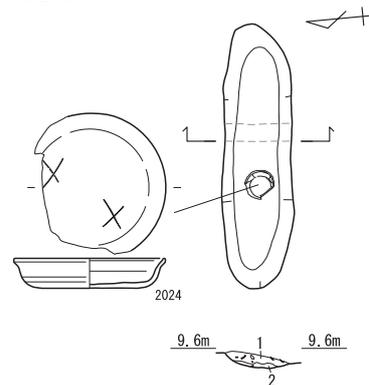
- 1. 2.5Y6/6 明黄褐色砂

SK200



- 1. 10YR4/1 褐灰色細砂
- 2. 10YR4/1 褐灰色シルト 10YR3/1 黒褐色シルト混じり
- 3. 10YR5/1 褐灰色細砂 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混じり
- 4. 10YR4/1 褐灰色細砂 10YR3/1 黒褐色細砂混じり

SK210



- 1. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂
- 2. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト

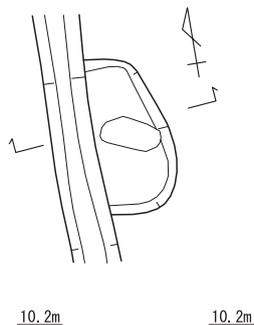
■ 炭化物
■ 焼土

0 (1:40) 1m

図105 6次1区SK176・SK179・SK191・SK200・SK203・SK208・SK210平・断面図

- SK288
(遺物図版105)
(写真図版179-198) SB08の西50cmで検出した南北方向に長い土坑である。長軸1.05m、短軸62cm、深さは遺構検出面から25cmを測る。墨書土器2062、須恵器壺2063、須恵器杯B2064等が出土した。図示していないが、漆の付着した須恵器杯が1点出土している。
- SK302
(遺物図版105) SE02の南で検出した東西方向に長い土坑である。SP303に切られている。長軸2.18m、短軸65cm、深さは遺構検出面から10cm前後である。断面は皿状を呈し、東側がやや深い。埋土から須恵器杯B2065が出土した。
- SP65
(遺物図版106) SB05とSB06の間で検出した柱穴である。円形を呈し直径は38cmを測る。深さは遺構検出面から20cmである。埋土から須恵器杯2066が出土した。
- SP66
(遺物図版106) SB05を構成するSP171を切る柱穴である。掘方北部で柱痕跡を確認した。掘方は円形を呈し、直径は45cmを測る。深さは遺構検出面から15cmである。埋土から須恵器壺2067が出土した。
- SP71
(遺物図版106) 平面的にSB05と重なり、SD171の西に隣接した位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は30cmを測る。深さは遺構検出面から13cmで、段下げ時に須恵器壺2068が出土した。
- SP130
(遺物図版106) SA01を構成するSP131の西で検出した。掘方は不整な円形を呈し、長軸43cm、短軸34cmである。深さは遺構検出面から15cmを測る。埋土から土師器杯A2069が出土した。
- SP173
(遺物図版106) SB06の西90cmで検出した。SP174に切られる。掘方は円形を呈し、直径は45cm、深さは遺構検出面から21cmを測る。須恵器壺2070が出土した。
- SP181
(遺物図版106) SB04の南約5mで検出した東西方向に長い柱穴である。長軸69cm、短軸41cm、深さは遺構検出面から20cmを測る。埋土には根固めの意図か、礫を多数含む。遺物は須恵器杯B蓋2071、須恵器杯B2072、須恵器稜碗2073、土師器甕2074等が出土した。
- SP182
(遺物図版106) SP181の40cm南で検出した。図109のF断面に明らかなように整地層上面から掘り込んでいる。平面は隅丸方形を呈すと考えられ、南北50cm、東西72cm、深さは遺構検出面から35cmである。埋土から製塩土器2075、須恵器杯B2076等が出土した。
- SP184
(遺物図版106) SP182の東2.8mの位置で検出した。円形を呈し、直径は30cmを測る。深さは遺構検出面から10cmである。掘方から須恵器杯2077が出土した。
- SP190
(遺物図版106) SE03の東で検出した。掘方は円形を呈し、直径は42cm、深さは遺構検出面から23cmを測る。段下げ時に製塩土器2078、土師器皿A2079・2081・2082が、柱痕跡の上層から土師器杯A2080、土師器甕2083が出土した。
- SP202
(遺物図版106)
(写真図版91-5) SD201の北30cmの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は26cmを測る。深さは遺構検出面から23cmである。埋土上層から土師器長胴甕2084が押しつぶされた状態で出土した。下層から破片が出土していないことから埋甕ではないと思われる。
- SP216
(遺物図版106) SB05の東端と重なる位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径34cm、深さは15cmを測る。埋土は土師器杯A2085が出土した。
- SP225
(遺物図版106) SB04の西端を梁行方向に南に1.5m延ばした位置で検出した。検出時には上面に礫が集中していた。掘方は円形を呈し、直径18cm、深さは遺構検出面から15cmを測る。埋土上層から須恵器杯A2086が出土した。
- SP228
(遺物図版106) SB04を構成するSP22の西で検出した。掘方は円形を呈し、直径は33cm、深さは遺構検出面から20cmを測る。埋土から製塩土器2087が出土した。
- SP232
(遺物図版107) SB04と平面的に重なる位置で検出した。検出時にはSP225と同様、上面に礫が集中していた。掘方は円形を呈し、直径は15cm、深さは遺構検出面から10cmを測る。遺物はいずれも埋土上層から出土した。土師器皿A2088、土師器杯A2089、製塩土器2090・2091を図示した。

SK240

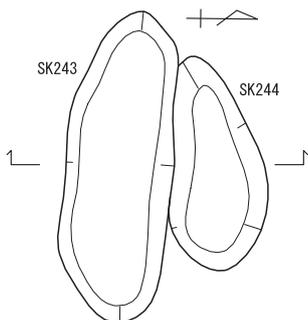


10.2m 10.2m



1. 10YR4/1 褐灰色細砂～極細砂
10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混じり

SK243・SK244

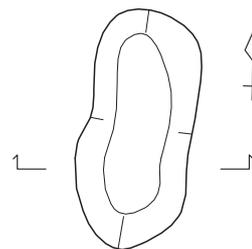


9.8m 9.8m



1. 10YR5/2 灰黄褐色細砂～中砂 10YR5/6 黄褐色混じり
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂

SK251

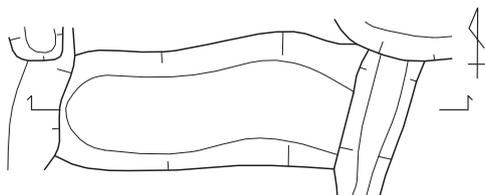


9.6m 9.6m



1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭化物・土器含む
2. 5Y7/4 浅黄色砂混じり
2. 10YR4/1 褐灰色シルト～細砂 炭化物・土器含む

SK253

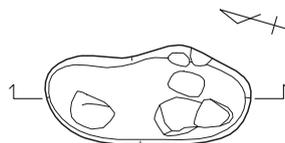


9.6m 9.6m



1. 10YR8/1 褐灰色細砂
2. 10YR4/1 褐灰色細砂 黄色土混じり
3. 10YR3/1 黒褐シルト 黄色細砂混じり

SK285

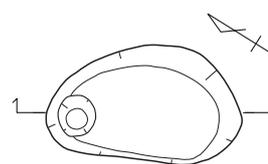


9.6m 9.6m



1. 2. 5Y6/2 灰黄色粗砂～細砂 土器含む
2. 10YR4/1～3/1 黒色～黒褐色細砂
3. 2. 5Y6/2 灰黄色～10YR4/1 褐灰色細砂 黒色粘土混じり
4. 10YR2/1 黒色粘土
5. 10YR2/1 黒色粘土 黄砂混じり
6. N5/ 灰色粘土 青砂 グライ化

SK288

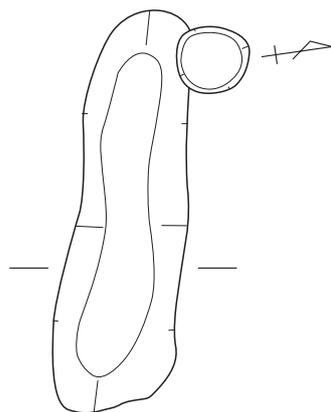


9.4m 9.4m



1. 10YR2/1 黒色粗砂混じり粘土
2. 10YR4/1 褐灰色シルト
3. 2. 5Y6/4 にぶい黄色細砂
4. 2. 5Y5/2 暗灰黄色細砂

SK302



9.4m 9.4m



図106 6次1区SK240・SK243・SK244・SK251・SK253・SK285・SK288・SK302平・断面図

- SP235
(遺物図版107) SB04の南4.5mの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は62cm、深さは遺構検出面から30cmを測る。掘方内には円礫が多数含まれ、掘方中央の円礫下に柱の痕跡とみられる凹みを検出した。土師器皿A 2092と製塩土器 2094が柱痕跡から、また、掘方から土師器杯A 2093、製塩土器 2095、土師器甕 2096が出土した。
- SP236
(遺物図版107) SD188の東40cmの位置で検出した。掘方は南北方向に長い形状で、長軸69cm、短軸50cmを測る。深さは遺構検出面から44cmである。埋土から土師器皿A 2097、須恵器杯A 2098、製塩土器 2099～2101が出土した。
- SP237
(遺物図版107) SP236の南1.5mの位置で検出した。SP236とSP237とで建物跡を構成する可能性があるが、対応する柱筋が存在しないため、単独で扱った。調査区外に広がるが平面形は隅丸方形を呈すとみられる。一辺約50cm前後、深さは遺構検出面から40cmで、掘方から土師器甕 2102が出土した。
- SP238
(遺物図版107) SK200の東で検出した。調査区外に広がるが平面形は円形を呈すとみられ、直径は43cm、深さは遺構検出面から15cmを測る。埋土から須恵器皿 2103、土師器甕 2104が出土した。
- SP241
(遺物図版107) SA01の西2.5mの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径34cm、深さは遺構検出面から10cmを測る。掘方埋土には炭化物を含む。遺物は埋土から製塩土器 2105が出土した。
- SP242
(遺物図版107) SE02の南2.3mで検出した。掘方はやや不整な円形を呈し、長軸46cm、短軸36cm、深さは遺構検出面から34cmを測る。柱痕跡埋土には炭化物を含み、土師器杯 2106が出土した。掘方から土師器杯 2107、須恵器鉢 2108が出土した。
- SP247
(遺物図版107)
(写真図版198) SE02の南2.1mの位置で検出した。掘方は東西に長い楕円形を呈し、長軸56cm、短軸35cm、深さは遺構検出面から12cmを測る。埋土から土師器皿A 2109、須恵器皿A 2110、製塩土器 2111～2113等が出土した。2110は底部外面に墨書がある。なお、SP247に切られるSP246からは遺物の細片が大量に出土した。土師器・須恵器・製塩土器を含むが図示に耐えるものはなかった。
- SP258
(遺物図版107) SB05を構成するSP257とSD171に切られる。平面は隅丸方形を呈すと見られ、検出規模で南北68cm、東西50cmを測る。深さは遺構検出面から18cmである。埋土から須恵器杯 2114が出土した。
- SP269 SB04を構成するSP267の南で検出した。掘方は卵形を呈し、長軸50cm、短軸31cmである。深さは遺構検出面から12cmで、掘方底面にSB05のSP215～SP218と同じように板材を敷いている。沈み込みを防ぐ礎板であろう。検出状況では建物を構成しないが、本来は建物に伴う可能性が高い。遺物は出土していない。
- SP271
(遺物図版107) SE02の北西65cmの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は36cm、深さは遺構検出面から16cmである。柱痕跡の底面から扁平な円礫が出土した。沈み込みを防ぐ根石の可能性はある。埋土から須恵器杯B 2115が出土した。
- SP272
(遺物図版108) SB04の南1mで検出した。東西方向に長い円形を呈し、長軸28cm、短軸20cm、深さは遺構検出面から52cmである。埋土から土師器皿A 2116、須恵器杯B蓋 2117、製塩土器 2118が出土した。
- SP290
(遺物図版108) SB08を構成するSP281の西40cmの位置で検出した。南北にやや長い円形を呈し、長軸43cm、短軸27cmを測る。深さは遺構検出面から16cmである。埋土上層から土師器皿A 2119・2120、土師器杯A 2121、須恵器杯 2122、竈 2123等が出土した。
- SP294
(遺物図版108) SP182の西側で検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが、隅丸方形を呈すと考える。検出規模で南北28cm、東西80cm、深さは遺構検出面から38cmである。遺物は掘方から土師器皿A 2124・2125が出土し、柱痕跡から製塩土器 2126が出土した。

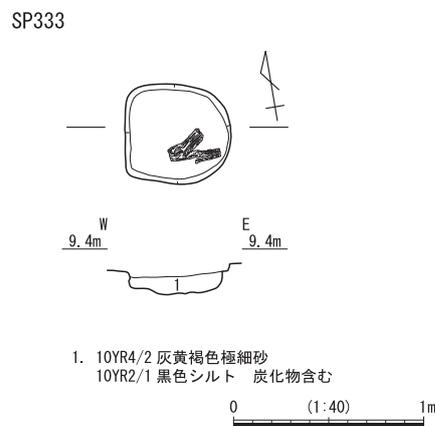
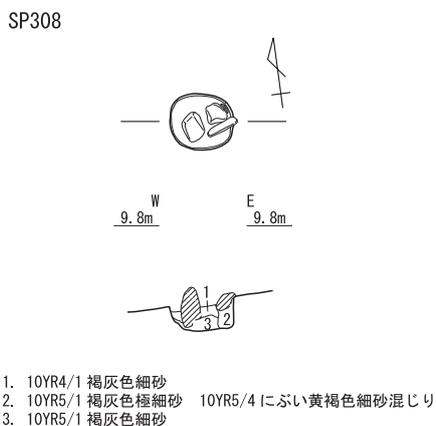
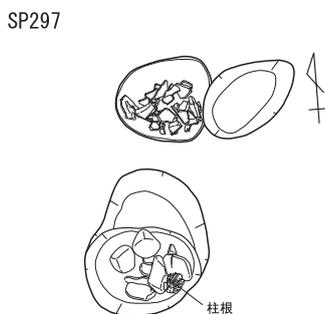
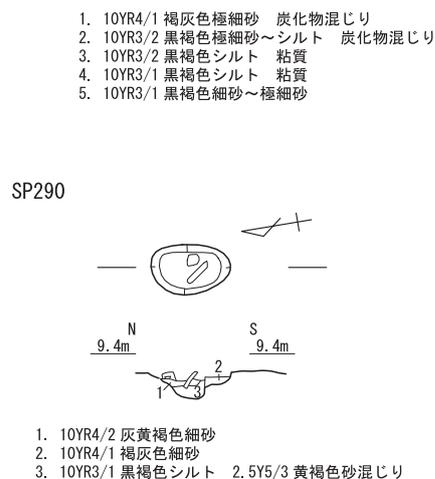
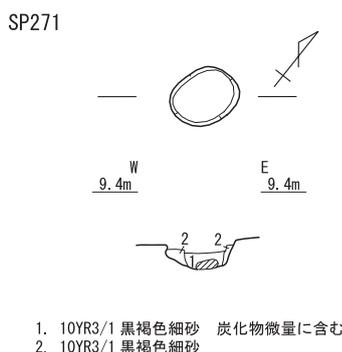
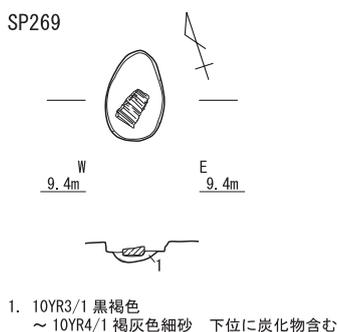
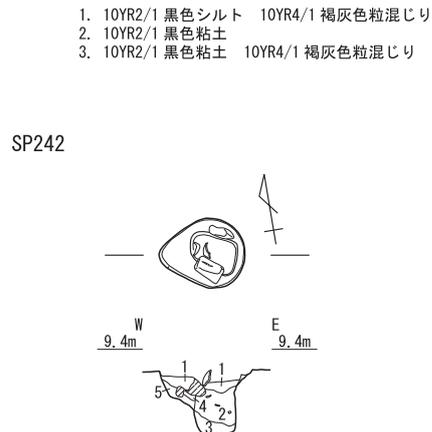
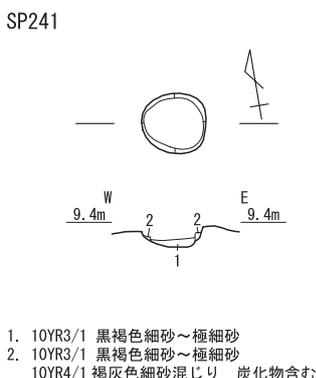
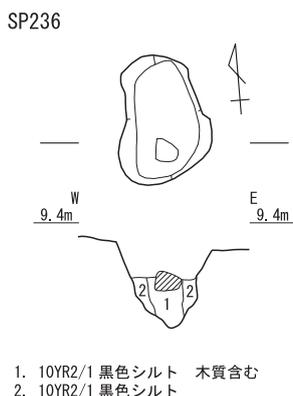
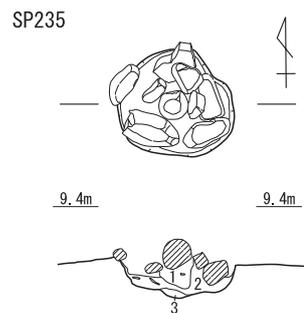
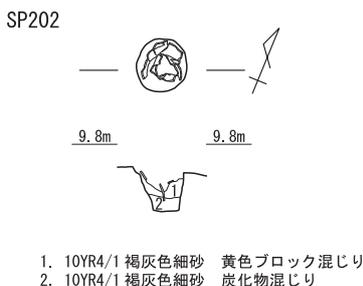
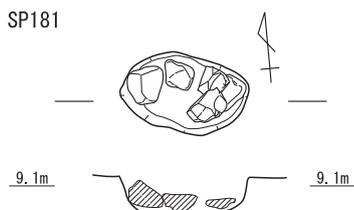


図107 6次1区SP181・SP202・SP235・SP236・SP241・SP242・SP269・SP271・SP290・SP297・SP308・SP333平・断面図

SP297

(遺物図版108)
(写真図版91-4)

SK243の西50cmの位置で検出した。南北に長い円形を呈し、長軸80cm、短軸62cm、深さは遺構検出面から43cmを測る。掘方内から礫がまとまって出土した。SB04の西部を構成する柱穴と同じように沈み込みを防ぐ根石のようなものであろう。遺物は礫に混じって製塩土器2127が出土した。

SP298

(遺物図版108)

SB04の南1.3mの位置で検出した。東西に長い楕円形を呈し、長軸72cm、短軸40cmを測る。深さは遺構検出面から8cmを測る。埋土から土師器甕2128が出土した。

SP300

(遺物図版108)

SE02に近接した位置で検出した。東西に長い楕円形を呈し、長軸39cm、短軸20cmを測る。深さは遺構検出面から12cmである。遺物は土師器長胴甕2129が出土した。

SP303

(遺物図版108)
(写真図版198)

SE02の東側で検出した柱穴でSK302を切る。円形を呈し、直径40cmを測る。深さは遺構検出面から27cmである。埋土から須恵器杯か皿2130が出土した。

SP304

(遺物図版108)
(写真図版198)

SE02の東2mで検出した。掘方は円形を呈し、直径55cmを測る。深さは遺構検出面から53cmである。掘方から土師器杯2132、埋土から土師器杯A2131、須恵器杯A2133、土師器杯2134が出土した。

SP308

(遺物図版108)
(写真図版133)

SE02の北90cmの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は32cmを測る。深さは遺構検出面から22cmである。段下げ時に奈良三彩小壺の体部片2135、掘方からミニチュア土器2136が出土した。検出した位置、遺構には特異な状況は認められないが、三彩小壺とミニチュア土器といった注目すべき遺物が出土している。三彩については、埋土上層から出土したことから、下層の埋土を全量採取し、篩掛けしたが、他の破片は確認できなかった。他の三彩小壺との接合検討を行ったが接合するものはなく、別個体である。

SP313

(遺物図版108)
(写真図版198)

SD03の北30cmの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は47cmを測る。深さは遺構検出面から25cmである。埋土から墨書土器2137が出土した。

SP315

(遺物図版108)

調査区の南端、SA01の西約2.3mの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は36cmを測る。深さは遺構検出面から23cmである。埋土から須恵器稜椀蓋2138が出土した。

SP320

(遺物図版108)

SD327に接した位置で検出した。SD327に切られる。南北に長い円形を呈し、長軸60cm、短軸33cm、深さは遺構検出面から14cmである。埋土から須恵器杯B蓋2139、須恵器杯A2140、須恵器杯B2141、須恵器壺2142が出土した。

SP323

(遺物図版108)

高架橋に隣接する、SD04の中で検出した。埋土の切り合いからSD04に後行する遺構である。検出規模で南北60cm、東西20cm、深さは遺構検出面から15cmを測る。埋土から土師器甕2143が出土した。

SP333

(遺物図版108)
(写真図版91-6)

SK243の東約60cmの位置で検出した。隅丸方形を呈し、一辺52cm前後、深さは遺構検出面から17cmを測る。掘方北部で板材が出土した。ほぼ土壌化していることから厚さ等は不明であるが、SP269と同じように沈みこみを防ぐ礎板として使用された可能性が高い。埋土から須恵器杯B2144、須恵器杯か皿B2145が出土した。

整地層

(写真図版75-76)

SR01上部は軟弱地盤となっている。調査中も乾燥が進むと著しいひび割れが生じていた。特にSD04南側において顕著であり、奈良時代においてもそうした環境は同じであったと思われる。そうした環境にも係わらずSR01の上面には多くの遺構が存在する。当時の人々にとって、当該場所を活動の場として整備する必要があったようで、整地に伴う痕跡を確認することができた。調査開始時には「豆腐町I次」の成果から当該部分には奈良時代の流路を想定していた。また、遺物が大量に出土することも予想されたため、1mグリッドを設定して調査を行った。北側から順次掘り進めていったが、下層から遺構が検出されるに伴い、流路跡という認識を改め、調査方法を切り替えた。ただし、その時点で北側の掘り下げはほぼ完了していたため、SD81等の北への延びは確認できていない。

整地層と判断した根拠は、図109の断面に見るように広い範囲に炭化物層が存在する点である。こうした様相は規模の大小はあるものの6次1区SK50や5次4区SK62などでも認められ、単に炭化物は埋土中に含まれるのではなく、炭化物層を敷き均す過程を含んでいる。こうした在り方は豆腐町遺跡において顕著に認められることから、明らかに人為的に行われたものと判断できる。その他に、図108に示すように東側の微高地からSR01にかけての落ちでは礫層が確認でき、礫層をはさんで上下に分層できる。「豆腐町Ⅱ次」でも同様の礫層が確認されている。Ⅱ次では礫敷の下部で井戸を検出したことから礫敷遺構として評価されている。本調査区でもSE02を礫の下位で検出しているが、礫とSE02との関連は薄い。こうした点から礫層も遺構と評価できるものではなく、斜面の整地に伴うものと考えている。礫が集中する範囲は南北6m、東西5.6mである。炭化物層については、下位からの湿気を防ぐ、防湿構造のような機能を想定する。

図109のC・B・E断面に見るように整地層上面から掘り込む遺構の他に、整地層下位から掘り込む遺構も存在し、整地層を挟んで2時期の遺構が確実に存在する。ただ、この点は断面で確認できたものに限られ、平面的には遺構埋土と整地層とは類似していることから、検出段階では判断できていない。遺構検出は整地層を完掘した後に行ったため、検出した遺構の掘り込み面が上下どちらなのかは判別できていない。

整地層中からは多くの遺物が出土した。このことから整地層の形成以前にも既に活動があったことがわかる。整地層の形成時期をはさんで2時期あることは間違いがないが、遺物と遺構の検出状況から明確に分けることができていないのが実状である。調査段階で、整地層中から完形に近い遺物が出土した地点については、個別遺構名を採番し調査した箇所もあるが、最終的には遺構でないと判断した。以下では整地層中における限定された範囲からの出土という以上の意味合いはないが、調査時の遺構名で報告しておく。また、図108に示す炭層1～6は整地層掘り下げ中に炭化物層の広がりを示したものである。それぞれ個別に呼称しているが、炭の広がりの濃淡を境に任意に分けたもので、本来は整地層としては一連のものと思われる。炭層は整地層下層にあたることから、個別に報告する。

SK177

(遺物図版109-111)
(写真図版76-4-6-198)

調査区の南端で遺物がまとまって出土した。出土範囲は南北約3m、東西約2.5mであり、調査区外にも広がっていると思われる。写真図版76に見るような面的な出土状況を呈し、掘り込み等は一切認められない。この範囲から土師器皿A 2146・2147・2151、土師器杯2148～2150、土師器杯A 2152～2158、土師器皿か杯2159、須恵器杯A 2160～2163、須恵器杯B 2164～2167、須恵器杯B蓋2168・2169、須恵器壺2170・2171、須恵器甕2172・2173、土師器杯B蓋2174、土師器高杯2175、製塩土器2176～2180、土師器甕2181～2188、竈2191・2192、丸瓦2189、平瓦2190が出土した。これらの遺物を取り上げた後に、SP235・SP236、SP237、SP294等を検出した。

SK311

(遺物図版112)

SB04の東端部、炭層2の東側に当たる約2.5m四方の範囲である。炭層2の東側で平面的にはSB04の東端が該当する。遺物は土師器杯2193・2194、土師器杯A 2195・2196、製塩土器2197・2198、須恵器杯B蓋2199～2202、須恵器壺2203、須恵器甕2204、土師器長胴甕2205・2206、竈2207・2208が出土した。これらの遺物も残りが良いものが多く、投げ込まれた感じはなく、検出位置からSB04との関連がうかがえる。

SK205

(遺物図版113)
(写真図版199)

礫集中部の南にあたる南北1.5m、東西2mの範囲からまとまって遺物が出土した。出土遺物は土師器杯2209・2210、土師器杯か皿2211、須恵器杯B蓋2212、須恵器杯A 2213・2214、須恵器杯B 2215～2217、須恵器高杯2218、須恵器壺K 2219、土師器長胴甕2220・2221、竈2222、平瓦2223等である。



礫集中部

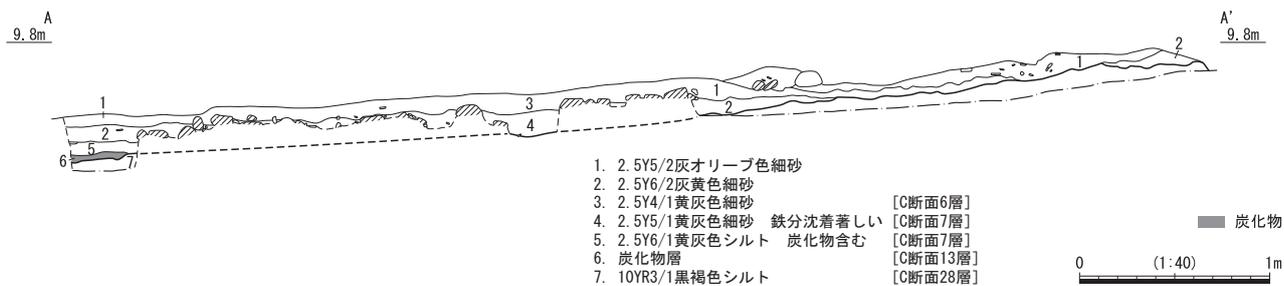
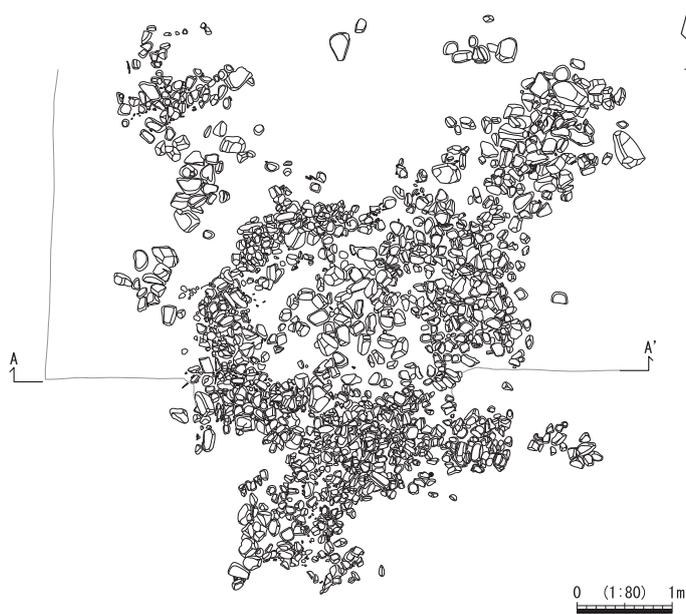


図108 6次1区整地層平面図、礫集中部平・断面図

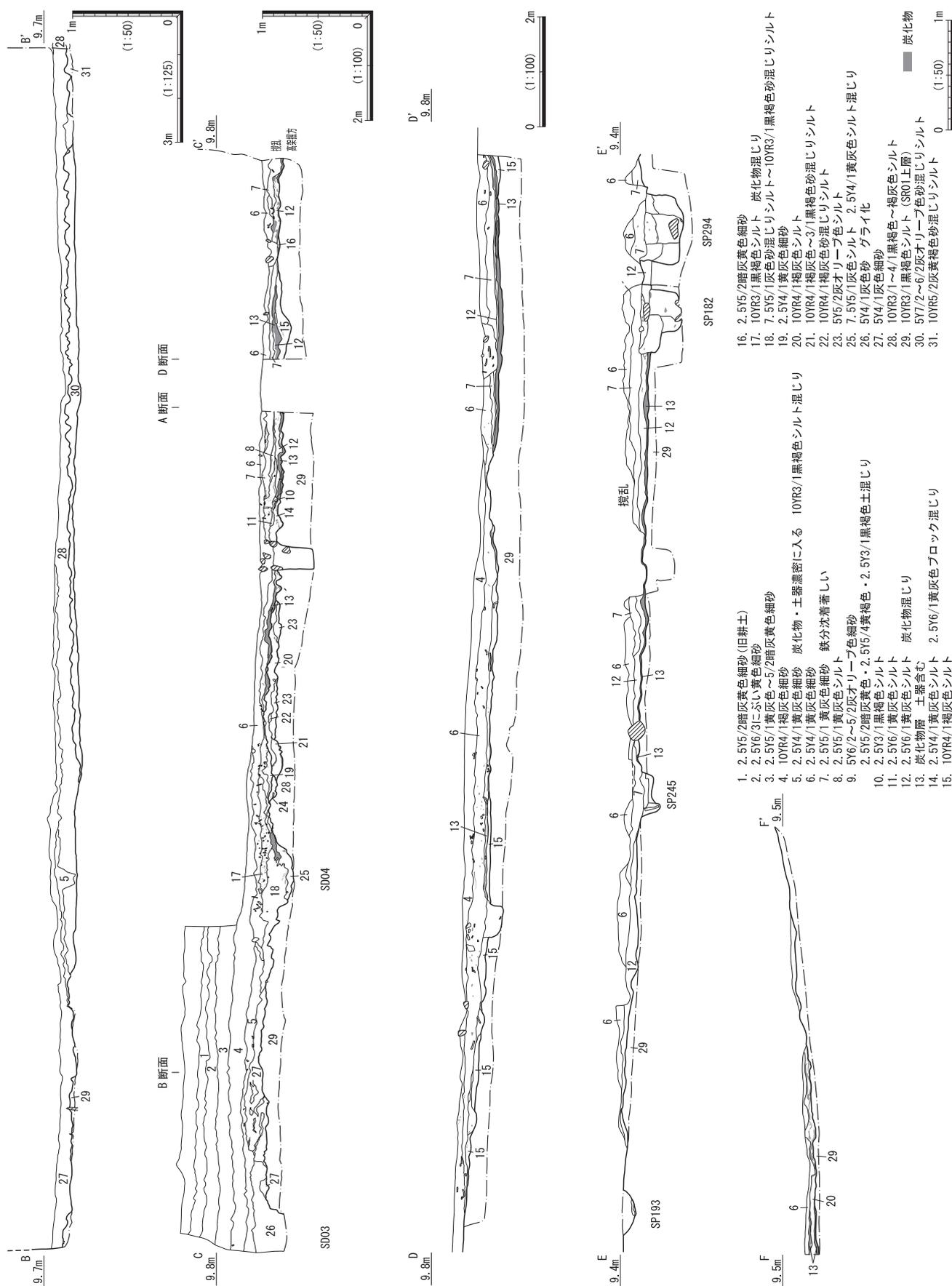


図109 6次1区整地層断面図

炭層1

(遺物図版114)
(写真図版75-4-5)

整地層下層にあたる炭層を図108に示すように6か所に分けて取り上げた。炭層1は、礫集中部と一部重なり、A断面に見るように層位的には礫集中部の下層にあたる。南北約6.5m、東西約5.5mの範囲で北に炭層2・3、西に炭層4が広がる。遺物は土師器皿A 2224、土師器杯 2225、須恵器杯B蓋 2226、須恵器杯B 2227、製塩土器 2228・2229、紡錘車 2230等が出土した。2227は内外面ともヘラミガキが顕著に認められる。

炭層2

(遺物図版114)
(写真図版199)

炭層1の北に広がる南北約6m、東西約3mの範囲で、SB04の上面にあたり、炭層3とは本来一連である。C断面の13層以下が該当する。遺物は土師器皿A 2231、須恵器杯A 2232、須恵器杯B 2233・2234、須恵器横瓶 2235等が出土した。

炭層3

(遺物図版114)
(写真図版75-3-6-135-139-199)

炭層2の西に広がり、南北約6.5m、東西約3mの範囲である。炭化物層の薄いところもあり、SR01上面の凸凹に合わせて濃淡がある。遺物は製塩土器 2236・2247・2248、土師器杯A 2237・2238、土師器高杯 2239・2240、須恵器皿A 2241、須恵器杯A 2242・2243、墨書土器 2244、須恵器稜椀蓋 2245、須恵器杯B 2246、須恵器壺 2249・2250、土師器甕 2251・2252、竈把手 2253等が出土した。炭化物層を篩掛けし、写真図版135の漆紙文書3が出土した。文字は確認できるものの細片であるため、釈読できない。炭内から出土する遺物の状態は極めて良好である。2246は2227同様、内外面・底部にヘラミガキが密に施される。

炭層4

(遺物図版115)
(写真図版199)

炭層1と3の西に広がる南北約4m、東西約5mの範囲である。西側へ行くにつれ、炭層は薄くなる。土師器皿A 2254、土師器杯A 2255・2256、墨書土器 2257、須恵器甕 2258、土師器長胴甕 2259・2260、竈 2261～2263等が出土した。

炭層5

(遺物図版115)
(写真図版137-199)

炭層3の西側に広がる南北約3m、東西約3.5mの範囲である。遺物は土師器皿A 2264・2265、須恵器杯B蓋 2266、・2267、須恵器杯B 2268、土師器甕 2269～2271、砥石 2272が出土した。

炭層6

(遺物図版115)

炭層5の西側に広がる南北約5.5m、東西約2.5mの薄い炭層が点在する範囲を炭層6として取り上げた。遺物は土師器皿A 2273、製塩土器 2274が出土している。

遺構に伴わない遺物

(遺物図版116-122)
(写真図版136-144-199-202-217)

炭層上部の整地層及び包含層(9層)からは多くの遺物が出土している。墨書土器 2275～2328が遺構に伴わない状態で出土した。墨書土器のうち、グリッドで取り上げたものを示したのが図110である。出土位置が特定できる墨書土器のうち2307を除いて、他は全てSR01上部の整地層中から出土している。整地層における出土分布から2301・2292の「古刀自」、2296・2286・2287の「大」の文字が共通して含まれる。また、2308はSD03付近とSD188付近から出土したものが接合する。整地層に含まれる文字に共通性が認められることから整地層の供給源は同一場所の可能性が高く、墨書土器の分布からも広範囲に整地が為されたことを裏付ける。なお、2284は人面墨書土器であり、姫路市内では初例となる。その他、土師器皿A 2329～2332、土師器高杯 2333、土師器杯A 2334～2339、土師器鉢 2340、土師器杯 2341～2345、土師器長胴甕 2346～2349、須恵器皿A 2350～2352、須恵器稜椀蓋 2353、須恵器稜椀 2354～2359、須恵器稜椀 2352～2359、須恵器杯A 2360～2366、須恵器杯 2367、須恵器杯B 2367～2373、須恵器鉢 2374、黒色土器鉢 2375・2376、須恵器杯B蓋 2377～2386、須恵器壺蓋 2387、須恵器高杯 2388、須恵器平瓶 2398、須恵器壺の耳部 2401、須恵器甕 2402、須恵器椀 2403、須恵器壺 2389～2397・2399・2400・2404～2411、須恵器甕 2412・2413、竈 2414・2432、鉄製巡方 2415、紡錘車 2416・2417、製塩土器 2418・2419、鞆羽口 2420・2421、土師器土錘 2422～2424、軽石 2425、砥石 2427・2428、埴 2429、軒丸瓦 2426、丸瓦 2430、熨斗瓦 2331等が出土した。2415は鉄製で方形の透し穴があき、四隅に孔を持つ鍔帯の裏金具と見られる。漆付着土器、鞆羽口、砥石、紡錘車の出土位置については、第四章において7次とともに報告する。



图110 6次1区墨書土器出土分布图

6次5区

(写真図版92-93-94)

市道城南159号線にあたる。5次5区の西側、6次1区の東側に位置する。遺構は全て耕作土直下で検出した。調査区全域に不整な掘り込みが広がる。埋土は基本的に耕土と地山が混じったもので、個別遺構ごとにその混ざり具合に差が見られる程度の違いしかない。遺構の深さは耕土下から20～50cmで、平面形は不整形で、断面は皿状を呈するものが多い。遺物量は多くないものの、奈良時代の遺物が主体となる。ただ、埋土中に近世陶磁器片を含む点、遺構埋土が概ね共通することから、全て江戸時代に位置づけられる。本調査区において、奈良時代の遺構は確認できなかった。そのうち遺物がまとまって出土した遺構について報告する。

SK38

(遺物図版123)
(写真図版93-5)

姫路駅構内の旧南北自由通路の橋脚をはさんで、北側の調査区の西壁沿いで検出した。全容は調査区外に広がるため不明であるが、検出規模で南北4.7m、東西2.2m、深さは遺構検出面から最大で90cmを測る。埋土は耕土と地山がマール状に混合した状態である。遺物は土坑北端の底付近からまとまって出土している。須恵器稜椀蓋2435、須恵器稜椀2436、土師器杯A2437、須恵器杯B蓋2438、須恵器鉢2439、製塩土器2440、土師器長胴甕2441等が出土した。2435は天井部外面に条線を巡らすもので、少なくとも2段分確認できる。2439はいわゆる鉄鉢形を呈している。

SK42

(遺物図版123)
(写真図版94-4-143)

旧南北自由通路南側の調査区で検出した。南北に長い形状を呈し、その様相は5次4区SK01等と共通している。全容は調査区外に広がるため不明であるが、検出規模で南北5.0m、東西4.0mを測る。深さは遺構検出面から概ね50cmである。遺物は埋土中に散在した状態で出土した。肥前系陶器椀2442、肥前系染付皿2443、備前焼播鉢2444・2445、緑釉陶器2446、軒丸瓦2447等が出土した。2442～2445はいずれも江戸時代初頭に位置づけられる。本遺構からは後出する時期の近世陶磁器の出土が認められないことから、当該時期の遺構と判断できる。土取りが江戸時代初頭から行われていたことを示す資料である。2446は貼付高台で薄緑色を呈し、近江産の可能性が高い。2447は播磨国府系瓦の本町式軒丸瓦である。復元面径は約15cmである。

調査区下層

(写真図版94-5)

SK42の調査終了後、5次5区へとつながる図112のE-F断面において断割りを行った。図83で確認できる西側6次1区の東壁C-F断面とは、堆積状況が異なっている。6次1区では2層のシルト層の下位で砂礫層を確認できるが、E-F断面では、西から東にかけて、細かい水平堆積がみられる。東端ではこれの上部から砂礫層が斜めに堆積する。この砂礫層は近接する5次5区SE01の断ち割り(写真図版64-1)で確認できる砂礫層につながると見られる。6次1区と5次5区の様相比較から6次5区下層の堆積状況が異なることが判明した。遺物が出土していないことから時期等は不明であるが、地形形成段階における堆積状況の差を認めることができる。

遺構に伴わない遺物

(遺物図版123)
(写真図版143)

遺構検出時に様々な遺物が出土した。図示に耐えるものとして土師器杯A2448、軒平瓦2449、土師器甕2450、土師器長胴甕2452がある。2448は内面に暗文が施される。2449は2447とセットになる本町式軒平瓦である。播磨国府系瓦としては、西部地区で上原田式軒丸瓦が出土しているが、その他は古大内系軒丸瓦が出土しているのみである。本調査区では本町式が出土しているものの、隣接する「豆腐町Ⅲ次」では軒瓦の出土が報告されていない。このことから、これらの瓦については瓦葺き建物の存在を示すようなものではなく、何らかの理由で遺跡内に持ち込まれたものと考えておきたい。

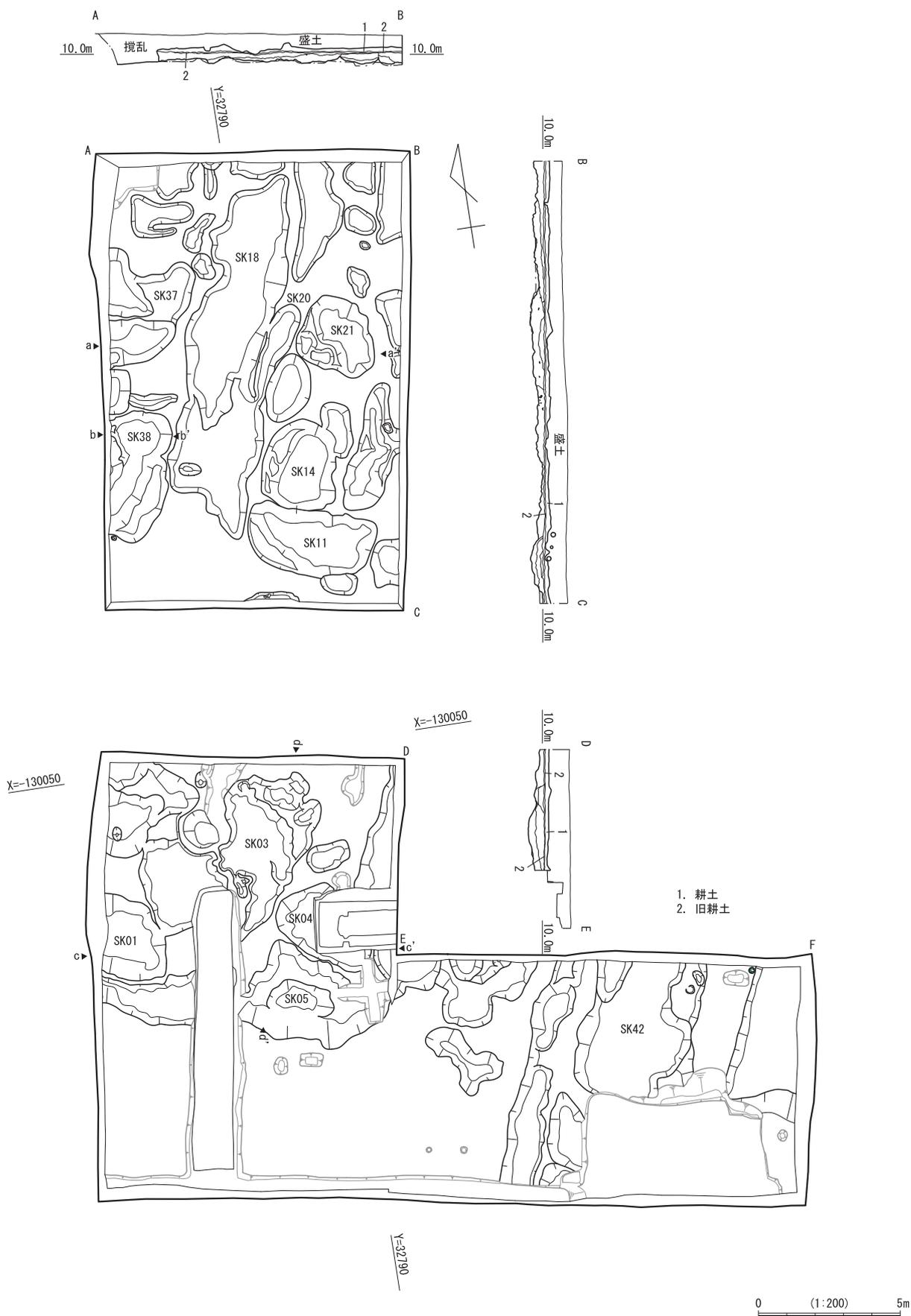
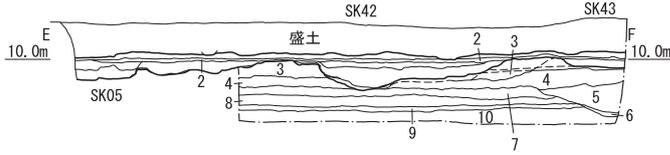


图111 6次5区平面图、土层断面图

第三章 調査の成果

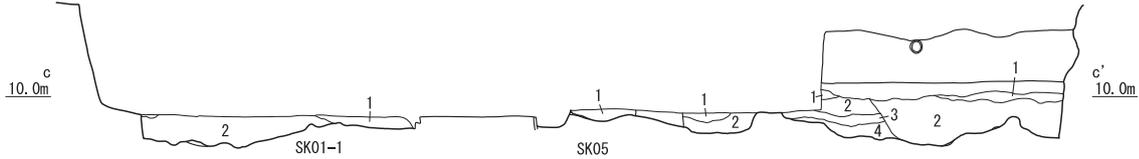
調査区E-F断面



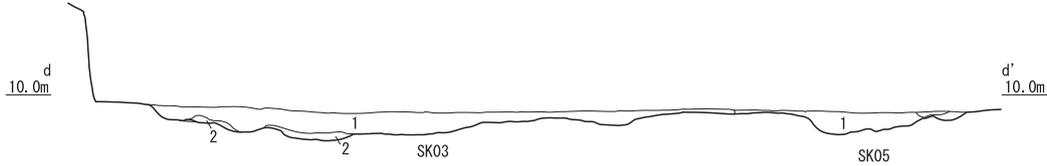
- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1. 耕土 | 6. 10YR4/1褐灰色細砂 |
| 2. 旧耕土 | 7. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 |
| 3. 10YR3/1黒褐色シルト | 8. 2.5Y4/2暗灰黄色細砂 |
| 4. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト | 9. 10YR3/2黒褐色シルト |
| 5. 砂礫 | 10. 2.5Y5/4黄褐色シルト |



SK01・SK04・SK05

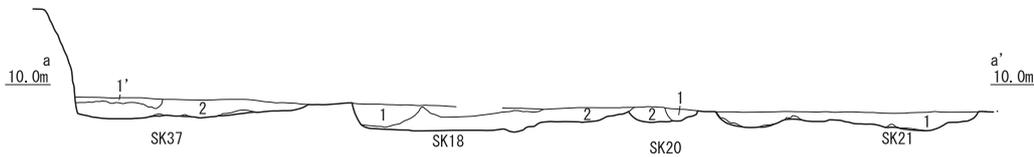


1. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルトブロック混じり
2. 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルト 2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり
3. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルトブロック混じり
4. 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルト 2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり

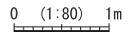


1. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルトブロック混じり
2. 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルト 2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり

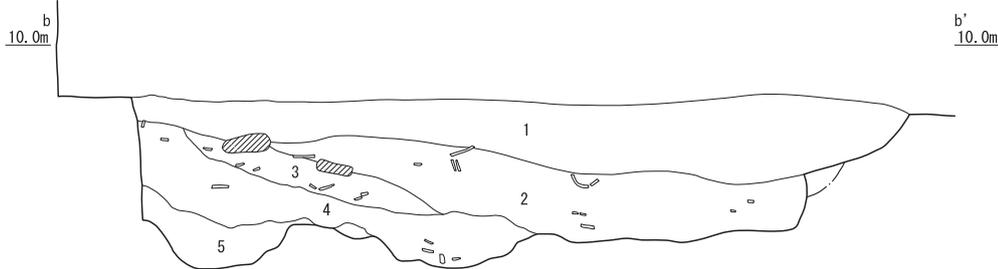
SK18・SK20・SK21・SK37



1. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルトブロック混じり
- 1'. 5Y5/2灰オリブ色砂 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルトブロック混じり
2. 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルト 2.5Y5/2暗灰黄色細砂混じり



SK38



1. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色ブロック混じり
2. 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルト 2.5Y5/2暗灰黄色混じり 黄色土混じり 土器大量に含む
3. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色ブロック混じり
4. 10YR5/1～4/1褐灰色細砂 10YR4/1褐灰色細砂混じり
5. 10YR4/2灰黄褐色～3/2黒褐色シルト 2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり



図112 6次5区東部北壁土層断面図、SK01・SK04・SK05・SK18・SK20・SK21・SK37・SK38断面図

7次

6次1区の西及び北に位置する。調査時に姫路駅構内の連絡通路があったため、調査区を分割する必要から1区から3区に分けた。遺構数も多いことから遺構番号は調査区ごとに採番した。そのため、最終的には図113に見るように一連の平面として提示可能であるが、個別遺構については調査区ごとに報告する。7次1区の西側には旧姫路駅の地下通路があったため、遺構は残存していない。確認調査の結果から、地下通路をはさんだ西側は再び微高地となり、遺構の存在が希薄となっている。そのため、7次1区が東部地区の西端にあたる。また、6次1区調査中に駅ホーム上で確認調査を行い、ホーム下にも遺構が存在することが確認できたため、旧駅ビルによって攪乱を受けている範囲までを調査対象とした。7次2区と3区北端が旧ホーム下にあたる。

地形は6次1区から連続し、調査区全体が微低地にあたる。調査区の基本層序は7次1区・2区・3区とも同じであることから、ここで述べる。6次1区と基本的に同じである。7次2区東端は6次1区東端と同様に微高地となっているため、江戸時代の耕土のほぼ直下で遺構検出面となる。西側は地形が落ち込むため厚い堆積が認められ、盛土、耕土(1層)、旧耕土(2・3層)、暗灰黄色微砂(4層)、黄灰色細砂(5・6層)、褐灰色シルト(7層)を経て、黄褐色から灰白色シルトの地山に至る。6次1区で検出していた黒褐色シルト(8層)の堆積は部分的である。地山を遺構検出面とした。

1区 (写真図版95-109)

東西16m、南北27mの調査区で、調査時には姫路駅構内の連絡通路があったため、調査区を東部と西部に分割して調査を実施した。検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝、土坑、柱穴、流路等である。

SB16

(遺物図版124)
(写真図版99-3-100-6)

SB15の南端から南へ6.5mの位置で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。西側にSA02が存在する。規模は桁行3間、梁行2間である。桁行総長5.5m、柱間寸法はSP78-SP97で西から1.7m、1.6m、2.2mである。梁行総長3.8m、柱間寸法はSP97-SP101で1.9mの等間隔である。同柱筋を基準とした建物の主軸は真北である。柱穴掘方は円形を呈すものと隅丸方形を志向するものがある。円形のは直径25～55cm、隅丸方形を志向するのは一辺30～80cmと大きさはばらつく。深さは遺構検出面から15～42cmである。柱痕跡は確認できたもので直径14～20cmである。SB16については、上記のように考えているが、SP97の柱筋とSP71の柱筋との間隔が広いこと、また、SP119の存在から一棟の建物ではなく、総柱建物と柵など、別の遺構の可能性もある。遺物はSP71の掘方から須恵器杯B蓋2454、SP74の埋土上層から須恵器皿A 2455、SP76から土師器杯A 2456が出土した。

SA01

(写真図版99-3)

SB16の西側で検出した南北の掘立柱塀である。SP80-SP90の3基の柱穴で構成され、対になる柱列が確認できないことから柵とした。平面位置からSB16と関連すると考えられる。延長3.5mで、柱間寸法は北から1.7m、1.8mを測る。主軸は真北である。掘方は円形を呈し、直径22～32cm、深さは遺構検出面から16～37cmである。遺物は出土していない。

SB17

(遺物図版124)
(写真図版99-4-100-2-4-5)

SB15の西に位置し、SP62がSB15を構成するSP30に切られている。7次3区SB12と棟通りが揃い、SB13の北側梁行の柱筋と揃っている。規模は桁行3間、梁行2間である。桁行総長4.3m、柱間寸法はSP64-SP67で東から1.6m、1.3m、1.4mである。梁行総長3.6m、柱間寸法はSP59-SP67で北から1.65m、1.95m、同柱筋を基準とした主軸は真北である。柱穴掘方は基本的に円形を呈し、直径は40～56cmであるが、SP63は不整形で長軸82cmを測る。深さは22～54cmである。完掘時に掘方底面で直径10～15cmの柱の当たりを確認した。遺物はSP67の埋土上層から須恵器杯A 2453が出土した。

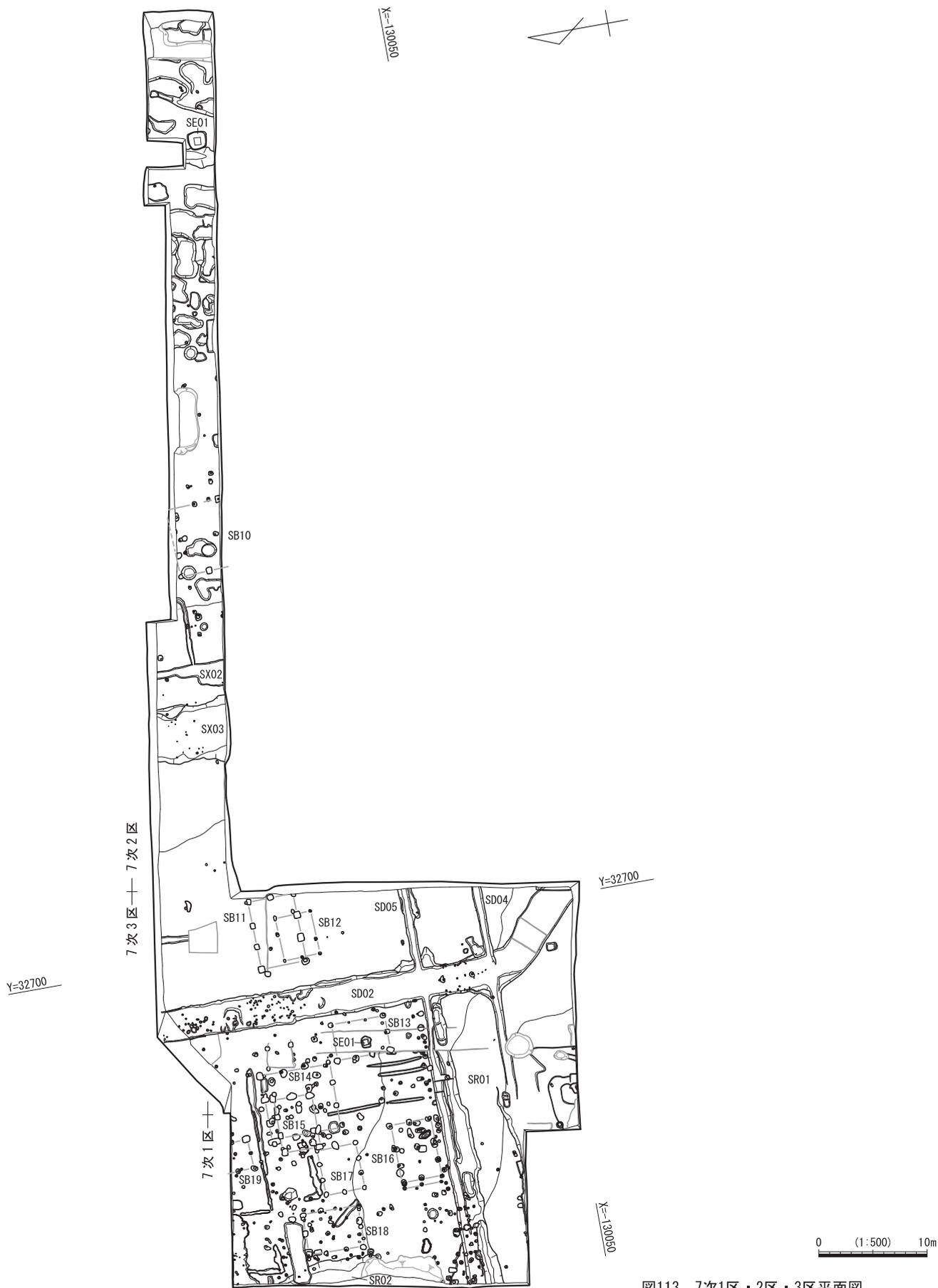


図113 7次1区・2区・3区平面図

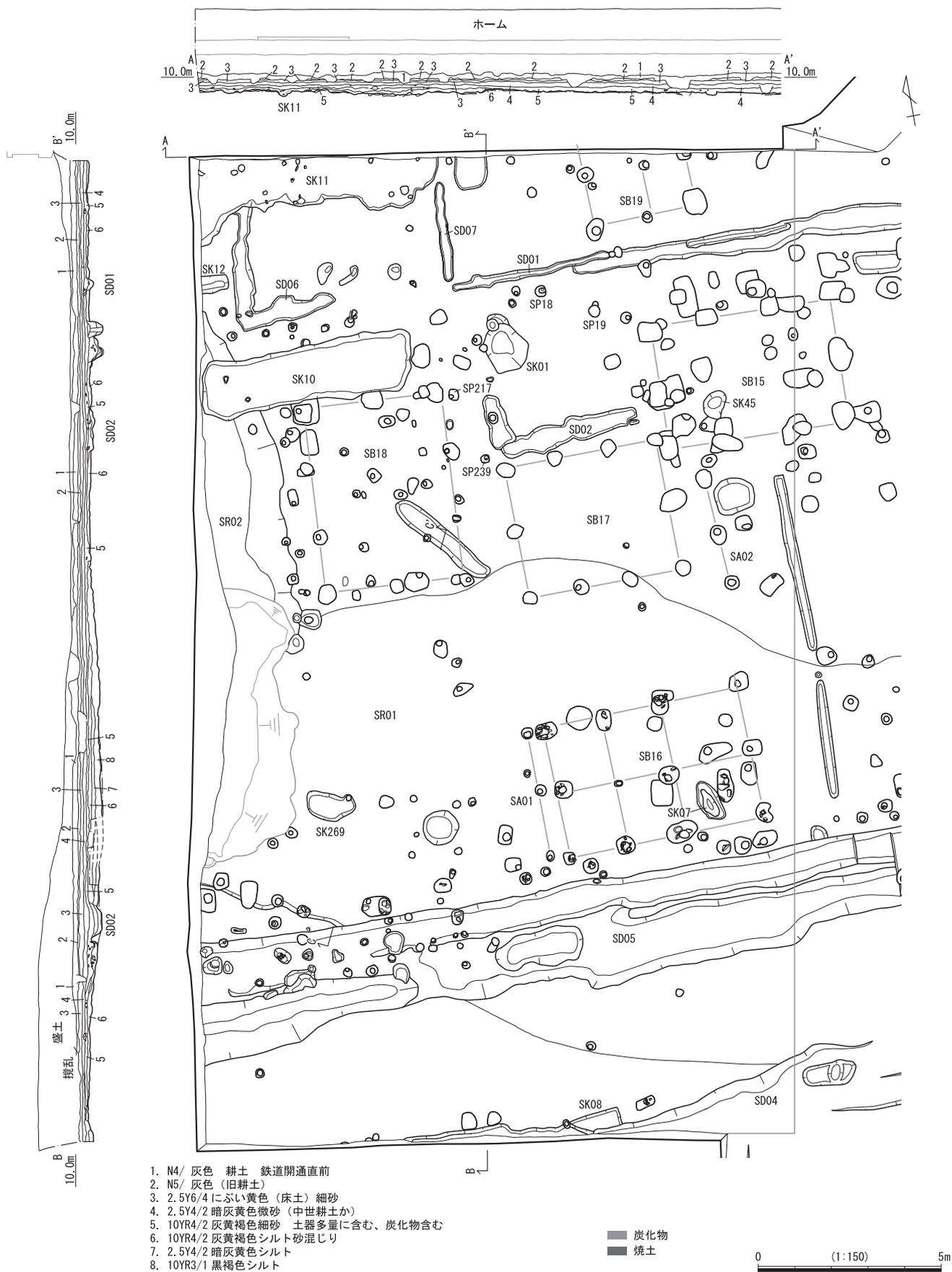


図114 7次1区平面図、土層断面図

SB18

(遺物図版124)
(写真図版105-2)

SB17の西端から西へ1.2mの位置で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。後述する7次3区SB11、SB14、6次1区SB10の建物南端の柱筋が揃う。規模は桁行3間、梁行2間である。桁行総長5.2m、柱間寸法はSP224-SP296で北から1.6m、1.9m、1.7mである。梁行総長3.8m、柱間寸法はSP218-SP224で1.9mの等間隔である。SP224-SP296を基準とした建物の主軸はN1°Eである。柱穴掘方は基本的に円形を呈す。直径26～60cm、深さは遺構検出面から10～42cmと一定ではない。柱痕跡は直径12～30cmである。埋土には炭化物を含んでいる。遺物はSP224の柱痕跡から土師器甕2457が出土した。

SB19

(写真図版99-5-100-1-128-3)

SB17の北端から北6mの位置で検出した南北棟の総柱建物跡である。8次2区とまたがるが、本遺構については、まとめてここで報告する。規模は桁行3間、梁行2間である。桁行総長5m、柱間寸法は8次2区SP10-7次1区SP02で北から1.9m、1.6m、1.5mである。梁行総長3.3m、柱間寸法は8次2区SP10-SP17で西から1.6m、1.7mである。8次2区SP10-7次1区SP02を基準とした建物の主軸はN2°Wである。柱穴掘方は基本的に円形を呈し、8次2区SP01・同SP08・7次1区SP05・同SP04が隅丸方形を志向する。円形のもの直径22～60cm、隅丸方形を志向するものは一辺32～72cmまでと大きさにばらつきがみられる。深さは遺構検出面から15～49cmである。柱痕跡は確認できたもので直径10～20cmである。図示に耐える遺物が出土した柱穴はない。

SA02

SB17の東側で検出した南北の掘立柱塀である。SP53-SP55の3基の柱穴で構成され、対になる柱列が確認できないことから柵とした。主軸はN5°Wである。平面位置はSB14・SB15・SB17と近いが、主軸が異なることから関連は不明である。延長3mで、柱間寸法は1.5mの等間隔である。掘方は円形を呈し、直径38～54cm、深さは遺構検出面から24～34cmを測る。遺物は出土していない。

SP18

(遺物図版124)

SB17の北約4.5mで検出した。掘方は円形を呈し、直径は30cm、深さは遺構検出面から20cmを測る。埋土上層から製塩土器2458が出土した。

SP19

(遺物図版124)
(写真図版102-4)

SP18の東約1mの位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は32cm、完掘時の深さは遺構検出面から15cmを測る。図に示すように検出時点で須恵器壺2459が確認できた。掘方内におさまることからSP19に伴うものと判断した。

SP217

(遺物図版124)

SB18を構成するSP218の東で検出した。掘方は隅丸方形を呈し、長軸62cm、短軸54cm、深さは遺構検出面から23cmを測る。掘方から須恵器皿2460が出土した。内面に重ね焼きの痕跡が残り、破片であるため全形は復元できないが、大型の個体である。

SP239

(遺物図版124)
(写真図版108-5-183)

SB17の北西隅SP59に近接した位置で検出した。掘方は円形を呈し、直径は25cm、深さは遺構検出面から21cmを測る。埋土上層から完形に近い小型の須恵器平瓶2461が正置の状態出土した。小型のもので水差しとして使用されたものであろうか。

SK01

(遺物図版127)
(写真図版102-1-2-184)

SB17の北約2.5mの位置で検出した不整な円形を呈する土坑である。長軸1.52m、短軸1.2m、深さは45cmを測る。掘鉢状に掘り込まれ、土坑底には8cm程の厚さで炭化物の単層が存在する。出土遺物には被熱痕跡は認められないことから、別で生成した炭化物を遺構内に敷き均したものであろう。土坑底から土師器杯2511、炭化物より上層から須恵器杯A2512、須恵器壺2513が出土した。図示していないが漆付着土器が4点出土している。

SK07

(遺物図版127)
(写真図版102-6-7-184)

SB16と平面的に重なる位置で検出した。柱穴配置との関係からSB16の屋内施設の可能性もあるが、確証はない。南北方向に長い楕円形を呈し、長軸1.17m、短軸70cm、深さは遺構検出面から12cmを測る。面的に広がる炭化物層が認められるが、断面1層と2層の層界に広がる程度で前述のSK01ほど明確ではない。遺物は炭化物層より下から土師器皿A2514・2515、須恵器杯A2516、須恵器壺K2517が出土した。

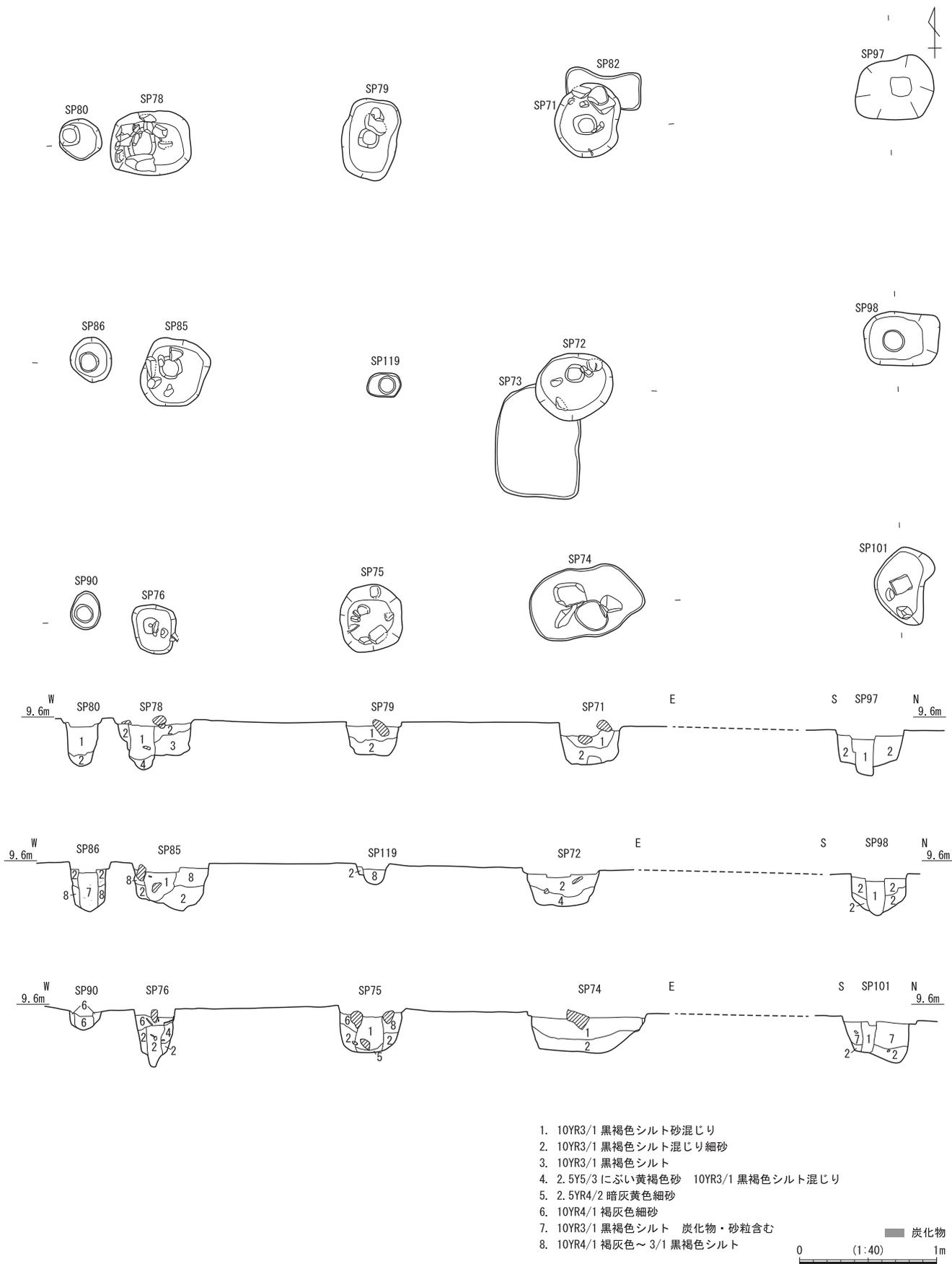


図115 7次1区SB16・SA01平・断面図



東部地区

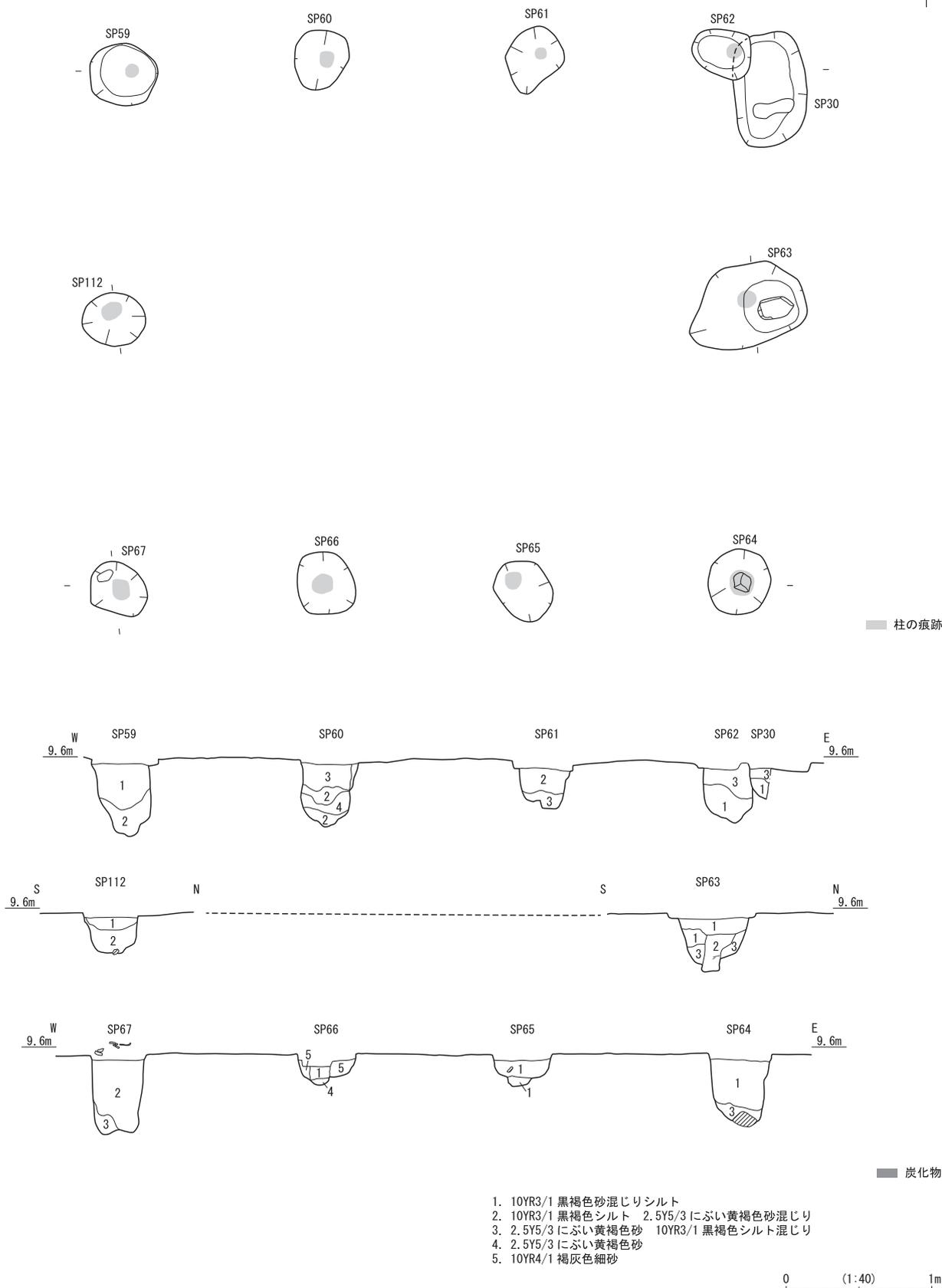


図116 7次1区SB17平・断面図

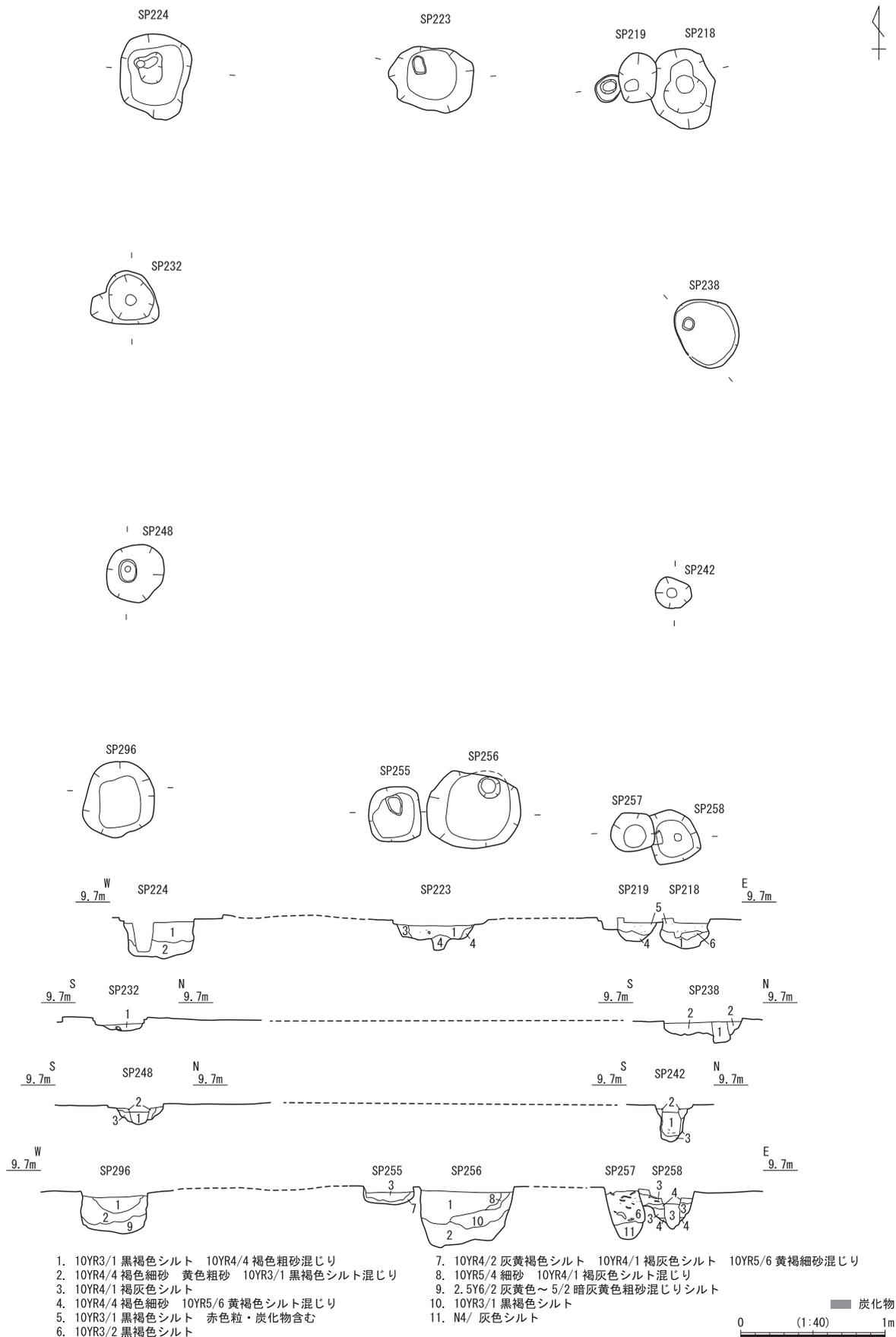


図117 7次1区SB18平・断面図

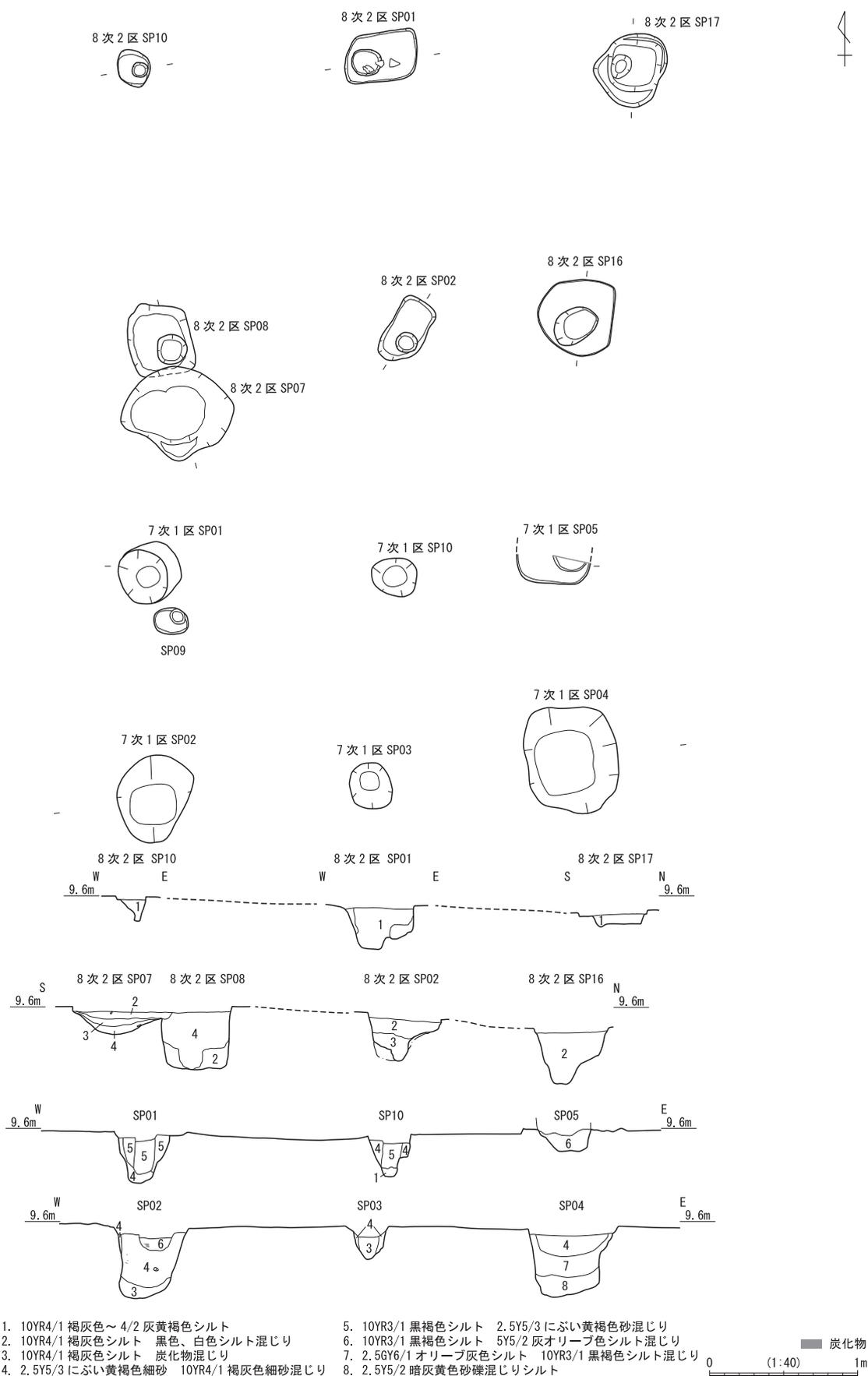


図118 7次1区・8次2区SB19平・断面図

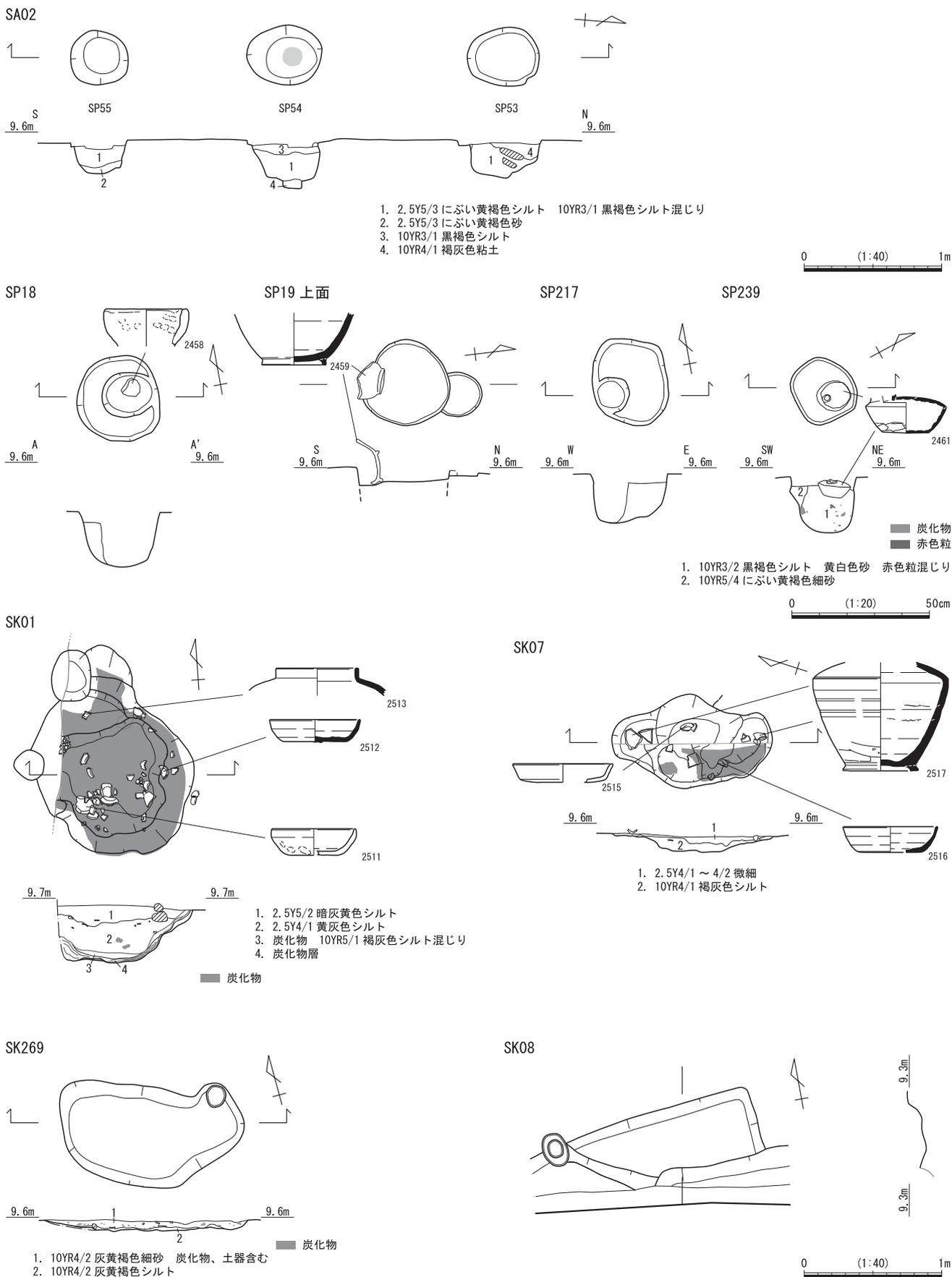


図119 7次1区SA02、SP18・SP19・SP217・SP239、SK01・SK07・SK08・SK269平・断面図

SK08

(遺物図版127)
(写真図版184)

調査区の南、SD04 に切られる形で検出した。全容は不明であるが、検出状況では隅丸長方形を呈していたのかもしれない。検出規模で、東西 1.44 m、南北 50cmで、深さは遺構検出面から 14cmを測る。遺物は埋土上層から土師器甕 2518 が出土した。

SK10

(遺物図版127)
(写真図版108-1-3、
137-184)

SB18 の北で検出した。SB18 を構成する SP223 と SP224 との切り合いから SB18 より後に掘られたものである。東西方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸 5.64 m、短軸 1.7 m、深さは最大で 24cmを測り、完掘後の土坑底面は凸凹が顕著である。埋土は炭化物を大量に含み、土坑底には厚さ 2～8cmの炭化物層が全域に認められる。遺物は上層から砥石 2530、炭化物層もしくはその直上から須恵器杯 B 蓋 2519・2520、須恵器杯 B 2521・2522、須恵器壺 2523～2525、須恵器高杯 2526、円盤加工土製品 2529 等が出土し、炭化物層の下位から土師器長胴甕 2527・2528 等が出土した。図示したもの以外に漆附着土器が 13 点出土している。

SK11

(遺物図版128)
(写真図版109-184-203)

SK10 の北約 3 mで検出した。調査区外に広がるが、北側へは 8 次 2 区の成果から大きく広がらない。西への広がり不明である。SK10 に比べて不整形であるが、長軸 6.7 m、短軸 2.3 m、深さは遺構検出面から 25cmを測る。土坑底面は SK10 と同様に凸凹が顕著である。土坑下部は炭化物と灰が互層となっている。遺物は SK10 と同様に炭化物層の上層及び炭化物層内から出土するが、炭化物層との有機的な関連をうかがえる出土状況はない。土坑底面で被熱痕跡は確認できないことから、これらの炭化物は他所で生成したものを持ち込み、土坑内に意図的に敷き均したものである。遺物は炭化物より上から土師器皿 A 2534、土師器杯 2537、須恵器杯 A 2539・2544、須恵器皿 A 2540・2541、須恵器杯 B 2543、須恵器杯 B 蓋 2549、須恵器高杯 2551、須恵器盤 2552、土師器甕 2553、製塩土器 2554、土師器甕 2555 等が出土した。炭化物層及びその下層から土師器皿 A 2533・2535・2536、土師器杯 A 2538、須恵器皿 A 2542、墨書土器 2545、須恵器稜椀 2546、須恵器杯 B 蓋 2547・2548、須恵器稜椀蓋 2550、土師器長胴甕 2556・2557、平瓦 2558 等が出土した。本調査区においては SK01、SK07、SK10、SK12、SK269 において同じ様相が確認できる。また、6 次 1 区検出遺構及び SR01 上面の整地層とも共通している。SR01 上部の整地層については、整地に伴う防湿機能を想定した。5 次 4 区 SK62 の分析でも炭化物層以下に熱が伝わっていないことが確認されており、水分を遮断する意図をもって施工されたものと考えられる。本遺構に限らず炭化物層からサンプルを採取し篩掛けしたが金属加工に伴う痕跡等は確認できていない。図示したもの以外に漆附着土器が 6 点出土している。

SK12

(遺物図版127)

SD06 の西側で検出した土坑である。調査区外に広がるため全容は不明である。検出規模で南北 50cm、東西 70cmを測る。深さは遺構検出面から 12cmである。埋土には大量の炭化物を含んでいる。遺物は少なく須恵器杯 B 蓋 2531 を図示した。

SK45

(写真図版102-3)

平面的に SB14・SB15 と重なる位置で検出した不整形の土坑である。長軸 75cm、短軸 54cm、深さは遺構検出面から 19cmを測る。埋土に炭化物を多く含み、底面から 5cmほど上面で土坑内に広がる炭化物の単純層を検出した。遺物は出土していないが、6 次 1 区 SK50 や後述する 7 次 1 区 SK01 や SK10 とも共通点があり、豆腐町遺跡で特徴的に確認できる遺構様態である。

SK269

(遺物図版127)

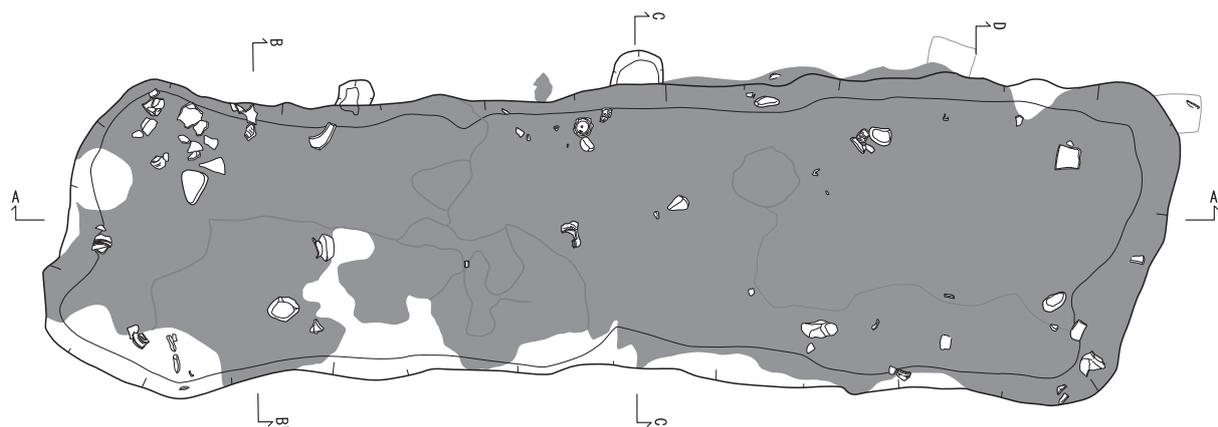
SB18 の南約 5.5 mで検出した東西方向に長い不整形の土坑である。長軸 1.35 m、短軸 75cm、深さは遺構検出面から 10cmを測る。本遺構も SK07 と同じく 1 層と 2 層の境に薄く炭化物層が広がる。埋土下層から須恵器盤 2532 が出土した。

SD01

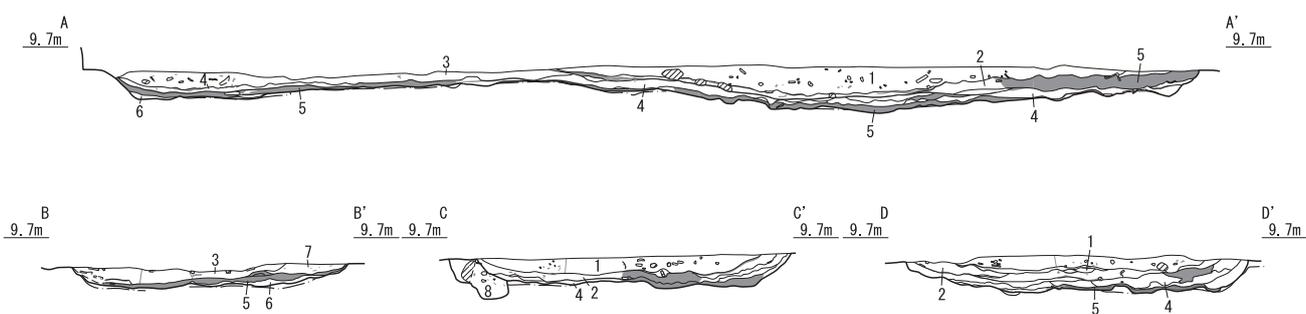
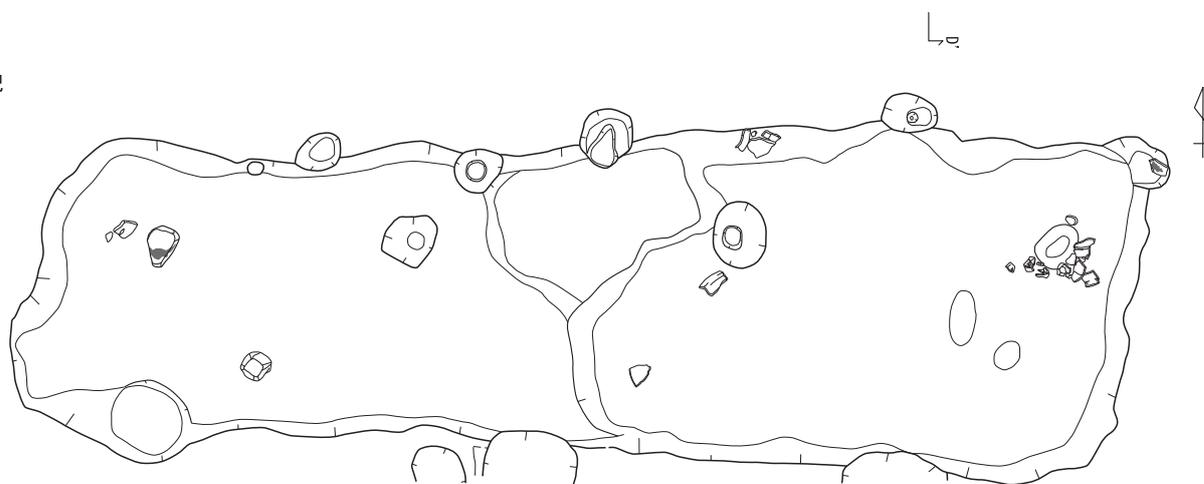
(遺物図版124)
(写真図版101-4)

SB17 の北約 5 m、SB19 の南 35cmの位置で検出した東西方向に延びる溝である。7 次 3 区まで延び、延長は 13.5 m、幅は最大で 32cm、最小で 15cmを測る。断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から 10cm前後である。埋土から須恵器高杯 2462 が出土した。SD01 の西端

炭層の分布



完掘状況



1. 2.5Y4/1 ~ 4/2 黄灰色~暗灰黄色 炭化物・土器混じり
2. 2.5Y3/1 黒褐色シルト 黄色砂混じり
3. 2.5Y4/1 ~ 4/2 黄灰色~暗灰黄色 炭化物・土器混じり
4. 10YR4/1 黄灰色シルト 炭化物混じり
5. 炭化物層
6. 10YR3/1 黒褐色シルト
7. 2.5Y4/1 黄灰色細砂灰混じり
8. 10YR3/2 黒褐色細砂 (Pit埋土)

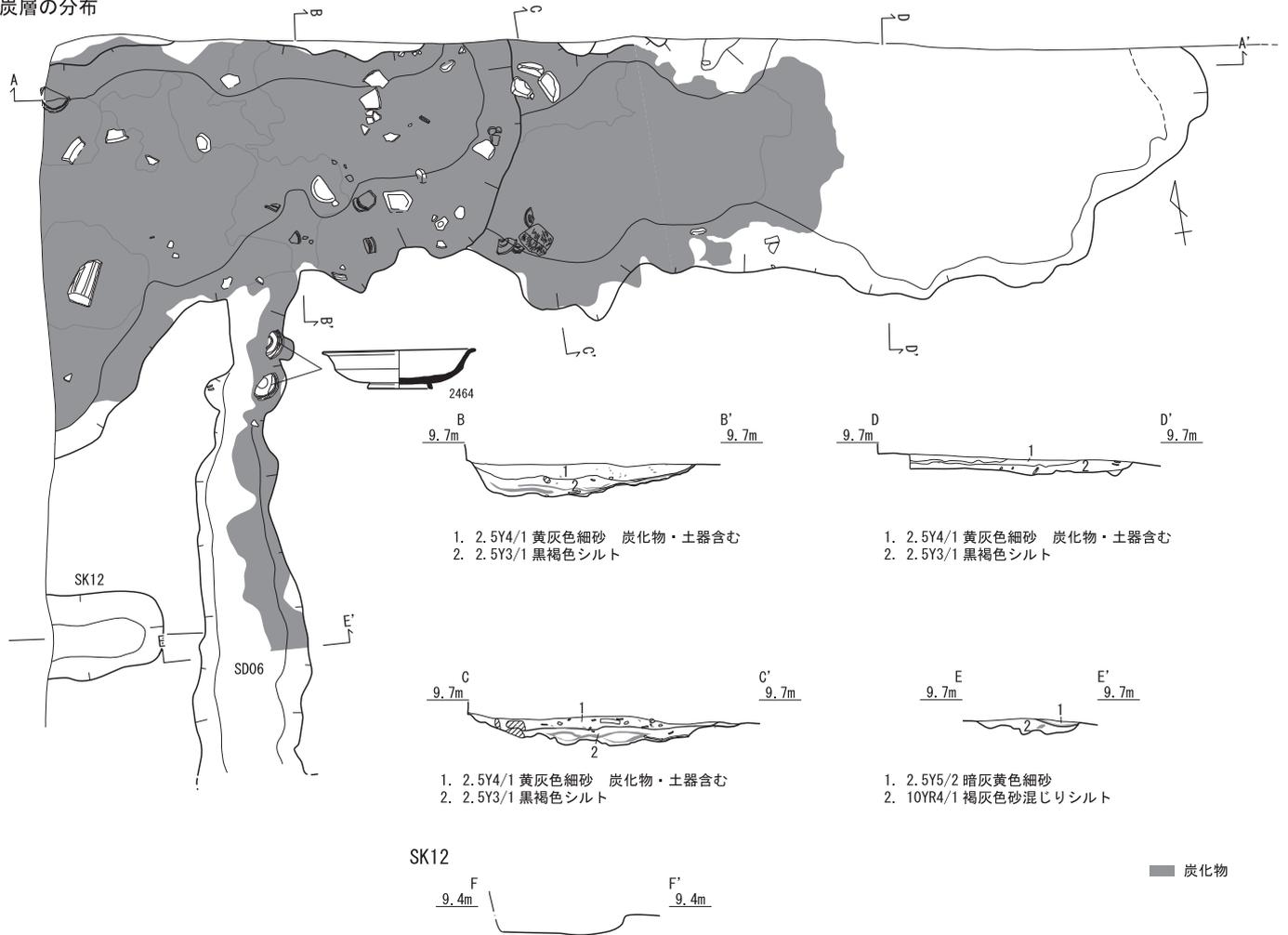
■ 炭化物

0 (1:40) 1m

図120 7次1区SK10平・断面図

炭層の分布

東部地区



完掘

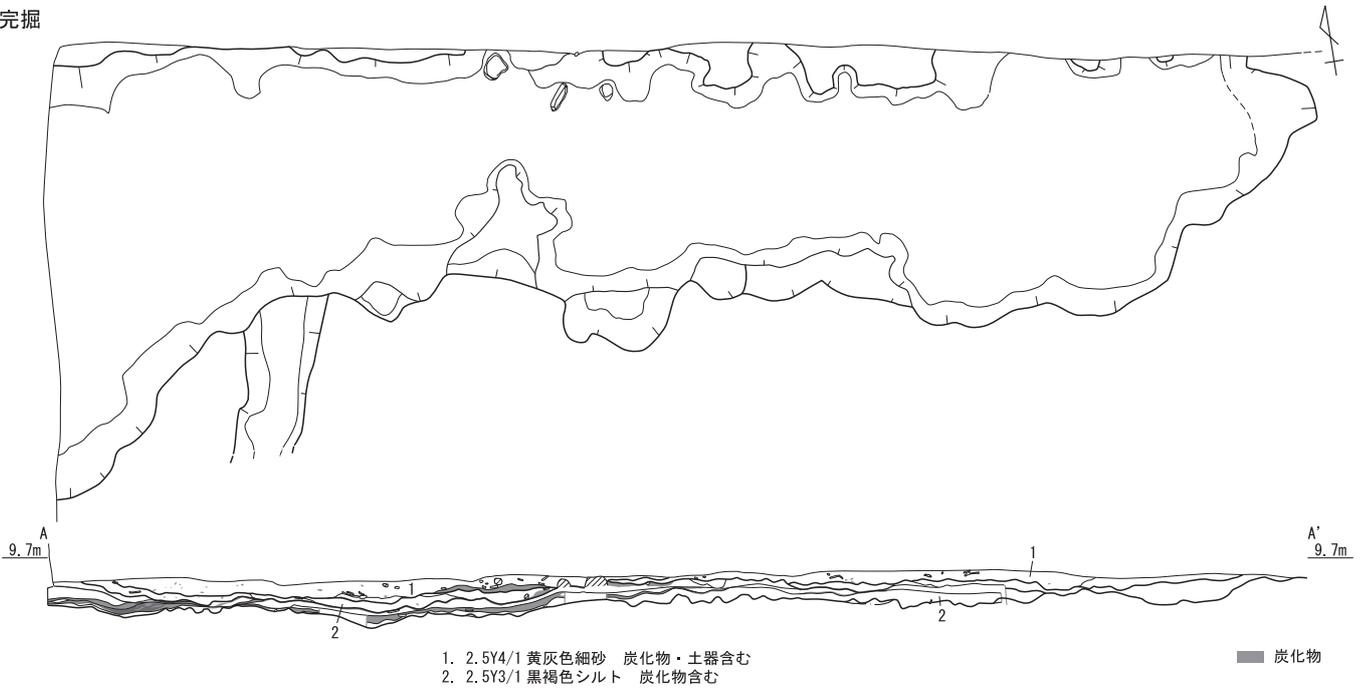


図121 7次1区SK11平・断面図

で南北方向のSD07を検出した。直接の接続はないが、SD01の主軸と直角に配置されることから両者は関連する遺構であろう。SD07は延長2.7m、幅は32cmである。深さは遺構検出面から10cm前後で、SD01と概ね同じである。

SD04

(遺物図版124)

6次1区から延びる道路遺構の南側側溝である。調査区内での検出規模は延長約8mである。本調査区内においては、溝の北肩の一部のみ確認した。SK08を切っている。埋土下層から土師器の小型甕2463等が出土しているが、SD05に比べて出土量は少ない。

SD05(遺物図版125-126)
(写真図版101-1-3-
106-1-2-107-108-4-6-
137-183-184-203)

SB16に近接する位置で検出した東西方向に延びる溝である。6次1区から延びる道路遺構の北側側溝である。本調査区では、6次1区で確認していた外側と内側の溝がより一層明確に認められる。平面検出時点では幅約3mの一つの溝として認識したが、調査の進展により2条に分離した。北側をSD05-1、南側をSD05-2とし、SD05-2のうち西端で一段深くなる部分をSD05-3と呼称した。検出規模で延長4.1m、幅はSD05-1が約1.0m、SD05-2が約1.6m、SD05-3が約1.6mである。深さはSD05-1で32cm、SD05-2で28cm、SD05-3で60cmである。SD05-1の両肩は直線的であるが、SD05-2とSD05-3は出入りが激しい。SD05-3は溝というよりも土坑状に掘り込まれている。図123のA断面からSD05-3はSD05-1より後に掘られており、これが道路側溝とすれば、幅は縮小している。SD05-3の北肩で、SK01と共通する炭化物層を敷くSD05内SK01を検出した。

遺物はSD05-1からの出土量は少なく、須恵器杯A 2479、墨書土器2491、須恵器壺2493・2497を図示した。SD05-2からはSD05-1よりも多数の遺物が出土したが、遺構内に散在し顕著なまとまりは認められなかった。土師器杯2466、土師器高杯2476、須恵器高杯2492、須恵器壺2494、紡錘車2498・2499を図示した。SD05-3からは土師器杯2465・2467～2469、土師器杯B 2470、土師器皿A 2471・2472、土師器杯A 2473、土師器杯B蓋2474、土師器高杯2475、製塩土器2477、須恵器皿A 2478、須恵器杯A 2480、須恵器杯B 2481～2485、須恵器杯B蓋2486～2490、須恵器壺2495・2496、土師器甕2500～2509、砥石2510等が出土した。図示した以外に漆付着土器が32点出土している。

SD06(遺物図版124)
(写真図版109-3-183)

SK11の南で検出した直角に曲がる溝である。SK11との切り合い関係は平面プランでは確認できず、SK11と一連の遺構の可能性もあるが、SK11の底面がSD06よりも下がることから本来は切り合い関係があったものと想定する。溝の東西方向に延びる部分はSD01の延長上にあり、SD01との関連も想定できる。検出規模で、東西約2.7m、南北約3mを測る。幅は最大で70cm、深さは遺構検出面から10cm前後でSD01と共通する。埋土には炭化物を多く含んでいる。SK11に近い溝底から二つに割れた状態で須恵器稜椀2464が出土した。

SR01・SR02

(写真図版106-3-4)

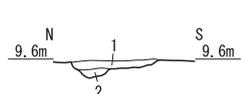
本調査区では、基本層序8層は面的に広がらないが、8層と同一の黒褐色シルトは、調査区の北西から南東にかけて帯状に認められる。東西方向に延びるものをSR01、SB18の西側で南北方向をSR02の遺構と認識した。検出規模でSR01は延長約14m、幅は最大で9.8mを測る。断面は皿状を呈し、深さは遺構検出面から最大で28cmである。SR02は延長9m、幅は2.1m以上、深さは遺構検出面から45cmを測る。SR01との切り合い関係は攪乱のため不明である。SR02からは図示に耐えないが、弥生土器片が出土している。

**遺構に
伴わない遺物**(遺物図版129-130)
(写真図版185-186-203)

遺構検出時に多くの遺物が出土した。墨書土器2559～2564、須恵器皿A 2565、須恵器高杯2566・2569、須恵器杯B 2567・2568、須恵器杯B蓋2570・2571、須恵器稜椀2572・2573、須恵器壺2574～2578、須恵器甕2579～2581、丸瓦2582、平瓦2583、砥石2584を図示した。2565は転用硯で、内面中央に墨痕が残る。2571は天井部に加飾を施している。2574～2579は漆容器であろう。2566、2576、2579は外面に漆が付着するが、2576は意図的に器表に漆を塗った様相が認められる。墨書土器の出土位置は図139に示した。

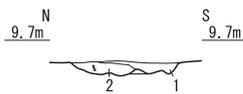


SD01



1. 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト

SD02



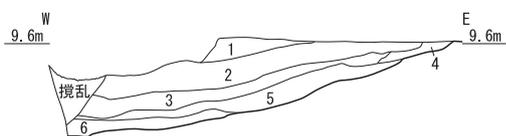
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色微細
2. 10YR4/2 灰黄褐色微細 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト混じり

SD07

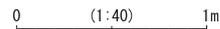


1. 10YR3/1 黒褐色シルト

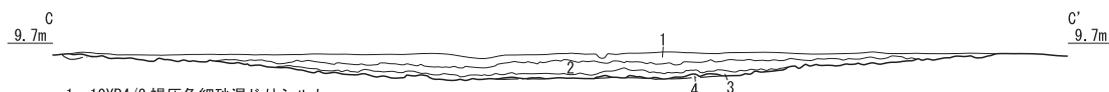
SR02



1. 10YR3/1 黒褐色細砂
2. 10YR3/1 黒褐色細砂混じりシルト 下に10YR2/1 黒色シルト
3. 10YR3/1 黒褐色砂 φ1~2mmの砂粒混じり
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂
5. 10YR4/1 褐灰色砂~細砂
6. 10YR4/1 褐灰色粗砂 φ3~5mmの礫混じり



SR01 (図114に対応)



1. 10YR4/2 褐灰色細砂混じりシルト
2. 10YR4/2 褐灰色シルト
3. 10YR4/2 褐灰色シルト 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト混じり
4. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト (地山)

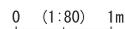


図122 7次1区SD01・SD02・SD07・SR02平・断面図、SR01断面図

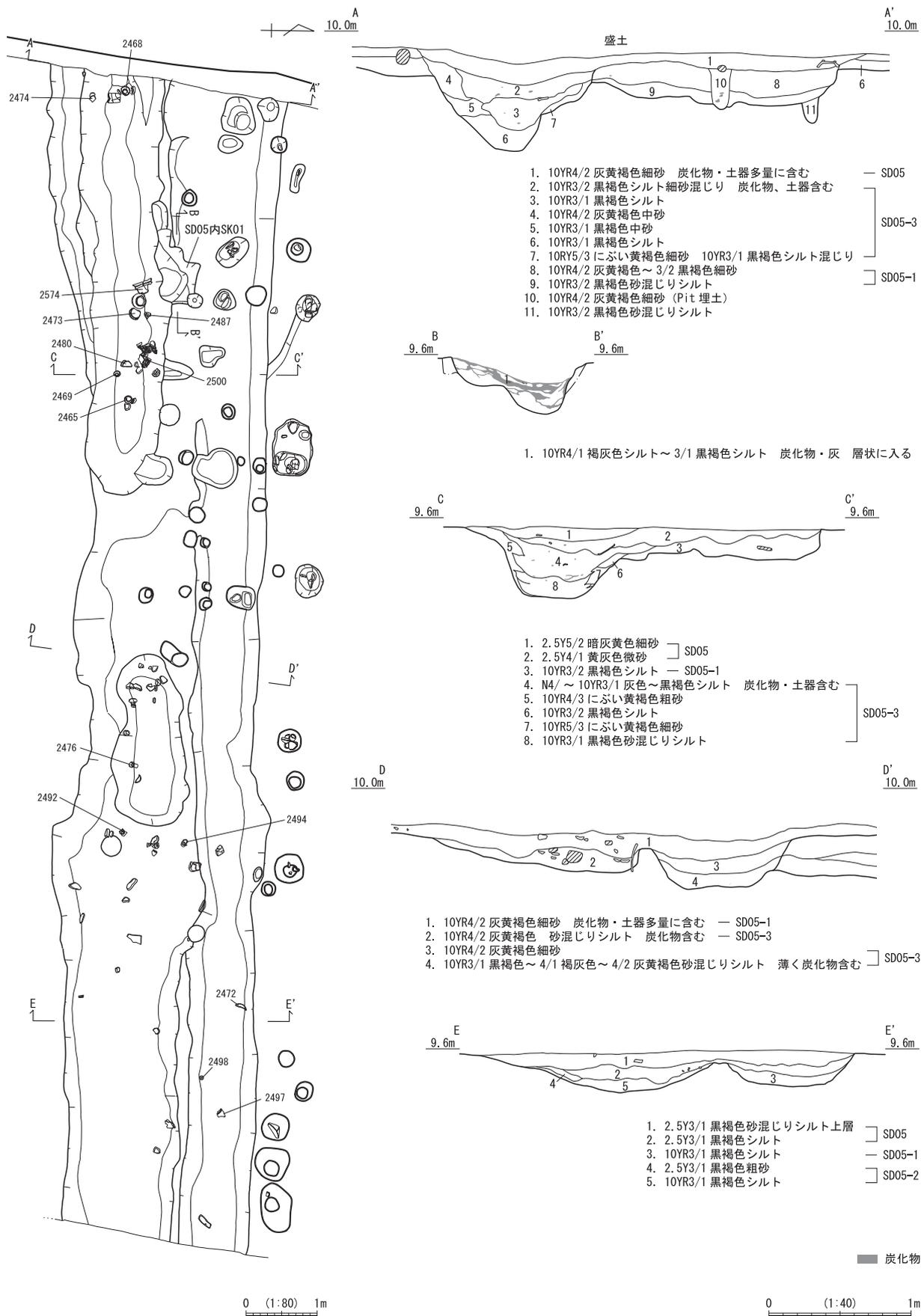


図123 7次1区SD05平・断面図

2 区 (写真図版110-112)

6次1区の北に位置する東西81m、南北6mの調査区である。既存建物の攪乱を受けた箇所を除外して調査した。6次1区と同様に調査区東端から約56m付近で地形が落ち込む。検出した遺構は6次1区から延びる建物跡1棟、井戸1基、溝、土坑、柱穴、落ち込み土取り痕である。

SE01

(遺物図版131)
(写真図版112-1-4-185)

調査区の東端で検出した井戸である。掘方は隅丸方形を呈し、一辺約1.7mを測る。深さは遺構検出面から90cmで、底面の標高は9.0mである。検出時点で掘方のやや西寄りに一辺約65cmの方形のプランを確認した。その内部では四周を巡る横方向の木質を確認した。横板組の井側と考えられるが、支柱等は遺存しておらず、詳細な構造を把握することはできなかった。板の痕跡は深さ55cm程残存していたが、井戸内埋土はそれよりも下まで続く。下位では板材等は全く確認できなかった。板材の下端付近から須恵器杯B 2589が出土した。井戸底面の北西隅で直径26cmの掘り込みを検出した。その内部から須恵器杯B 2588、土師器甕 2593が出土した。井戸に伴うものと考えられるが、明らかに井戸底埋土8層を掘り込んでいる。どういう意図で掘られたのかは不明である。井側内から土師器杯 2585、土師器杯A 2586、須恵器杯A 2587、須恵器杯B 2590、製塩土器 2591、土師器長胴甕 2592、丸瓦 2594・2595、平瓦 2596、土錘 2597等が出土している。掘方からの遺物の出土はなかった。

SP16

(遺物図版132)

SE01から西へ約50mの位置で検出した。掘方は隅丸方形を呈し、長軸50cm、短軸44cmを測る。深さは遺構検出面から10cmである。掘方から土師器長胴甕 2598が出土した。

SD01

(遺物図版132)
(写真図版111-1)

SP16の南3mで検出した東西方向に延びる溝である。東端は北へ屈曲しながら調査区外に延びる。西端はSX02まで延びる。検出規模で延長約6.3m、幅は最大で50cm、深さは遺構検出面から15cm前後で、断面は溝の北側が一段凹んでいる。6次1区で確認した地形の傾斜変換点に位置し、東から西へ緩やかに傾斜する。埋土から土師器杯A 2599、須恵器皿A 2600、須恵器杯B 2601等が出土した。

SX02

(遺物図版132)
(写真図版111-2)

6次1区で調査したSR01の上面で検出した。明確な掘り込みをもつ遺構ではなく、SR01上面の凹みに堆積したものである。その範囲は全体図に示したように最終的に溝状となった。6次1区でも検出時には確認できたが、遺物量が少ないため、個別には採り上げていない。6次1区で検出した炭層1～6と同じくSR01の上面の整地層であろう。延長6.1m、幅は0.7～2.45mを測る。埋土はSR01と類似する黒褐色シルトで炭化物や土器を含む。土師器杯A 2602、須恵器杯B蓋 2603、須恵器杯B 2604、製塩土器 2605等が出土した。

SX03

(遺物図版132-134)
(写真図版111-3-5-136-185-203-204)

SX02の西側で検出した。SX02と同じくSR01上面の凹みに堆積したものである。その範囲は南北6.4m、東西6.2mである。深さは5～10cmを測る。SX02に比べて多くの遺物が出土した。出土状況は図136に示した。土師器皿A 2606・2607・2611、杯A 2608、墨書土器 2609・2610、土師器高杯 2612、土師器甕 2613～2617、墨書土器 2618～2623、須恵器稜椀 2624・2625、須恵器皿A 2626、須恵器杯A 2627～2631・2637、須恵器杯B 2632～2636、須恵器杯B蓋 2638～2640、須恵器高杯 2641、須恵器壺 2642～2644、2646・2647、須恵器鉢 2645、鞆羽口 2648・2649、製塩土器 2650～2665等が出土した。

遺構に伴わない遺物

(遺物図版135)
(写真図版186-204-205)

遺構検出中あるいは包含層から多くの遺物が出土した。墨書土器 2666～2682、須恵器杯B 2683～2685、須恵器杯B蓋 2686・2687、須恵器壺 2688～2692、軽石 2693・2694、土師器土錘 2695、須恵器土錘 2696、円盤加工土製品 2697等を図示した。墨書土器のうち土師器は2点で、他は全て須恵器である。判読可能な文字として「倭」「稻依」「国」がある。特に「国」はSX03も含めて4点出土している。軽石 2693と2694は別々に出土したものであるが、接合することから本来は一個体である。



図124 7次2区平面図、北壁土層断面図

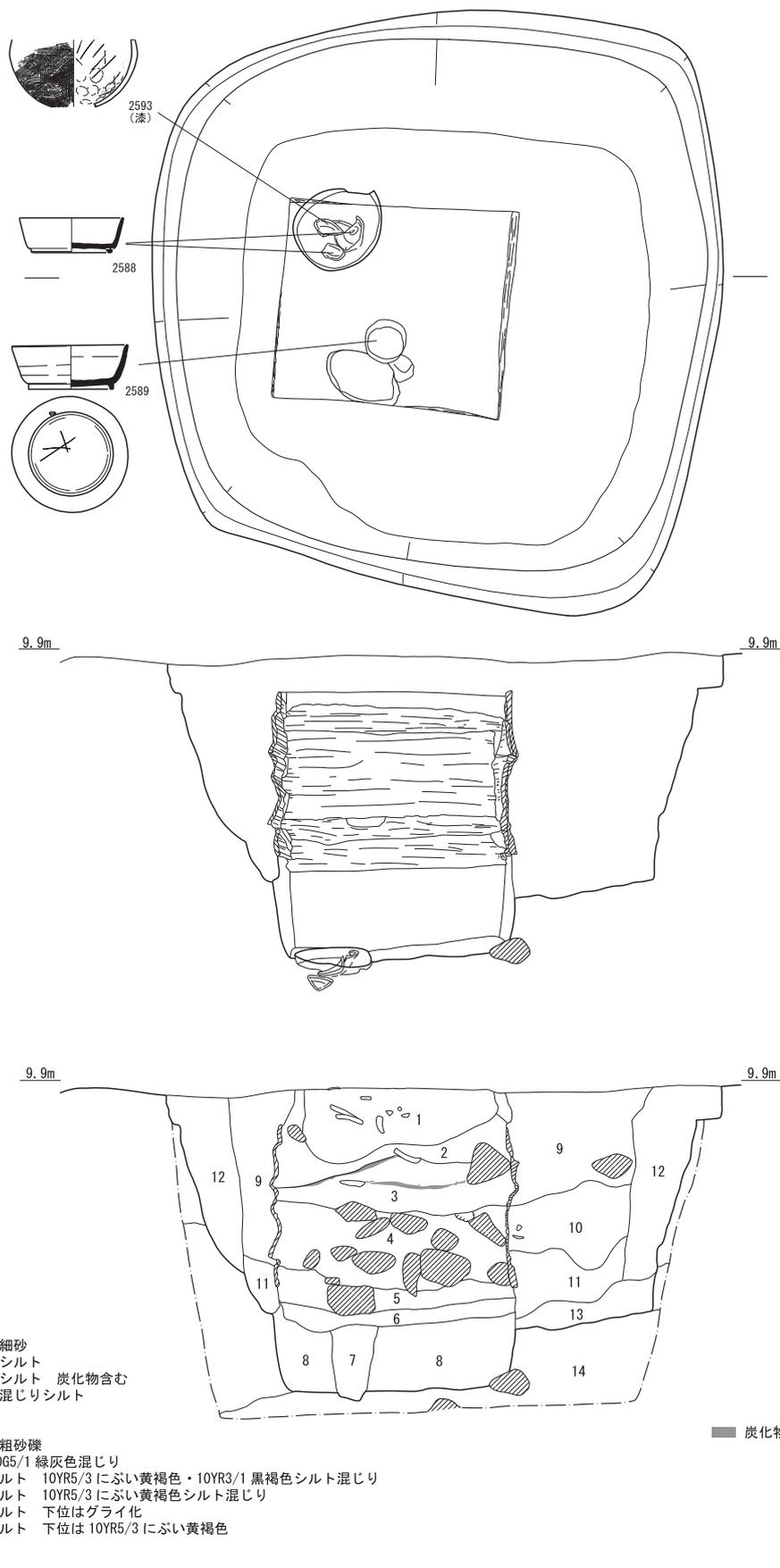
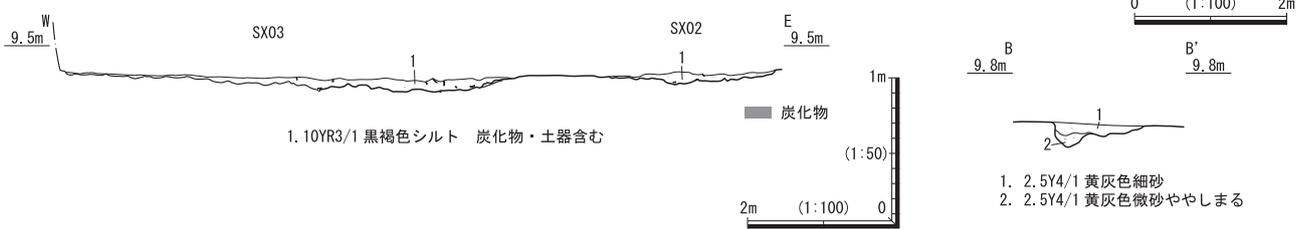
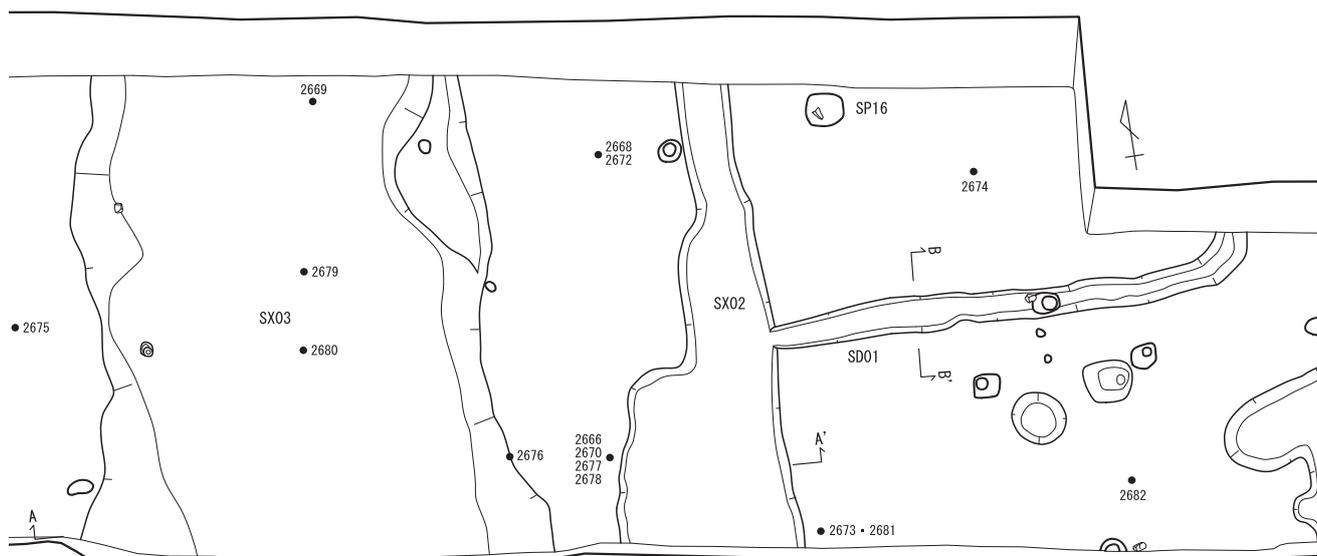


図125 7次2区SE01平・断面図



SX03

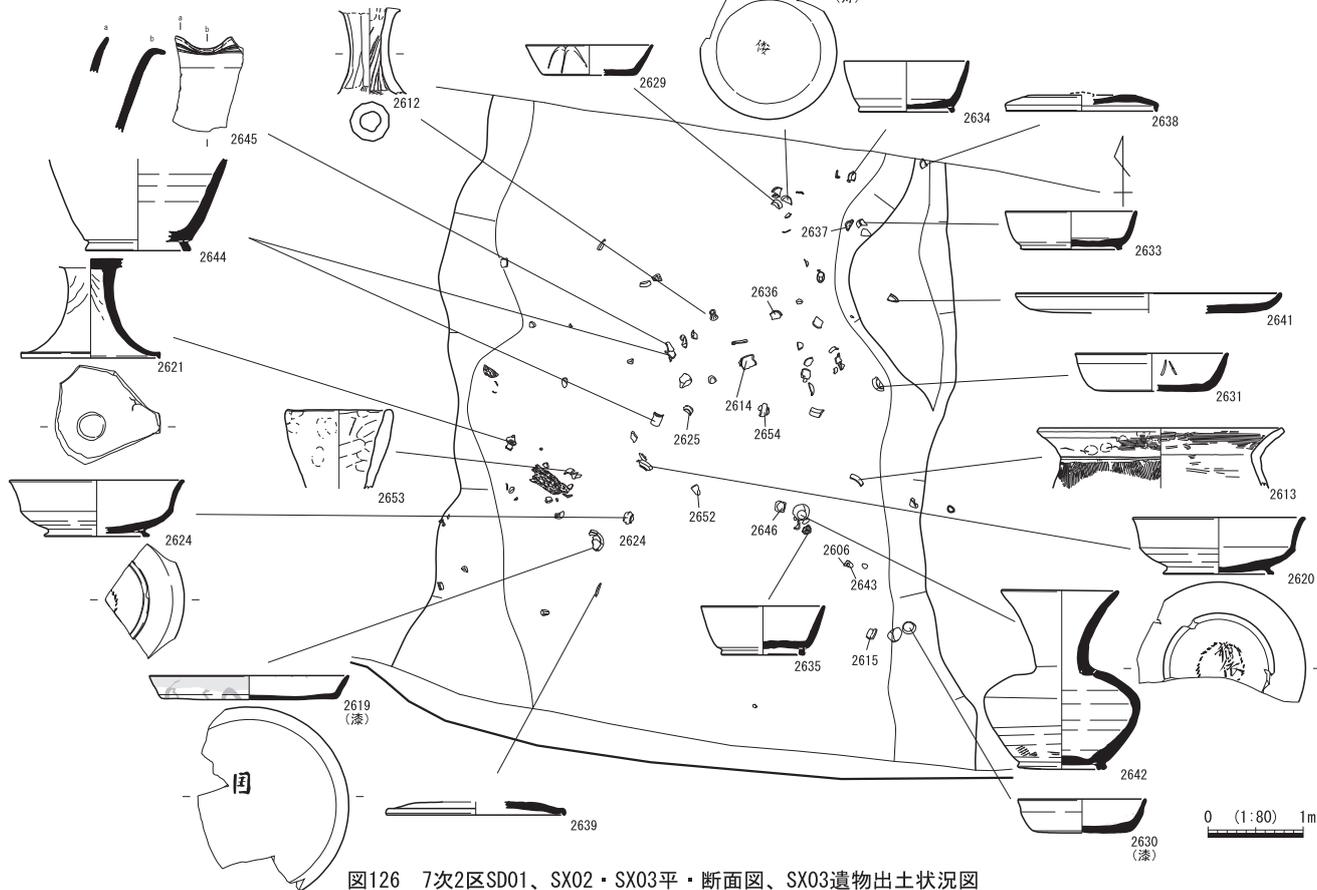


図126 7次2区SD01・SX02・SX03平・断面図、SX03遺物出土状況図

3 区 (写真図版95-113-126)

7次1区の東、6次1区の西に位置する南北約27m、東西約21mの調査区である。検出した遺構は掘立柱建物跡5棟、井戸1基、道路跡、溝、土坑、柱穴等である。掘立柱建物跡のうち、SB14とSB15は7次1区でその半分を検出している。井戸はSB13と重なる位置で検出した。道路跡は6次1区から延びるもので、調査区中央では、4区画溝SD02と交わる地点で橋脚を検出した。土坑は、豆腐町遺跡で特徴的に見られる炭化物層を伴うものを1基確認している。

SB11

(写真図版115-1)

調査区の東端で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。南東隅の柱穴は6次1区で検出した。後述する7次3区SB14と7次1区SB18とは棟通りが揃っている。建物を構成するSB11-SP07がSB12-SP11を切っている。一部確認できない柱穴があるが、桁行3間、梁行2間と考える。桁行総長6.5m、柱間寸法はSP01-SP04で西から2.3m、2.0m、2.2mである。梁行総長4.4m、柱間寸法はSP04-SP06で北から2.1m、2.3mで、同柱筋を基準とした建物の主軸はN 0.5° Eである。柱穴掘方は基本的に隅丸方形を志向する。一辺43～75cmと大きさにばらつきがみられる。深さは遺構検出面から16～37cmである。柱痕跡は直径14～20cmである。埋土には炭化物を含んでいる。図示に耐える遺物の出土はない。

SB12

(写真図版115-1)

平面的にSB11と重なる位置で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。SP11がSB11-SP07に切られることから、SB11より古いことがわかる。柱穴は確認できない場所があるが、桁行3間、梁行2間である。桁行総長4.1m、柱間寸法はSP12-SP14で東から2.7m、1.4mである。梁行総長3.3m、柱間寸法はSP14-SP16で1.65mの等間隔である。同柱筋を基準とした建物の主軸はN 2.5° Wである。柱穴掘方は円形を呈し、直径22～45cmを測る。深さは遺構検出面から20～30cmである。図示に耐える遺物の出土はない。

SB13

(遺物図版136)
(写真図版116-117-1-205)

SB12の西6.8mの位置で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。SE01と平面が重なるが関係は不明である。東端の桁の通りはSB14東端の桁と揃っている。一部確認できない柱穴もあるが、規模は桁行3間、梁行2間である。桁行総長5m、柱間寸法はSP60-SP63で北から1.8m、1.5m、1.7mである。梁行総長3.3m、柱間寸法はSP63-SP65で1.65mの等間隔である。SP60-SP63を基準とした建物の主軸はN 0.5° Wである。柱穴掘方は基本的に円形を呈し、直径15～69cmと大きさにばらつきがみられる。SP61とSP62は著しく小さいが、25cm程掘り込まれている。深さは遺構検出面から20～43cmである。埋土には炭化物を含んでいる。遺物はSP60の掘方から須恵器杯B 2698が出土した。

SB14

(遺物図版136)
(写真図版99-12115-2-116-23117-2-4)

SB13の北に位置する掘立柱建物跡である。7次1区と7次3区にまたがって検出した。7次1区SB18、7次3区SB11、6次1区SB10と棟通りが揃っている。建物を構成する7次1区SP33がSB15-SP37に切られることから、SB15に先行する建物跡である。わずかに南北方向が長い、6次1区SB10と同じく、柱構成から身舎の南側に廂を付した建物と考えられ、身舎は2間3間の東西棟である。7次3区SP34-7次1区SP56が庇を構成する。桁行総長6.3m、柱間寸法は7次3区SP31-7次1区SP37で東から2.1m、2.2m、2.0mである。梁行総長4.1m、柱間寸法は7次3区SP31-7次3区SP33で北から1.9m、2.2mを測る。庇の出は2.2mである。同柱筋を基準とした建物の主軸はN 3° Wである。柱穴掘方は円形を呈すものと隅丸方形を志向するものが混在する。円形のは直径40～76cm、隅丸方形のものは一辺44cm～1.1mと大きさにばらつきがみられる。7次3区SP32とSP33は柱材がわずかに残存していた。深さは遺構検出面から25～45cmである。総じて庇を構成する柱穴は、深さ、規模とも小さい。埋土には炭化物を含んでいる。SP31掘方から須恵器壺2699が出土した。

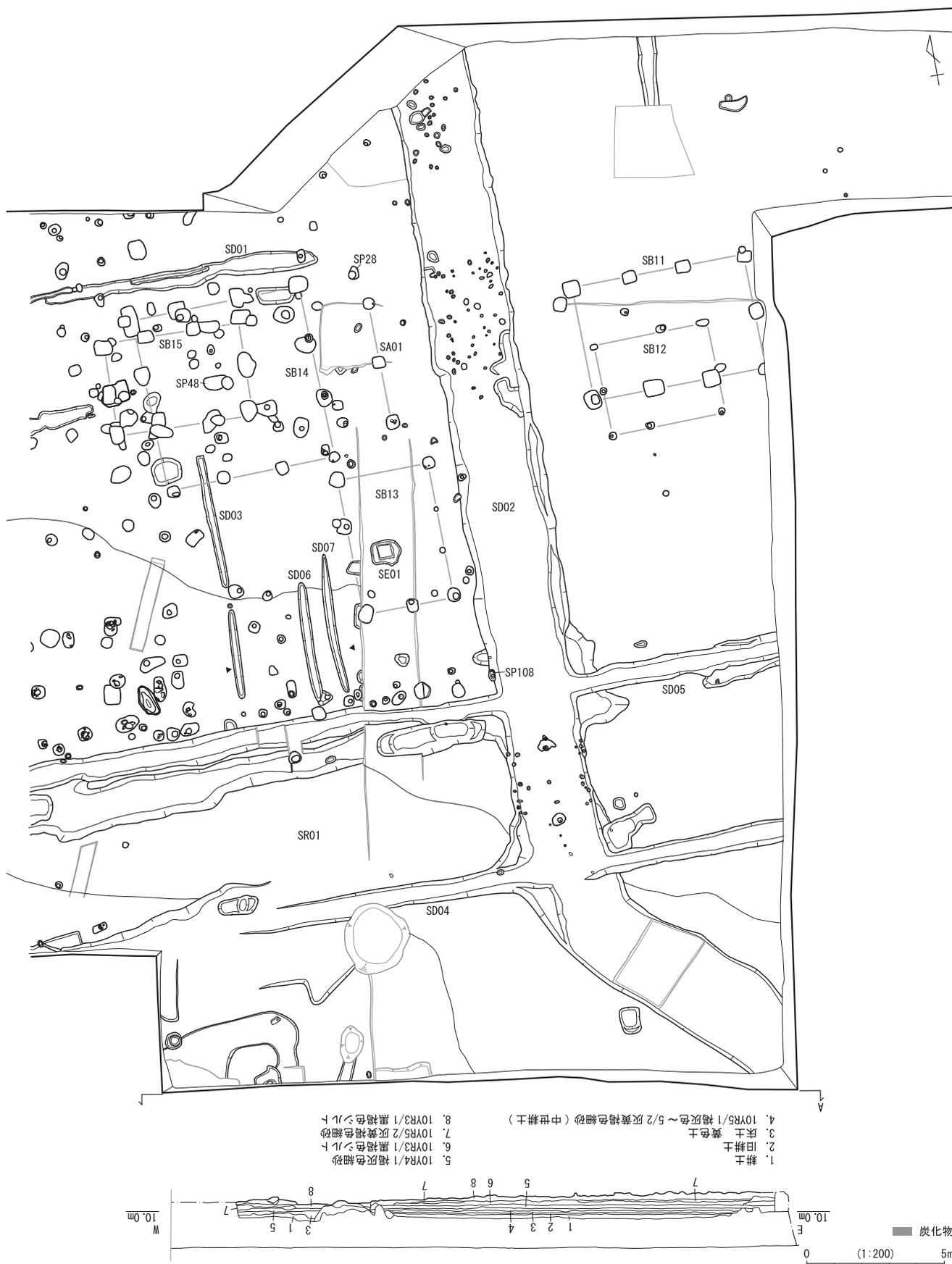


図127 7次3区平・断面図

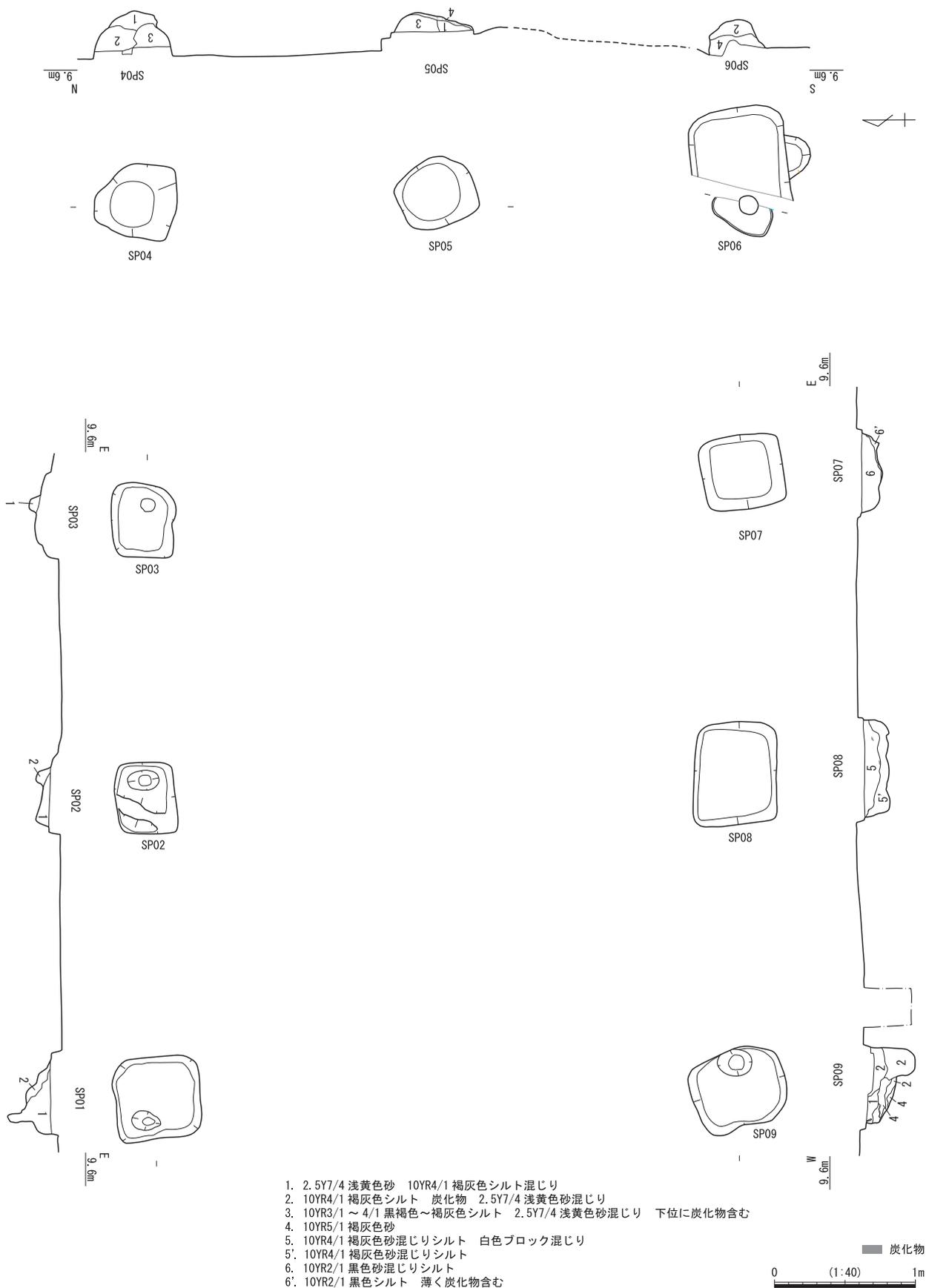


図128 7次3区SB11平・断面図

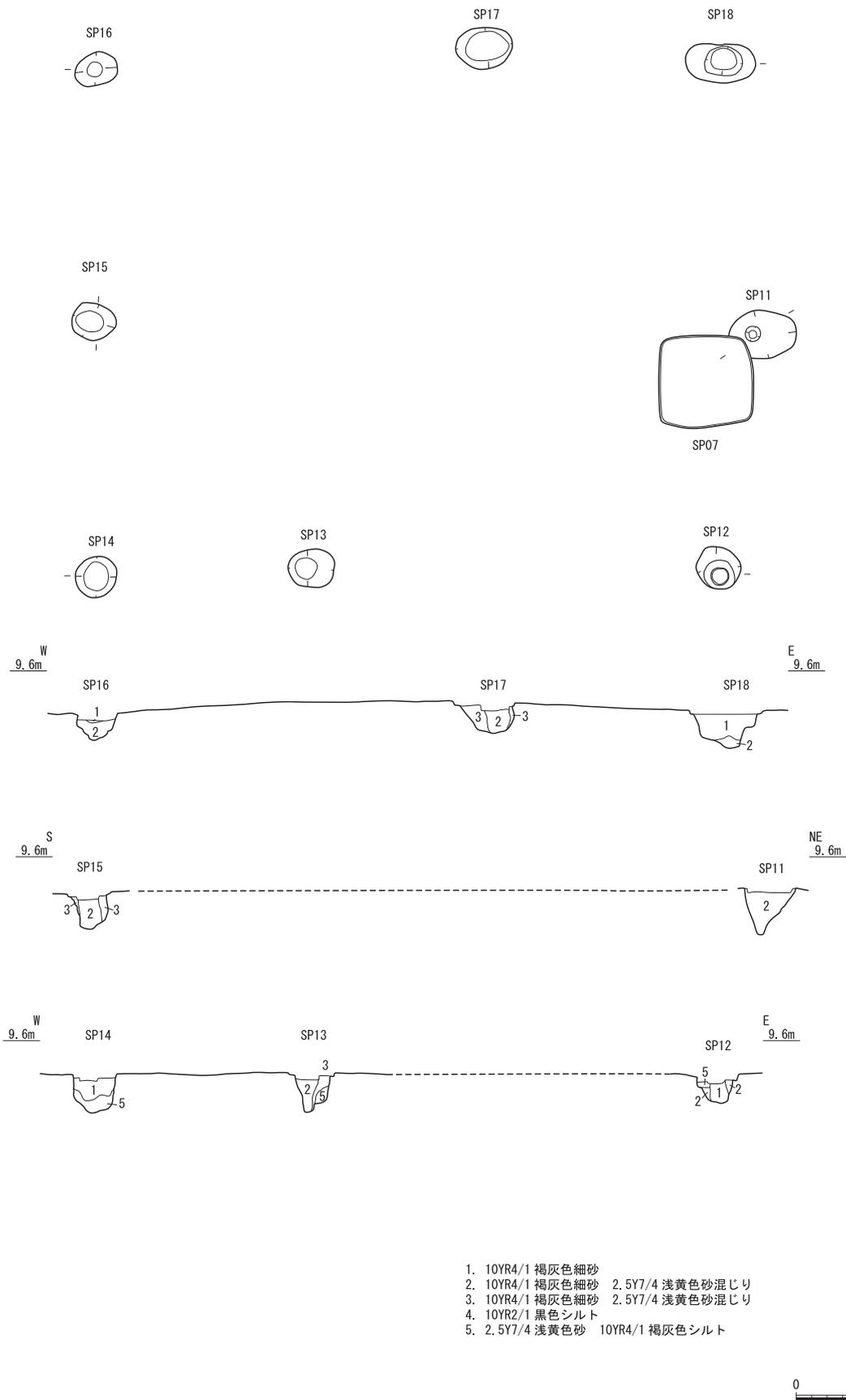


図129 7次3区SB12平・断面図

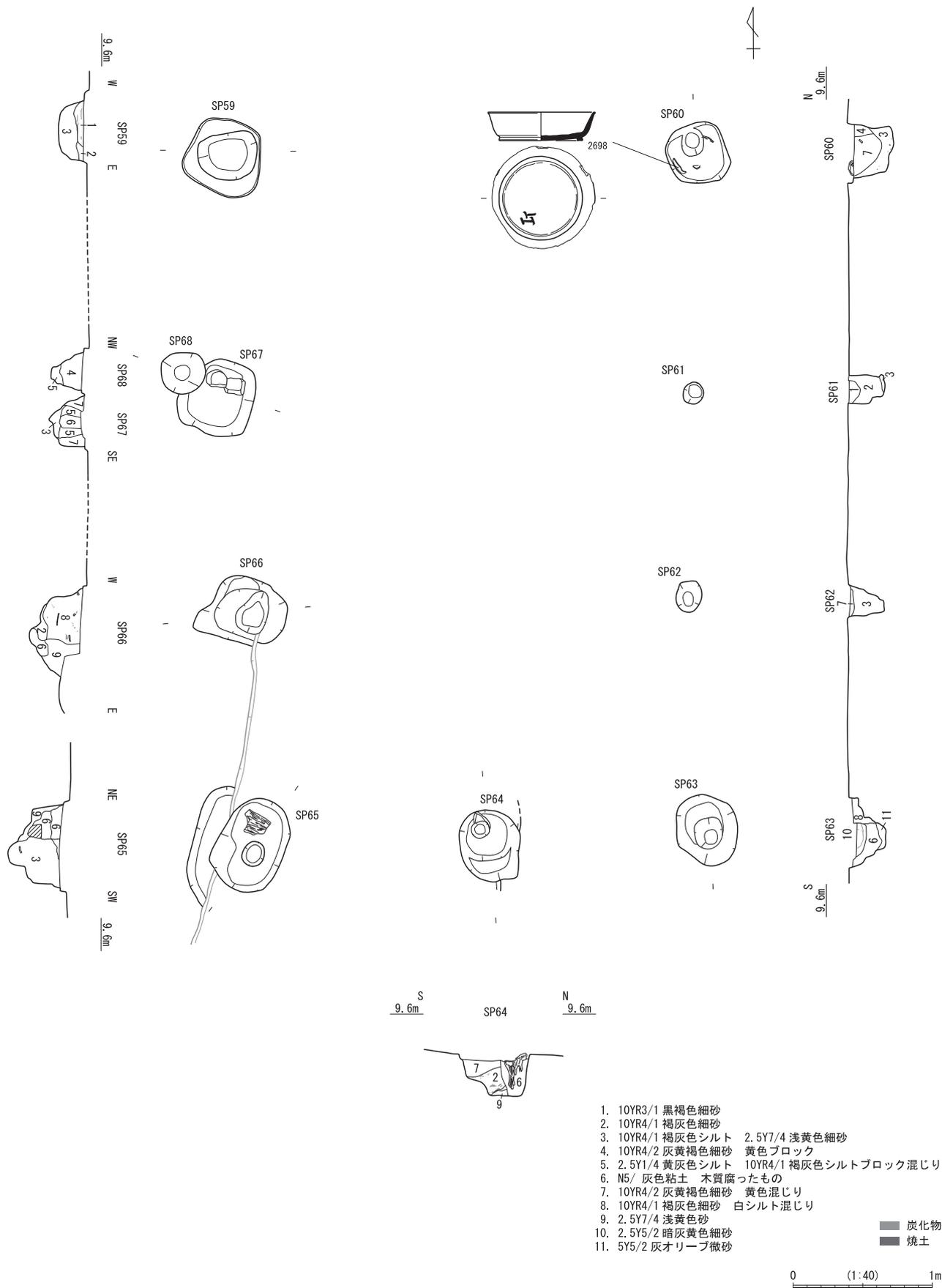


図130 7次3区SB13平・断面図

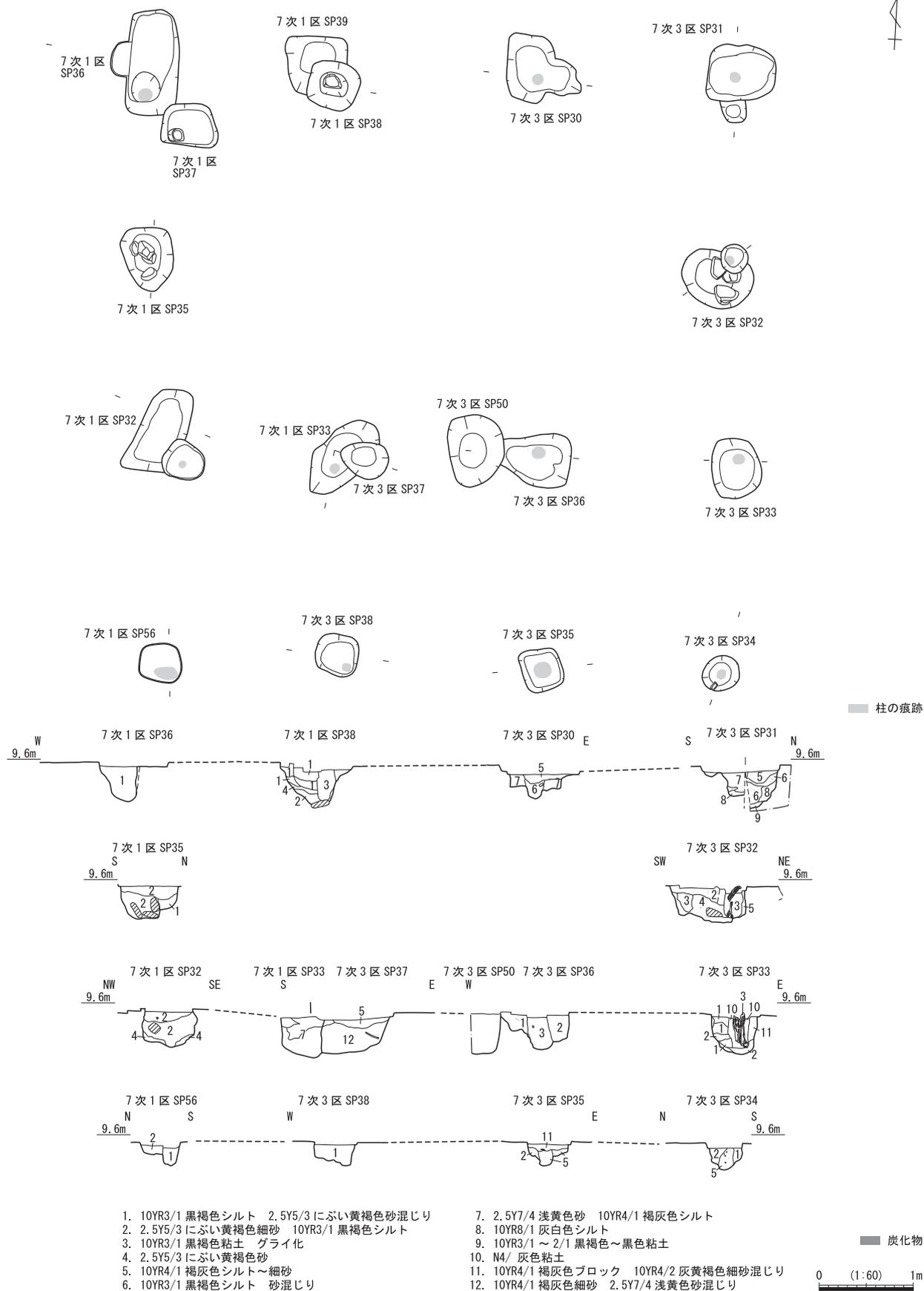


図131 7次1区・3区SB14平・断面図

SB15

(遺物図版136)
(写真図版99-12-115-2-
116-2-117-4-206)

平面的にSB14と重なる位置で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。7次1区と7次3区にまたがって調査した。柱穴の直接の切り合い関係からSB14とSB17より新しい。北側梁行の柱筋はSB12の南桁と7次1区SB16の南桁と揃っている。規模は桁行3間、梁行2間である。桁行総長5.1m、柱間寸法は7次3区SP39-7次1区SP26で東から1.8m、1.9m、1.4mで梁行総長3.4m、柱間寸法は7次1区SP26-SP30で北から1.8m、1.6mである。同柱筋を基準とした建物の主軸は真北である。柱穴掘方は基本的に隅丸長方形を志向する。一辺50～90cmと大きさにばらつきがみられる。深さは遺構検出面から21～57cmである。柱痕跡は確認できたもので直径12～20cmである。埋土には炭化物を含んでいる。建物を構成する7次1区SP32に近接した位置でSK45を検出した。SB15に伴うものかどうかは不明であるが、豆腐町遺跡で特徴的に見られる炭化物層を含む土坑である。建物と重なる土坑として7次1区SB16のSK07や6次1区SB04のSK50等がある。こうした類例を踏まえると建物と全く無関係に存在する遺構でない可能性も完全には排除しきれない。遺物は7次3区SP37から須恵器杯B蓋2700が出土した。内面には墨書が見られる。半分以上欠けているため断定はできないが、後述するSD02から特徴的に出土する記号「HT」形の可能性が高い。

SA01

(写真図版116-2)

SB14の東2.3mの位置で検出した南北方向の掘立柱柵である。3基の柱穴で構成され、対になる柱列が確認できないことから柵とした。主軸は真北である。検出した位置からSB14との関連が想定できる。延長4.4mで、柱間寸法は2.2mの等間隔である。掘方は基本的に円形を呈し、長軸42～74cm、深さは遺構検出面から15～42cmを測る。遺物は出土していない。

SE01

(写真図版117-5-6)

SB13と重なる位置で検出した。掘方は東西に長い楕円形を呈し、長軸1.05m、短軸87cmを測る。掘方の中央部で一辺55cmの井側痕跡を検出した。井側は横板組で、構成する板材は検出面から55cm下で残存していた。井戸の深さは遺構検出面から1.0mで、底面の標高は8.33mである。埋土は上面に炭化物を多量に含む層があり、他の埋土に比べても異質である。一見別の土坑のようにも見え、井戸の埋没に伴う陥没した部分を後に埋めた可能性を考えておきたい。その下層は褐灰色の細砂で埋まり、部材が残存する付近から下は均質な砂利で埋め戻されていた。遺物は掘方を含め全く出土していない。検出状況からSB13が井戸建屋になる可能性もありうる。その場合、井戸東側のSP61・SP62の掘方が小規模であることが関係するのかもしれない。しかし、SE01は他の井戸と比べて規模・構造とも特筆すべきものはない。唯一異なるのは、遺物が出土していない点だけである。SB13における位置も中央やや南東寄り、上記は想定の外を出ない。

SP28

(遺物図版136)

SA01の北90cmの位置で検出した柱穴である。攪乱のため南側は検出できていないが検出規模で36cmを測る。深さは遺構検出面から32cmである。遺物は掘方から製塩土器2701が出土した。

SP48

(遺物図版136)

SB14・SB15と平面的に重なる位置で検出した。比較的規模が大きいことから、いずれかの建物跡を構成する柱穴の可能性を考えたが、平面位置がずれていることから単独で報告する。掘方は東西方向に長い楕円形を呈し、東端がSP47に切られている。長軸68cm、短軸49cm、深さは遺構検出面から64cmを測る。遺物は掘方から須恵器甕の口縁2702が出土した。

SP108

(遺物図版136)

SD02の西肩で検出した。検出状況からSD02に切られている。掘方は南北方向に長い楕円形を呈し、長軸31cm、短軸22cmを測る。深さは遺構検出面から20cmである。埋土から須恵器皿A2703が出土した。

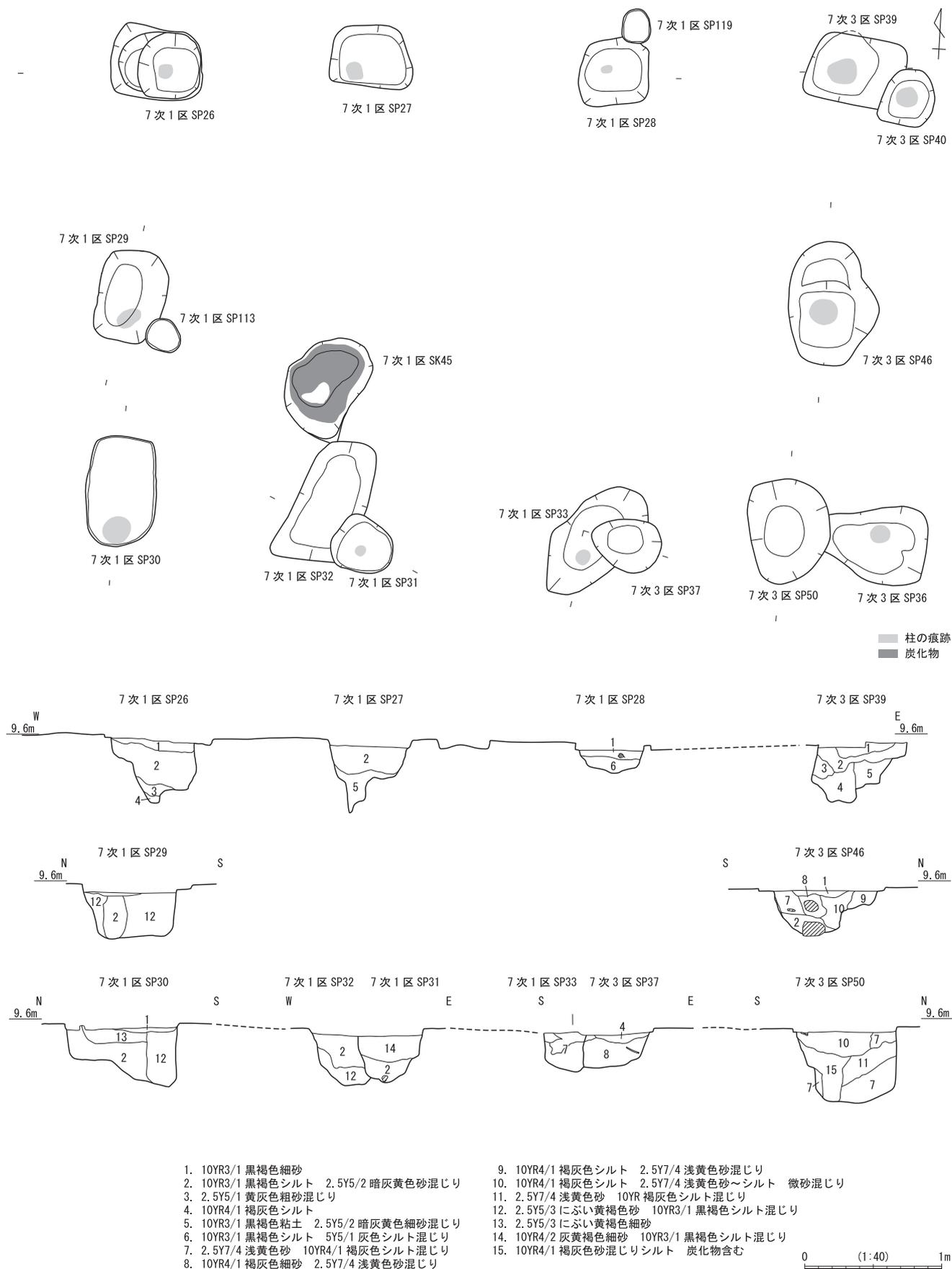
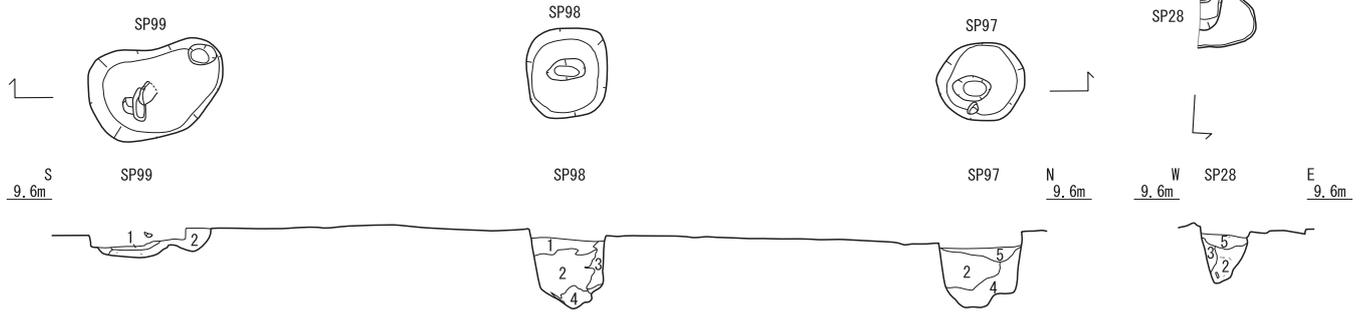


図132 7次1区・3区SB15平・断面図

第三章 調査の成果

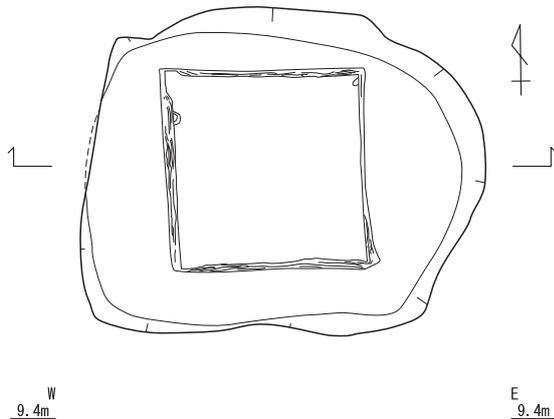
東部地区

SA01

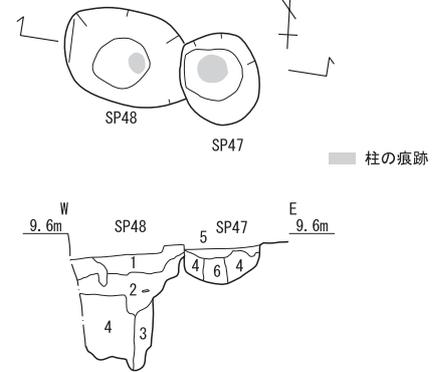


1. 10YR4/1 褐灰色シルト
2. 10YR4/1 褐灰色シルトに2.5Y7/4 浅黄色砂ブロック混じり
3. 10YR4/1 ~ 3/1 褐灰色~黒褐色シルト わずかに2.5Y7/4 浅黄色砂ブロック混じり
4. 10YR3/1 黒褐色シルト~微砂 2.5Y7/4 浅黄色砂ブロック混じり
5. 10YR4/2 灰黄褐色細砂

SE01



SP47・SP48

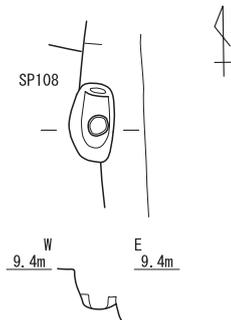


1. 2.5Y7/4 浅黄色砂 10YR4/1 褐灰色シルト 細砂混じり
2. 10YR4/1 ~ 3/1 褐灰色~黒褐色シルト微砂混じり
3. 10YR3/1 黒褐色シルト 砂
4. 2.5Y7/4 浅黄色砂シルト 10YR4/1 褐灰色シルト混じり
5. 10YR4/1 褐灰色細砂
6. 10YR4/1 褐灰色シルト

1. 焼土・炭化物
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 砂混じり
3. 10YR4/1 褐灰色細砂 地山混じり
4. 10YR4/1 褐灰色シルト
5. 10YR7/1 灰白色細砂
6. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂



SP108



SD03・SD06・SD07



1. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
2. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
3. 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト

炭化物

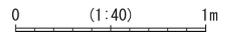


図133 7次3区SA01、SE01、SP47・SP48・SP108平・断面図、SD03・SD06・SD07断面図

SD02

(遺物図版137-149)
(写真図版121-123-
126-187-193-206-209)

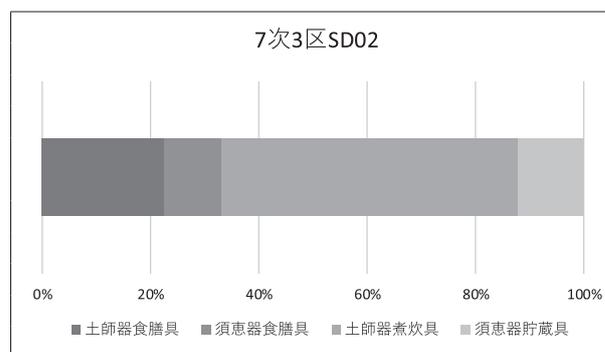
調査区を南北に貫くように検出した。6次1区SD06、豆腐町Ⅱ次SK02が延長上にあたる。「豆腐町Ⅰ次」まで延びていたと思われるが、詳細は不明である。調査区の北部では道路遺構と直交し、SD04の南側で大きく東へ屈曲する。検出規模で延長約38.5m、幅は最大で3.2mを測る。浸食等により溝の両肩は検出時点ではいくばくかの出入りが認められるが、本来は幅3m程で直線的に掘られていたと推測する。深さは遺構検出面から30cm前後を測り、底面は平坦で、立ち上がりも含めて、溝の北から南までその様相は均一である。溝底の標高は北端で9.2m、南端で9.15mで、地形の傾斜に合わせてわずかな差が認められる。溝内の埋土は大きく2層に分層しているが、上層・下層とも礫や土器を大量に含むことから明確な差は認められず、一気に埋められたものと推測する。道路遺構と交差する部分は特に礫が集中していることから、溝廃絶後も道路を使用するために念入りに埋め戻した可能性もある。ただ、図134のD断面に見るように道路側溝SD05とSD02には明確な埋土の差はなく、平面検出時にも切り合い関係が確認できないことから、ほぼ同時に道路側溝も埋められている。

溝からは大量の遺物が出土した。墨書土器2713～2750、土師器皿A2751～2760、土師器杯2761～2765、土師器皿B2766、土師器杯A2767～2769、土師器杯B2770・2771、土師器鉢2772、土師器杯B蓋2773、土師器高杯2774～2779、須恵器杯A2780～2790、2794～2796、須恵器皿2791・2792、須恵器壺底部2793、須恵器杯B蓋2797～2804、須恵器杯B2805～2810、2813～2826、須恵器稜椀2811・2812、2829～2831、須恵器稜椀蓋2827・2828、須恵器高杯2832、須恵器円形硯2833、須恵器盤2834、須恵器高杯2835～2837、須恵器壺蓋2838～2840、須恵器壺2841～2872、須恵器甕2873～2885、土師器ミニチュア2886、土師器甕2887～2894、土師器把手2897・2898、土師器鍋2895・2896、竈2899～2902、製塩土器2903～2905、土師器土錘2906、須恵器土錘2907～2910、平瓦2911、粘土塊2912、漆の付着した石材2913、磨石2914、台石2915を図示した。そのうち、主要な遺物の出土状況を示したのが、図135、図136である。比較的長頸壺が目立ち、底部に爪状圧痕の残る個体が多い印象を受ける。その他、図示したもの以外に、漆付着土器が53点出土している。

出土遺物の総数は破片を含め7281点である。器種の判明するものの内訳は表のとおりである。製塩土器を除いた内訳は、供膳具約33%、煮炊具約55%、貯蔵具約12%である。供膳具における土師器と須恵器の比率は、約68%と32%であるが、器種の特定できるもので比較すると土師器48%、須恵器52%と比率が逆転する。これは須恵器が土師器に比べて総じて残存状態が良好であることに由来し、図示にあたって須恵器が多いのもこうした実態を反映した結果である。ただ、破片まで含めると前述の比率となり、これが遺構の実態を示すものと考えられる。ここまで7遺構の比率を確認してきたが、総体として豆腐町遺跡における土師器の優性は裏付けられよう。

表8 7次3区SD02出土遺物数量表

種別	器種	数量	種別	器種	数量
土師器	杯	25	須恵器	杯	98
	皿	99		皿	7
	高杯	11		高杯	10
	蓋	1		蓋	30
	杯・皿	1478		杯・皿	601
	甕	107		甕	567
	竈	400		壺	93
	甕・竈	3411		甕・壺	220
	製塩土器	116		瓦	7
合計			7281		



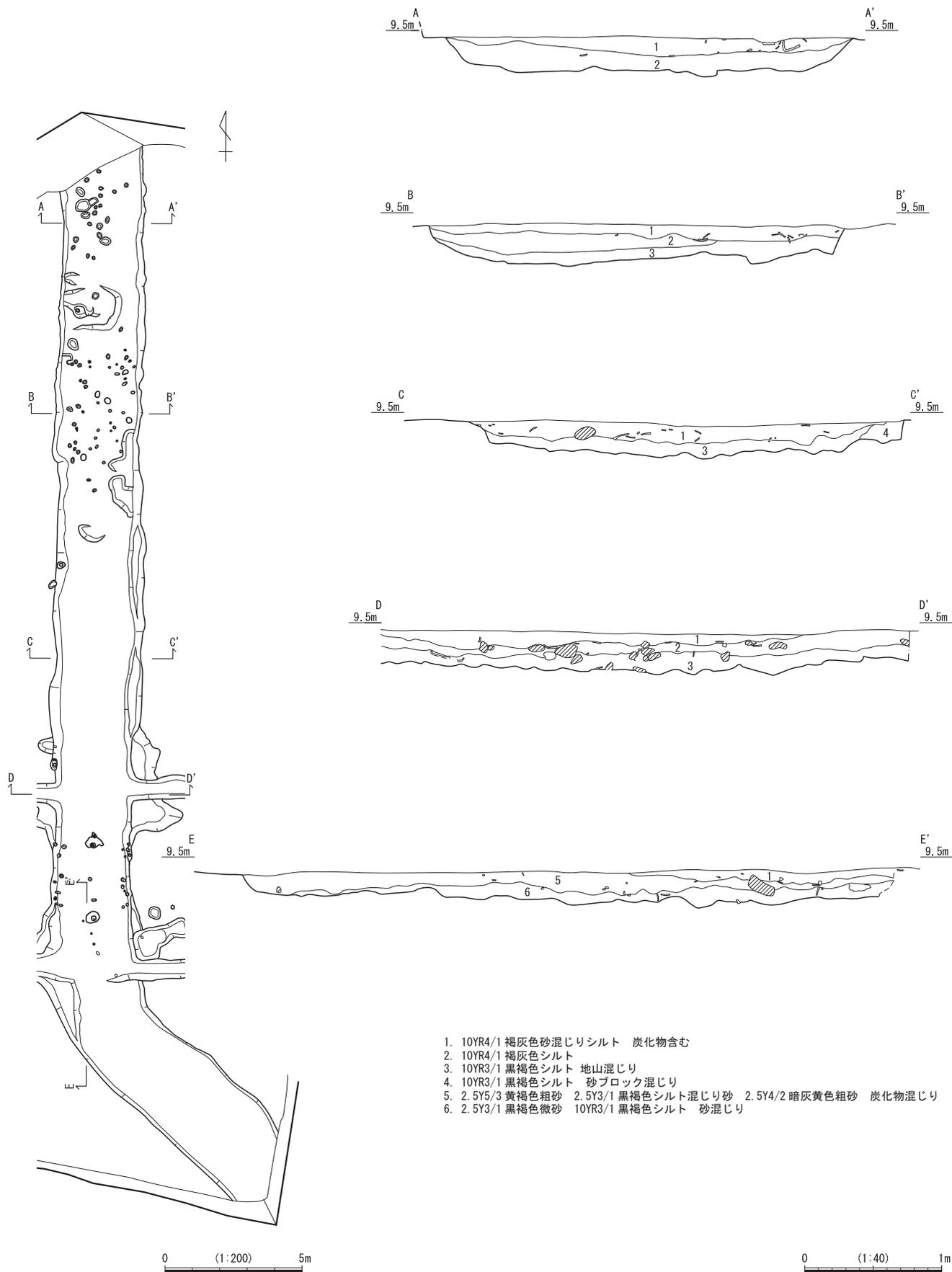


図134 7次3区SD02平・断面図

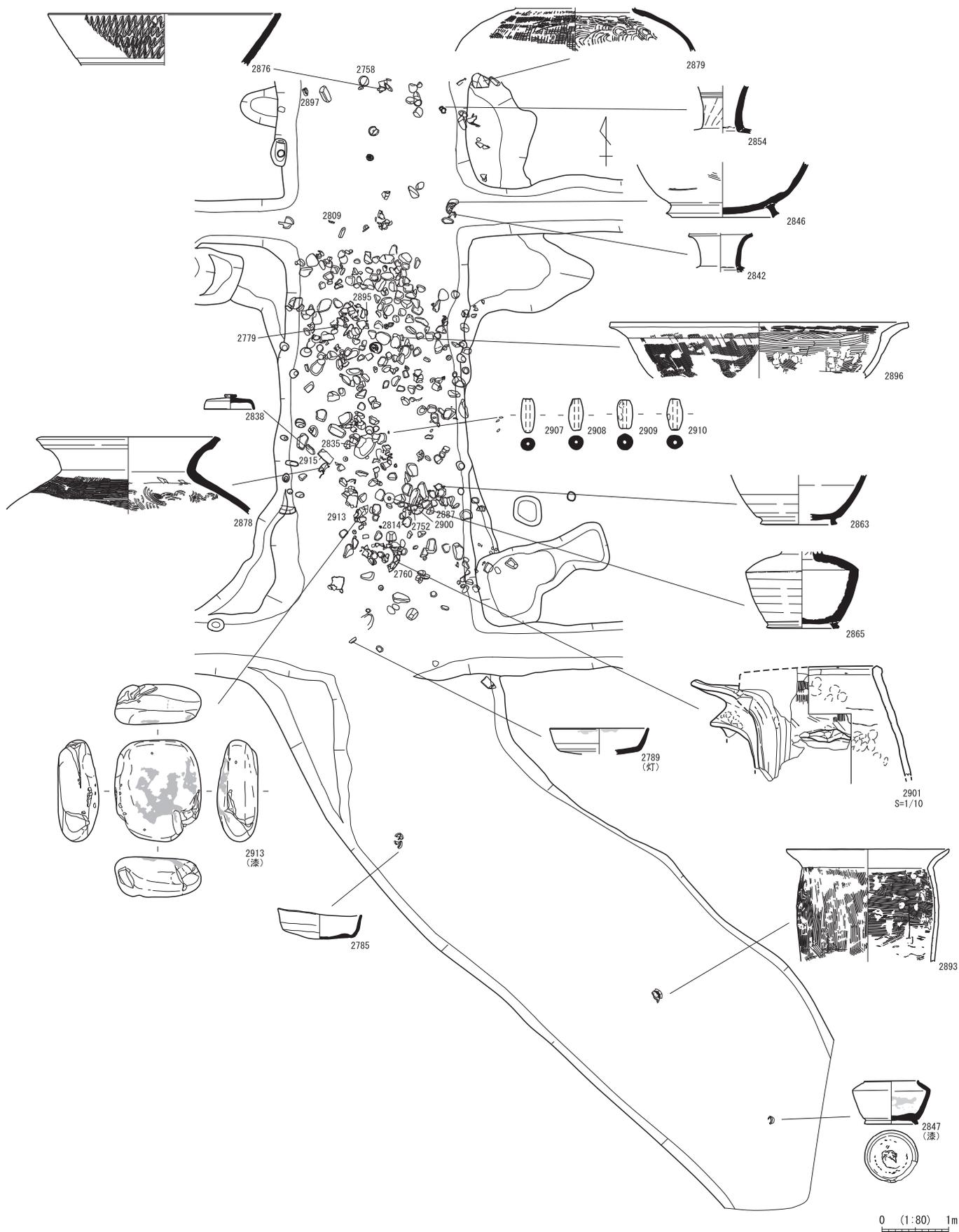
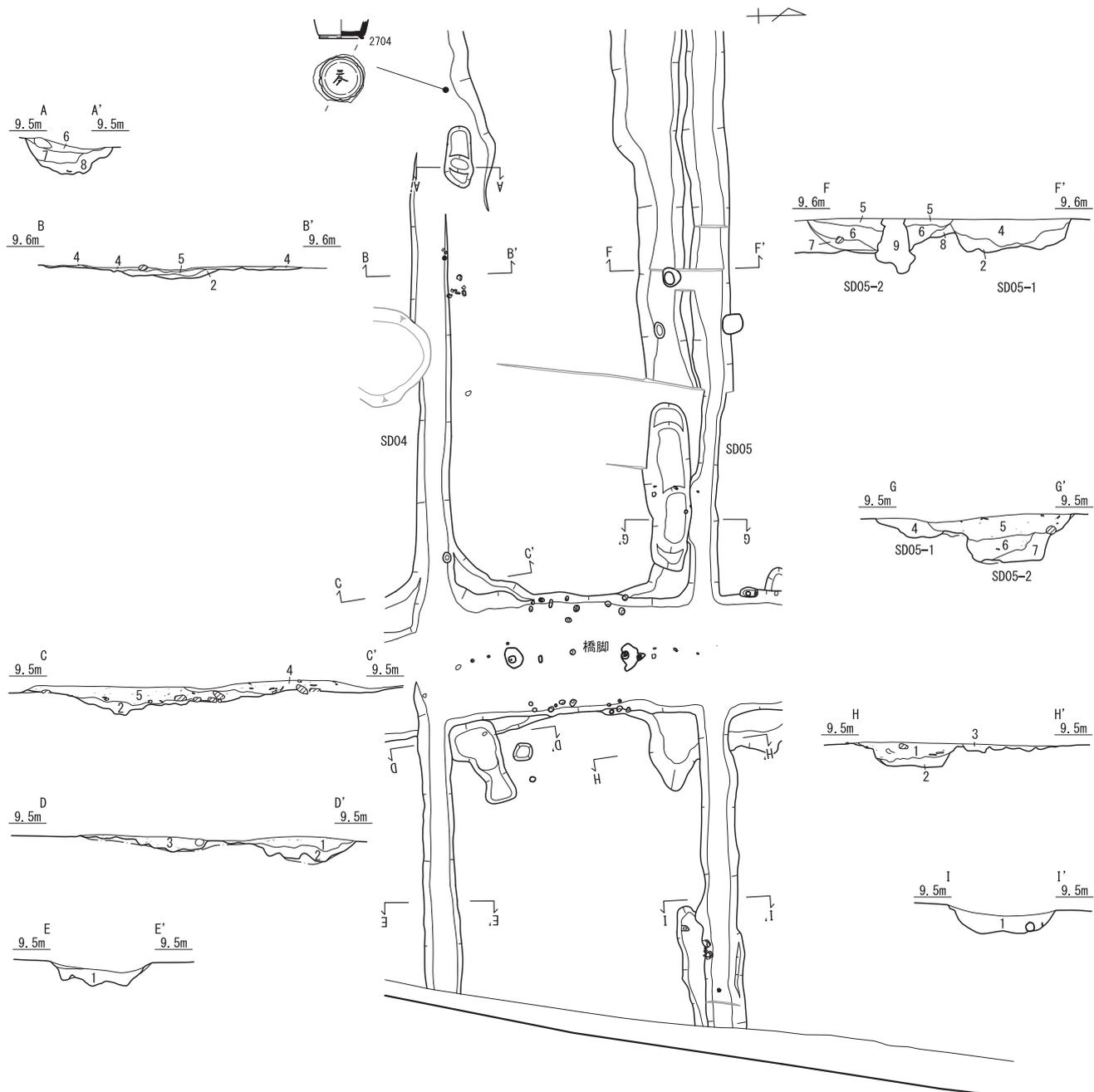


図136 7次3区SD02南半遺物出土状況図



SD04 A-E 断面

1. 10YR4/1 褐灰色シルト 白色シルト混じり
2. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
3. 10YR4/1 褐灰色砂
4. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
5. 10YR4/1 褐灰色粗砂 土器・炭化物含む
6. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
7. 10YR4/1 褐灰色シルト
8. 10YR4/1 褐灰色シルト 白色シルト混じり

SD05 F-I 断面

1. 10YR4/1 褐灰色シルト 土器・炭化物含む
2. 10YR4/1 褐灰色シルト
3. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
4. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト 白色シルト混じり
5. 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト
6. 10YR4/1 褐灰色シルト
7. 10YR4/1 褐灰色シルト 白色シルト混じり
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色～2.5Y4/1 黄灰色シルト
9. 10YR4/1 褐灰色シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルト混じり

炭化物



図137 7次3区道路遺構・橋脚平面図、側溝断面図

墨書土器も多く出土したことからその位置は図 139 に示した。本遺構に特徴的に見られるのが、記号「IT」、「HT」形、「太家」の墨書である。こうした墨書土器の共通性からもこれらの遺物が一気に投棄されたものであることがわかる。この墨書は道路の北側からのみ出土し、「豆腐町Ⅰ次」や「豆腐町Ⅱ次」では出土していない。このことは、SD02 の出土遺物が空間的なまとまりのある範囲から持ち込まれ、投棄されたものとみて大過ないと考える。SB15-SP37 から出土した墨書土器 2700 が「HT」形の可能性があることを踏まえれば、SD02 に出土遺物は上流から流れてきたものではなく、周辺にあった遺物が廃棄されたものと推測できる。つまり、遺物の組成は当地での活動実態を示している。

橋脚

(写真図版122-216)

道路遺構と SD02 が交差する位置で検出した。SD02 の底面中央に一对の南北に並ぶ大型の杭があることから打込式で構築されている（山中 1997）。SD02 の両岸及びその周辺にも杭痕が認められ、溝肩を護岸したものと考えられる。杭 2955 と杭 2956 の間隔は約 2.7 m である。2955 は長さ 1.23 m、直径は最大で 20cm、2956 は長さ 1.27 m、直径 17cm を測る。2955 はクリ材、2956 はマツ材である。杭 2956 の北で検出した杭 3（写真図版 216）はアスナロ材である（附章参照）。大型の杭 2 本を砂礫層まで打ち込み、その上に梁を架けて鳥居状に南北をつなぎ、そこに SD02 の両岸から橋板を架けた構造が想定される。両岸の杭は溝の肩を護岸する施設の一部の可能性が高い。また橋の規模や位置関係から、道路跡と SD02 は同時期に並存し、SD02 が道路の南で東へ屈曲することからもこれらの遺構が計画的に配置されたものといえる。

SD04

(遺物図版136)
(写真図版119-120-121-6-206)

6 次 1 区から続く道路遺構の南側側溝である。溝は SD02 と交差した後、西へ 10 m 程は明確に直線的に延びる肩を検出できるが、調査区西端付近では砂層が広がり、掘方が不鮮明となる。7 次 1 区で検出した SD04 との接続は明確でない。ただ、8 次 3 区で延長部を検出していることから本来は溝として連続していたと推測できる。検出規模で SD02 を含め延長約 20 m、幅は 75 ~ 90cm で概ね一定である。深さは遺構検出面から最大で 22cm、溝底の標高は東端 9.27 m、西端は 9.34 m である。溝内からの遺物量は多くはないが、調査区西端で底部に「三合」の線刻を施す須恵器柈 2704 が出土した。同じく「三合」を線刻する柈は本町遺跡からも出土している（姫路市史 2010）。

SD05

(遺物図版136)
(写真図版119-120-121-2-5-206)

道路遺構の北側側溝である。SD02 を境に西側では明確に 2 条となる。7 次 1 区と同様、北側を SD05-1 とし、南側を SD05-2 とした。検出規模は、SD05-1 が延長 10.5 m、幅は概ね 1 m、深さは遺構検出面から 14cm である。溝底の標高は東端で 9.2 m、西端で 9.26 m である。SD05-2 は延長 10.7 m、幅は最大で 1.1 m、深さは遺構検出面から 41cm である。SD02 に近い部分は土坑状に一段深く掘り込まれる。遺物量は 6 次 1 区や 7 次 1 区に比べると相対的に少ない。墨書土器 2705 ~ 2708、須恵器高杯 2709、須恵器杯 B 2710、須恵器甕胴部 2711、砥石 2712 が出土した。2708 は須恵器甕内面に墨書もしくは墨痕が認められる。2712 は砥石であるが、中央部に穿孔がある。転用品の可能性もあるが、穿孔部に紐等を通した携帯用の砥石かもしれない。

遺構に伴わない遺物

(遺物図版150-151)
(写真図版137-143-193-210)

包含層から多くの遺物が出土した。墨書土器 2916 ~ 2931、黒色土器杯 2932、須恵器杯 A 2933 ~ 2936、須恵器皿 A 2937、須恵器杯 B 2938・2939、須恵器杯 B 蓋 2940、須恵器椀 2941、須恵器高杯 2942、須恵器壺 2943 ~ 2946、土師器土錘 2947、紡錘車 2948、砥石 2949、軒丸瓦 2950、丸瓦 2951 ~ 2953、平瓦 2954 等が出土した。2922 は底部外面に「HT」形を墨書する。墨書土器の出土位置は図 139 に示している。基本的に SD02 に近接する位置から出土していることから、本来の帰属は SD02 と考えられる。2941 は外面にミガキを施している。2950 は古大内式系軒丸瓦で、西部調査区で出土しているものと共通する。

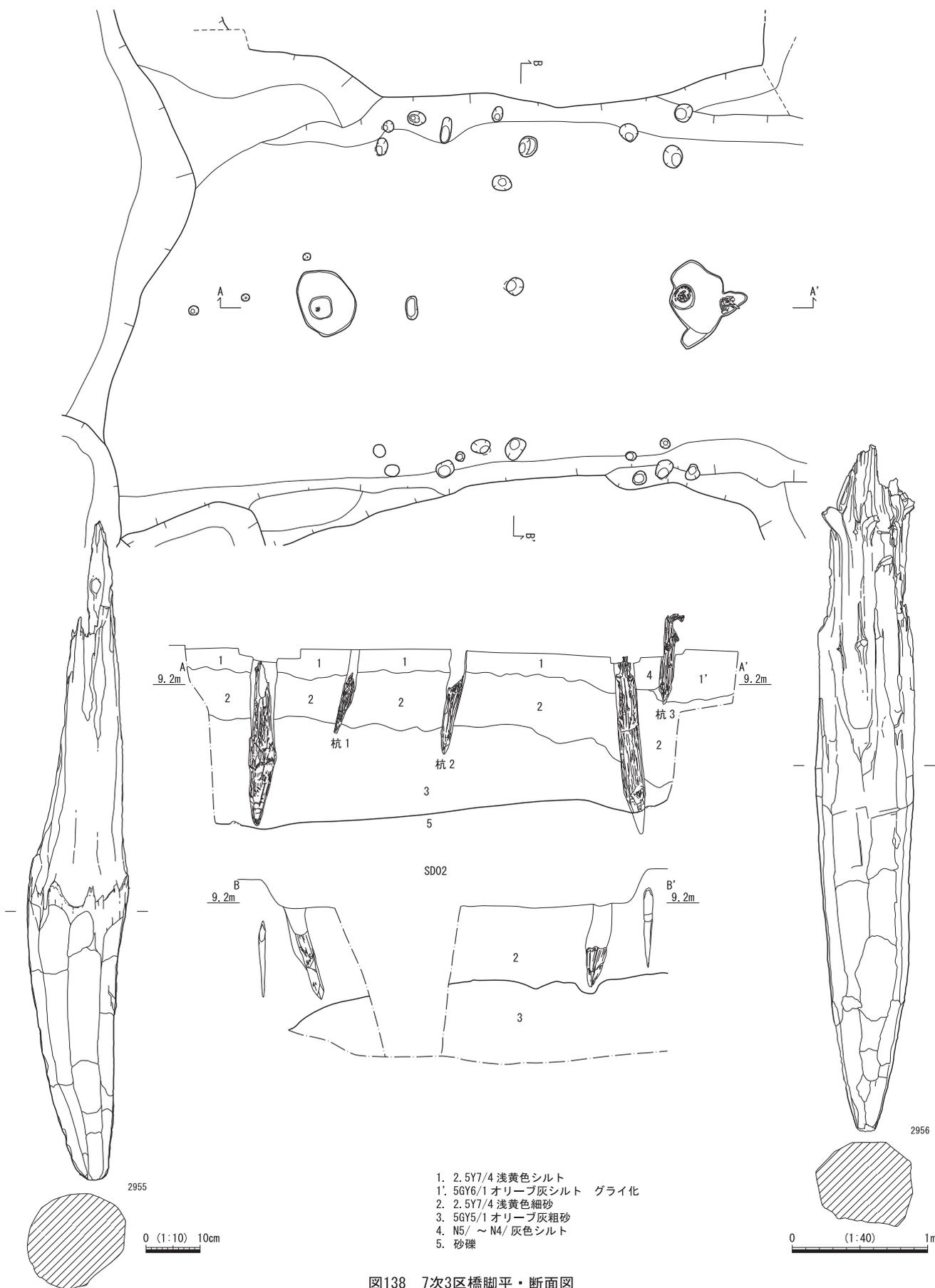


図138 7次3区橋脚平・断面図



図139 7次1区・3区墨書土器出土分布図

8次2区

(写真図版127-129)

7次1区の北に位置する調査区である。姫路駅の旧ホーム下にあたる。7次1区調査時に通路があったことから8次調査として実施した。調査区の基本層序は7次と同様で、姫路駅のホーム盛土、耕土(1～3層)、黄灰色細砂の中世耕土層(4層)、褐灰色の遺物包含層(5層)、黒褐色土(6層)を経て、白色シルトの地山に至る。奈良時代の遺構は本来6層を掘り込むが検出できないため、地山まで掘り下げて検出を行っている。旧ホームの標高は12m、中世耕土層は9.9m、地山の標高は9.6mである。調査は姫路駅連絡通路の付け替えに伴い2分割して実施したが、遺構名は連続して採番した。検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑、溝である。7次1区SK11の続きの検出が予想されたが、本調査区では対応する明確な掘方は確認できなかった。このことから7次1区と本調査区との境でSK11が収束することが確認できた。

SB20

(遺物図版127-3-128-4-6)

調査区の北端で検出した掘立柱建物跡である。調査区外に広がるため全容は不明である。7次1区で報告したSB19が西接して存在する。SB19の北面とSB20の南面は概ね揃っているが、軒の出を考慮すると両者は同時並存していないと思われる。新旧関係は直接の切り合いがないため判然としない。検出規模で東西3間、南北1間である。東西5.0m、南北1.8mを測る。柱間寸法はSP20-SP29で西から1.3m、2.0m、1.7mである。SP18-SP20を基準とした建物の主軸はN5°Wである。柱穴掘方は円形もしくは不整形である。規模は30～65cmと大きさにばらつきがみられる。深さは遺構検出面から15～28cmである。埋土は基本的に黒褐色細砂と地山ブロックが混ざったもので、炭化物を含んでいる。図示に耐える遺物の出土はない。

SK01

(遺物図版152)(写真図版195)

SB20の西3.5mの位置で検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出規模で南北2.0m、東西1.2mを測る。深さは遺構検出面から14cmである。埋土は黒褐色シルトのほぼ単層である。遺物は須恵器壺K 2957が出土した。本調査区からは炭化物層を含む土坑は検出していない。

SK02

(遺物図版152)(写真図版128-2-194-195)

SK01の西3.5mの位置で検出した。本遺構の西側は攪乱を受けており、かろうじて残存していた遺構である。平面は南北方向に長い長方形を呈し、調査区外にも広がる。検出規模で南北2.6m、東西1.9mを測る。土坑内は中央に地山の高まりが残り、その周囲を掘り込むが、特に北側と南側の掘り込みが顕著である。北側は5cm程と浅いが、南側は遺構検出面から30cm程掘り込まれている。遺物は比較的まとまって出土し、特に土坑底面からの出土が目立つ。土師器杯2958・2959、土師器皿A 2960、土師器杯A 2961・2962、土師器鉢2963、土師器高杯2964、須恵器杯A 2965、・2966、須恵器杯B 2967、須恵器皿A 2968、須恵器壺2969・2970、土師器甕2971、須恵器鉢2972等が出土した。

SD01

(写真図版127-1-2)

SK02から直線的に南に延びる溝である。断面からSK02に切られていることがわかる。S南側は7次3区SK11まで延び、切られているが、SK11以南には延びていない。南北を切られるため、性格は不明であるが、検出規模で延長3.3m、幅30cm前後で、深さは最大で12cmである。図示に耐える遺物は出土していないが、検出状況からSK02、SK11に先行する時期に位置づけられる。

SD02

(遺物図版152)(写真図版129)

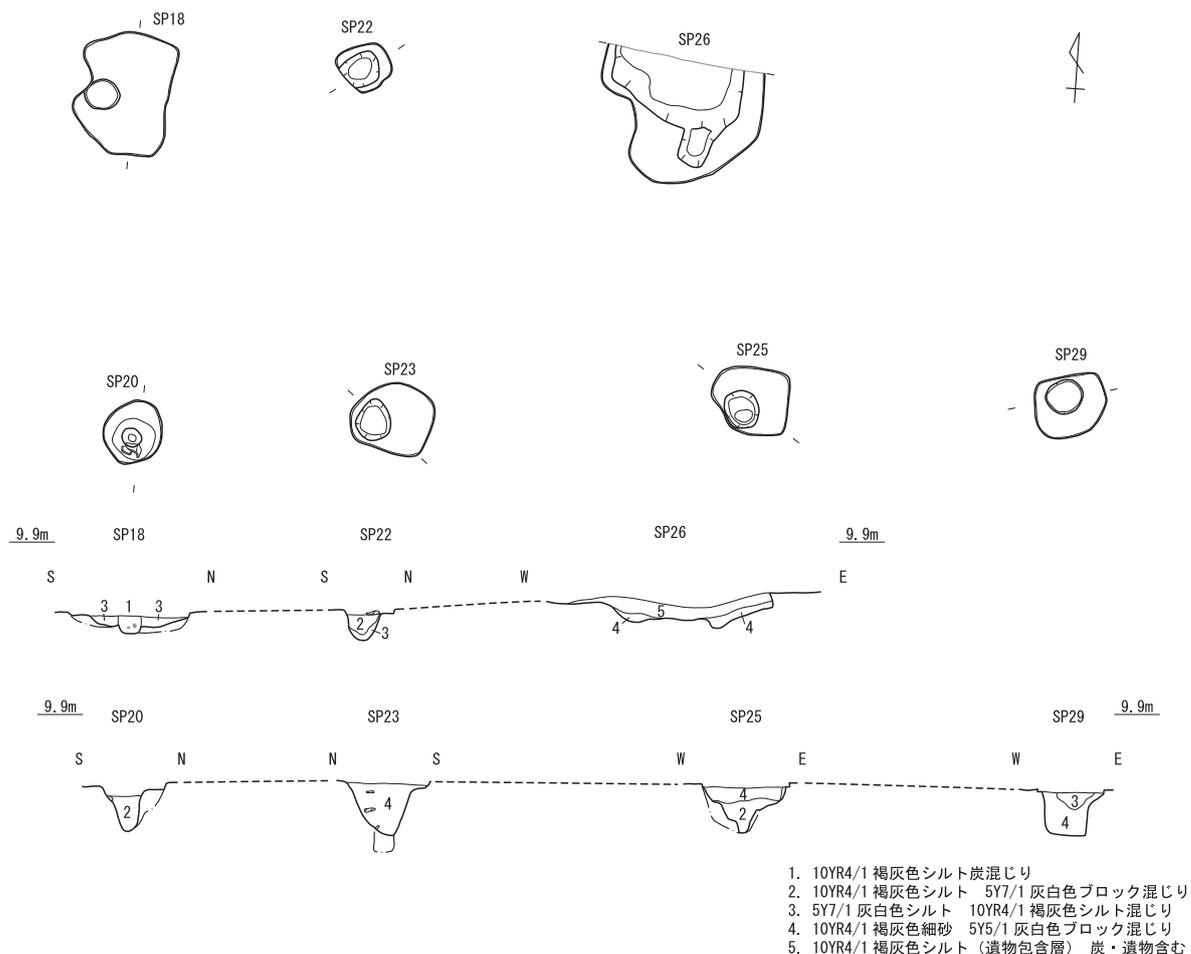
7次3区SD02の北側の延びである。調査区で延長2.5m分検出した。幅は2.9m、深さは20cmである。遺物は調査区北壁沿いでまとまって出土した。土師器杯2973、土師器杯A 2974、須恵器杯B 2975、須恵器壺2976・2977を図示した。



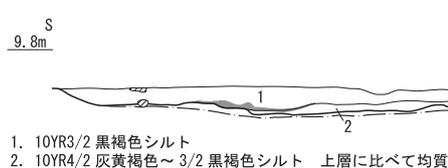
図140 8次2区平面図・北壁土層断面図

SB20

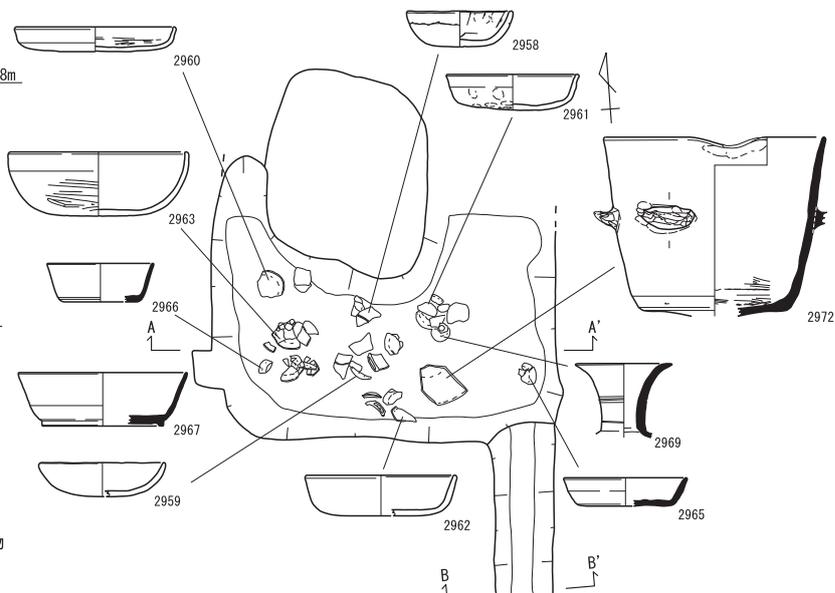
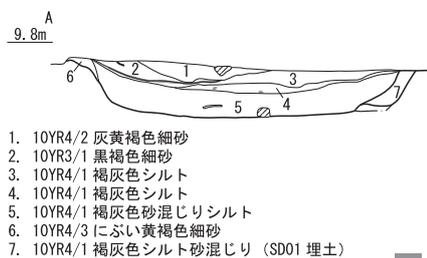
東部地区



SK01 (図140に対応)



SK02



SD01



図141 8次2区SB20、SK02平・断面図、SK01、SD01断面図

8次3区

(写真図版130-132)

本調査区は7次1区の南側、7次3区の西側にあたる。基本層序は7次1区と同様で、鉄道敷設に伴う盛土、耕土（1層）（7次1区で確認した2・3層は欠落）、灰オリーブ色細砂の中世耕土層（3層）、黄灰色の遺物包含層（4層）、黒褐色土（6層）を経て、黄褐色細砂の地山に至る。調査時の地表面の標高は11.4m、中世耕土層は10.0m、地山の標高は9.8mである。検出した遺構は道路側溝、土坑、柱穴、落ち込み等である。7次3区西端で道路の南側溝であるSD04の南肩が不鮮明となっていたが、本調査区では南肩の掘り込みを明確に検出することができた。また、道路南側の遺構の様相については、6次1区では掘立柱建物跡等の遺構が密集して確認していたが、7次3区の区画溝SD02以東では、明確な遺構が確認できていなかった。また「豆腐町I次」でも遺構の広がりや確認されていないが、本調査区において遺構の広がりやを確認できたことから7次3区SD02の西側の道路以南にも奈良時代の遺構が広がっていたことが明らかとなった。

SP01 SD04の南で検出した。掘方は円形を呈し、直径は35cmを測る。深さは遺構検出面から32cmである。掘方から須恵器杯B蓋2978が出土した。
(遺物図版153)

SP02 SP01の1.1m東で検出した。南北に長い形状を呈し、南北96cm、東西52cmを測る。深さは遺構検出面から45cmを測る。埋土は褐灰色砂で、大量の製塩土器を含んでいた。破片が主体であるが、豆腐町遺跡でこのように製塩土器がまとまって出土した遺構は他に見られない。製塩土器には、内面に布目を残す個体は含まれておらず、全て指オサエとナデによるもので2982～2988を図示した。その他、土師器杯A2979、土師器甕2980・2981が出土した。
(遺物図版153)

SP11 SP02の東3.3mの位置で検出した。南北に長い円形を呈し、長軸63cm、短軸44cmを測る。深さは遺構検出面から42cmである。柱穴底面に敷いた状態で平瓦2989が出土した。柱の沈み込みを防ぐ根石の代わりに用いられた可能性がある。
(遺物図版153)
(写真図版132-6)

SK01 SD04の南40cmで検出した。平面形は円形を呈し、直径約65cm、深さは遺構検出面から38cmである。埋土は褐灰色砂で上層に炭化物を含む。下層から土師器甕の胴部2990が出土した。
(遺物図版153)

SD04 道路の南側側溝の延長部分である。同側溝のうち、7次3区及び7次1区の調査区では遺物量は比較的少なかったが、本調査区ではまとまって出土した。延長14m分を検出した。7次1区で検出した範囲を含めると、幅は最大で1.9mである。SD04は6次1区や7次3区では直線的な溝状の掘り込みであったが、当該調査区においては道路の北側溝SD05と同様に土坑状の掘り込みが検出されている。これらの遺構もSD05と同様に道路の作り替えに伴う可能性もあるが、土層断面で確認する限り、作り替えではなく、溝内の掘り込みといった様相である。遺物は図143に示したように、溝底面で検出した土坑状の掘り込みから形を保った状態で、まとまって出土した。土師器杯2991、土師器高杯2992、須恵器杯B蓋2993、須恵器杯A2994・2995、須恵器壺2996・2997、須恵器甕2998、土師器長胴甕2999～3001等を図示した。
(遺物図版154)
(写真図版131-132-1-4-195-210)

SX01 SD04の南側で、落ち込み状に砂が堆積している状況を確認した。明確な掘方はもたず、その範囲は7次3区も含めて南北3m、東西6m程の範囲に広がる。本調査区ではSX01を完掘後にSD04の肩を確認した。砂層からは須恵器稜椀3002、須恵器壺3003～3005、須恵器土錘3006、砥石3007・3008等が出土した。図示した以外にも漆付着の付着した皿・杯が17点出土している。
(遺物図版154)
(写真図版131-1-195)

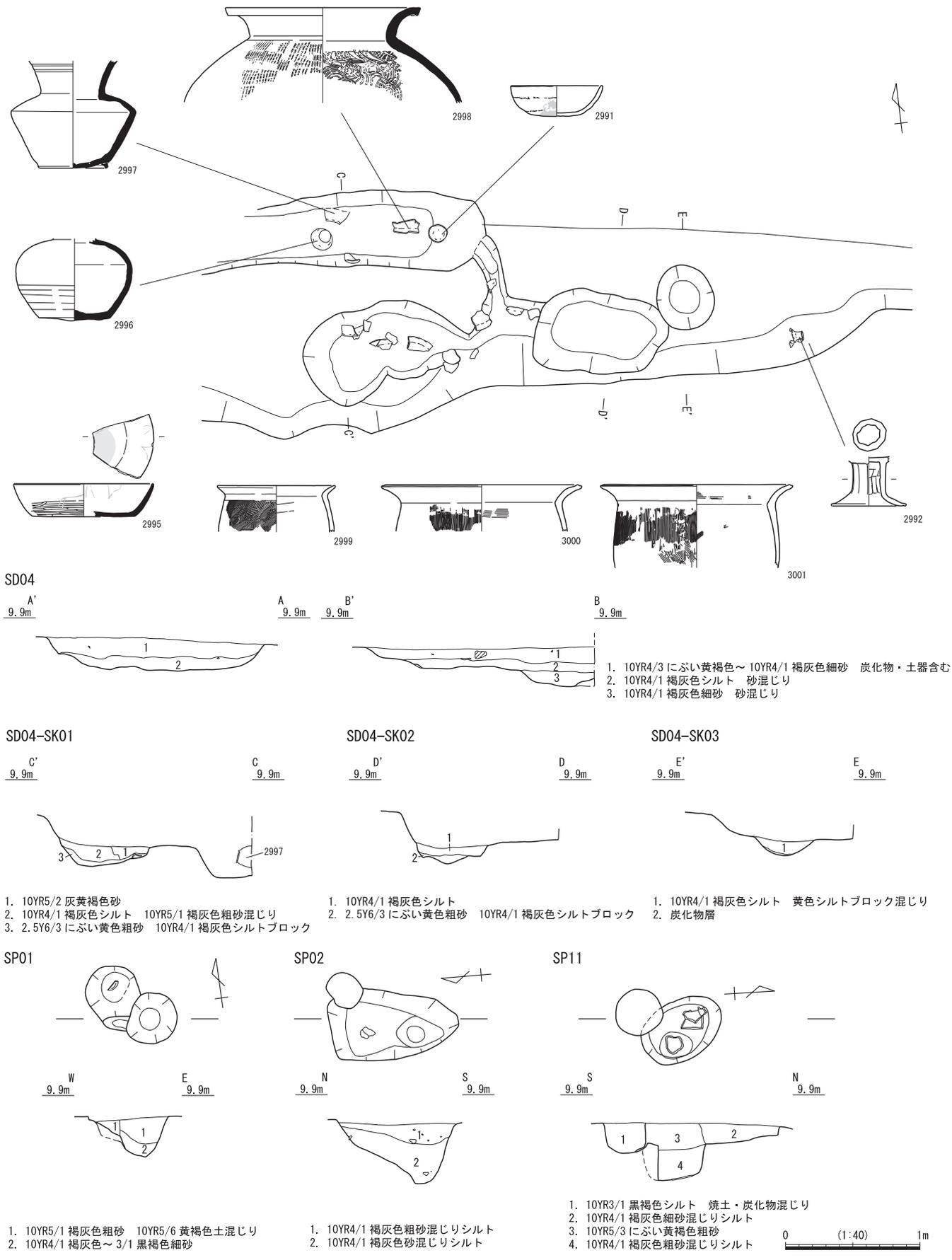


図143 8次3区SD04遺物出土状況図、SD04, SD04内SK01・SK02・SK03断面図、SP01・SP02・SP11平・断面図

第IV章 検出遺構のまとめ

前章では調査区ごとに検出遺構について報告した。本来一連の遺構であるものを、調査区により分断して記述したのものもあるため、ここでは、道路跡、建物跡、井戸について再度整理する。

第1節 道路遺構と区画溝

東部地区

6次1区、7次1区・3区、8次3区にかけて道路遺構を検出した。道路は両側に素掘りの側溝を設ける構造で、2条の側溝が確認できる箇所もあり、作り替えが認められる。北側の側溝（SD05）の断面観察に基づけば作り替えにより道路幅は縮小している。作り替え以前を古段階、後を新段階とする。

検出した道路延長は84 mで、その主軸は東西正方位をとる。道路の有効幅員は側溝内法で古段階が約6 m、作り替え後の新段階で3～4.5 mとなる。古段階の道路側溝は両肩が比較的直線的で基本的に溝状を呈している。対して新段階の底面は一定ではなく、形状は溝状と土坑状のものがある。溝幅は場所によって出入りがあるため一律ではないが、古段階の溝が比較的帯状に掘られるのに対し、新段階は土坑状に丸みを持って掘り込まれている。古段階の道路幅は一定かつ直線的で、計画的に整備されたものと思われる。新段階は側溝の幅に出入りがあることから、道路幅は一定とはならず、周辺での活動に応じた結果と考えられる。道路跡は微高地から低地にかけて、地形の変化に沿って築造され、傾斜地におけるオープンカット工法等は確認できない。6次1区SR01上部には整地層が確認できることから、道路遺構単体ではなく、SR01の上面全体が改良されている。ただ、図109のB・C断面に見るように道路上には炭化物層は認められない。墨書土器の出土状況から整地に使用された土砂が同一箇所を供給源とする可能性が高く、この点からも炭化物層を敷く建物側と敷かない道路部分とで工法に差があることを指摘できる。道路上部にあたる整地層中には礫等が意図的に含まれておらず、断面観察からも道路構造に類するものは確認できない。古代道路の側溝については、排水の機能を持つものは少なく、幅員を規制する意味合いが強いことが指摘されている(坂爪1995)。豆腐町遺跡の場合、南側側溝は建物の雨落ち溝を兼ねている。また、SR01の上部にあたる部分は溝幅が広くなり、北側のSD03には杭等も認められる。これらは道路排水等への対応と考えられ、排水機能を有していたとみられる。検出した道路跡は、近江俊秀氏の分類に従えば幅員が5 mを越え、幅員規制を有すI群道路に位置づけられる。こうしたI群道路は駅路推定路線上で検出されることの多いもので、それ以外の道路でも公的な性格を想定できるものが多く、作道にあたって官が関わった可能性が指摘されている(近江1997)。

道路を横断する形で区画溝7次3区SD02が延びる。区画溝は道路まで直線的に延び、直角に交差した後、道路南側で南東方向に屈曲する。道路との交点には打込式の橋脚があることから、これらの遺構が同時期に並存した遺構であることがわかる。区画溝は幅約3 mを測り、底面は平坦で、深さは遺構検出面から20cm前後と削平された部分を勘案しても比較的浅い。豆腐町Ⅱ次Ⅱ-1区で検出したSK02がその延長部分にあたる。豆腐町Ⅰ次A区では検出されていないが、本来のルートは微高地の西端をかすめるような形で延びていたと推測する。区画溝は先行する明確な遺構が検出されていない状況から、道路と同時期に計画的に築造されたと思われる。道路側溝と区画溝の埋没時期は、埋土の断面観察から明確な切り合いはなく、ほぼ同時期とみられる。道路側溝の作り替えがどの段階で行われたかは不明であるが、作り替えを行う程度の期間維持された後、廃絶されたと考えられる。道路の廃絶時期は、後述する建物や井戸と同時期であることから、これら一連の区画=街区は一度に消滅したことがわかる。豆腐町遺跡東部地区は極めて限定された期間だけ営まれた施設であるといえる。

第IV章 検出遺構のまとめ

西部地区

区画遺構の可能性をもつ遺構として、6次3区・4区で検出した2-SD01と2-SD02がある。両者は平行し、内法寸法で2.0～2.2mを測る。両者を合わせた延長は約25mで、主軸はいずれもN21°Eに直交し、飾磨郡条里に沿っている。4次調査区では延長が確認できないことから、ここまでは延びていない可能性が高い。ただ、飾磨街道沿いは微低地にあたり、4次調査区側は微高地にあたることから東部地区と同様に考えれば、削平されている可能性は高い。溝間に目立った遺構が確認できないことからこれらの溝が何らかの区画遺構、もしくは道路跡の可能性がある。道路とすれば、前述の近江氏の分類では、幅員5m以下1.5m以上で、幅員規制を伴うⅢ群道路にあたる。Ⅲ群道路もまた、公的な性格が示唆されている。三彩小壺が出土した4次SE01と6次4区2-SX01はいずれもこの溝の北に位置する。溝の南側には2間×3間の掘立柱建物跡、4次SE02、4次SK52があり、三彩小壺の存在を除けば、この溝を境にして南北の遺構の様相に大きな変化は認められない。区画施設であった場合、その内外で様相は変わらないこととなるため、道路跡である余地も十分残されている。

第2節 建物跡

豆腐町遺跡における建物跡は姫路市調査分と兵庫県調査分を合わせて35棟確認している。その内訳は近世1棟、中世6棟、古代28棟である。地区別では西部地区11棟、東部地区24棟である。一覧は以下のとおりである。

表9 豆腐町遺跡掘立柱建物跡一覧

	調査区	建物	間数	梁行(m)	桁行(m)	柱掘方	掘方寸法(cm)	主軸	建物形状	備考
東部	5次4区	SB01	(2)×2	(3.4)	3.6	方形	44～50	正方位	不明	一部に根石
	6次1区	SB01	1×4	3.8	8.2	円形	30～60	N1°E	東西棟	
	6次1区	SB02	2×2	3.3	3.6	円形	30～60	N1°E	総柱	
	6次1区	SB03	2×6	4.3	10.5	円形・方形	40～70	正方位	南北棟	Ⅱ次Ⅱ-1区SB01一連の場合
	6次1区	SB04	2×6	4.3	11.5	円形	35～65	N2°E	東西棟	根固め
	6次1区	SB05	2×4	4.3	7.5	円形・方形	40～60	N1°E	東西棟	礎板、根固め
	6次1区	SB06	2×2	2.9	3.3	円形・方形	44～80	N7°W	総柱	
	6次1区	SB07	2×3	4.2	5.4	円形・方形	45～70	N1°E	南北棟	
	6次1区	SB08	2×2	3.5	3.9	円形・方形	35～90	N1°E	南北棟	礎板、柱根残存φ25～26cm
	6次1区	SB09	2×3	3.2	4.2	円形	30	N2°W	東西棟	
	6次1区・7次2区	SB10	2×3	3.6	3.8	方形	30～84	N2°W	東西棟	南面庇
	7次3区	SB11	2×3	4.4	6.5	方形	43～75	N0.5E	東西棟	
	7次3区	SB12	2×3	3.3	4.1	円形	22～45	N2.5°W	東西棟	
	7次3区	SB13	2×3	3.3	5	円形	15～69	N0.5W	南北棟	
	7次1区・3区	SB14	2×3	4.1	6.3	円形・方形	40～110	N3°W	東西棟	南面庇
	7次1区・3区	SB15	2×3	3.4	5.1	方形	50～90	正方位	東西棟	SB14・SB16を切る
	7次1区	SB16	2×3	3.8	5.5	円形・方形	25～80	正方位	東西棟	根固め
	7次1区	SB17	2×3	3.6	4.3	円形	40～56	正方位	東西棟	
	7次1区	SB18	2×3	3.8	5.2	円形	26～60	N1°E	南北棟	
	7次1区・8次2区	SB19	2×3	3.3	5	円形・方形	22～72	N2°W	南北棟	
8次2区	SB20	(1)×3	1.8	5	円形・方形	30～65	N5°W	不明		
Ⅰ次A区	SB02	2×2	3.2	4.5	円形	30	N14°E	南北棟		
Ⅱ次Ⅱ-1区	SB02	(1)×2	1.8	4.5	円形・方形	24～72	N1°W	不明		
Ⅰ次A区	SB01	2×4	1.9	3.7	円形	30	N22°E	東西棟	近世	

	調査区	建物	間数	梁行(m)	桁行(m)	柱掘方	掘方寸法(cm)	主軸	建物形状	備考
西部	5次2区	2-SA01	2×(0)	4.2	-	方形	46～52	N21°E	不明	
	6次4区	2-SB01	(2)×2	2.0	3.6	方形	40～48	N22°E	不明	
	Ⅰ次F区SB202	SB202	(2)×2	4.2	3.6	方形	30～50	N21°E	不明	SB201と並ぶ
	Ⅰ次F区SB201	SB201	(1)×2	4.2	5.2	方形	30～60	N20°E	不明	建て替え
	3次3区	3-SB01	(2)×(3)	5.0	6.7	円形	24～48	N5°E	不明	中世
	6次4区	SB01	(2)×3	4.8	5.4	円形	38～45	N21°E	不明	中世・根石
	Ⅰ次D区	SB01	(1)×(2)	2.5	6.0	円形	25～40	N20°E	南北棟	中世
	Ⅰ次F区SB101	SB101	(3)×(4)	7.0	9.0	円形	25～40	N14°E	総柱	中世
	Ⅰ次F区SB102	SB102	(2)×(3)	4.4	6.0	円形	25～40	N18°E	総柱	中世
	Ⅰ次F区SB103	SB103	(2)×2	4.4	4.5	円形	25～40	N8°E	総柱	中世



图144 豆腐町遺跡東部地区主要遺構配置图

第IV章 検出遺構のまとめ

近世の1棟は、「豆腐町I次」で見つかったもので、簡易な農作業小屋のようなものと解釈されている。その主軸は概ね飾磨郡条里に沿っている。東部地区では中世の建物跡は検出されていない。各調査区の基本層序で述べたように当該時期には耕作地としての利用が主であったと推測する。西部地区では中世の建物跡が目立つ。調査区の制約から全容が判明するものはないが、飾磨郡条里に概ね沿うN 18°～22° Eの建物跡とN 5°～8° Eに傾くものとが混在している。建設時期による差の可能性もあるが時期を比定できる遺物が少なく、特定することができない。姫路市内で中世集落跡を広範囲で調査した豆田遺跡においても、条里地割に沿った形で建物が建てられるが、中には主軸がずれるものも存在している。検出場所の微地形には違いが認められないことから条里地割に沿うものと、沿わないものの混在は必ずしも時期差や特別な事情を想定する必要はなく、中世集落の一般的な在り方なのかもしれない（姫路市教委2020）。また、市之郷遺跡や三宅遺跡、宮ノ浦遺跡といった、古代寺院や官衙に関連する遺跡においては、古代の遺構が正方位に近い主軸であった場合、中世段階においてもその一帯だけ条里地割ではなく、古代の主軸に沿って建物跡が検出される例が確認されている（姫路市教委2013・2018・2021）。

古代の建物跡は、西部地区で4棟確認されている。いずれも隅丸方形の掘方を有し、飾磨郡条里に沿った主軸である。前述した区画溝2-SD01・2-SD02の主軸とも合致しており、古代における西部地区の遺構の主軸は飾磨郡の条里方向に沿っていることが確認できる。

東部地区では23棟検出しているが、3棟を除き概ね正方位か真北に対してわずかに振れる範囲におさまっている。基本的に正方位を指向する建物群といえる。道路遺構の主軸が正方位であることから、これらの建物跡は道路と関連したものと理解できる。西へ偏向する6次1区SB06と8次2区SB20については、出土遺物から周辺の建物跡と明確な時期差は認めがたい。軒の出等を考慮すれば、同時並存でない可能性もあるが、正方位の建物跡と偏向する建物跡の新旧関係は不明である。

6次1区で検出した道路南側に位置する建物は、いずれも道路側溝から50cm程南側で柱を据えている。この状況から道路側溝がこれらの建物の雨落ち溝を兼ねる状況である。これらの建物跡はSB06を除き、棟通りは揃っている。これらの建物を区画する施設としてSA01がある。SA01の東側には東西棟のSB01、南北棟のSB03、総柱建物のSB02が存在する。西側には東西棟のSB04・SB05、総柱建物のSB06、南北棟のSB07がある。こうした検出状況から、数棟の建物に総柱建物跡がセットとなり、これに後述する井戸が伴うセット関係が復元できる。このことは、SR01上部という建物を建てるのに適さない立地であるにもかかわらず、SB04とSB05等を配置していることから推測できる。

道路北側で検出した建物群は、南側とは様相を異にし、道路側溝からやや離れた位置に建物が存在する。8次2区SB20を除き、これらの建物群も正方位を指向している。このうち、SB09・SB11・SB14・SB18は建物の南面が揃い、SB12とSB17の南面とSB13の北面が揃い、SB16とSB17の西面がそれぞれ揃うことから、これらの建物がそれぞれ同時並存すると想定できる。また、SB11とSB12、SB14とSB15、SB15とSB17には切り合いが存在する。SB11がSB12を切っていることから、SB12は先行する遺構であるとわかる。また、SB15がSB14とSB17を切ることからSB15が最も新しい建物となる。先に見た建物配置が同時並存を保証すると仮定すれば、以下のように3時期の変遷が考えられる。

1段階：SB12・SB13・SB16・SB17、2段階：SB09・SB11・SB14・SB18、3段階：SB15

SB10とSB14はいずれも庇が付くことから、これらは同じ機能を持つ建物跡の可能性はある。仮に庇がない建物跡を作業小屋と位置づけるならば、庇付き建物跡はそれよりも格が高い施設と想定でき、作業管理を行う機能等がその候補として考えられる。区画溝SD02を挟んで庇付建物が1棟ずつ存在することから、複数の建物に対して1棟の庇付建物を含む構成と考えられ、道路南側の建物群と同様に複数の建物がセットになると想定できる。このように建物跡は極めて計画的に建てられたと考えられるが、建物を構成する柱間隔や柱通りなどはバラつきがあり、規格性は低いことが指摘できる。床面積は6次1区SB04の約50㎡を最大に、30㎡前後と20㎡以下のものが大半を占めている。

第3節 井戸跡

井戸跡は42基確認している。西部地区で20基、東部で22基である。内訳は近世16基で古代26基である。近世の井戸は全て西部地区で検出したもので、飾磨街道沿いの町屋及びその裏手の耕作に伴うものと見られる。河原石を使用した石組み井戸が大半を占める。古代の井戸については、西部地区で4基、東部地区で22基検出されている。東部地区では、検出した建物跡が23棟であるのに対して、井戸の数が極めて多い。これは、本来存在した建物跡が削平され、井戸のみが残ったものと推測できる。ここでは豆腐町遺跡における活動範囲の復元を目的として、古代の井戸の様相を表に整理した。兵庫県の調査分については、既刊の報告書から数値を抽出した。

表10 豆腐町遺跡井戸跡一覧

	調査区	井戸	掘方形状	掘方(m)	構造	井側径	底面標高	残存深	備考
東部	5次4区	SE01	隅丸方形か	1.6	井籠組	65	8.4	1.7	萬年通宝(天平宝字4年上限)、N2° W
	5次4区	SE02	隅丸方形	1	曲物組	φ35	8.6	1.55	
	5次5区	SE01	円形	1.3	不明	-	8.66	1.25	漆紙文書(天平勝宝九歳上限)
	6次1区	SE01	隅丸方形	1.4×1.9	縦板組横棧型	65	8.2	1.83	正方位
	6次1区	SE02	隅丸方形	1.5×1.16	不明	-	8.75	70	
	6次1区	SE03	隅丸方形	1.4×1.6	曲物組	φ35	8.63	86	作り替えか
	6次1区	SE04	隅丸方形	1.3	横板組か	-	8.91	85	
	7次2区	SE01	隅丸方形	1.7	横板組	65	9	90	N2° E
	7次3区	SE01	隅丸方形	1.05×87	横板組	55	8.33	1	
	I次A区	SE01	隅丸方形	2.26×2.3	横板組隅柱横棧型	1.35	7	1.85	
	I次A区	SE02	円形	1.35×1.4	縦板組隅柱横棧型	75	6.55	2.4	N1° E、三彩小壺
	II次II-1区	SE01	隅丸方形	1.17×1.26	縦板組隅柱横棧型	65	8.65	60	正方位
	II次II-1区	SE02	隅丸方形	1.05×0.9	曲物組か	φ70	8.9	40	N1° W
	II次II-1区	SE03	隅丸方形	0.7	曲物組か	φ35~50	9	35	
III次	SE01	楕円形	1.86×1.58	縦板組	-	8.85	81		
III次	SE03	不整円形	1.5×1.52	横板+縦板組隅柱横棧型	1.1	8.92	1.53		
III次	SE05	楕円形	1.4×0.94	不明	-	8.82	1.22		
III次	SE07	不整円形	1.05×1.2	縦板組横棧型	60	9.05	80		
III次	SE08	隅丸方形	1.42×1.67	縦板組隅柱横棧型	80	8.78	86	N1° W	
III次	SE09	略円形	1.59×1.6	横板組隅柱横棧型	50	9.15	1.43	集水施設曲物	
III次	SE13	略円形	0.73×0.65	曲物組	45	9.19	72		
III次	SE14	略円形	1.1×1.13	横板組	70	9.43	68	N9° W	
西部	調査区	井戸	掘方形状	掘方(m)	構造	井側径	底面標高	残存深	備考
	4次	SE01	隅丸方形	1.8×1.7	縦板組隅柱横棧型	70	8.75	97	N11° E、三彩小壺
	4次	SE02	隅丸方形	3.1×2.3	縦板組隅柱横棧型	-	8	1.4	
	I次D区	SK08	円形	3.7×3.3	曲物組か	φ0.6	7.9	2.1	
	I次E区	SK05	円形	2.4	不明	φ1.1	7.9	1.75	神功開宝(天平神護元年上限)

残存状況の関係から、全ての井戸の構造が把握できていないわけではないが、構造別にみると井籠型1基、縦板組8基、横板組6基、縦板組と横板組の組み合わせ1基、曲物組6基、不明4基である。井側のサイズ別に見ると、東部地区のI次A区SE01が一辺1.35mで最も大きい。III次SE03で一辺1.1m、III次SE08が80cmでこれに次ぎ、以下45~75cmまでに集中する。掘方の規模と井側の規模は必ずしも対応していない。井側のサイズが大きいものは全て東部地区の微高地上で検出したものである。これらの井戸は報告書によっては、時期差があるように記述されているが、出土遺物からは大きな時期差は認めがたい。ただ、東部地区の微高地にあたる範囲で検出した井戸底の標高は、6.55m~9.43mと差がある。また、前述したように建物は正方位を指向している。井戸についても井側から主軸を確認できるものを計測するとIII次SE03がN9° Wであることを除けば、他は正方位を指向していることがわかる。井戸の上屋構造が判明するものはなく、本来の上屋がどの方向を向いていたかは判然としないが、少なくとも方形の井戸枠については、正方位を意識して設置されたといえる。このことから道路、区画溝、建物跡、井戸跡が正方位を指向して構築されたことが判明する。

第IV章 検出遺構のまとめ

次に井戸の配置について確認していく。「豆腐町Ⅲ次」において既に触れられているが、再度整理しておきたい。6次1区、7次3区で検出した井戸の位置から、東部地区で検出した井戸について以下のような傾向を読み取ることができる。道路の南側については、道路側溝に面して建物が展開し、その背後にあたる位置に井戸（6次1区SE01・SE02・SE03）を確認できる。いずれも道路側溝との距離は10m前後である。対して道路の北側では建物の裏手ではなく、前面もしくは建物際で井戸（7次3区SE01・6次1区SE04）を検出している。いずれも道路側溝との距離は7m前後である。道路南側で検出した前述の3基の井戸を直線で結んだ10mライン上に、豆腐町Ⅲ次SE03・SE07・SE08・SE09が位置する。また、北側については、道路側溝から7mライン上に7次2区SE01・Ⅲ次SE01・SE13が存在し、井戸の配置に共通性を認めることができる。同様に考えれば、Ⅱ次SE01・SE02、5次5区SE01・Ⅲ次SE05・SE08が道路側溝から16m前後のラインにのり、5次4区SE01・SE02が30m前後のラインで検出されている。こうした位置関係は偶然ではありえない。また、井戸底の標高がまちまちであることから、水脈に関連した解釈も成り立たないと思われる。そうであるならば、これらの井戸は、その場での必要性に応じて随意の場所に設けられたものではなく、最初から場所を限定して掘られた可能性が高い。同様の井戸配置は西部地区の飾磨街道沿いで検出した江戸時代の井戸配置にも認めることができる。ここでは、姫路城下町における道路－ミセー井戸－オクの配置パターンに従って井戸が掘られた結果、道路からはほぼ同じ距離で井戸が検出されている。こうしたことから、奈良時代の東部地区においても、建物跡を検出していないものの、井戸の位置から建物や井戸の配置に共通するパターンが設けられていた可能性を考えておきたい。このように井戸の配置は極めて計画的であるのに対して、そこに設けられた井戸の構造は多種多様で規格性は認められない。中には6次1区SE01のように縦板が面を為さず凸凹が目立つもの、Ⅲ次SE03のように横板と縦板を組み合わすものなど、間に合わせのような構造の井戸も存在している。こうした点から井戸の多様性は、多くの井戸を配置計画に基づき、一気に作らなければならなかったことが一つの要因ではなかったかと想定する。このように建物と井戸はセット関係で構築されたもので、建物跡が検出できていない範囲においても、本来は建物の配置に共通性があり、同じような空間が広がっていたと想像する。

6次1区SA01から7次3区SD02までの間に塀や柵がないことから、仮にその距離約40mを一つの単位（区画）とすると、Ⅲ次東端までに5区画を配列することができる。その内部には1～3基の井戸が配される。北側は管理棟と想定した庇付建物跡の存在から6次1区SB10から7次3区SD02までの約50mを一つの区画と想定すると、7次3区SD02の西に1区画、東側に5区画を配置することができる。Ⅲ次中央付近のみ井戸を伴わない区画が出来てしまうが、他は1基ずつの井戸が配されることとなる。一区画内に建てられる建物数は不明であるが、仮に一区画5棟としても55棟以上の建物が配置されていたこととなる。奥行きを勘案すれば、実数は更に多かったと考えられる。

井戸の配置から道路を基軸として建物が本来広がっていた空間を想定した。調査区外の5次4区以東及び7次1区以西では確認調査により古代の遺構の広がり確認できない。北側は駅前町遺跡として調査を行っているが、古代の遺構は確認できない。南側への広がり不明であるものの、豆腐町遺跡東部地区の中心範囲は、調査範囲と重なることは明らかである。その広がりⅠ次A区SE01が道路から約60m、Ⅲ次SE14が約40m離れており、これに道路幅6mを加えると南北方向は100m以上、東西方向は、道路の広がり想定できる調査区西端から東端までの約250mとなる。東西方向に延びる道路に沿って、南側には軒を連ねた建物が並び、北側は道路との間にスペースを設け、その奥に建物が並ぶ景観を復元することができる。このように井戸の配置から道路に沿っていくつかの区画が想定でき、本来は東部地区の全域にこうした施設が広がる街区が形成されていたと考えられる。

なお、井戸からは漆紙文書、萬年通宝、神功開宝が出土しており、廃棄の上限を押さえることができるのも特筆すべき点であり、こうした資料に基づき、次に遺跡の時期を考えていきたい。

第V章 出土遺物のまとめ

出土遺物については、本文中では詳細に触れず図版編の一覧表にまとめた。ここでは、奈良時代の土器を対象を限定して豆腐町遺跡出土遺物の概要を報告する。奈良時代の土器は、都城の土器の影響を受けていることから、本報告書でも基本的に平城宮での分類に従った。器種にアルファベットを含むものは特に断らない限り平城宮の分類で、器種説明にあたって『平城宮報告XVI』から引用したのものもある。その上で豆腐町遺跡において認められる特徴について記述する。また、アルファベットを用いないものは、平城宮の分類にないか、類するとしても地域色が強いいため敢えて当てはめていないものもある。

第1節 出土土器の分類

土師器

豆腐町遺跡から出土する器種は、皿、杯、椀、鉢、高杯、蓋、盤、鍋、甕、甑、竈と多種にわたる。「豆腐町Ⅱ次」において出土した土師器20点の胎土分析が行われている。その結果に基づけば、食膳具は姫路市周辺の土を使用し、鋳物・岩石組成から3種類の異なる粘土が使用されている。甕も姫路市周辺の粘土を使用している。甕は食膳具と共通する姫路市周辺の粘土を使用するものもあるが、黒雲母を多く含む六甲山地周辺か岡山県からの搬入品が含まれる可能性が指摘されている。こうした点から土師器の産地は基本的に在地で、甕については、一部他地域由来のものが含まれるようである。

杯A 「広く平らな底部と斜め上にひらく口縁部からなる」。口縁端部は、内側に巻き込んで肥厚するもの、巻き込みが形骸化したもの、丸くおさめるものがある。底部は葉脈痕が残るもの、指オサエ痕が残るもの、ケズリを施すもの等が存在する。内面はナデで仕上げるものが多く、ヘラミガキを施すものもある。外面はナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリが認められる。内面には螺旋状暗文と1段の放射状暗文を施すものもある。

杯B 「杯Aに高台を付したもの」。口径は12cm前後のものしかなく、杯Aに比べて小型である。内面調整は基本的にナデで、1116には放射状の暗文が施されている。外面調整はナデとヘラミガキによる。

杯 杯Aと杯B以外のものは全て杯とした。基本的に丸みを帯びる器形で、粗製のものが多いが、平らな底部をもつものも含む。口縁端部が内傾するいわゆる杯Cに分類可能なものや椀あるいは小皿に分類できそうなものも含んでいる。粗製の丸底のものは杯Aに比べ胎土も粗く、粘土紐接合痕が残るものが多い。内外面とも基本的にナデ調整を施すが、板状工具によるナデも目立つ。また、煤が付着するものや明らかな灯明痕を持つものが多い。

杯B蓋 宝珠摘みを持ち、天井部から口縁部にかけて丸く伸び、端部はわずかに屈曲する。内面には暗文を施すものと施さないものがある。外面は分割したヘラミガキを施す。口縁部はわずかに凹線状に凹み、端部は丸くおさめる。

椀B 平らな底部と斜め上にひらく体部に高台を貼りつける。杯Bに比べて底部は小さく、口縁部は外方への開きが大きい。土師器杯Bは須恵器杯Bに類似するが、椀Bは須恵器に類似する器形がない。口縁部は外反するものと直線的に延びるものがある。口縁端部は杯Aと同様、内側へ巻き込むものと沈線状の凹みをもつものがある。平安時代以降、播磨において主流の一つとなる器形である。東部地区では明確には出土しておらず、西部地区での出土が目立つ。

- 皿A 「広く平らな底部と斜め上にひらく短い口縁部からなる」。杯Aとの差が微妙な個体もあるが、口径と器高の比率（器高／口径）が概ね0.2以下のものを皿とした。口縁端部のバリエーションは杯Aと同じである。
- 皿B 「皿Aに高台を付したもの」。口縁部は大きく外反し、台付皿の口縁部に類似する。内面はナデ後ヘラミガキを施し、放射状暗文を施す個体が多い。外面にはナデもしくはヘラミガキが施され、総体的に丁寧に仕上げられている。
- 台付皿 丸みを帯びた底部から体部は外方へ大きくひらき、口縁部は外方へ屈曲する。底部には高台を貼り付け、椀Bの形態に近い1961のような個体も存在する。内面には暗文を施すものと施さないものがあるが、総じて丁寧に仕上げられている。須恵器では加古川市志方窯投松6号窯が初見とされ、その器形は猿投窯の影響を受け成立したものとされている（兵庫県2001）。本遺跡からは須恵器の台付皿の出土はない。
- 高杯 口縁部は外方へ屈曲しながら延び、端部は凹線状に凹む。脚部は面取りするものと、面取りしないものが存在する。杯部と脚部は分割成形する。杯部の内面はナデを施した後、暗文を施すものと施さないものがある。完存するものはないが、復元口径で15cm前後、20cm前後、25cm以上に分けることができる。
- 鉢 丸底もしくは平底気味の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部が垂直に立ち上がる。内面は基本的にナデを施し、外面はナデかヘラミガキを施す。ハケメ、暗文を施すものも存在する。煤が付着するものや漆が付着する個体もあり、用途に偏りはみられない。その他表面を瓦質に焼成した黒色土器も出土している。
- 甕 半球形の体部に外方へ延びる口縁部をもつ。口径と胴部径には大きな差は認められない。内面の口縁部と体部の境は鋭角に接合し、稜をもつものもある。内面は指オサエが残るものが多く、ナデもしくはハケで仕上げる。口縁部は横方向のハケメが残る個体が多い。体部外面は基本的にハケメ調整で、上半と下半で調整方向が異なる個体が多い。1518のように把手がつくものも存在する。被熱するものが多く、多くの個体に煤が付着する。
- 長胴甕 卵形の胴部に外方へ延びる口縁部をもつ。体部の形状は761のように直線的に延びるものと、2084のように丸みを帯びるものがある。最大径は口縁部にある。内面は粘土接合痕、指オサエが残る個体が多い。ナデもしくは板ナデを施し、口縁部は横方向のハケメを施すものが多い。外面は基本的に縦方向のハケメを施す。
- 鍋 「半球形に近い体部に外傾する口縁部のつくもの」。内面はナデ調整、口縁部は横方向のハケメを施す。外面も基本的にハケメを施す。被熱するものが多く、煤が付着している。
- 壺A 「高台を付した平底と肩の張った胴部と直立する短い口縁部からなる」。上向きの把手を付ける。1516しか出土していない。
- 甌 すばまった底部から直線状に立ち上がる形状を呈す。外面はハケメを施し、把手は上向きに接合される。
- 竈 曲げ庇付きの移動式竈である。裾広がりの筒状に成形した粘土の一部を切り取って焚口をつくり、その周縁に庇を貼り付ける。庇の下端は裾部よりさらに下方へ延び、肉厚で丸く作られる。口縁部は肉厚で、丸くおさめられるものと962のように面取りが施されるものがある。外面は縦方向のハケメが施され、側面2ヶ所に下向きの把手を貼り付ける。内外面とも使用による煤・コゲ、被熱痕が顕著に認められる。甌961と竈962は胎土と色調が酷似し、外面のハケメ単位、甌口縁部と竈裾部の作り方が共通する。961の下端が欠損するため想像の域を出ないが、筒状製品の作成後、一部を切り取るかどうかで甌と竈が作り分けられていた可能性を指摘できる。把手は甌が上向き、竈が下向きに貼り付けられる。

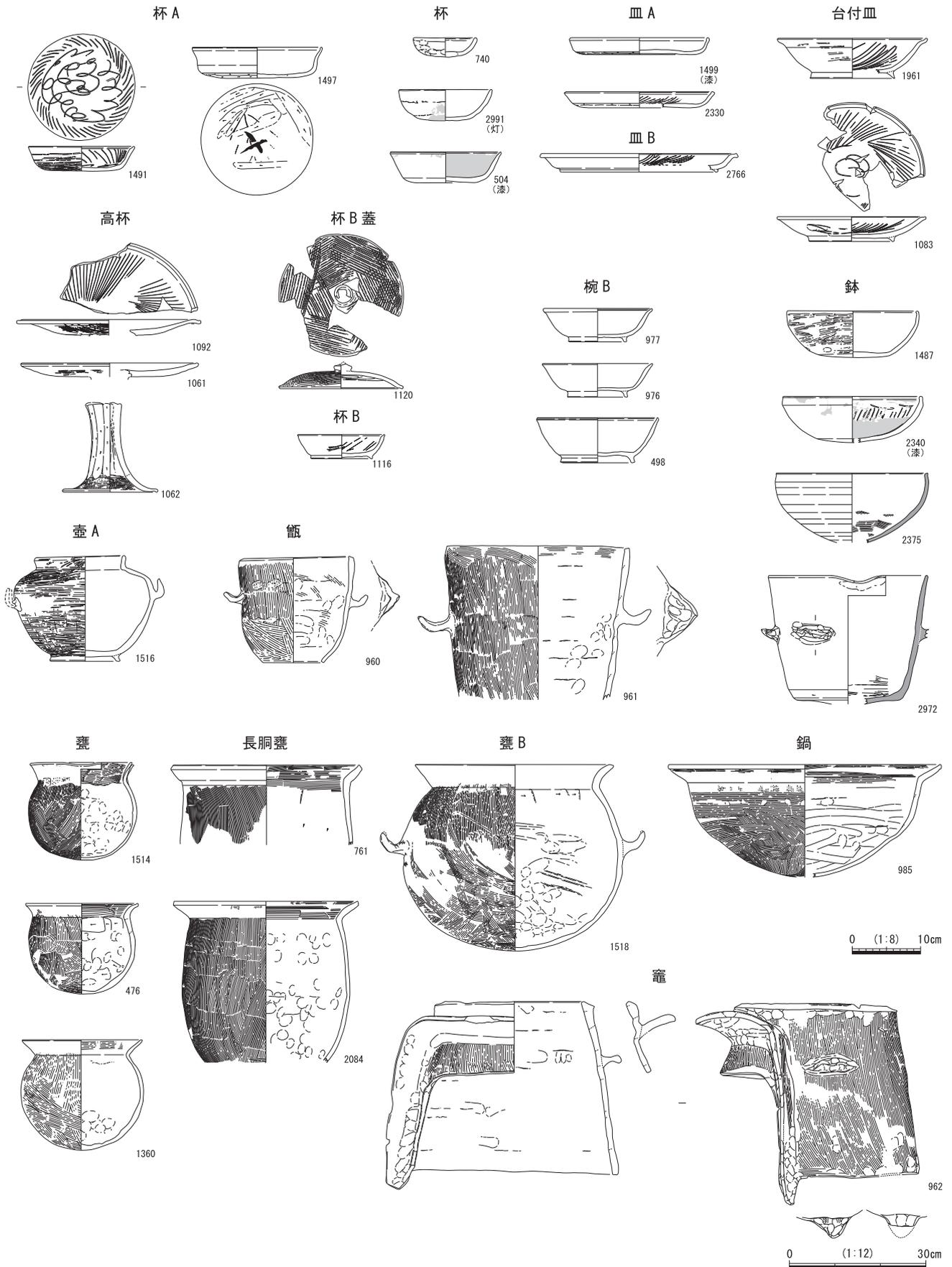


図145 豆腐町遺跡出土土器分類図

須恵器

色調は灰色、青灰色、灰白色を基調とし、火襷、重ね焼痕の残る個体も多い。豆腐町遺跡近辺の窯跡としては姫路市の峰相山窯跡群と加古川市の志方窯跡群がある。「豆腐町I次」では、出土する須恵器は、峰相山窯跡群の製品と比較して砂粒が少なく明るい灰色を呈するものが多いことから志方窯の製品が多いことが指摘されている。遺物観察表に示すように色調、砂粒の混入も様々であり、窯跡との受給関係の把握は、胎土分析や峰相山窯跡の調査の進展等を待って進めていく必要がある。

杯A 「平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまる」。内面は回転ナデの後一方向にナデるものが一定量存在する。外面は底部をヘラ切り後未調整か、ヘラケズリ、回転ナデで調整する。漆が付着するもの、墨が付着するもの、油煙が付着するものがあり、用途は様々である。器形は大きく2種類に分類できる。一つは都城で出土するいわゆる杯Aの典型的なタイプ。もう一つは播磨地域の伝統的な系譜に連なる底部が丸みを帯びるタイプである。播磨では7世紀以降に杯Hの蓋を逆にした杯G hが出現する。杯G hは底部ヘラ切り未調整で、底部は丸みを帯びた形状を呈す。杯Aとは調整技法が細部で異なるものもあり、直接の系譜関係は追えないが、器形的にはその影響下にあると思われる。1520にみるように、立ち上がり丸みをおび、底部中央部にかけて丸みを残すものを851のような典型的な杯Aと区別するため、杯A-G hとして区別する。

杯B 「杯Aに高台を付した形態をそなえ、蓋を伴う」。底部はヘラ切り後回転ヘラケズリ、ナデを施すもの、ヘラ切り後ナデを施すものがある。高台を貼り付ける際に付いたと見られる爪状圧痕が認められるものもある。爪状圧痕の形態としては、高台に沿って線状もしくは放射状になるもの、底部中央に施されるものが認められる。体部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデを施し、体部外面にヘラミガキを施すものも存在する。

杯B蓋 「頂部が平らで縁部が屈曲するものや、頂部が丸く笠形を呈するものがある」。内面は回転ナデもしくはナデ、外面は回転ヘラケズリと回転ナデ、ナデによる調整を施す。

皿A 「扁平な底部に短い口縁部をそなえた形態で、口縁端部は丸くおさまる」。調整は杯A・杯Bと共通する。

椀 平底から内湾して立ち上がる体部をもち、口縁端部は面を持つ、外面にヘラミガキを施すものもある。

高杯 皿状の杯部に外方へ開く脚部が貼り付く。小型と大型のものが出土している。

稜椀 体部に稜線を有す椀形で、稜線が明確なものと、やや丸みを帯びるものがあり、稜線の位置は底部に近いものと体部中央にあるものがある。稜線から上部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。稜線より下はヘラケズリを施し、稜線より上は回転ナデで仕上げるものが多い。高台は杯B等に比べて底部中央寄りに貼り付けられ、細く高いものが多い。小川氏のAタイプとBタイプが出土し、後者が多い(小川1900)。稜椀の蓋は環状摘みで、2353のように稜椀を逆にしたような形状のものも認められる。

椀 高台を有す平たい底部に筒状の体部をもつ。838と2704の2点出土している。2704の底部には、焼成後に「三合」の線刻が認められる。同様の底部で、同じく「三合」と線刻した須恵器底部が本町遺跡でも出土している(姫路市史2010)。志方窯投松支群では、こうした椀と見られる開き気味に上方に立ち上がる筒形の製品を焼成している(兵庫県2001)。

盤 「平底から直線的に立ち上がる長い口縁部をもつ洗面器状の形態」。3点図示した。口縁端部は平坦につくり、側面2ヶ所に把手を貼り付ける。内面は回転ナデ、外面下半は回転ヘラケズリ、上半は回転ナデで仕上げる。



図146 豆腐町遺跡出土須恵器分類図、三彩小壺、製塩土器、軒瓦

第V章 出土遺物のまとめ

- 壺A 「高台を付した平底、肩の張った体部、直立する短い口縁部からなる」。内面及び外面上半は回転ナデ、外面下半は回転ヘラケズリによる調整を行い、外面には自然釉がかかる。
- 壺B 「平底で斜め上に立ち上る体部、比較的平坦な肩、短く直立する口縁部からなる」。2点図示した。底部は欠損するが、口縁部及び肩の形状から認識した。外面には自然釉が付着するが、調整は内外面とも回転ナデである。
- 壺E 「内湾ぎみに斜め上に開く体部と、狭い肩部に外傾する短い口縁部を付した広口の壺」。2847のみ図示した。口縁部は短く、内外面とも回転ナデで調整する。底部はヘラ切り後ナデを行い、高台を貼り付ける。内面には漆が付着する。
- 壺K 「細長い頸部と肩が張り稜角をもつ体部からなる長頸壺」。正確に計数していないが、須恵器壺に占める割合は最も多いと思われる。頸部の接合部から外れたものが多く、漆が付着するものもある。外面には自然釉がかかる個体が多く、内面は回転ナデ、外面上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリ後ナデを施すものが多い。
- 壺L 「卵形の体部に口縁部が外反する頸部をもつ」。内外面とも回転ナデで仕上げ、外面下半は回転ヘラケズリのままか、ナデを施す。壺K同様、外面に自然釉が認められ、内面に漆が付着するものもある。
- 壺Q 「肩部に稜をもつ体部に、大きく外反する広口の頸部と外傾する高台を付す」。口縁端部は外方へ延び、丸くおさめる。内外面とも回転ナデを施し、外面体部から底部にかけて回転ヘラケズリを行う。壺K・壺Lに比べると少ないが、漆が付着するものもある。

その他

三彩小壺

兵庫県調査分も含めて遺跡から5点出土している。西部地区2点、東部地区3点である。いずれも水簸された白色の素地に、緑、黄色、透明釉が掛けられる。釉が確認できるのは1184のみで他は剥離が激しく二彩の可能性もある。器形は壺Aを小さくした形状を呈し、底部は輪高台を貼り付ける。法量は461が器高4.3cm、最大径6.1cm、1184が器高4.7cm、最大径6.7cm、1934は最大径6.0cmに復元できる。全国的な出土事例からも器高4～9cm前後、最大径5～8cmで、このうち、器高・最大径とも5～6cm全土のものが大多数を占める(奥村1987)。豆腐町遺跡出土品もこの例に含まれるものである。こうした奈良三彩は、都城や官衙に限らず、寺院や集落跡からも出土し、神祇・仏教・呪術・葬送等の祭事に関する遺跡・遺構から出土している(奈良文化財研究所2004)。豆腐町遺跡では、兵庫県調査分も含め井戸3点、溝1点、柱穴1点、土器溜り1点の出土がある。井戸からの出土は井戸鎮めに伴う可能性が高いが、4次SE01の出土例からは他の土器とともに廃棄されたような状況で、祭祀に伴う特異な出土状況は看取できなかった。ただ、井戸内における出土位置は最下層より若干上層で、斎申等の祭祀遺物の出土位置とも共通する。

ミニチュア土器

甕形を呈するものが、3点出土している。口径5.0cm、器高4.5cm程度で、いずれも手づくね成形である。

煤・油煙付着土器

器種分類としてはそぐわないが、写真図版141に示したように、供膳具の内面に煤や油煙らしき付着物が認められるものがある。図示したもので33点ある。図示にあたっては煤と油煙を区別せず(灯)として表記した。煤は、面的に広がるもの、口縁部に明瞭に灯明痕として確認できるものがある。油煙については、成分分析を行っていないため厳密には断定できないが、ここでは写真図版142の土器内面に滲んだように広がるものを示す。7点図示した。漆工房では、植物油を燃やして掃墨を生成し、原料となる漆と墨を混ぜ、黒漆を調合することから、漆関連遺跡で出土するこれらの土器は、単なる灯火具ではなく、墨を取るために用いられた可能性が指摘されている(玉田1995)。

製塩土器

遺跡からは3000点以上出土している。播磨地域における消費地遺跡としては最多である(播磨考古学研究集会2020)。全形が復元できるものは、2点程しかないが、いずれも砲弾状を呈する。厚手のものと薄手のものがあり、薄手の2075は椀形に近い器形を呈す。厚手のものは粘土紐は巻き上げて成形するものと内面に布目を残す型作りの2者がある。口縁端部は丸くおさめるもの、外傾する面を持つもの等があり、基本的に指オサエとナデもしくは板ナデで成形される。ハケメが施されるものもわずかに存在する。

本遺跡において土師器・須恵器の食膳具、土師器の煮炊具に次いで多く出土している。二次焼成を受け破碎され細片化したものが大半であり、全量は不明であるが、遺跡を特徴づける遺物の一つである。

「豆腐町Ⅱ次」における胎土分析の結果では、これらの製塩土器には7種類の異なる胎土が使用されたことが判明している。そのうち5種類は姫路市及び周辺域で採取された可能性があるもので、残り2種は花崗岩類以外の岩石を含まない胎土と、黒雲母花崗岩の胎土で、六甲山地もしくは岡山県の瀬戸内海沿岸からの搬入品の可能性が指摘されている。この胎土分析に基づけば、製塩土器の多くは姫路市周辺で製作されたこととなり、可能性としては播磨平野の臨海部や家島諸島が考えられる。家島諸島では、正式な発掘調査を経たものではないが、瀬遺跡や西オドモ遺跡等で製塩土器が採取されている。西オドモ遺跡の資料には布目痕があるものが確認されており、豆腐町遺跡出土の製塩土器の産地である可能性は十分に考えられる(姫路市埋蔵文化財センター2017)。

製塩土器の内容物は固塩であり、その用途としては給付用・備蓄用、食用、祭祀、生産関係等が考えられている(岩本・大久保2007)。豆腐町遺跡においても何らかの用途に用いられたことは間違いがないが、大量の塩の用途は特定できない。上記の中で想定すれば、食用、搖丁や工匠らへの給付、あるいは平城京右京八条三坊十三・十四坪の手工業例を参考にすれば、皮革に伴う使用等があるが、いずれも想像の域を出るものではない。

硯

硯については、定型硯では西部地区で円面硯が、東部地区では円形硯が1点ずつ出土しているのみで、他は全て転用硯である。出土遺物には煤や墨、あるいは油煙が付着したものが含まれている。肉眼観察では墨と思われる黒色物質が付着したものを抽出すれば122点ある。西部地区2点、東部地区120点である。これらの資料のうち、4点について実体顕微鏡による観察を行った(附章参照)。破片資料である写-27と写-40は写真図版140に見るように黒色物質が確認できるものの、墨の粒子は確認できなかった。墨書土器1494と写-24では墨粒子が確認でき、粒子の大きさが0.1~0.2 μ mであることから国産の墨が使用されたことがわかる(岡見1989)。このように墨付着土器としたものの中には実態として転用硯として用いられなかったものも一定数存在していると思われる。転用硯かどうかの判断は科学的な裏付けを行う必要がある。遺物図版に(墨)としたものは、肉眼観察で墨らしき黒色物質が確認できたもので、かつ表面が平滑になったものを掲載しているが、上記のように転用硯であったかどうかは確証がもてないため、(墨)表記に留めている。

瓦

軒丸瓦は9点出土している。播磨国府系瓦である本町式軒丸瓦1点、軒平瓦1点、上原田式軒丸瓦1点で、古大内式系軒丸瓦は6点と多い。古大内式系軒丸瓦はいずれも子葉の先端に切り込みがある。弁数は、古大内式軒丸瓦が13弁であるのに対して、14弁と違いがある。類例は、第Ⅱ章で触れた本町遺跡に近接する第343次調査やたつの市小犬丸遺跡で出土している。今里氏は、播磨国府系瓦に接続するものとして、「続播磨国府系瓦」と仮称している(今里1992)。その他、塙、熨斗瓦、平瓦と丸瓦の出土も認められるが、破片数100点未満で、調査範囲において瓦葺建物が存在したようには見えない。

第2節 出土土器の位置づけ

本節では、豆腐町遺跡の中心時期となる奈良時代の一括資料をもとに編年的考察を行い、豆腐町遺跡の年代的な位置づけを行うこととする。

豆腐町遺跡出土遺物については、既に「豆腐町Ⅰ次」において森内秀造氏により位置づけが行われている（森内 2007）。須恵器窯跡における器種消長、器形、法量等に基づいて検討が行われ、東部地区は、天平年間前半の中谷4号窯（平城宮土器Ⅲ古段階）を上限として8世紀中葉を中心とする年代に位置づけられている。西部地区は8世紀後葉の平城宮Ⅲ新段階から、Ⅳ・Ⅴ段階の間におさまるものとされている。播磨における当該時期の遺物については、これまで森内氏が中心となって牽引されてきているのが実状であり、当該時期比定についてはこれまでの研究史と照らしても妥当なものとして認識できる。しかしながら、本書において報告した5次5区SE01において天平勝宝九歳を上限とする一括資料が得られた現状では、上記年代について、再度検討を行う必要が生じている。天平勝宝九歳は8世紀後半にあたることから、「豆腐町Ⅰ次」で比定された西部地区の土器群と同じ年代に位置づけられることとなり、矛盾が生じたためである。また、これまで奈良時代の土器については、基本的に都城の土器と比較される中で、年代比定が行われてきた経緯がある。都城の土器との類似性を基に位置づけを検討することも重要ではあるが、むしろ播磨地域における土器様相を整理し、その実態を把握していくことも必要なことではないかと考える。

これまで、播磨地域において当該時期の在地土器の研究が進展してこなかった要因は、まとまった量の一括資料が少なかったことによる。奈良時代の遺跡としては、80件以上知られている（播磨考古学研究会 2005）。しかし、出土遺物がまとまったものとなると非常に少ない。そのため、本書では限られた資料とともに、豆腐町遺跡で出土した資料を含め、播磨地域における土器様相を把握し、豆腐町遺跡の年代的な位置づけを検討していくこととする。検討の方法としては、まず豆腐町遺跡出土の一括資料の様相を整理する。その後、それを元に窯跡や都城等との比較を行った上で、播磨地域の遺跡出土資料の様相を把握し、豆腐町遺跡の位置づけを確認する。

豆腐町遺跡一括資料の検討

対象とする遺構は5次5区SE01、7次3区SD02、6次3区・4区2-SD01、6次3区・4区2-SD02、6次4区2-SX01である。2-SD01と2-SD02は第Ⅲ章第1節で述べたように、一連の遺構と考えられることから一括した。その他、4次SE01、SE02、4次・5次1区SK52、5次4区SE01、SE02、6次1区SE01、SE02、SE03も一括性の高い遺構であるが、資料数の多さから上記5遺構を対象とした。各遺構の出土遺物の数量、出土状況については、各調査区の記述において言及している。5遺構に共通する点は、供膳具における土師器の比率が須恵器よりも高い点である。播磨地域においては宮原氏が検討しているように基本的に須恵器の比率が高いことが明らかとなっている（多可町 2006）。そのため豆腐町遺跡における組成が他の播磨地域の様相とは異なっている点が、遺跡の性格の問題か、あるいは地域的な要因なのかは今後、検討していく必要がある。ただ、「豆腐町Ⅱ次」の胎土分析結果に基づけば、供膳具は在地の粘土を用いて製作している。他所から持ち込まれた資料によって比率が異なるのではないことから、播磨地域内における様相差と考えることができる。

5次5区SE01

SE01出土土器のうち法量根拠が比較的良好なものを、改めて整理したものが図147である。杯Aは口径13.95cm～23.4cmの範囲に分布する。法量は漸移的に変化し、明確な法量分化は認められない。強いていえば、15.3cm以下とそれ以上、さらには23.4cmの大型品に区分した3分化となるのか。暗文は螺旋状暗

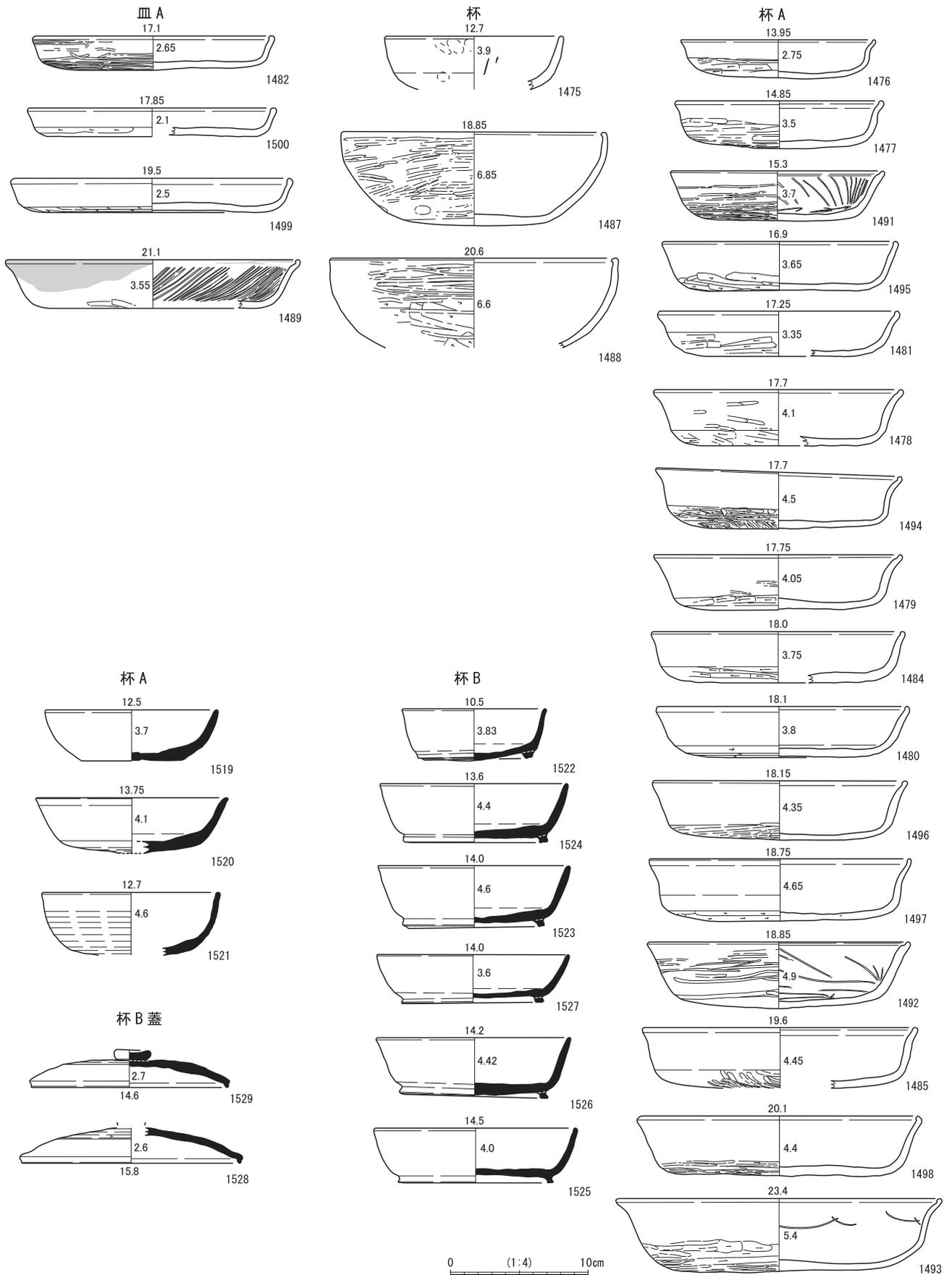


図147 5次5区SE01 出土遺物

第V章 出土遺物のまとめ

文と放射状暗文1段が施される。口縁端部は摘み出しながら丸くおさめるのを基本とし、内面端部に凹みが生じるが、その部分が沈線状に近いもの、1497のように工具による押し引きによるものがある。外面底部は指オサエが顕著に残り、その後ナデ、ヘラケズリを行うもの、ミガキを施すものがある。立ち上がりは基本的にヘラケズリを施し、体部上半はナデを施す。その後にミガキを施すものは限定的である。1494は底部には葉脈痕が認められる。内面は基本的に底部をナデた後、周囲を輪状にナデる。杯1475は外面に指オサエが残り、内外面とも軽くナデる。1487・1488の外面は、底部及び立ち上りをヘラケズリし、その後ミガキを施す。口縁端部は杯Aと同様に摘み出し丸くおさめる。本書では杯としたが、本来は鉢とすべきかもしれない。皿Aは器高3cm以下の低いタイプと3cm以上のタイプがある。製作手法は基本的に杯Aと同じで、端部の形状も共通する。外面底部はケズリ後にミガキを施す。1489は密度の濃い放射状暗文1段を施す。須恵器杯Aはいずれも杯A-G hである。1519はヘラ切り未調整、1520はヘラ切り後ナデを施す。須恵器杯Bは口径10.5～14.5cm、器高は3.83～4.6cmで、口径の小さい1522とそれ以外とで2分できる。いずれも後述する7次3区SD02の器高の低い一群に含まれる。口縁部は底部からわずかに丸みを帯びて立ち上がり、端部はわずかに外反するか、直線的に丸くおさまる。杯B蓋は丸みを帯びた笠形で、1528はわずかに端部が屈曲する。

7次3区SD02

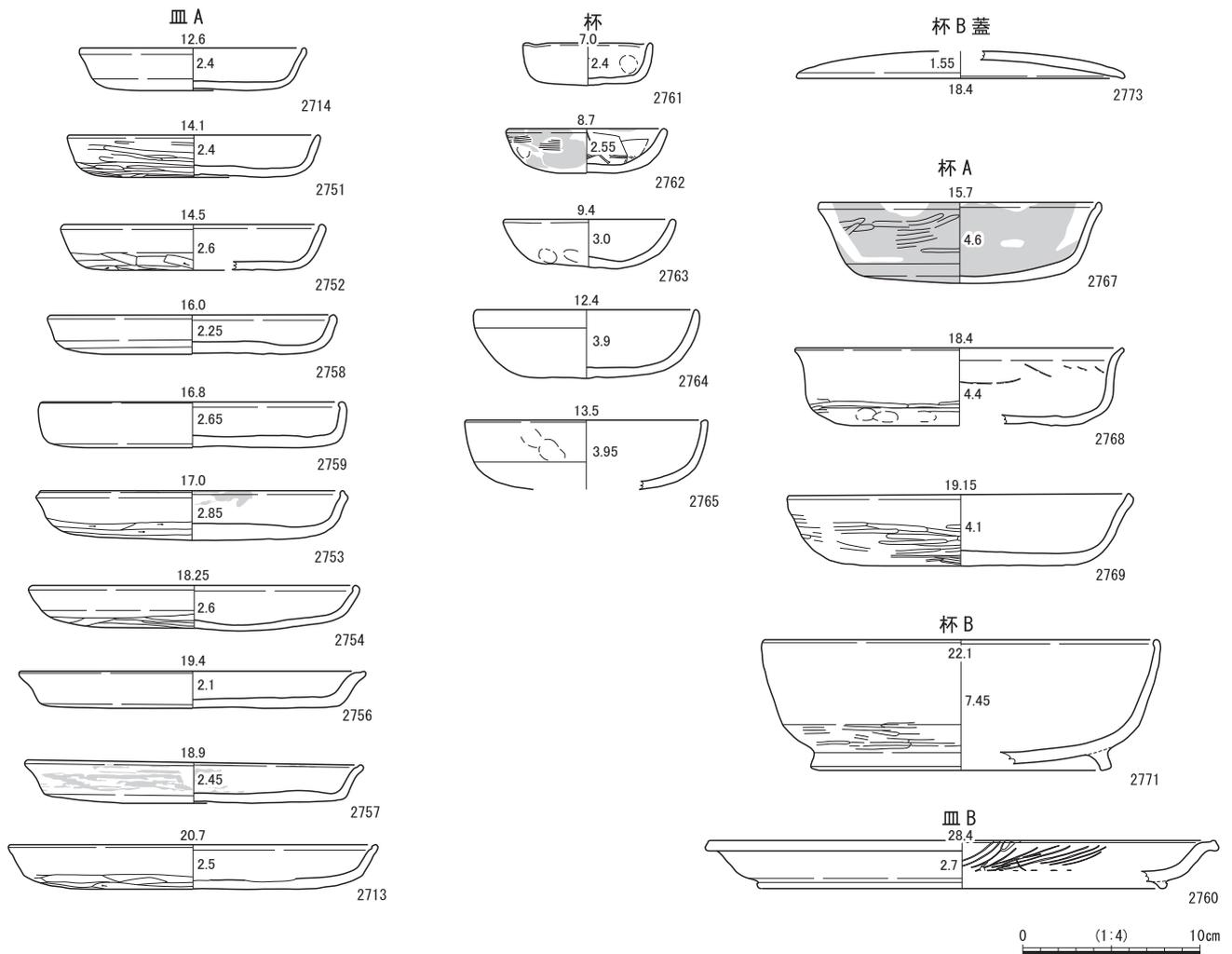


図148 7次3区SD02 出土土師器

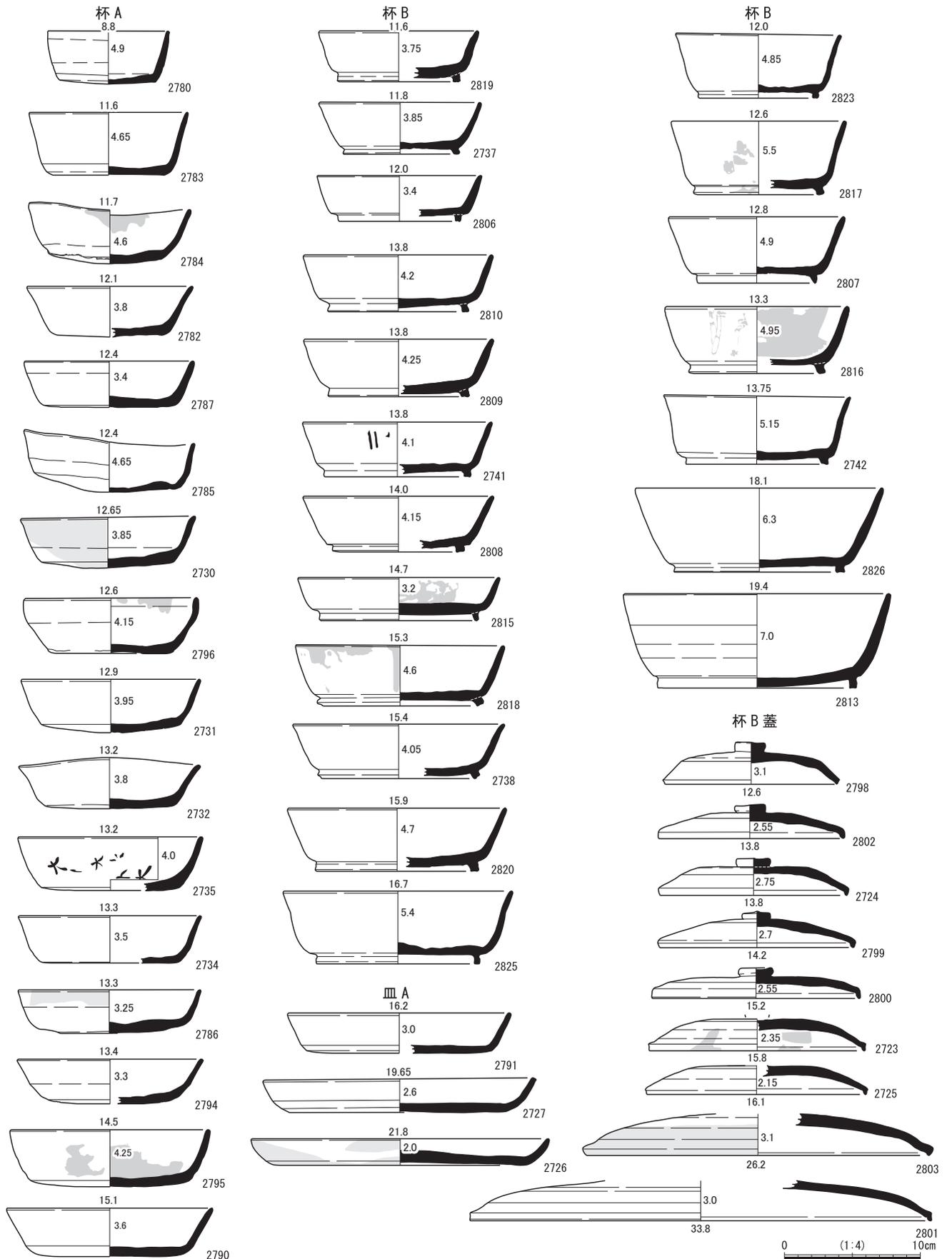


図149 7次3区SD02 出土須恵器

第V章 出土遺物のまとめ

図化した数量は須恵器が多いが、破片数では土師器の方が多い。土師器を整理したのが図148である。土師器杯Aは3点で口径は15.7～19.15cmである。口縁端部はSE01と同じく摘み出して丸くおさめる意識が強い。2768は端面を摘み出したままおさめている。2769の体部下半はヘラケズリ後ヘラミガキを施す。2767は内外面をベンガラにより赤彩する。底部はいずれも指オサエ痕が顕著に残る。暗文を施すものはない。杯は指オサエ痕が明瞭に残り、器表はナデを施す。2762は内外面に板ナデの痕跡が残る。皿Aは口径12.6～20.7cmの範囲に分布する。口縁端部は2714と2751は丸くおさめ、それ以外は摘み出すように仕上げる。暗文が施されたものはない。2756・2757・2713は端部を丸くおさめつつも口縁の外反は強い。皿Bは1点だけで残りも悪い。口縁部は外反し端部は凹む。内面には1段の放射状暗文を施す。その他、杯Bと杯B蓋が出土している。杯B 2771の体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内側へ肥厚する。体部下半はヘラミガキを施し、上半はナデである。杯B蓋の内面はナデ、外面は不定方向のヘラミガキを密に施している。後述する2-SD02のような分割ミガキではない。

須恵器を整理したものが図149である。須恵器杯Bは器高の低い一群2819～2825と、高い一群2823～2813に分けることができる。低い一群で12cm前後を境に、高い一群で14cm前後を境にそれぞれ2群に分けることができ、全体では大きく4群に分化する。いずれの群も体部はやや丸みを帯びながら延びる。口縁端部は丸くおさめるものとわずかに外反するものがある。底部はヘラ切り未調整、ナデるもの、ヘラケズリ後にナデるものがある。体部は内外面とも回転ナデである。須恵器杯Aは底部平底のものと杯A-G hとした2784・2730・2731・2786～2795とが混在する。口径は8.8～15.1cmで、8.8cmの2780を除けば、漸移的に法量が増え、明確な法量分化は捉えにくい。調整は杯Bと同じである。須恵器杯B蓋は口径12.8～33.8cmを測る。法量から2798～2725と2803・2801の2群に分けることができる。小型の一群は全て笠形を呈し、大型の一群はわずかに口縁端部が屈曲するが、明瞭ではない。天井部は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデを施す。皿Aは口径16.2～21.8cmである。底部から体部にかけては、全て丸みをもって立ち上がる。底部の調整は杯A・杯Bと同じである。

6次3・4区2-SD01

杯Aは口径11.85～17.3cmの範囲に分布し、15.0cmを境に2分化するように見えるが、漸移的で明確ではない。口縁端部は摘み出す意識を持つが、5次5区SE01のように丸く肥厚するものはない。摘み出したまま尖るもの、沈線状、凹線状、丸くおさめるものが混在する。底部は指オサエ後ナデを施すものが大半で、ヘラケズリするものもある。立ち上がりをヘラケズリ後、体部上半をナデる。914と1059のみヘラミガキが施される。暗文を施すものはない。杯は杯Aに比べて胎土が粗く、粗製である。小杯状の901～904と椀状の905～906がある。いずれも指オサエ痕が残る、ナデによって仕上げる。器壁は7次3区SD02の杯に比べるとやや厚い。皿Aは口径10.8～17.1cmの範囲に分布し、892のみ小型で、他は漸移的に法量が増加する。杯Bは口径11.85cmに復元でき、2-SD02の1115と類似する。須恵器杯Aは口径の小さい931と口径が広く器高の低い930～934の一群に分けることができる。須恵器杯Bは口径が大きく器高の低い1067と口径が小さく器高の高い935・936に分かれる。体部はいずれも底部から丸みを帯びながら立ち上がる。底部はヘラ切り後ナデもしくは回転ヘラケズリである。体部内外面は回転ナデを施す。皿Aは底部ヘラ切りで立ち上がりにヘラケズリを施す。口縁部は底部から直線的に外方へ延びるものとわずかに外反するものがある。938は底部外面に円形の重ね焼き痕が認められる。

6次3・4区2-SD02

土師器は赤色系の個体が多い。杯Aは口径13.2～17.8cmまで分布する。法量分布は漸移的で15.0cmを境に2分できる可能性はあるが、明確ではない。口縁端部は摘み出す意識はあるが、丸くおさまるもの、尖るもの、沈線状になるものがあり、5次5区SE01と様相を異にする。底部外面は指オサエ後ナデを施し、

ミガキを施すものはない。立ち上がりはケズリを施し、体部上半はナデである。暗文を施す個体はない。杯は皿状、杯Aに類似するもの、椀形態のものを含む。いずれも口縁端部には摘み出す意識が認められる。1114を除き、底部は指オサエで、体部及び口縁部をナデる。1114は丸みを帯びる底部から体部中位までケズリを施し、上半はミガキを施す。口縁端部は摘み出しを意識し、口径18.05cmを測る。長岡京期の杯Aに類似する。皿Aは口径14.2～20.8cmに分布し、15cmを境に2分できる。器形は丸くおさまるものと外反するものがある。口縁端部は摘み出す意識のあるものと丸くおさめるものがある。1100は螺旋状暗文と放射状暗文を施す。台付皿がまとまって出土している。口径は16.6～22.65cmに分布し、大小に2分できる。高台を貼り付け、大きく外反し、口縁端部は沈線状の凹みが巡る。1083・1085は螺旋状暗文と放射状暗文が施される。1080・1081は螺旋状暗文のみを施す。共伴する高杯にも放射状暗文が施されている。杯Bは11.6cmと12.6cmで須恵器杯Bに比べると小さい。口縁端部は摘み出し、丸くおさめている。内面はミガキを施し、密度の低い放射状暗文を施す。杯B蓋は丁寧に作られている。口縁端部は摘み出し丸くおさめる。内面には螺旋状暗文を施す。1120は外面に静止ケズリを施した後、分割ミガキを施す。口縁端部の作り方、製作技法は土師器的であるが、摘みは須恵器的な宝珠摘みを貼り付けている。椀Bは、杯Bに比べ細く高い輪高台を貼り付ける。体部は丸みを帯びて立ち上がり大きく外反する。口縁端部は台付皿と同様に仕上げる。須恵器杯Bは口径16cm台、器高5.25～6.2cmである。底部はヘラ切りで、高台を立ち上がりよりわずかに内側に貼り付ける。体部は直線的に外方へ延びる。2-SD01がやや丸みを帯びるのと対照的である。須恵器杯B蓋は笠形と屈曲するもの、扁平なものが共伴する。1132と1135は内面に円形の重ね焼き痕が認められる。須恵器杯Aは平らな底部で、ヘラ切り後未調整かナデを施す。内外面とも回転ナデで仕上げる。皿Aはわずかに外反し、底部はヘラ切り後回転ナデで仕上げる。1122はヘラケズリを施す。

6次4区2-SX01

杯Aは口径11.85～19.8cmの範囲に分布する。法量は漸移的に変化し、13cmと18cmを境に3法量に分化する可能性はあるが、明確ではない。口縁端部は2-SD02と同様、つまみ出す意識はあるが沈線状、凹み状、尖るもの、丸くおさめるものと多様である。底部は指オサエのままのもの、ヘラケズリを施すものがあり、1183は細かいミガキを施す。体部外面は基本的にナデで仕上げるが、1162と1183はヘラミガキを施す。内面はミガキを施すものではなく、全てナデである。暗文のある個体はない。杯は、口縁端部を丸くおさめるか、1153、1169のように内傾する端部をもち、つまみ出しを意識した個体はない。ナデもしくは板ナデで仕上げ、ケズリを施すものはない。皿Aは口径13.2～21.65cmの範囲に分布する。19cm以上と以下で2分できる。底部は指オサエ後ナデかヘラケズリを施すものがあるが、前者が多い。口縁端部は丸くおさめるものと摘み出す意識が残り、沈線状となるものがある。体部はナデで仕上げ、器形は丸みを帯びるものが大半であるが、外反気味の個体も存在する。暗文を施すものはない。台付皿は直線的に外方へ延び、口縁部が外反する。口縁端部はつまみ出しを意識して作られる。須恵器杯Aは口径12.5cm～14.4cmの範囲に分布し、2-SD01と同じく、口径が小さく器高の高い1199～1201と口径が大きく、器高の低い1195・1196に分けられる。杯Bは口径が小さく器高の低い1203～1205と口径が大きく、器高も高い1207～1209に分けられる。底部はヘラ切り未調整のものとヘラケズリ、回転ナデを施すものがある。体部内外面は回転ナデを施す。杯B蓋は2-SD02同様、笠形と屈曲するもの、扁平な個体が共伴している。

出土遺物の観察から東部地区と西部地区の出土遺物はわずかな差異はあるものの、基本的に地区ごとに共通する要素を持つことが確認できる。次に、これらの土器を法量分布から検討するとともに、当該時期の平城宮の資料とも比較し、相対的な位置づけを検討していく。

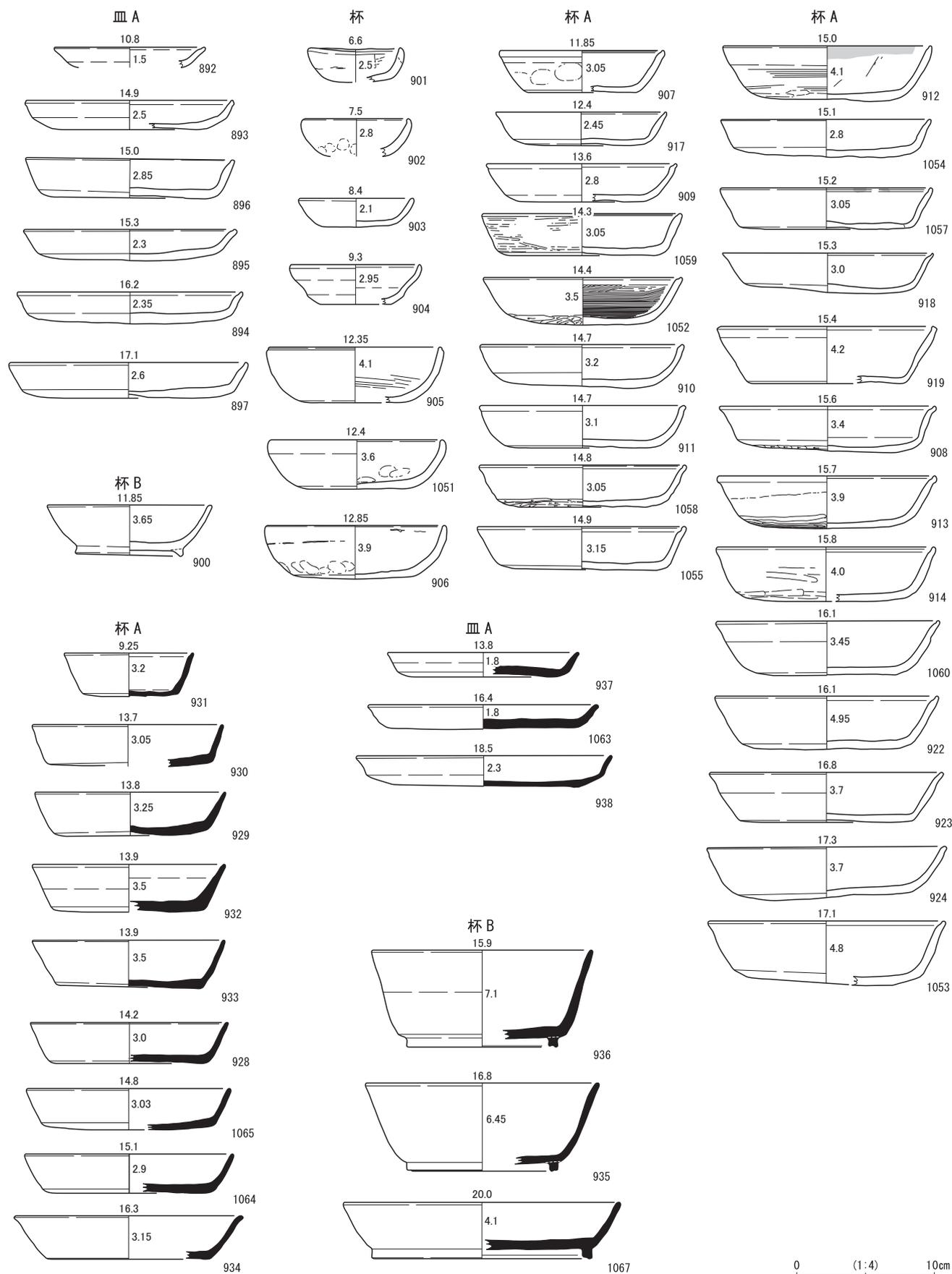


図150 6次3区・4区2-SD01 出土遺物

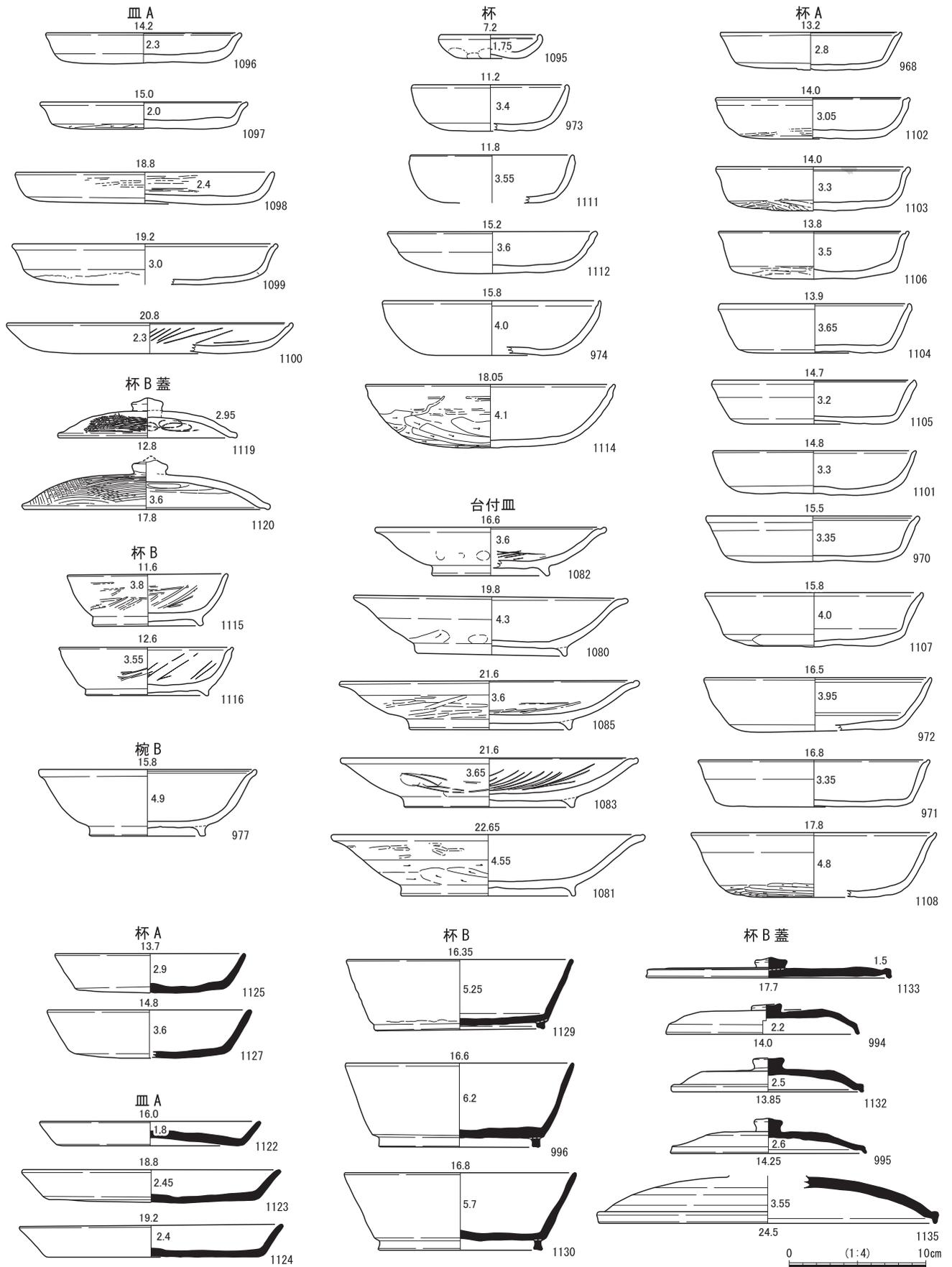


図151 6次3区・4区2-SD02 出土遺物

第V章 出土遺物のまとめ

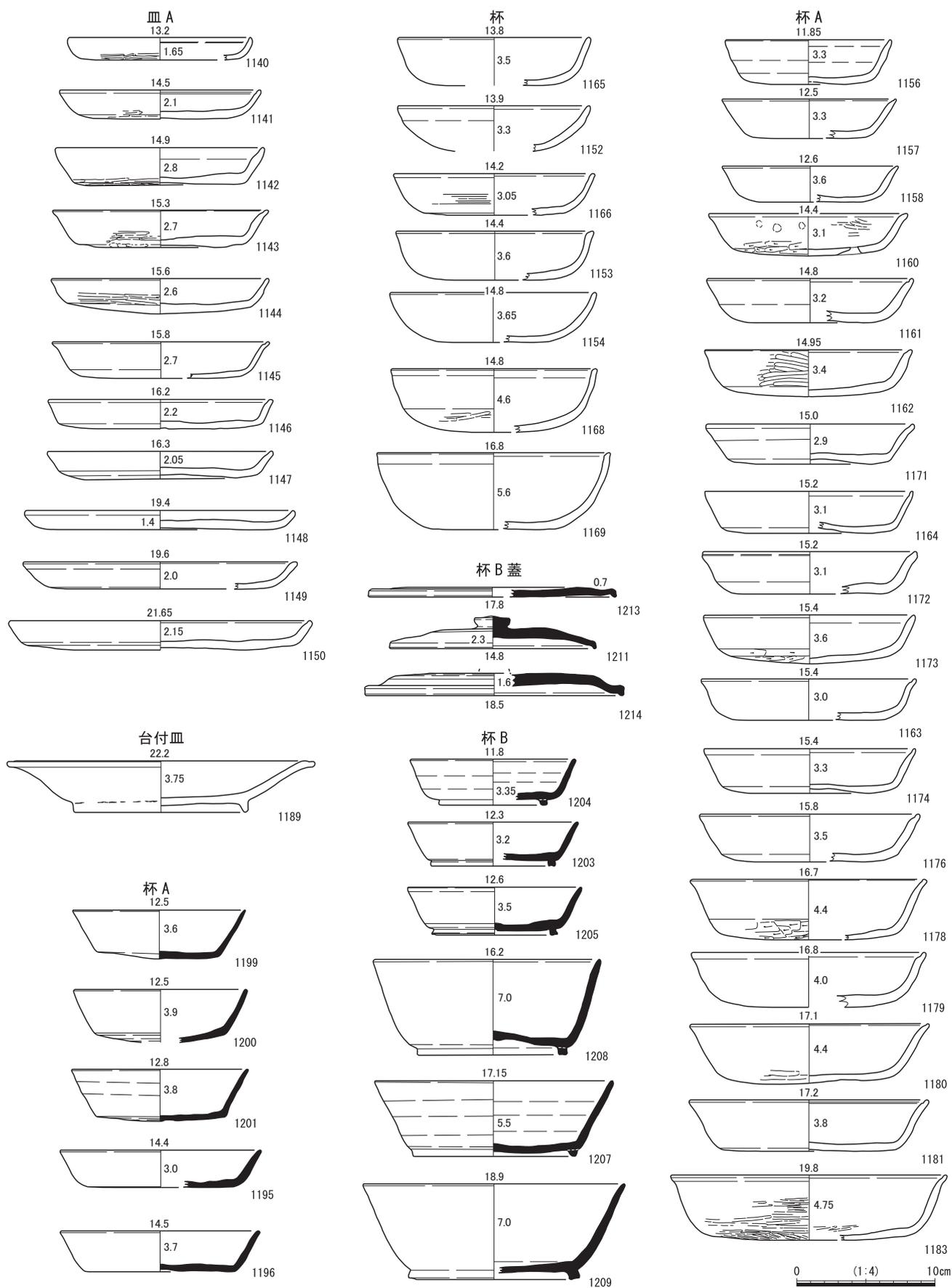


図152 6次4区2-SX01 出土遺物

東部地区の2遺構については、遺物の器形、製作技法等も概ね共通することから近接する時期の所産と推測できる。そこで、2遺構の法量分布を確認していきたい。表11-1は5次5区SE01と7次3区SD02の須恵器杯Bを比較したものである。5次5区SE01の資料数は少ないが、その分布は7次3区SD02の小さい群の法量分布内におさまることが確認できる。表12-1は5次5区SE01の杯Aの法量分布を示した。大きく大・中・小の3法量に区分できる。表12-2は7次3区SD02を加えたもので、資料数は少ないが5次5区SE01の分布域と重なることが確認できる。このように須恵器・土師器ともほぼ同じ分布域にあることが確認でき、遺物観察に基づく推測を法量分布からも裏付けることができる。

西部地区の3遺構についても器形、製作技法等は概ね共通している。また、6次3区・4区2-SD01と6次3区・4区2-SD02については、遺構の検出状況からも関連がうかがえる。表11-2は須恵器杯B、表12-3は土師器杯Aについての法量分布を示したものである。6次4区2-SX01の須恵器杯Bは2ヶ所に分布域を持ち、大小の2群に分かれている。2-SD01と2-SD02は資料数が少なく明確ではないが、2-SX01の大型の分布域と重なっている。土師器杯Aは3遺構とも緩慢な法量差を持ちながら分布しているが、一定の分布域におさまっている。西部地区の3遺構についても遺物観察に基づく推測を法量分布から裏付ける結果となった。このように西部地区と東部地区の遺構はそれぞれが器形・製作技法等が類似するとともに法量分布も共通することから、地区ごとにまとめた時期の資料群であるといえる。

表11-3は西部地区と東部地区の須恵器杯Bを比較したものである。法量分布には重なる部分があるが、西部地区は大小に2分し、両者の分布域は異なっている。表12-4は土師器杯Aを比較したものである。相対的に東部地区の法量は拡大し、主体となる分布域にズレを認めることができる。西部地区は法量が縮小傾向にあることを指摘できる。このように西部地区と東部地区を総体として比較すれば、一定の傾向を読み取れるが、法量分布には重なる部分も大きく、少量の遺物での法量検討を行うことは相当恣意的に解釈できる部分を含んだものであることを指摘しておきたい。

次に須恵器杯Bについて、窯跡及び消費地遺跡との比較を行う。表11-4は5次5区SE01と平城宮Ⅲに位置づけられている志方窯の中谷4号窯と平城宮Ⅴに位置づけられる投松6号窯を示した。志方窯では平城宮Ⅳ相当の窯が未確認である。表に基づけば、中谷4号窯は3つ程度に法量分化するが、その境はあまり明瞭ではない。対して投松6号窯の法量分化は明瞭である。5次5区SE01はいずれの窯でも小さい方の分布域に含まれることが確認できる。表11-5は東部地区と両窯を比較したものである。東部地区の分布域は両窯に重なる部分もあるが、中谷4号窯に近い傾向を示している。西部地区は前述したように明瞭に法量分化することから表11-6において投松6号窯と後続の投松2号窯と比較した。法量分布は両窯と類似するが、特に投松6号窯との類似性が高い。消費地遺跡との比較として、奈良時代前半に位置づけられている姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡SX05と奈良時代中頃から後半と考えられている多可町田野口・籠町遺跡井戸1・溝1出土の須恵器杯Bを表11-7と表11-8に示した。いずれも法量は報告書に基づいている。いずれの遺構も西部地区の分布傾向とは異なり、東部地区の分布傾向に近いことがわかる。また、比較した両遺構の法量分布は極めて類似することもわかる。口径と器高の法量では、両者に時期差を見ることは不可能である。しかし、後述するように出土遺物の様相は全く異なっているため、消費地間における単純な法量比較には限界があることを示している。

土師器杯Aを平城宮出土資料と比較していく。平城宮Ⅲの前川遺跡井戸1・2と平城宮SK820、平城宮Ⅳの平城宮SK219と東部地区とを比較したのが表12-5である。前川遺跡の分布域とはあまり重ならず、SK820とSK219の分布傾向に近く、分布域の総体的な広がりにはSK820に近く、大型の一群の法量分布はSK219に近いことが指摘できる。このように平城宮ⅢのSK820とⅣのSK219のいずれにも類似し、法量分布だけではどちらとは明確には判断できない。表12-6は西部地区とSK219、平城宮Ⅴの平城宮SK2113、平城宮Ⅵの平城京左京五条二坊十四坪SE03とを比較した。表によればSE03と重なる部分もあるが、平城宮出土資料よりも法量が縮小傾向にあり、都城とは異なる法量分布を示すことが確認できる。

第V章 出土遺物のまとめ

表 11 須恵器杯B 法量比較

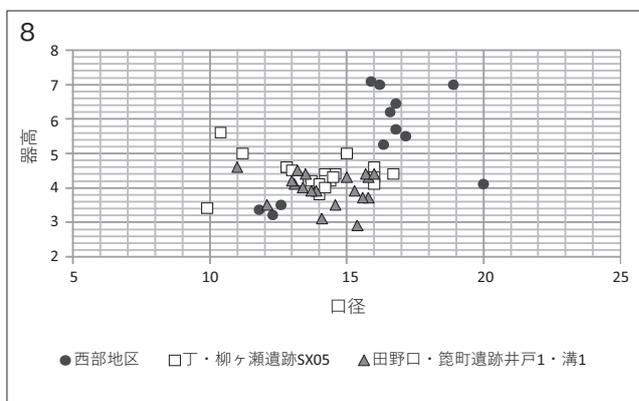
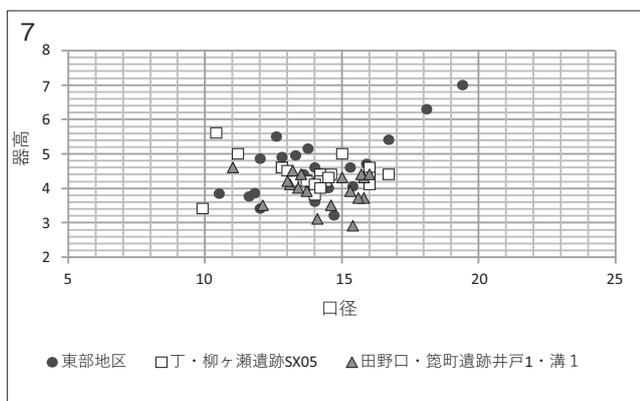
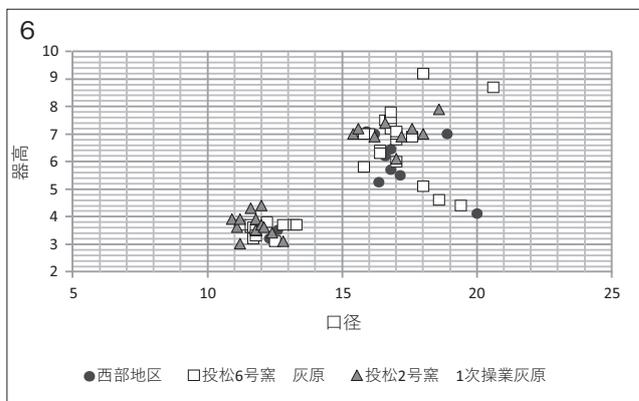
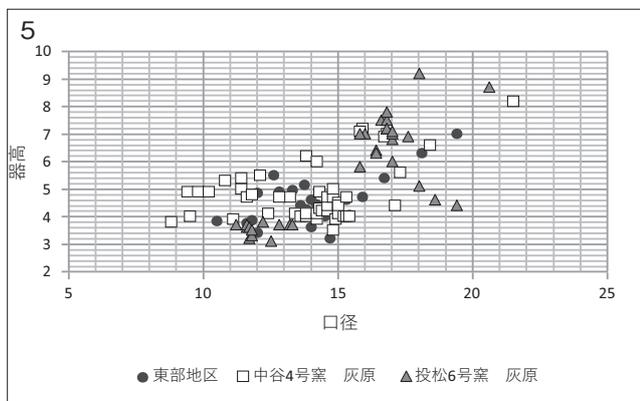
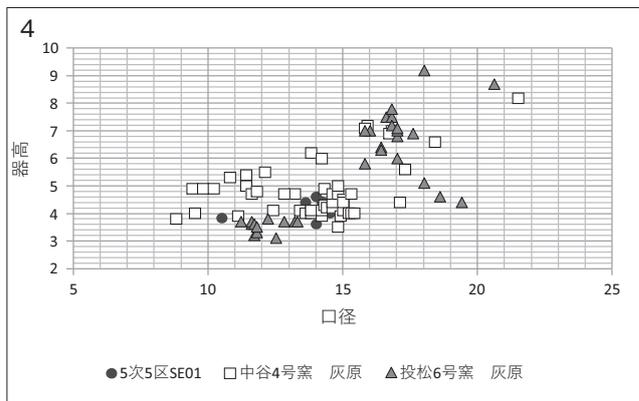
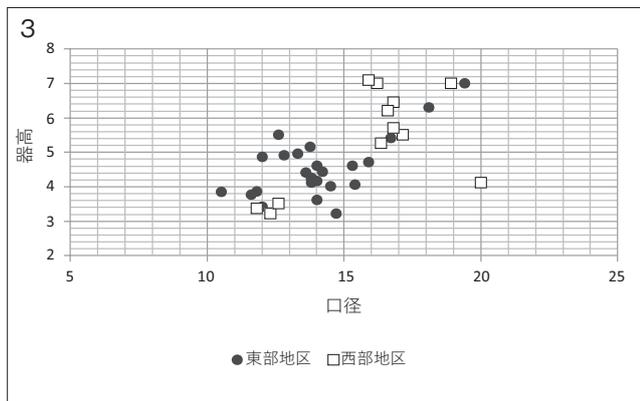
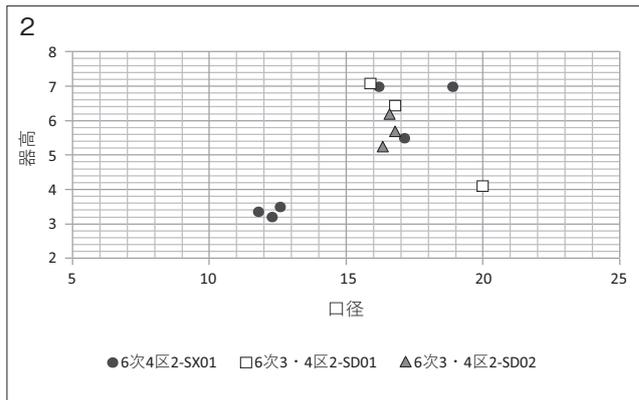
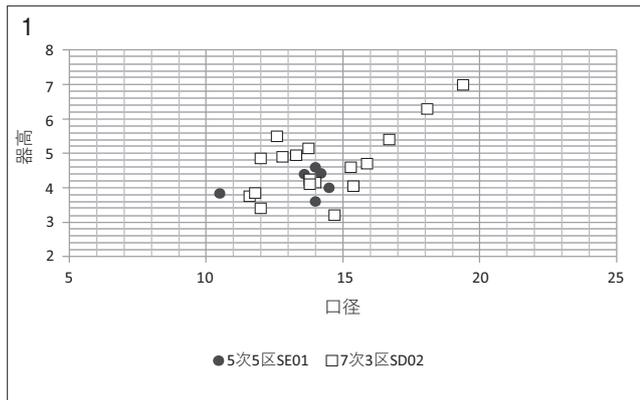
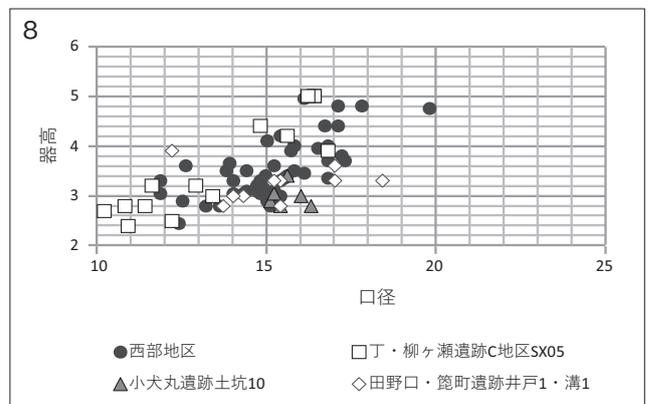
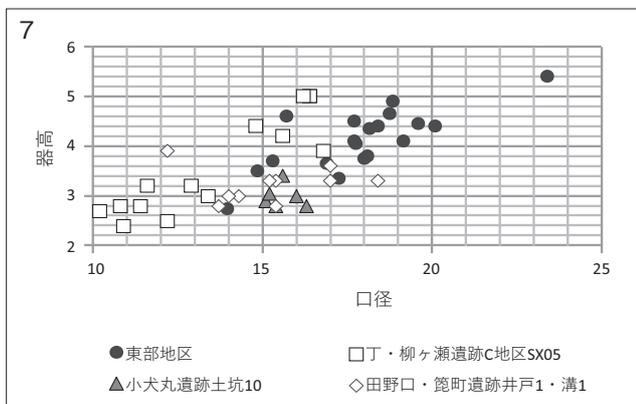
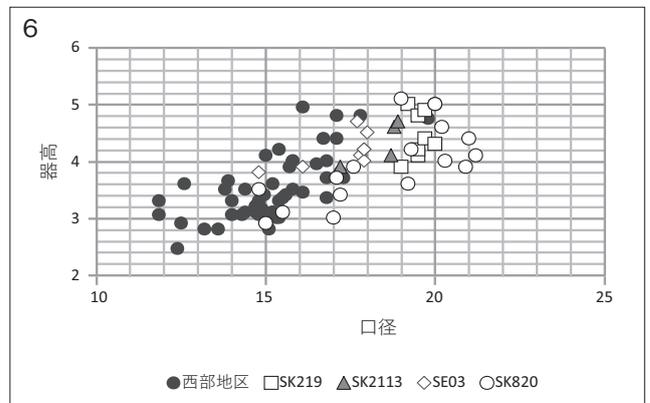
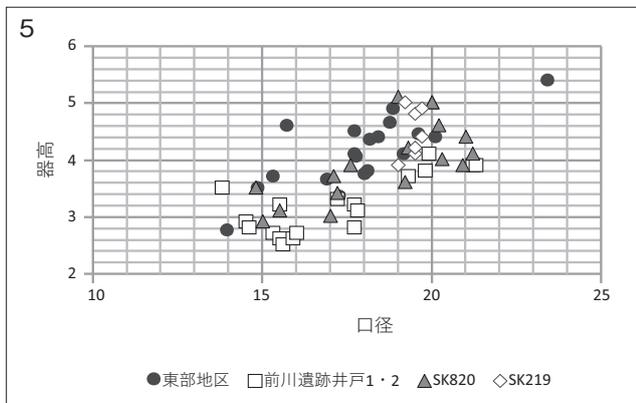
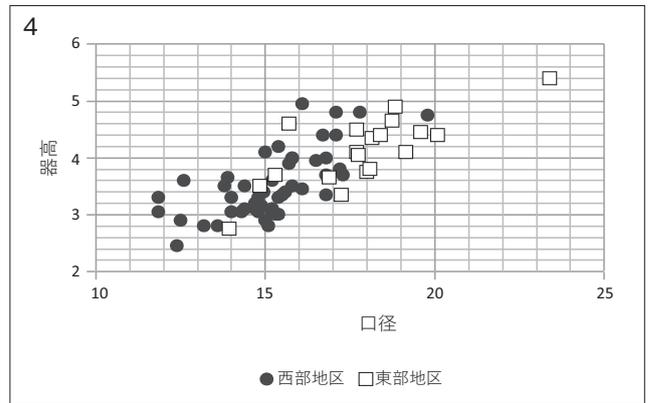
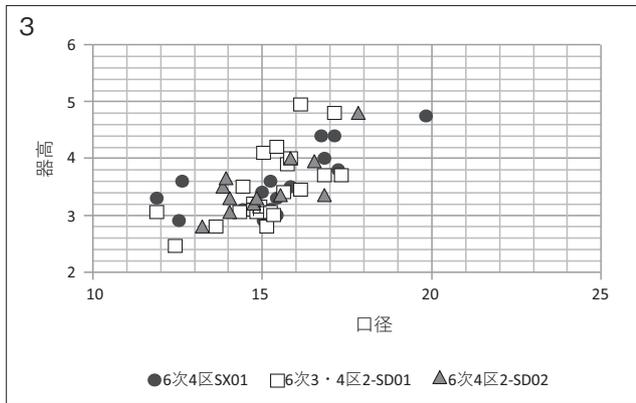
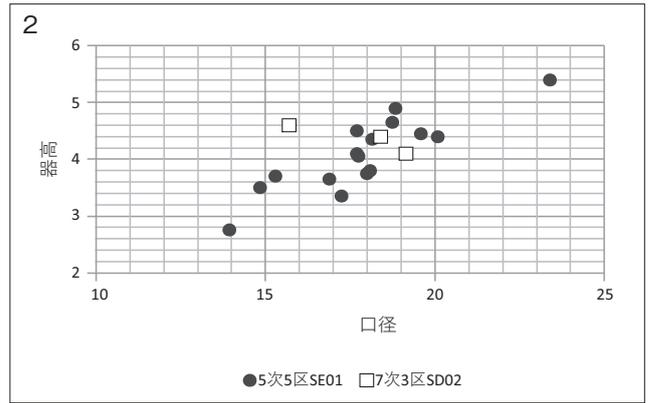
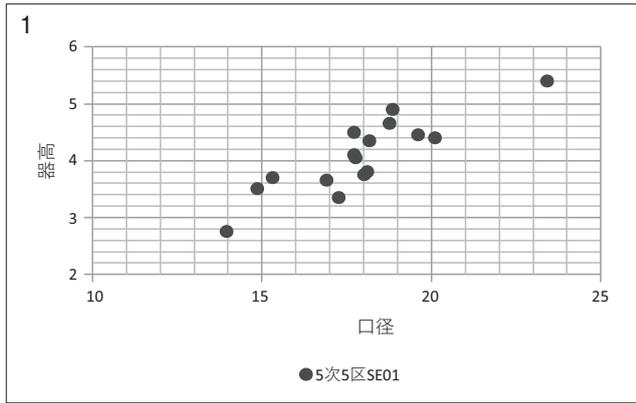


表12 土師器杯A 法量比較



第V章 出土遺物のまとめ

次に須恵器と同様に丁・柳ヶ瀬遺跡 SX05 と田野口・籠町遺跡井戸1・溝1、小犬丸遺跡土坑10 資料と比較したものが表12-7と表12-8である。丁・柳ヶ瀬遺跡 SX05 の分布域は2分されるが、口径に比して器高が高く、分布域はほとんど重ならない。小犬丸遺跡土坑10 と田野口・籠町遺跡井戸1・溝1 の分布域は類似するが、東部地区とはわずかしこ重ならない。西部地区との比較では、丁・柳ヶ瀬遺跡 SX05 と大型品の分布域は重なるが、小型品の分布域はズレている。小犬丸遺跡土坑10 と田野口・籠町遺跡井戸1・溝1 とは一部重なるが、総体としては異なっている。報告書で提示された年代観では、東部地区と類似する傾向を示すはずであるが、異なる結果が得られている。

以上の検討から、須恵器杯Bの窯跡と豆腐町遺跡との検討結果は、ある程度対応することが判明した。対して、播磨地域の他遺跡との法量分布とはあまり整合しないことが確認された。窯跡と整合する点は、「豆腐町I次」において豆腐町遺跡出土遺物が志方窯の製品が含まれるとする森内氏の観察所見を裏付ける。他遺跡との法量の傾向差は、須恵器の供給源が異なることに起因しているのかもしれない。奈良時代の須恵器については、都城における法量傾向を踏まえて地域内で一定の法量傾向にあるように思われたが、そうではない可能性も十分考えられる。事実、都城では奈良時代後半期には須恵器杯Bの器高の高い一群が姿を消すのに対して、播磨では後半期には器高の高い一群が主体となるとの指摘がなされ、都城とは異なる展開が明らかにされている（森内2007）。須恵器杯Bの検討結果は「豆腐町I次」の考察と同じく、中谷4号窯に近似する結果を得た。しかし、中谷4号窯と漆紙文書の年代は齟齬をきたしている。志方窯跡では次段階の平城宮Ⅳに並行する資料が確認されていないことから、現状では両者の差を埋めるのは困難である。西部地区については、投松6号窯と合致することから同時期と考える。土師器については、西部地区と都城との法量分布は、基本的に整合しないことが判明した。対して東部地区における土師器の法量分布は、平城宮ⅢのSK820と平城宮ⅣのSK219とも類似する傾向を読み取ることが可能であることが判明した。都城における法量変化に近い土器群と評価することができる。5次5区SE01の資料を都城の土器に精通した方々にも実見していただいたが、漆紙文書を考慮しなければ8世紀中ころまでという意見が多数を占めていた^(注1)。

5次5区SE01の年代比定は、漆紙文書オモテ面に記載された「年十七」「少子」が根拠になっている。一般論としてはこの記述が誤りである可能性もありうるが、「少子」の記載自体が追記であり、間違った場合、追記時点で直すべきものと解釈できる。また、単に年齢区分の変更ではなく、課税対象年齢の変更であることからすれば、中男に上がる直前の年齢は厳密にチェックされる（『延喜式』主計寮下大帳式、秋田城跡出土第八号漆紙文書など）。よってここに誤りがある可能性は極めて低い。また、漆紙文書には積読できていないが、漆付着面にも紙背文書があり、紙として表裏利用された後、払い下げられたものである。漆容器の蓋として再利用されるまでに要した期間を判断することは難しいが、漆紙文書の年代が天平勝宝九歳以降であることは動かしがたい^(注2)。

5次5区SE01の土器様相を簡潔に整理すると、須恵器杯B蓋はB形態、土師器杯Aには螺旋状暗文+1段の放射状暗文。土師器皿Aにも比較的密な放射状暗文が施される。須恵器杯Bは器高の低い一群、須恵器杯Aは杯A-Ghを含む。出土状況を示した図82からも漆紙文書をはさんで上下に墨書土器「十」が出土することから、これらの土器が時間差なく埋められたものであることを示している。また、土師器の器表の残りも良好で、長期間の使用や伝世は考えにくい。こうした様相を持つ5次5区SE01土器群が、8世紀第3四半期に廃棄されたのは明らかである。土師器の法量検討では都城の傾向と大きくみれば矛盾なくおさまる範疇にあり、須恵器の窯跡との比較では法量分布は類似するものの、年代には大きなズレがあることが確認できた。ただ、西部地区については窯跡資料とは整合していることから、供給関係が志方窯でない可能性も十分考えられる。東部地区においては、7次3区SD02がそうであるように、基本的に5次5区SE01と大きく様相の異なる遺物は存在しない。以上のことから、豆腐町遺跡東部地区の遺構群はやや幅を持たせても、8世紀中頃から後半（第3四半期）におさまるものと考えられる。

西部地区については、須恵器杯Bは投松6号窯出土資料との類似性を確認することができたが、土師器杯Aでは、都城や播磨地域の遺跡とも異なる結果が得られており、法量の検討だけでは結論が出せないことが明らかとなった。また、土師器には暗文を施すものも認められるが、杯Aには認められず、精製品である高杯、台付皿といった限られた器種のみとなる。暗文がいつまで施されるのかといった点なども検討しなければならない。これまでに示された須恵器窯跡の変遷が有効であることに疑いはないが、土師器に比べると須恵器の耐用年数は長いことから、消費地ではやはり土師器の理解を深めていく作業が急務といえる。このように法量比較による検討では見えることと、見えないこと、あるいは解釈次第のところもあり、単純な法量比較による時期比定の難しさと限界が明らかとなった。次に播磨地域出土の供膳具の器形に基づく様相整理を行うこととする。

播磨地域の土器様相

播磨地域では資料数が確保された良好な資料は少ない。姫路市域においても、『本町遺跡』以後もまとまった土器の出土は豆腐町遺跡を除いてほとんどない。そのため、ある程度一括性が担保され、数量的にも確保された遺構を対象とし、主として器形分類によって様相把握を行う。播磨地域における土師器の製作技法は森暢郎氏が指摘しているように、非ロクロ成形とロクロ成形のものが8世紀前半以降混在している（森 2019）。そのため本来、そうした製作技法等に基づく分類を行った上で様相を把握すべきと考えるが、資料数の少ない現状では、資料操作上の制約も大きいことから、ひとまず器形による分類を行った。分類にあたっては一部実見したものもあるが、基本的に報告書の記載に基づき行った。検討対象とした遺跡は東播磨7遺跡、西播磨8遺跡である。東播磨は多可町の資料が多く、地域的な偏りが大きい。また、検討対象とできる資料数が少ないことから、出土状況に多少不安のある遺構も含んでいる。

検討対象とする器種は、土師器皿A、土師器杯A、須恵器杯B蓋、須恵器杯B、須恵器杯Aである。分類は図153に示した。

土師器皿A A：口縁端部を内側に巻き込むものあるいは、形骸化し沈線を施すもの等、口縁端部を丸くおさめないもの。B：口縁端部を丸くおさめるもの。C：口縁部が外反するもの。

土師器杯A A2：2段の放射状暗文を施すもの。A1：1段の放射状暗文を施すもの。A：暗文を施さず、口縁端部を内側に巻き込むもの、あるいは、形骸化し沈線状となるもの等様々あるが、口縁端部を丸くおさめないもの。B：口縁端部を丸くおさめるもの。

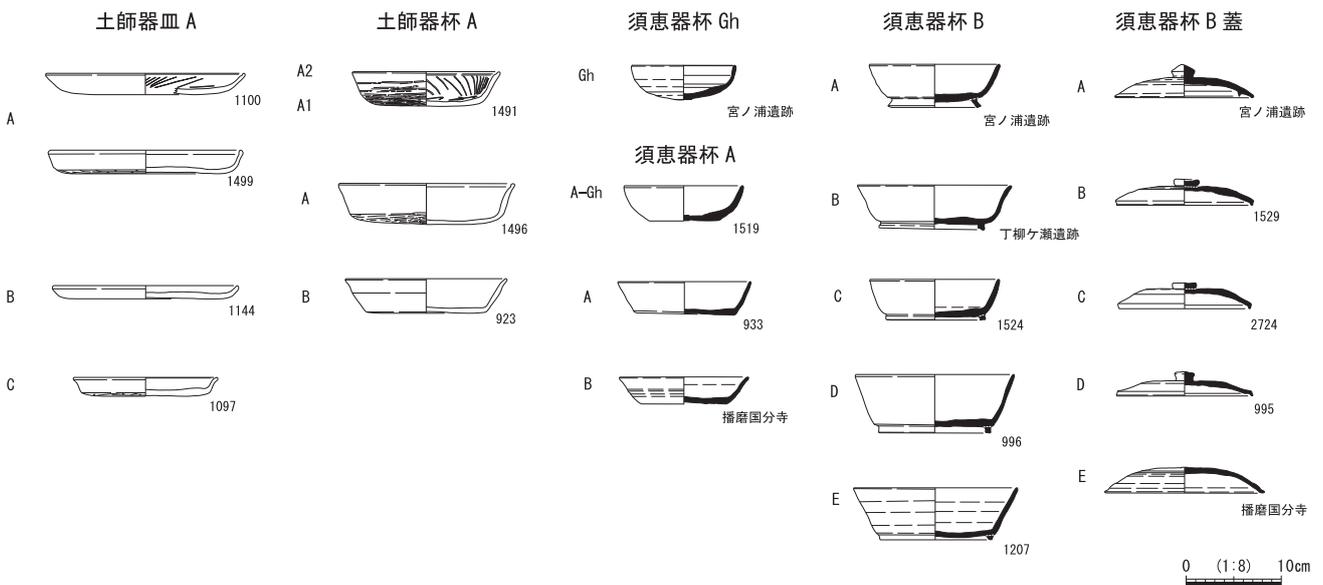
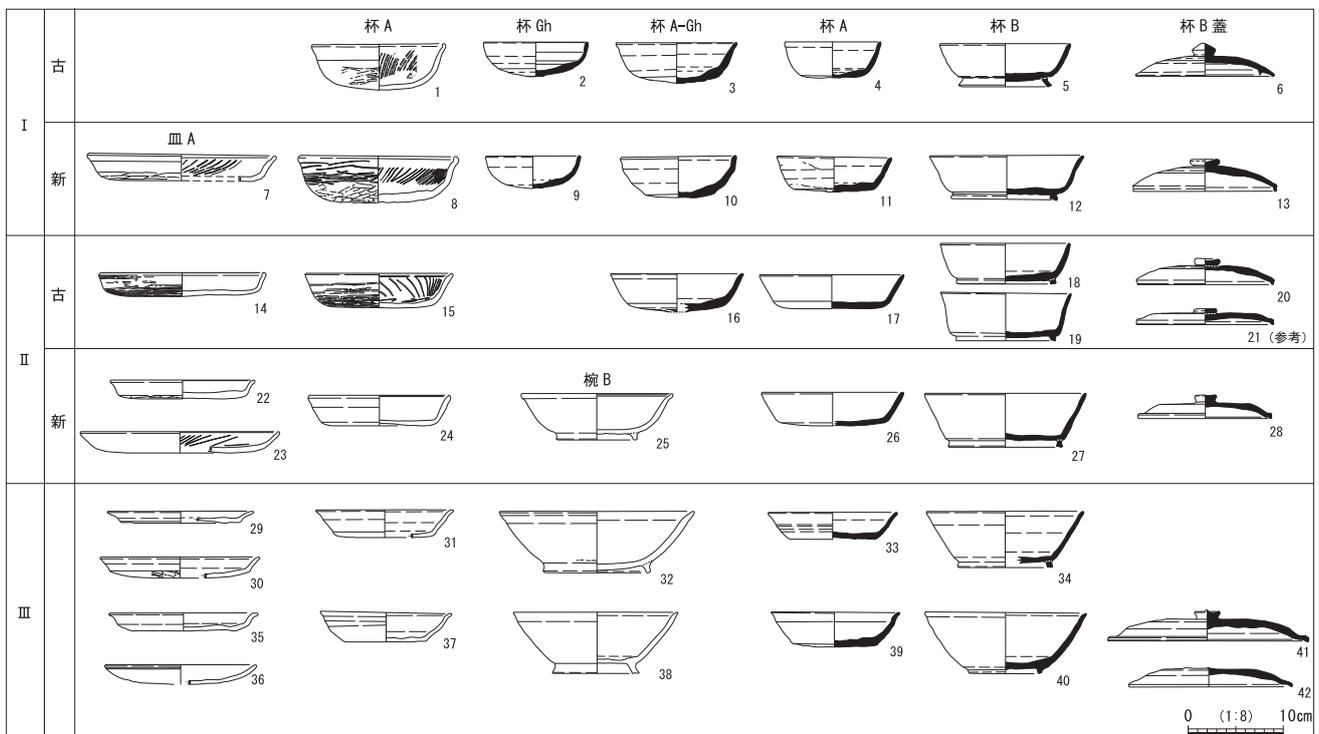


図153 供膳具分類図

土器様相を横軸で見ると、丁・柳ヶ瀬遺跡と豆腐町5次5区SE01の間で、土師器杯Aの2段暗文、須恵器杯G h、かえりのある須恵器杯B蓋が消滅することから画期を見出すことができる。豆腐町遺跡6次3・4区2-SX01と新方遺跡との間でも、土師器皿A、土師器杯A、須恵器杯B蓋、須恵器杯Bに変化が認められ、ここに大きな画期を見出すことができる。これにより播磨地域の土器は大きく3段階に様相が変化することが確認でき、それぞれⅠ～Ⅲ期と呼称する。Ⅰ期では有年原田中遺跡と丁・柳ヶ瀬遺跡との間に須恵器杯Bの組成に変化が見られる。ここを境に古相と新相に分ける。Ⅱ期は土師器皿Aの外反するタイプと須恵器杯BのEタイプの出現をもって古相と新相に分ける。Ⅲ期は本書における分類では明確に細分することができない。また、Ⅰ期新相が1遺構のみであることから今後検討の余地は多分にあるが、ひとまず播磨地域の土器様相を3期5様相に区分した。

上記の検討により、豆腐町遺跡5次5区SE01の資料は、播磨地域における消費地遺跡の様相では、Ⅱ期古相に位置づけられる。このことからⅡ期古相には8世紀第3四半期を含む時期を与えることができ、先に検討したように8世紀中～後半に位置づけておきたい。Ⅰ期古相については、宮ノ浦遺跡第1次SD01坪4の土器群を須恵器編年(新田2019)に基づき、7世紀後半から末に位置づけている(姫路市教委2018)。Ⅰ期新相は、Ⅰ期古相とⅡ期古相の間にあたることから、8世紀前半に位置づけられることとなる。Ⅱ期新相には西部地区の各遺構が含まれる。西部地区の須恵器は投松6号窯の分量分布と類似している。投松6号窯の年代は平城宮V(762～780年)を中心とする時期とされている(兵庫県2001)。また、6次3区・4区2-SD02出土の土師器杯1114は、平城宮VI、あるいは平安京I期中頃の杯Aに類似する。このことからⅡ期新相は古相に後続する8世紀後半～9世紀初頭の時期と考える。Ⅲ期の上池遺跡及び竹原遺跡資料は、平安時代の遺物を検討する中で、村東遺跡Ⅰ期古段階(9世紀後半)に位置づけたものである(姫路市教委2018)。また、播磨国分寺27次SD650を被覆する埋土から9世紀中～後半の緑釉陶器が出土していることから、9世紀前半から後半にかけての年代を与えることができる(姫路市教委2022)。



1～6: 宮ノ浦遺跡1次SD01坪4、7～13: 丁柳ヶ瀬遺跡C地区SX05、14～20: 豆腐町遺跡5次5区SE01、21: 豆腐町遺跡6次1区SD260、22～24・26～28: 豆腐町遺跡6次4区2-SD02、25: 豆腐町遺跡6次3区2-SD02、29～34: 播磨国分寺跡27次SD650、35～42: 上池遺跡SX02

図154 播磨地域における供膳具変遷図

第V章 出土遺物のまとめ

土器様相の整理に基づき、図示したのが図 154 である。

奈良時代は大きく3時期に区分でき、Ⅰ期新相を8世紀前半、Ⅱ期古相を8世紀中～後半、Ⅱ期新相を8世紀後半～9世紀初頭に比定した。豆腐町遺跡5次5区SE01資料から、これまで、須恵器杯B蓋は8世紀中頃に笠形から屈曲形態に変化することが指摘されてきたが、消費地においては8世紀後半まで確実に笠形形態が残存することが判明した。豆腐町遺跡東部地区においては、特に笠形が主体を占め、屈曲形態は限られた数量しか出土していない。須恵器杯B蓋の変遷観は確立しており、屈曲形態が後出する点は変わらないが、播磨地域の消費地遺跡においては、笠形形態はⅡ期古相までは確実に残り、一部ではⅡ期新相まで共伴し、完全に入れ替わる訳ではないことが明らかとなった。須恵器杯Aは8世紀中～後半まで7世紀代の系譜を引く器形である杯A-Ghが残存する。土師器の暗文は8世紀中頃までとされるが、8世紀第3四半期の5次5区SE01においても土師器皿A、杯A、杯B、高杯に認められる。また、Ⅱ期新相では土師器杯Aには暗文が施されないが、皿A、高杯、台付皿といった限られた器種には認められる。Ⅱ期新相以降は、皿の口縁部内面の摘み出しは沈線状に痕跡としてわずかに施されるものも存在するが、大半は丸くおさまり、口縁部が外反するものが増加する。須恵器杯BはⅡ期新相に出現したEタイプのもものが主体を占めるようになり、杯B蓋は摘みが消滅していく。土師器杯Aは図示したものが豆腐町遺跡のものであるため、Ⅱ期古相と大きくは変わらないが、他遺跡ではロクロ土師器が顕著に認められるようになる。Ⅲ期として提示した播磨国分寺27次の杯Aと豆腐町遺跡の杯Aとの器形差は大きく、ロクロ土師器の存在を考慮したとしても、型式的な連続性は少ない。この点は今後追及すべき課題である。豆腐町遺跡6次3区・4区2-SD02からは土師器椀Bが出土している。椀BはⅡ期の中で出現する器種で、Ⅲ期以降平安時代を通じて主要器種の一つとなっていく。Ⅲ期以降は、今回の分類指標のみでは細分することができないが、図 154 に示した播磨国分寺27次と上池遺跡SX02の土器様相からも土師器椀B、須恵器杯Bにおける器形変化等から細分することは可能と思われる。

以上のように、豆腐町遺跡出土遺物を基軸とし、播磨地域の消費地における土器様相を概観した。土器様相から奈良時代は大きく3時期に分けることができる。そのうち前半に位置づけられる遺物は少なく、第Ⅱ章でも述べたように播磨国府周辺においても当該時期の遺物は少ない。今後、資料数の増加を待って改めて検討していく必要がある。5次5区SE01出土遺物は、平城宮では8世紀中ば頃に位置づけられる様相であるが、播磨地域では、8世紀第3四半期まで残ることを確認した。播磨地域の土器様相を整理した上で、改めて東部地区はⅡ期古相（8世紀中～8世紀第3四半期）に、西部地区はⅡ期新相（8世紀第4四半期～9世紀初頭）に位置づける。播磨地域においては須恵器を除いて、在地土器の検討はほとんど行われていない。Ⅰ期新相とⅡ期古相の境の実年代など今後も検討すべき課題は多いが、ひとまず豆腐町遺跡出土資料を上記のように考えた。

(注1) 平成30年11月11日に姫路市埋蔵文化財センターで開催した第136回歴史土器研究会例会での指摘

(注2) 漆紙文書については、古尾谷知浩氏より多くのご教示を得た。

第3節 墨書土器

豆腐町遺跡からは兵庫県調査分を含めて総数 292 点の墨書土器、6 点の刻書土器が出土した。その内容を下記の一覧表に提示する。

表 14 豆腐町遺跡出土墨書・刻書土器一覧

報告番号	次数	調査区	出土地点	種別	器種	部位	釈文
818	5次	3区	SK02	須恵器	杯	底部外面	□
823	5次	3区	SR01	須恵器	杯B蓋	内面	吉
834	5次	3区	SR01	須恵器	杯B	高台内	□
853	6次	2区	SR01	須恵器	杯B	高台内	□家
854	6次	2区	SR01	須恵器	杯B	高台内	井
898	6次	3区	2-SD01	土師器	杯・皿	底部外面	□
899	6次	3区	2-SD01	土師器	杯・皿	底部外面	□
1080	6次	4区	2-SD02	土師器	杯B	高台内	□
1081	6次	4区	2-SD02	土師器	杯B	高台内	(字数不詳)
1101	6次	4区	2-SD02	土師器	杯A	底部外面	十
1109	6次	4区	2-SD02	土師器	杯・皿	底部外面	罇
1110	6次	4区	2-SD02	土師器	杯・皿	底部外面	□
1185	6次	4区	2-SX01	土師器	杯	体部外面	十(記号)
1186	6次	4区	2-SX01	土師器	杯・皿	底部外面	十(記号)
1187	6次	4区	2-SX01	土師器	杯・皿	底部外面	十(記号)
1188	6次	4区	2-SX01	土師器	杯・皿	底部外面	□
1273	8次	1区	SR01	須恵器	杯B	高台内	□
1274	8次	1区	SR01	須恵器	杯・皿	底部外面	□
1326	5次	4区	SE01	須恵器	杯・皿	底部外面	福万
1352	5次	4区	SE02	須恵器	杯A	底部外面	九
1491	5次	5区	SE01	土師器	杯A	底部外面	十/十(記号)
1492	5次	5区	SE01	土師器	杯A	底部外面	十/十(記号)
1493	5次	5区	SE01	土師器	杯A	底部外面	十/十(記号)
1494	5次	5区	SE01	土師器	杯A	底部外面	十/十(記号)
1495	5次	5区	SE01	土師器	杯A	底部外面	十
1496	5次	5区	SE01	土師器	杯A	底部外面	□/□
1497	5次	5区	SE01	土師器	杯A	底部外面	十(記号カ)
1498	5次	5区	SE01	土師器	杯A	底部外面	十/十(記号)
1499	5次	5区	SE01	土師器	皿	底部外面	十/十(記号)
1500	5次	5区	SE01	土師器	皿	底部外面	□(十カ)(記号)
1501	5次	5区	SE01	土師器	杯・皿	外面	□
1526	5次	5区	SE01	須恵器	杯B	高台内	田比
1527	5次	5区	SE01	須恵器	杯B	高台内	□
1529	5次	5区	SE01	須恵器	杯B蓋	外面	志
1672	6次	1区	SE03	土師器	杯・皿	外面	□□(末カ)
1673	6次	1区	SE03	土師器	杯・皿	底部外面	古刀自女
1676	6次	1区	SE03	須恵器	蓋	内面	□
1696	6次	1区	SE04	須恵器	蓋	内面	□
1756	6次	1区	SD04	土師器	杯・皿	底部外面	□(都カ)加
1757	6次	1区	SD04	土師器	杯・皿	底部外面	「記号」
1758	6次	1区	SD04	土師器	杯・皿	底部外面	□(成カ)
1777	6次	1区	SD04	須恵器	杯・皿	底部外面	□
1778	6次	1区	SD04	須恵器	杯B蓋	外面	□(大カ)□
1779	6次	1区	SD04	須恵器	杯・皿	底部外面	□
1848	6次	1区	SD05	須恵器	稜腕	高台内	□
1858	6次	1区	SD06	須恵器	杯・皿	高台内	□□
1877	6次	1区	SD78	須恵器	杯B蓋	外面	古□
1895	6次	1区	SD81	土師器	杯・皿	外面	(字数不詳) 刻書
1896	6次	1区	SD81	須恵器	蓋	摘み	□

報告番号	次数	調査区	出土地点	種別	器種	部位	釈文
1907	6次	1区	SD178	土師器	杯・皿	底部外	□
1972	6次	1区	SK50	須恵器	杯B蓋	外面	(字数不詳)
1973	6次	1区	SK50	土師器	杯・皿	底部外面	□
1982	6次	1区	SK77	須恵器	杯B	高台内	稲持□
2006	6次	1区	SK176	土師器	杯・皿	底部外面	□
2031	6次	1区	SK208	土師器	杯・皿	外面	都加
2062	6次	1区	SK288	土師器	杯・皿	外面	□
2110	6次	1区	SP247	須恵器	杯	口縁部内面	十(記号カ)
2130	6次	1区	SP303	須恵器	杯・皿	底部外面	□(大カ)
2134	6次	1区	SP304	土師器	杯	外面	□
2137	6次	1区	SP313	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2159	6次	1区	整地層(SK177)	土師器	杯・皿	外面	□
2161	6次	1区	整地層(SK177)	須恵器	杯A	底部外面	三宅
2164	6次	1区	整地層(SK177)	須恵器	杯B	高台内	□(全カ)
2212	6次	1区	整地層(SK205)	須恵器	杯B蓋	外面	井
2217	6次	1区	整地層(SK205)	須恵器	杯B	高台内	□(十カ)
2232	6次	1区	炭層2	須恵器	杯A	底部外面	□
2244	6次	1区	炭層3	須恵器	壺	体部外面	□
2257	6次	1区	炭層4	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2265	6次	1区	炭層5	土師器	皿A	底部外面	□(記号カ)
2275	6次	1区	整地層	土師器	皿A	底部外面	□(十カ)(記号)
2276	6次	1区	整地層	土師器	杯・皿	底部外面	種万呂 刻書
2277	6次	1区	整地層	土師器	皿A	底部外面	□
2278	6次	1区	整地層	土師器	杯・皿	底部外面	□
2279	6次	1区	整地層	土師器	杯・皿	底部外面	□
2280	6次	1区	整地層	土師器	杯・皿	内面	□
2281	6次	1区	整地層	土師器	杯・皿	底部外面	甲
2282	6次	1区	整地層	土師器	杯・皿	外面	□
2283	6次	1区	整地層	土師器	杯・皿	底部外面	□□
2284	6次	1区	包含層	土師器	甕	体部外面	(人面墨書)
2285	6次	1区	整地層	須恵器	杯B蓋	外面	麻口(呂カ)
2286	6次	1区	整地層	須恵器	杯B蓋	外面	大
2287	6次	1区	整地層	須恵器	杯B蓋	外面	大
2288	6次	1区	包含層	須恵器	杯B蓋	外面	□
2289	6次	1区	整地層	須恵器	杯B蓋	外面	□
2290	6次	1区	整地層	須恵器	杯B蓋	外面	□
2291	6次	1区	整地層	須恵器	杯B蓋	摘み	柏
2292	6次	1区	整地層	須恵器	杯B蓋	外面	古刀
2293	6次	1区	整地層	須恵器	杯B蓋	外面	三
2294	6次	1区	整地層	須恵器	杯B蓋	外面	□
2295	6次	1区	整地層	須恵器	稜腕蓋	摘み内	□(宅カ)
2296	6次	1区	整地層	須恵器	皿A	底部外面	大
2297	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	体部外面	(字数不詳)
2298	6次	1区	整地層	須恵器	杯B	体部外面	□
2299	6次	1区	整地層	須恵器	杯B	体部外面	□
2300	6次	1区	整地層	須恵器	杯B	高台内	□宅
2301	6次	1区	整地層	須恵器	杯B	高台内	古刀自
2302	6次	1区	包含層	須恵器	杯B	高台内	大人
2303	6次	1区	包含層	須恵器	杯B	高台内	(字数不詳)

第V章 出土遺物のまとめ

報告番号	次数	調査区	出土地点	種別	器種	部位	釈文
2304	6次	1区	整地層	須恵器	杯A	底部外面	□□
2305	6次	1区	機械掘削	須恵器	杯A	体部外面	十
2306	6次	1区	整地層	須恵器	杯A	底部外面	□
2307	6次	1区	整地層	須恵器	杯A	体部外面	林
2308	6次	1区	整地層	須恵器	杯A	外面	□(記号)
2309	6次	1区	整地層	須恵器	杯	体部外面	□
2310	6次	1区	整地層	須恵器	杯	体部外面	□
2311	6次	1区	整地層	須恵器	杯A	底部外面	古刀目
2312	6次	1区	整地層	須恵器	杯A	底部外面	三□
2313	6次	1区	包含層	須恵器	杯	底部外面	□雲
2314	6次	1区	整地層	須恵器	杯	底部外面	□
2315	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2316	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2317	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	□(全カ)
2318	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	家
2319	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2320	6次	1区	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	葛野
2321	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2322	6次	1区	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	甲
2323	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	□(記号カ)
2324	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	□(全カ)
2325	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2326	6次	1区	機械掘削	須恵器	杯・皿	底部外面	封
2327	6次	1区	整地層	須恵器	杯・皿	底部外面	倭
2328	6次	1区	表採	須恵器	杯・皿	外面	□
2473	7次	1区	SD05	土師器	杯A	底部外面	万□□
2491	7次	1区	SD05	須恵器	杯・皿	底部外面	□□(四合カ)
2541	7次	1区	SK11	須恵器	皿A	底部外面	□
2545	7次	1区	SK11	須恵器	杯・皿	外面	□(宅カ)
2549	7次	1区	SK11	須恵器	杯B蓋	外面	十(記号)
2559	7次	1区	包含層	須恵器	杯A	底部外面	□□
2560	7次	1区	包含層	須恵器	杯A	体部外面	□□(来カ)
2561	7次	1区	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	十一
2562	7次	1区	包含層	須恵器	杯B蓋	外面	十/十(記号)
2563	7次	1区	包含層	須恵器	杯B蓋	底部外面	= (記号カ)
2564	7次	1区	包含層	須恵器	杯B	外面	IT
2609	7次	2区	SX03	土師器	杯・皿	底部外面	□
2610	7次	2区	SX03	土師器	杯・皿	底部外面	輪
2618	7次	2区	SX03	須恵器	皿A	底部外面	倭
2619	7次	2区	SX03	須恵器	皿A	底部外面	国
2620	7次	2区	SX03	須恵器	稜腕	高台内	輪依
2621	7次	2区	SX03	須恵器	高杯	脚部内面	□
2622	7次	2区	SX03	須恵器	杯・皿	高台内	□
2623	7次	2区	SX03	須恵器	杯・皿	底部外面	田
2666	7次	2区	包含層	須恵器	皿	底部外面	□(比カ)
2667	7次	2区	包含層	土師器	杯・皿	底部外面	□
2668	7次	2区	包含層	須恵器	杯A	体部外面	万呂
2669	7次	2区	包含層	須恵器	杯B蓋	外面	国
2670	7次	2区	包含層	須恵器	杯B	高台内	□
2671	7次	2区	包含層	須恵器	杯B	高台内	国
2672	7次	2区	包含層	須恵器	杯B	高台内	□
2673	7次	2区	包含層	須恵器	杯A	底部外面	□
2674	7次	2区	包含層	須恵器	杯A	底部外面	大
2675	7次	2区	包含層	須恵器	杯	口縁外面	□
2676	7次	2区	包含層	須恵器	杯	外面	□
2677	7次	2区	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2678	7次	2区	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	□

報告番号	次数	調査区	出土地点	種別	器種	部位	釈文
2679	7次	2区	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	国
2680	7次	2区	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	万
2681	7次	2区	包含層	須恵器	杯B蓋	内面	□
2682	7次	2区	包含層	須恵器	杯B蓋	外面	□
2698	7次	3区	SP60	須恵器	杯B	高台内	IT
2700	7次	3区	SP37	須恵器	杯B蓋	内面	□(HTカ)
2704	7次	3区	SD04	須恵器	襷	高台内	三合 刻書
2705	7次	3区	SD05	土師器	杯	体部外面	□
2706	7次	3区	SD05	須恵器	杯・皿	底部外面	□□
2707	7次	3区	SD05	須恵器	杯・皿	底部外面	□□
2708	7次	3区	SD05	須恵器	甕	胴部内面	□
2713	7次	3区	SD02	土師器	皿A	底部外面	葛野
2714	7次	3区	SD02	土師器	皿A	底部外面	□□
2715	7次	3区	SD02	土師器	杯・皿	底部外面	HT
2716	7次	3区	SD02	土師器	杯・皿	底部外面	□□(家カ)
2717	7次	3区	SD02	土師器	杯・皿	外面	IT
2718	7次	3区	SD02	土師器	杯・皿	底部外面	□□
2719	7次	3区	SD02	土師器	杯・皿	外面	□
2720	7次	3区	SD02	土師器	杯・皿	外面	□(Tカ)
2721	7次	3区	SD02	須恵器	壺蓋	外面	HT
2722	7次	3区	SD02	須恵器	杯B蓋	内面	T□(Hカ)
2723	7次	3区	SD02	須恵器	杯B蓋	外面	新□
2724	7次	3区	SD02	須恵器	杯B蓋	外面	山本
2725	7次	3区	SD02	須恵器	杯B蓋	外面	T□
2726	7次	3区	SD02	須恵器	皿A	底部外面	寺
2727	7次	3区	SD02	須恵器	皿A	底部外面	IT
2728	7次	3区	SD02	須恵器	甕	胴部外面	□
2729	7次	3区	SD02	須恵器	壺	高台内	□
2730	7次	3区	SD02	須恵器	杯A	底部外面	太家
2731	7次	3区	SD02	須恵器	杯A	底部外面	太家
2732	7次	3区	SD02	須恵器	杯A	底部外面	太□
2733	7次	3区	SD02	須恵器	杯A	底部外面	□
2734	7次	3区	SD02	須恵器	杯A	底部外面	□(安カ)
2735	7次	3区	SD02	須恵器	杯A	体部外面	大(他習書多数)
2736	7次	3区	SD02	須恵器	杯	体部外面	□
2737	7次	3区	SD02	須恵器	杯B	高台内	IT
2738	7次	3区	SD02	須恵器	杯B	底部内面	HT
2739	7次	3区	SD02	須恵器	杯B	底部内面	HT
2740	7次	3区	SD02	須恵器	杯B	高台内	HT
2741	7次	3区	SD02	須恵器	杯B	体部外面	□
2742	7次	3区	SD02	須恵器	杯B	高台内	大□
2743	7次	3区	SD02	須恵器	杯B	高台内	□本/山本
2744	7次	3区	SD02	須恵器	杯B	高台内	□(記号カ)
2745	7次	3区	SD02	須恵器	杯B	底部外面	IT
2746	7次	3区	SD02	須恵器	杯・皿	底部外面	□刀□
2747	7次	3区	SD02	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2748	7次	3区	SD02	須恵器	杯・皿	底部外面	□(HTカ)
2749	7次	3区	SD02	須恵器	杯・皿	外面	二□
2750	7次	3区	SD02	須恵器	杯・皿	内面	□(HTカ)
2916	7次	3区	包含層	須恵器	杯B蓋	外面	□
2917	7次	3区	包含層	須恵器	蓋	内面	□
2918	7次	3区	包含層	須恵器	蓋	外面	□
2919	7次	3区	包含層	須恵器	蓋	内面	□
2920	7次	3区	包含層	須恵器	杯B蓋	内面	□
2921	7次	3区	包含層	須恵器	杯B蓋	外面	□
2922	7次	3区	包含層	須恵器	杯B	高台内	IT
2923	4次	確認調査	包含層	須恵器	杯B	高台内	□

第3節 墨書土器

報告番号	次数	調査区	出土地点	種別	器種	部位	釈文
2924	7次	3区	包含層	須恵器	杯B	体部外面	中
2925	7次	3区	包含層	須恵器	杯B	高台内	□/□(記号?)
2926	7次	3区	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2927	7次	3区	包含層	須恵器	杯・皿	外面	□(HT?)
2928	7次	3区	包含層	須恵器	杯・皿	外面	□
2929	7次	3区	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	□
2930	7次	3区	包含層	須恵器	杯	底部外面	記号
2931	4次	確認調査	包含層	須恵器	杯・皿	底部外面	(字数不詳)
3002	8次	3区	SD04	須恵器	稜腕	高台内	○十
10	I次	A区	SR01	須恵器	杯B蓋	外面	□
12	I次	A区	SR01	須恵器	杯B蓋	外面	上
17	I次	A区	SR01	須恵器	杯B蓋	外面	□宅□
29	I次	A区	SR01	須恵器	蓋か	外面	□
30	I次	A区	SR01	須恵器	蓋か	外面	□
31	I次	A区	SR01	須恵器	杯B	底部外面	
32	I次	A区	SR01	須恵器	杯B	底部外面	大山
33	I次	A区	SR01	須恵器	杯B	底部外面	尾
34	I次	A区	SR01	須恵器	杯B	底部外面	□□ □
35	I次	A区	SR01	須恵器	杯B	底部外面	大山
36	I次	A区	SR01	須恵器	杯B	底部外面	峰
37	I次	A区	SR01	須恵器	杯B	底部外面	大山□
38	I次	A区	SR01	須恵器	杯B	底部外面	□□
39	I次	A区	SR01	須恵器	杯B	底部外面	峰
78	I次	A区	SR01	須恵器	杯A	底部外面	□□
79	I次	A区	SR01	須恵器	杯A	底部外面	□□
80	I次	A区	SR01	須恵器	杯A	底部外面	□
81	I次	A区	SR01	須恵器	杯A	体部外面	
82	I次	A区	SR01	須恵器	杯A	底部外面	□(志カ)
89	I次	A区	SR01	須恵器	杯A	底部外面	
100	I次	A区	SR01	須恵器	皿A	底部外面	□
101	I次	A区	SR01	須恵器	皿A	底部外面	□
103	I次	A区	SR01	須恵器	皿A	底部外面	郡
109	I次	A区	SR01	須恵器	杯A	底部外面	田中寺
110	I次	A区	SR01	須恵器	杯か皿	底部外面	□(栗カ)女
111	I次	A区	SR01	須恵器	杯か皿	底部外面	□□
112	I次	A区	SR01	須恵器	杯か皿	外面	□
126	I次	A区	SR01	須恵器	稜腕	底部外面	□□
134	I次	A区	SR01	須恵器	皿B	底部外面	□
163	I次	A区	SR01	須恵器	壺	底部外面	寺
199	I次	A区	SR01	土師器	杯A	底部外面	[]万
366	I次	A区	SE01	土師器	杯	底部外面	井
370	I次	A区	SE01	土師器	杯	外面	○
371	I次	A区	SE01	土師器	杯	外面	大八
373	I次	A区	SE02	土師器	杯B	底部外面	
379	I次	A区	SE02	須恵器	杯身	底部外面	□□(大福)
383	I次	A区	SE02	須恵器	杯	底部外面	□□(家カ)
522	I次	C区	SD02	須恵器	杯	底部外面	吉
638	I次	E区	SK05	須恵器	杯B	底部外面	□(郷カ)
214	I次	A区	SR01	土師器	皿A	底部外面	大山□ 刻書
393	I次	A区	SK01(SR01)	須恵器	甕B	口縁外面	□ 刻書
37	II次	II-1区	SD05	須恵器	杯B蓋	外面	□
58	II次	II-1区	SE01	土師器	杯A	底部外面	十
63	II次	II-1区	SE01	土師器	杯A	底部外面	十
64	II次	II-1区	SE01	土師器	杯か皿	底部外面	□ 刻書
103	II次	II-1区	北側石敷き	土師器	皿	底部外面	大山
107	II次	II-1区	北側石敷き	須恵器	杯	底部外面	大山
108	II次	II-1区	北側石敷き	須恵器	杯B	底部外面	柏

報告番号	次数	調査区	出土地点	種別	器種	部位	釈文
114	II次	II-1区	北側石敷き	土師器	杯か皿	底部外面	大山カ
115	II次	II-1区	北側石敷き	土師器	杯か皿	底部外面	佐太
127	II次	II-1区	北側石敷き	須恵器	杯B蓋	外面	□
135	II次	II-1区	北側石敷き	須恵器	杯Aか	底部外面	□
158	II次	II-1区	南側石敷き	須恵器	杯A	底部外面	□
160	II次	II-1区	南側石敷き	須恵器	稜腕	底部外面	志
209	II次	II-1区	流路	土師器	杯か皿	底部外面	□
228	II次	II-1区	流路	須恵器	杯B蓋	外面	大山
237	II次	II-1区	流路	須恵器	杯Aか	底部外面	佐二
243	II次	II-1区	流路	須恵器	皿	底部外面	大山
290	II次	II-1区	包含層	土師器	杯か皿	底部外面	□
287	II次	II-1区	包含層	土師器	杯	底部外面	□佐カ
384	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯B蓋	摘み外面	十
412	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯A	底部外面	□
414	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯か皿	底部外面	佐二
421	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯A	底部外面	□
422	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯	底部外面	□
423	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯	底部外面	□
424	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯	底部外面	□
425	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯	底部外面	□
426	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯	底部外面	□
427	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯	底部外面	墨痕
440	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯B	底部外面	十
441	II次	II-1区	包含層	須恵器	杯B	底部外面	□
13	III次		SE01	須恵器	杯か皿	底部外面	大□
34	III次		SE03	須恵器	杯A	底部外面	郡カ
90	III次		SE08	須恵器	杯B	底部外面	大
142	III次		SE14	土師器	杯Aか	底部外面	井
198	III次		粘土探掘跡	須恵器	杯B	底部外面	□

第V章 出土遺物のまとめ

墨書・刻書土器は、西部地区で20点（須恵器9点、土師器11点）、東部地区で278点（須恵器214点、土師器64点）出土している。西部地区は種別を問わず供膳具にのみ墨書が認められる。東部地区は壺・壺蓋・甕・榊9点を除き、他は全て供膳具である。墨書位置は、供膳具では、西部地区は内面1点、外面19点、東部地区は内面14点、外面255点、貯蔵具は内面1点、外面8点である。両地区とも95%近くが外面である。部位が特定できるものの比率を確認すれば、蓋を除く供膳具では、底部約90%、体部約7%、内面約2%、口縁約1%、貯蔵具では底部37.5%、体部50%、口縁部12.5%となる。蓋は外面約71%、内面約20%、摘み約9%である。文字内容を整理すると以下の表のとおりである。

表15 豆腐町遺跡出土墨書・刻書土器総括表

墨書銘

施設名	家、太家、□家、三宅、□宅、□宅□、田中寺、寺
地名・人名	国、□〔郷カ〕、郡、□〔栗カ〕女、麻□〔呂カ〕、万呂、種万呂、古□、古刀、古刀自、古刀自女、□刀□、葛野、山本、大山
方角・数字	二□、三□、三合、□□〔四合カ〕、三、九、十、十一、〔 〕万、万
吉祥句・習書	上、吉、甲、大、福万、□□〔大福〕、□本/山本、□□〔家家カ〕
その他	鯛、稲、稲依、稲持□、柏、倭、志、峰、尾、田、田比、井、井、中、林、封、都加、大八、大人、□雲、新□ 万□□、□〔安カ〕、□〔全カ〕、□〔成カ〕、□〔比カ〕、□〔未カ〕、□〔来カ〕、□〔志カ〕、
記号・他	十(記号)、十/十、HT、IT、○、=、人面墨書

上記表に基づき、東部地区について出土位置の概要を示したのが図156である。図からは、墨書内容ごとにまとまりがあることが確認できる。例えば「HT」「IT」は7次3区SD02以西に、「国」は7次2区SX03付近に、「大山」「佐」「佐二」は豆腐町I次とII次に、「古刀自」「大」は6次1区SR01付近に認められる。このことから墨書銘の出土状況には偏りがあり、出土場所での活動と墨書内容は基本的に結びつけて考えることができる。出土数が多く、広く分布するのが「HT」「IT」と「十」である。

このうち「HT」もしくは「IT」については、記号とするのが妥当であろうが、筆順に基づき分解すれば、図155に示すように「H」と「I」は同じもので「工」の可能性。「T」は「丁」の可能性も想起しうる。想像の域を出ないが、手工業生産に従事する掻丁や工匠らが自らを示すものとして、模写したとすれば、右の記号のような状態にならないだろうか。

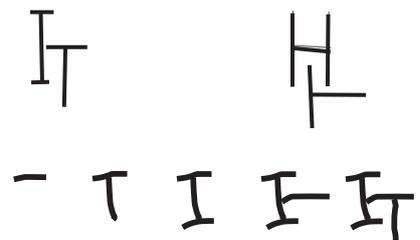


図155 墨書時「HT」「IT」筆順

次に「十」は、本遺跡では5次5区SE01から8点出土するとともに、7次1区や整地層中からも出土するなど、面的に広がっている。平城京右京八条一坊十三・十四坪の調査においても15点出土している。このうち、11点が出土したSK2001からは、漆附着土器、漆塊、漆紙などが大量に出土し、近接して漆工房が存在したことが想定されている。その出土状況の偏りから「十」は何らかの施設を識別する記号と考えられ、出土遺物との関連から漆工房への所属を示す墨書銘の可能性が指摘されている（奈良国立文化財研究所1989）。本遺跡でも漆附着土器の分布と「十」の広がりとは概ね整合し、この見解を追証する成果ともいえる。また、SR01上部から出土した墨書土器については報告段階でも述べたように、整地層に含まれていることから、墨書された本来の場所でない可能性が高い。しかし、SR01上に位置する6次1区から豆腐町I次調査区にかけて、墨書には一定のまとまりが確認できる。このことから、元の位置での関係は維持されたまま土砂が移動したことを指摘できる。

第4節 手工業関連遺物

豆腐町遺跡からは、漆付着土器が確認できるもので1102点出土した。これ以外にも漆が剥離したものも多数あり、実数は更に多かったと思われる。実測図として提示したものを含めて、西部地区から95点、東部地区から1007点を確認している。

漆付着土器の内訳は土師器505点、須恵器597点で、比率は45%と55%となり須恵器が多い。須恵器に比べて軟質である土師器の性質を勘案すると、両者の差は本来大きなものではないと思われる。次に用途別に見た場合、皿・杯936点、壺128点、甕38点である。全体に占める割合は、土師器皿・杯が42.8%、須恵器皿・杯が42.1%、須恵器壺が11.6%、須恵器甕が0.5%、土師器甕が3%である。皿・杯は土師器・須恵器ともパレットとしての性格が考えられるが、土師器の方が多い。須恵器壺と甕は漆の貯蔵容器であろう。土師器甕は「くろめる」作業に使用された可能性がある。

表16 豆腐町遺跡出土漆付着土器数量表

総数	1102	西部地区	116	東部地区	986
種別					
土師器	505	土師器食膳具	472	土師器食膳具内面	441
須恵器	597			土師器食膳具外面	10
				土師器食膳具内外面	21
器種別				土師器甕内面	31
杯・皿	936	土師器甕	33	土師器甕外面	1
壺	128			土師器甕内外面	1
甕	38			須恵器食膳具内面	410
付着部位		須恵器食膳具	464	須恵器食膳具外面	22
内面	998			須恵器食膳具内外面	32
外面	41			須恵器壺内面	112
内外面	63	須恵器壺	128	須恵器壺外面	7
				須恵器壺内外面	9
		須恵器甕	5	須恵器甕内面	4
				須恵器甕外面	1

次にその付着部位に着目すると、内面のみに付着するものが998点で、外面のみに付着するものが41点、内外面とも付着するものが63点ある。なお、パレットとしての使用が考えられ、外面に垂れたように付着するものについては、内面のみの付着に含めている。純粋に外面に付着するものが9.4%を占めている。外面に付着するものについては、須恵器壺2576のように器表の塗装として使用されたものと考えられる。外面塗装された製品は、遺跡内で使用しただけのものか、遺跡内で製品として仕上げられたものかどうかは判断できないが、明らかに一定数存在することが判明する。

内面に漆が付着した供膳具については、漆塗り用のパレットとして用いられたものとする。皿、杯、稜椀、高杯、蓋等様々なものに付着している。カウントした土器には細片が多く、器種認定が不明確なものが多いため、器種を細別して内訳を提示することは難しいが、報告書に掲載した遺物数からもわかるように土師器杯A、須恵器杯A、杯Bが多く、高杯が少ない印象を受ける程度で、土師器杯、須恵器杯B蓋、稜椀も一定量存在する。内面に塗られた漆は、単層で膜状になったものと塗り重ねたものに大きく分けることができる。これに加えて顕微鏡観察では、砂粒を巻き込むものと巻き込まないもののが存在することが確認できた（附章参照）。使用時もしくは廃棄時において様々な様態があったことが判明した。付着する漆には茶色のものと黒色のものがあり、生漆と黒漆に対応すると思われるが、赤外線観察等を行わなければ確証は得られないため、全てではないが、可能な範囲で観察表にその色調を記載した。

包含層と整地層から出土した漆付着土器をグリッドで示したものが、図157である。これによれば、SR01上部の整地層に最も集中し、整地以前の段階でも漆工が行われていたことがわかる。整地層からの出土を除けば、7次1区において面的な広がりを確認することができる。その他、主要遺構から出土した漆付着土器の点数を示したが、7次3区SD02の64点を筆頭に、8次3区SX01で20点、SD05で35点とSD02以西にまとまって分布する。SD02以西の建物で漆工が行われた可能性を指摘できる。また、SD02から出土した、表面に漆が付着した円礫2913も漆を多用する環境であったことを示している。東部地区と西部地区では、組成比率は大きく変わらないことから、遺跡内で行われる漆工の工程は共通する可能性が高い。西部地区における出土量が少ないことから、生産量は減少したものと思われる。



图157 豆腐町遺跡東部地区手工業関連遺物出土分布图

第V章 出土遺物のまとめ

その他、鞆羽口、砥石、紡錘車が出土している。図 157 に東部地区におけるこれらの出土位置を示している。

鞆羽口は西部地区から 1 点、東部地区から 13 点出土した。全て細片で全形が復元できるものはないが、残存状況から判断して、湾曲羽口ではなく、ラップ状に開く直線羽口であろう。出土部位は先端に近い部分から筒部にかけてのものである。いずれも被熱し、器表が変色あるいはガラス質化した個体もある。通風孔の直径は 7 次 2 区 SX03 出土の 2648 で 3.8cm 前後に復元できる。道路南側の 6 次 1 区 SB06 から SE03 にかけての範囲からまとまって出土している。道路北側の SK208 の周囲からも出土している。7 次 3 区 SD02 以西からは出土しておらず、鞆を使用した金属加工は SD02 以東で行われたと考えられる。炭化物を伴う土坑等で埋土の篩掛けを行ったが、金属加工に伴う鉄滓や金属片等は確認できなかった。

砥石は 13 点出土した。西部地区で 1 点、東部地区で 12 点出土した。大型のもの 1623・1663・2510・2584・3008 と小型のものに分けることができる。大型のものは砂岩製の荒砥が多く、小型のものは中砥もしくは仕上げ砥に分類できる。2712 は中央に穿孔があり、携帯用の砥石であろうか。鞆羽口との関連がうかがえる 6 次 1 区 SK208 周辺と SE02 周辺から出土している。鞆羽口の出土が認められない SD02 以西からも出土している。資料数が少なく確証は得られないが、6 次 1 区 SB04 から SB06 にかけてと、SK208 周辺で鞆と砥石を使用した金属加工を行っていたと推測できる。また、漆工には研ぎ工程があることから、羽口の出土が確認できない SD02 以東の砥石については、研ぎに使用された可能性も考えられる。

紡錘車は 9 点出土した。西部地区で 2 点、東部地区で 7 点である。なお、ここでは中央に孔を有し、円形に製作もしくは加工した土製品を紡錘車と認識している。金属製のものはなく、全て土製である。890 と 2230 は当初から紡錘車として製作された可能性が高く、他は転用品である。写真図版 137 に示すようにほぼ同規格で、穿孔のない円盤状土製品 2529・2697 も出土しており、こうしたものを利用して紡錘車を作成したと推測する。紡錘車は道路側溝からの出土が目立つ。それ以外では道路以南の SE02 付近で 1 点、7 次 3 区 SD02 付近から 1 点出土している。井戸等から出土した木材にも紡織に関連する遺物は含まれておらず、本遺跡においては紡織関連は本業ではなく、糸紡ぎ程度が行われたものと推測する。紡錘車は他の遺物と比べて道路側溝からの出土が目立つ。現在でもアンデス地方では、品物の販売等の片手間に路傍で糸紡ぎをしている例もあることから、路傍において女性が片手間に糸紡ぎをしていたのであろうか。出土状況から右の写真のような光景を想像する。



図 158 アンデスにおける糸繰り

漆附着土器を除けば、生業に関する物証は少なく、漆工房に付属して小規模な活動が行われていたことを示す。漆が何に使用されたのかは不明であるが、先に見た平城京右京八条一坊十三・十四坊では、鍔帯の製作が分業して行われていたと推測されている。本遺跡でも 1 点だけであるが、鉄製鍔帯が出土しており、あるいはこうした製品を作っていた可能性もある。製塩土器の項で述べたように、皮鞆しには大量の塩を必要とすることから、製塩土器と漆附着土器を介させると漆工と皮革工、これに少数の鍛冶工の存在を想像することができる。ただ、皮革工については牛馬の解体に伴う動物遺存体の存在は明らかでなく、製塩土器の存在から強引に導いた想定に過ぎない。金属加工については、鉄滓や金属片、その他生産工具等は全く出土しておらず、当遺跡における生産活動の実態については、想像の域を出ない状況である。

第VI章 総括

第1節 豆腐町遺跡の動態

調査によって判明した、遺構の変遷をまとめると図159のようになる。

豆腐町遺跡周辺の地形形成は縄文時代後期頃であり、地形形成に前後する西部地区SR01（8次1区～豆腐町I次C区）と東部地区SR01（6次1区～豆腐町I次A区）の2条の流路が確認できる。これらの流路は、市川が段丘化し流路が固定される以前の支流の一部と見られる。西部地区SR01については、弥生時代中期初頭には既に凹地となっていたようで、底面に下層SD01～SD03の溝が掘削され、周辺における開発が進んだとみられる。弥生時代の遺構は飾磨街道沿いの地山面で検出したが、ピットを主体とし住居等の明確な遺構は確認できていない。削平を受けた可能性も高いが、出土遺物量も多くはなく、大規模な集落が存在した可能性は低い。東部地区ではSR01埋土中に弥生時代～古墳時代の遺物が含まれる。その後、須恵器等の出土はわずかに認められるが、古墳時代から奈良時代前半にかけて近辺に集落等が存在した痕跡は認められない。

こうした様相が一気に変化するのが、奈良時代中頃である。正方位を主軸とする道路と区画溝が敷設された後、道路の両側に建物23棟以上と井戸22基が計画的に配置された街区が出現する。漆附着土器をはじめ、手工業生産に関連する遺物が出土するとともに、供膳具、煮炊具、移動式竈等が大量に出土する。墨書土器に記された人名からも当地での活動に男性・女性とも多くの人が従事したとみられる。立地条件が決して良好でない前途したSR01の上面も開発されることから、これらの開発は居住者らが自発的に行ったものではなく、何らかの計画や意思に基づいて為されたものであることがわかる。整地にあたっては、炭化物層を挟むという、豆腐町遺跡で特徴的に見られる土坑の在り方と共通している。建物跡は切り合い関係から少なくとも3時期の変遷があり、整地層中から遺物が出土することから整地前と整地後の大きく2段階の開発過程が窺える。いっぽう、これらの変遷は、土器の様相では一様相におさまる時間内で行われたもので、奈良時代中頃から後半にかけての短期間におさまっている。豆腐町遺跡東部地区は、兵庫県が報告しているように奈良時代前半から後半にかけて存続していたのではない。また、奈良時代の流路が存在し、その上部から大量の遺物が出土しているわけでもない。実態は、道路を中心として、南北100m以上、東西250m以上の範囲に大量の資材と労力が投入され、計画的に手工業生産が行われた空間であった。このように遺跡での活動は一気にピークをむかえるが、道路と区画溝の廃絶状況から判断して、その終焉も極めて短期間に行われたことがわかる。その後、東部地区では目立った活動はなく、中世以降耕作地へと変貌していく。

西部地区は、東部地区の廃絶に連動するように、土器様相では一段階後となる奈良時代後半から平安時代初頭にかけて活動が開始される。遺構の主軸は飾磨郡の条里方向に沿い、区画溝2条、建物跡4棟、井戸4基、土坑等が確認できる。出土遺物量は東部地区に及ばないものの、漆附着土器や墨書土器をはじめ共通の様相を示している。このことから、西部地区は東部地区の機能を縮小したような印象を受ける。時期的にも矛盾しないことから東部地区から西部地区への移転を想定することができる。西部地区の遺構の広がりには判然としないが、調査範囲に限れば、SR01を東限とし東西約100m、南北約100mである。遺構の切り合いもないことから、西部地区も土器編年で一様相程度の存続時期と推測できる。SR01の遺物出土状況から、調査地の北側にも同様の遺構が広がっていた可能性を指摘できる。

西部地区ではその後、平安時代後半以降に再び活動が認められる。建物跡4棟、池、土坑等が確認できる。遺構が確認できる範囲は、後世の飾磨街道沿いに限られ、南北約110m、東西約40mである。一見、飾磨街道に沿って遺構が展開するよう見えるが、これは当該部分が凹地にあたることから遺構の残存状

第Ⅵ章 総括

況が良いためと考える。建物跡の規模も3間×4間を最大とし、姫路平野における当該時期の集落遺跡と大きな差はない。

江戸時代になると豆腐町遺跡は、姫路城外堀の外側にあたり、飾磨（口）門からつながる飾磨街道に沿って町屋が形成された。江戸時代初頭の遺物も少なからず出土しており、城下町建設の初期段階に既に「豆腐町」で活動が行われていたことが判明する。16世紀末に位置づけられる遺物も出土していることから、池田輝政による城下町建設以前に既に姫路と飾磨を結ぶ道が存在していた可能性も指摘しうる。町屋に伴う建物は確認できなかったが、建物の裏手に存在する井戸跡を16基確認した。一部は耕作に伴う野井戸の可能性もあるが、大半は飾磨街道から7～10mの位置で検出した。姫路城城下町跡における町屋遺構の検出パターンは、道路に面して建物（ミセ）、その後に井戸等の水廻り空間（水場）、その背後に蔵や廃棄土坑、菜園、庭等（オク）がある。検出した遺構配置も基本的にこのパターンに準じて理解できる。

東部地区は、中世以降一貫して耕作地となっていた。耕作地の下では広範囲に土取りが行われている。土取り痕は耕作地の区画を単位として行われたと見られ、主軸はN 22°～25° Eで、概ね飾磨郡条里に沿っている。土取り痕から出土する遺物は江戸時代初頭に位置づけられるものを含んでいる。このことから、江戸時代を通じて土取りが行われていた可能性もある。土取りは、小規模な土坑状に連続して行うものもあれば、広い範囲を不整形に掘り下げるもの、広い範囲を方形に区画しながら面的に掘削するものなど、多様な在り方である。採取対象となる土砂は、東部地区の微高地に該当する範囲で遺構検出面とした地山である。基本的に黄褐色の細砂から中砂であり、製陶に用いられる粘土等ではない。採取された土砂が何に使用されたのかを含め、今後の課題といえよう。

明治時代になると遺跡の南東部に生野銀山と飾磨港を結ぶ生野鉦山寮馬車道が築造される。明治21年の山陽鉄道が開通するのに伴って、遺跡一帯は鉄道敷地へと変貌を遂げた。西部地区では、兵庫県の調査によって、姫路駅の初代転車台と二代目転車台が調査されている。4次調査では鉄道に関連する煉瓦構造物を確認している。6次2区と8次1区では、調査区端に沿って柵跡が見つかった。東部地区は、全域が軌道敷きとなり、姫路駅のホームが建設された。鉄道に伴う諸施設は時代ごとに変遷しているが、ホームや線路は盛土を行った後、施工されたため、地下の遺構には大きな影響を与えていない。

第2節 豆腐町遺跡の位置づけ

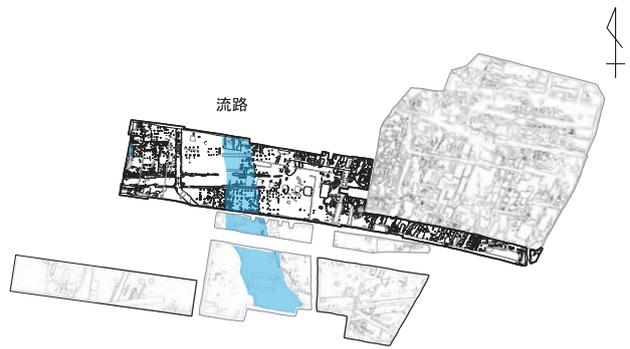
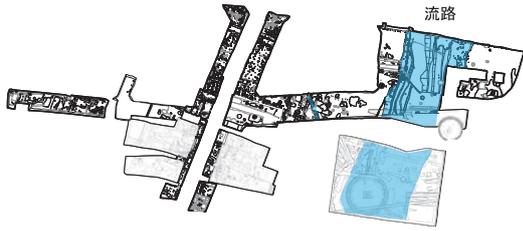
奈良時代の豆腐町遺跡については、これまでに兵庫県教育委員会が刊行した報告書に位置づけが記載されている。「豆腐町Ⅰ次」では、漆附着土器や墨書土器、大量の遺物に加えて「郡」の墨書土器の存在を根拠に「郡衙もしくは郡衙に準ずる官衙遺跡に関連する遺跡」である可能性を指摘している。「豆腐町Ⅱ次」では、「国府関連遺構の可能性が高い遺跡もしくは飾磨郡衙の一部」としている。「豆腐町Ⅲ次」では「国府関連の工房の一部」と考えられている。本書で報告した調査はこれらの調査と前後して実施したもので、これまでの見解を踏まえつつ、遺跡の位置づけを行い総括とする。

奈良時代の豆腐町遺跡は、これまでに述べてきたように、東部地区では正方位をとる道路と区画溝に沿って建物と井戸が配置される。その範囲は南北100m以上、東西250m以上である。存続期間は奈良時代中頃から後半（8世紀第3四半期）の短期間である。遺跡からは、供膳具や煮炊具が大量に出土するとともに手工業生産に関わる遺物も出土しており、当遺跡が手工業生産に関わるものであることは疑いない。漆附着土器や漆紙文書の出土から漆工が行われていたことは確実であるが、その他に鞆羽口や砥石、紡錘車の出土から小規模な金属加工等の手工業が行われていた可能性もある。これらの遺物について、現代の漆工の用いる生産道具を参照すれば（松田2001）、鞆羽口や砥石は、漆工に用いる刀子の加工や研出しに使用された可能性もあり、漆工の一部と考えることもできる。また、整地層や土坑等から出土した炭化材は、マツやアカガシ、シイ、シキミ、トネリコ、ヒノキである（附章参照）。ヒノキやトネ

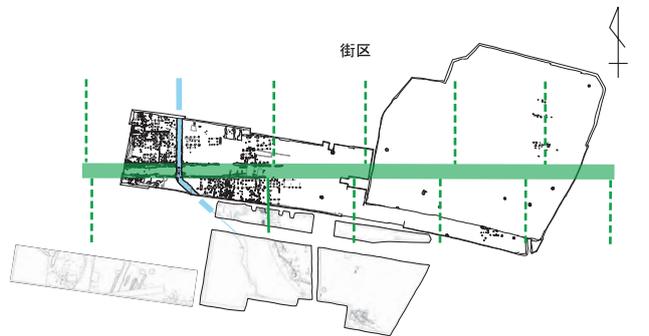
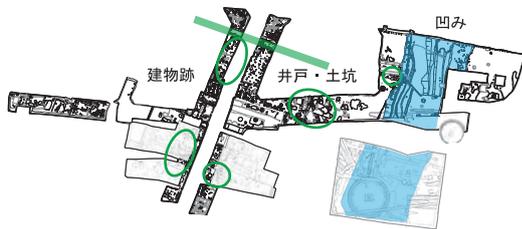
西部地区

東部地区

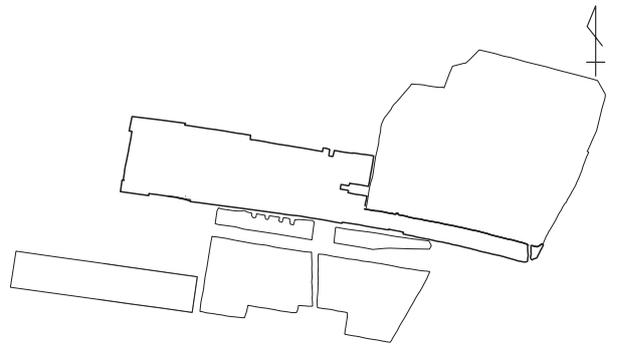
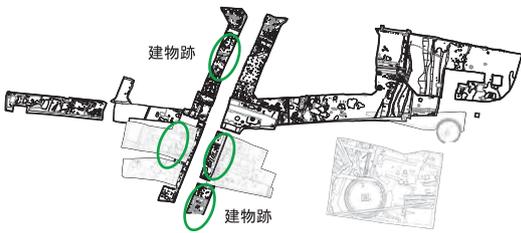
弥生～古墳時代



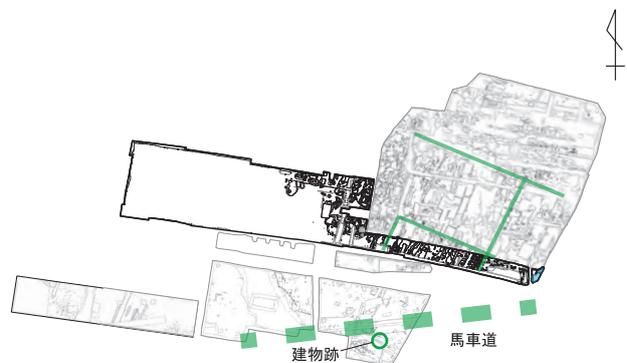
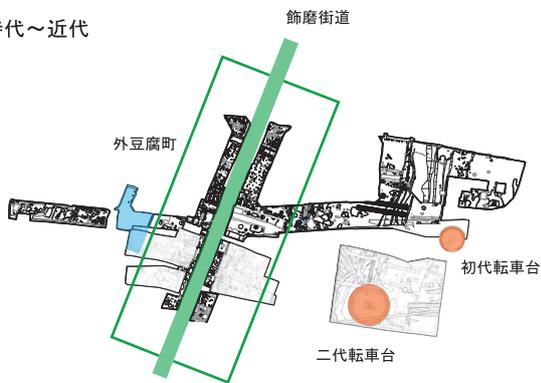
奈良中～平安時代初頭



鎌倉～室町時代



江戸時代～近代



0 (1:4,000) 100m

図159 豆腐町遺跡遺構変遷概要図

リコを含むことから単に煮炊きに使用した燃料材の可能性もあるが、漆工に用いられた荒炭や（和）炭であった可能性もある。荒炭は主にカシ・クヌギ材を用いた堅い炭、和炭はマツ材を焼いたものである（八木 2009）。また、黒漆の着色用とされる掃炭は、一般的には松根や樹脂を燃焼した松煙とされる（平川 1989）。炭化材に含まれるマツ材や油煙付着土器の存在との関連が想起できる。このように遺跡から出土したものを漆工との関係で読み解くことも可能である。ただ、いずれも漆塗りの工程や文献史料に記載されたものを出土遺物と強引に結び付けたもので想像の域を越えるものではない。

大量の供膳具や煮炊具の存在から厨家の可能性もあるが、墨書土器には「厨」等の文字は認められない。むしろこれらの遺物は、遺跡において手工業生産に従事した多くの捨丁や工匠らといった労働者へ供したものと見ることもできる。墨書土器に書かれた「HT」「IT」の記号を「工」と「丁」に比定できる可能性を指摘したが、その当否は別にしても、「古刀自女」や「種磨呂」の文字から、そうした人々が遺跡で活動していたことは明らかである。特に「古刀自女」の墨書土器は複数見つかっており、遺跡で主体的な立場にあった人物かもしれない。奈良時代の漆工生産としては仏像、仏堂、武器・武具、調度品・食器等がある（古尾谷 2014）が、出土遺物には土器の外面に漆を塗ったものや巡方などがあるものの、当遺跡で何が生産されていたのかは明らかでない。このように不明確な部分を含んではいるが、発掘調査によって判明する活動は、その他の手工業生産が行われていたとしても、主体は漆工であり、豆腐町遺跡は奈良時代の漆工房と結論づけることができる。次にその性格を考察していきたい。

古代の漆工又は工房については、多くの研究があるが、ここでは、古尾谷氏の研究に基づき検討していく。氏は手工業の歴史的な性格を考えるための指標として、a 生産・造営の発現から現業部門に至るまでの伝達、b 道具・施設などの調達、c 原材料・燃料などの調達、d 労働力の確保・組織化、e 労働者への給付、f 技術の伝達、g 原材料・製品などの輸送、h 製品の所有・分配（供給）先、i これら全体を組織化する制度・機構の 10 項目を示されている（古尾谷 2020）。これまで、考古資料を用いた検討では、出土遺物から読み取れる同范資料や技術系譜、製品の分布や供給先等が検討され、指標 b、d、f、h が主な対象となっている。豆腐町遺跡の場合、製品が判明しないことからこうした出土遺物による検討は行えない。そのため、第Ⅳ章でまとめた検出遺構を、上記の指標と関連づけて検討していく。

豆腐町遺跡を特徴づけるのは調査区中央を貫通する東西道路及び、それに直交する区画溝と橋脚の存在である。遺構の残りは全体的に削平を受けているため良好とは言えないが、井戸の配置から南北 100 m 以上、東西 250 m 以上の広がりがあったことが確認できる。近江氏による道路遺構の検討（近江 1997）を踏まえれば、東西道路は官が関わって敷設されたものと考えられる。建物は道路にそって計画的に建てられているものの、建物を構成する柱間や柱通りの規格性は乏しい。床面積にも特筆すべきものは存在しない。微高地にあたる部分は削平を受けているため、確証はないが、5 次 4 区 SB01 の検出状況から微高地と低地部分で建物の差があったようには見えない。また、7 次 1 区・3 区、6 次 1 区にかけて東西に展開する建物には棟通りが揃うものがある。井戸の位置は道路から一定の距離におさまっていることから、建物と井戸の配置には一定のパターンが存在し、その規則性に基づいて遺構が広がっていたと推測できる。その広がりには道路南側では東西 40 m、北側では東西 50 m 程度が一つのまとまりとなると想定した。また、配置の規則性に比べると建物自体の規格性は低く、井戸の構造も多様で、一見間に合わせて構築したかのようなものまで存在している。以上から、道路及び遺構の配置は何等かの計画あるいは設計図に基づいており、そこで活動する漆工らによる活動の結果と考えることは難しい。対して個別の建物や井戸の構造はバラつき、そこに何らかの規範を見出すことはできない。言い換えれば、道路や施設の設置は、工匠らによって自発的に為されたものではなく、より上位の意志によるものといえる。建物や井戸の様相から、作業に必要な建物の構築、水の確保等の目的がクリアできれば、それ以上の細部については、工匠らの裁量に委ねられていたと考えることができる。このことを先の指標に当てはめれば、a 生産・造営の意志の発現については、工匠らではなく、上位の存在が考えられる。

b 道具・施設などの調達については、道具の調達は不明であるが、道路については官が設置し、井戸の配置から空間内の建物配置とその設置目的は明確に決まっていたと推測できる。d の労働力の確保、組織化については、b と関連するが、遺構配置の決定は、その場における作業もしくは工程を規定することと同義であり、それぞれの工程に従事する労働力の組織化と不可分の関係であったと思われる。また、供膳具や煮炊具の大量の出土を活動人数と結びつけることが許されるならば、出土量は労働量と相関していると見ることができる。e の労働者への給付については、製塩土器の存在が注意されるものの賃金の給付については不明である。d で検討した遺物を素直に遺跡で消費されたものと理解すれば、労働者への賄に供されたものと想定できる。

上記の解釈は、道路と遺構配置に特異性を認めることを前提としている。こうした道路や施設の配置や規模は都城と比較すれば特筆すべき点はないかもしれない。ただ、地方においては、工房を含む街区が明らかになること自体少ない。国府付属工房として知られる鹿の子C遺跡と比較しても遺構の広がる範囲も遜色なく、むしろ道路の直進性は豆腐町遺跡の方が高い（茨城県教育財団1983）。街区の存在や遺構の配置などは、都城の工房である平城京右京八条一坊十三・十四坪（奈良国立文化財研究所1989）や平城京左京三条四坊七坪（奈良国立文化財研究所1980）と共通する部分もある。漆器の生産を検討した金子浩之氏によれば、漆器と施釉陶器製作の共通性から、漆工は官営工房での生産であったと想定している。官営工房による生産は、「官が製造設備と原材料および工人の賃金を含めた運営の費用を負担する見返りに製品を独占する生産体制」と定義づけている（金子1995）。豆腐町遺跡の実態は、上記定義の前半部分と整合的である。しかし、古尾谷氏が指摘するように「官営」か「民営」かの区別は困難であり、経費負担や生産の実態まで含めて「官営」であったかどうかは出土資料からは判断できない（古尾谷2020）。ただ、少なくとも道路を含むハードの整備は官が主体となって実施した可能性は高く、豆腐町遺跡はむしろ地方における工房の実態からこうした議論に迫ることのできる資料と考える。

遺跡の存続時期は、出土遺物の検討から東部地区の施設が奈良時代中頃から後半（8世紀第3四半期）、西部地区の施設が奈良時代後半（8世紀第4四半期）から平安時代初頭に位置づけられる。当該時期は、全国的に国衙が拡充・整備される時期と重なっている（山中1994）。播磨地域においても、播磨国分寺が国分寺建立の詔から間を置かずに整備されたと考えられていることから、当該時期には播磨国府に関連する諸施設が整備された時期と重なる可能性が高い。豆腐町遺跡はそうした需要に対応する目的で設けられたのかもしれない。このことに関して、「十」の墨書土器が漆工房と密接に関わる施設名を記しているという指摘がある。平城京をはじめとする官衙遺構出土の墨書土器と比べると、所属を示す官司名を記す一般的な在り方と異なることから、臨時的な需要の増加に応じて設けられた出先の機関を示すものではないかと指摘されている（奈良国立文化財研究所1989）。その見解に従えば、遺跡の存続期間からも恒常的な施設ではなく、需要の増加に伴って臨時的に営まれた施設と考えることができる。

第Ⅱ章で見たように、近年、本町遺跡から豆腐町遺跡にかけて、連続的に古代の遺構が確認されつつある。それらは基本的に豆腐町遺跡東部地区と同様に正方位を指向する。本町遺跡が播磨国府の中核域（国衙）とする学史的見解は、発掘調査件数が増加した現在でも有効であることから、本町遺跡から連続的に広がり豆腐町遺跡に至る一連の遺構群は、播磨国府に関連するものと評価することができる。国府の様相について、山中氏は「国府の領域が明確ではないという点では農村と一体的な側面を持つが、国衙の諸施設の建物が集中する特異な景観、その長期間にわたる継続性、国司ら官僚や搔丁・兵士・学生ら多人数の長期にわたる集住、手工業や交易など農漁業以外の活動の展開、などの点において、周辺の農村とは相対的に異なる空間」であったとする（山中1994）。豆腐町遺跡東部地区の存続時期は短期間であるものの、道路を伴うその景観は農村と全く異なるものであったことは疑いなく、そうした点からも豆腐町遺跡東部地区は播磨国府に伴う工房跡と位置づけることができる。西部地区は遺構の主軸が異なるが、東部地区から移行したものと考えれば、同じく国府域に設けられた工房跡とみることができる。西

第Ⅵ章 総括

部地区の遺構配置については明らかではなく、出土遺物量も減少することから、その規模は縮小したと考えられる。遺構の主軸も飾磨郡条里に揃い、東部地区とは様相が大きく異なっている。しかし、出土遺物に占める土師器の組成比率が高い点、遺跡の存続時期が短期間である点は共通している。

豆腐町遺跡で明らかになったことは多岐にわたるが、最後に遺跡が提起する問題を2つ列記しておきたい。一つは道路遺構の存在である。近年、国府域内における道路が各地で見つかっているが、豆腐町遺跡の道路も国府域内の道路と見て間違いないだろう。国府の実態はかつて想定されていたように方格地割が施行された、ミニ都城ではないことが明らかにされつつあるが、第Ⅱ章で想定した中世後期の道路遺構を含め、こうした遺構の追求を行うことが、実態の不明な播磨国府に迫る方法の一つと考える。

二つ目は、遺構の主軸の問題である。豆腐町遺跡は東部地区が正方位、西部地区が飾磨郡条里と遺構の主軸が変化している。これは遺構の年代とも関わり、前者が8世紀中～第3四半期、後者が8世紀第4四半期から平安時代初頭である。正方位→条里方向への変化の定点を押さえることができる。対して『本町遺跡』では8世紀前半の条里方向→8世紀中頃に正方位へ変化することが指摘されている。本町遺跡周辺の地割はその後も正方位に近いことから、その結論自体に矛盾はないが、考古学的には未だ追認されたものではない。豆腐町遺跡の成果は、国府域における主軸の変化が単一ではなく、複数あったことを示している。国府域の範囲の問題も含めて今後の課題といえる。

『本町遺跡』や『姫路市史』を経て、一定の検討が行われてきた播磨国府であるが、『本町遺跡』以後も調査の蓄積が確実に進んでいる。その最たる成果の一つが豆腐町遺跡における一連の調査である。本報告書の刊行によって、これまで「本町遺跡」でのみ語られてきた播磨国府はその実態の一部にしか過ぎないことが明らかとなった。江戸時代の姫路城下町と重なる広い範囲において、その実態を迫る必要があることを改めて指摘しておきたい。

参考文献

- 秋枝 芳 1991 「姫路城昭和の大修理の成果と展望（Ⅰ）－考古資料の再検討－」『城郭研究室年報』Vol.1
2010 「本町遺跡群3」「姫山遺跡」『姫路市史』第7巻下 資料編考古
- 秋本吉郎校註 1958 『風土記』日本古典文学大系2 岩波書店
- 有本 隆 1984 『播磨の瓦刻銘史 御城瓦師の足跡と系譜』姫路市文化財保護協会
- 姫路市教育財団 1983 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 鹿の子C遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第20集
- 今里幾次 1980 「古代の飾磨津」『播磨古瓦の研究』真陽社
1963 「古瓦からみた播磨国府寺」『兵庫史学』33号
1984 「姫路市本町遺跡の古瓦」『本町遺跡』姫路市教育委員会
2013 「播磨の国府と国庁」『姫路市史』第1巻下 本編考古
- 池田征弘 1996 「摂津西部・播磨」『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
- 射楯兵主神社史編纂委員会 1996 『播磨国総社 射楯兵主神社史』射楯兵主神社
- 岩本正二・大久保徹也 2007 『備讃瀬戸の土器製塩』吉備人出版
- 近江俊秀 1997 「古代道路遺構の形態からみたその性格」『古代交通研究』第7号 古代交通研究会
- 大橋泰夫 2018 『古代国府の成立と国郡制』吉川弘文館
- 岡見知紀 2019 「制墨技術の変遷に関する研究」『研究紀要』第23集 公益財団法人 由良大和古代文化研究協会
- 小川真理子 1990 「稜椀の研究－播磨を中心として－」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
- 奥村清一郎 1987 「奈良三彩小壺とその出土遺跡について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集
- 金子浩之 1992 「8・9世紀の漆器」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会
- 金田章裕 1999 「国府の形態と構造について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集
- 木下 良 1984 「駅路との関係を主とする播磨国府跡の想定－本町遺跡を草上駅跡と見て－」『本町遺跡』
- 工藤雄一郎 2012 『旧石器・縄文時代の環境文化史』新泉社
- 笹生 衛 2020 「古代・中世の景観変化と気候変動－東京湾東岸における沖積平野の変遷を中心に－」『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』臨川書店

- 神野 恵 2012 「都城の製塩土器」『塩の生産・流通と官衙・集落』第16回古代官衙・集落研究会 研究報告資料
- 鈴木敬二 2018 「山陽鉄道の煉瓦造構造物－兵庫県内の事例研究－」『鉄道史学』第36号
- 『村翁夜話集』刊行会編 2015 『村翁夜話集：播磨の地誌 福本勇次著』
- 多可町教育委員会 2006 『田野口・笹町遺跡Ⅰ』
- 巽淳一郎 2009 「7・8世紀の鉛釉陶器と唐三彩」『古代陶磁器調査過程』研修資料
- 玉田芳英 1995 「漆附着土器の研究」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会
- 奈良国立文化財研究所 1989 『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報 第46冊
1980 『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』
- 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 2003 『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』
2004 『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』
2005 『平城宮発掘調査報告XVI 兵部省地区の調査』奈良文化財研究所学報第70冊
- 中塚 武他 2020 『気候変動から読みなおす日本史4』臨川書店
- 播磨考古学研究集会 『播磨の古代集落を考える』
- 姫路市史編集室 1998 『姫路市史』第7巻上 資料編自然
1996 「姫路町・飾万津町地子銀控」『姫路市史』第11巻上 史料編近世2
2010 『姫路市史』第7巻下 資料編考古
2013 『姫路市史』第1巻下 本文編考古
- 姫路市教育委員会 1984 『本町遺跡』
2013 『豊沢遺跡－第4次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第9集
2013 『三宅遺跡発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第18集
2015 『播磨国総社三ツ山大祭調査報告書』
2015 『竹の前遺跡・畑田遺跡発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第24集
2017 『姫路城城下町跡－姫路城跡第338次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第43集
2017 『姫路城城下町跡－姫路城跡第343次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第44集
2017 『姫路城城下町跡－姫路城跡第351次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第46集
2020 『豆田遺跡・大浄口遺跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第87集
2020 『宮ノ浦遺跡－第5次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第94集
2020 『姫路城城下町跡－姫路城跡第422次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第100集
2021 『姫路城城下町跡－姫路城跡第419次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第106集
2021 『市之郷遺跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第105集
- 姫路市埋蔵文化財センター 2017 『家島諸島の考古学』
2018 『白鷺飛翔』
- 兵庫県教育委員会 2001 『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』
2005 『市之郷遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第286冊
2011 『市之郷遺跡Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第406冊
- 平川 南 1989 『漆紙文書の研究』吉川弘文館
- 平田博幸 2018 「本町遺跡を考える」『研究紀要』第11号 兵庫県立考古博物館
- 古尾谷知浩 2014 『漆紙文書と漆工房』名古屋大学出版会
2020 『日本古代の手工業生産と建築生産』塙書房
- 松尾史子・伊賀高弘 2015 「古代における「繊維製品」の研究－京都府木津川市上粕北遺跡出土の漆布状製品の検討－」
『京都府埋蔵文化財情報』第127号 公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 松田権六 2001 『うるしの話』岩波文庫
- 森内秀造 2007 「古代（8世紀）の遺構と遺物」『豆腐町遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第322冊
- 森 暢郎 2019 「古代土師器生産の変質過程－飛鳥・奈良時代を中心に－」『ヒストリア』277号 大阪歴史学会
- 八木 充 2009 『日本古代出土木簡の研究』塙書房
- 八木哲浩 1988 「自然地形の利用と制御」『姫路市史』第14巻別編姫路城
- 山中 章 1997 『日本古代都城の研究』柏書房株式会社
- 山中敏史 2004 「国府の景観」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
1984 「本町遺跡の性格について」『本町遺跡』
- 山本博利 1999 「播磨国府と国分僧寺」『地中に眠る古代の播磨』播磨学研究所
2010 「播磨国府跡」『姫路市史』第7巻下 資料編考古
- 吉本昌弘 1983 「古代播磨国の郡衙」『人文地理』第35巻4号 人文地理学会

第Ⅵ章 総括

表 11・12・13 参考報告書

- 投松 6 号窯灰原：兵庫県教育委員会 2001 『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』兵庫県文化財調査報告第 217 冊
- 投松 2 号窯 1 次操業灰原：兵庫県教育委員会 2001 『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』兵庫県文化財調査報告第 217 冊
- 中谷 4 号窯灰原：兵庫県教育委員会 2000 『志方窯跡群Ⅰ－中谷支群』兵庫県文化財調査報告第 203 冊
- 前川遺跡井戸 1・2：古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成』
- 平城宮 SK820：古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成』
- 平城宮 SK219：古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成』
- 平城宮 SK2113：古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成』
- 平城京左京五条二坊十四坪 SE03：古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成』
- 東山 15 号墳：中町教育委員会 1999 『東山古墳群Ⅰ』中町文化財報告 20
- 思い出遺跡 10 区井戸 1・溝 1：中町教育委員会 2000 『思い出遺跡群Ⅱ』中町文化財報告 22
- 宮ノ浦遺跡 1 次 SD01 坪 4：姫路市教育委員会 2020 『宮ノ浦遺跡－第 5 次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第 94 集
- 有年原・田中遺跡土坑 3：兵庫県教育委員会 1991 『有年原・田中遺跡』兵庫県文化財調査報告書第 87 冊
- 丁・柳ヶ瀬遺跡 C 地区 SX05：兵庫県教育委員会 1985 『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第 30 冊
- 田野口・窺町遺跡井戸 1：多可町教育委員会 2006 『田野口・窺町遺跡Ⅰ』多可町文化財報告 2
- 小神芦原遺跡井戸：龍野市教育委員会 1993 『小神芦原遺跡』龍野市文化財調査報告 10
- 小犬丸遺跡第 50 調査区 1－井戸：龍野市教育委員会 1994 『布勢駅家Ⅱ』龍野市文化財調査報告 11
- 小犬丸遺跡第 20 調査区土坑 10：龍野市教育委員会 1992 『布勢駅家』龍野市文化財調査報告 8
- 坂元遺跡 37 区 SE01：兵庫県教育委員会 2009 『坂元遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第 366 冊
- 溝之口遺跡昭和 58 年第 2 次 SE01：加古川市教育委員会 1992 『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市文化財調査報告 10
- 播磨国分寺跡第 27 次 SD650：姫路市教育委員会 2022 『播磨国分寺跡 第 27 次調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第 119 集
- 新方遺跡平松地点 SX05：神戸市教育委員会 2003 『今池尻遺跡・新方遺跡平松地点埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 上池遺跡第 1 調査区 SX02：神戸市教育委員会 1989 『昭和 61 年度神戸市埋蔵文化財年報』
- 竹原遺跡全面調査区 635 土坑：龍野市教育委員会 1999 『竹原遺跡』龍野市文化財調査報告 22
- 投松 6 号窯灰原：兵庫県教育委員会 2001 『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』兵庫県文化財調査報告第 217 冊

附章

第1節 豆腐町遺跡内で検出された遺構の被熱に関する磁氣的検討

兵庫県立大学大学院生命理学研究科（※）

森永 速男

はじめに

土壤の磁氣的性質（以下、磁性）は被熱することで変化する。土壤が元々持っている残留磁化は堆積起源である。これを堆積残留磁化と呼ぶ。被熱を通して、この堆積残留磁化が熱残留磁化に変わることと、磁性鉱物そのものが化学変化し、別の磁性粒子になることによって土壤の磁性が変化する（Morinaga ほか 1999）。土壤の磁性変化は、磁性を示すパラメータである残留磁化と帯磁率を観察することで知ることができる。被熱過程では残留磁化強度と帯磁率は一般に増加し、残留磁化方向が被熱時の地球磁場方向と平行になる（または、平行に近づく）。

被熱によって起こると期待できる磁性鉱物の変化は、土壤の場合には主に水酸化鉄から酸化鉄への変化である。250℃～300℃の被熱で水酸化鉄の一種であるゲーサイト（赤鉄鉱； α -FeOOH）は酸化鉄の一種であるヘマタイト（ α -Fe₂O₃）に脱水過程を経て変わる。この変化では帯磁率はさほど変化しないが、ヘマタイトがさらに酸化鉄の一種であるマグネタイト（磁鉄鉱；Fe₃O₄）に炭化物の存在下で変化することで帯磁率は2桁程度大きくなる。さらに、それに伴って残留磁化強度は、熱残留磁化獲得の効果もあり、2桁から3桁程度増加する。

以上のように、起源の同じ土壤間で残留磁化強度や帯磁率の差や残留磁化方向を検討すれば、土壤が被熱したかどうかを判定できる。

検討課題と測定した磁気パラメータ

磁気測定に基づいた、豆腐町遺跡の遺構（5次4区SK62）に関する検討課題は、

- (1) 遺構表面で肉眼的に観察された焼土が検出場所で焼成されたものか否か？
- (2) もし、上記(1)が認められれば、遺構地下まで熱が伝わっているかどうか？

であった。

上記課題の検討のために、遺構表面の焼土塊から5個、さらに遺構断面から19個の土壤試料を定方位で、容積約7ccの立方体ポリカーボネイト製容器を用いて採取した。採取試料の残留磁化をスピナー磁力計を用いて測定し、同時に帯磁率を測定した。

磁気測定結果と考察

磁気測定結果を表17にまとめた。また、図160に帯磁率を横軸、残留磁化強度を縦軸にとり、試料の磁氣的性質を示した。最も磁性の小さい試料グループ（9～24；図160中の○と×）と比べると、焼土試料（1～5）は平均帯磁率で20倍以上、残留磁化強度で2桁近く大きな磁氣的性質を示している（図160中の●）。また、遺構断面で、最も遺構表面近くに位置する試料（6～8）は焼土と磁性の小さなグループとの中間的な大きさの磁性を示している（図160中の▲）。これらのことから明らかのように、遺構表面の焼土は確かに焼けていると判断できる。また、それらの中間的な磁氣的性質により、試料6～8もわずかに熱を受けた可能性があるように見える。さらに、残りの試料グループ（9～24）は帯磁率、残留磁化強度ともに小さく、被熱したとは考えにくい。加えて、試料21～24は炭化物のすぐ下の土壤で

附章

あるが、これらに被熱痕跡がないということは、直上の炭化物がその場で火を使用した残骸でないことを示している。

次に、いくつかの試料（1～7、15、23）で行った段階交流消磁の結果を図161と図162に示す。この処理は土壌試料の残留磁化の安定性（言い換えれば、磁化記録の正しさを示し、被熱試料では安定性が増す）を調べ、残留磁化方向を厳密に決めるために行われた。焼土試料1～5（図161）には、図中のグレイスケールの直線で示すような磁化成分が認められる。これらの磁化成分の方向は、伏角が水平下向きで、北方向に近いやや西振りの偏角で特徴づけられる。この方向は地球磁場の方向に近く、5個すべての焼土が同じ成分を持つことから、焼土がその場で被熱してできたことを示す。ただし、過去2,000年間の地磁気方向（例えば、Shibuya, 1980）にはこの方向と一致する時代はない。焼成後に、 10° ～ 20° 程度、北方向に（焼土の張り付いていた南向き斜面を水平に近づけるように）回転した可能性が考えられる。

また、試料6と7の段階交流消磁結果にも、極めてわずかだが焼土と同様な方向成分（図162中の？を付けたグレイスケールの直線）が認められる。このことは、図160で示したことと同様、これらの土壌試料が採取位置でわずかに熱を受けた可能性を暗示している。さらに、試料15と23（図162）には、そのような磁化方向成分が認められず、図160に示すように磁氣的性質が小さいことから、熱を受けたとは考えにくい。

過去の研究例に基づいての考察

これまでの被熱（たき火）実験などから、熱が地下深くに浸透していくときに重要な働き（遮断の動き）をしているのは水であることがわかっている。水が存在する限り、土壌の温度はその気化温度である 100°C 以上になることができない。試料6～8より下位の、被熱痕跡の認められない試料9～24は炭化物の多い層かもしくはそれよりもより下位で採取された。炭化物を含む層には水分が多く含まれていただろうし、その層はさらに地下から徐々に水分が供給されたと想定できるので、遺構表面で火が使用されたとしても、それら試料の深さまで熱が伝わらなかったのではないかと考えられる。つまり、炭化物は断熱材としての働きをしていたと考えられる。ただし、そのことを古代人が意図的にしたかどうかは、この測定からはわからない。

遺構表面近くの断面から採取した試料6～8には、焼土試料1～5ほど明瞭な磁氣的性質の大きさは認められない（図160）、また、焼土の残留磁化方向もすべての磁化成分が当時の地球磁場方向と平行になっているわけではない。これらのことは、この遺構での火の使用頻度が少なかったこと（1回限りかその程度？）を暗示している。過去の研究例での表面焼土では、図161に示す、段階交流消磁での磁化減衰パターンは地球磁場方向と一致する直線状になる。このような研究例が多いことから、豆腐町遺跡で検出された、この遺構表面の焼土の磁氣的特性から、炉や竈のような使用頻度の高い火どころを想定することはできない。

引用文献

Morinaga, H., Inokuchi, H., Yamashita, H., Ono, A., and Inada, T., 1999.

Magnetic detection of heated soils at paleolithic sites in Japan
Geoarchaeology, 14 (5), 377–399

Shibuya, H., 1980. Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism, 大阪大学基礎工学部修士論文、54pp

※肩書は調査・執筆いただいた2008年当時のものである。

第1節 豆腐町遺跡内で検出された遺構の被熱に関する磁氣的検討

試料番号	帯磁率 (10 ⁻⁸ SI)	残留磁化			備考
		強度(10 ⁻⁷ Am ²)	偏角(°)	伏角(°)	
1	80	0.0007444	-23.8	24.5	遺構南向き表面焼土(粘土)
2	121	0.0011110	-11.7	10.2	遺構南向き表面焼土(粘土)
3	58	0.0004939	-9.2	25.9	遺構南向き表面焼土(粘土)
4	109	0.0006857	-12.1	17.0	遺構南向き表面焼土(粘土)
5	58	0.0003785	-8.4	15.4	遺構南向き表面焼土(粘土)
平均	85.2	0.0006827			
6	18	0.0000976	-48.0	-20.8	遺構断面(表面付近、粘土)
7	16	0.0000974	8.9	-21.7	遺構断面(6より内部、粘土)
8	11	0.0000422	-26.2	-15.7	遺構断面(7より内部、粘土)
平均	15.0	0.0000791			
9	8	0.0000103	62.6	23.5	遺構断面(8より内部、粘土)
10	1	0.0000035	34.6	-44.6	遺構断面(9,11,13より内部、炭化物を含む粘土)
11	7	0.0000079	21.0	48.2	遺構断面(9と同じ部位、粘土)
12	2	0.0000043	-50.4	39.5	遺構断面(9,11,13より内部、炭化物を含む粘土)
13	8	0.0000056	31.4	38.0	遺構断面(9と同じ部位、粘土)
14	2	0.0000010	140.8	36.8	遺構断面(9,11,13より内部、炭化物を含む粘土)
平均	4.7	0.0000054			
15	1	0.0000189	-89.6	77.4	遺構断面(9,11,13と同じ部位、炭化物を含む粘土)
16	2	0.0000099	-8.1	31.9	遺構断面(9,11,13と同じ部位、炭化物を含む粘土)
17	1	0.0000021	-5.3	36.9	遺構断面(9,11,13と同じ部位、炭化物を含む粘土)
18	1	0.0000054	-20.1	31.6	遺構断面(9,11,13と同じ部位、炭化物を含む粘土)
19	1	0.0000112	-22.1	65.8	遺構断面(9,11,13と同じ部位、炭化物を含む粘土)
20	3	0.0000137	1.2	33.3	遺構断面(9,11,13と同じ部位、炭化物を含む粘土)
21	6	0.0000103	3.0	43.8	遺構断面(15-20より内部、粘土)
22	5	0.0000047	7.9	-14.8	遺構断面(15-20より内部、粘土)
23	10	0.0000138	-17.4	13.3	遺構断面(21,22より内部、粘土)
24	8	0.0000082	-0.8	22.7	遺構断面(21,22より内部、粘土)
平均	3.8	0.0000098			

表17 採取した土壌試料の帯磁率及び残留磁化測定結果のまとめ

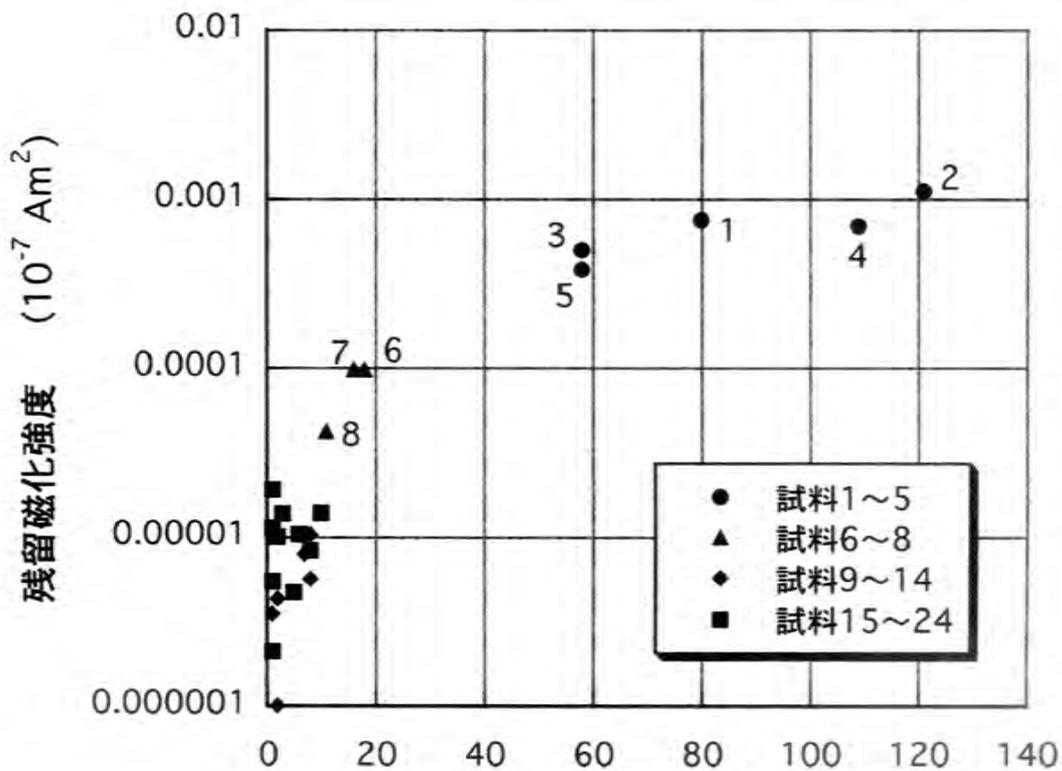


図160 採取した土壌試料の磁氣的性質 帯磁率と残留磁化強度

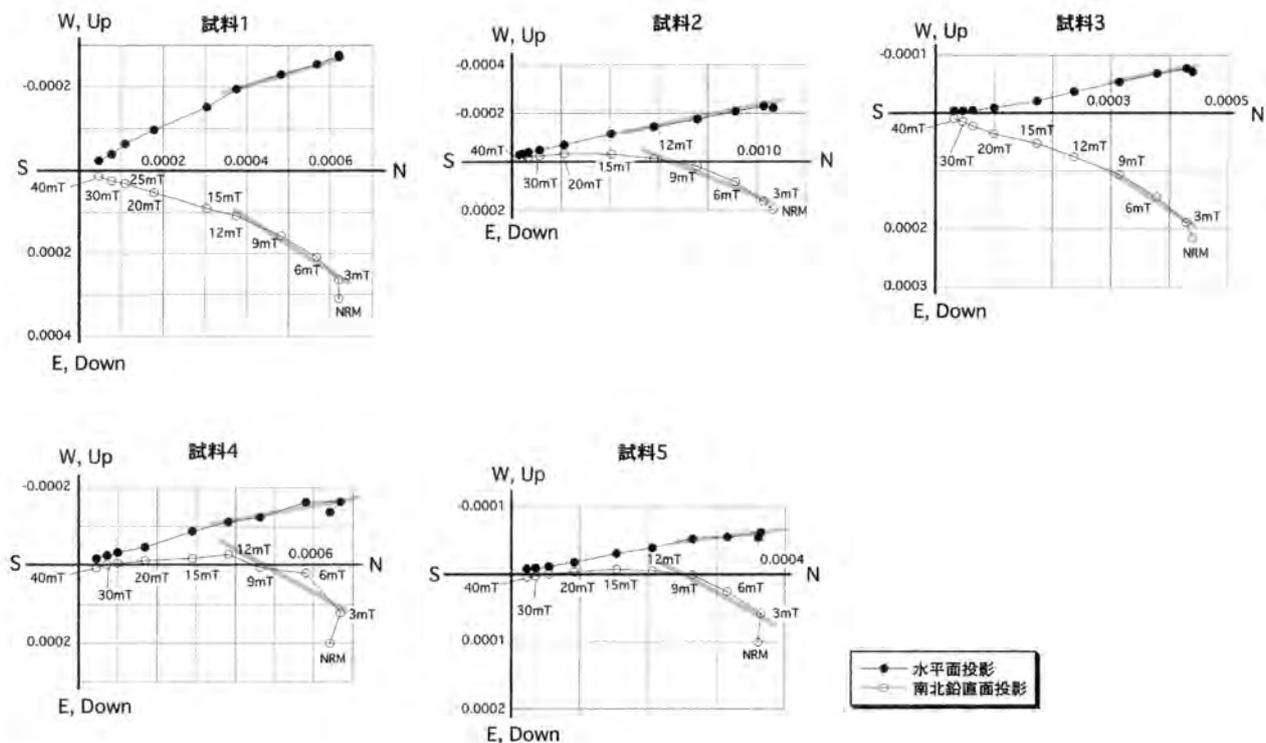


図161 採取した焼土試料1~5の段階交流消磁結果

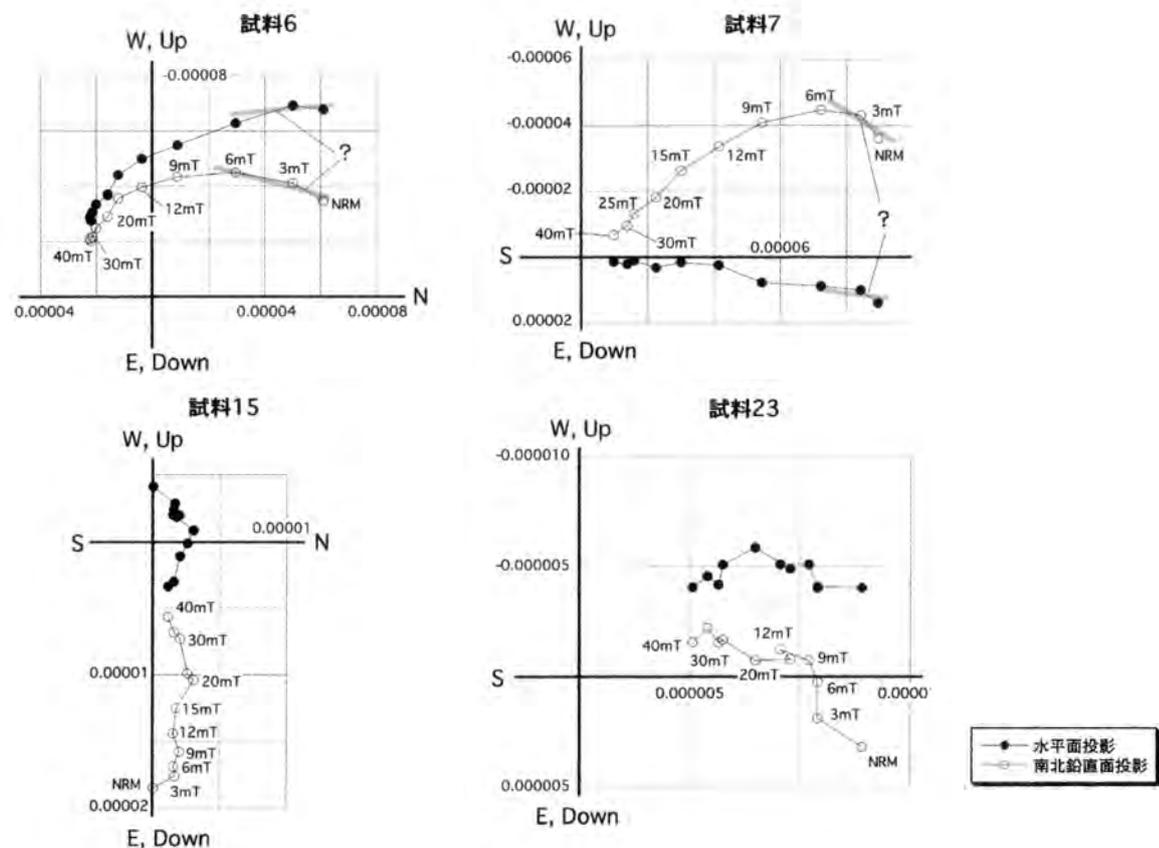


図162 採取した土壌試料6・7・15・23の段階交流消磁結果

第2節 豆腐町遺跡出土品分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

兵庫県姫路市駅前町に所在する豆腐町遺跡では、奈良時代の道路跡とそれに付随する建物跡などが検出されており、播磨国府に関連する遺跡と考えられている。その他、江戸時代および近代の遺構・遺物も確認される複合遺跡である。

本分析調査では、出土した木材、種実、土器、石材等の分析を行い、当時の生業に関する情報を得る。

1. 材同定・年代測定

(1) 試料

樹種同定・年代用試料は、8次1区SR01下層断割りより出土した木材1点である。

(2) 分析方法

(a) 樹種同定

剃刀を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

(b) 放射性炭素年代測定

試料から採取した木片の周囲を削り落として付着物を除去し、50mg程度に試料を調整する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正・ウイグルマッピング用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正ならびにウイグルマッピング法に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3(Bronk,2009)、較正曲線はIntcal20(Reimer et al.,2020)である。

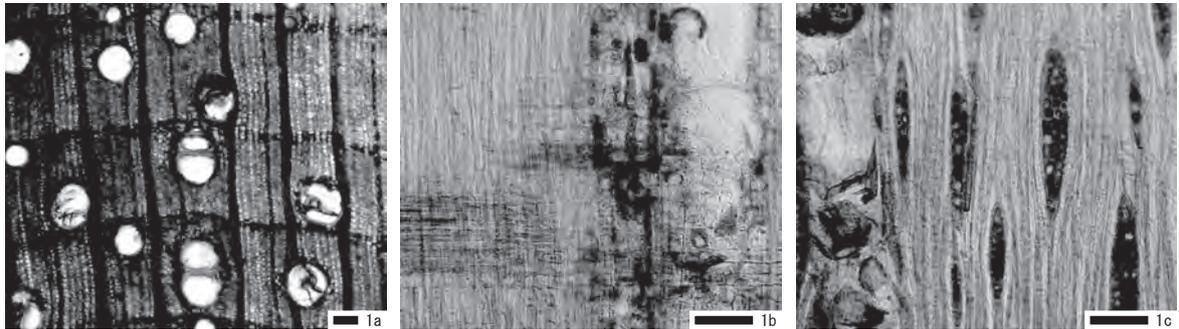
(3) 結果・考察

結果を表18に示す。木材はカキノキ属(*Diospyros*)であった。木材の解剖学的特徴は、散孔材で、

附章

管壁は厚く、横断面は楕円形、単独または2～4個が時に年輪界をはさんで複合する。道管は単穿孔、壁孔は対列状。放射組織は異性、1～3細胞幅、10～20細胞高で階層状に配列する。

一方年代測定は、定法での処理が可能で、年代測定に必要な炭素量が回収できた。同位体補正を行った年代値は、3470±20BPである。



1. クワ属 (No. 1)

a: 木口 b: 柾目 c: 板目
スケールは100 μm

図 163 木材顕微鏡写真

表 18 樹種同定・放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	δ 13C (‰)	暦年較正年代								Code No.							
					年代値										確率%					
No.1 8次1区 -SR01下層	カキノキ属	AAA (1M)	3470±20 (3468±22)	-29.35 ±0.33	σ	cal	BC	1874	-	cal	BC	1723	3823	-	3794	calBP	25.6	YU-	pal-	
						cal	BC	1818	-	cal	BC	1837	3767	-	3750	calBP	13.4			
						cal	BC	1776	-	cal	BC	1912	3725	-	3693	calBP	29.3			
						cal	BC	1881	-	cal	BC	1727	3830	-	3785	calBP	30.5			
					2σ	cal	BC	1831	-	cal	BC	1837	3780	-	3686	calBP	57.6			
						cal	BC	1715	-	cal	BC	1919	3664	-	3644	calBP	7.3			
																	12863			13216

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用
- 7) 較正データセットはIntCal20を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である

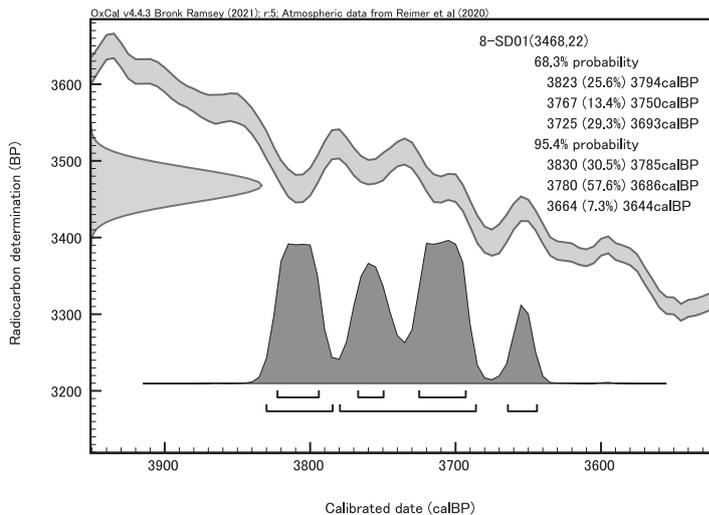


図164 暦年較正結果

暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。2σの値は、3830～3644calBPである。

2. 炭化材同定

(1) 試料

試料は、土坑等から検出された炭化材4点である。試料の詳細は表19に合わせて示す。1試料の中に複数個あるものについては、細かなものを除く全ての破片について観察を行う。

(2) 分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作成する。実体顕微鏡や電子顕微鏡を用いて組織を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

(3) 結果

結果を表19に示す。針葉樹2種類（マツ属複維管束亜属、ヒノキ）、広葉樹4種類（アカガシ亜属、シイ属、シキミ、トネリコ属）が検出された。以下に検出された種類の解剖学的所見を述べる。

表19 炭化材同定結果

1	6次1区炭層5	ヒノキ
2	6次1区炭層3・4	アカガシ亜属 シイ属
3	6次1区炭層1	マツ属複維管束亜属 シキミ トネリコ属
4	5次4区SK63	マツ属複維管束亜属 シイ属

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxyton*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は、仮道管の早材部から晩材部への移行がやや急である。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有す。放射組織は同性、単列で1～15細胞高のものと、複合放射組織とがある。

・シイ属 (*Castanopsis*) ブナ科

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で、道管の分布密度は高く、年輪界近くではやや密度が低くなる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

附章

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が1～3個（主に2個）が複合して配列する。道管は単穿孔、放射組織は同性、1～2細胞幅、10～30細胞高。

(4) 考察

炭化材は微細で用途は不明だが、何らかの用材が火熱を受けて炭化したものや、廃材や周辺に生育していた木材を用いた燃料材等が想定される。

マツ属複維管束亜属の木材は針葉樹材の中では重硬、強靱で、油脂分が多い。このため、建築材や土木材のほか、家具、建具、農機具など用途は広い。マツは土地条件が悪い場所にも耐性があり、乾燥した尾根沿い、土壌が安定しない崩壊地、人の手が加わった伐採地に先駆的に進入して林を構成する。おそらく当時遺跡周辺には、マツ林が存在し、そこから木材を得ていたと考えられる。

ヒノキは軽軟であるが、水湿に強く、割裂、曲げなどの加工が容易であり、太くて真っ直ぐな材が得やすい。このため、建築用材をはじめ、家具、器具などさまざまな用途に利用される有用材である。周辺に自生可能であることから、単に燃料材として採取されたとも考えられるが、本来は何らかの用材であった可能性が高い。

アカガシ亜属、シイ属、シキミは、遺跡周辺に存在していたと思われる常緑広葉樹林を構成する主要な要素である。おそらく、周辺の山野から採取され、燃料材等として利用されたと思われる。なお、アカガシ亜属は非常に重堅な木材で、農具の柄などに利用されることが多い。一方シイ属は、やや重堅で、建築材や薪炭材に用いられることが多い。

トネリコ属は、谷沿いなど湿ったところを好む落葉樹である。遺跡周辺の川沿いなどに生育していた樹木を採取し、燃料材等に用いていた可能性がある。

3. 墨付着土器の電子顕微鏡観察

(1) 試料

試料は、No.1 (1494 5次5区 SE01 土師器杯)、No.2 (写-27 6次1区 SD187 出土須恵器杯B蓋)、No.3(写-40 6次1区 SD04 出土須恵器杯B)、No.4(写-24 6次1区 整地層出土須恵器壺)の4点である。特に、No.1の土師器杯は、墨で書かれたとみられる文字部分を対象にする。

(2) 分析方法

デジタルマイクロスコープを用いて表面を観察し、観察位置を検討する。観察に適した土器の部位に導電性の両面テープを貼り、黒色物質を土器から剥がす。このままだと本来の土器付着面を観察できないので、黒色物質が付着したテープに再度テープを貼って剥がすことで、土器付着物を転写し、表面部分を観察できるようにする。双眼実体顕微鏡で転写できていることを確認したあと、走査型電子顕微鏡で観察する。付着物が炭素であれば、あるていどの導電性を持つことから、蒸着は行わず、低真空モードで観察を行う。

(3) 結果・考察

観察画像を図 171、172 に示す。以下に各試料の所見を述べる。

・No.1 (1494)

底面に付けられた墨書と思われる X 印の端の部分から試料を採取、観察を行った。その結果、市川・

萩原（1975）や岡見（1989）の墨粒子と同じ形態を持つ微粒子が観察される。国産の墨は奈良時代以降に作られるようになるが、これらの粒径は渡来品よりも粒子が大きいとされる（岡見,1989）。観察条件などが異なるため、単純には比較できないものの、今回観察した墨の粒子粒径は0.1～0.2 μm である。このことから、岡見（1989）の基準に従えば、国産の墨といえる。

・ No.2（写-27）

市川・萩原（1975）や岡見（1989）の墨粒子と同じ形態を持つ粒子構造はみられず、粘土～シルト粒径程度の鉱物粒が密集していることから、黒色部は墨由来でないと考えられる。

・ No.3（写-40）

No.2と同様、粘土～シルト粒径程度の鉱物粒？が密集しており、墨由来でないと考えられる。

・ No.4（写-24）

黒色部分から試料を採取、観察を行った。その結果、No.1と類似する墨粒子と思われる粒子が観察される。墨の粒子粒も No.1と同じ0.1～0.2 μm 程度であることから、岡見（1989）の基準に従えば、国産の墨といえる。

4. 漆附着土器の薄片観察

(1) 試料

試料は、No.1(506 4次SE02出土土師器杯)、No.2(2816 7次3区SD02出土須恵器杯B)、No.3(2343 6次1区整地層出土土師器杯A)の3点である。

(2) 分析方法

デジタルマイクロスコープを用いて表面を観察し、薄片作成位置を検討する。合成樹脂で包埋し、塗膜の断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドガラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートを生物顕微鏡、実体顕微鏡、マイクロスコープ、偏光顕微鏡等で塗膜断面の構造・混和物等について観察する。

(3) 結果・考察

観察画像を図173、174に示す。以下に各試料の所見を述べる。

・ No.1（506）

表面観察では黒色の漆で、所々に土壌が付着する。表面観察の結果、多数のひび割れがあり保存状態が悪い。断面観察では、厚さは0.2～0.3mm程度で不均質、縦方向、水平方向にひび割れがみられる。また、漆は不透明で光を通さず、土壌や岩片など不純物が混じっている。さらに、漆表面にも土壌が付着している。このような状態から推測すると、土器は、漆塗の際のパレットとして使われた後、漆が乾かないうちに廃棄された可能性がある。このため、漆に不純物が沈着し、表面には土壌が付着したと推測される。

・ No.2（2816）

表面観察では赤黒く、塗りムラのような筋が多数みられる。断面観察では、厚さは0.2mm程度で比較

附章

的均質、2層に分かれるようにみえる。漆は赤褐色で光を通す。このような状態からすると、土器は、漆塗の際のパレットとして使われたと思われる。2層みられることから、漆を継ぎ足して2回利用した可能性がある。漆の状態は No.1 に比べると良いことから、漆が乾いた後に廃棄されたと推測される。

・ No.3 (2343)

表面観察では赤黒く、No.2 のように塗りムラのような筋があるが、厚さが極端に非均質で、小さな塊状の部分や、厚く隆起した部分などがある。断面観察では、薄いところで0.2mm、厚いところは0.5mm 以上と差が大きい。層状の構造がみられるが、厚みや層の枚数などが場所によって異なるほか、層境が複雑にうねるなど独特な構造をしている。また、土器と接する部分では土器の胎土片を巻き込んでいる場所もある。塊状の部分では、漆がドーム状に盛り上がり、中心部に不純物がみられる部分もある。漆は赤褐色で光を通し、状態は良い。このような状態からすると、土器は、漆塗用の用具として使用され、No.2 より漆の量が多かったとみられる。また、何度か継ぎ足して使われたと思われ、容器内で漆の攪拌された可能性もある。このように、出土した3つの土器は、断面の観察結果によって、それぞれ異なった使われ方をしていたことが明らかとなった。漆塗りの道具やその使用方法については、民族事例や現在の製作技法などで実際使われている道具との比較検討を行うなど、それぞれの容器の役割について、今後検討していくことが必要である。

5. 漆布の薄片観察

(1) 試料

試料は、No.1 (写真図版 136 の漆付着布) である。1～2cm ほどの平状で、漆が浸透し固化している。

(2) 分析方法

デジタルマイクロスコープを用いて表面を観察し、薄片作成位置を検討する。合成樹脂で包埋し、塗膜の断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドガラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートを生物顕微鏡、実体顕微鏡、マイクロスコープで観察し、織り方や繊維の種類を検討する。

(3) 結果・考察

マイクロスコープによる表面観察と薄片観察の状況写真を図 175 に示す。布製品は、0.7mm 程度の撚糸を使用している。平織りで織目は粗い。繊維の鑑定法としては、燃え方や薬品に対する耐性などを調べる方法、繊維の形状の顕微鏡観察、染色の違いにより判別する方法などが存在する。ただし、この試料は繊維自体が消失し、漆の中に印象として形状が残されているのみであるため、これらの方法は使用できず、顕微鏡観察のみで鑑定する必要がある。撚糸に用いられている繊維は、均質で長く、太さは30 μm (0.03mm) ほどである。繊維の断面は、やや角ばっている。太さが均質で長いこと、繊維が細いこと、断面の形状から、おそらく絹糸と思われる。布の用途として、木胎部の端を補強するために使われる布(布着用)などが想定される。

6. 赤色顔料付着土器の分析

(1) 試料

土器付着赤色顔料の材質鑑定用を目的とし、科学的調査を実施した。資料は、表20に示す赤色顔料付着土器3点である。調査にあたっては、実測番号2363については事前にマイクروسコープによる赤色顔料の付着状況を記録し、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いた元素分析を行った後、必要に応じてX線回折装置による鉱物同定やエネルギー分散型蛍光X線分析装置を備えた走査電子顕微鏡（SEM-EDS）による元素分析を行い、実測番号2767、502についてはX線回折装置を用いた鉱物同定と走査電子顕微鏡によるパイプ状ベンガラの有無を確認し、さらに「どべ」の可能性も視野に薄片観察を実施した。各試料に対して実施した分析項目を一覧として表20に掲げる。

表20 赤色顔料付着土器の分析項目

No.	報告番号	出土場所	器種	マイクروسコープ観察	薄片観察	蛍光X線分析 (元素分析)	X線回折分析 (鉱物同定)	SEM-EDS分析 (元素分析)	電子顕微鏡 観察
1	2363	6次1区 整地層	土師器杯	○		○		○	○
2	2767	7次3区 SD02	土師器杯		○		○		○
3	502	4次 SK62	土師器杯		○		○		○

(1) 分析方法

(a) マイクロスコープ観察

キーエンス社製のマイクروسコープVHX-1000を用い、倍率X200で赤色顔料の状況を記録した（図版2）。

(b) 蛍光X線分析

日本電子(株)製エネルギー分散型蛍光X線分析装置(JSX-1000S)を利用し、元素分析を実施した。なお、本装置は下面照射型装置であるため、分析にあたってはプロレンフィルム(4 μ m)(ケンプレックス製CatNo426)を介して測定した。測定条件は、管電圧50kV、管電流(自動)、測定時間180秒(live time)、コリメーター0.9mm ϕ 、真空雰囲気である。

表21 X線回折測定条件

装置	UltimaIV Protectus
Target	Cu(K α)
Voltage	40kV
Current	40mA
Detector	高速一次元検出器(D/teX Ultra2)
Calculation Mode	cps
Divergency Slit	1/2°
Scanning Speed	5°/min
Scanning Mode	連続法
Sampling Range	0.02°
Scanning Range	10~45°

(c) X線回折分析

土器片に付着した赤色顔料を削取し、メノウ乳鉢で磨砕した後、無反射試料板に充填し、リガク製X線回折装置(Ultima IV Protectus)を用いて測定した。X線管球:Cu、管電圧-管電流:40kV-40mA、発散スリット(DS):1/2°とし、検出器には高速一次元検出器(D/teX Ultra2, 蛍光X線低減モード)を利用した。測定条件の詳細については表4に示した。

なお、物質の同定解析は、Materials Data, Inc.のX線回折パターン処理プログラムJADE9.5を用い、リファレンスデータベースはICDDのPDF2(Release 2013)を利用して該当する化合物または鉱物を検索した。

附章

(d) SEM-EDS 分析

エネルギー分散形 X 線分析装置 (JED-2300) を備えた日本電子製可搬形走査電子顕微鏡 JCM-5700 により、元素分析を実施した。なお、分析にあたってはチャンバー内に赤色顔料が付着した土器片をそのまま投じて行った。基本条件は、加速電圧 20kV、低真空モードで、反射電子立体 (組成 + 凹凸) 像により観察して画像を取得した後、指定した分析領域の元素情報を取得した。

(e) 電子顕微鏡観察

土器片から削取した試料を水平試料載台にカーボン両面テープで固定した後、日本電子製可搬形走査電子顕微鏡 JCM-5700 により、加速電圧 20kV、低真空モードで形状等の特徴を反射電子立体 (組成 + 凹凸) 像で観察した。

(f) 薄片観察

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土表面に分布する赤色顔料の状況を確認した。赤色顔料の状況を写真撮影して図版に示した。

(3) 結果・考察

・ No.1 (2363)

蛍光 X 線定性スペクトルを図 165 に、SEM-EDS 分析結果を図 166 に示す。

マイクロスコープ観察では、胎土表面に粒子状の赤色物質が付着する状況が認められる。蛍光 X 線分析による元素分析では、朱や鉛丹を示唆するに至る水銀 (Hg) や鉛 (Pb) は検出されず、ベンガラの可能性を示唆する鉄 (Fe) が検出されるのみである。但し、鉄は胎土中に普遍的に含まれる元素でもあるため、ベンガラとするには根拠に欠ける。X 線回折分析による赤鉄鉱の検出を以てさらなる根拠を得たいところではあるが、No.1 に付着した赤色顔料が極めて微量で X 線回折分析が困難な状況から、SEM-EDS 分析によるさらに的を絞った元素分析を実施したところ、鉄 (Fe) が濃集して付着している状況を認めた。このことから、付着する赤色顔料は酸化鉄系で、広義のベンガラと判断出来る。さらに、パイプ状ベンガラに相当する中空円筒状の物質は認められていないことより、非パイプ状ベンガラに位置付けられよう。

・ No.2 (2767)

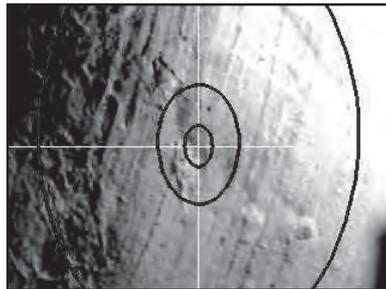
X 線回折図を図 167 に示す。X 線回折分析では、主に胎土に由来すると見られる石英 (quartz) やクリストバライト (cristobalite)、斜長石 (曹長石: albite) が検出されたほか、 $d=2.70\text{ \AA}$ 、 2.51 \AA および 3.67 \AA において赤鉄鉱 (hematite) の存在を示唆する反射が確認される。但し、その反射はブロードで弱い。供試試料中に赤鉄鉱が伴われることは間違いないものと考えるが、赤色顔料であるベンガラと認識出来るか否かの判断は薄片観察による。薄片上では、試料の片側にベンガラと判断される酸化鉄が薄層状を示して分布する。酸化鉄は、濃褐色で厚さ 0.05mm ~ 0.10mm 程度の薄膜状を示して土器胎土片面側に分布する。胎土と酸化鉄の境界は明瞭である。赤色顔料にパイプ状の構造は認められない。なお、電子顕微鏡観察では、パイプ状ベンガラに相当する中空円筒状の物質は認められないことより、仮にベンガラであるならば非パイプ状ベンガラに位置付けられよう。

・ No.3 (502)

X 線回折図を図 168 に示す。X 線回折分析では、主に胎土に由来すると見られる石英 (quartz) やクリストバライト (cristobalite)、斜長石 (曹長石: albite)、カリ長石 (微斜長石: microcline)、角閃石

(苦土角閃石：magnesiohornblende) が検出されたほか、 $d=2.70\text{ \AA}$ 、 2.52 \AA および 3.67 \AA において赤鉄鉱 (hematite) の存在を示唆する反射が確認される。但し、その反射はブロードで弱い。供試試料中に赤鉄鉱が伴われることは間違いのないものと考えるが、赤色顔料であるベンガラと認識出来るか否かの判断は薄片観察による。胎土の薄片上では、ベンガラと判断される酸化鉄の分布は認められない。胎土の素地にセリサイトが残存していることから、焼成温度は 800°C 程度であるとみられる。一方で、弱酸化している角閃石が基質にきわめて微量分布していることから、焼成温度は 800°C から 900°C の間と推定される。基質に分布する酸化鉄が、肉眼で土器が赤色を帯びる原因と推定される。なお、電子顕微鏡観察では、パイプ状ベンガラに相当する中空円筒状の物質は認められないことより、仮にベンガラであるならば非パイプ状ベンガラに位置付けられよう。

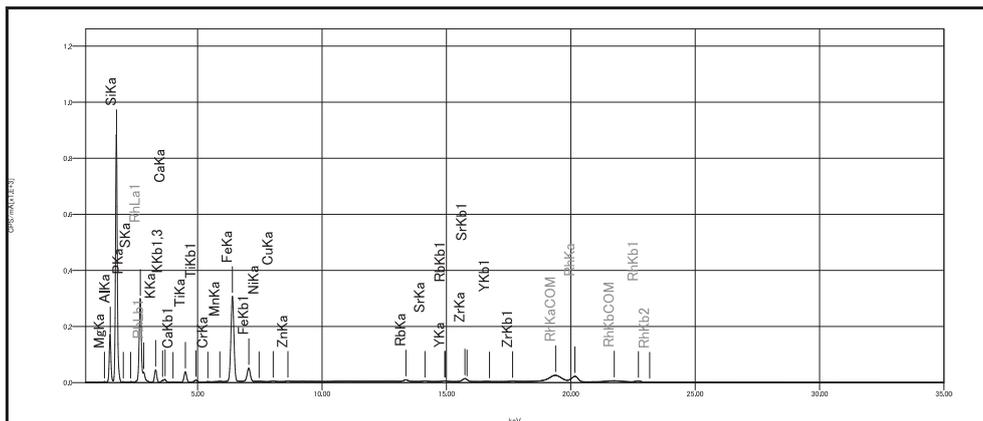
【測定画像】



【分析条件】

測定機器	JSX-1000S
管電圧	50 [KV]
管電流	1.000 [mA]
コリメーター	0.9 mm
分析時間	180 [sec]
一次フィルタ	Open

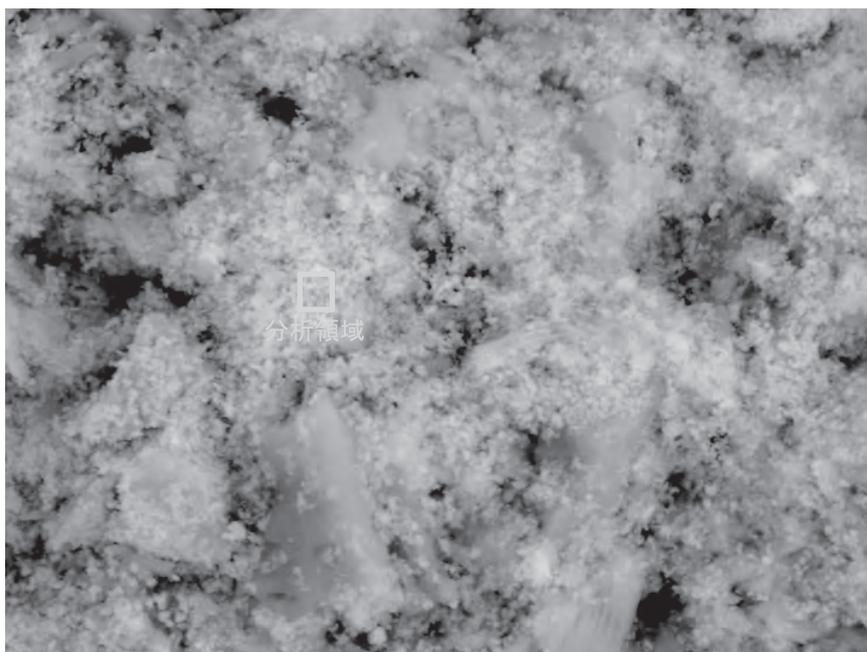
【スペクトル】



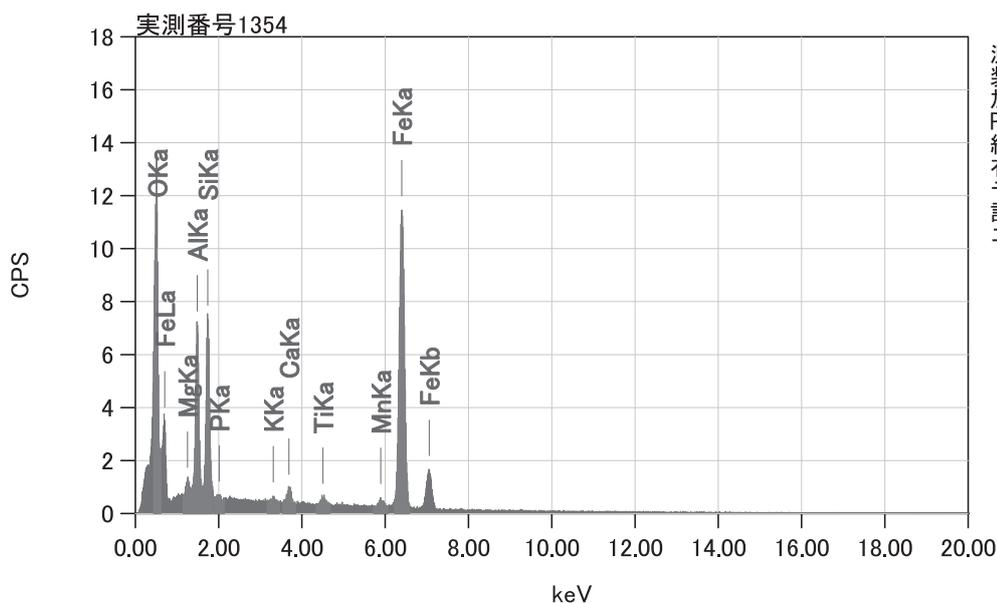
【定性結果】

原子番号	元素名	積分強度	ライン	フィルタ
12	Mg	2680	K	Open
13	Al	239977	K	Open
14	Si	1299704	K	Open
15	P	1960	K	Open
16	S	5641	K	Open
19	K	95670	K	Open
20	Ca	21371	K	Open
22	Ti	105697	K	Open
24	Cr	2799	K	Open
25	Mn	5041	K	Open
26	Fe	1023185	K	Open
28	Ni	2058	K	Open
29	Cu	8700	K	Open
30	Zn	7871	K	Open
37	Rb	30633	K	Open
38	Sr	11402	K	Open
39	Y	8675	K	Open
40	Zr	62962	K	Open

図 165 No.1 (2363) の蛍光 X 線定性スペクトル



タイトル : 実測番号1354
 装置 : JCM-5700
 加速電圧 : 20.00 kV
 倍率 : x 4,000



測定条件
 装置名 : JCM-5700
 加速電圧 : 20.0 kV
 PHAモード : T4
 経過時間 : 330.96 sec
 有効時間 : 300.00 sec
 デッドタイム : 9 %
 計数率 : 956 cps
 エネルギー範囲 : 0 - 20 keV

ZAF法 簡易定量分析(酸化物)
 フィッティング係数 : 0.2851
 全酸素数 : 24.0

元素	(keV)	質量%	誤差%	モル%	化合物	質量%	カチオン数	K
O		36.69						
Mg K	1.253	0.91	0.40	4.15	MgO	1.51	0.39	0.6732
Al K	1.486	7.80	0.38	16.01	Al ₂ O ₃	14.74	3.03	7.4556
Si K	1.739	7.79	0.41	30.71	SiO ₂	16.66	2.90	8.8831
P K	2.013	0.20	0.42	0.35	P ₂ O ₅	0.45	0.07	0.2946
K K	3.312	0.25	0.22	0.35	K ₂ O	0.30	0.07	0.4744
Ca K	3.690	0.84	0.28	2.32	CaO	1.18	0.22	1.7321
Ti K	4.508	0.49	0.40	1.14	TiO ₂	0.82	0.11	0.8847
Mn K	5.894	0.30	0.56	0.61	MnO	0.39	0.06	0.5198
Fe K	6.398	44.74	0.64	44.37	Fe ₂ O ₃	63.96	8.38	79.0824
合計		100.00		100.00		100.00	15.22	

図 166 No.1(2363)のSEM-EDS分析結果

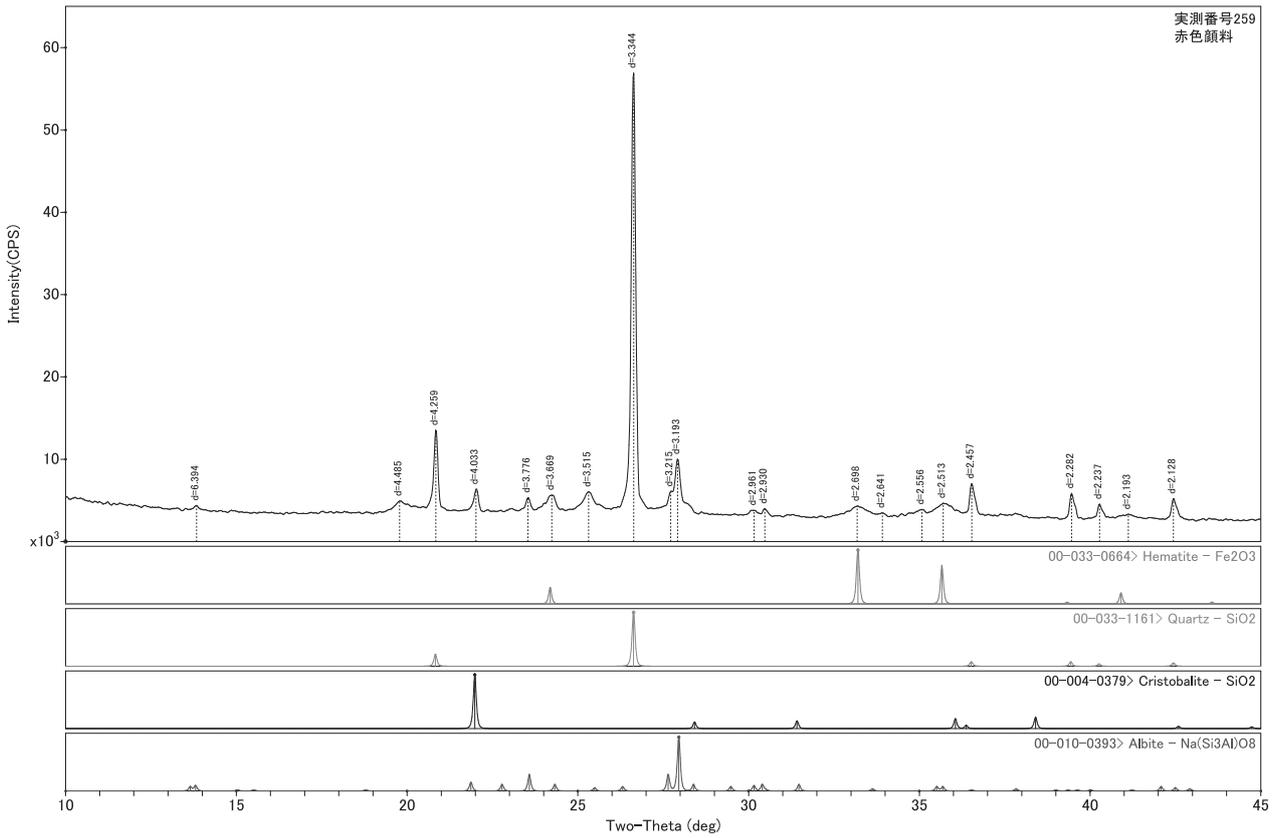


図 167 No.2(2767)のX線回折図

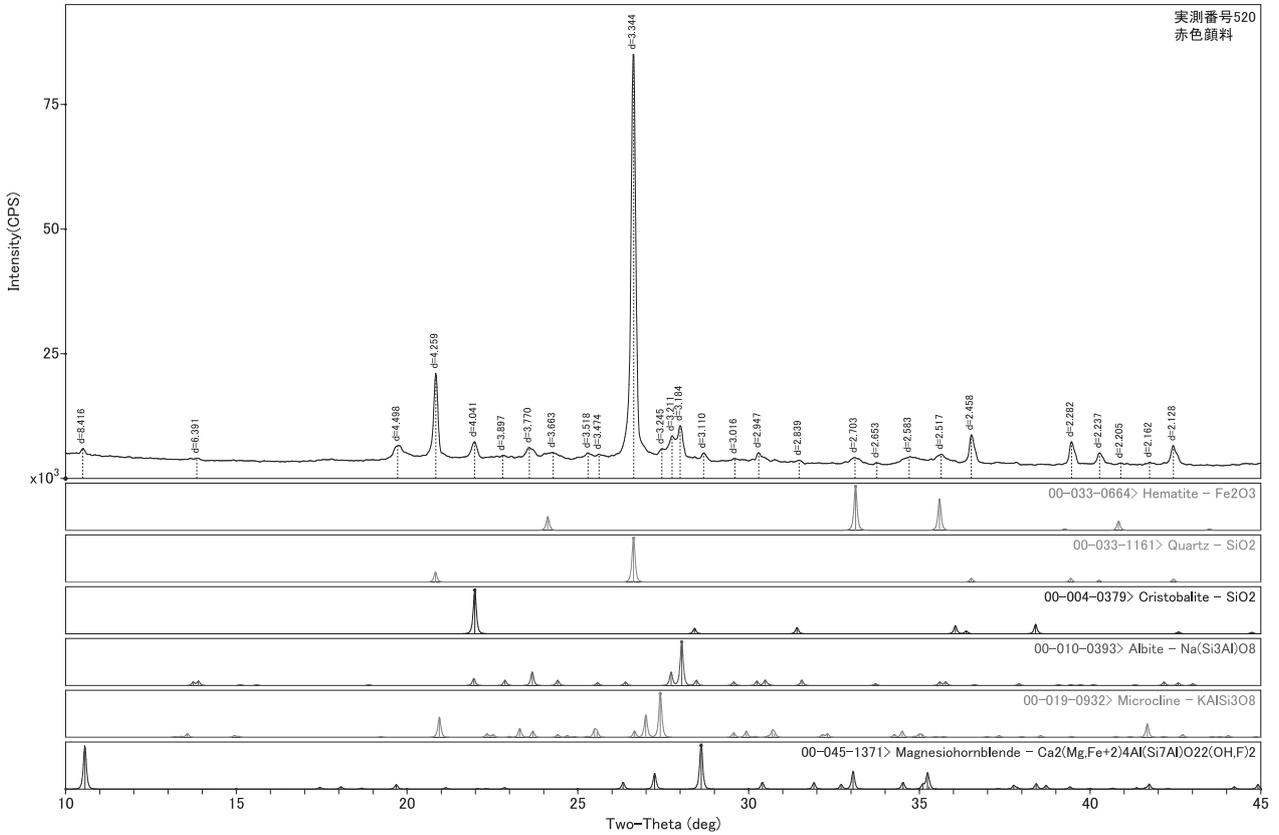


図 168 No.3(502)のX線回折図

附章

7. 石材鑑定

(1) 試料

試料は、No.1 (440) 4次 SK03 出土玉砥石及び、No.2 (535) 4次 SE02 出土の権の2点である。

(2) 分析方法

岩石肉眼鑑定は、野外用ルーペを用いて行い、石材表面の鉱物や組織を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。

(3) 結果

・No.1 (440) 玉砥石

本試料は、粘板岩に鑑定された。肉眼では同定不能の微細粒子から構成される。試料側面にへき開が確認される。また、試料表面に水酸化鉄の付着が認められる。

・No.2 (535) 権

本試料は、黒雲母流紋岩に鑑定された。塊状緻密質の岩相を示し、石英または長石類と推測される斑晶鉱物の脱落痕が僅かに試料表面に認められる。試料表面に水酸化鉄の付着が認められる。

(4) 考察

遺跡が所在する姫路市は、ペルム紀の超丹波帯、ペルム紀～三畳紀の丹波帯の砂岩、頁岩、チャートからなる堆積岩類が分布している。後期白亜紀には、大規模珪長質火山活動によって噴出した相生層群の流紋岩および同質火砕岩類が分布する。また、新第三紀に貫入した、花崗閃緑岩、花崗閃緑斑岩、流紋岩、デイサイトなどの岩脈が分布する（山元ほか，2000）。

玉砥石に使用される粘板岩は、泥質岩を原岩とする変成岩類である。粘板岩は、西南日本の秩父帯や四万十帯をはじめ、日本各地の中古生層の地質に分布している。したがって産出は特に珍しいものではない。一方、権に使用される黒雲母流紋岩は斑晶に乏しく塊状の岩相を示す。遺跡周辺では、白亜紀の相生層群の流紋岩および同質火砕岩類が分布しており、これらの地質から採取可能な石材である。粘板岩および黒雲母流紋岩は在地性の石材と考えられる。

8. 種実同定

(1) 試料

試料は、6次1区 SE01、4次 SE01、5次4区 SK62、5次5区 SE01 より出土した種実遺体4遺構6点58個である。試料はエタノール溶液で液浸保存されており、6次1区 SE01、4次 SE01 は2点存在する。試料の詳細は、結果とともに表22に示す。

(2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や藤下（1984）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2018）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、各分類群の写真を添付する。また、保存状態が良好な種実遺体を対象として、デジタルノギスを用いて長さ、幅、厚さを計測し、結果を一覧表に併記する。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸保存する。

(3) 結果

結果を表22に示す。被子植物5分類群(オニグルミ、クリ、モモ、モモルディカメロン型、ヒョウタン類)58個の種実遺体が同定された。種実遺体の出土個数は、6次1区SE01が21個(オニグルミ3個、モモ18個)は、4次SE01が5個(モモ)、5次4区SK62が1個(モモ)、5次5区SE01が31個(クリ3個、モモ2個、モモルディカメロン型1個、ヒョウタン類25個)である。5次5区SE01が最も多く、6次1区SE01が次ぐ。

表22 種実同定結果

No.	遺構名		試料瓶蓋記載			分類群	部位	状態	個数	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	図版番号	備考		
	6次	1区	SE01	篩選別	最下層 砂											
1	6次1区SE01	6次	1区	SE01	篩選別	オニグルミ	核	破片	1	-	25.79 +	22.11 +	12.40 +	1	頂部・側部・隔壁欠損	
						モモ	核	完形未満	2	1	24.44 +	21.15	16.38	6	側面摩耗,頂部丸い	
								破片	4	-	-	-	-	7	頂部摩耗	
1	6次1区SE01	6次	1区	SE01	最下層 砂	オニグルミ	核	破片	2	-	22.41 +	-	-	2・3	縫合線残存	
						モモ	核	完形	1	1	25.51	21.25	17.25	8	頂部丸い	
									2	25.46	19.89	15.85	9	頂部丸い		
								3	23.09	18.86	15.81	10	頂部尖る			
								破片	9	-	-	-	-	-	-	
2	5次4区SE01	5次	4区	SE01	2段目下粘土・砂	モモ	核	完形	1	-	26.36	19.49	14.71	11	頂部丸い	
2	5次4区SE01	5次	4区	SE01	最下層	モモ	核	完形	1	1	20.58	16.41	13.34	12	頂部尖る	
									2	22.84	18.97	14.16	13	頂部尖る		
								完形未満	1	-	25.66	15.84 +	12.80 +	-	頂部尖る	
3	5次4区SK62	5次	4区	SK62	15~17層炭層	モモ	核	破片	1	-	19.76 +	16.53 +	7.21 +	14		
4	5次5区SE01	5次	5区	SE01		クリ	果実	破片	3	-	20.78 +	-	-	4・5		
						モモ	核	完形	1	-	22.33	17.15	12.45	15	頂部尖る	
								破片	1	-	-	-	-	-	頂部尖る	
						モモルディカメロン型	種子	完形	1	-	8.26	4.03	1.50	16		
						ヒョウタン類	種子	破片	19	1	-	9.57	11.26	2.57	18	厚さ:果皮厚
										1	12.52	5.83	2.21	17		
										2	12.28	5.46	2.07	-		
										3	11.91	5.65	1.93	-		
										4	12.39	5.74	1.94	-		
										5	11.86	5.56	2.03	-		
										6	12.33	5.75	2.02	-		
										7	11.70	6.02	2.12	-		
										8	11.82	5.85	1.97	-		
										9	11.91	5.73	2.36	-		
										10	11.52	5.86	2.12	-		
										11	11.91	5.72	1.88	-		
										12	11.69	5.26	1.93	-		
										13	11.23	5.77	2.75	-		
										14	11.48	5.67	2.01	-		
										15	11.84	5.87	1.85	-		
16	11.46	5.48	2.36	-												
17	11.83	5.57	1.98	-												
18	11.95	5.65	2.04	-												
19	10.73	4.35	2.78	-												
	完形未満	1	-	10.91 +	5.43	1.57	-									
	破片	4	-	-	-	-	-									

注)計測はデジタルノギスを使用し、欠損等は残存値に「+」で示した。

栽培植物は、モモ26個、モモルディカメロン型1個、ヒョウタン類種子24個、果実1個の、計52個が確認され、全体の9割を栽培植物が占める。モモが最も多く、ヒョウタン類が次ぐ。栽培植物を除いた分類群は、木本から成り、落葉広葉樹で高木になる堅果類のオニグルミ3個、クリ3個の、計6個が確認された。

種実遺体の保存状態は比較的良好である。以下、各分類群の形態的特徴等を記す。

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属

附章

6次1区 SE01 から出土した核は灰褐色、径 2.5～4cm の広卵体。頂部が尖り、1本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。出土核は縫合線に沿わず割れた破片で、残存径 25.8mm。頂部や側部、隔壁等欠損も確認される。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

5次5区 SE01 から出土した果実は黒灰褐色、径 2.5～4cm の三角状広卵体で一側面は偏平、反対面は丸みがある。果皮表面はやや平滑で浅く微細な縦筋がある。果皮内面は粗面で粗い縦筋(種皮)がある。基部全面を占める着点は別組織で、暗灰褐色、粗く不規則な粒状紋様があり、果皮との接線は波打つ。出土果実は破片で残存長 20.8mm。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

4試料から出土した核(内果皮)は灰～黒褐色、長さ 20.6～26.4mm、幅 16.4～21.3mm、厚さ 12.5～17.3mm のやや偏平な広楕円体で、頂部が丸い形状やや尖る形状、同一試料内で類似する形状が確認される。内果皮表面には縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、粗いしわ状にみえる。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

5次5区 SE01 より出土した種子は灰褐色、長さ 8.26mm、幅 4.03mm、厚さ 1.50mm の偏平な狭倒皮針体、基部に倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面には縦長の細胞が配列する。藤下(1984)の基準による大粒のモモルディカメロン型(長さ 8.10mm 以上)に該当する。

・ヒョウタン類 (*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒョウタン属

5次5区 SE01 より出土した果実は黄灰褐色、残存長 9.6mm、残存径 11.3mm、果皮厚 2.6mm。果実本体の形状は不明である。果皮表面は平滑で光沢がある。内面は海綿状で頂部と基部を結ぶ維管束の筋が配列する。

種子は灰褐色、偏平な倒広皮針体を呈し、頂部は切形で角張り、基部は切形で臍と発芽口がある。種皮表面は粗面で、両面外縁部の幅広く低い稜に2本の縫線が明瞭である個体が多いことから、成熟果に由来すると考えられる。完形種子19個の計測値は、長さ 10.73～12.52(平均 11.81±標準偏差 0.42) mm、幅 4.35～6.02(平均 5.62±0.35) mm、厚さ 1.85～2.78(平均 2.12±0.27) mm である。

(4) 考察

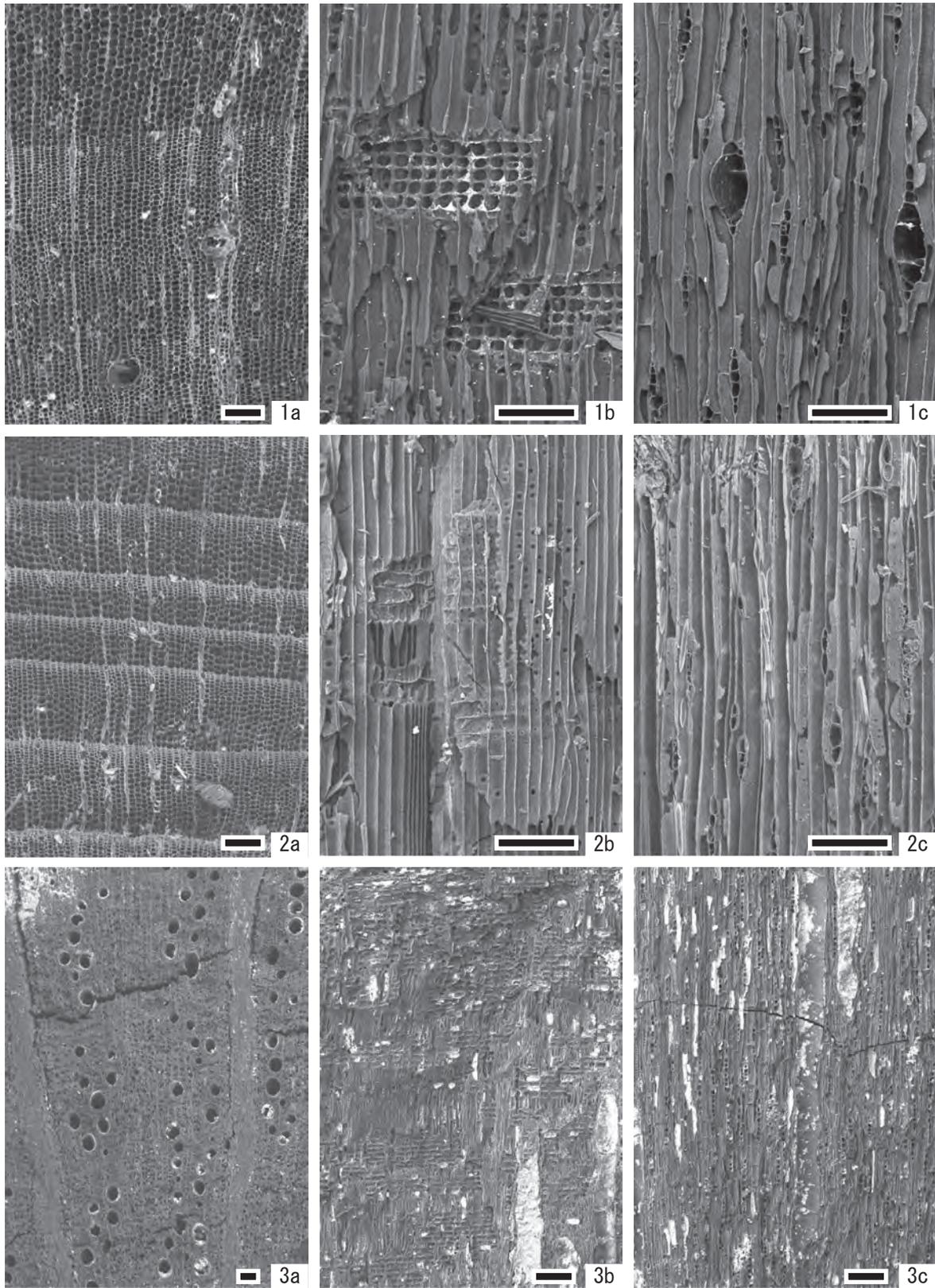
種実同定の結果、栽培植物のモモ、モモルディカメロン型、ヒョウタン類が確認され、種実全体の9割を占める組成を示した。近辺で栽培されたか持ち込まれかは不明であるが、利用された植物質食料と示唆される。

最も多く出土した果樹のモモは、核の頂部が丸い形状や尖る形状、同一試料内で類似する形状などが確認され、複数の系統の利用や遺構間差異が示唆される。次いで多産した果菜類のヒョウタン類は、5次5区 SE01 から種子と果実片が確認され、種子の形状より成熟果に由来すると考えられる。

栽培植物を除いた分類群は、落葉高木から成り、6次1区 SE01 より河畔林要素のオニグルミと、5次5区 SE01 より二次林要素のクリが確認された。堅果類のオニグルミ、クリは、子葉が食用可能であることから、周辺の森林より持ち込まれ、供伴する栽培植物とともに利用されたと考えられる。6次1区 SE01 から出土したオニグルミは、縫合線に沿わず割れており、頂部や側部、隔壁などを欠損することから、人による打撃痕の可能性はある。

引用文献

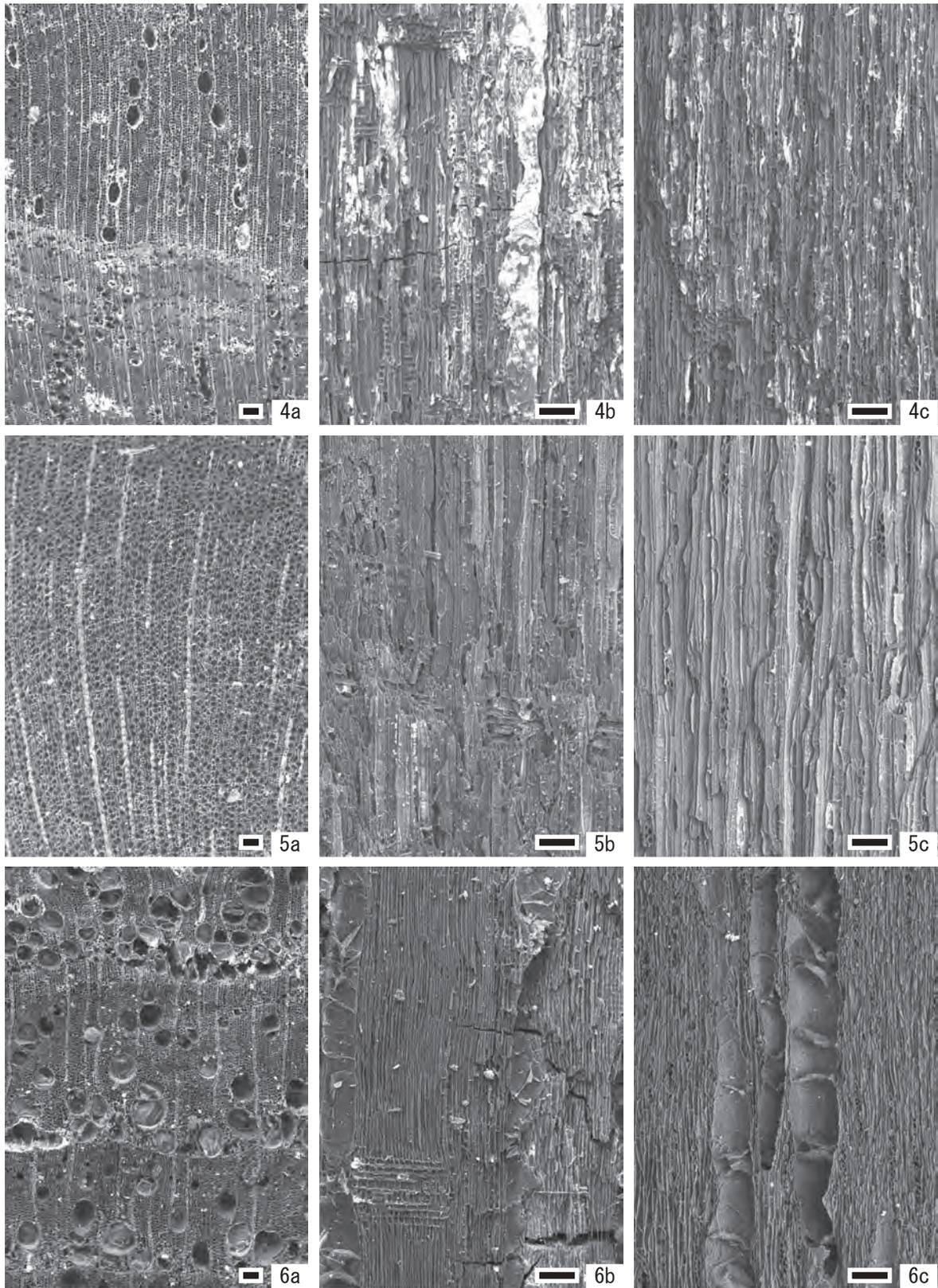
- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337–360.
- 藤下典之, 1984, 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法. 古文化財の自然科学的研究, 古文化財編集委員会編, 同朋舎, 638–654.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81–181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66–176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83–201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30–166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47–216.
- 市川米太・萩原 直樹, 1975, 電子顕微鏡による木簡の墨の研究. 古文化財教育研究報告, 4, 1–5.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑 (2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- 岡見知己, 1989, 製墨技術に関する研究. 研究紀要, 23, 由良大和古代研究協会, 203–218.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62, 1–33.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355–363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂-. ネイチャーウォッチングガイドブック, 誠文堂新光社, 303p.
- 山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和, 2000, 地域地質研究報告 5万分の1地質図幅「龍野」. 地質調査所.



- 1. マツ属複維管束亜属 (No. 3)
- 2. ヒノキ (No. 1)
- 3. アカガシ亜属 (No. 2)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

図 169 炭化材顕微鏡写真 (1)



- 4. シイ属 (No. 2)
- 5. シキミ (No. 3)
- 6. トネリコ属 (No. 3)

a: 木口 b: 柃目 c: 板目
スケールは100 μ m

図170 炭化材顕微鏡写真(2)



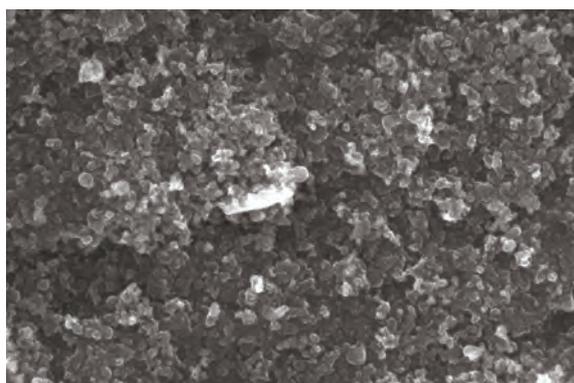
マイクロスコープ(No.1)

1mm



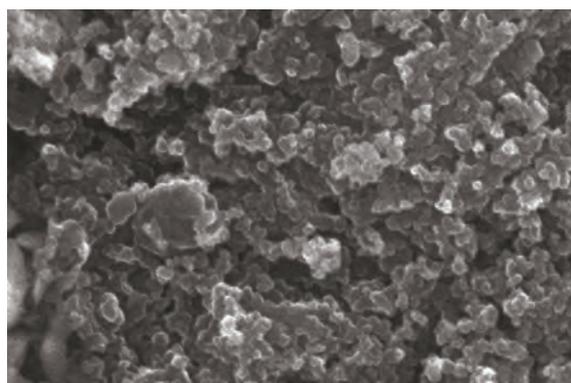
マイクロスコープ(No.1)

0.2mm



電子顕微鏡(No.1)

1μm



電子顕微鏡(No.1)

1μm



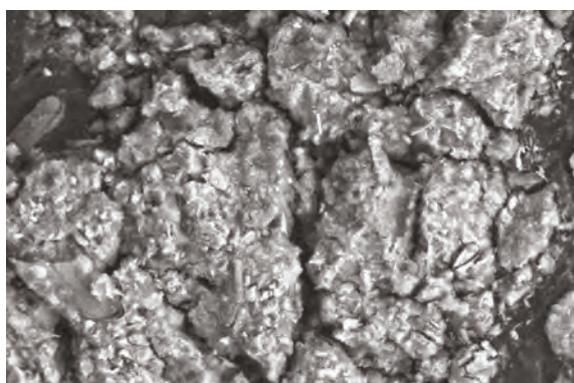
マイクロスコープ(No.2)

1mm



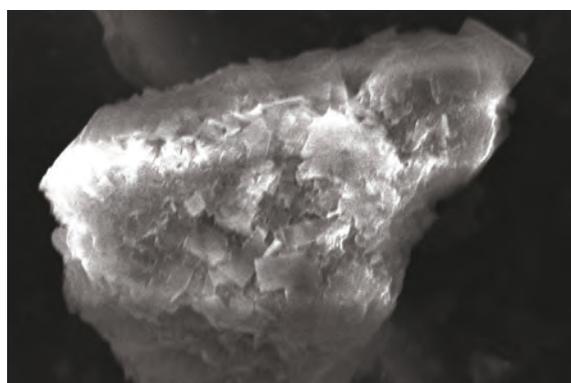
マイクロスコープ(No.2)

0.2mm



電子顕微鏡(No.2)

10μm



電子顕微鏡(No.2)

2μm

図 171 墨痕電子顕微鏡観察 (1)



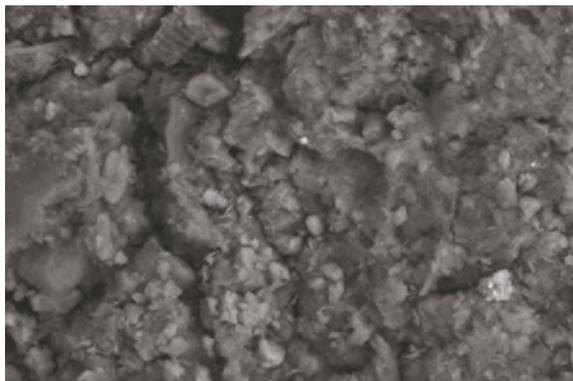
マイクロスコープ(No.3)

1mm



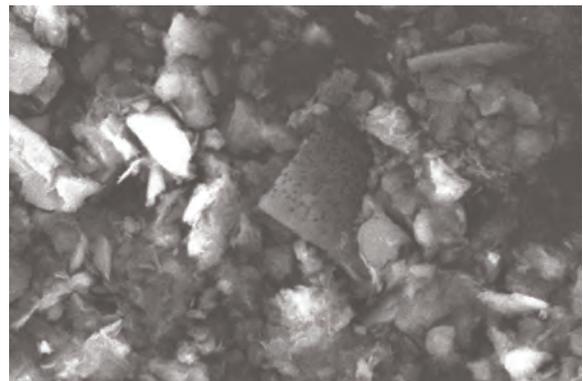
マイクロスコープ(No.3)

0.2mm



電子顕微鏡(No.3)

10µm



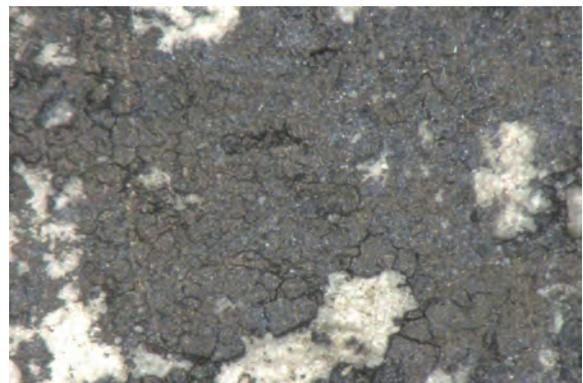
電子顕微鏡(No.3)

2µm



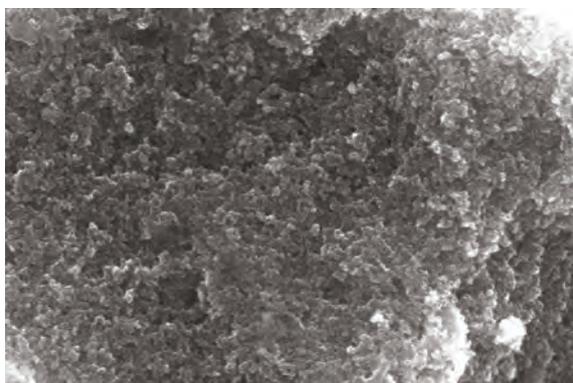
マイクロスコープ(No.4)

1mm



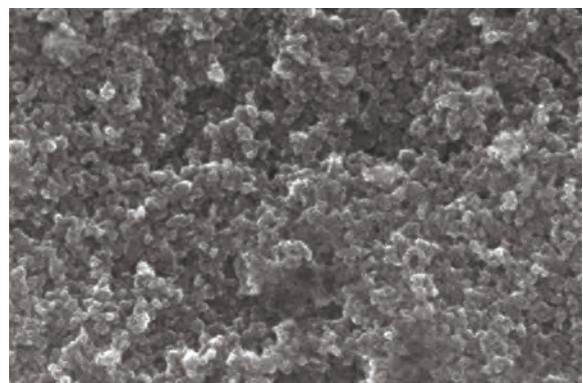
マイクロスコープ(No.4)

0.2mm



電子顕微鏡(No.4)

1µm



電子顕微鏡(No.4)

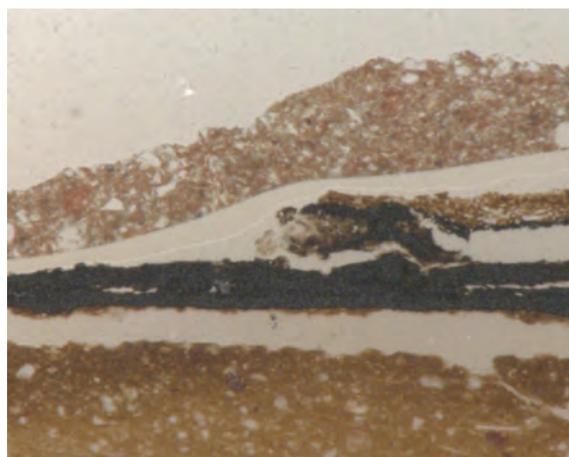
1µm

図 172 墨痕電子顕微鏡観察 (2)



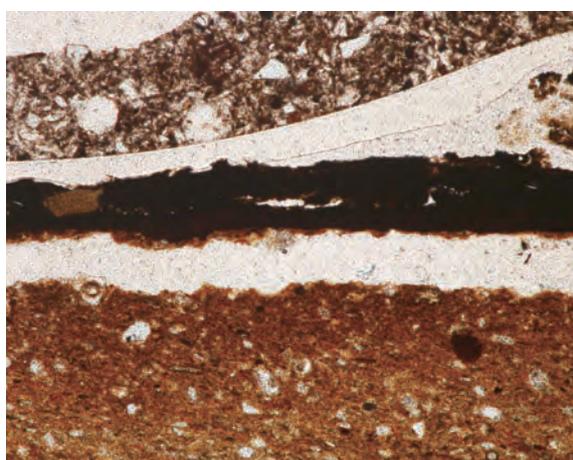
表面(No.1)

1mm



薄片落射光(No.1)

0.5mm



薄片透過光(No.1)

0.5mm



表面(No.2-1)

1mm



薄片落射光(No.2-1)

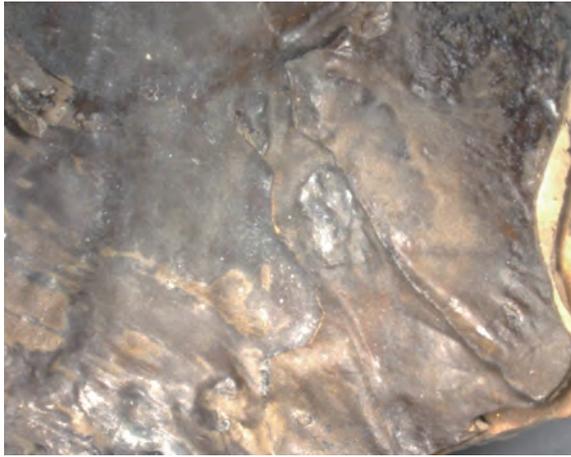
0.5mm



薄片透過光(No.2-1)

0.5mm

图 173 漆附着土器 (1)



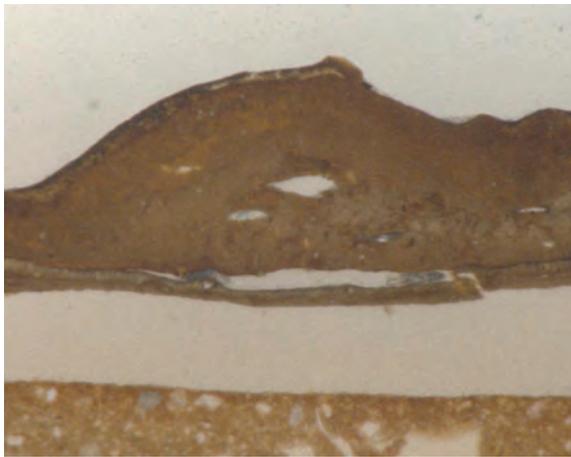
表面(No.3-1)

1mm



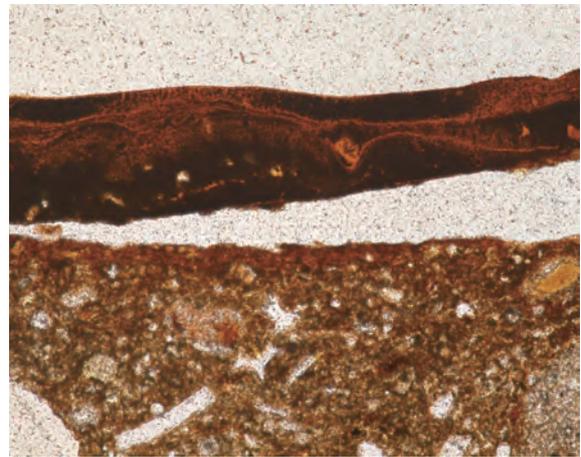
薄片落射光(No.3-1)

0.5mm



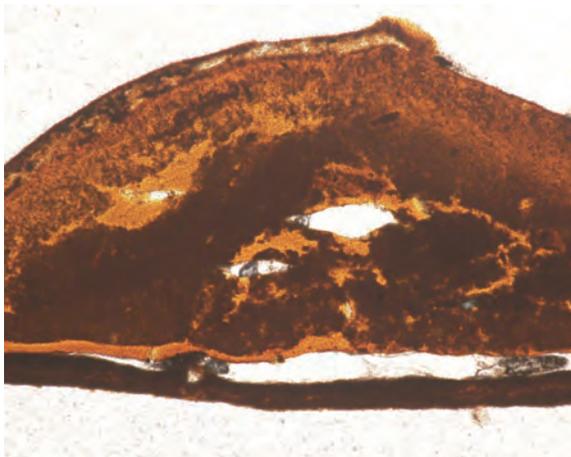
薄片落射光(No.3-1)

0.5mm



薄片透過光(No.3-1)

0.5mm



薄片透過光(No.3-1)

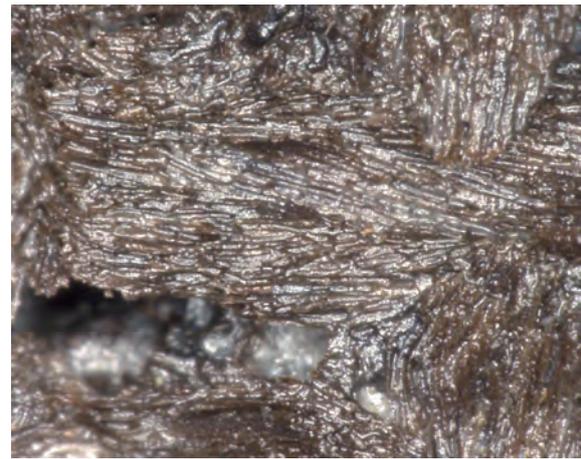
0.5mm

図 174 漆付着土器 (2)



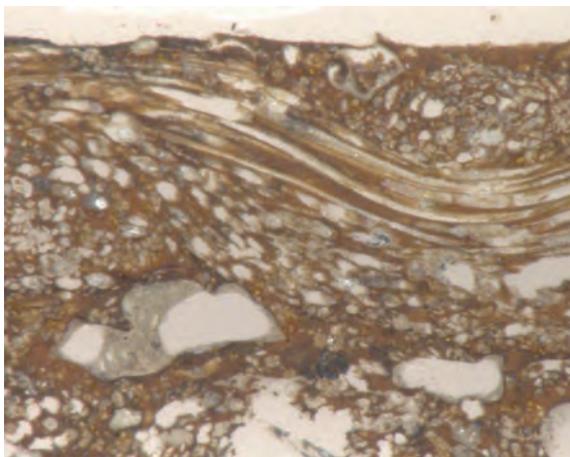
表面(No.1)

1mm



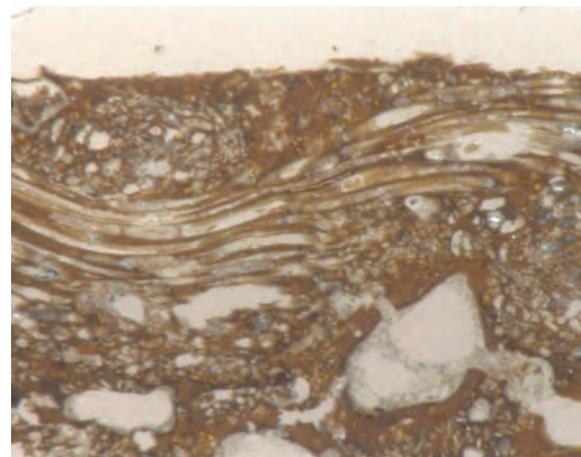
表面(No.1)

1mm



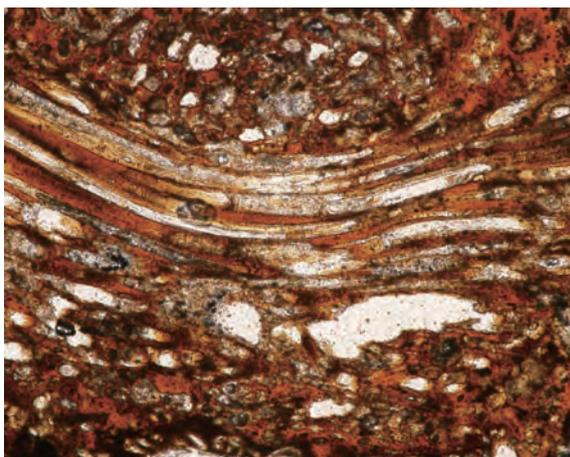
薄片落射光(No.1)

0.5mm



薄片落射光(No.1)

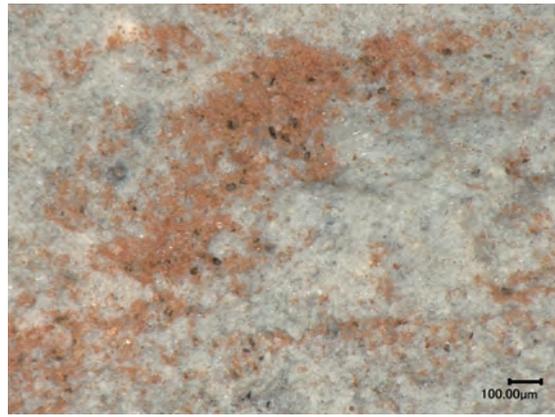
0.5mm



薄片透過光(No.1)

0.5mm

图 175 漆附着布



No.1(2363) 赤色顔料 マイクロスコップ写真



墨No.1(1494)



墨No.2(写-27)

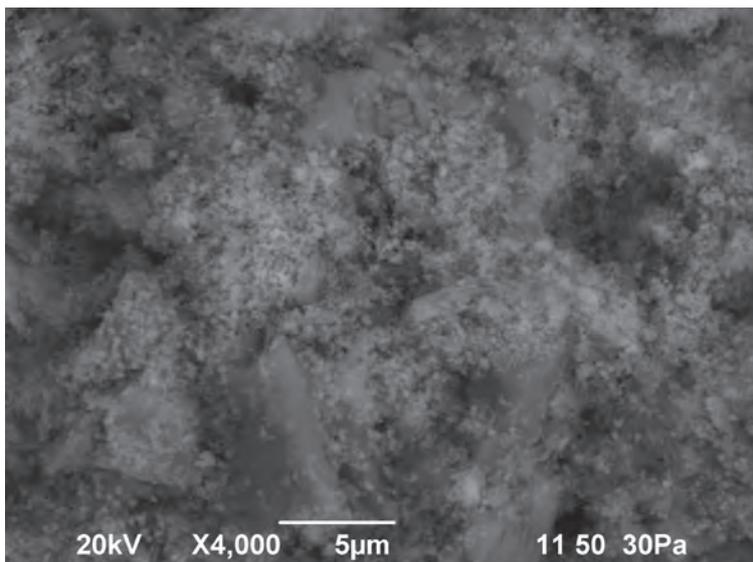


墨No.3(写-40)

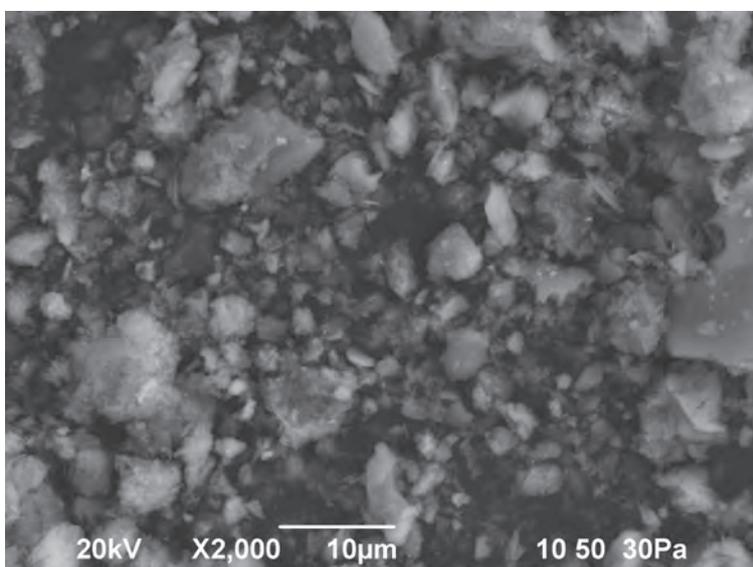


墨No.4(写-24)

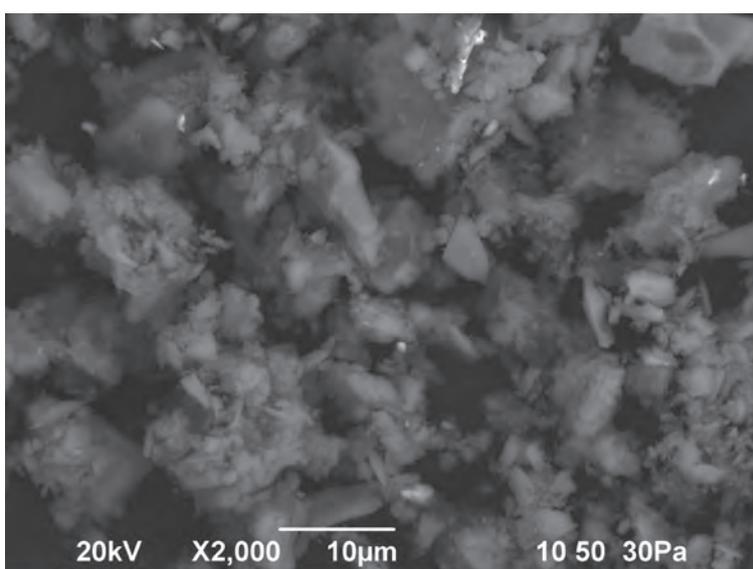
図176 赤色顔料・墨痕試料採取位置



No.1(2363)
赤色顔料
[反射電子立体像(×4,000)]

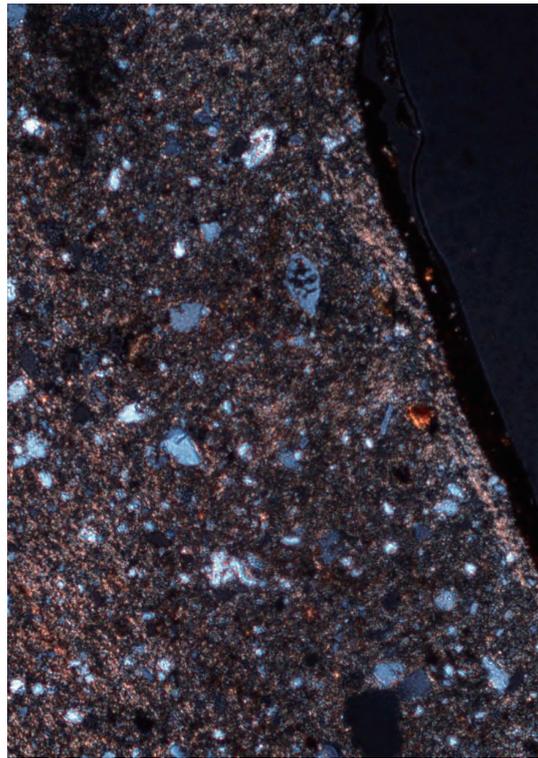
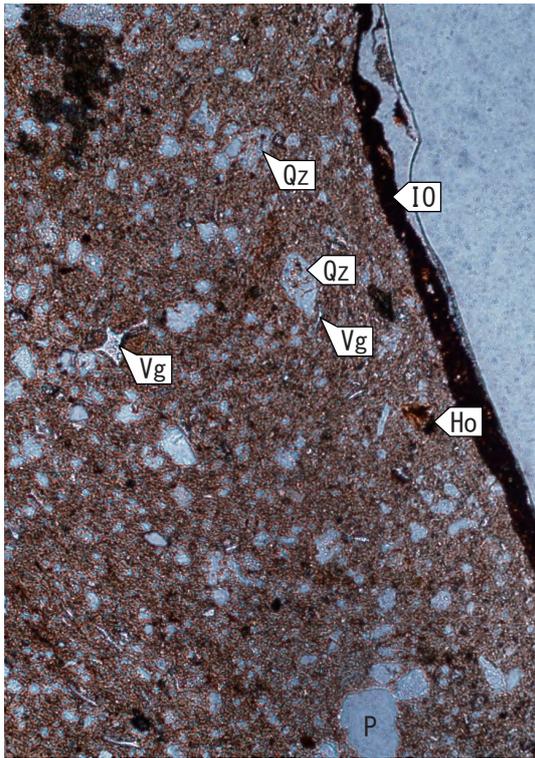


No.2(2767)
赤色顔料
[反射電子立体像(×2,000)]

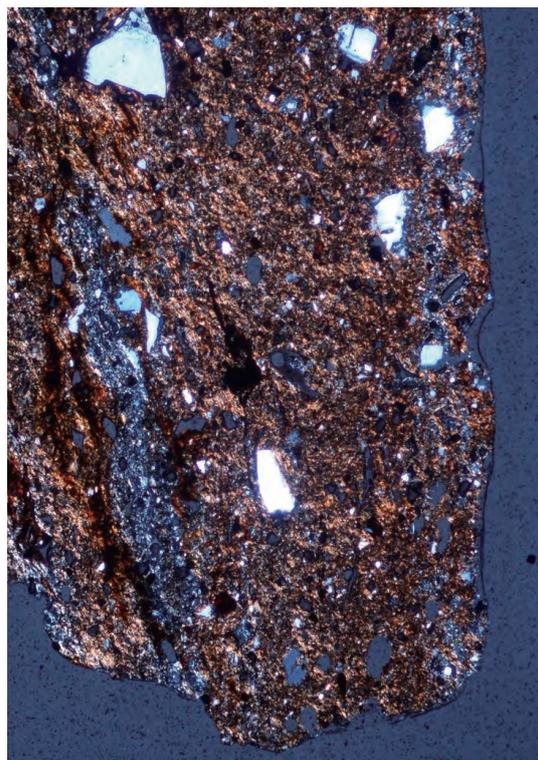
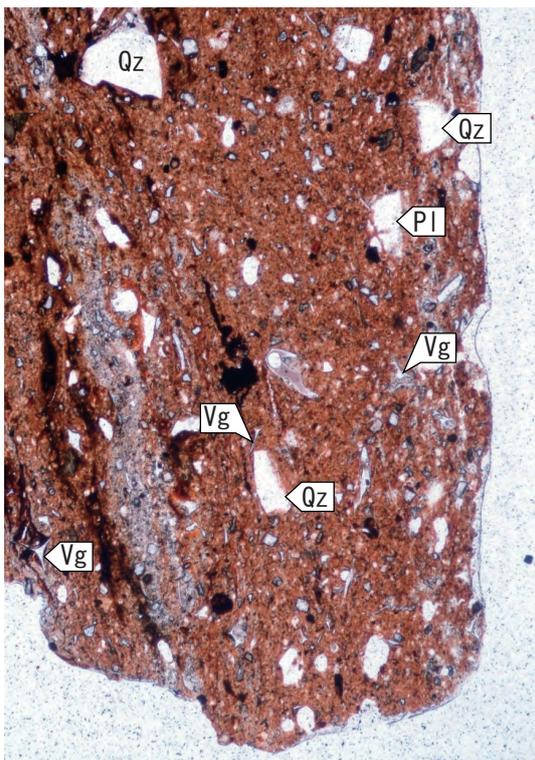


No.3(502)
赤色顔料
[反射電子立体像(×2,000)]

図 177 赤色顔料顕微鏡写真



No. 2 (2767) 土師器杯



No. 3 (502) 土師器杯

Qz: 石英, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Vg: 火山ガラス, I0: 酸化鉄, P: 孔隙.
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図 178 胎土薄片



- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1. オニグルミ 核(6-SE01) | 2. オニグルミ 核(6-SE01) |
| 3. オニグルミ 核(6-SE01) | 4. クリ 果実(5-SK05) |
| 5. クリ 果実(5-SK05) | 6. モモ 核(6-SE01) |
| 7. モモ 核(6-SE01) | 8. モモ 核(6-SE01) |
| 9. モモ 核(6-SE01) | 10. モモ 核(6-SE01) |
| 11. モモ 核(4-SE01) | 12. モモ 核(4-SE01) |
| 13. モモ 核(4-SE01) | 14. モモ 核(5-SK62) |
| 15. モモ 核(5-SK05) | 16. モモルディカメロン型 種子(5-SK05) |
| 17. ヒョウタン類 種子(5-SK05) | 18. ヒョウタン類 果実(5-SK05) |

図 179 種実遺体

第3節 姫路市豆腐町遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所

1. 試料

試料は姫路市豆腐町遺跡から出土した木製品 15 点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹 4 種、広葉樹 2 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

表 23 豆腐町遺跡出土木製品同定表

報告番号	出土地点	名称	樹種
2956	7次3区SD02	橋脚2	マツ科マツ属[二葉松類]
写真図版215	6次1区SP282	礎板1	スギ科スギ属スギ
写真図版215	6次1区SE01	井側33	スギ科スギ属スギ
写真図版212	5次4区SE01	井戸枠4	スギ科スギ属スギ
1350	5次4区SE01	机天板	ヒノキ科ヒノキ属
1535	5次5区SE01	斎串	ヒノキ科ヒノキ属
1541	5次5区SE01	木簡	ヒノキ科ヒノキ属
1628	6次1区SE01	斎串	ヒノキ科ヒノキ属
2434	6次1区SP280	柱根	ヒノキ科ヒノキ属
写真図版211	4次SE01	西横棧	ヒノキ科ヒノキ属
写真図版212	5次4区SE02	曲物3	ヒノキ科アスナロ属
写真図版216	7次3区SD02	橋脚杭3	ヒノキ科アスナロ属
870	6次3区SK08	下駄	ブナ科クリ属クリ
2955	7次3区SD02	橋脚1	ブナ科クリ属クリ
1632	6次1区SE01	櫛	バラ科カマツカ属カマツカ

1) マツ科マツ属 [二葉松類] (*Pinus* sp.)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属 [二葉松類] はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

2) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

3) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

4) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujobopsis* sp.)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

5) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（~500 μ m）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

6) バラ科カマツカ属カマツカ (*Pourthiaea villosa* Decaisne var. *laevis* Stapf)

散孔材である。木口では道管（~50 μ m）がほとんど単独で平等に分布する。柾目では道管は通常単穿孔となるがときに階段穿孔あるいは網状穿孔を有する。道管側壁には交互壁孔がみられる。道管内壁に水平に巻くらせん肥厚が存在する。木繊維の内腔はきわめて狭い。軸方向樹細胞は短接線状ないし散在状で、方形ないし洋樽状にふくれた多宝結晶細胞がみられる。道管放射組織間壁孔は小さく多い。板目では1~4列となり、高さは比較的良く揃っており、0.5mm以下である。放射組織縁辺の細胞の壁は厚い。放射柔細胞に着色物質が存在する。ピスフレックスが出やすい。カマツカは本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~V」京都大学木質科学研究所（1999）
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社（1979）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

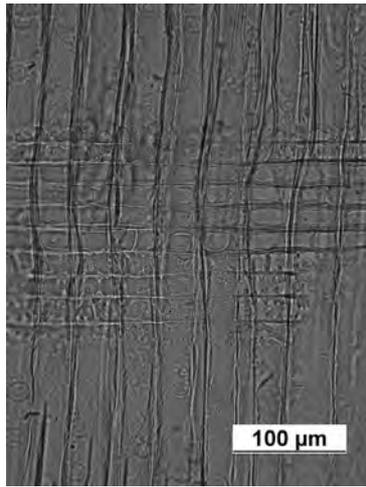
◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fil

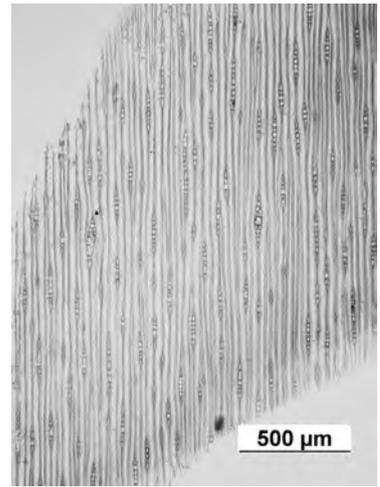
第3節 姫路市豆腐町遺跡出土木製品の樹種調査結果



木口



柁目



板目

7次3区SD02 2956 マツ科マツ属 [二葉松類]



木口

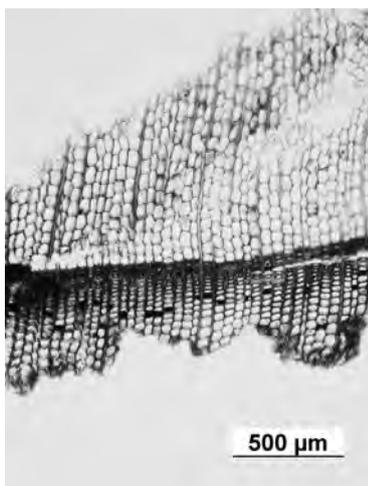


柁目

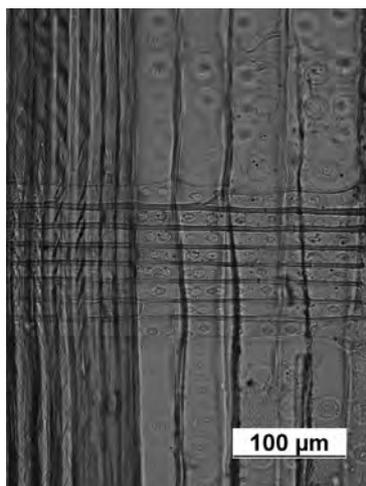


板目

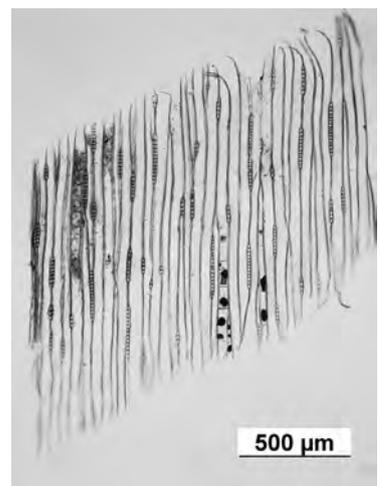
写真図版 215 6次1区SP282 スギ科スギ属スギ



木口



柁目



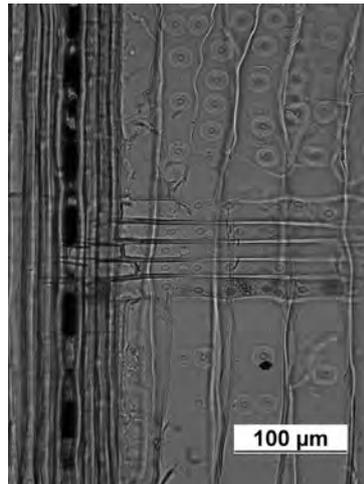
板目

写真図版 215 6次1区SE01 スギ科スギ属スギ

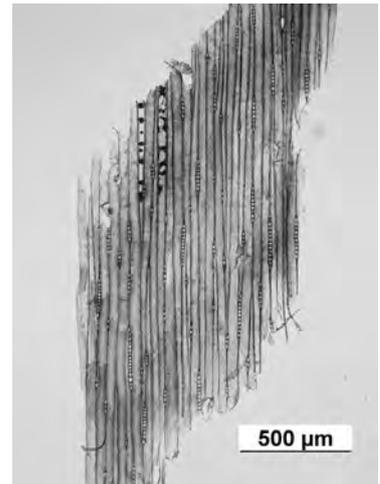
図180 樹種同定 (1)



木口



沓目

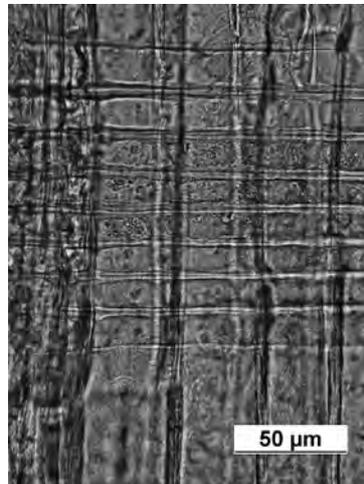


板目

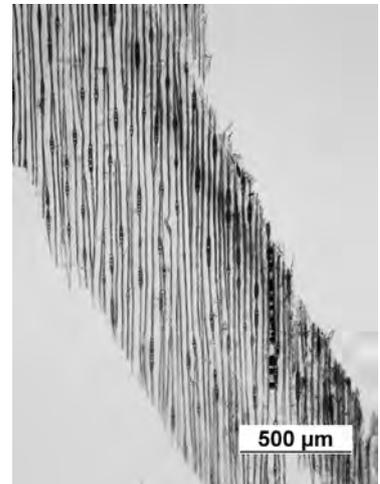
写真図版 212 5次4区 SE01 井戸粹4 スギ科スギ属スギ



木口

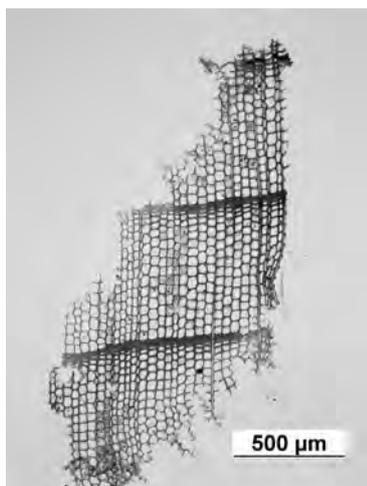


沓目

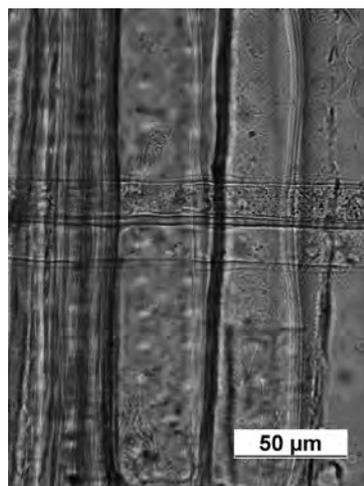


板目

5次4区 SE01 1350 ヒノキ科ヒノキ属



木口



沓目



板目

5次5区 SE01 1535 ヒノキ科ヒノキ属

図 181 樹種同定 (2)

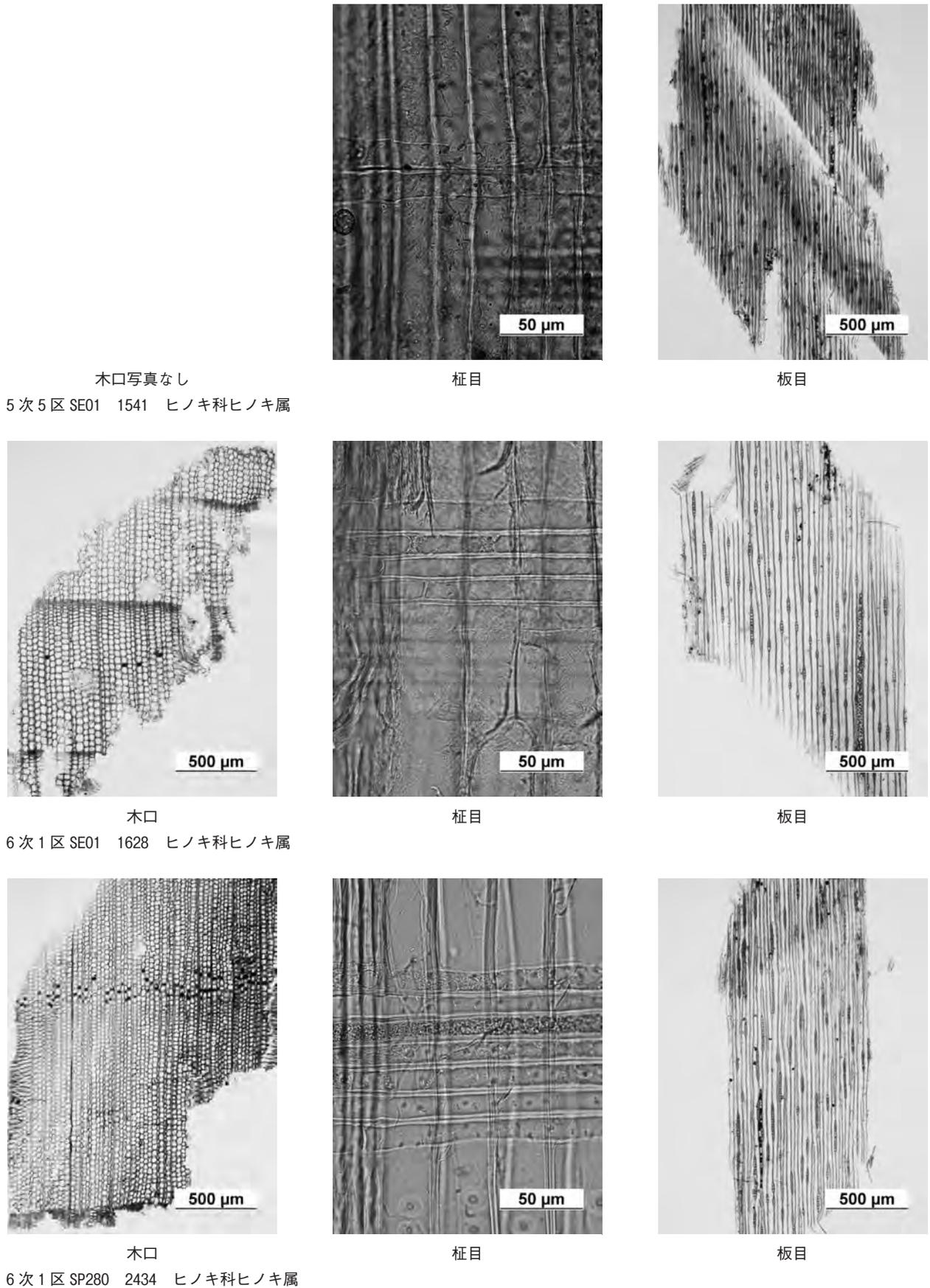
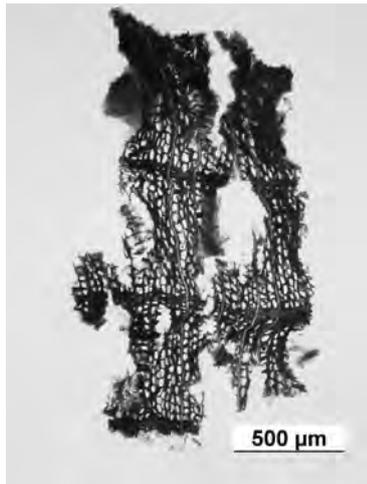
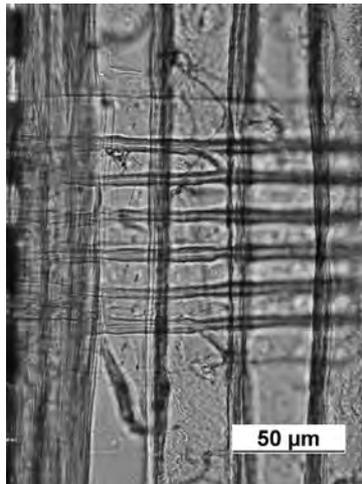


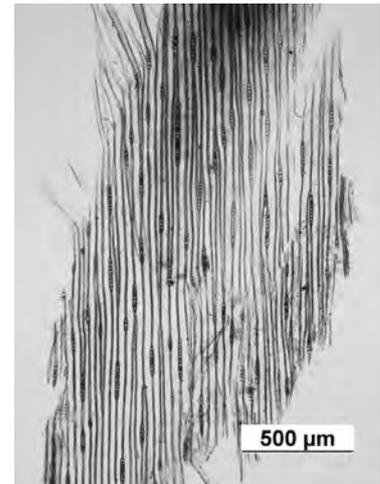
図 182 樹種同定 (3)



木口

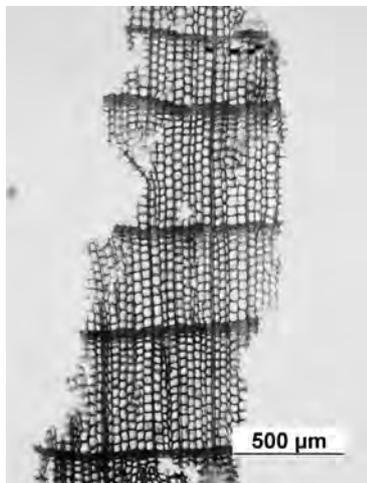


杅目

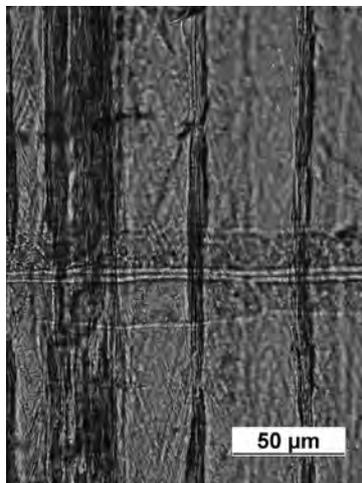


板目

写真図版 211 4次 SE01 西横棧 ヒノキ科ヒノキ属



木口



杅目

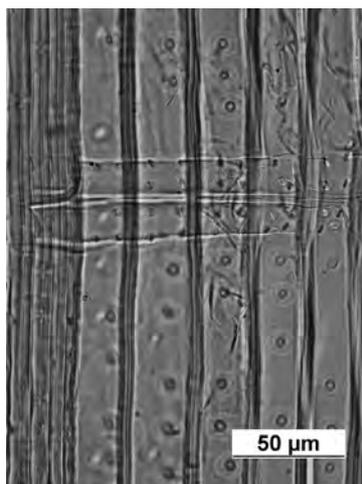


板目

写真図版 212 5次 4区 SE02 曲物 3 ヒノキ科アスナロ属



木口



杅目



板目

写真図版 216 7次 3区 SD02 橋脚杭 3 ヒノキ科アスナロ属

図 183 樹種同定 (4)

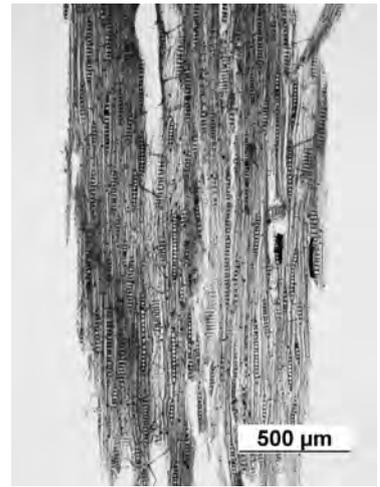


木口

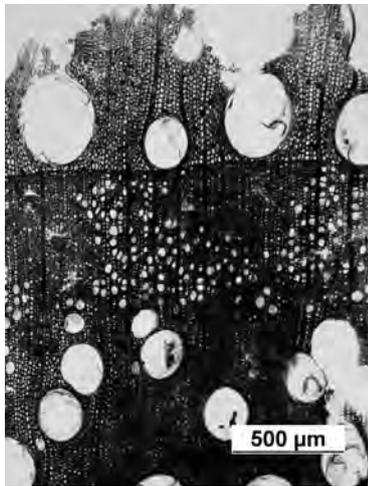
6次3区 SK08 870 ブナ科クリ属クリ



杅目



板目

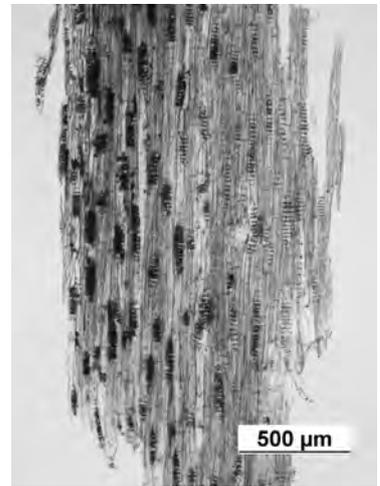


木口

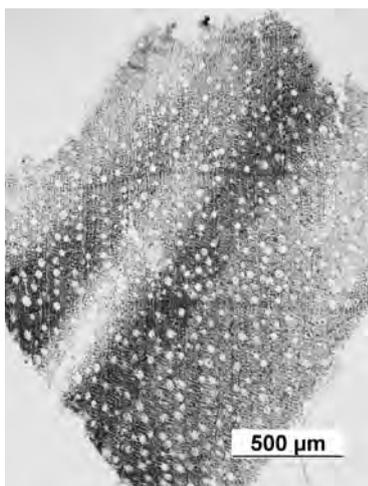
7次3区 SD02 2955 ブナ科クリ属クリ



杅目

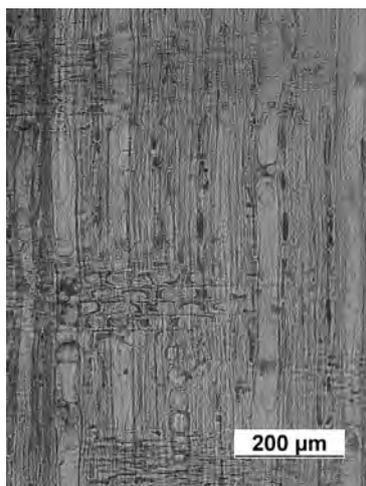


板目



木口

6次1区 SE01 1632 バラ科カツカ属カツカ



杅目



板目

図184 樹種同定 (5)

って、「上件」で受けるのではなく、「右」で受ける。当該漆紙文書に近いのは、和銅元年（七〇八）の所謂「陸奥国戸口損益帳」（正集二六）である。これは、大宝二年（七〇二）籍以降、次の籍年である和銅元年までの、毎年の計帳別項部を集成したもので、前回作成した戸籍との異動を照合するための文書であると推定されている。記載の一例を挙げると、「大伴部忍」の直下に「大宝二年籍後移出……」とあり、続く三人の最後に、「上件三人忍従移往」とある。人名の下に「上件……」として注記する点では当該漆紙文書に近い。しかし、先述のように、「陸奥国戸口損益帳」は六年分の異動を記すので、異動事由発生年を記し、「今」のみが問題となっていないわけではないのに対し、当該漆紙文書は「今」と注記するので、単年度の異動記載を示している点が異なっている。

なお、この部分も追筆で、次年度計帳では別項に移されるべきものであるとすると、総合的に解釈できるが、文字の上からは確言できない。

最後に、個人名の上の「□〔領カ〕行」という記載について検討する。まず、「行」の字の高さが揃っているので、各行の書き出しからの文字数は、残存の範囲では同じであると判断できる。「行」の上の文字は、残画から判断して、同じ文字の可能性が高い。個人名の直前であるから、氏姓の可能性もあるが、現時点では該当するものは知られていない。続柄も考慮の対象外として良い。「うながしゆく」と解釈して、異動の記載とも取れるが、正倉院文書中の所謂「陸奥国戸口損益帳」や、天平五年（七三三）「右京戸口損益帳」（続々修一九一七裏）では、転出を示す文言は、「移出」「移往」「割往」「割附」であり、「ゆく」に対応する文字は「往」を用いているので、にわかには決めがたい。文書全体の性格にも関わるが、あるいは、計帳そのものに直接関わる文書ではなく、計帳から派生して、何らかの異動があった者のみを列記した歴名文書である可能性もある。しかし、そうであるとすると、各人の冒頭に同じ文言を記す必要はなく、「陸奥国戸口損益帳」は戸ごと

に人名を列記し、異動事由は人名の下に記載し、「右京戸口損益帳」は、異動事由ごとに人名をまとめて記し、異動事由はその項目の冒頭のみ記す）不審である。いずれにしても、類例の増加を待つて判断する必要はある。

おわりに

以上、今後の検討課題を多く残すが、本文書は、地方官衙から払い下げられた反古文書の流通を示すものであり、官衙に近接する工房のあり方を考えるための重要な資料であると位置づけられる。

付記 本稿は、古尾谷知浩編、平成二〇年度～二四年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「出土文字資料からみた古代天皇の家産制的手工業の研究」研究成果年次報告『古代の手工業』第二号（二〇一〇年）に収録した「姫路市豆腐町遺跡出土漆紙文書について」を改稿したものである。

文書の内容

オモテ面は、「□〔領カ〕行」＋個人名＋年齢＋年齢区分＋注記」という書式をとる。おおむね籍帳関係文書であると判断できるが、性格を絞り込むために注記に着目する。注記は「今上□」とあるが、「今上件」であると推定でき、その行以前の何人かについての注記である。

「今」とあるので、過去との異動が問題とされている。もし仮に、複数年遡った異動を記しているなら、後述する所謂「陸奥国戸口損益帳」などのように、異動事由発生年を書くはずであるが、年次なしで「今」としか記していない。つまり、単年度、「去年」と「今年」の異動であることが自明のものとして記載している。従って、毎年作成する計帳に関する歴明文書であると判断できる。但し、数字に大字を用いていないこと、追記による修正がなされていることなどからみて、計帳歴名そのものではなく、計帳に関わる何らかの草案であるとみられる。

次に、文書の年代について検討する。四行目をみると、「年十七」の者が「少子」とされている。天平勝宝九歳（天平宝字元年、七五七）に中男の年齢が一八歳以上に引き上げられたことに伴い、それまで一六歳までであった小子の年齢が一七歳までとなった（『類聚三代格』卷一七 蠲免事、天平勝宝九歳四月四日勅）。従って、本文書はこれ以後のものである。

なお、個人名の上の「□〔領カ〕行」の部分については、後述する。

正倉院文書との比較

まず、行間に着目する（正倉院文書の行間の計測値は、宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成』一・二・五（八木書店、一九八八・九〇・九一年）による）。標準的な計帳歴名として神龜三年（七二六）「山背国愛宕郡出雲郷雲上里・雲下里計帳」（正集一一・一二）を検討すると、行間（界幅）は一・三五cm～一・六cmを測る。手実を貼り継いだ天平五年（七三三）「右京計帳」（正集九）は、ややばらつきがあり、一・三cm～二・〇cmであるが、二cm近いものは少数で、おおむね

一・五cm前後が標準的である。因みに、同じ歴名形式の戸籍をみると、「西海道戸籍」が一・〇cm～一・七五cm、「下総国戸籍」が〇・九cm～一・三cmである。このように、正倉院文書中の一般的な歴名形式の文書は、行間一・五cm前後が多く、行間二cmを超えるものは、籍帳では、三段書きの「御野国戸籍」、そのほかでは正税帳類などであり、いずれも細字双行で記す部分がある文書である。当該漆紙文書は、一行書きで双行記載をしないにもかかわらず、行間が二cm以上と広い。このことは、当該文書に、当初から書き込みがなされる可能性があることが前提とされていたことを示している。

同様の例として、天平四年（七三二）「山背国愛宕郡郷里未詳計帳」（統修一〇・一一・一二他）がある。これには、捺印がなく、加筆・訂正が甚だしいので、京進歴名ではなく、天平四年計帳歴名に、その後一年分の異動を注記し、天平五年計帳歴名の草案に転用したものであると考えられている。この行間は、一・四cm～二・一cmと、一般的なものよりやや広く、行間の追記も存在する。さらに、年末詳の所謂「因幡国戸籍」（正集二九）をみると、行間は二・〇cm～二・五cmを測る。この文書は、後世「戸籍」と称しているが、計帳に関連する文書である。前年度計帳歴名に一年間の異動に関する注記を加えたもので、翌年度計帳歴名作成の準備段階のものと推定されている。これにも行間追記があり、また、数字は大字を用いていない。

以上のことから、当該漆紙文書は、作成当初から行間を広くとること、追記があること、数字に大字を用いないこと、などの点において、所謂「因幡国戸籍」が最も近く（但し、書体は当該漆紙文書の方が楷好である）、「山背国愛宕郡郷里未詳計帳」がこれに次ぐ（但し、「山背国愛宕郡郷里未詳計帳」は大字を用いる）。従って、同様に計帳歴名作成の前段階の文書と位置づけることができる。

次に、異動の注記に着目する。通常の計帳歴名では、異動は各戸の末尾の別項部に記載する。異動事由は、人名の次行に記す場合が多く、従

姫路市豆腐町遺跡出土漆紙文書について

古尾谷知浩

はじめに

二〇〇八年一二月、姫路市埋蔵文化財センターの御高配により、同市の豆腐町遺跡から出土した漆紙文書の調査に、奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室の方々とともに参加させていただいた。本報文は、その際の知見を整理したものである。

漆紙文書出土遺構の概要

豆腐町遺跡は、播磨国府推定地である本町遺跡から約一・〇kmの距離にある。過去の調査でも古代の漆附着土器が出土しており、播磨国府または飾磨郡家に近接する工房であると推定されていた。当該の漆紙文書が出土したのは二〇〇八年七月～十一月の調査である。漆紙文書が出土した遺構は、井戸と推定される平面円形の土坑（五次五区SE〇一）であり、現存直径一・三m、深さ二・五mを測る。漆紙文書は中程の土層から一点出土した。

漆紙文書の形態（遺物番号一五四四・写真図版一三二・一七四参照）

本文書は、漆附着面を外側に二つ折りにして廃棄されていた。展開するとほぼ円形となり、縦最大一四・六cm、横最大一四・五cmを測る。縁辺部の形状からみて、杯や皿などの土器ではなく、曲物の蓋紙として用いられていたとみられる。漆運搬容器は、奈良時代を過渡期として、須恵器壺から木製曲物に変わるので奈良時代後半以降のものである可能性が高い。

墨痕は両面に確認でき、釈文は後掲の通りであるが、漆附着面は釈読できないため、以下の記述はオモテ面を主とする。オモテ面は全七行あり、界線はみえない。字の大きさは約一・〇cm四方。行間（心々間）は一・三行目、三～七行目はほぼ等間隔で、二・〇cm～二・三cmを測るのに対し、一・二行目、二・三行目はその約半分の約一・〇cmに詰まっている。また、一・三～七行目は楷好な書体であるのに対し、二行目は比較的粗雑な文字である。以上のことから、二行目は追記であると判断できる。

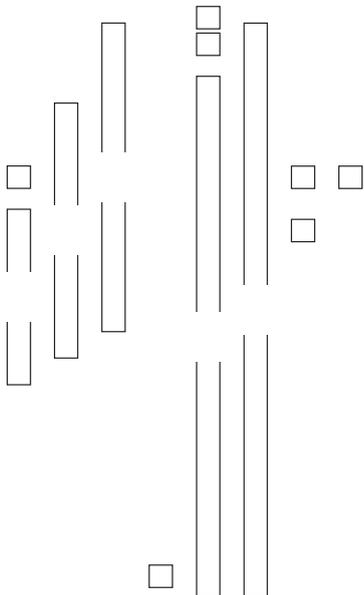
釈文

（表記法は奈良文化財研究所『平城京漆紙文書一』（二〇〇五年）の凡例による。）

一 a（オモテ面）

- 冊五 正丁
- × 『志美女年六十』 〔八カ〕 耆女
- 行大宅女年冊六 正女
- 行黒麻呂年十七 〔少カ〕 子
- 〔領カ〕
- 行椋人年十六 少子
- 行坂麻呂年十一 少子
- × 女年廿一 正 ×
- 今上 □

一 b（漆附着面）



報 告 書 抄 録

ふりがな	とうふまちいせき							
書名	豆腐町遺跡							
副書名	中播都市計画事業姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第115集							
編著者名	中川 猛、古尾谷知浩、森永速男、パリノ・サーヴェイ(株)、(株)吉田生物研究所							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1							
発行年月日	令和4年(2022年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
とうふまちいせき 豆腐町遺跡	ひめじしとうふ 姫路市豆腐 まち えきまえちよう 町・駅前町	28201	020459	34° 49' 38"	134° 41' 28"	2002. 1. 15 ～ 2012. 1. 31	11,715㎡	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		
豆腐町遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 鎌倉時代 江戸時代 近代	流路・ピット 流路 道路、橋脚、掘立柱建物、 井戸、土坑 柱穴、土坑 井戸、土坑 姫路駅関連鉄道遺構				弥生土器・石器 須恵器 奈良三彩、漆紙文書、木簡、 墨書土器、鞆羽口、和同開珎、 萬年通宝、齋串 土師器、須恵器、磁器 陶磁器、木簡 煉瓦	
要 約	<p>豆腐町遺跡は姫路市の中心、姫路駅構内に所在する遺跡である。弥生時代から近代にかけての遺構・遺物が確認されるが、遺跡の最大のピークは奈良時代である。遺跡は大きく東部地区と西部地区に分けることができ、東部地区は8世紀中～後半、西部地区は8世紀後半～9世紀初頭にかけて営まれる。東部地区は正方位を主軸とし、東西方向に延びる道路に沿って、建物が建てられ、井戸が掘られる。遺構の広がりには南北100m以上、東西250m以上で、建物や井戸の配置には計画性が認められる。東部地区の遺構は街区を伴う極めて計画的なもので、漆附着土器をはじめ手工業に関係する遺物が出土することから工房跡と考えられる。遺跡が存続した期間は短く、その後西部地区に移ったと見られる。西部地区の遺物組成は東部地区と共通するものの、出土量が減少することから東部地区より生産活動は減少したと考えられる。西部地区の主軸は飾磨郡条里に沿っており、8世紀後半を境に遺構の主軸が変化している。本町遺跡や姫路城下町跡の下層遺構の検出状況から、豆腐町遺跡は播磨国府に関連する工房跡と位置づけることができる。</p>							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第115集

豆腐町遺跡（本文編）

—中播都市計画事業姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ—

令和4年（2022年）年3月31日発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079) 252-3950
発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷・製本 小野高速印刷株式会社
〒670-0933
兵庫県姫路市平野町62番地

